



聖徒たち

1815-1846年

真理の旗

聖徒たち

—
末日における
イエス・キリスト教会の
物語

聖徒たち

末日における
イエス・キリスト教会の
物語

第1巻

真理の旗
1815 - 1846 年

発行:

末日聖徒イエス・キリスト教会
ユタ州ソルトレーク・シティー

© 2018 Intellectual Reserve, Inc.

All rights reserved.

印刷：日本

第一版, 2018 年 8 月

英語版承認：2018 年 1 月

翻訳承認：2018 年 1 月

原題：*Saints: The Story of the Church of Jesus Christ in the Latter Days, Volume 1, The Standard of Truth, 1815–1846*

Japanese

PD60001624 300

Copyright© 2018 Intellectual Reserve, Inc. All rights reserved. いかなる形、いかなる方法であれ、本書の内容を書面による許可なく転載することを禁じます。詳しくは下記にお問い合わせください。
permissions@ldschurch.org

saints.lds.org/jpn

表紙の絵／グレッグ・ニューボールド

表紙デザインおよび内部のレイアウト／バトリック・ガーバー



真理の旗が掲げられました。

いかなる汚れた者の手も、この御業の発展を止めることは
できません。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊は集合し、
中傷の風が吹き荒れるかもしれません。

しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と進み行き、
あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国に広まり、
あらゆる者の耳に達して、神の目的は成し遂げられるでしょう。

こうして、大いなるエホバは、
業は成ったと告げられることでしょう。

—— ジョセフ・スミス, 1842 年

貢献者

聖徒たち

末日におけるイエス・キリスト教会の物語

教会歴史家および記録者
教会歴史部管理ディレクター
スティーブン・E・スノー長老

教会歴史部管理ディレクター補佐
J・デビン・コーニッシュ長老

教会歴史家および記録者補佐
教会歴史部実務運営ディレクター
リード・L・ニールセン

出版部ディレクター
マシュー・J・グロー

管理歴史家
スティーブン・C・ハーパー

制作マネージャー
ベン・エリス・ゴッドフリー

デジタルコンテンツマネージャー
マシュー・S・マクブライド

編集マネージャー
ネイサン・N・ウエイト

第1巻
「真理の旗」
1815 - 1846年

総合編集者

マシュー・J・グロー
リチャード・E・ターリー・ジュニア
ステイブン・C・ハーパー
スコット・A・ヘイルズ

著者

スコット・A・ヘイルズ
ジェームズ・ゴールドバーグ
メリッサ・レイラニ・ラーソン
エリザベス・パーマー・マキ
ステイブン・C・ハーパー
シェリリン・ファーネス

歴史レビュー編集者

ジェド・L・ウッドワース
リサ・オルセン・テイト

編集者

レスリー・シャーマン・エッジントン
ネイサン・N・ウェイト

調査スペシャリスト

キャスリン・バーンサイド
チャッド・O・フォールガー
ブライアン・D・リーブス

目次

大管長会からのメッセージ	xv
はじめに	xvii

第1部 — わたしの僕, ジョセフ (1815年4月—1830年4月)

1 信仰をもって願い求める	3
2 彼に聞きなさい	13
3 金の版	18
4 目を覚ましていなさい	29
5 すべてが失われた	40
6 神の賜物と力	52
7 とともに働く僕たち	62
8 キリストの教会の幕開け	73

第2部 — 信仰の家 (1830年4月—1836年4月)

9 命があろうとなかろうと	87
10 集められる	100
11 わたしの律法を受けるであろう	111
12 多くの艱難の後に	122
13 再び与えられた賜物	133
14 示現と悪夢	142
15 聖なる場所	153
16 始まりに過ぎず	165
17 暴徒に殺されようとも	175
18 イスラエルの陣営	187

19	教導の業の管理人	199
20	わたしを見捨てることなく	209
21	主の御霊	221

第3部 —— 深みに投げ込まれ
(1836年4月—1839年4月)

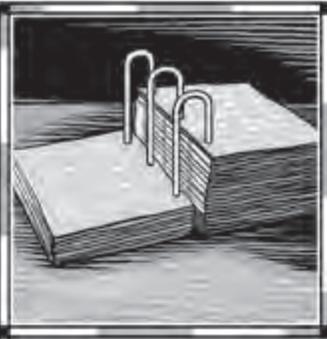
22	主を試みなさい	233
23	あらゆる罫	246
24	真理は勝つ	259
25	西部への移動	271
26	聖なる奉獻された地	285
27	自らの自由を宣言し	296
28	十分に耐え	308
29	神と自由を	320
30	天使のごとく戦い	332
31	終わりはいかにして	342
32	地獄、われに迫るとも	353
33	おお神よ、あなたはどこに	365

第4部 —— 時満ちる時代
(1839年4月—1846年2月)

34	町を築き上げ	379
35	美しき地	394
36	彼らをこの地に集め	407
37	これによって彼らを試し	420
38	裏切り者か味方か	433
39	苦境は絶えず	444

40	永遠の聖約にあって一致する	455
41	裁きは神の手に	467
42	力を合わせて	481
43	公的不法妨害	492
44	ほふり場に引かれて行く子羊のように	507
45	全能の神の土台	522
46	力を授けられ	538
	備考	555
	出典について	625
	出典一覧	627
	謝辞	648
	索引	649

真理



ファー
ウェスト
インディペンデンス
ノーブー
カートランド
パルマイラ
リバプール

タヒチ

トゥブアイ

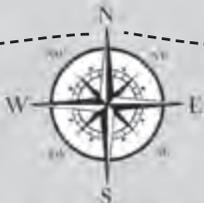


の旗



- - 1837年7月ーイギリスへの伝道
-1841年10月ーオーソン・ハイドが聖地を奉獻
- - 1843年5月ー太平洋への伝道

- 1815年4月10日ーインドネシアにて、タンボラ山が噴火
- 1827年9月22日ージョセフが金版を受け取る
- 1831年7月20日ーミズーリ州にシオンの建設
- 1836年3月27日ーカートランド神殿の奉獻
- 1846年4月30日ーノーブー神殿の奉獻



大管長会からのメッセージ

聖典を通して、主はわたしたちに覚えることを求めておられます。先人がわたしたちに残してくれた信仰、献身、忍耐の遺産を心に留めることで、今日困難に遭遇するとき、物事を正しく見る力と強さを得ることができるのです。

「主が人の子らにどれほど憐れみをかけてこられたかを」覚えていられるようにという願いを込めて（モロナイ 10:3）、わたしたちはこの『聖徒たち —— 末日におけるイエス・キリスト教会の物語』を世に出しました。4巻シリーズの第1巻となる本書は、過去に生きた信仰深い末日聖徒の逸話を含んだ物語調の歴史書です。すべての人々に向けて、この本を読み、オンラインで入手可能な補足資料を利用するようにお勧めします。

あなたはまさに、この教会が刻み続ける歴史の大切な一部なのです。先人が残してくれた信仰の土台の上に築こうと、あなたが成すことすべてに感謝しています。

イエス・キリストはわたしたちの救い主であり、主の福音こそが今日における真理の標準、旗であることを証します。主は、この末日にジョセフ・スミスを召し、主の預言者、聖見者、啓示者とされました。そして、御自分の教会を導くために、引き続き生ける預言者と使徒を召しておられます。

わたしたちは、あなたがこの本を通して過去に対する理解を深め、信仰を強められるように、また昇栄と永遠の命へと導いてくれる聖約を交わし、それを守る助けを得られるようにと心から祈っています。

心を込めて、
大管長会

はじめに

実話が物語として語られるとき、それは靈感をもたらし、警告を与えるものとなります。わたしたちは物語を楽しみ、そこから教えを受けることができます。教会歴史家に向けて、過去の単なる事実を淡々と記録する以上のことをするように提言したブリガム・ヤングは、良い物語の持つ力をよく理解していました。ブリガムは「物語調で書くように」と助言し、「書く内容は10分の1程度にしてよい」と述べたのです。¹

本書は物語調の歴史書であり、読者が教会歴史の基礎を理解できるように意図されたものです。物語に登場する場面や人物、会話はどれも、歴史資料に基づいており、資料は巻末に掲載されています。これらの資料を読み、関連するテーマへの理解を深め、さらに多くの物語を楽しみたいという方は、オンラインで history.lds.org にアクセスし、追加資料へのリンクを閲覧することができます。

本書は、4巻にわたる末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史物語の第1巻です。4巻を通して、教会初期の時代から今日に至るまでの、イエス・キリストの福音の回復にまつわる話が語られていきます。人々を引き込むような文体で綴られたこの作品は、全世界の聖徒に向けて書かれたものです。

教会は、複数の巻にわたる歴史書を過去に二度出版したことがあります。最初の歴史書はドキュメンタリー調に綴られたもので、1830年代、ジョセフ・スミスによって作成が開始され、1842年に出版されました。二つ目の歴史書は、教会歴史家補佐のB・H・ロバーツが執筆し、1930年に出版されています。²回復された福音がその後全世界に広まっていることと、「教会のため……,…… 後の世代のためになる」歴史を絶えず書き残すよう主が命じておられることとを考え合わせると³、新たな歴史書を

作成し、さらに多くの末日聖徒を物語に登場させてもよい時期が来ているのではないのでしょうか。

以前の歴史書に比べ、『聖徒たち』には、教会のどこにでもいる男女の物語がふんだんに収められています。また、教会歴史上よく知られている人々や出来事に関する、新たなエピソードや洞察も盛り込まれています。読者はどの章を読んでも、今日の教会を築き上げてきた聖徒たちに共感し、感謝の思いを抱くようになることでしょう。織り合わされた彼らの物語は、深みのある回復のタペストリーを生み出すのです。

聖文ではないものの、『聖徒たち』は聖文と同じくどの巻にも、神聖な真理と、不完全な人々がイエス・キリストの贖罪を通して聖徒になろうと励む物語が収められています。⁴この聖徒たちの物語は、古今のすべての聖徒の物語と同様、読者に大切なことを思い起こさせてくれます。この地球上のいたる所で教会に加わり、神の御業を前進させている主の民に、主がどれほど深い憐れみをかけてこられたかを知ることができるのです。

第 1 部



わたしの僕, ジョセフ

1815 年 4 月 - 1830 年 4 月

主なるわたしは、地に住む者に下る災いを知っているので、
わたしの僕ジョセフ・スミス・ジュニアを訪れ、彼に天から語り、
..... わたしの永遠の聖約が確立される〔ようにした。〕

教義と聖約 1:17,22

1816 - 1830 年



カナダ

オンタリオ湖

パルマイラ
クモラの丘

マンチェスター
フェイエット

ニューヨーク州



シャロン

マサチュー
セッツ州

ポタケハナ川
コールズビル
ハーモニー

コネチ
カット州



ペンシルベニア州

ニューヨーク市

メリーランド州

ニュー
ジャー
ジー州

デラウェア州



第 1 章



信仰をもって願い求める

1815年、インドネシアのスンバワ島には、最近の雨で緑が青々と生い茂っていました。何世代にもわたり、年ごとに訪れる乾季に備え、人々はタンボラという火山のふもとで水田の耕作に励んでいました。

4月5日、数十年間の眠りから突如目覚めた火山が、灰と炎を吹き出しました。何百キロと離れていた人々にも、大砲のような音が聞こえたと言います。数日にわたって小規模の噴火が続き、4月10日の夜には、ついに火山全体が噴火しました。赤々とした三本の噴煙^{ふんえん}が空を目がけて立ち上り、一つの巨大な熱風の柱となりました。液火は山肌を流れ落ち、ふもとの村を覆います。竜巻が辺り一帯で猛威を振るい、木を引き抜き、家屋をなぎ倒していきました。¹

この混乱状態は一晩中、その翌日も続きました。火山灰は何キロも先に至るまで地と海を覆い、60センチ以上積もったところもありました。昼間が真夜中のようになり、荒れ狂う高波が海

岸線に打ち寄せ、穀物を損ない、村を飲み込みました。何週間にもわたり、タンボラは灰や石、火を降らせました。²

その後何か月もの間、噴火の影響は世界中に広がります。壮大な夕焼けを目にした世界各地の人々が畏怖の念に打たれましたが、その鮮やかな色彩は、地に降り注いだ火山灰の爪痕つめあとを覆い隠すだけでした。翌年、天候は予測不能かつ破壊的なものとなります。³

噴火はインドにおいて気温の低下を招き、コレラにより何千もの人々が命を落とし、家族が崩れていきました。肥沃な中国の盆地では、通常穏やかな気候の夏に吹雪が吹き荒れ、洪水により穀物が損なわれました。ヨーロッパでは食糧の供給が縮小し、飢餓と混乱がもたらされることとなります。⁴

そこかしこで、人々は奇妙な天候によって引き起こされた苦難と死についての説明を探し求めました。インドのヒンドゥー教寺院では、聖職者の祈りと経を唱える声が鳴り響き、中国の詩人は、苦痛と喪失への問いを詩に表しました。フランスやイギリスの国民は、聖書で預言されている恐るべき災いが及ぶのではないかと恐れ、ひざまずきました。北米では、神が不従順なクリスチャンを罰しておられると牧師が説き、警告の声を上げて宗教心を掻き立てます。

来るべき破滅から救われる方法を知ろうと、人々は各地で教会や伝道集會に押し寄せたのでした。⁵

翌年になっても、タンボラの噴火は北米の天候に影響を及ぼしました。春に雪が降り、霜が降りたために穀物が損なわれた1816年は、夏のない年として人々の記憶に残っています。⁶合衆国北東部のバーモント州では、ジョセフ・スミス・シニアという名の農夫が何年にもわたり岩山に苦しめられていました。その時

節、容赦のない霜のために穀物がしなびていくのを目にし、自分たちが財政的な破綻に直面していることを悟ったジョセフ・スミス・シニアと妻のルーシー・マック・スミスは、このまま留まることに先の見えない不安を抱きました。

もう若くはなかった45歳のジョセフ・シニアは、新たな土地で一から出直さなければならないと思うと気が遠くなりましたが、年長の息子たち、18歳のアルビンと16歳のハイラムに土地の開墾や家の建築、穀物の植え付けと収穫を手伝ってもらえるだろうと思いました。13歳の娘、ソフロニアはもう大きいので、家事や農場まわりの仕事をしてルーシーを手伝うことができます。年下の息子たち、8歳のサミュエルと5歳のウィリアムも手伝いができるようになっていましたし、3歳のキャサリンと生まれたばかりのドン・カーロスもやがて力になってくれるでしょう。

ところが真ん中の息子、10歳のジョセフ・ジュニアは別でした。4年前のこと、足の感染部位を取り除くために手術を受けたジョセフ・ジュニアは、それ以来、松葉づえをついていたのです。足は以前のように丈夫になりつつあったものの、痛む足をひきずって歩かなければならず、成長したジョセフ・ジュニアがアルビンやハイラムのように頑丈な体を持てるのか、ジョセフ・シニアには分かりませんでした。⁷

支え合うことができるという確信を胸に、スミス一家はバーモント州の家を離れ、より良い土地へと移り住む決意を固めます。⁸多くの隣人たちと同様、ジョセフ・シニアはニューヨークへ向かうことにしました。そこで掛けで購入できる良い農場を見つけ、ルーシーと子供たちを呼びにやり、一家で出直そうと考えていたのです。

ジョセフ・シニアがニューヨークへと旅立つにあたり、アルビンとハイラムは見送りのために一緒に道を歩いて行きました。ジョセフ・シニアは妻と子供たちを心から愛していましたが、そ

れまで、家族に安定した生活を送らせてやることができませんでした。不運や失敗に終わった投資のために、家族は貧しく不安定な状況に置かれていたのです。もしかすると、ニューヨークでは違うかもしれません。⁹

次の冬、ジョセフ・ジュニアは母親、兄弟、姉妹とともに、雪の中、足を引きずりながらパルマイラというニューヨークの村を目指して西へと向かいます。その村の近くに良い土地を見つけたジョセフ・シニアは、一家の到着を待っていました。

ジョセフ・シニアに移動を手伝ってもらうことができなかつたため、ルーシーはハワード氏という男性を雇い、幌馬車の手綱^{たづな}を取ってもらいました。ところが道中、ハワード氏は家財を粗雑に扱い、支払われた賃金をギャンブルと酒に使い果たしてしまいます。西へ向かう別の家族と合流すると、ハワード氏はジョセフを幌馬車から追い出し、その家族の娘たちを自分の隣に座らせて手綱を引きました。

歩くことがジョセフにとってどれほどの痛みを伴うものか知っていたアルビンとハイラムは、何度かハワード氏に抗議しましたが、ハワード氏はその度に、むちの柄で二人を殴るのでした。¹⁰

ジョセフがもっと大きければ、自分でハワード氏に抗議したことでしょう。痛む足のためにジョセフは働くことも遊ぶこともできませんでしたが、その強靱な精神力が、弱い肉体を補っていました。医師たちがジョセフの足を切開し、感染した骨の一部を削り取る前のこと、医師たちは、苦痛を和らげるために縄で縛るか、ブランデーを飲ませようとしたましたが、ジョセフは、父親に支えてもらうことだけを望みました。

終始意識がはっきりとしていたジョセフの顔面は蒼白で、頬には汗が伝います。いつもは強い母親も、ジョセフの叫び声を聞いて気を失いそうになりました。それ以降、ルーシーはどんなことでも耐えられると思ったはずで¹¹。

足を引きずりながら幌馬車の横を歩いていたジョセフは、母がハワード氏に耐えているのが分かりました。これまで300キロ以上もの旅の間、ルーシーは御者の不品行によく忍耐しました。

パルマイラから160キロほど来たところで、ルーシーが一日の旅の準備をしていると、アルビンが走ってきました。ハワード氏がスミス一家の家財や荷物を道に放り出し、馬と幌馬車ごと去ろうとしているのです。

ルーシーは酒場でハワード氏を見つけると、「天に神がおられるように、あの幌馬車も馬も、積んである家財も、わたしのものです」と宣言しました。

見回すと、酒場は男女であふれ返っています。その大半はルーシーのような旅人でした。客の視線を受け止めながら、ルーシーはこう言いました。「この男は、旅を続けるためのあらゆる手段を奪い、わたしと8人の幼い子供たちをひどい貧困に陥れようとしているのです。」

ハワード氏は、ルーシーが幌馬車の御者として支払った賃金はすでに使い果たしてしまい、これ以上先へは行けない、と言います。

ルーシーはこう言い放ちました。「もうあなたに用はありません。わたしが皆を連れていきます。」

ルーシーはハワード氏を酒場に残し、何が起ころうと、子供たちを父親のもとに届けることを誓います。¹²

行く手は寒く、泥でぬかるんでいましたが、ルーシーは家族を安全にパルマイラまで率いて行きました。子供たちが父親にしがみつき、顔にキスをするのを眺めながら、そこに辿り着くまでに受けたあらゆる苦しみが報われたかのように感じました。

間もなく一家は町に小さな家を借り、自分たちの農場を手に入れる方法について話し合います。¹³最も良いのは、近くの森の土地を買うための頭金が貯まるまで働くことだという結論に至りました。現金を手に入れるべく、ジョセフ・シニアと年長の息子たちは井戸を掘り、柵用の木を切り、干し草を収穫し、一方ルーシーと娘たちはパイアルトビア、装飾布を作っては売り、一家の食費に充てたのでした。¹⁴

成長するにつれ、ジョセフ・ジュニアの足は丈夫になり、パルマイラをたやすく歩き回れるようになりました。町に出ると、ジョセフは様々な地域からやってきた人々と交わるようになります。その多くは、霊的な渴望を満たし、人生における苦難の説明を求めらうで、宗教を頼みとしていました。ジョセフと一家は教会に属していませんでしたが、隣人の多くは、背の高い長老派の教会堂やバプテスト派の集会所、クエーカー教徒の会堂、あるいはメソジスト派の巡回説教者が時折伝道集会を開く野外集会所などで礼拝していました。¹⁵

ジョセフが12歳のころ、パルマイラで宗教的な論争が起こります。ジョセフは読書家ではありませんでしたが、物事を深く考えるのが好きでした。不滅の魂についてもっと知りたいと思い、牧師の話に耳を傾けましたが、説教から確信を得ることはできませんでした。ジョセフは罪に満ちた世界に生きる罪人であり、救いをもたらすイエス・キリストの恵みなしには無力な者である、と彼らは告げます。ジョセフはそのメッセージを信じ、自らの罪を後悔していたものの、どこに赦しを見いだせばよいのか分かりませんでした。¹⁶

教会に行けば助けを得られるかもしれないと思いましたが、礼拝の場所を一つに定めることができません。人はいかにして罪の束縛から自由になることができるのかと、様々な教会が止めどなく言い争っていたのです。しばらくの間その論争を聴いていたジョセフは、人々が同じ聖書を読みながら、その意味について異なった結論に達していることに心を痛めました。ジョセフは神の真理がどこかに存在することを信じていましたが、それを見いだす方法を知らなかったのです。¹⁷

それは両親にとっても同じでした。ルーシーとジョセフ・シニアはどちらもクリスチヤンの家庭で育ち、聖書とイエス・キリストを信じていました。母ルーシーは、しばしば子供たちを連れて教会の集会に行きました。何年も前に姉を亡くしてからというもの、イエス・キリストの真実の教会を探していたのです。

ジョセフが生まれる数年前のこと、死の淵に立たされたルーシーは、真理を見いだす前に死んでしまうのではないかと不安に襲われました。救い主と自分との間に、暗くて寂しい裂け目があるのを感じ、次の世に行く準備がまだできていないことを悟ったのです。

ルーシーは一晩中寝ずに神に祈り続け、もし自分を生かしてくださるならばイエス・キリストの教会を探すと神に約束しました。祈りにこたえて主の声がルーシーに語りかけ、求めるならば必ず見いだすだろうと告げられます。それ以来、以前よりも多くの教会に集うようになりましたが、正しい教会は見つかりません。救い主の教会はもはや地上に存在しないのではないかと感じたときでさえ、教会に行かないよりは行った方がまだよいと確信し、ルーシーは探し続けます。¹⁸

妻と同様、ジョセフ・シニアもまた真理に飢えていましたが、間違った教会に行くよりはまったく行かない方がよいと感じていました。父の勧告に従い、ジョセフ・シニアは聖書を調べ、熱心

に祈り、イエス・キリストが世を救うために来られたことを信じていました。¹⁹それでもジョセフ・シニアは、真実だと感じていることと、周りの教会で目にする混乱と不一致との折り合いをつけることができません。ある晩ジョセフ・シニアは、言い争う牧師たちの姿、彼らが牛のようにうなり声をあげながら角で地面を掘る様を夢で見て、牧師たちは神の王国についてわずかな知識しか持っていないのではないかという懸念を一層深めます。²⁰

両親が地元の教会に満足していない様子を目にするジョセフ・ジュニアは、ますます混乱するばかりでした。²¹その魂は危機に瀕していましたが、満足のいく答えをくれる人はだれもなかったのです。

一年以上お金を貯めたスミス一家は、パルマイラのすぐ南に位置するマンチェスターの森 40 ヘクタールの代金を支払えるようになりました。一家はその土地で、雇われ仕事の合間を縫い、カエデの木に穴を開けて甘い樹液を取り、果樹を植え、野を開墾して穀物を育てます。²²

その地で働きながら、若きジョセフは自らの罪と魂の福利について心を悩ませ続けていました。パルマイラでの宗教的な信仰復興は落ち着きを見せていましたが、牧師たちは以前としてその地域のそこかしこで改宗者獲得のために争っていました。²³ジョセフは昼も夜も、太陽や月や星が秩序正しく、威厳をもって空を運行するのを眺めては、生命力に満ちた地球の美しさにはほれほれとしました。また周囲の人々を見ては、その強靭さと知性に驚嘆しました。すべてのものが、神が実在し、御自分の姿にたどって人類を創造されたことを証しているように見えます。とはいえ、ジョセフはどのようにして神との交わりを持てるのでしょうか。²⁴

1819年の夏、ジョセフが13歳だったころのことです。メソジスト派の牧師たちがスミス家の農場から数キロ離れたところで一堂に会して集会を開き、その地方一帯に出かけて行き、ジョセフの一家のような家族に改宗を促しました。牧師らの取り組みが功を奏したことにより、この地域のほかの聖職者たちは不安を抱き、程なく改宗者獲得のための争いが激化します。

ジョセフは様々な集会に出席し、心を揺さぶる説教に耳を傾け、改宗者たちが喜びの声を上げるのを目にしました。ジョセフも彼らのように叫びたいと思いましたが、言葉と見解の争いの真っ只中にいるように感じるものがしばしばありました。「これらすべての教派のうちのどれが正しいのだろうか。それとも、ことごとく間違っているのだろうか」と自問します。「もし彼らのうちのどれかが正しいとすれば、それはどれで、どうすればそれが分かるのだろうか。」キリストの恵みと憐れみが必要だと分かっていたのは、あまりに多くの人や教会が宗教に関して対立していたため、どこに答えを見いだせばよいか分からなかったのです。²⁵

答えを見つけられるという望みと心の平安を失ってしまったかのような喧噪けんそうの中、真理を見いだせる人などいるのだろうかと思ったものです。²⁶

あるとき説教を聴いていると、ジョセフは牧師が新約聖書、ヤコブの手紙の第1章を引用するのを耳にしました。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず、惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。」²⁷

ジョセフは家に帰ると、聖書のその節を読みました。「この聖句が、このとき、かつて人の心に力を与えたいかなる聖句にも勝って、わたしの心に力強く迫って来たのであった」と後に回想

しています。「それはわたしの心の隅々に大きな力で入り込んで来るように思われた。もしだれか神からの知恵を必要とする者がいるとすれば、それは自分であることを悟って、わたしはこの言葉を再三再四思い巡らした。」ジョセフはこれまで、すべての答えを備えたものであるかのように聖書を受けとめ、調べてきました。ところが今、その聖書がジョセフに、自らの疑問の答えを神に直接求めることができると告げているのです。

ジョセフは、祈ることにしました。それまで声に出して祈ったことはありませんでしたが、聖書の約束を信頼したのです。「疑わないで、信仰をもって願い求めなさい」とあります。²⁸たとえつたない言葉であっても、神はジョセフの問いに耳を傾けてくださるでしょう。



彼に聞きなさい

1820年のある春の朝、ジョセフは早起きをして自宅近くの森に向かいました。空は晴れて美しく、頭上の小枝から木漏れ日が射しています。一人で祈りたいと思っていたジョセフは、近ごろ木を採伐した森の中に、ある静かな場所を見つけました。ジョセフは切り株に斧を打ち込み、そこに残しておいたのです。¹

その場所を見つけると、ジョセフは辺りを見回し、自分一人であることを確かめました。声に出して祈りたいと思っていたため、邪魔をされたくなかったのです。

一人であることが分かると、ジョセフは冷たい地にひざまずき、心の望みを神に告げ始めました。憐れみと赦しを乞い、抱いている問いへの答えを見いだせるよう知恵を求めたのです。ジョセフは祈りました。「主よ、わたしはどの教会に加わればよいでしょうか。」²

祈るにつれ、ジョセフの舌は動きを制されていき、しまいには話せなくなってしまいました。背後に足音が聞こえるも、振り

向くと姿はありません。再び祈ろうとしましたが、足音は大きくなる一方で、まるでだれかが近づいてくるかのようです。ジョセフは飛び上がり、急いで振り返ってみました、やはりだれもいません。³

突然、目に見えない力がジョセフを捕えました。もう一度口を開こうとするも、舌はやはり動きません。深い闇に取り囲まれ、ついには陽の光が見えなくなりました。疑いと恐ろしい印象が脳裏をよぎり、ジョセフを戸惑いと混乱に陥れます。実在する、とてつもない力を持つ恐ろしい何者かが、自分を滅ぼそうとしてるように感じたのです。⁴

ジョセフはすべての力を振り絞り、再び神を呼び求めました。舌を緩められたジョセフは救いを懇願しましたが、今や絶望し、耐え難い暗闇に打ち負かされ、破滅へ身を任せようとするばかりでした。⁵

その瞬間、光の柱が頭上に現れます。次第に降りて来るその光は、木々を燃え立たせたかのようなようでした。光が頭上にとどまると、ジョセフは見えない力から解放され、代わりに神の御霊によって、平安と、たとえようもない喜びに満たされました。

目を凝らして光の中を見ると、父なる神が自分の上の空中に立っておられます。その御顔はジョセフがそれまでに見たどんなものにも勝るほどの輝きと栄光に満ちていました。神はジョセフの名を呼ばれ、隣におられた別の御方を指して、「これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい」⁶と言われたのです。

ジョセフは、イエス・キリストの御顔を見つめました。それは御父と同じく、輝きと栄光に満ちたものでした。

救い主は言われます。「ジョセフ、あなたの罪は赦された。」⁷

重荷を取り去られたジョセフは、もう一度尋ねました。「どの教会に加わればよいでしょうか。」⁸

「それらのどれにも加わってはならない」と救い主は語られました。「彼らは人の戒めを教義として教え、神を敬うさまをするけれども神の力を否定している。」

世は罪の状態にあり、「だれ一人善を行う者はいない」と告げられます。「彼らは福音から離れ、わたしの戒めを守らない。」そうして、神聖な真理が失われたり腐敗したりしているが、将来ジョセフに完全な福音を明らかにすることを約束されたのです。⁹

救い主が語られると、ジョセフは真昼の太陽よりも明るく輝く光に囲まれた天使の群れを見ました。「見よ、見よ、わたしは御父の栄光をまもってすぐに来る」と主は言われます。¹⁰

ジョセフは、森がその輝きに飲み込まれてしまうのではないかと思いましたが、木々はモーセのしばのように、燃え尽きてしまうことはありませんでした。¹¹

光が去ると、ジョセフは自分が天を見上げて仰向けに横たわっているのに気づきました。光の柱は消え、罪の意識と疑問から解放されたジョセフの心には神の愛が満ちていました。¹²父なる神とイエス・キリストが自分に語りかけてくださいました。真理を見いだし、赦しを得る方法を自ら学んだのです。

この示現のために、ジョセフは力を失って動くことができず、森の中で横になっていました。ある程度力を取り戻すと、どうにか家に帰り、暖炉に寄りかかりました。それを見た母親は、どうしたのかと尋ねます。

ジョセフは「大丈夫です。元気です」と言って母を安心させました。¹³

数日後、ある説教者と語らう中で、ジョセフは森での経験について話します。その説教者は当時の信仰復興運動を精力的に

行っていたので、自分の見た示現を真剣に受けとめてくれるはずだとジョセフは思っていました。

はじめ、その説教者はジョセフの言葉を軽くあしらいました。天から示現を受けたと主張する人は時折いるものだというのです。¹⁴そうして怒り出し、むきになって、その話は悪魔から出ているとジョセフに言い放ちました。示現や啓示の時代は遠い昔に終わり、今後決してそのようなものはないと言います。¹⁵

ジョセフは驚き、自分の受けた示現のことを信じてくれる者はだれもないであろうことをすぐに悟りました。¹⁶どうして信じてくれないのでしょうか。ジョセフはほんの14歳で、教育もほとんど受けていません。家は貧しく、土地を耕し、片手間の仕事をしながら、一生の間、細々と生計を立てていくものだと思っていました。

しかし、ジョセフの証を聞いて相当な反感を持った人々がおり、彼らはジョセフをあざけたのです。世に何の痕跡も残さないようなただの少年がこれほどまでの憎しみとあざけりの対象になるとは、何とも不思議なことだとジョセフは思いました。「真実を告げたことで、なぜわたしを迫害するのか」と問いかけたい気持ちでした。「なぜ世の人々はわたしが実際に見たものを否定させようとするのか」と。

その後も、生涯にわたってジョセフはこの問いを抱き続けました。ジョセフは後にこう回想しています。「わたしは実際に光を見た。その光の中に二人の御方を見た。そして、その方々が実際にわたしに語りかけられたのである。たとえ示現を見たと言ったことで憎まれ、迫害されたとしても、それは真実であった。」

そして、証しています。「わたしは知っていた。神がそれを御存じであるのを、わたしは知っていた。わたしはそれを否定でき…… なかった。」¹⁷

示現の話をして隣人から反感を買うだけだと分かると、ジョセフは示現のことを自分の内に留めるようになり、神が与えてくださった知識で満足していました。¹⁸後にニューヨークを出てから、ジョセフは森でのこの神聖な経験について記録しようとしてきました。赦しへの切望、悔い改めを必要とするこの世への救い主の警告を書き綴りました。つたない言葉ながらも、あのとときの威光を何とか表そうと自分で記したのです。

何年か経って、筆紙に尽くし難いこの経験をさらにうまく表現できる筆記者の力を借り、ジョセフは公にその示現について詳しく述べました。真実の教会を見いだすという自分の抱いていた望みについて綴り、父なる神が最初に現れ、御子を紹介されたことを説明したのです。ジョセフは、自身が赦しを求めたことよりも、万人に向けられた救い主の真理のメッセージと、福音を回復する必要性について、多くを書き残しました。¹⁹

ジョセフはその経験を記録するたびに、主が自分の祈りに耳を傾け、答えてくださったことを証しています。救い主の教会が地上に存在しないことを、ジョセフは若くして知りました。しかし主は、時が来れば主の福音についてさらに多くを明らかにすると約束されました。そこでジョセフは神を信じ、あの森で受けた命令を忠実に守り、さらなる導きを忍耐強く待とうと心に決めたのです。²⁰

第 3 章



金の版

3年が経ちました。収穫の時期が3度過ぎたのです。ジョセフはほとんどの日々を、土地を開墾し、土を耕し、また雇われ人として働いて過ごしました。家族の土地に対する年度の支払い費用を工面するためです。この労働のため、ジョセフはあまり学校に行くことができず、空いた時間の大半を家族やほかの雇われ人たちと過ごしました。

ジョセフもその友人たちも若く、陽気で、愚かな過ちを犯すことがありました。そうしてジョセフは、一度赦されたからといって二度と悔い改める必要がなくなるというわけではなく、また輝かしい示現を見たからといって、あらゆる疑問の答えが分かり、永遠に迷いがなくなるわけでもないことを知ったのです。¹そこで、ジョセフは常に神に近くあろうとしました。聖書を読みました。イエス・キリストが自分を救う力をお持ちであると信じ、主に命じられたとおりに、どの教会にも入らなかったのです。

父親や、地元の多くの人々と同じように、ジョセフは神が杖や石のような物を使って知識を明らかにすることがおできになると信じていました。神はモーセやアロン、聖書に登場するそのほかの人々に対してそうされていたからです。²ある日、隣人の井戸掘りを手伝っているときのこと、ジョセフは地中深くに小さな石が埋まっているのを見つけました。世間では時々、特殊な石を使って失くしたものや隠された宝を見つけることがあるのを知っていたので、そのような石を見つけたのかもしれないと思いました。そうして石をのぞいてみると、肉眼では見えないものが見えたのです。³

石を使いこなすというジョセフの賜物に家族は驚き、それをジョセフが神から愛されているしるしだと考えました。⁴しかし、聖見者の賜物を持っているとはいえ、ジョセフは神が自分のことを喜んでおられるかどうかについては、依然として自信がありませんでした。御父と御子にまみえた示現の後に感じた赦しと平安をもはや感じるができなくなっており、自分の弱さや不完全さのために罪に定められていると感じることがよくあったのです。⁵

1823年9月21日、17歳のジョセフは、兄弟たちと相部屋の屋根裏の寝室で、眠れずにいました。その夜は、家族が様々な教会やそこで教えられている教義について話すのを聞いていたため、寝るのが遅くなったのです。皆はもう寝てしまい、家は静まり返っていました。⁶

ジョセフは暗い部屋の中で祈り始め、自分の罪を赦してくださるよう神に嘆願しました。ジョセフが切に願ったのは、天からの使者と話すことでした。それができれば、主の前における自分の立場がはっきりと分かり、あの森で約束された福音の知識を

与えてもらえると思ったのです。神が以前に自分の祈りにこたえてくださったことを知っていたので、この度も答えてくださるといふ十分な確信がありました。

祈り始めると、ベッドの傍らに光が現れました。その光は次第に明るさを増し、ついには屋根裏部屋全体が明るくなりました。見上げると、天使が空中に立っています。天使は、手首と足首が見えるほどの丈の、縫い目のない白い衣をまもっていました。光はこの天使から発せられており、その顔は稲妻のように輝いています。

ジョセフは最初、恐れを抱きましたが、すぐさま平安な気持ちに満たされました。天使はジョセフの名を呼ぶと、自分の名はモロナイであると言いました。神がジョセフの罪を赦され、ジョセフのなすべき業を備えておられることを、天使は告げたのです。そして、ジョセフの名が良くも悪くもすべての民の中で語られるであろうと宣言しました。⁷

モロナイは、近くの丘に金版が埋められていると言います。その金版には、かつてアメリカに住んでいた古代の民の記録が刻まれており、民の起源と、イエス・キリストがその民を訪れて主の完全な福音を教えられたことが書かれていると言うのです。⁸二つの聖見者の石も版とともに埋められているとモロナイは言いました。この石は、その記録を翻訳する際に役立つようにと主が備えてくださったものであり、ジョセフはこれを後にウリムとトンミムと呼んでいます。その透き通った石はつなぎ合わされ、胸当てに付けられているのです。⁹

モロナイは残りの時間、聖書のイザヤ書やヨエル書、マラキ書、使徒行伝に記された預言を引用しました。主が間もなく来られることを明らかにし、神のいにしへの聖約が更新されない限り、人類家族が人類創造の目的を達することはないと言いました。¹⁰その聖約を更新するために神はジョセフを選ばれたのであ

り、神の戒めを忠実に守ることを選ぶならばジョセフは版に刻まれた記録を世に出す者となるであろうと、モロナイは告げたのです。¹¹

天使は去る前に、この版を大切にし、主から命じられない限りだれにも見せてはならないとジョセフに命じ、この勧告に従わなければ滅ぼされるだろうと警告しました。その後、光がモロナイの周囲に集まり、その使者は天へと昇って行きました。¹²

ジョセフが横になって、先ほどの示現のことを考えていると、再び明るくなった部屋にモロナイが現れ、前と同じメッセージを伝えました。それからこの天使は、立ち去ったかと思うとまたしても姿を現し、3度目となるメッセージを伝えたのです。

こう述べました。「さあ、ジョセフ、気をつけなさい。この版を取りに行くとき、あなたの心は闇に満たされ、あらゆる悪が心に押し寄せ、神の戒めを守らせまいとするだろう。」支えてくれる人の元へジョセフを行かせようと、モロナイはこの示現について父親に話すよう言いました。

「彼はあなたの語ることをすべて信じるであろう」と、その天使は約束します。¹³

翌朝、父も示現と天使の話を知っていることは分かっていたが、モロナイのことには何も触れず、ジョセフは近くの畑でアルビンとともに作物の収穫をして午前中を過ごしました。

作業は大変なもので、ジョセフは兄のペースについていこうと励み、背の高い穀物の穂に繰り返し鎌を入れました。しかし、モロナイの訪れのためにジョセフは一睡もしておらず、作業をしても、思いは常に古代の記録とそれが埋められている丘のことへと戻ってしまうのでした。

そのうちジョセフの手が止まっていることに気づいたアルビンは「休んでなんかいると、終わらなくなってしまうぞ」と声をかけます。¹⁴

ところが、どうがんばって早く作業を進めようとしても、アルビンに追いつけません。しばらくすると、ジョセフの顔色が悪いことに気づいた父ジョセフ・シニアが、働くのをやめさせました。「家に帰りなさい。」息子の具合が悪いことを確信し、父はそう言います。

ジョセフは父の言葉に従い、おぼつかない足取りで家の方に歩き始めましたが、囲いを越えようとしたところで力尽き、地に倒れてしまいました。

そこに横たわったまま、力を振り絞ろうとしていると、光に包まれたモロナイが再び頭上に立っているのが見えました。「わたしがあなたに告げたことをなぜ父に話さなかったのか」とモロナイは尋ねます。

父が自分の言うことを信じないのではないかと恐れたのだとジョセフは言いました。

「彼は信じるだろう。」モロナイはそう約束してから、前の晩に告げたメッセージを繰り返すのでした。¹⁵

息子ジョセフが天使とそのメッセージのことを話すと、ジョセフ・シニアは涙を流してこう言いました。「それは神から与えられた示現だ。命じられたとおりにしなさい。」¹⁶

ジョセフは直ちにあの丘へと向かいました。夜の間、モロナイが版の隠してある場所を示現で見せてくれていたので、どこへ行けばよいかは分かっていました。それはジョセフの家から5キロほど離れた所にある、その界わい切ったの高い丘でした。

版は、丘の頂上からそう遠くない西側の地、大きな丸い石の下に埋められていました。

歩きながら、ジョセフは版のことを考えました。それが神聖なものだと分かってはいても、どれくらいの金銭的な価値があるのかを考えずにはいられなかったのです。隠された宝が守護霊により守られているという話はそれまで何度も聞いてきましたが、モロナイと、モロナイから説明された版は、そのような話とは別物でした。モロナイは神から遣わされた天の使者で、神が選ばれた聖見者にその記録を確実に引き渡す役割を受けています。その版に価値があるのは、金でできているからではなく、イエス・キリストの証が刻まれているためなのです。

ところがジョセフは、家族を貧困から救うことのできる宝が埋まっている場所を、今自分は正確に知っているのだという考えをぬぐい去ることができませんでした。¹⁷

丘に着くと、ジョセフは示現で目にした場所を見つけ、石の周囲を掘り始めました。石のへりが見えてくると、ジョセフは大きな木の枝を見つけ、それをてこにして石を持ち上げ、取りのけました。¹⁸

丸い石の下には箱があり、その側面と底は石でできていました。中をのぞくと、金版と聖見者の石、胸当てが見えます。¹⁹版には一面に古代の文字が刻まれており、その片側は3つの輪で綴じられていました。版はどれも、横が15センチ、縦が20センチほどの薄いものでした。また版の一部は封じられていて、だれにも読むことができないようです。²⁰

驚きながらも、ジョセフは再び、この版にどれくらいの価値があるのかと考え始めました。そうして版に手を伸ばすと、体に衝撃を覚えました。一度は手を引っ込めたものの、それから二度版に手を出しました。しかし、いずれも衝撃が走ったのです。

「なぜこの本を取り出せないのですか。」ジョセフは声を上げます。

すると、「あなたが主の戒めを守らないからである」と語る声が近くで聞こえました。²¹

振り向くと、モロナイでした。その瞬間、前の晩に受けたメッセージが頭の中を駆け巡り、自分がこの記録の真の目的を忘れていたことを理解しました。ジョセフは祈り始めると、思いと心が改まり、聖霊を感じられるようになります。

「見なさい」とモロナイが命じると、別の示現が目の前に開け、サタンが自分の無数の軍団に囲まれているのが見えました。「すべて見たとおりである。善と悪、聖さと汚れ、神の栄光と闇の力があり、あなたは以後、両者を見分けなければならない。邪悪な力に惑わされ、それに屈することがあってはならない。」

この記録を受けるために心を清め、もっと強い意志を持つようとモロナイはジョセフを諭し、「これらの神聖なものは、祈りと、主に忠実に従うことによってのみ手にすることができる」と説明しました。「金版がここに置かれたのは、世の誉れのために金をもうけ、富を得るためではない。この版は信仰の祈りによって結び固められている。」²²

その版を取り出せるのはいつなのかとジョセフは尋ねます。

「来年の9月22日」だとモロナイは言い、「ただし、あなたがふさわしい人を伴えばの話である」と付け加えました。

「ふさわしい人とはだれですか」と尋ねると、次のような答えが返ってきました。

「あなたの一番上の兄である。」²³

一番上の兄が頼れる人だということを、ジョセフは子供のころから知っていました。アルビンは当時25歳で、恐らく本人が望めば、自分の農場を持つこともできたでしょう。しかし、彼は家族の農場にとどまることを選びました。両親が定住し、年を

取ってからも自分の土地を確保できるようにしたかったからです。アルビンはまじめな働き者であり、ジョセフはそんな兄を愛し、深く尊敬していました。²⁴

恐らくモロナイは、主が版を託せるような人物となるために、ジョセフにはこの兄の知恵と強さが必要だと感じたのでしょう。

その晩家に帰ったジョセフは、疲れ果てていました。しかし、ジョセフが玄関から入るやいなや、家族が周りに集まってきました。丘に何があったのか、知りたくてたまらなかつたのです。ジョセフは版のことを家族に話し始めましたが、ジョセフが疲れていることに気づいたアルビンは、それをさえぎってこう言いました。

「もう寝よう。あしたも早起きをして仕事に行くんだ。」明日になれば、ジョセフの話の続きを聞く時間は幾らでもあります。「母さんが夕飯を早めに用意してくれれば、夜にゆっくりと時間が取れるから、そのとき皆で腰を落ち着けてジョセフの話の聞こうじゃないか。」²⁵

翌日の夜、ジョセフが丘での出来事を話すと、アルビンはそれを信じました。アルビンは長男として、老いていく両親の物質面での福利に配慮する責任を常に感じていました。家族がより居心地良く暮らせるよう、弟たちとともに、さらに広い家を建て始めてもいたのです。

そして今やジョセフは、家族の霊的な福利の面を引き受けたかのようにでした。来る日も来る日も、夜になるとジョセフは家族の注目を一身に浴び、金版と、それを記した民の話をしました。家族のきずなはより強められ、家庭は平和と幸福に満たされました。何かすばらしいことが起ころうとしているのを、皆が感じていたのです。²⁶

ところが、モロナイの訪れから2か月も経たないある秋の朝、帰宅したアルビンが腹部の激痛を訴えました。苦痛に身をよじらせ、医者を呼ぶよう父親に頼みます。ようやく到着した医者は大量の粉薬をアルビンに投与しましたが、容態はかえって悪化しただけでした。

ベッドの上で数日間、アルビンは痛みと闘いました。死期が迫っていることを悟り、ジョセフを呼びにやると、こう言いました。「あの記録を手に入れるために、自分の力でできるかぎりのことすべてをするんだ。受けた指示に忠実に従って、与えられた命令をすべて守ることだよ。」²⁷

アルビンはそれから間もなく息を引き取り、一家は悲しみに包まれました。葬儀の席で、牧師はアルビンが地獄に行ったと暗に言います。アルビンの死を例に挙げて、神が介在して人をお救いにならない場合にどのようなことが起こるのかを示し、人々に警告したのです。ジョセフ・シニアは烈火のごとく怒りました。善良だった息子が神からのろわれるなど、信じることができなかったのです。²⁸

アルビンがいなくなってからというもの、金版のことは話題に上らなくなりました。アルビンはジョセフの神聖な召しを熱心に応援していたため、その話題に触れるとアルビンの死を思い出してしまいます。家族はそれに耐えられませんでした。

ジョセフはアルビンの死をひどく悲しみました。彼の死が、ジョセフにはとりわけこたえたのです。長兄であるアルビンに頼ってあの記録を手に入れようとしていたジョセフは、見離されたような気がしました。²⁹

とうとう再び丘に行く日がやってくると、ジョセフは一人で向かいました。アルビンがいなくなった今、果たして主が自分に版を託

してくださるかどうか、自信がありませんでした。しかし、兄アルビンの勧告に従って、主から命じられたことをすべて守ることならできると思いました。モロナイが指示した、金版の取り出し方は明確なものでした。「両手で持ったらすぐに家に行って隠すように」と告げたのです。³⁰

ジョセフは丘に行き、てこで石を持ち上げると、石の箱の中に手を入れ、版を取り出しました。そのとき、箱の中にはほかに高価なものがあったので、家に帰る前にそれを隠しておかなければという考えが頭をよぎりました。版を下に置くと、ジョセフは振り向いて箱にふたをしました。ところが、版を置いたはずのところに戻ると、版がありません。動揺したジョセフはひざまずき、版の在り処を教えてくださいよう必死に祈りました。

するとモロナイが現れ、ジョセフがまたしても指示に従わなかったと言います。版を安全な場所に保管する前に下に置いただけでなく、版から目も離してしまったのです。この若き聖見者は、主の業を行う意志が十分にあったものの、この古代の記録を守ることはまだできませんでした。

ジョセフは自分に失望しましたが、モロナイは翌年また版を取りに来よう言い、神の王国に関する主の計画と、始まりつつある大いなる業についてさらに多くのことを教えてくださいました。

それでもジョセフは天使が去った後、とぼとぼと丘を下りながら、何も持たずに帰ったら家族はどう思うだろうかと心配になりました。³¹家に入ると、家族がジョセフを待っており、版は手に入ったのかとすぐさま父が尋ねました。

「いいえ、だめでした。」

「版は見たのかい。」

「見ましたが、持って来ることはできませんでした。」

「わたしがおまえの立場だったら持って来ていただろう」とジョセフ・シニアは言います。

「父さんは自分の話していることが分かっていません」と
ジョセフは言いました。「わたしがそれを持って来られなかった
のは、主の天使が許してくれなかったからなのです。」³²



目を覚ましていなさい

21 歳になるエマ・ヘイルがジョセフ・スミスのことを初めて耳にしたのは、1825 年の秋、ジョセフがジョサイア・ストールのもとで働くようになったころのことです。ジョサイアはこの青年とその父親を、自分の所有地に埋められた宝を探し当てる手助けとして雇います。¹地元の言い伝えによると、何百年も前、探検家の一団が、銀山を採掘して得た宝をこの一帯に隠したということでした。ジョセフに聖見者の石を使う特別な力があると知ったジョサイアは、探索を手伝ってくれたら、高額の賃金を支払い、見つけた宝の分け前を与えるとジョセフに持ちかけてきたのです。²

エマの父親であるアイザックは、この冒険的な事業を支援しました。ジョセフとその父親がペンシルベニア州ハーモニー（パルマイラから南へおよそ 240 キロの所にある村）にあるストールの農場にやって来たとき、アイザックは契約の立会人を務め、労働者たちを自宅に泊めてくれたのでした。³

それから間もなくして、エマはジョセフに出会います。ジョセフはエマより年下で、背丈が180センチ以上あり、力仕事には慣れているようでした。色白で目は青く、少し足を引きずるような歩き方をしていました。文法の知識が不十分で、自分の考えを述べる際に回りくどくなることもしばしばありましたが、話すときには自然と知性がにじみ出るような人物でした。ジョセフと彼の父親は善良で、エマとその家族が信奉していた教会に出席するよりは、独自の判断で礼拝するのを好みました。⁴

ジョセフとエマは二人とも、野外活動が好きでした。子供のころから、エマは乗馬と、自宅近くを流れる川でのカヌー遊びが大好きでした。ジョセフは乗馬に長けてはいなかったものの、レスリングや球技は大の得意でした。周囲の人々と気兼ねなく接し、笑顔を絶やさず、よく冗談を言ったり、面白い話をしたりしました。エマはジョセフより控えめな性格でしたが、愉快的な冗談が大好きで、だれとでも気さくに話げできました。読書や歌うことも好きでした。⁵

数週間がたち、エマがジョセフとさらに親しくなるにつれて、エマの両親は二人の関係について不安を募らせていきます。ジョセフはほかの州からやって来た貧しい労働者でした。エマの両親は、娘がジョセフに対する関心をなくし、地元の裕福な家の一つに嫁ぐことを望んでいたのです。また、エマの父親は宝探しに対して警戒心を強めるようになり、この事業におけるジョセフの役割に懐疑的でした。宝など何一つ出てこないと分かったとき、ジョセフは宝探しを打ち切るようジョサイア・ストールを説得しようとしていましたが、アイザック・ヘイルはそのようなことを意に介さないようでした。⁶

エマは自分の知るどの男性よりもジョセフが好きだったので、ジョセフと過ごすのをやめることはありませんでした。銀山探しをやめるようジョサイアを首尾よく説得できた後も、ジョセフ

はハーモニーにとどまり、ジョサイアの農場で働き続けました。時々、同じ地域で別の農場を営むジョセフ・ナイトとポリー・ナイトのもとで働くこともありました。仕事が休みになると、ジョセフはエマに会いに行くのでした。⁷

ハーモニーでは、ジョセフと彼の所持する聖見者の石がたちまちうわさ的となりました。町の老人たちの中には聖見者のことを信じている人もいましたが、その子供や孫たちの多くは信じていませんでした。ジョサイアの甥は、ジョセフがおじにつけ入り、おじをうまく利用していると主張し、ジョセフを詐欺罪で裁判所に訴えます。

地元判事の前に立ったジョセフは、その石を見つけた経緯を説明しました。ジョセフ・シニアは、聖見者としてのジョセフの驚嘆すべき賜物に対する御心を示してくださるよう何度も神に願い求めたことを証言しました。最後にジョサイアが法廷に立ち、ジョセフは自分をだましてなどいないと言明しました。

判事はこう尋ねました。「つまり、あなたは被告が石の助けによって隠されたものを見ることができると信じているのですね。」

ジョサイアは、きっぱりとした口調で言いました。「いいえ、わたしはそのことが紛れもない真実であると知っているのです。」

ジョサイアは地域でも一目置かれている人物で、人々は彼の言葉を信じました。結局、聴聞会で、ジョセフがジョサイアをだましたという証言はだれからも得られず、判事は訴えを棄却することとなります。⁸

1826年9月、ジョセフは版を取り出すために丘へと戻りましたが、まだそれらを受け取る備えができていないとモロナイは言いました。「鉞山採掘者たちとの交わりを断ちなさい。」天使は

そう告げます。彼らの中には邪悪な者もいたからです。⁹モロナイは、ジョセフが自身の思いを神の御心に沿わせられるよう、さらに一年の年月を与えました。そうした備えができなければ、版がジョセフに託されることは決してないでしょう。

また天使は、次に丘へ来るときにはだれかを一緒に連れてくるようにと告げます。ジョセフが最初に丘を訪れたときにも、天使は最後に同様の指示を与えていました。しかし、アルビンがすでに亡くなっていたため、ジョセフは当惑します。

「だれを連れて来ればよいのでしょうか」とジョセフは尋ねました。

「いずれ分かるだろう。」モロナイはそう答えました。

聖見者の石を通して、ジョセフが主の指示を求めたところ、適任者が分かりました。それはエマだったのです。¹⁰

ジョセフはエマをひと目見て、すぐさま彼女に惹かれました。アルビンと同様、エマは、ジョセフが主の業を遂行し、主に必要とされる者となるうえで助け手となれる人物だったのです。しかし、エマは単なる助け手以上の存在でした。ジョセフはエマを愛しており、彼女との結婚を望んでいたのです。¹¹

12月、ジョセフは21歳になりました。かつて、ジョセフは自身の賜物を利用しようとする人々の思惑に振り回されることがありました。¹²しかし、最後に丘を訪れてからというもの、ジョセフは版を受け取るに当たって自身を備えるうえで、これまで以上に多くのことを成す必要があると自覚するようになります。

ハーモニーに戻る前、ジョセフは両親と話をし、「結婚することにしました」と告げます。「お二人が反対でなければ、エマ・ハイルさんを妻に迎えたいと思います。」両親はジョセフの決意

を喜び、ルーシーは、結婚後に自分たちと一緒に住むよう強く勧めました。¹³

その冬、ジョセフはできるだけ多くの時間をエマと過ごしました。雪のためにヘイル家までの道のりを移動するのが大変なときには、ナイト家のそりを借りることもありました。しかし、エマの両親は相変わらずジョセフを嫌っており、ヘイル一家に気に入ってもらおうとするジョセフの努力は報われませんでした。¹⁴

1827年1月、エマはストール宅を訪れます。エマとジョセフはそこで、家族のとがめるような視線から逃れてともに時間を過ごすことができました。ジョセフはストールの家でエマにプロポーズをしました。はじめ、エマは驚いた様子でした。エマには、両親が結婚に反対するであろうことが分かっていたのです。¹⁵それでも、ジョセフは結婚について考えてくれるようエマを熱心に説得しました。二人はすぐさま駆け落ちすることもできたのです。

エマは結婚の申し出についてよく考えました。ジョセフと結婚すれば両親を落胆させることになるでしょうが、それはエマ自身が選択することであり、エマはジョセフを愛していたのです。¹⁶

それから間もない1827年1月18日、ジョセフとエマは地元の治安判事宅で婚姻手続きを済ませました。その後、二人はマンチェスターに向かい、ジョセフの両親の新しい住居で一緒に暮らし始めます。その家は快適でしたが、ジョセフ・シニアとルーシーはこの新居のために多額の出費をし、支払いが滞ったために資産を手放すことになりました。そうして新しい持ち主からその家を借り受けることになったのです。¹⁷

スミス夫妻はジョセフとエマとの同居を喜んでいましたが、息子に授けられた神からの召しは心配の種でもありました。地域

の住民は金版について耳にしており、時折出かけて行ってはそれを探し回っていたのです。¹⁸

ある日のこと、ジョセフは用事で町へ出かけていきました。夕食までに戻ってくると思っていた両親は、ジョセフがなかなか帰宅しないことに不安を覚えます。両親は眠れないままに、何時間も待ちました。ようやくドアが開いたかと思うと、ジョセフは疲れ切った様子でどっと椅子に座り込みました。

「どうしてこんなに遅くなったんだい？」と父は尋ねました。

「これまでに経験したことがないほどの、ひどい叱責を受けたのです」とジョセフは答えます。

「一体だれにとがめられたんだ？」父は問いただします。

「主の天使です」とジョセフは答えました。「わたしが怠惰であったと言うのです。」次にモロナイと会う日が間近に迫っていました。「直ちになすべきことを行う必要があります」とジョセフは言いました。「神から命じられたことをすぐにも始めなければならぬのです。」¹⁹

秋の収穫が終わり、ジョサイア・ストールとジョセフ・ナイトは仕事でマンチェスター地域に赴きました。二人とも、ジョセフが4度目に丘を訪れる日がもう近いことを知っており、モロナイがついに金版をジョセフに託すかどうか、知りたくてたまらなかったのです。

地元の宝探しの連中も、ジョセフが記録を手にする時が来ていることを知っていました。近ごろ、連中の一人でサミュエル・ローレンスという男が、丘をうろつきながら版を探しています。サミュエルが問題を起こすことを心配したジョセフは、9月21日の夜、父親をサミュエルの家に向かわせます。彼を見張り、もし丘へ向かうようであれば阻止するためです。²⁰

その後、ジョセフは版を取り出す手はずを整えました。年に一度の丘への訪問を翌日に控えていましたが、ジョセフは宝探しの連中を出し抜くため、真夜中を少し過ぎたころ、すなわち9月22日の夜明けに、丘に到着するよう計画しました。だれもジョセフが出かけるとは思わないような時間帯です。

それだけではありません。いったん手に入れた版を守る手立てを考える必要もありました。家族のほとんどが床に就いてから、ジョセフはそっと母親に、鍵付きの箱を持っているかと尋ねました。ルーシーはそのような箱を持っておらず、心配し始めます。

「大丈夫です」とジョセフは言いました。「それがなくても、きちんと首尾よくやれますから。」²¹

間もなくして、馬車に乗る支度を整えたエマが出て来ました。エマとジョセフはジョセフ・ナイトの馬車に乗り込むと、夜のとばりへと出発します。²²丘に到着すると、ジョセフが版の隠された場所に向かって丘を登って行き、その間エマは馬車のそばで待ちました。

モロナイが姿を現し、ジョセフは石の箱から金版と聖見者の石を取り出しました。ジョセフが丘を下り始める前、モロナイはジョセフに、主が示された人々を除き、だれにもその版を見せてはならないことを思い起こさせました。そして、ジョセフが版を保存するためにあらゆる努力を尽くすならば、それらは守られると約束しました。

モロナイはジョセフに次のように告げました。「あなたは目を覚ましていて、自分に託された信頼に忠実でなければならない。さもなければ、邪悪な者たちに打ち負かされるであろう。その者たちは、あなたから版を奪い取るためにありとあらゆる策と陰謀を巡らすからである。また、あなたが絶えず注意していなければ、彼らはその企てを成し遂げるであろう。」²³

ジョセフは版を丘から運び降ろしましたが、馬車にたどり着く前に、中が空洞の丸木の中に版を隠しました。鍵付きの箱が手に入るまで安全に保管しておくためです。それからエマを見つけると、二人は日が昇り始めるころに帰宅しました。²⁴

一方スミス家では、ルーシーがジョセフ・シニア、ジョセフ・ナイト、ジョサイア・ストールに朝食を給仕する間も気をもみつつ、ジョセフとエマの帰りを待ちわびていました。忙しく働く間にも、息子が版を持たずに帰ってくるのではないかと心配するあまり、ルーシーの心臓は激しく鼓動していました。²⁵

程なくして、ジョセフとエマが家に入ってきました。ルーシーはジョセフが版を持っているかどうか確かめようと目を凝らしましたが、ジョセフが手に何も持っていないのを目にすると、震えながら部屋を立ち去りました。

ジョセフは母親の後を追いついて、こう告げました。「母さん、心配しないでください。」ジョセフはルーシーに、ハンカチにくるんだ物を手渡します。布地を通して、ルーシーは大きな眼鏡のような物の存在を感じ取りました。それは、ウリムとトンミム、すなわち版の翻訳のために主が備えられた聖見者の石だったのです。²⁶

ルーシーは喜びに満たされました。ジョセフは、その肩から重荷が取り去られたかのように見えます。しかし、家にいるほかの人々と食卓に着くと、ジョセフは悲しげな表情を浮かべ、無言で朝食を取りました。食べ終わると、ジョセフはうちひしがれた様子で頭を手にもたれかけます。「残念です。」ジョセフはジョセフ・ナイトに言いました。

ナイト老人は「なんと、それは残念なことだ」と言います。

「ほんとうにがっかりです。」そう繰り返しつつ、ジョセフの表情はほほえみへと変わりました。「想像していたよりも、はる

かにすばらしいものです。」ジョセフは続けて、版の大きさと重さについて説明し、ウリムとトンミムについて興奮した口ぶりで話しました。

「何でも見えます。」ジョセフはそう言いました。「実にすばらしいものです。」²⁷

版を受け取った翌日、ジョセフは働きに出かけました。近くの町で井戸の修理をし、鍵付きの箱を手に入れる資金を稼ぐためです。同日の朝、スミス家から丘を越えてすぐの所へと用事に出かけたジョセフ・シニアは、金版を奪おうと企む男たちの一団が話しているのをふと耳にします。一団の一人がこう言いました。「俺たちが版を手に入れるんだ。相手がジョセフ・スミスだろうと地獄のすべての悪魔だろうとな。」

驚いたジョセフ・シニアは家に戻り、エマにそのことを話します。エマは自分も版がどこにあるのかは知らないと言いましたが、ジョセフがそれを安全に保管していることを確信していました。

「そうだろうとも」とジョセフ・シニアは答えました。「だが、ほんの小さなことのために、エサウが自分の祝福と長子の特権を失ったことを忘れちゃいけない。ジョセフも同じ間違いを犯さないようにしないと。」²⁸

エマは馬に飛び乗ると、版が無事であることを確認するために、ジョセフが働いている農場まで1時間以上もの間、馬を走らせました。エマは井戸のそばで、その日の労働で汗と泥にまみれたジョセフを見つけます。差し迫る危険について聞いたジョセフは、ウリムとトンミムをのぞき込み、版が無事であることを確かめました。

一方家では、ジョセフ・シニアが家の外を歩きつ戻りつしながら、ジョセフとエマの姿が見えるまで、毎分ごとに道路の先に目をやっていました。

馬の背に乗りつつ、ジョセフは言いました。「父さん、すべては間違いなく無事です。心配するには及びません。」²⁹

しかし、行動すべき時は来ていました。

ジョセフは丘へと急ぎ、版が隠されている丸木を見つけると、それを注意深くシャツでくろみました。³⁰それから、森の中へと素早く身を隠し、危険に備えて絶えず目を配りながら家へと向かいました。森のおかげで、本通りにいる人々からジョセフの姿は見えませんが、森には泥棒たちが隠れる場所もまたあちこちにあります。

記録版の重みにあえぎつつも、ジョセフは森の中をできるだけ足早に通り抜けて行きます。行く手をさえぎる一本の倒木を跳び越えたとき、ジョセフは後ろから何か固い物で殴られたのを感じました。振り向くと、銃をこん棒のように振り回しながら近づいてくる男の姿が目に入りました。

一方の腕で版をしっかりと抱え込んだまま、ジョセフはその男を地に殴り倒し、茂みのさらに奥深くへと分け入りました。1キロほど走った所で、今度は別の男が木の陰から飛びかかり、銃の台尻でジョセフに殴りかかります。ジョセフはその男を撃退すると走って逃げ、必死の思いで森から抜け出そうとしました。しかし、そう遠く行かないうちに、3人目の男が襲いかかります。強い一撃を受け、ジョセフの体はふらつきました。ジョセフはあらん限りの力でその男を激しく殴ると、家に向かって走り出しました。³¹

家にたどり着いたジョセフは、重い包みを片方の腕の下にしっかりと抱え込み、ドアを突き破るかのような勢いで中に駆け

込んできました。ジョセフはこう叫びました。「父さん、版を手に入れました。」

ほかの家族がジョセフを取り囲む中で、14歳になる妹のキャサリンが、包みをテーブルの上に置くのを手伝いました。父親と弟のウィリアムが版の包みを解きたいと望んでいることは分かっていたのですが、ジョセフは二人を止めました。

「見ることはできないのかい？」ジョセフ・シニアが尋ねます。

「できません」とジョセフは答えました。「最初は不従順でしたが、今度こそは忠実でありたいと思うのです。」

ジョセフが、布地越しであれば版に触れてもいいと言ったので、弟のウィリアムは包みを持ち上げました。包みは石よりも重く、本のページのようにめくることのできる薄い板から成っていることを、ウィリアムは見て取ります。³²また、ジョセフは末の弟ドン・カーロスを、ハイラムのもとへ鍵付きの箱を取りに行かせました。ハイラムは妻のジェルーシャと生まれたばかりの娘とともに、通りの少し先に住んでいました。

間もなくして、ハイラムが到着しました。版が無事その箱に保管されると、ジョセフは近くにあったベッドに倒れ込み、森にいた男たちについて家族に話し始めました。

話しているうちに、ジョセフは手の痛みに気づきます。何度か攻撃を受けている間に、親指を脱臼していたのです。

ジョセフは不意にこう言いました。「話すのはやめて、父さんに親指を元に戻してもらわなくては。」³³



すべてが失われた

ジョセフが金版を家に持ち帰った後、宝探しの連中は何週間もの間、何とかしてそれを奪おうとしました。記録を安全に保つため、ジョセフは版をあちこちに移し、暖炉の床下や父親の店の床下、山のように積まれた穀物の中などに隠す必要がありました。ひと時も油断することはできません。

好奇心旺盛な近所の人々は、ジョセフの家に立ち寄り、記録を見せてほしいとせがむのです。金を支払うという申し出があっても、ジョセフはいつも断りました。できるかぎりのことをするならば版は守られるという主の約束を信頼して、版を大切にしようと心に決めていたのです。¹

こうした邪魔が入るために、ジョセフは版を詳しく調べることも、ウリムとトンミムについてよく学ぶこともできませんでした。その解訳器が版の翻訳の助けになるはずのものだと理解はしていましたが、古代の言語を読むために聖見者の石を使ったことは

ありませんでした。翻訳の業に取り掛かりたいと思っていましたが、どのように行えばよいのか、定かではなかったのです。²

ジョセフが版を調べていたころ、パルマイラで尊敬を集める地主、マーティン・ハリスという人物が、ジョセフのしていることに興味を持つようになりました。マーティンはジョセフの父親ほどの年齢で、時折ジョセフを自分の土地の働き手として雇っていました。ジョセフの母親から自分の息子と会って話すよう勧められるまで、マーティンは金版について耳にすることはあっても、それについて考えたことはほとんどありませんでした。³

マーティンが家に立ち寄ったとき、ジョセフは外に働きに出ていたので、彼はエマとほかの家族に版について尋ねました。ジョセフが帰宅すると、マーティンはジョセフの腕をつかみ、もっと詳しく話してくれるよう頼みました。ジョセフは、金版について、また版の内容を翻訳して出版するようというモロナイの指示について話しました。

「もしこれが悪魔の業であるならば、わたしは何のかかわりも持ちたくない。」マーティンはそう言いました。しかし、もしもこれが主の業であるならば、ジョセフがそれを世に宣言するうえで助けになりたいと願ったのです。

ジョセフはマーティンに、鍵付きの箱に入った版を持ち上げてみるように言いました。何か重いものがあることは分かりましたが、それが金版であるという確信は持てないようでした。「君の言葉を信じないからといって、わたしを責めないでくれ」と、マーティンはジョセフに言いました。

真夜中過ぎに帰宅したマーティンは、そっと自分の寝室に入り、祈りをささげました。そして、もしジョセフが神の業を行っていることができたなら、自分の持てるものをすべて差し出すと神に約束したのです。

祈っていると、マーティンは静かな細い声が自分に語りかけるのを感じました。こうしてマーティンは、この版が神から与えられたものであると知りました。そして、この版のメッセージを伝えるジョセフの助け手となる必要があることを悟ったのです。⁴

1827年の末、自分が妊娠していることを知ったエマは、両親に手紙を書き送りました。エマとジョセフが結婚してからほぼ1年近くが経っていましたが、エマの父母はいまだに気を悪くしていました。とは言え、ヘイル夫妻はこの若い夫婦がハーモニーに戻ることに同意し、エマが一家の近くで出産できるよう取り計らってくれました。

自分の両親ときょうだいから離れることになるものの、ジョセフはハーモニーに行くことを強く望んでいました。ニューヨークの人々は依然として版を奪おうとしていたため、新しい場所に移ることで、ジョセフが主の業を行うに当たって必要としていた平安と私生活を取り戻すことができると思ったからです。しかし、あいにくジョセフは負債を抱えており、引っ越しの費用がまったく手元にありませんでした。⁵

財政状態を整えようと、ジョセフは負債の一部を返済するために町へと出かけます。ジョセフが店で支払いをしていると、マーティン・ハリスがつかつかとジョセフに歩み寄り、こう言いました。「スミスさん、ここに50ドルあります。主の業を行うために差し上げましょう。」

ジョセフはそのお金を受け取ることに戸惑いを覚え、返済すると約束しましたが、その必要はないとマーティンは言いました。そのお金は贈り物だったのです。マーティンは、店内にいたすべての人に向かって、自分が無償で提供したことの証人となってくれるよう頼みました。⁶

それから間もなくして、ジョセフは負債を完済し、幌馬車に荷物を積み込みました。ジョセフとエマは、金版を豆の入った樽の中に隠し、ハーモニーへと出発します。⁷

二人はおよそ一週間後、ヘイル家の広々とした家に到着しました。⁸程なくして、エマの父親から金版を見せるよう求められましたが、ジョセフは金版を保管している箱しか見せられないと告げました。不愉快に思いつつも、鍵付きの箱を持ち上げたアイザックは、その重みを感じたものの、疑いは拭い払えずにいました。アイザックはジョセフに、中身を見せてくれないかぎり、その箱を家に置いておくわけにはいかないと告げたのです。⁹

エマの父親のそばにいては、翻訳がはかどりそうにもありませんでしたが、ジョセフは最善を尽くしました。エマの助けを受けながら、見慣れない形の文字を金版から紙に書き写しました。¹⁰その後数週間は、ウリムとトンミムを使って翻訳しようと試みました。その過程で、ジョセフは単に解訳器をのぞき込む以上のことを求められました。へりくだり、信仰を行使しながら文字を研究する必要があったのです。¹¹

数か月後、マーティンがハーモニーにやって来ました。マーティンによると、はるかニューヨーク市まで旅し、古代言語の専門家の助言を求めるべく主に命じられたように感じた、ということです。マーティンは、そうした専門家らが文字を翻訳できるのではと期待していました。¹²

ジョセフは版からさらに幾つかの文字を写し取り、そこに自分の翻訳を書き留めた紙をマーティンに渡しました。そうしてジョセフとエマは、友人が高名な学者から助言を受けるために東部へと向かうのを見送りました。¹³

ニューヨーク市に到着すると、マーティンはコロンビア大学のラテン語とギリシャ語の教授であったチャールズ・アンソンに会いに行きました。アンソン教授はマーティンよりも15歳ばかり年下の青年で、ギリシャとローマ文化に関する評判のよい百科事典を出版したことで最もよく知られていました。またアンソンは、アメリカインディアンに関する話を収集し始めたところだったのです。¹⁴

アンソンは厳格な学者で、邪魔が入るのをひどく嫌っていましたが、マーティンを歓迎し、ジョセフが提供した文字と翻訳を調べました。¹⁵ エジプト語を知らなかったにもかかわらず、教授はこの言語に関する研究論文を幾つか読んだことがあり、それがどのようなものかは心得ていました。文字を調べたアンソンは、エジプト語との類似性を幾つか確認し、翻訳が正確であることをマーティンに伝えました。

マーティンがさらに多くの文字を見せると、アンソンはそれらを詳細に調べたうえで、その中に古代言語と関連ある文字が多く含まれていると言い、それらが信頼できるものであるとの証明書をマーティンに手渡しました。教授はまた、かつてコロンビア大学で教鞭を執っていたサミュエル・ミッチェルという名の別の学者にも、その文字を見せるよう勧めました。¹⁶

「彼はこれらの古代言語によく精通しています」とアンソンは言いました。「きっとあなたたちの期待に沿う答えを得られるでしょう。」¹⁷

マーティンが証明書をポケットにしまい、まさにそこを去ろうとしたとき、アンソンはマーティンを呼び返しました。ジョセフがどのようにしてその金版を見つけたのか知りたいと思ったのです。

「神の天使がジョセフにそれを明らかにしたのです。」マーティンはそう言うと、版の翻訳は世界を変え、その破滅から救うことになるだろうと証しました。今やマーティンは、版が本物で

あるという証明書を手にしており、自分の農場を売却し、翻訳を出版するために献金しようという気になっていました。

「その証明書を見せてください」とアンソンは言いました。

マーティンはポケットに手を入れて証明書を取り出し、アンソンに渡しました。するとアンソンはそれを細かく破り、今どき天使が教え導くなどということはないと言いました。ジョセフが版を翻訳してほしいければ、それをコロンビアまで持って来て、学者に翻訳してもらえばよい、というのです。

マーティンは、版の一部は封じられており、ジョセフはそれをだれにも見せないよう命じられていることを説明しました。

するとアンソンは「わたしは封じられた書を読むことはできない」と言いました。アンソンはマーティンに、恐らくジョセフにだまされているのだらうと言い、「詐欺師には気をつけなさい」と警告したのでした。¹⁸

マーティンはアンソン教授のもとを去り、サミュエル・ミッチェルを訪ねます。ミッチェル博士はマーティンを丁重に出迎え、彼の話に耳を傾けてから、文字と翻訳を調べました。その意味は理解できませんでしたが、エジプトの象形文字に似ており、絶滅した民が記したものであると言いました。¹⁹

程なくしてマーティンは町を離れ、ハーモニーに戻ります。ジョセフが古代の金版を持っており、それを翻訳する力があるという確信は以前にも増して強まっていました。マーティンはジョセフに教授たちとの面会について話し、アメリカで最も学識の深い人々がこの書物を翻訳できないとしたら、ジョセフが翻訳するしかない、と言って聞かせたのです。

その務めに圧倒されたジョセフは言いました。「わたしにはできない。無学なのだから。」しかしジョセフは、自分が版を翻訳できるように、主が解訳器を備えてくださったことを知っていました。²⁰

同じ考えを抱いていたマーティンは、パルマイラに戻って事業を整え、ジョセフの筆記者を務めるためにできるだけ早く帰ってくるという計画を立てました。²¹

1828年4月、エマとジョセフは、エマの両親の家からそう遠くないサスケハナ川沿いの家で暮らしていました。²² 妊娠の経過が順調であったエマは、ジョセフが記録の翻訳を始めると、度々筆記者を務めました。ある日翻訳をしていると、ジョセフは突然青ざめました。「エマ、エルサレムの周りには壁があったのか」と聞くのです。

聖書の記述を思い起こしながらエマが「ええ」と答えると、ジョセフは「そうか」と安堵し、「欺かれていたのかと思っただ」と言いました。²³

エマは、夫に歴史や聖典の知識がなくとも、それが翻訳の妨げになっていないという事実には驚嘆しました。ジョセフは理路整然とした手紙を書くことさえできませんでした。それでも、ジョセフは本や原稿といった助けなしに記録を口述し、エマはその傍らに何時間も座っていたのでした。ジョセフの翻訳を可能にしたのは、神の靈感をおいてほかにはないことを、エマは悟っていました。²⁴

そのころ、マーティンはパルマイラから戻って筆記者の務めを引き継ぎ、赤ん坊が生まれるまでの間、エマが休息を取れるようにしました。²⁵ しかし、休息を得られる日がそう簡単に訪れることはありませんでした。マーティンの妻ルーシーが、夫と一緒に自分もハーモニーに行くと言い出したのです。ハリス夫妻はどちらも強烈な個性の持ち主でした。²⁶ ルーシーはジョセフを経済的に支援したいというマーティンの望みに懐疑的で、夫が自分を置いてニューヨーク市に行ったことに腹を立てていました。マー

ティンが翻訳を手伝うためにハーモニーへ行くつもりだと話すと、ルーシーは、何としても自分の目で版を見ようと、勝手に同行することにしたのです。

ルーシーは耳が遠くなってきており、人々の言っていることが理解できないときには、自分が悪口を言われていると思ひ込むことが時々ありました。また、プライバシーを尊重する観念はほとんど持ち合わせていませんでした。ジョセフから版を見せるのを断られると、ルーシーは家を搜索し始め、家族の引き出しや食器棚、トランクといった場所をくまなく捜すようになったのです。そのため、ジョセフは版を森の中に隠さざるを得なくなりました。²⁷

しばらくすると、ルーシーはジョセフの家を出て、隣人の家に滞在することになりました。エマは自分の引き出しや食器棚の安全を取り戻しましたが、今度はルーシーが隣人たちに、ジョセフはマーティンからお金を引き出そうとしていると言いつらすようになります。数週もの間、問題を引き起こしたあげく、ルーシーはバルマイラの自宅へと戻ったのでした。

平穏な生活が戻り、ジョセフとマーティンは大急ぎで翻訳を進めました。ジョセフは神から与えられた、聖見者、啓示者としての役割を果たすまでになっていました。解訳器あるいは別の聖見者の石を使って、ジョセフは版が目の前にあっても、エマの亜麻布に包まれてテーブルの上に置いてあっても、翻訳することができたのです。²⁸

4月、5月、そして6月初旬にかけて、エマはジョセフがよどみなく記録を口述する声に耳を傾けました。²⁹ ゆっくりと、しかし明瞭に語り、時々止まっては、マーティンがジョセフの言葉を最後まで綴り、「書きました」と言うのを待ちました。³⁰ エマも交代で筆記者を務めました。驚いたことに、ジョセフは中断したり休憩

を取ったりした後も、常に中断したその箇所から口述を始め、どこから始めるか教えてもらうようなことはありませんでした。³¹

エマは出産を目前に控えていました。翻訳原稿がうず高く積み上げられていき、マーティンは、この翻訳原稿を妻に読ませることができれば、彼女もきっとその価値を理解し、自分たちの仕事の邪魔をしなくなるだろうと思うようになりました。³²また、自分が神の御言葉を世にもたらす手助けをするために時間とお金を費やしてきたことを、ルーシーに喜んでほしいと思ったのです。

ある日のこと、マーティンはジョセフに、数週間ほど原稿をパルマイラに持って行ってもよいかと許可を求めました。³³ルーシー・ハリスが家を訪れたときの振る舞いを覚えていたジョセフは、その考えに懸念を抱きました。しかし、大勢の人が自分の言葉を疑っていたときに自分を信じてくれたマーティンを喜ばせたいとも思いました。³⁴

どうすべきか確信が持てないまま、ジョセフは導きを求めて祈りました。すると主は、マーティンに原稿を持って行かせてはならないと言われました。³⁵しかし、妻に原稿を見せることで状況が変わると確信していたマーティンは、もう一度主に尋ねてほしいとジョセフに懇願しました。ジョセフはそうしましたが、答えは同じでした。ところが、マーティンは再度主に尋ねるようジョセフに強く迫りました。そして今度は、神から自分たちの望みどおりに行う許しを得たのです。

ジョセフはマーティンに、2週間だけ原稿を持ち帰ってもよいと言いました。絶えず原稿を確実に保管し、特定の家族にのみ見せることを誓約するという条件付きです。約束を交わしたマーティンは、原稿を携えてパルマイラへと戻ったのでした。³⁶

マーティンが出発した後、モロナイがジョセフに姿を現し、解訳器を取り去ります。³⁷

マーティンの出発の翌日、エマは難産に耐え、男の子を生みました。赤ん坊は病弱で、長くは生きながらえられませんでした。このつらい試練により、エマは肉体的に疲れ果て、精神的にも打ちのめされ、一時は自身も生死をさまよいました。ジョセフは絶えずエマを気遣い、決して長い時間、彼女のそばを離れようとしませんでした。³⁸

2週間後、体調が回復し始めたエマは、マーティンと原稿のことについて考えるようになりました。エマはジョセフに言います。「気がかりだわ。ハリスさんが原稿をどうしているか、その状況が少しでもつかめないと、休めないし、安心できないわ。」

エマはマーティンを探しに行くよう、しきりに勧めましたが、ジョセフはエマを置いて出かけたくはありませんでした。そこでエマはこう言いました。「母を呼んでちょうだい。そうすればあなたがいない間、母と一緒にいてくれるわ。」³⁹

ジョセフは駅馬車に乗り、北へと向かいました。旅の間、ジョセフは食事ものどを通らず、一睡もできませんでした。マーティンに原稿を持って行かせないようにと主が言われたとき、その言葉に聞き従わなかったことで、主の怒りを買ってしまったのではと恐れたのです。⁴⁰

日が昇るころ、ジョセフはマンチェスターの両親の家に到着しました。スミス家は朝食の準備をしているところで、食卓に加わるようマーティンを招きました。8時になり、食事がテーブルの上に並びましたが、マーティンはまだ来ません。マーティンを待ちながら、ジョセフと家族は不安を募らせていきました。

4時間以上が経ってようやく、遠くの方にマーティンが姿を見せました。目の前の地面をじっと見詰めながら、ゆっくりと家に近づいてきます。⁴¹門の所で立ち止まると、塀の上に腰かけました。帽子のつばで目を隠すようにして座っています。やがて家の

中に入って来ると、マーティンは食事をするために黙って腰を下ろしました。

スミス一家がじっと見守る中、マーティンはこれから食べ始めるかのようにフォークとナイフを手に取りましたが、すぐに落としてしまいます。「もうおしまいだ!」こめかみに両手を押し当て、マーティンはそう叫びました。「主の御前から絶たれる。」

ジョセフは飛び上がるかのように立ちました。「マーティン、原稿をなくしたと言うのかい?」

「ああ」とマーティンは言いました。「なくなってしまった。どこにあるのか分からないんだ。」

「おお、神よ、わたしの神よ。」ジョセフはこぶしを握り締めながら、うめき声を上げました。「すべてが失われた。」

ジョセフは部屋を行ったり来たりし始めました。ジョセフはどうしていいか分からず、マーティンにこう言いました。「家に帰って、もう一度探してください。」

「無駄だ」と、マーティンは声を張り上げました。「家中をどこもかしこも探した。ベッドや枕まで破って探したんだ。ないに決まっている。」

「妻のもとへ戻って、そんな話をしなければならないのですか。」そのような知らせを聞けば、エマにどれほどの苦痛を与えることになるかとジョセフは恐れました。「それに、どうやって主に顔向けができるでしょう。」

母ルーシーはジョセフを慰めようと、へりくだって悔い改めれば、主は赦してくださるかもしれない、と言いました。しかし、今やジョセフはむせび泣いており、最初の時点で主に従わなかった自分自身に激しい怒りを感じていました。一日中、食事ものどを通りません。その夜、ジョセフはパルマイラにとどまり、翌朝ハーモニーに向けて出発しました。⁴²

立ち去るジョセフを見詰めるルーシーの心は重く沈んでいました。家族として待ち望んできたすべて、過去数年にわたり自分たちに喜びをもたらしてくれたすべてが、一瞬にして消え失せたように思えたのです。⁴³



神の賜物と力

18²⁸年の夏、ジョセフがハーモニーに戻ると、モロナイが再び訪れて金版を持ち去りました。天使はこう告げます。「あなたが十分にへりくだり、悔い改めていれば、9月22日に再びこれらを手にするであろう。」¹

暗闇がジョセフの心に迫るかのようでした。²神の御心を無視し、原稿をマーティンに託してしまったのは間違いだと分かっていたからです。今や神はジョセフに金版を預けることもなく、翻訳者としても信頼できないとしたのです。ジョセフは、天からどのような罰が下ろうとも自分はそれに値すると感じていました。³

罪悪感と後悔にさいなまれたジョセフは、ひざまずいて罪を告白し、赦しを乞い求めました。どこで間違ってしまったのか、そしてもし主が再び翻訳をさせてくださるのなら、どこを改めればよいのかと思い巡らしました。⁴

7月のある日、自宅近くを歩いていると、モロナイが現れました。天使モロナイはジョセフに解訳器を渡します。そこには神か

らのメッセージが書かれていました。「神の業と計画と目的がくじかれることはあり得ず、またそれらが無に帰することもあり得ない。」⁵

その言葉に安堵するも、すぐ後に叱責の言葉が続いていました。「あなたに与えられた戒めは何と厳しかったことか。」主は語られました。「あなたは人を神よりも恐れてはならなかった。」主はジョセフに、聖なるものをいっそう注意深く扱うよう命じられたのです。金版に刻まれた記録は、マーティンの評判や人々を喜ばせたいというジョセフの望みよりも、はるかに重要なものでした。主は、御自分のいにしへの聖約を新たにし、イエス・キリストに頼って救いを得るようすべての人に教えるべく、その記録を備えられたのです。

主は御自身の憐れみを忘れないようにとジョセフに促し、「あなたが行ったこと……を悔い改めなさい」と命じられました。「そうすれば、あなたはまだ選ばれた者である……る。」主は再び、ジョセフを預言者、聖見者として召されましたが、主の言葉をよく心に留めるよう警告し、こう宣言されました。

「それらを行わなければ、あなたは見放されてほかの人々と同様になり、もはや賜物を持つことはなくなるであろう。」⁶

その秋、ジョセフの両親はハーモニーに向かい南下しました。マンチェスターの家を出てから2か月近くたつのに、ジョセフから何の便りもなかったからです。二人はその夏の悲劇により、ジョセフが悲しみに沈んでいるのではないかと心配していました。ジョセフはわずか数週間のうちに、自分の最初の子供を亡くし、妻を失いそうになり、さらには原稿を無くしたのです。二人はジョセフとエマが元気にやっていることを確かめたいと思いました。

目的地まで残り2キロ弱という所で、ジョセフが穏やかで幸せそうに道の前方に立っているのを目にし、ジョセフ・シニアとルーシーは大喜びしました。ジョセフは、神からの信頼を失ったこと、その後罪を悔い改め、啓示を受けたことを両親に話しました。主の叱責は胸を刺すものでしたが、古代の預言者と同様、人々が読めるようにジョセフはその啓示を書き留めたのでした。それは、ジョセフが自分に与えられた主の言葉を記録した最初のものでした。

ジョセフはまた、その後モロナイが訪れ、版と解訳器を戻してくれたことも両親に伝えました。天使は喜んでいただたとジョセフは話しています。「主は、忠実さと謙遜さのゆえにわたしを愛してくださっていると、天使が教えてくれたのです。」

記録は家のトランクの中に隠され、安全に保管されていました。「今はエマが筆記してくれていますが、天使は主がわたしに筆記者を送ってくださると言いました。わたしはそうなると思っています」ともジョセフは両親に話しています。⁷

翌年の春、マーティン・ハリスは悪い知らせを携えてハーモニーにやってきました。彼の妻が裁判所に、ジョセフは金版を翻訳しているふりをしたペテン師だと申し立て、マーティンは裁判でその証人になるべく出頭要請を受けているというのです。ジョセフに騙されたと宣言しなければ、ルーシーはマーティンをも詐欺で訴えたいと言います。⁸

マーティンは、版の存在を示すさらなる証拠を差し出すようジョセフに詰め寄りました。マーティンは裁判で翻訳に関するすべてのことを話したいと思っていましたが、信じてもらえないのではないかと心配していたのです。ルーシーはスミス家を捜索するも、結局、記録を見つけることはできませんでした。また、マー

ティンは2か月にわたってジョセフの筆記者を務めました。版を見たことはなく、ジョセフがそれを持っていると証言することもできません。⁹

ジョセフはどうしたらよいかと主に伺い、友人のために答えを受けました。主は、マーティンが謙遜になって信仰を働かせるまで、法廷で言うべきことを伝えることも、さらなる証拠を与えることもないと言われました。「もし彼らがわたしの言葉を信じなければ、たとえあなた、すなわちわたしの僕ジョセフが、わたしから委ねられたこれらのものをすべて彼らに見せることができたとしても、彼らはあなたを信じないであろう」と主は言われたのです。

しかし、もしジョセフがその夏に行ったように、へりくだり、神を信頼し、犯した過ちから学ぶのであれば、主はマーティンに憐れみを示すと約束されました。主は、時が来れば3人の忠実な証人が版を目にすること、人々から認められようとするのをやめれば、マーティンも証人の一人となることができるであろうと言われました。¹⁰

主は、最後にこう宣言されました。「もしこの時代の人々がその心をかたくなにしなければ、わたしは……わたしの教会を設けよう。」¹¹

ジョセフは、マーティンがこの啓示を書き写す間、これらの言葉について思い巡らしました。それからエマとともに、誤りがないかを確認するため、マーティンが読み返すのを聞きました。読んでみると、エマの父親が部屋に入り、同じく耳を傾けます。聞き終えると、これはだれの言葉かと尋ねました。

「イエス・キリストの言葉です。」ジョセフとエマはそう説明しました。

すると、「すべては妄想だ。もう終わりにするんだ」とアイザックは言います。¹²

エマの父親の言うことは聞かずに、マーティンは啓示の写しを携え、自宅へと向かう駅馬車に乗り込みました。マーティンはハーモニーに来て版の証拠を求めましたが、そこを発つころには、版の存在を証する啓示を得ていました。裁判でそれを用いることはできませんでしたが、マーティンは主が自分を御存じであることを確かに知って、パルマイラへと戻ったのです。

そうして判事の前に立つと、マーティンは簡潔ながらも力強い証を述べました。天に拳をかかげ、金版が確かに存在することを証し、主の業を行う目的でジョセフに惜しみなく50ドルを渡したと断言したのです。ルーシーの訴えを証明する証拠はなかったため、裁判所はこの訴えを棄却しました。¹³

一方ジョセフは、主が間もなく別の筆記者を与えてくださるよう祈りながら、翻訳を続けます。¹⁴

マンチェスターでは、オリバー・カウドリという若者がジョセフの両親の家に寄宿していました。オリバーはジョセフより一つ年下で、1828年の秋、スミス家の農場から南に約2キロの所にある学校で教鞭を執り始めていました。

教師は、生徒の家族のもとに寄宿することがよくありました。ジョセフと金版のうわさを耳にしたオリバーは、スミス家に寄宿できないかと打診してきたのです。初めのうち、スミス一家から詳細を聞き出すことはほとんどできませんでした。原稿を盗まれたことがあり、地元でうわさも立っていたために、スミス家の人々は用心深くなり、口を閉ざすようになっていたからです。¹⁵

しかし、1828年から1829年の冬の間、オリバーはスミス家の子供たちを教えながら、家族の信頼を得ます。この時期、ジョセフ・シニアは主が驚くべき業を始めようとしておられることを宣言する啓示を携えて、ハーモニーへの旅から戻っていました。¹⁶

またそのころには、オリバーが真心から真理を求めていることが分かっていたため、ジョセフの両親は息子の神聖な召しについて口を開き始めていました。¹⁷

両親が語ったことはオリバーの心を捕え、オリバーは翻訳を手伝いたいと切に願うようになりました。ジョセフと同様、オリバーはその時代の教会に満足しておらず、この時代にあっても人々に御心を明らかにされる奇跡の神がおられると信じていたのです。¹⁸ところがオリバーはジョセフからも金版からも遠く離れた所にいたため、マンチェスターには翻訳の業を助けることはできないと思いました。

ある春の日のこと、雨がスミス家の屋根を激しく打つ中、オリバーはジョセフを助けるため、学期が終わり次第ハーモニーに向かいたいとスミス一家に話しました。ルーシーとジョセフ・シニアは、その望みが正しいかどうか、主に尋ねるようにと強く勧めました。¹⁹

オリバーは床に就くと、金版についてそれまで聞いてきたことが真実かどうか知るために、一人で祈りました。すると主は、金版と、それを翻訳するジョセフの様子を示現で見せてくださったのです。オリバーは平安な気持ちに包まれ、ジョセフの筆記者になるべきだと確信しました。²⁰

オリバーはこの祈りについてだれにも話さず、学期が終わるとすぐ、ジョセフの弟サミュエルとともに、160キロ以上も離れたハーモニーに向けて歩き始めました。春の雨にぬれた冷たい泥道を歩いたオリバーは、ジョセフとエマの住む家の戸口にサミュエルとたどり着いたころには、つま先が霜焼けになっていました。それでもオリバーは、この夫婦に会って、主が若き預言者を通して働いておられることを自分の目で確かめたくてたまりませんでした。²¹

ハーモニーに到着すると、オリバーはまるでずっとそこにいたかのような感覚を覚えました。ジョセフはオリバーと夜遅くまで語り、オリバーの話に耳を傾け、質問に答えます。オリバーが良い教育を受けていることは明らかで、筆記者になりたいという申し出をジョセフは快く受け入れました。

オリバーの到着後、ジョセフがまずしなければならなかったのは、作業場を確保することでした。ジョセフはオリバーに契約書を起草するよう頼みました。エマと一緒に住んでいた小さな家と納屋、農地、近くの泉の代金を、ジョセフが義父に支払うことを約束する契約書です。²²エマの両親は、娘の幸せを願ってこの契約条件に同意し、ジョセフに対する隣人の不安が静まるよう助けることも約束しました。²³

それと同時に、ジョセフとオリバーは翻訳を始めました。翻訳作業は数週間休みなく順調に進み、エマも同じ部屋にいて日常の家事をこなすことがよくありました。²⁴ジョセフは時折、解訳器をのぞいて翻訳し、版に刻まれた文字を英語で読み上げました。

聖見者の石は一つだけ用いる方が扱いやすいと感じることが多く、ジョセフは帽子に聖見者の石を入れると、帽子に顔をうずめて光を遮り、石をのぞき込みました。石が暗闇の中で光を放って輝くと、言葉が現れます。それをジョセフが口述し、オリバーが素早く書き写したのでした。²⁵

ジョセフは主の指示に従い、失われた翻訳原稿の部分を再び翻訳しようとはせず、記録のさらに先をオリバーとともに翻訳し続けました。サタンが悪人たちをそそのかして翻訳原稿を盗み、その言葉を変え、翻訳の信憑性を揺るがそうとしていることを、主は明らかにしてくださいました。しかし主は、版を作成した古代の預言者たちに靈感を与え、失われた部分より詳細な記述

のある別の記録を備えておられたのです。これを知ってジョセフは安堵しました。²⁶

「わたしは、わたしの言葉を書き変えた者たちを辱めよう」と主はジョセフに言われました。「わたしの知恵が悪魔の狡猾さに勝っていることを彼らに示そう。」²⁷

オリバーはジョセフの筆記者として働くことに大きな喜びを覚えました。来る日も来る日も、ニーファイ人とレーマン人という二大文明に関する複雑な歴史を、友人のジョセフが口述するのに耳を傾けました。義にかなった王と邪悪な王、囚われの身に陥ってそこから救い出された民、また骨に埋まった原野で見つかった記録を翻訳するために、聖見者の石を用いた古代の預言者について知ったのです。ジョセフのように、その預言者は神の賜物と力を持った啓示者であり聖見者でした。²⁸

その記録はイエス・キリストについて繰り返し証しており、預言者たちが古代の教会を導いた方法、また、ごく普通の男女がいかにして神の業を行ったかを、オリバーは知ったのです。

それでも、主の業に関してオリバーには多くの疑問があり、その答えが知りたくてたまりませんでした。オリバーのためにジョセフがウリムとトンミムを通して啓示を求めると、主はこたえ、こう宣言されました。「あなたはわたしに求めれば、与えられるであろう。あなたは尋ねるならば、大いなる驚くべき奥義を知るであろう。」

また主は、ハーモニーに来る前に受けた証を思い起こすようオリバーに語られました。その証についてオリバーはだれにも話していませんでした。「わたしはこの件についてあなたの心に平安を告げなかったであろうか。神からの証よりも大いなる証があるであろうか。」主は問いかけられました。「だれも知らない事柄をわたしがあなたに告げたので、あなたは証を得たではないか。」²⁹

オリバーは驚きました。そして、自分がひそかに祈り、神から証を受けていたことを直ちにジョセフに告げたのです。神を除いてそれを知る者はいないので、この業が真実であることが分かったとオリバーは言いました。

ジョセフとともに翻訳の作業に戻ると、オリバーは自分にも翻訳ができるのではないかと考え始めました。³⁰ 神は聖見者の石のような道具を用いて業を行われると信じていましたし、オリバー自身も占い棒を使って水脈や鉱脈を見つけたことがあったのです。しかし、その棒が神の力によって働いていたのかについては確信がありませんでした。啓示を受ける過程は、オリバーにとって依然として謎に包まれていました。³¹

ジョセフが再びオリバーに代わって主に尋ねたところ、主はオリバーが信仰をもって求めるならば、知識を得る力を持てると告げられます。オリバーの使った占い棒は、旧約聖書に出てくるアロンの杖のように、確かに神の力によって働いたと主は述べられました。また啓示についてオリバーにさらに教え、こう告げられました。「聖霊によって、わたしはあなたの思いとあなたの心に告げよう。さて見よ、これは啓示の霊である。」

主は、オリバーが信仰に頼るならば、ジョセフのように記録を翻訳することができるとも言われました。しかし、「信仰がなければ何も行えないことを覚えておきなさい」と告げられたのです。³²

この啓示を受け、オリバーは翻訳ができると心躍らせました。ところがジョセフに倣って行って見たものの、言葉は容易に出て来ません。オリバーはいらだちと混乱を深めていきました。

ジョセフは友人が葛藤しているのを見て同情しました。ジョセフが心と思いを翻訳の業に集中させるのには時間を要しましたが、オリバーはそれがすぐにできるようになると考えたようです。霊的な賜物を持つには不十分でした。霊的な賜物を神の業で用いるには、時間をかけて育み、伸ばす必要があったのです。

間もなくオリバーは翻訳を諦め、うまくいかなかった理由をジョセフに問います。

ジョセフは主に尋ねました。「あなたはわたしに求めさえすれば、何も考えなくてもわたしから与えられると思ってきた。……あなたは心の中でそれをよく思い計り、その後、それが正しいかどうかわたしに尋ねなければならぬ」と主は答えられました。

オリバーは忍耐強くあるよう教えられます。「あなたが今翻訳することは適切ではない。」主はこのように語られました。「あなたが行うように召されている業は、わたしの僕ジョセフのために筆記することである。」主は後に別の翻訳の機会を与えるとオリバーに約束されましたが、現時点でのオリバーは筆記者であり、聖見者はジョセフであると告げられたのでした。³³



ともに働く僕たち

1829年の春は、5月半ばになっても肌寒い日が続きました。ハーモニー周辺の農夫たちが、天候が良くなるまで春の植え付けを遅らせて家にこもっている間、ジョセフとオリバーは記録をできるかぎり翻訳しようと努めていました。¹

二人は、エルサレムでイエスが亡くなったときにニーファイ人とレーマン人に起きた出来事を語る箇所に差しかかりました。甚大な人的被害を与え、地形をも変えてしまうほどの巨大地震とすさまじい嵐が起こったと書かれています。地に沈んだ町もあれば、火に焼かれた町もあり、稲妻が数時間にわたって空の果てから果てへと走りました。太陽は姿を消し、生き残った人々は深い暗闇に覆われます。人々は亡くなった者たちのために3日間、泣き叫びました。²

最後には、イエス・キリストの声が闇を貫きます。その声はこう問いかけました。「わたしがあなたがたを癒すことができるように、今あなたがたはわたしに立ち返り、自分の罪を悔い改

め、心を改めようとしているか。」³イエスは闇を払い、人々は悔い改めました。間もなく、多くの人々がバウンティフルと呼ばれる地にある神殿に集まります。集まった人々は、地に起こった驚くべき変化について話し合っていました。⁴

人々がこうして語り合っていると、神の御子が天から降って来られました。そして、こう言われたのです。「わたしはイエス・キリストであり、世に来ると預言者たちが証した者である。」⁵主はしばらくこの民のもとにとどまり、御自身の福音を教え、罪の赦しのために水に沈めるバプテスマを受けるよう民に命じられました。

「わたしを信じてバプテスマを受ける者は、だれでも救われる。神の王国を受け継ぐのはこれらの者である」と宣言されたのです。⁶天に昇られる前、主は御自身を信じる者にバプテスマを施す権能を、義になつた人々にお与えになりました。⁷

翻訳しながら、ジョセフとオリバーはこれらの教えに圧倒されます。兄のアルビンと同様、ジョセフはバプテスマを受けたことがなく、この儀式と、それを施すために必要な権能について、さらに知りたいと思いました。⁸

1829年5月15日の雨上がり、ジョセフとオリバーはサスケハナ川近くの森へと入って行きました。ひざまずき、バプテスマと罪の赦しについて神に尋ねたのです。祈っていると、贖い主の声が平安を告げ、光の雲の中に天使が現れました。この天使は、自分はバプテスマのヨハネであると告げ、二人の頭に手を置きました。神の愛に包まれ、二人の心は喜びに満たされます。

ヨハネは宣言しました。「わたしと同じ僕であるあなたがたに、メシヤの御名によって、わたしはアロンの神権を受ける。これは天使の働きの鍵と、悔い改めの福音の鍵と、罪の赦しのために水に沈めるバプテスマの鍵を持つ。」⁹

天使の声は穏やかでありながら、ジョセフとオリバーを心の底まで貫くようでした。¹⁰天使は、アロン神権にはバプテスマを施す権能があることを説明し、自分が去った後、互いにバプテスマを施すよう二人に命じました。また、後にもう一つの神権の力を受けるであろうことも告げます。その神権は、二人が互いに、また二人がバプテスマを施した人々に聖霊の賜物を受ける権能をもたらすものです。

バプテスマのヨハネが去った後、ジョセフとオリバーは川まで歩いて行き、水の中に入っていました。最初にジョセフがオリバーにバプテスマを施し、オリバーは水から引き上げられるやいなや、間もなく起こることについて預言し始めます。次に、オリバーがジョセフにバプテスマを施しました。ジョセフは川から上がると、主が確立されると約束された、キリストの教会の起こりについて預言しました。¹¹

バプテスマのヨハネの指示に従い、二人は森に戻ると、互いをアロン神権に聖任します。ジョセフとオリバーは古代の記録の翻訳中だけでなく、聖書を研究する中で、神の御名によって行動する権能について記してあるのを度々目にしてきました。今やこの権能を、彼ら自身が持つようになったのです。

バプテスマを受けてからというもの、ジョセフとオリバーは、それまで難解で不明瞭に思えた聖句を突如として理解できるようになりました。真理と理解が二人の心に押し寄せてきたのです。¹²

ニューヨークでは、オリバーの友人であるデビッド・ホイットマーがジョセフの取り組む業について知りたがっていました。デビッドはマンチェスターから約 50 キロ離れたフェイエットに住んでいましたが、オリバーがスミス家に下宿しながら学校で教えていたころ、オリバーと友人になったのです。彼らは金版についてよく

語り合い、オリバーはハーモニーに移ったら、翻訳について書き送ることをデビッドに約束していました。

程なくして、手紙が届くようになります。オリバーは、神からの啓示によらなければだれも知り得ない自身の人生についての詳細を、ジョセフが知っていたことについて書きました。また、ジョセフに対する主の言葉と記録の翻訳についても書き記しました。ある手紙では、翻訳した文章を数行書き出し、それが紛れもない真実であることを証しています。

オリバーは別の手紙で、デビッドが自分の馬や馬車を率いてハーモニーにやって来て、ジョセフとエマ、オリバーがフェイエットのホイットマー家に移る手助けをするのは神の御心だと伝えました。ジョセフはそこで翻訳を完成させることができるでしょう。¹³ハーモニーの住民は、スミス家を歓迎しなくなってきました。住民の中にはジョセフとオリバーの身を脅かそうとする者もあり、エマの実家の影響力がなければ深手を負うところでした。¹⁴

デビッドはオリバーから来た手紙を両親やきょうだいに見せており、彼らもジョセフとエマ、オリバーを家へ迎え入れることに賛成でした。ホイットマー家の人々はその地域にやってきたドイツ語圏の定住者の子孫で、その勤勉さと信心深さで知られていました。彼らの農場は、翻訳の業を妨げ、金版を盗もうとする人々からは十分離れた距離にあり、なおかつスミス家を無理なく訪問できるほどの場所でもありました。¹⁵

デビッドはすぐにもハーモニーに行きたい気持ちでしたが、丸二日分の重労働を終えてからでなければ行ってはならないと、父親から釘を刺されていました。植え付けの時期でしたから、デビッドは8ヘクタールもの土地を耕し、麦の生育を促す石こうをまいて土壌を肥沃にしなければならなかったのです。どうしても今行かなければならないのかどうか、まずは祈るようと父は言いました。

父の助言に従って祈ったデビッドは、家の仕事を終えてからハーモニーに行くよう御霊が告げるのを感じました。

翌朝、デビッドが畑に歩いて行くと、前の晩には耕されていなかった土地に、黒々とした畝が何列もできているのが見えました。畑のほかの場所も調べてみると、2.5ヘクタールほどが一夜にして耕されており、最後の畝を耕せばよいだけになっていることが分かったのです。デビッドの仕事はほとんど終わっていました。

それを知ってひどく驚いたデビッドの父は、こう言います。「これは大きな力が働いているに違いない。畑に石こうをまいたら、すぐにペンシルベニアに出かけるといい。」

デビッドは懸命に働いて残りの畑を耕し、植え付けた苗がよく育つように土を作りました。そうして畑仕事が終わると、幌馬車を屈強な馬に付け、予定よりも早くハーモニーへと向けて出発したのでした。¹⁶

ジョセフとエマ、そしてオリバーがいざフェイエットにやって来ると、デビッドの母親は手いっぱいになってしまいました。メアリー・ホイットマーと夫のピーター・ホイットマーには、すでに15歳から30歳の子供が8人おり、家を出た何人かの子供たちも近隣に住んでいました。子供たちの世話だけでも一日がかりだというのに、3人の客人を抱え、仕事は増す一方です。ジョセフの召しに対して信仰をもっていたメアリーは、愚痴こそこぼさなかったものの、次第に心身をすり減らせていきました。¹⁷

その年のフェイエットの夏は、うだるような暑さでした。メアリーが洗濯や食事の準備をする間、ジョセフは2階の部屋で翻訳を口述していました。通常はオリバーが書き取っていましたが、時にはエマやホイットマー家の人書き取ることもありましたが。¹⁸時々、ジョセフとオリバーは神経を使う翻訳に疲れると、外

に出て近くの池まで歩いて行き、水面に石を投げては何度も跳ねさせるのでした。

メアリーは息つく暇もなく、増えた仕事と課せられた負担は耐え難いものでした。

そんなある日のこと、メアリーが外に出て、牛の乳搾りをする小屋の傍らにいますと、肩からナップサックを下げた白髪混じりの男性の姿が目にとまりました。突然の現れに恐れを抱いたものの、近づいて来たその男性が穏やかな声で話しかけると、メアリーは胸を撫で下ろします。

「わたしはモロナイです。」男性はそう名乗ると、こう言いました。「こなすべき仕事が増えて、あなたは非常に疲れてしまいましたね。」そして、ナップサックを肩から下ろすと、メアリーの目の前でそれを開き始めました。¹⁹

男性は話を続けます。「あなたは非常に忠実に、熱心に働いてこられました。ですから、あなたが証を得て信仰を強められるものをお見せしましょう。」²⁰

ナップサックを開くと、モロナイは金版を取り出しました。それをメアリーの目の前に持って来ると、刻まれた文字が見えるようにページをめくっていきました。最後のページまでめくり終えると、仕事は増えたけれども、もうしばらくの間忍耐強くあり、忠実にその仕事をこなすようメアリーに勧めました。そうすれば祝福を受けると約束したのです。²¹

年配の男性はその直後に姿を消し、メアリーは一人残されました。メアリーは相変わらず忙しく働かなければなりませんでしたが、もはや悩まされることはなくなりました。²²

ホイットマー家の農場で、ジョセフの翻訳は早いペースで進んでいきましたが、作業がはかどらない日もありました。ほかのこと

に気を取られ、霊的な事柄に集中できなかつたのです。²³ ホイツトマー家の小さな家屋は常に慌ただしく、気を散らすことばかりでした。そこに移ったということは、ジョセフとエマがハーモニーで享受していた家族水入らずの時間を諦めることを意味していました。

ある朝のこと、翻訳に取りかかろうとしていたジョセフは、エマに対して腹を立てました。その後、2階で作業をしていたオリバーとデビッドの所へ行きますが、一言も翻訳することができないのです。

ジョセフは部屋から外に出ると、果樹園の方に歩いて行きました。1時間ほど外にいて祈り、帰ってくると、エマに謝って赦しを乞いました。それから、普段のように翻訳の作業に戻ったのです。²⁴

今やジョセフはニーファイの小版として知られる記録の最後の部分を翻訳していました。実際には、書物の初めに用いられる部分です。この小版では、かつてマーティンと組んで翻訳したものの失われてしまった記録に刻まれていたのと類似した物語が展開し、ニーファイという名の若者の話が語られます。ニーファイの家族は神によって、エルサレムから新たな約束の地へと導かれたのです。そこでは記録を記し始めた経緯と、ニーファイ人とレーマン人の間の初期のあつれきが明らかにされていました。さらに重要なのは、版がイエス・キリストとその贖罪について力強く証していたことです。

ジョセフは最後の版の記述を翻訳したときに、その記録の目的が説明され、モルモン書という書名が与えられていることに気づきます。それは、この書物を編さんした預言者であり歴史家でもあった、古代の人物の名を冠したものでした。²⁵

モルモン書の翻訳を始めてからというもの、ジョセフは神の業において自分がこれから果たすこととなる役割について多くを

学びました。その書物には、自分が聖書から学んだ基本的な教えだけでなく、イエス・キリストとその福音に関する新たな真理と洞察も記されていることが分かりました。また、「ヨセフ」〔訳注——英語では Joseph「ジョセフ」となっている〕という名の選ばれた聖見者について預言した、末日についての聖句も明らかになりました。その聖見者は主の言葉をもたらし、失われた知識と聖約を回復するのです。²⁶

この記録の中で、学者には読めない封じられた書物に関するイザヤの預言について、ニーファイが詳しく綴っていることをジョセフは知りました。この預言を読んだジョセフは、マーティン・ハリスがアンソン教授と面会したときのことを思い起こしました。この記録は、末の日にこの書物を地からもたらし、キリストの教会を確立することのおできになる方は、神以外にはおられないと断言していたのです。²⁷

主はこの版を3人の証人に見せられるという約束を、モルモン書と示現の中で与えておられました。翻訳が終わると、ジョセフと友人たちは、この約束について考えるようになります。そのころジョセフの両親とマーティン・ハリスはホイットマー家の農場を訪れており、ある朝、マーティンとオリバー、そしてデビッドは、自分たちをその証人にしてくれるようジョセフに懇願しました。ジョセフが祈ると主がこたえられ、もしも彼らが心の底から主に頼り、真理を証する決意を持つならば、版を見ることができると告げられます。²⁸

ジョセフはマーティンにはっきりと言いました。「あなたは今日、神の前にへりくだらなければなりません。そうすれば、罪の赦しを受けられることもあるでしょう。」²⁹

少ししてから、ジョセフは3人をホイットマー家の近くの森に連れて行きました。彼らはひざまずくと、版を見せてくださるよう代わる代わる祈りました。しかし、何も起こりません。もう一度試みましたが、やはり何も起こりません。ついにマーティンが立ち上がると、天が閉じているのは自分のせいだと言い、その場を立ち去りました。

ジョセフとオリバー、デビッドが再び祈ると、彼らの上に、まばゆく輝く光とともに天使が現れます。³⁰版を手にしたその天使は、版を一枚一枚めくり、そこに刻まれている文字を見せてくれました。天使の傍らにはテーブルが現れ、その上にはモルモン書に記された古代の品物が置かれています。翻訳器と胸当て、剣、ニーファイの家族をエルサレムから約束の地へと導いた奇跡の羅針盤です。

すると、次のように宣言される神の声が聞こえました。「この版は神の力によって現され、神の力によって翻訳された。あなたがたが目にしたものの翻訳は正確である。わたしはあなたがたに命じる。今見聞きしたことを証しなさい。」³¹

天使が去った後、ジョセフが森の奥に歩いて行くと、マーティンがひざまずいて祈っているのが見えました。マーティンは、まだ主から証は受けていないが、金版を見たいと今でも思っていると、一緒に祈ってくれるようジョセフに頼みます。ジョセフはマーティンの横にひざまずきました。すると、祈りの言葉を言い終わらないうちに同じ天使が現れ、版とそのほかの古代の品物を見せてくれたのです。

「すばらしい、すばらしい。」マーティンは大声で言いました。「この目で見た、この目で見たんだ!」³²

ジョセフとこの3人の証人は、その日の午後遅く、ホイットマー家に戻りました。メアリー・ホイットマーがジョセフの両親と歓談していると、ジョセフが部屋に駆け込んできます。「父さん、母さん。わたしがどんなにうれしいか分かりますか!」

ジョセフは母親の傍らに座り込み、こう続けます。「主があの版を、わたしのほかに3人の人にお見せになったのです。わたしが人々を欺こうとしているのではないことを、彼らは身をもって知ったのです。」

ジョセフは、大きな重荷を取り除かれたかのような思いでした。「これからは、彼らもその一部を負うことになるのです。」ジョセフは言いました。「もうわたしはこの世でまったくの一人きりではないのです。」

次にマーティンが部屋に入ってきました。喜びがあふれんばかりです。「天から降ってきた天使を見たんだ!」と大声で言います。「神に祝福あれと、心から思います。自らを低くして、わたしのような者をも、御業の偉大さを証する者としてくださったのですから!」³³

数日後、ホイットマー家の人々は、マンチェスターの農場でスミス家に合流しました。主が御自分の言葉を「適切であると見なされる人数の証人の口を通して」確かなものとされることを知っていたので、ジョセフは父親、ハイラムにサミュエル、またデビッド・ホイットマーの4人の兄弟、すなわち、クリスチャン、ジェイコブ、ピーター・ジュニア、ジョンと、義理の兄弟であるハイラム・ページとともに森に入って行きました。³⁴

この8人は、スミス家の人々が個人の祈りをささげるためによく訪れる場所に集まりました。主の許可を得ると、ジョセフは版の覆いを取り、それを彼らに見せました。3人の証人のように天使を見たわけではありませんが、ジョセフは記録を彼らの手に持たせ、版をめくり、そこに刻まれている古代の文字を見ること

ができるようにしました。版を手にとった彼らは、天使と古代の記録に関するジョセフの証が真実であるという信仰を確固としたものにします。³⁵

今や翻訳が終わり、自らの奇跡的な証を支持する証人も得たのですから、ジョセフにとって、版はもう必要ありませんでした。この8人の男性が森を出て帰宅した後のこと、天使が現れます。ジョセフは神聖な記録を返し、その天使の手に委ねたのでした。³⁶



キリストの教会の幕開け

1829年7月上旬、原稿を手にしたジョセフは、モルモン書を出版してそのメッセージをあまねく広めるよう主が望んでおられることを知っていましたが、出版業は、ジョセフにとってもジョセフの家族にとっても未知の領域でした。原稿を安全に保管し、印刷業者を見つけ、どうにかしてこの書物を人々のもとに届けなければなりません。新たな聖典の可能性について、進んで考えてくれる人のもとに届けるのです。

モルモン書のような長い本を出版するのは、安くないはずで、翻訳を始めてからもジョセフの財政は苦しく、稼いだお金はすべて一家の生活費に消えました。両親についても同様でした。依然として貧しく、他人の土地を耕作していたのです。この計画の資金援助ができる唯一の友人は、マーティン・ハリスでした。

ジョセフは直ちに仕事に取り掛かります。翻訳を完了する前に、モルモン書の著作権を申請しました。原稿を盗難や盗用か

ら守るためです。¹またマーティンの支援を得て、ジョセフはモルモン書の出版に同意してくれる印刷業者を探し始めました。

二人はまず、パルマイラで印刷業を営む、ジョセフと同齢のエグバート・グランディンのもとを訪ねました。グランディンは即座に申し出を断ります。モルモン書は偽りの書だと思っていたのです。ジョセフとマーティンはそれでも引き下がらず、近隣の町でモルモン書を出版してくれる印刷業者を探し続け、ついに見つけました。ところが、その業者に仕事を委ねる前に、二人はパルマイラに戻り、モルモン書の出版を再びグランディンに持ちかけたのです。²

この度は、グランディンが計画に乗り気でした。しかし、5,000部の印刷代および製本代として、作業に着手する前に3,000ドルを支払うよう要求してきたのです。マーティンはすでに印刷代の支払いを援助すると約束していましたが、そのような金額が持ち上がると、自分の農場を抵当に入れなければならない可能性があることに気づきました。それはマーティンにとって重い負担でしたが、ジョセフの友人の中にはその代金の支払いを助けられる人がほかにいないことを承知していました。

困ったマーティンは、モルモン書の資金援助について不安を抱き始めます。マーティンは、その地域で最良の農場を所有していました。その土地を抵当に入れば、土地を失うことになるかもしれません。モルモン書の売れ行きが悪ければ、生涯をかけて築いてきた富を一瞬にして失いかねないのです。

マーティンはジョセフにこの悩みを打ち明け、自分のために啓示を受けてほしいと言いました。それにこたえて救い主は、どれほどの代価であろうと、御父の御心を行うために払った御自分の犠牲について話されました。そして、悔い改める人が皆赦されるように、罪の代価を払って受けられた究極の苦しみについて

語られたのです。そのうえで、神の計画を遂行するために自分の利益を犠牲にするようマーティンに命じられます。

主は、「あなたは自分の財産をむさぼることなく……『モルモン書』を印刷するために惜しみなくそれを分け与えなさい」と言われました。その書物には神の真実の言葉が載っており、確かに人々が福音を信じる助けとなるものだ、と、主はマーティンに断言されたのです。³

隣人たちにはとうてい理解できない決断でしたが、マーティンは主に従い、支払いの保証として農場を抵当に入れました。⁴

グランディンは契約書に署名すると、巨大なプロジェクトを立ち上げました。⁵ ジョセフは、毎回一人の筆記者の助けを得ながら、3か月でモルモン書の文章を翻訳しました。590 ページにわたる初版の印刷と製本にはグランディンと10名ほどの男性が携わり、7か月を要するということでした。⁶

印刷業者との話がまとまると、ジョセフは1829年10月、ハーモニーに戻って自分の農場で働き、エマと過ごしました。一方、オリバー、マーティン、ハイラムが印刷作業を監督し、グランディンの進捗状況をジョセフへ定期的に報告することになりました。⁷

最初に翻訳した原稿を失ったときの絶望感が身に染みていたジョセフは、モルモン書の原稿を1ページごとに写して複本を作成し、印刷業者に持って行くようオリバーに頼み、句読点の追加や植字ができるようにしました。⁸

オリバーはモルモン書を喜んで書き写しました。当時オリバーが書いた手紙は、モルモン書に出てくる言葉であふれていました。モルモン書に出てくるニーファイ、ヤコブ、アミュレクと同様、オリバーはキリストの無限の贖罪に対する感謝の思いをジョセフに綴っています。

「神の憐れみについて書き始めると、筆が止まりません。時間と紙が幾らあっても足りないのです。」⁹

その同じ精神は、印刷が進む中、ほかの人々をもモルモン書に惹きつけます。元印刷見習工のトーマス・マーシュは、居場所を求めて様々な教会を渡り歩きましたが、どれも聖書に見いだせる福音を教えているようには思えませんでした。トーマスは、近い将来新たに教会が設立され、回復された真理を教えるだろうと確信していたのです。

その夏、トーマスは御霊に導かれ、ボストンの自宅から西方に何百キロも離れたニューヨークへと向かいました。家に戻る前、3か月そこにとどまりましたが、なぜこれほど遠くまでやってきたのか、彼には分かりませんでした。ところが、帰路に就く中立ち寄った宿の女主人から、ジョセフ・スミスの「黄金の書」について聞いたことがあるかと尋ねられたのです。トーマスは聞いたことがない、と答えましたが、詳しく知りたくてたまらなくなりました。

女主人はトーマスに、パルマイラに行ってマーティン・ハリスと話すべきだと言います。トーマスは即座にパルマイラへ向かい、グランディンの印刷所でマーティンを見つけました。トーマスは、モルモン書の16ページを印刷工から譲り受けると、この新しい宗教のすばらしさを妻のエリザベスにも味わってもらいたいと心躍らせ、それをボストンに持ち帰ります。

そうしてエリザベスもそのページを読み、それが神の言葉であると確信したのでした。¹⁰

その秋、印刷工がモルモン書の出版に向けて着々と作業を進める中、アブナー・コールという名の元判事が、グランディンの印刷所で新聞の出版を始めました。夜、印刷所で作業をしていたア

ブナーは、グランデインの店員が家に帰ったすきに、未製本で出版できる段階にまで至っていないモルモン書の数ページを手に入れました。

そのうちアブナーは自分の新聞の中で「黄金の聖書」をあざけり、その冬、モルモン書を抜粋したものに辛らつな論評を添えて出版します。¹¹

ハイラムとオリバーは、アブナーの行為を知って抗議しました。「モルモン書をこのような形で印刷するなんて、あなたには何の権利があるというのですか」とハイラムは詰め寄りました。「わたしたちが著作権を得ていることを御存じないのですか。」

アブナーは言います。「知ったことではない。わたしは印刷工を雇った。思いのままに印刷するまでだ。」

ハイラムはこう告げます。「あなたの新聞にあの書物の一部を印刷することを今後一切禁じる。」

「知るものか」とアブナーは言いました。

なす術もなく、ハイラムとオリバーがハーモニーにいるジョセフに報告をすると、ジョセフはパルマイラに飛んで帰ってきました。ジョセフは印刷所の事務所で、何食わぬ顔で自分の新聞を読んでいるアブナーを見つけます。

「お忙しそうですね。」ジョセフはそう話しかけます。

「初めまして、スミスさん」とアブナーは冷ややかに答えました。

ジョセフは言います。「コールさん、モルモン書とそれを出版する権限はわたしにあります。余計な手は出さないでいただきたい。」

するとアブナーはコートを脱ぎ捨て、袖をまくりました。「一戦交えようじゃないか」と怒声を上げながら、両手の拳を合わせます。「戦うなら、来い。」

ジョセフは笑みを浮かべました。ジョセフは「コートを着た方がいいですよ。寒いですし、戦う気はありません」と言い、穏やかに続けました。「でも、わたしの書物を印刷するのはおやめください。」

アブナーは、「自分の方が強いと思うなら、コートを脱いでやってみろ」と言いました。

ジョセフは答えます。「法律というものがあるんです。御存じなければ、やがてお分かりになるでしょう。けんかはしません。何もよいことはないですから。」

アブナーは、自分が法律を破っていることを承知していました。気を落ち着いたアブナーは、モルモン書の抜粋を新聞に掲載するのをやめたのでした。¹²

ソロモン・チェンバレンという一人の説教者は、カナダへと向かう途中、パルマイラの宿で一緒になった家族から「黄金の聖書」について耳にします。トーマス・マーシュと同様、ソロモンはずっと教会を渡り歩いていましたが、そこで目にするものに満足することはありませんでした。一部の教会では福音の原則を教え、御霊の賜物があることも信じていましたが、神の預言者も神権も存在しませんでした。ソロモンは、主が御自分の教会を明らかにされるときが間もなく来ると感じていたのです。

ジョセフ・スミスと金版に関する話をその家族から聞くと、頭のでっぺんからつま先まで電流が走ったかのように感じ、スミス一家を見つけてその書物について詳しく聞くことにしました。

スミス家に向かったソロモンは、戸口でハイラムに会いました。「この家に平安がありますように」とソロモンは言いました。

ハイラムは「そう願います」と答えます。

ソロモンは、「この家には示現や啓示を信じている方がいらっしゃいますか」と尋ねました。

ハイラムの返事はこうです。「はい、皆、示現を信じています。」

ソロモンはハイラムに、何年も前に見た示現について話しました。その示現の中で、地上に神の教会はないが、間もなく設立され、昔の使徒の教会のように力を持つ、と天使が告げたのです。ハイラムとスミス家の人々はソロモンの話を理解し、同じことを信じている、と言いました。

「皆さんが知ったことをぜひ教えていただきたいのですが」とソロモンが言うと、ハイラムは「そうしましょう」と言いました。

ハイラムはスミス家の農場に客人として滞在するようソロモンを招き、モルモン書の原稿を見せました。ソロモンは2日間それをよく調べると、ハイラムとともにグランディンの印刷所に行き、印刷工から印刷した64ページ分をもらいました。製本されていないページを手に、ソロモンはカナダへの旅を続け、その道すがら、この新たな信条について知り得たすべてのことを宣べ伝えたのでした。¹³

1830年3月26日までにはモルモン書の初版が製本され、グランディンの印刷所の1階で販売が始まりました。茶色の子牛皮でしっかりと製本された本からは、皮やのり、紙、インクの匂いがしています。背表紙には金文字でモルモン書という言葉が入っていました。¹⁴

ルーシー・スミスはこの新しい聖典を大切に、神が間もなく神の子らを集め、いにしへの聖約を回復されるしるしと見なしました。タイトルページでは、神が過去に御自分の民のために行われた偉大なことを示し、同じ祝福を今日の神の民にもたらし、

イエス・キリストが世の救い主であられることを全世界に確信させる、というこの書物の目的が宣言されていました。¹⁵

モルモン書の裏表紙には三人の証人と八人の証人の証が載っており、彼らが金版を実際に目にしたこと、この書物の翻訳が真実であることを世に告げています。¹⁶

このような証があるにもかかわらず、この書物がでっち上げだと思ふ人々がいることをルーシーは知っていました。隣人の多くは、神がその御言葉により複数の国を祝福されたことに気づくことなく、聖書があれば十分だと思っていたのです。また、神はすでに世に語られたので再び語られることはない信じ、モルモン書のメッセージを拒む人々がいることも彼女は知っていました。

そういった理由で、パルマイラの住民のほとんどはこの書物を購入しませんでした。¹⁷中にはモルモン書の中身を調べ、その教えが持つ力を感じ、ひざまずいてそれが真実かどうかを主に尋ねる人々もいました。ルーシー自身は、モルモン書が神の御言葉であることを確信しており、ほかの人々にも読んでほしいと思っていました。¹⁸

モルモン書が出版されるとすぐに、ジョセフとオリバーはイエス・キリストの教会を組織する準備に取り掛かりました。その数か月前には主の古代の使徒、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが二人に現れ、バプテスマのヨハネが約束していたとおり、メルキゼデク神権を二人に授けました。この権能が加わったことにより、ジョセフとオリバーはバプテスマを施した人々に聖霊の賜物を授けられるようになります。ペテロ、ヤコブ、ヨハネはさらに、二人をイエス・キリストの使徒として聖任しました。¹⁹

そのころ、ホイットマー家に滞在していたジョセフとオリバーは、この権能に関するさらなる知識を求めて祈っていました。そ

れにこたえて、主の声は互いを教会の長老に聖任するよう命じましたが、その聖任は救い主の教会の指導者として二人に従うことに信者が同意した後に行うようにと告げていました。主はさらに、ほかの教会役員を聖任し、バプテスマを受けた人々に聖霊の賜物を授けるようにと命じられます。²⁰

1830年4月6日、ジョセフとオリバーはホイットマー家に集い、主の命令に従って主の教会を組織しました。法律の命じるところに従い、ジョセフとオリバーは、新たに創設する教会の最初の会員となる人を6人選びました。40人前後の男女も、この大切な機会に立ち会おうと、その小さな家に押しかけてきました。²¹

主がすでに指示されていたことに従って、ジョセフとオリバーは会衆に、自分たちを神の王国の指導者として支持し、教会を組織することが正しいことだと信じているかどうかを表明するよう求めました。全会衆はこれに同意し、ジョセフはオリバーの頭に手を置き、オリバーを教会の長老として聖任しました。次いで役割を交代し、オリバーがジョセフを聖任しました。

その後、二人はキリストの贖罪を記念して、パンとぶどう酒で聖餐を執り行いました。それから、バプテスマを授けた人々の頭に手を置き、彼らを教会の会員として確認し、聖霊の賜物を授けました。²²その会に集った人々に主の御霊が注がれ、預言し始める人もいれば、主をほめたたえる人もおり、皆がともに喜びました。

ジョセフはまた、新たに設立された教会全体に向けて語られた、最初の啓示を受けます。「見よ、あなたがたの間で記録を記さなければならぬ」と主はお命じになり、神聖な歴史をつづり、人々の行いにまつわる記録を保存し、預言者、聖見者、啓示者としてのジョセフの役割を証するよう指示されました。

また、次のように宣言されました。「わたしは、善のために大いなる力をもってシオンの大義を推し進めるようにと彼に靈感を与えた。あなたがたは忍耐と信仰を尽くして、あたかもわたし自身の口から出ているかのように、彼の言葉を受け入れなければならない。これらのことを行えば、地獄の門もあなたがたに打ち勝つことはないからである。」²³

その後、ジョセフは川のほとりに立ち、自分の母親と父親がバプテスマを受けて教会に加わるのを目にしました。真理を求めて何年もの間別々の道を歩んできた親子が、ついに同じ信仰で結ばれたのです。父親が水から上がると、ジョセフはその手を取って川岸に引き上げ、抱き締めました。

「わが神よ」と叫んで父の胸に顔をうずめると、こう言ったのです。「父がバプテスマを受けてイエス・キリストのまことの教会に加わるのを、わたしは生きて見たのです。」²⁴

その晩、ジョセフはそっと近くの森へ行きました。胸がいっぱいだったジョセフは、友人や家族の目につかない場所で、一人になりたいと思ったのです。最初の示現以来 10 年にわたって、ジョセフは天が開くのを目にし、神の御霊を感じ、天使たちから教えを受けてきました。また罪を犯し、賜物を失うこともありました。悔い改めて神の憐れみを受け、神の力と恵みによりモルモン書を翻訳したのです。

そして今、イエス・キリストは御自分の教会を回復し、古代の使徒たちが世に福音を携えて行ったときに保持していたのと同じ神権の権能を、ジョセフに授けてくださいました。²⁵その喜びは溢れんばかりでした。その晩、ジョセフ・ナイトとオリバーがジョセフを見つけると、ジョセフは涙を流していました。

喜びに満たされていたのです。こうして、御業が始まりました。²⁶

第 2 部



信仰の家

1830 年 4 月 - 1836 年 4 月

あなたがた自らを組織しなさい。
すべての必要なものを用意しなさい。
そして、一つの家、すなわち祈りの家、
断食の家、信仰の家、学びの家、
栄光の家、秩序の家、神の家を建てなさい。

教義と聖約 88 : 119

1830 - 1836 年





命があろうとなかろうと

教会が組織された次の日曜日、オリバーはフェイエットにおいて、ホイットマー家の人々とその友人たちに教えを説きました。彼らの多くはそれまでモルモン書の翻訳を支援してきた人々でしたが、まだ教会には加わっていませんでした。話が終わると、そのうちの6人が、近くの湖でバプテスマを施してくれるようオリバーに頼みました。¹

新しい教会にさらに多くの人が加わるにつれ、世の人々に福音を携えて行くという主から与えられた務めが、ジョセフの肩に重くのしかかってきました。モルモン書を出版し、主の教会を組織したものの、本はほとんど売れず、バプテスマを望む人々の大半は友人や親族だったのです。そのうえジョセフには、天と地の事柄について、まだ学ぶべきことが大いにありました。

教会員となった人々は往々にして、新約聖書で読んだ御霊の賜物や、そのほかの奇跡を求める傾向がありました。²しかし、回復された福音が信者に約束していたのは、不思議な現象やする

しよりもはるかに大いなるものでした。モルモン書に登場する賢明な預言者、また王であったベニヤミンは、聖なる御霊に従うならば、人々はイエス・キリストの贖罪によって罪深い性質を捨て去り、聖徒になることができると教えました。³

ジョセフにとっての課題は、今やどのようにして主の業を押し進めていくかということでした。ジョセフとオリバーには、すべての人に悔い改めを叫ばなければならないことが分かっていました。畑はすでに刈り入れを待っており、人の価値は神の目に大いなるものなのです。しかし、ともに20代前半、一介の農夫と教師にすぎない二人の若き使徒が、そのような偉大な業をいかにして押し進められるというのでしょうか。

片田舎のニューヨーク州でささやかな産声を上げた小さな教会が、全地に満ちるまでに発展することなどあり得るのでしょうか。

フェイエットでバプテスマを施した後、ジョセフはハーモニーにある自分の農場に戻るため、約160キロにわたる旅路に就きました。新たな教会の諸事で多忙であったにもかかわらず、秋に豊かな実りを得るため、すぐにも畑の植え付けをしなければならなかったのです。エマの父親に農場の地代を支払う期日はとうに過ぎており、収穫が得られなければ、負債を支払うために別の手立てを探す必要が生じます。

その道中、ジョセフはニューヨーク州コールズビルにあるジョセフ・ナイトとポリー・ナイトの農場に立ち寄りました。ナイト夫妻は長い間ジョセフを支援してきましたが、いまだ教会に入ってはいませんでした。とりわけジョセフ・ナイトは、新たな信仰を受け入れるのはモルモン書を読んでからにしたいと思っていました。⁴

ジョセフはコールズビルに数日間滞在し、ナイト一家とその友人たちに福音を説きました。ジョセフ・ナイトとポリー・ナイトの息子の一人であるニューエル・ナイトは、福音について預言者ジョセフとしばしば語り合いました。ある日、ジョセフに集会で祈るよう勧められたニューエルは、それよりは森の中で一人で祈りたいと言いました。

翌朝、ニューエルは森に行って祈ろうとしましたが、不安な気持ちに襲われ、家に帰ろうとする間にも、その不安はますます募っていきました。家にたどり着くころには、その感情に圧倒されそうになり、ニューエルは妻のサリーに、預言者を呼んで来てくれるよう懇願します。

ジョセフが急いでニューエルのもとに駆けつけると、顔や腕、足を激しくよじらせる若者の姿を、家族や近隣の人々が恐ろし気に見ています。ジョセフの姿を目にすると、ニューエルは「悪魔を追い出してくれ!」と叫びました。

それまでジョセフは、悪魔を叱責したことも、だれかを癒したこともありませんでしたが、イエスがそのような力を弟子たちに約束されたことは知っていました。ジョセフはすぐさま行動を起こし、ニューエルの手を取ってこう言います。「イエス・キリストの御名によって命じる。立ち去れ。」

ジョセフがそう言うやいなや、ニューエルの激しい動きが収まりました。ニューエルは床に倒れ込み、ぐったりとしていましたが、けがはなく、悪魔が自分の体から出て行くのが見えたとつぶやきました。

ナイト家と近隣の人々は、ジョセフの行ったことにひどく驚きます。人々がニューエルをベッドに運ぶのを手伝いながら、ジョセフは、これはこの教会で行われた初めての奇跡だと言い、こう証しました。

「神が神性の力によって、これをなされたのです。」⁵

西へ数百キロの所に住む農夫パーリー・プラットは、家と家族に別れを告げ、聖書に見いだした預言と霊的な賜物について宣べ伝えるよう御霊が促すのを感じていました。そこで、プラットは損を承知で農地を売り払い、キリストのためにすべてをささげたことで神が祝福を与えてくださると信じていたのです。

衣類数枚と旅費に足りる程度のお金だけを持って、パーリーと妻のサンクフルは家を発ち、宣教に出かける前に親族を訪ねようと東へ向かいました。ところが、運河に沿って旅していると、パーリーはサンクフルに向かって、一人で旅を続けてくれないかと言います。船を下りよう御霊が促すのを感じたというのです。

「すぐに追いつく」とパーリーは約束しました。「ここですべきことがあるんだ。」⁶

船を下りて16キロほど歩いた所の片田舎で、パーリーはあるバプテスト派の執事の家立ち寄りしました。そこで執事から、彼が手に入れた一風変わった新しい本について話を聞きます。話によると、それは古代の記録であり、天使の助けと示現によって金版から翻訳されたというのです。執事は、その本は今手元がないが、翌日パーリーに見せると約束します。

翌朝、パーリーは執事の家を再び訪れました。そうして、はやる気持ちで書物を開き、タイトルページに目を通しました。次に裏表紙をめくり、何人かの証人の証を読みました。書かれている言葉に引きつけられたパーリーは、最初から読み始めました。数時間たちましたが、止まりません。食べるのも寝るのもおっくうでした。主の御霊がパーリーに注がれ、その書物が真実であることが分かったのです。⁷

パーリーはこの書物の翻訳者に会うと決め、すぐさま近くのパルマイラの村に向かいました。町の人々が、道を数キロ下って行った先にある農場を指し示してくれました。その方向に歩いて

行くと一人の男性に出会ったので、パーリーはどこに行けばジョセフ・スミスに会えるのかと尋ねました。その男性は、ジョセフは160キロほど南にあるハーモニーに住んでいると告げ、自分は預言者の兄ハイラム・スミスだと名乗りました。

二人はほとんど夜通し語り合い、ハイラムはモルモン書と神権の回復、末日における主の業について証しました。翌朝、パーリーには説教の約束があったため、ハイラムはパーリーにモルモン書を1冊渡して彼を送り出しました。

再びモルモン書を開く機会を得たパーリーは、復活した主が古代アメリカの人々を訪れて御自身の福音を教えられたことを知り、喜びに満たされます。この書物の伝えるメッセージには、この世のすべての富に勝る価値があることを知ったのです。

約束していた説教を終えると、パーリーはスミス家に引き返しました。ハイラムは戻ってきたパーリーを温かく迎え入れ、ホイットマー家の農場を訪ねるよう勧めました。その農場で、徐々に増えつつある教会員たちに会えるだろうと言うのです。

さらに学びたいという熱意につき動かされたパーリーは、その誘いを受けました。数日後、パーリーはバプテスマを受けます。⁸

1830年6月下旬、エマはジョセフとオリバーとともにコールズビルへやって来ました。その年の春にジョセフが行った奇跡の話が地域一帯に広まっており、今やナイト家とそのほか数家族が、教会に加わることを望んでいました。

エマ自身も、バプテスマを受ける準備ができていました。ナイト家の人々と同様、エマも回復された福音と夫の預言者としての召しを信じていたものの、教会には入っていなかったのです。⁹

コールズビルに到着すると、ジョセフはほかの人々と協力して近くの小川をせき止め、翌日バプテスマ会を開けるようにしました。ところが朝になってみると、バプテスマ会が開かれるのを防ぐため、夜の間は何者かがダムを破壊してしまっていたのです。

落胆した人々は、バプテスマ会の代わりに日曜日の集会を開き、オリバーがバプテスマと聖霊に関する説教をしました。説教が終わると、地元の聖職者とその信者たちが集会を中断させ、教会員の一人を外に引きずり出そうとしました。

エマは、ジョセフとそのメッセージに対する妨害行為には慣れきっていました。ジョセフをペテン師呼ばわりする人もいれば、信者から金銭を巻き上げようとしていると言って非難する人もいたのです。福音を信じる者たちを「モルモナイツ」と呼んであざ笑う人々もいました。¹⁰そうした問題事に目を配らせていたエマとそのほかの人々は、翌日の早朝、小川に戻ってダムを修理しました。水が十分な深さになると、オリバーが川の中央まで分け入って行き、エマとジョセフ・ナイト、ポリー・ナイトのほか、10人にバプテスマを施しました。

バプテスマの間、何人かの男たちが少し離れた土手沿いに立ち、信者たちを侮辱する言葉を浴びせかけました。エマやそのほかの人々は彼らを見捨てようと思いましたが、一団がナイト家の農場へと戻り始めると、その男たちは後をついてきて、道中大声で預言者に対する脅しの言葉を吐きました。ナイト家では、ジョセフとオリバーが新たにバプテスマを受けた男女に確認の儀式を施そうとしましたが、外のやじ馬たちが50人ほどに膨れ上がり、騒がしくわめき立てていました。

襲われかねないと思った聖徒たちは近くの家に逃げ、確認の儀式が無事に終わることを願いました。しかし、儀式を施す前に警官がジョセフを逮捕し、モルモン書を宣べ伝えて地域社会の治安を乱したという理由で監獄に連行してしまいます。

留置所で夜を明かしたジョセフは、暴徒が自分を捕らえて、脅し文句を実行しかねないと案じました。一方エマは、姉の家で不安にさいなまれながら待ちつつ、コールズビルの友人たちとともにジョセフが無事釈放されることを祈りました。¹¹

ジョセフは2日間にわたって法廷で裁判を受け、無罪となりましたが、それは似たような容疑で再び逮捕され、裁判にかけられるためにすぎませんでした。2度目の公聴会の後、釈放されたジョセフは、エマとともにハーモニーにある自分の農場に帰ったため、エマとコールズビルの聖徒たちに教会員として確認の儀式を施すことができませんでした。¹²

家に戻ったジョセフは再び農場で働き始めますが、どのように時間を使うべきかについて、主から新たな啓示を受けます。「あなたはシオンにおいて、すべての務めに献身しなければならない」と主は言明されたのです。「世俗の働きについては、あなたは力を持たないであろう。これはあなたの召しではないからである。」ジョセフは畑の植え付けをし、その後ニューヨーク州の新会員に確認の儀式を施すべく出発するよう命じられます。¹³

この啓示は、エマの生活に対する不安に追い打ちをかけました。ジョセフが全時間を聖徒たちにささげるようになれば、一家はどうやって生計を立てていけばよいのでしょうか。それに、夫が教会の奉仕のために出かけている間、エマは何をすればよいのでしょうか。家にいるべきでしょうか。それとも、ジョセフに同行するよう主は望んでおられるのでしょうか。主がそう望んでおられるなら、教会におけるエマの役割は何なのでしょう。

エマが導きを求めていることを御存じであった主は、ジョセフへの啓示を通して彼女に語られました。主はエマの罪を赦し、彼女を「選ばれた婦人」と呼ばれたのです。ジョセフが旅する

ときにはともに行くようにと言い、主はこう約束されました。「あなたは……，聖文を説き明かし、教会員に説き勧めるために、彼の手の下で聖任を受けなければならない。」

また、家の財政状況に関するエマの不安も鎮めてくださいました。「あなたの夫が教会の中であってあなたを支えるので、あなたは恐れる必要がない」と請け合ってくださいましたのです。

そうして主はエマに、教会のために神聖な賛美歌を選定するよう命じられました。「わたしは心の歌を喜ぶからである」と主は述べておられます。¹⁴

この啓示を受けてから程なくして、ジョセフとエマはコールズビルまで旅をし、そこでついに、エマとその地の聖徒たちは確認の儀式を受けます。新しい会員たちが聖霊の賜物を受けると、主の御霊が部屋に満ちあふれ、皆が喜び、神を賛美しました。¹⁵

その年の夏の終わり、ジョセフとエマは友人の助けを得て農場を売り払い、フェイエットに移り住みます。ジョセフが教会に対してさらなる時間をささげられるようにするためでした。¹⁶ところが到着後、スミス夫妻は、八人の証人の一人で、アロン神権の教師でもあるハイラム・ページが、聖見者の石と自身が信じる石を通して、教会のために啓示を求めるようになっていることを知ります。¹⁷オリバーとホイットマー家の何人かを含む多くの聖徒たちは、こうした啓示が神からのものだと思っていた。¹⁸

ジョセフは、危機的状況に直面していることを悟ります。ハイラムの啓示は、聖文の言葉と似通ったものでした。それらはシオンの確立や教会の組織について述べていましたが、時として新約聖書や、主がジョセフを通して啓示された真理と相反するものだったのです。

ジョセフはどうしてよいか分からず、ある晩、遅くまで寝ずに導きを祈り求めました。ジョセフはそれまでも敵対する力を経験してきましたが、友人からの敵対は初めてのことでした。ジョセフがハイラムの受けた啓示に対し、あまりに厳しく応じるならば、それを信じている人々の感情を害す、あるいは忠実な聖徒たちが自分自身で啓示を求める意欲を削いでしまう恐れがあります。¹⁹しかし、もし偽りの啓示を否定しなければ、主の言葉の権威が損われ、聖徒たちの間に分裂が生じかねません。

何時間も眠れずに過ごした後、ジョセフはオリバーに向けた啓示を受けます。「わたしの僕ジョセフ・スミス・ジュニアのほかにも、だれもこの教会で戒めと啓示を受けるために任命される者はいない」と主は宣言されました。「すべてのことを秩序正しく……教会員の同意を得て行わなければならない」からです。主はこの原則をハイラムに教えるようオリバーに命じられました。

その後、オリバーはこの啓示によって、アメリカ合衆国の西の果てまで1,600キロ近くもの旅をし、イスラエルの家の残りの者であるアメリカインディアンたちに、回復された福音を宣べ伝える業に召されます。シオンの町は、こうしたアメリカインディアンの人々が住む地の近くに築かれるだろうと主は語られました。これは、神がキリストの再臨の前に、新エルサレムをアメリカ大陸に建設されるという、モルモン書にある約束と一致します。シオンの町の正確な場所については告げられませんでした。それについては後に明らかにすると主は約束されました。²⁰

数日後に開かれた教会の大会において、聖徒たちはハイラムの示現を否定し、教会のために啓示を受けることのできるただ一人の人として、全会一致でジョセフを支持しました。²¹

主はピーター・ホイットマー・ジュニアとザイバ・ピーターソン、パーリー・プラットを召して、西部への伝道に向かうオリバー

に同行するよう命じられました。²²その間、エマとそのほかの女性たちは、宣教師のために衣服を作り始めます。彼女たちは長時間働いて羊毛を糸に紡ぎ、それを織ったり編んだりして生地を仕上げ、一枚ずつ縫い合わせて服に仕立てました。²³

パーリーは、妻サンクフルとそのほかの親族に福音を伝えた後、妻を伴ってフェイエットに戻って来たばかりでした。パーリーが西へと旅立った時、妻のサンクフルはメアリー・ホイットマーの家に移り住むこととなり、メアリーは彼女を喜んで迎え入れました。

ミズーリに行く途中、パーリーは、ほかの宣教師たちを連れてオハイオ州へ向かうことにします。その地には、かつて彼が所属していた教会の牧師、シドニー・リグドンが住んでいたからです。パーリーは、シドニーが自分たちのメッセージに興味を持つのではと期待しました。²⁴

同じ年の夏、フェイエットから2日ほど行った町に住むローダ・グリーンは、預言者の弟サミュエル・スミスが戸口に立つ姿を目にします。ローダは年のはじめにサミュエルに会っており、その際サミュエルは彼女の家にもルモン書を1冊、置いて行ったのです。ローダの夫ジョンはほかの宗派の巡回説教師であり、ルモン書をばかにしていましたが、巡回の旅の折には携えて行き、そのメッセージに興味を示す人の名前を書き留めておく約束していました。

ローダはサミュエルを家に招き入れ、今のところルモン書に興味を示した人はいないと伝えました。「持って帰ってもらわないと」とローダは言います。「夫のグリーンには買う気がないようですし。」

サミュエルがモルモン書を受け取り、背を向けて立ち去ろうとしたとき、「わたしは読んで気に入ったのですが」とローダが言いました。サミュエルは立ち止まり、「この本を差し上げましょう」と言って本を返しました。「神の御霊が、この本を持ち帰ってはならないと告げているのです。」

本を返してもらおうと、ローダは圧倒されるような熱い思いを感じました。「この書物が真実であるという証をくださる神に願い求めてください」とサミュエルは言いました。「そうすれば胸の中が燃えるような思いになることでしょう。それが、神の御霊です。」

夫が帰ってくると、ローダはサミュエルが訪ねて来た時のことを話して聞かせました。はじめ、ジョンは本について祈るのをためらっていましたが、ローダはサミュエルの約束を信じるよう夫を説得しました。

「あの人がうそを言うはずがないわ」とローダは言います。「今まで出会った人の中でも、ほんとうに良い人だもの。」

ローダとジョンは本について祈り、それが真実であるという証を得ました。二人はその証を親族や隣人たちに伝えます。中にはローダの弟ブリガム・ヤングと、その友人、ヒーバー・キンボールもいたのです。²⁵

その年の秋、38歳のシドニー・リグドンは、パーリー・プラットと3人の同僚が、モルモン書という新たな聖典について証するのをかきこまっていた。しかし、シドニーは関心を抱きませんでした。シドニーは長年にわたって、オハイオ州カートランドとその近辺の村の人々に、聖書を読むよう、そして新約時代の教会の原則に立ち返るよう熱心に勧めていたのです。シドニー

はそれまで常に聖書を人生の指針としてきたので、聖書があればそれで十分だと宣教師たちに言いました。²⁶

「あなたはわたしに真理をもたらしてくださいました。」そう言ってパーリーはシドニーに思い起こさせます。「今度はわたしが友としてお願いする番です。わたしのためにこれを読んでください。」²⁷

「君はこの件についてわたしと言い争ってはならない」とシドニーは言い張ります。「しかし、君の本を読んで、何かわたしの信仰の足しになるものがあるかどうかを見てみよう。」²⁸

パーリーはシドニーに、彼の教会の信徒たちに教を説いてもよいかと尋ねました。シドニーは彼らのメッセージに懐疑的であったにもかかわらず、説教することを許可しました。

宣教師が帰ってから書物の一部を読んだシドニーは、それが真剣に検討を加えるべきものであると感じました。²⁹パーリーとオリバーがシドニーの信徒たちに教を説くころには、だれに対しても、この書物について警告する気持ちが失せていたのです。集会の最後に立ち上がって話し始めたとき、シドニーは聖書を引用してこう言いました。

「すべてのものを識別して、良いものを守り……なさい。」³⁰

しかし、シドニーには依然としてどうすべきかが分かりませんでした。モルモン書を受け入れることは、牧師としての職を失うことを意味します。シドニーには良き信徒たちがおり、彼らの支援のおかげで、自身と妻のフィービー、6人の子供たちは不自由のない暮らしを得ていました。信徒の中には、シドニーの家族のために家を建ててくれた人までいたのです。³¹今享受している快適な生活を捨てるよう家族に求めることなど、実際にできるでしょうか。

シドニーは祈り続け、やがて平安な気持ちに包まれます。モルモン書が真実であることが分かったのです。シドニーは大声

で叫びました。「〔わたし〕にこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父〔なのだ〕。」³²

シドニーは、自分の思いをフィービーに伝えます。「愛するフィービー、君はかつて貧しかったわたしについて来てくれたね。同じようにもう一度、ついて来てくれるかい。」

「どんなことがあってもついて行くわ」と妻は答えます。「命があろうとなかろうと、神の御心を行うのがわたしの望みなんですから。」³³



集められる

1830年の秋、カートランドからさほど遠くない所で、15歳のルーシー・モーリーはいつもの家事を終え、女主人アビゲイル・ダニエルズの隣に腰かけました。アビゲイルが織機を操り、横糸を通す道具を前後に行き来させて織り糸を交差させる間、ルーシーは細い糸巻きに糸を巻きつけます。二人が織った布は、ルーシーがダニエルズ家で働くのと引き換えに、ルーシーの母親が受け取ることになっていました。一家にはたくさんの子供がいますが、10代の娘がいないため、アビゲイルはルーシーを見込んで、家の掃除と食事作りを手助けしてもらっていたのです。

二人が肩を並べて働いていると、玄関のドアをノックする音が聞こえました。「どうぞ」とアビゲイルが大声で叫びます。

ルーシーが糸巻きから視線を上げると、3人の男性が部屋に入って来るのが見えました。見知らぬものの、きちんとした身なりをした、感じの良さそうな人たちです。3人とも、30代前半のアビゲイルより何歳か若いように見えました。

ルーシーは立ち上がると、部屋に何脚か椅子を持って来ました。男たちが腰かけると、ルーシーは彼らの帽子を受け取ってから自分の椅子に戻りました。男たちは自らオリバー・カウドリ、パーリー・プラット、ザイバ・ピーターソンと名乗りました。ニューヨーク州から来た説教師で、西部に行く途中にこの町を通りかかったということでした。話によると、主は彼らの友人であるジョセフ・スミスという名の預言者に、御自身の真実の福音を回復されたのだと言います。

彼らが話す間、ルーシーは静かに機織りを続けていました。彼らは、天使について、また預言者が啓示によって翻訳した一組の金版について話しました。そして、イエス・キリストの再臨前、最後にもう一度福音を宣べ伝えるために、神が彼らを遣わされたことを証しました。

メッセージを伝え終わると、機を織るリズムカルな音がやみ、座っていたアビゲイルが振り向きしました。彼女は彼らの目の前で、機織りの道具を腹立たし気に振り回しながら、「わたしの家で、あなたたちのふざけた教義など一切教えてほしくないものだね」と言いました。

男たちは、自分たちのメッセージが真実であることを証し、彼女を納得させようとしていました。ところが、アビゲイルは偽りの教義に子供たちをさらしたくないと言い放ち、出て行くように命じました。男たちは、せめて何か食べさせてくれないかと頼みました。一日中何も食べておらず、空腹だったのです。

「この家にはあなたたちに食べさせるものなどないわ。」アビゲイルはぴしゃりとはねつけます。「ペテン師になんか食べさせるものですか。」

すると突然、ルーシーが声を上げました。アビゲイルが、神の僕たちに向かってあまりにひどいことを言うので、恐ろしくなったのです。「ここから1.6キロ先の所に父が住んでいます」と

ルーシーは言いました。「父はだれであろうと、空腹の人を追い返すことはありません。父の家に行ってみてください。何か食べさせてもらえますし、面倒を見てもらえるでしょう。」

ルーシーは男たちの帽子を取って来ると、宣教師たちについて外に出て、両親の家への行き方を教えました。男たちは礼を言うと、道を下って歩き始めました。

「神の恵みがありますように」と彼らは言いました。

男たちの姿が見えなくなると、ルーシーは家の中に戻りました。アビゲイルは再び自分の織機に向かい、機織り道具を前後に動かしています。「それで気が済んだかしら」とルーシーに言いました。腹を立てているのは明らかです。

「ええ」とルーシーは答えました。¹

ルーシーが約束したとおり、3人の宣教師はモーリー家で心のこもった食事にありつきました。ルーシーの両親であるアイザックとルーシーは、シドニー・リグドンの教派の会員で、キリストに従う者は一つの大きな家族として、物や財産を共有するべきだと信じていたのです。「いっさいの物を共有にし」ようとしていた新約聖書の聖徒の模範に倣い、夫妻は一緒に暮らしたいと望む人々に広大な農地を開放していました。彼らは、闘争的でしばしば利己的な周囲の世界から離れ、自分たちの信条を実践したいと思っていたのです。²

宣教師たちはその晩、モーリー家の人々とその友人たちに福音を教えました。救い主が戻って来て千年間統治される時のために備えるという宣教師のメッセージに、数家族のうちの17人がこたえ、真夜中にバプテスマを受けました。

その後数日のうちに、カートランド周辺の50人以上の人々が群れを成して宣教師の集会にやって来て、教会に加わりたいと

申し出ました。³その多くはモーリー家の農場で生活していた人々で、中には、西アフリカ出身の母親を持つピートという解放奴隷もいました。⁴あれほどあっさりと宣教師を拒絶したアビゲイル・ダニエルズでさえも、夫とともに彼らの教えを聞いた後、そのメッセージを受け入れたのです。⁵

オハイオ州で、特にシドニーに従う人々の中で教会が発展し始めると、オリバーはその良い知らせをジョセフに報告しました。日に日に、さらに多くの人々が、メッセージを聞くことを望みました。オリバーはこう書き送っています。「本が欲しいという要望が非常に多くあります。500冊ほど送ってほしいのですが。」⁶

オハイオでの成功を喜びながらも、オリバーは主が自分たちを、アメリカ合衆国の西の境の向こうに住む、アメリカンインディアンに教えを説く業に召しておられることを知っていました。オリバーとほかの宣教師たちは間もなく、フレデリック・ウィリアムズという新しい改宗者を伴ってカートランドを發ちます。フレデリックは43歳の医師で、一行の中で最年長でした。⁷

1830年の晩秋、西部に向かった一行は、雪に埋もれた平地を重い足取りで進み、なだらかな丘を幾つも越えて行きました。ワイアンドットインディアンに教えを説くため、オハイオ州中部に短期間滞在し、その後、国内最西端の州、すなわちミズーリ州行ききの蒸気船への乗船を予約しました。

宣教師たちは着実に水路を進んで行きましたが、やがて氷に行く手を阻まれます。めげることなく船を下りると、凍てついた川岸に沿って、数百キロの道のりを歩きました。そのころには雪が深くなり、広大な大平原の旅をさらに困難なものとしていました。時には、地表を吹き渡る痛烈な風にさらされて、顔の皮膚がはぎとられるかのような感覚に陥ることもありました。⁸

宣教師たちが西に向かう中、シドニーは自分の教団の信徒の一人で、37歳の帽子職人の友人、エドワード・パートリッジとともに東へ旅していました。二人はジョセフに会うため、カートランドから500キロ近く離れたマンチェスターを目指していたのです。シドニーはすでに教会に加入していましたが、エドワードは、まず預言者についてよく知ってから、自分も同じように教会に入るかどうかを決めようと考えていました。⁹

二人が到着するころ、友人たちが一足先にジョセフの両親の農場を訪れていましたが、スミス一家はすでにフェイエット近辺に移っていました。しかし、スミス一家の引っ越し先までさらに42キロほどの道のりを歩く前に、エドワードは彼らの土地を見てみたくなりました。スミス家の人々の仕事ぶりを見れば、彼らの人となりについて何か分かるのではないかと考えたのです。エドワードとシドニーは、スミス家の手入れの行き届いた果樹園と、住まいや離れ、彼らが築いた低い石垣を見ました。そのどれもが、スミス家の人々が几帳面かつ勤勉であることを物語っていました。¹⁰

エドワードとシドニーは道路に引き返し、一日中歩き通して、夕方にはスミス家にたどり着きました。彼らが到着すると、教会の集会が行われているところでした。二人はそっと家の中に入り、ジョセフの説教に聴き入る小さな聴衆に加わりました。預言者は話し終えると、部屋にいるだけでも、御霊を感じた人は立て話をするように勧めました。

エドワードは立ち上がると、聖徒たちに向かって、旅の道すがら見てきたことや感じたことについて話し、こう言います。「ジョセフ兄弟、わたしはバプテスマを受ける用意ができています。バプテスマを施してくださいませんか。」

ジョセフは言いました。「あなたは長い道のりを旅してきました。少し休んで元気を取り戻したうえで、明日の朝バプテスマを受けたらいかがでしょうか。」

「それで結構です」とエドワードは答えました。「わたしはいつでも用意ができていますから。」¹¹

バプテスマを施す前、ジョセフは啓示を受けます。キリストが御自身の神殿に来られる日に備えて福音を宣べ伝えるため、エドワードを召すようにという啓示でした。¹²エドワードはバプテスマを受けると、両親や親戚に福音を伝えるため、すぐさま出立しました。¹³一方シドニーは、フェイエットにとどまってジョセフの筆記者として働き、間もなく新たな事業においてジョセフを助けるようになります。¹⁴

その数か月前のこと、ジョセフとオリバーは聖書の靈感訳に取りかかっていました。彼らはモルモン書を読んでからというもの、旧約聖書および新約聖書の貴い真理が、時とともにねじ曲げられ、抜き取られていったことを知ります。オリバーがグランディンの書店で購入した聖書を用いて創世記を研究し始めた二人は、不完全、あるいは不明瞭に思える聖句に関して靈感を求めて祈りました。¹⁵

程なくして主は、はじめモーセに与えられたものの、旧約聖書から失われた示現についてジョセフに明らかにされました。新たに回復された聖句で、神はモーセに「無数の世界」を見せられたこと、またすべてのものを、物質的に造る前に霊的に創造したことを告げられました。そして、この栄光に満ちた創造の目的は、男女が永遠の命を受けられるようにすることだと教えたのです。¹⁶

オリバーが西部への伝道に旅立った後、ジョセフはシドニーが到着するまで、ジョン・ホイットマーとエマを筆記者として翻訳を続けました。主が預言者エノクの歴史書について、さらに多くのことを明らかにされるようになったのは、ごく最近のことでした。エノクの生涯と教導の業については、創世記でほんの少し触れられているにすぎません。¹⁷

シドニーがジョセフの口述を記録する過程で、彼らは、エノクが従順かつ祝福された人々を集めた預言者であったことを知りました。救い主がアメリカ大陸を訪れられた後、義にかなった社会を築いたニーファイ人とレーマン人のように、エノクの民は互いに平和に暮らす術を学んでいました。聖文にはこう記されています。「彼ら〔は〕心を一つにし、思いを一つにし、義のうちに住んだ……。そして、彼らの中に貧しい者はいなかった。」¹⁸

エノクの指導の下、民は「シオン」と呼ばれる聖なる町を築きましたが、その町は最終的に神のみもとに受け入れられます。地を見下ろしながら、エノクは神と語り、神は御自分の子供たちの罪悪と苦しみを見て泣かれました。地から真理がもたらされ、神の民が義人のためにもう一つのシオンの町を築く日が来ると、神はエノクに言われました。¹⁹

この啓示について思い巡らせながら、シドニーとジョセフは、主が地上に再びシオンを築かれる日がすでに来ていることを悟ります。エノクの民のように、聖徒たちは心と思いを一つにし、主がその場所を示されたらすぐにも聖なる町を築き、神殿を建てることができるように、自らを備える必要があったのです。

12月末、主はジョセフとシドニーに翻訳の業を休止するよう指示され、こう宣言されました。「さらにまた、一つの戒めをわたしは教会員に与える。……〔それは、〕彼らがオハイオに集まることで

ある。」彼らは新たに改宗した人々とともにカートランド地域に集まり、西部から宣教師たちが戻るのを待つことになりました。

主はこう言われました。「ここに知恵がある。わたしが来るまで、各人に自ら選ばせなさい。」²⁰

オハイオに移るよにとの呼びかけは、神の民を集めるという古代の預言の成就に、聖徒たちを近づけるもののように思われました。主が御自分の聖約の民を集めて末日の危難から守られることについては、聖書でもモルモン書でも約束されています。近ごろの啓示において、主はジョセフに、この集合が間もなく始まることを告げられました。²¹

それでも、この呼びかけが驚くべきものであったことに変わりはありません。新年早々ホイットマー家で開かれた教会の第3回目の大会では、多くの聖徒が心を悩ませました。彼らの心には、この指示に関する疑問が渦巻いていたのです。²²オハイオは、人があまり居住していない、何キロも離れた所にある土地です。大半の教会員は、オハイオについてほとんど何も知りませんでした。

そのうえ聖徒の多くは、ニューヨーク州の所有地を耕し、実り豊かな農場とするため、懸命に働いてきたのです。一団でオハイオに移るとなると、そういった土地を直ちに売り払わなければならず、恐らく金銭上の損失は免れないことでしょう。とりわけ、オハイオの土地が、ニューヨークにある自分の土地よりも肥沃ではなかった場合、経済的に破綻する人さえ出てくるかもしれません。

集合についての不安を和らげようと、ジョセフは聖徒たちと集会を持ち、そこで一つの啓示を受けます。²³主は次のように宣言されました。「わたしはさらに大いなる富、……一つの約束の地……をあなたがたに差し出して授けよう。あなたがたが一心に求めるならば、わたしはあなたがたの受け継ぎの地としてそれ

を与えよう。」集合することによって、聖徒たちは義にかなった民として栄え、悪から守られるのです。

主はまた、オハイオに集まる聖徒に向けてさらに二つの祝福を約束し、こう言われました。「わたしはそこであなたがたにわたしの律法を与えよう。あなたがたはそこで、高い所から力を授けられるであろう。」²⁴

この啓示は、部屋にいたほとんどの聖徒の心を落ち着かせましたが、少数ながら、啓示が神から与えられたことを信じない人もいました。信じて従うことを選んだ人々の中には、ジョセフの家族とホイットマー家、ナイト家の人々がいました。²⁵

教会のコールズビル支部の長であるニューエル・ナイトは、家に戻り、売ることのできる物を売却し始めました。ニューエルはまた、教会員を訪問することに時間の多くを費やしました。エノクの民の模範に倣い、ニューエル・ナイトとコールズビルのそのほかの聖徒たちは、貧しい人々が春までに旅立てるよう、力を合わせて働き、犠牲を払いました。²⁶

一方ジョセフは、早急にカートランドに戻り、新しい改宗者たちに会う必要があると感じていました。エマは双子を身ごもっており、長いつわりから回復しつつある時期であったにもかかわらず、やっとの思いでそりの座席によじ登ると、ジョセフに同行すると言い張りました。²⁷

オハイオに戻ってみると、教会は混乱の真っ只中でした。宣教師たちが西部へ旅立った後、カートランドにおける改宗者の数は増え続けていましたが、聖徒たちの多くは、この新たな信仰の実践方法をよく理解していなかったのです。たいていの人は、この教会に改宗する前に行っていたように、導きを求めて新約聖書を調べましたが、預言者からの導きがなかったために、新約聖書

の解釈は、カートランドの聖徒の数と同じくらいに千差万別だったのです。²⁸

エリザバス・アン・ホイットニーは、初期のキリスト教会に見られた霊的な賜物を経験したいと切望していた者の一人でした。宣教師がカートランドにやって来る前、アンと夫のニューエルは、聖霊の賜物を受ける方法を知るために、幾度となく祈っていました。

ある晩、神の導きを求めて祈っていると、自分たちの家の上に雲がとどまるのを示現で見ました。彼らは御霊に満たされ、家は雲に包まれて見えなくなりました。そして、天からの声が次のように聞こえたのです。「主の言葉を受ける備えをしなさい。それは間もなく与えられます。」²⁹

アンが育ったのは宗教を持たない家庭であり、両親はどちらも教会に行っていませんでした。父親は聖職者を嫌っており、母親は家事や、アンの下のきょうだいたちの世話に追われて常に忙しくしていました。父も母も、神を求めるよりは人生を楽しむようにとアンに勧めていたのです。³⁰

しかし、アンは幼いころから霊的な事柄に引きつけられており、ニューエルと結婚した折には、教会を見つけたいと話していました。アンの強い希望により、夫妻はシドニー・リグドンの率いる教団に加わります。教えられている原則が、聖文にある原則に最も近いと思ったからです。その後、パーリー・プラットと同僚たちが回復された福音を説くのを初めて耳にしたとき、彼らの教えが真実であることがアンには分かりました。³¹

アンは教会に加わり、その新たな信仰に喜びを感じますが、人々がそれぞれ異なった方法で信仰を実践していることに困惑しました。アンの友人であるアイザック・モーリーとルーシー・モーリー夫妻は、相変わらず人々に対し、自分たちの農場で暮らし、財産を共有するよう勧めていました。³²カートランドの東に広

大な農場を持つリーマン・コプリーは、近くにあるシェーカー教徒の宗教共同体で暮らしていたころの教えを、まだ幾らか引きずっていました。³³

カートランドの聖徒たちの中には、教えを極端に解釈し、自分たちが御霊の賜物と称するものに興じる者もいました。言葉では説明できない示現を見たと言主張する者がいれば、聖霊の力によって自分の体が地面の上を滑るように移動したと信じる者もいました。³⁴ある男性は、御霊を感じたかと思うと、部屋中を飛び跳ねたり、天井の梁にぶら下がったりしました。また、マントビヒのような動きをする者もいました。³⁵

こうした振る舞いを見た改宗者の中には、失望し、入ったばかりの教会を去る人もいました。アンとニューエルは絶え間なく祈り続け、主が進むべき道を示してくださいと信じていました。³⁶

1831年2月4日、ニューエルがカートランドで経営していた店に、1台のそりが到着しました。25歳の若者が降り立ち、はずむような足取りで店に入り、カウンター越しに手を伸ばしたかと思うと、「ニューエル・K・ホイットニーですね!」と叫ぶように言いました。「あなたに違いありません。」

ニューエルはその男性と握手をすると、「あなたを存じ上げません」と言いました。「あなたが呼んでくださったように、わたしはあなたを名前でお呼びできないのですが。」

「わたしは預言者ジョセフです。」その男性は大きな声で言いました。「あなたはここで、わたしのために祈っておられましたね。わたしに何をお望みですか。」³⁷



わたしの律法を受けるであろう

アン・ホイトニーとニューエル・ホイトニー夫妻は、ジョセフとエマを喜んでカートランドに迎え入れました。ホイトニー家には3人の幼い子供がおり、おばが同居していたにもかかわらず、スミス一家が自分たちの住居を見つけるまで、家に滞在するよう勧めてくれたのです。エマが臨月に近づいていたため、エマとジョセフが1階の寝室を使えるようにと、アンとニューエルは2階の部屋に移りました。¹

ホイトニー家に落ち着いてから、ジョセフは新しい改宗者たちを訪問し始めました。カートランドは、ホイトニーの店の南にある丘に、家々や店が立ち並ぶ小さな町です。町に沿って流れる小川が工場に動力を提供し、北上する大きな川に流れ込んでいました。およそ1,000人が暮らす町です。²

教会員を訪れてみて、ジョセフは彼らが御霊の賜物を切に求めていること、また新約聖書時代の聖徒たちを規範とした生活を送りたいと心から願っていることを知ります。³ジョセフ自身、御霊の賜物を大切に思っており、聖徒たちには回復された教会において果たすべき役割があることを知っていましたが、カート

ランドの聖徒の中に、御霊の賜物を過剰に追い求める人々がいることを懸念していました。

なすべき大変な務めがあることを、ジョセフは見て取ります。カートランドの聖徒たちは、教会の建物に収容できる人数の2倍はいましたが、主からさらに指示を受ける必要があることは明らかでした。

1,300 キロ近く西に行った所では、オリバーをはじめとする宣教師たちが、アメリカ合衆国の西の果て、ミズーリ州ジャクソン郡のインディペンデンスという小さな町に到着しました。一行は宿と生計を立てるための仕事を見つけると、町の数キロ西の地域に住むデラウェアインディアンを訪れる計画を立てました。⁴

デラウェア族は、アメリカ合衆国政府のインディアン移住政策によって強制的に土地を立ち退かされた後、この地域に移住してきたばかりでした。酋長しゅうちょうのキクサウェヌンドは老人でしたが、入植者や合衆国陸軍によって西部に追いやられる中、25年以上にわたって部族を一つにまとめるために尽力してきた人物です。⁵

1831年1月の寒い日、オリバーとパーリーは、キクサウェヌンドに会いに出かけました。キクサウェヌンドは、デラウェア定住地の大きな山小屋の中央に据えられた囲炉裏の横に座っていました。酋長は心のこもった握手を二人と交わすと、毛布の上に座るように身振り以示しました。次に、酋長の妻たちが、蒸した豆とトウモロコシが山のように盛られた鍋を宣教師たちの前に置いたので、二人は木のスプーンでそれを食べました。

オリバーとパーリーは、通訳の助けを借りながら、キクサウェヌンドにモルモン書について話し、酋長が統率する議会でそのメッセージを伝える機会を与えてくれるようお願いしました。通常

であれば、キクサウェヌンドは宣教師が自分の部族の人々に話すことに反対するのですが、この度はそれについて考えてから、近日中に回答すると話してくれたのです。

翌朝宣教師たちが再び山小屋を訪れると、少しの話し合いの後、酋長は議会の面々を一堂に呼び集め、宣教師に話をしよう促しました。

オリバーは礼を言うと、目の前の聴衆の顔を見詰めて言いました。「わたしたちは荒野を旅し、深く広大な川を渡り、深い雪をかき分けてやって来ました。それは、わたしたちが耳にし、心打たれた偉大な知識を皆さんにお伝えするためです。」

そうしてオリバーは、アメリカインディアンの先祖の歴史であるモルモン書を紹介したのです。「この本は金の版に書かれています。数々の時代、幾つもの世代にわたって父から息子へと受け継がれてきました」とオリバーは説明します。さらに、その記録が出版され、インディアンを含むすべての人々に行き渡るべく、ジョセフが版を見つけて翻訳を行ううえで、神がどのように助けてくださったかを話しました。

話し終わると、オリバーはキクサウェヌンドにモルモン書を渡し、彼と議会の面々がそれを調べる間待ちました。年老いた酋長はこう言いました。「白人の友が大変な苦勞をして遠くからはるばるやって来て、我々にこの良き知らせを伝えてくれたことに、ほんとうに感謝します。特に、我々の先祖について書かれた本に関する新しい知らせに感謝します。」

しかし、厳しい冬の天候が、部族の者にとって非常に辛いものであることについて、酋長は説明しました。一族の住まいは粗末なもので、家畜が次々に死んでいっています。彼らは家や垣を築き、春に向けて農地を整えなければなりません。差し当たり、宣教師を迎え入れられる状況ではなかったのです。

キクサウエヌンドはこのように約束しました。「会議場を作って皆が集まれるようになったら、我々の先祖と大霊の御心について書かれたこの本について、もっとわたしたちに読んで教えてください。」⁶

数週間後、ジョセフのもとにオリバーからの報告書が届きます。宣教師たちがキクサウエヌンドを訪問した際のことを報告した後に、オリバーは、デラウェア族がモルモン書を受け入れるかどうかは依然として不確かであることを認め、「この部族については、今後どうなるかは分かりません」と書いています。⁷

ジョセフはカートランドの教会を強めることに目を向けながらも、インディアンへの伝道については相変わらず楽観的でした。カートランドの聖徒たちと会ってから間もなく、ジョセフは彼らに向けた啓示を受けています。主は再びこう約束されました。「あなたがたは、わたしの教会を治める方法を知り、すべてのことをわたしの前に正すために、あなたがたの信仰の祈りによってわたしの律法を受けるであろう。」⁸

聖書を研究していたジョセフは、モーセが民を約束の地に導いた際、神がモーセに律法を与えられたことを知っていました。また、イエス・キリストが地上に来られ、教え導かれた間に、律法の意味を明らかにされたことも知っていました。そして今、主は再び御自分の聖約の民に、律法を示そうとしておられるのです。

新たな啓示において、主はエドワード・パートリッジをその清い心のゆえに称賛し、教会の最初のビショップとして召されました。主はビショップの務めについて詳細に述べることはせず、エドワードに、教会に全時間をささげ、主がこれから与えられる律法に従うよう聖徒を助けなければならないと語られました。⁹

1週間後の2月9日、エドワードはジョセフとそのほかの教会の長老たちとともに集会を開き、律法を受けるために祈りをささげました。長老たちがジョセフに、律法に関する一連の質問を投げかけると、主はジョセフを通してその答えを与えられました。¹⁰ 答えの中には、よく知られた真理を繰り返し教え、十戒の原則とイエスの教えを確認するものもあれば、どのように戒めを守ればよいか、また戒めに背いた者たちをどのように助ければよいかについて、聖徒たちに新しい洞察を与えるものもありました。¹¹

主はまた、聖徒がエノクの民のようになるうえで助けとなる戒めも与えられました。モーリーの農場の人々がしていたように財産を共有するのではなく、すべての土地や富を、神から託された神聖な管理の職の下にあると見なし、家族を養い、人々を貧困から救い出し、またシオンを築くことができるように神から与えられた物であると考えたのです。

この律法に従うことを選んだ聖徒は、法的な証書をビショップに差し出すことによって、自分の財産を教会に奉獻しなければなりません。その後ビショップは、シオンにおける財産として、それぞれの家族の必要に応じて土地や物品を分配します。必要分を得た聖徒は神の管理人として行動しなければならず、受け取った土地や資源を用いたうえで使わなかった残余があれば、困っている人を援助するため、またシオンと神殿を築くために返すよう求められたのです。¹²

主は聖徒たちに、この律法に従うよう、また引き続き真理を求めように強く勧め、こう約束されました。「あなたは求めれば、啓示の上に啓示を、知識の上に知識を受けて、数々の奥義と平和をもたらす事柄、すなわち喜びをもたらす永遠の命をもたらすものを知ることができるようになるであろう。」¹³

ジョセフはそのほかにも、教会に秩序をもたらす啓示を受けました。一部の聖徒たちの極端な行動に対し、主は、地の方々に

偽りの霊がいて人々を欺き、自分は聖霊によって大胆な行動を取るよう促されていると思い込ませている、と警告されました。御霊は人を不安に陥れたり、混乱させたりはせず、むしろ人を高め、教化するものであると主は教えられました。

「人を教化しないものは、神から出では〔いない〕」と主は宣言しておられます。¹⁴

主がカートランドで御自身の律法を明らかにされてから程なくして、ニューヨーク州の聖徒たちはオハイオに集合するための最終的な準備を整えます。彼らは多大な損失を承知で土地と財産を売り払い、持ち物をまとめて荷馬車に積み込み、家族や友人に別れを告げたのです。

この移動の準備をする聖徒の中に、エリザベス・マーシュとトーマス・マーシュがいました。トーマスがモルモン書の数ページを手に入れてボストンの自宅に持ち帰った後、二人はジョセフと教会の近くに住もうと、ニューヨーク州に移っていたのです。オハイオに集合するよという呼びかけがなされたのは、そのわずか数か月後のことでした。そこで、エリザベスとトーマスはもう一度荷物をまとめ、主が命じられるときにはいつでも聖徒とともに集合し、シオンを築くという決意を固めたのです。

エリザベスのこの確固たる信念は、改宗の経緯から生じたものでした。彼女はモルモン書が神の言葉であると信じていたものの、すぐにはバプテスマを受けませんでした。しかし、パルマイラで男の子を出産した後、この福音が真実であるという証を求めて主に尋ねたのです。程なくして、求めていた証を受けた彼女は教会に加わりました。もはや自分が知っていることを否定できず、御業を助けることにしたのです。

「わたしの体と心の両方に、大きな変化が起こったのです。」エリザベスはオハイオに向けて出発する直前、トーマスの姉にこう書き送っています。「これまで受けてきたものへの感謝と、これからさらに多くを得たいという望みを感じています。」

同じ手紙で、トーマスは集合に関する知らせを伝えていきます。「主は悔い改めるよう、そして直ちにオハイオに集合するよう、すべての人に呼びかけておられます。」聖徒たちがオハイオに行こうとしているのは、シオンを築くためなのか、それとも将来のさらなる移動に向けての準備なのか、トーマスには分かりませんでした。しかし、そんなことはどうでもよかったのです。たとえミズーリであろうと、あるいは国の西の果てを越えて1,600キロ先を行ったロッキー山脈であろうと、主が集合するよう命じられたのであれば、トーマスには行く覚悟ができていました。

「何をすべきかは分かりません。啓示されたことを行うだけです」と姉への手紙で説明しています。「しかし、これだけは知っています。それは、約束の地に町が築かれるということです。」¹⁵

主の律法が啓示され、ニューヨーク州の聖徒たちがオハイオに集合し始めると、ジョセフとシドニーは聖書の靈感訳を再開します。¹⁶その内容は、エノクの話から、多くの国民の父となるという約束を主から受けた族長、アブラハムの話に移りました。¹⁷

主は聖書の記述に大きな変更を加えるよう指示されることはありませんでしたが、ジョセフはアブラハムを読み、この族長の生涯について深く思い巡らせます。¹⁸なぜ主は、アブラハムや旧約聖書のそのほかの族長たちが複数の妻をめぐっていることに対し、それを罪とされなかったのでしょうか。多妻結婚は、聖書を読むアメリカ国民が忌み嫌っている行為です。

モルモン書には、一つの答えが提示されています。ニーファイの弟ヤコブの時代、主はニーファイ人の男性に、一人の妻しか持ってはならないと命じられました。その一方で、状況に応じて、義にかなった子供たちを養育するために必要とされる場合には、別の命令が下されることもある、と宣言しておられます。¹⁹

ジョセフがこの件について祈ると、主は時として、御自分の民に多妻結婚の実施を命じられることがあると明らかにされました。これが再び実施される時はまだ来ていないが、一部の聖徒にそれをお命じになる日が来ると、主は言われたのです。²⁰

聖徒たちの最初の一団がニューヨーク州を発ったとき、地面はまだ冷たく凍てついていました。ルーシー・スミスとおよそ 80 人の聖徒を含む第二団は、少し遅れて出発しました。彼らは西方の大きな湖に通じる運河に行く船を予約していました。その湖で、一行は蒸気船に乗り換え、カートランド近辺の港に向かう予定でした。その港からは、480 キロ近くの旅の最後の行程として、陸路を進むことになります。²¹

旅は順調に進んでいましたが、湖に向かう途中、運河の水門が壊れていたため、ルーシーの一団は沿岸に降ろされてしまいました。旅に遅れが出ることは考慮していなかったため、多くの人は十分な食料を持ってきていませんでした。空腹と集合に関する不安から、不平を言う者も出てきました。

「辛抱しましょう。不平を言うのをやめるのです」とルーシーは言い放ちます。「わたしは、主の御手がわたしたちのうえにあることに、何の疑いも抱いていません。」

翌朝、職人たちが来て水門を直し、聖徒たちは旅を再開することができました。数日後、一行は湖に到着しましたが、困ったことに、港が厚い氷に閉ざされ、それ以上進めません。²²

出立を待つ間、町で家を借りたいと思いましたが、見つかったのは大きな相部屋一つだけでした。幸いにも、ルーシーは自分の兄を知っているという蒸気船の船長に出会い、氷が割けて通り道ができるのを待つ間、自分の一団を彼の船に乗せてもらえるように手配します。²³

船上の聖徒たちは、気落ちしているように見えました。多くの人が空腹で、だれもが濡れて凍えていました。先の見通しも立たず、人々は互いに言い争うようになります。²⁴口論は次第に激しくなり、衆目の的となりました。聖徒たちが見世物になることを恐れたルーシーは、彼らに立ち向かいます。

「あなたがたの信仰はどこへ行ってしまったのですか。神への信頼は、一体どこにありますか。氷が割れて自由を得られるよう、皆が揃って声を上げて天に願うなら、主が生きておられるように確かに、そのようになるでしょう。」

すると、ルーシーの耳に雷のとどろきのような音が響くと同時に、港の氷が大きく割け、蒸気船が通り抜けられるほどのすき間ができました。船長が水夫たちに持ち場につくよう命じると、彼らは船を走らせて氷の細い割れ目を通り抜け、船体のすぐ両脇に氷がそそり立つ、危険な水路を進んで行ったのです。²⁵

驚きと同時に感謝に満たされた聖徒たちは、甲板の上で一丸となって祈りをささげました。²⁶

母親とニューヨークの聖徒たちが西へと旅をしているころ、ジョセフはエマとともに、モーリー家の農場にある小屋に向かっていました。ジョセフの指導と新たに示された律法のおかげで、オハイオの聖徒たちの間には、さらなる秩序と理解、調和がもたらされていました。今や多くの長老とその家族が多大な犠牲を払い、近隣の町や村に福音を広めています。

ところがミズーリでは、宣教師たちの努力がそれほど功を奏していませんでした。オリバーはしばらくの間、キクサウェヌンドとその部族への伝道が進展しつつあると確信しており、ジョセフにこう書き送っています。「酋長は、モルモン書の言葉をすべて信じてと話しています。それに、この部族には信じる者がほかにも大勢います。」²⁷ところが政府の役人から、許可なくインディアンに教えを説く宣教師は逮捕すると脅されてからというもの、オリバーと宣教師たちは伝道活動を中止せざるを得なくなりました。²⁸

オリバーは、福音のメッセージをナバホという別のインディアン部族に伝えることも考えましたが、ナバホ族はさらに1,600キロ西に住んでおり、それほど遠くへ旅する許可は得ていないと感じたのです。その代わりに、オリバーは政府から宣教の許可を得るためにパーリーを東部に送り返し、その間、自分とほかの宣教師がインディペンデンスの定住者の改宗に力を入れることにしました。²⁹

一方、ジョセフとエマは別の不幸に見舞われていました。4月の最後の日、エマはモーリー家の女性たちの助けを借りて男女の双子を出産しますが、この双子の前に生まれた兄と同じように、この二人も体が弱く、産まれてからわずか数時間のうちに亡くなってしまったのです。³⁰

同じ日に、改宗したばかりのジュリア・マードックが双子を出産、その後間もなくして亡くなりました。その訃報を聞いたジョセフはジュリアの夫ジョンに伝言を送り、自分とエマがその双子を育てたいと希望していることを知らせました。妻を亡くして悲しみに打ちひしがれ、生まれたばかりの赤ん坊の面倒を自分一人で見ることのできないジョンは、その申し出を受け入れました。³¹

ジョセフとエマは、心から喜んで二人の赤ん坊を家に迎え入れます。そうして、ジョセフの母親ルーシーはニューヨーク州か

わたしの律法を受けるであらう

ら無事に到着すると、生まれたばかりの孫たちを、その腕に抱く
ことができたのでした。³²



多くの艱難の後に

1831年の春、7歳のエミリー・パートリッジは、カートランドの北東部の町で、両親のエドワードとリディア、4人の姉妹とともに暮らしていました。家はしっかりとした造りの木造家屋で、1階に大部屋一つと二つの寝室、2階には寝室が一つともう一つの大部屋、衣装部屋がありました。地下には台所と、エミリーにとっては暗くて怖い、野菜の貯蔵室があります。

外にはパートリッジ家の広い庭があり、エミリーが遊んだり探検したりするのに格好の場所でした。花壇や果物の木、納屋、さらには空き地があり、エミリーの父親は、いつかそこにもっと立派な家を建てようと計画していました。父親の帽子店もすぐ近くにありますが。店のカウンター下で、エミリーはいつも、きれいな色のリボンやそのほかの宝物を見つけることができました。建物には道具や機械が所狭しと置かれており、父親はそれを使って布や毛皮を染め、お客様の帽子に作り上げていきます。¹

エミリーの父親は、もはや帽子作りにそれほど多くの時間を費やしていませんでした。今や父は、教会のビショップなので

す。聖徒たちがニューヨーク州からオハイオに集まって来るのに伴い、父は彼らが住まいに落ち着き、仕事を見つけるのを助ける必要がありました。新たに到着した人々の中には、ナイト一家や、コールズビルの教会支部の人々もいました。カートランドの北東 32 キロほどの所にはリーマン・コプリーの大きな農場があり、リーマンがその農場を主にささげることに同意していると知っていたエミリーの父親は、コールズビルの聖徒たちをそこに送って定住させました。²

オハイオにやって来たニューヨーク州の聖徒たちの中には、はしかにかかっている者が幾人かおり、そうした人々がパートリッジ家に滞在することが多かったため、エミリーと姉妹たちが高熱と湿疹に見舞われるのにさほど時間はかかりませんでした。しばらくしてエミリーは回復しましたが、11歳の姉エライザは肺炎を引き起こしてしまいます。急激に高熱を発し、呼吸も荒く苦しそうな娘の様子を、両親はなす術もなく見守りました。³

家族がエライザの看病をしている間、父親はモーリーの農場の近くにある校舎で開かれた、教会の重要な大会に出席していました。数日間家を空けていた父親は、帰って来るなり、また行かなければならないと家族に告げます。⁴ジョセフは、次の大会がミズーリ州で開かれるという啓示を受けていました。エミリーの父親を含む何人かの教会指導者は、できるかぎり早くミズーリに行くように命じられていたのです。⁵

多くの人が旅の計画を立て始めました。その啓示において、主はミズーリを聖徒たちの受け継ぎの地と呼び、聖書に記されているように、「乳と蜜の流れる」約束の地と称されました。そこは、聖徒たちがシオンを建設することになっている地でした。⁶

エミリーの父親は、家族を置いて出発することに気が進みませんでした。エライザは依然として容体が悪く、父親がいない間に死んでしまうかもしれないのです。⁷エミリーには、母親も同様

に不安を感じていることが分かりました。リディア・パートリッジはシオンの大義のために献身しようと決意していましたが、自分一人で子供の世話と家の切り盛りをすることには慣れていませんでした。リディアは、これが試練の始まりにすぎないことを察していたようです。⁸

ポリー・ナイトは、コールズビルの聖徒たちとともにリーマン・コプリーの土地に落ち着いたころ、容体が思わしくありませんでした。その農場には肥沃な土地が280ヘクタール以上もあり、多数の家族が家や納屋、店を建てるのに十分な広さがありました。⁹ナイト家はその地で、もう一度平穩のうちに、新たな信仰を実践し始めることができましたが、ポリーはもう長くもたないだろうと多くの人が心配していました。

ポリーの夫と息子は急いで仕事に取りかかり、柵を作り、畑の植え付けをして土壤を改良しました。ジョセフ、またビショップであるパートリッジは、主の律法に従って財産を奉獻するようコールズビルの聖徒たちに勧告していました。¹⁰

ところが、いざ定住が始まった後になって、教会から心が離れていったリーマンは、自分の土地から出て行くようにとコールズビルの聖徒たちに告げたのです。¹¹行く当てもなく追い出された聖徒たちは、主の指示を求めてほしいとジョセフに訴えます。

すると主は、「あなたがたは西の地域へ、ミズーリの地へ……旅をしなければならない」と告げられました。¹²

コールズビルの聖徒たちはその時点で、シオンがオハイオではなくミズーリに建てられることを知っていたため、自分たちがその地に定住する最初の教会員の中に数えられることになるかと悟ります。彼らは旅の用意を始め、この啓示から約2週間後、ポ

リーと支部の残りの会員はカートランドの地を発ち、西に向かう川船に乗り込んだのでした。¹³

ポリーは家族とともに川を下りました。彼女の最大の望みは、死ぬ前にシオンの地に立つことだったのです。ポリーは55歳で、その健康状態は悪化しつつありました。彼女がミズーリ到着前に亡くなった場合に備え、息子のニューエルが船を降り、棺を作るための木材を用意していたほどでした。

ところがポリーは、シオン以外の地に骨を埋めるつもりはないと、心に決めていたのです。¹⁴

コールズビルの聖徒たちが出発して間もなく、預言者ジョセフとシドニー、エドワード・パートリッジは、数人の長老たちとともにミズーリに向けて出発しました。彼らはほとんど陸路を進み、道すがら福音を宣べ伝え、シオンへの希望について語りました。¹⁵

ジョセフは、インディペンデンスにおける教会について楽観的に語っていました。カートランドで行ったように、オリバーと宣教師たちがインディペンデンスでも堅固な支部を築き上げているはずだと、何人かの長老に話していたのです。長老の中には、これを預言と受けとめる人もいました。

ジャクソン郡に近づくにつれて、なだらかな起伏が広がる周囲の平原に、彼らは感嘆します。聖徒たちが縦横無尽に広がって暮らせるほど広大な土地のあるミズーリは、シオンにとって理想的な地のように見えました。それに、大きな川とインディアンに住む地に隣接しているインディペンデンスは、主の聖約の民が集まる場所として最適な地に思われました。¹⁶

ところが、実際に町に着いてみると、長老たちが感銘を受けるようなものは何一つ見当たりません。ジョセフが、ある女性のまひした腕を癒すのを見て改宗した元牧師のエズラ・ブースは、

この地域を荒涼とした未開地のようだと思います。裁判所が一つと店が数軒、それに何棟かの丸太作りの家があるだけで、ほかにはほとんど何もなかったのです。宣教師がその地域でバプテスマを施すことができたのはわずかな人数にすぎず、ジョセフが期待していたほど堅固な支部には成長していませんでした。エズラをはじめ、何人かはその判断が誤っていたと感じ、ジョセフの預言者としての賜物に疑問を抱き始めます。¹⁷

ジョセフもまた落胆していました。フェイエットやカートランドも小さな村でしたが、インディペンデンスは単なる僻地の交易所にすぎなかったのです。西に向かう道の出発点となる町だったので、農夫や商売人に加え、毛皮目的の狩猟者や、牛や馬に引かせて荷物を運ぶ御者たちが大勢集まって来ていました。ジョセフはそれまでに、こうした職業の人々を大勢見知っていましたが、インディペンデンスにいる男たちはとりわけ、神を信じない荒くれ者のように見えました。しかも、その町に駐留する政府の役人は宣教師を信用しておらず、できるものならインディアンへの伝道を、不可能とまでは言わなくとも、困難なものにしようと企んでいるようでした。¹⁸

落胆したジョセフは、自身の懸念について主に訴え、こう問いかけます。「荒れ野はいつ、ばらのように花咲くのでしょうか。シオンはいつ、その栄光のうちに築き上げられ、またあなたの神殿はどこに立つのでしょうか。」¹⁹

到着から6日がたった7月20日、ジョセフの祈りはこたえられます。「ここは、わたしが聖徒の集合のために指定し、聖別した地である」と、主はジョセフに告げられました。

ほかの地を探する必要は一切ないのです。「ここは約束の地であり、シオンの町のための場所である」と主が宣言されたのです。聖徒たちは可能なかぎりの土地を購入し、家を建て、畑の植

え付けをしなければなりませんでした。そして、裁判所の西にある小高い丘には、神殿を建てることになっていました。²⁰

主がシオンに関する御心を明らかにされた後にも、一部の聖徒は、インディペンデンスに関して懐疑的な思いを拭い去れないでいました。エズラ・ブースと同様、エドワードはその地域において、教会の大きな支部を目にすることを期待していました。ところがエドワードと聖徒たちは、自分たちに警戒心を抱き、回復された福音にはまったく関心を示さない人々のいる町に、シオンを建設しなければならなかったのです。

教会のピショップであるエドワードは、シオンの基を据える責任の大部分が、自分の肩にかかっていることも理解していました。聖徒たちに向けて約束の地を用意するために、エドワードはできるかぎり多くの土地を購入し、シオンに来て奉獻の律法に従う人々に、受け継ぎの地を分配しなければならなかったのです。²¹そのためにはミズーリにとどまり、また家族をシオンに永住させる必要がありました。

エドワードはシオンの建設を助けたいと思いましたが、啓示と新しい責任、その地域に関するあまりにも多くの事柄が、彼の心を悩ませることになります。ある日、インディペンデンス内外の土地を視察した時のこと、エドワードはジョセフに、ここは近隣の土地ほど優れた地ではないことを指摘します。預言者に対して不満を感じており、どうすれば聖徒たちがその地にシオンを築き上げられるのか、分からなかったのです。

「わたしには分かります」とジョセフは証します。「きっと、そのようになります。」²²

幾日かして、主は再びジョセフとエドワード、そのほかの教会の長老たちに主の言葉を明らかにし、こう宣言されました。「あ

あなたがたは、この後に起こることに關するあなたがたの神の計画と、多くの艱難の後に來る榮光を、今は肉体の目で見ることができない。多くの艱難の後に祝福は來る。」

この啓示において、主はエドワードの不信仰を戒められ、ビショップに対してこう語られました。「もしも彼が自分の罪……を悔い改めなければ、倒れることのないように彼に気をつけさせなさい。見よ、彼の使命はすでに与えられており、再びそれが与えられることはない。」²³

この警告を受け、エドワードはへりくだります。自分の心の暗さについて主に赦しを乞い、ジョセフに対し、インディペンデンスに残って聖徒のためにシオンの地を備えると告げたのです。それでも、これからなすべき途方もない務めを果たす力が、果たして自分にあるのだろうかという不安は残っていました。

妻リディアへの手紙において、こう打ち明けています。「わたしに与えられている責任を、天の御父に受け入れてもらえるほど十分に果たせるのかが不安なのです。わたしが倒れることのないよう、祈ってください。」²⁴

3週間の旅の末、ポリー・ナイトはコールズビルの聖徒たちとともにインディペンデンスに到着し、おぼつかない足取りで地面の上に立つと、シオンの地に到着したことを感謝しました。ところがポリーの体は急速に衰弱しつつあったため、その地域で改宗して間もない二人が彼女を自宅に連れて行き、少しでも良い環境で休めるようにしてくれました。

ナイト家の人々が定住する場所を探していると、片田舎に、美しく気持ちの良い土地を見つけました。農場を開拓するのに適した肥沃な土地です。彼らがよそ者であるにもかかわらず、地元の人々も友好的であるように感じられました。カートランドか

ら来た一部の長老たちと異なり、コールズビルの会員たちは、その地にシオンを築くことができると信じていました。

8月2日、ミズーリの聖徒たちは、インディペンデンスから数キロ西に集まり、シオンにおける最初の建物の建築に取りかかりました。ジョセフと、イスラエルの十二部族を象徴するコールズビル支部の12人の男性が、建物の最初の木材を据えました。次にシドニーが、聖徒の集合のためにシオンの地を奉獻しました。

翌日、インディペンデンスの裁判所の西の一区画に行くと、将来建つ神殿の隅となる場所を示すために、ジョセフは一つの石を注意深く据えました。²⁵すると、だれかが聖書を開いて詩篇の87篇を読みました。「主はヤコブのすべてのすまいにまさって、シオンのもろもろの門を愛される。神の都よ、あなたについて、もろもろの光栄ある事が語られる。」²⁶

数日後、苦しみにあって支えてくださった主をほめたたえながら、ポリーは亡くなりました。²⁷葬儀では預言者ジョセフが説教をし、夫がポリーの亡骸を、神殿用地からさほど遠くない、木のまばらな場所に埋葬しました。彼女はシオンの地に横たえられた、最初の聖徒でした。²⁸

その日、ジョセフはもう一つの啓示を受けます。「主は言う。わたしの命じたとおりに、わたしの栄光にひたすら目を向けてこの地に上って来た人々は、幸いである。生きている者は地を受け継ぎ、死ぬ者はその労苦をすべて解かれて休み、彼らの業は彼らについて行くからである。」²⁹

葬儀が終わると間もなく、エズラとそのほかの教会の長老たちは、ジョセフとオリバー、シドニーとともにカートランドへ戻る旅路に就きました。エズラはオハイオの自宅に戻ることとなり、胸をな

で下ろします。エドワードと異なり、エズラはジョセフやシオンの場所に対する思いを改めませんでした。

男たちはインディペンデンスの真北に流れる広大なミズーリ川にカヌーを漕ぎ出すと、流れを下って進みました。皆、旅の最初の日が終わるころには意気揚々としており、川辺で野生の七面鳥の夕食を楽しみました。ところが翌日は、8月の暑い気候と荒い川の流れのために、カヌーを進めるのに一苦労します。たちまち疲れが増してきた男たちは、そのうち互いを批判し始めました。³⁰

オリバーはついに、男たちに大声で言いました。「主なる神が生きておられるように、行いを改めないで災いが降りかかるぞ。」

翌日の午後はジョセフがカヌーを先導しましたが、長老たちの中にはジョセフとオリバーに不満を抱き、漕ぐことを拒否する者もいました。川の危険なカーブにさしかかると、カヌーが水の下に隠れていた木にぶつかり、転覆しそうになりました。一行の命が危ないと判断したジョセフとシドニーは、川から上がるよう長老たちに指示します。³¹

テントを張り終えると、ジョセフとオリバー、シドニーは一団に語りかけ、緊迫した雰囲気のを和らげようとしてました。苛立つ男たちは、川から上がるよう命じたジョセフとオリバーを臆病者呼ばわりし、オリバーのカヌーの漕ぎ方をあざ笑いました。また、ジョセフが指揮官のように振る舞うことを非難したのです。言い争いは夜まで続きました。

エズラはジョセフと長老たちを激しく非難し、一行とともに起きているよりはましだとばかりに、さっさと床に入ってしまった。主はなぜこのような男たちに、御自分の王国の鍵を託されるのだろうか、いぶかしく思ったのです。³²

その夏の末、リディア・パートリッジにあてて、ミズーリにいるエドワードから手紙が届きます。エドワードは自分の召しに関する不安を訴えると同時に、当初計画していたように家に帰るのではなく、ジャクソン郡にとどまって聖徒たちのために土地を購入するつもりであることを説明しました。手紙には、エドワードにあてた啓示の写しが添えられていました。シオンに定住するよう家族に指示する内容です。

リディアは驚きました。家を出るとき、エドワードは友人たちに、ミズーリでの仕事が終わり次第すぐにオハイオに戻って来ると話していたのです。今や、エドワードにはシオンで果たすべき責任があまりに多くあり、戻ってリディアと子供たちの旅の準備を手伝うことができるかどうかも分からない状態でした。それでも、ビショップリックの顧問たちの家族を含め、オハイオにいるほかの家族がその年の秋にミズーリに移る予定であることを、エドワードは把握していました。カートランドで商店を営むシドニー・ギルバートと印刷業者のウィリアム・フェルプスもまた、ミズーリに移る予定でした。二人とも、シオンの教会ために事業を確立しようとしていたのです。³³

「彼らと一緒に来るのがいちばん良いと思います」と、エドワードは書き送っています。³⁴

インディペンデンスでは贅沢品がほとんど手に入らないことが分かっていたので、エドワードはリディアに、荷造りする物と置いてくる物の詳細なリストも送り、こう警告しました。「苦勞することになります。ここではしばらくの間、君もわたしもこれまで経験したことのないような、様々な物資の不足を経験することになるでしょう。」³⁵

リディアは移住の準備を始めます。今や子供たちは旅に耐えられるほどの健康を取り戻しており、リディアはギルバート家とフェルプス家とともに旅をする支度を整えていました。リディアが家族

の不動産を売ったとき、近隣の人々は、リディアとエドワードが立派な家と繁盛している店を手放して、若き預言者に従い、荒れ野に出て行こうとしていることが信じられないと言いました。³⁶

リディアは、シオンを築くようにとの主の命令に背を向ける気など毛頭ありませんでした。申し分のない家を手放すことは試練であると分かっていたのですが、神の町の礎を据える業に加わるのは、光栄なことだと信じていたのです。³⁷



再び与えられた賜物

1831年の8月下旬、ジョセフがカートランドに戻ったころ、インディペンデンスへと同行した数人の長老たちとの緊張関係はまだ解けていませんでした。ミズーリ川の岸辺での口論の末、ジョセフと同行したほとんどの長老たちは謙遜になり、罪を告白し、赦しを乞いました。翌朝、主は彼らをお赦しになり、約束を再確認し、励まされました。¹

「あなたがたがわたしの前にへりくだったので、王国の祝福はあなたがたのものである」と語られたのです。²

そのほかの長老たちは啓示に耳を傾けず、ジョセフとの意見の相違を解決しようとしませんでした。エズラ・ブースもその一人であり、彼はカートランドに戻ると、引き続きジョセフを批判し、伝道中のジョセフの行動について不平を言いました。³ 聖徒の大会においてエズラの伝道の許可証が取り消されると、彼はジョセフを酷評する手紙を友人に書き送り、ジョセフの人格を非難しました。⁴

9月初旬、主はこれらの非難を叱責し、ジョセフの過ちを責めて不当に批判するのをやめるよう、長老たちに求められました。主は、「彼は罪を犯してきた」と告げたいので、「しかし、まことに、わたしはあなたがたに言う。主なるわたしは、わたしの前に自分の罪を告白して赦しを求める者たち…… については罪を赦す」と語られます。

主は聖徒たちに向けても、赦し合うように諭されました。「主なるわたしは、わたしが赦そうと思う者を赦す。しかし、あなたがたには、すべての人を赦すことが求められる。」

また、意見の相違により対立することなく、善を行い、シオンを築くよう聖徒たちに強く求められました。「善を行うことに疲れ果ててはならない。あなたがたは一つの大きいなる業の基を据えつつあるからである」と思い起こさせます。「主は心と進んで行く精神とを求める。そして、進んで行く従順な者は、この終わりの時にシオンの地の良いものを食べるであろう。」

語り終える前、主は数人の教会員に、財産を売り払ってミズーリへ行くよう命じられました。一方、大半の聖徒に対しては、オハイオにとどまり、引き続き福音を宣べ伝えるように、とのことでした。主はジョセフにこのように言われました。「主なるわたしは、五年の間、カートランドの地に一つのとりでを保持したいからである。」⁵

エリザベス・マーシュは、オハイオに戻ろうとしている長老たちが、シオンの地について説明するのに聞き入っていました。深い黒土や、海のごとく広大な、うねる大草原、まるで生き物のように荒れ狂う川についての話です。ミズーリの住人については良い話がほとんどなかったものの、戻っていく長老たちの多くはシオンの将来について楽観的でした。

エリザベスは、ボストンに住む義理の姉にあてた手紙の中で、約東の地について知っていることをすべて詳しく書き綴りました。「彼らは、神殿と町を建設するための石材を積み、状況が許すかぎり、忠実な人々のための受け継ぎの地を購入しました。」神殿用地そのものは裁判所の西側の森に位置しており、森は「肥えた林のように思われ」「かわいた地とは楽しみ」という聖書の預言が成就した、と書いています。⁶

夫のトーマスは依然としてミズーリで福音を宣べ伝えており、一か月ほどで帰宅するものとエリザベスは考えていました。長老たちの話では、ミズーリの大半の人々は彼らの伝えるメッセージに関心を示しませんでした。宣教師は別の場所の人々にバプテスマを施し、彼らをシオンに送っているということでした。⁷

程なくして、何百人もの聖徒たちがインディペンデンスに集まってきます。

カートランドから南西に数百キロ離れた所では、25歳のウィリアム・マクレランが、妻のシンシア・アンと赤ん坊の墓を訪れていました。ウィリアムは、シンシア・アンと結婚して2年も経たないうちに、妻と赤ん坊を亡くしました。学校の教師であったウィリアムは頭の回転が速く、筆が立ちました。ところが家族を失って以来、孤独な時を過ごし、慰めを見いだすことができずにいました。⁸

ある日、授業を教えた後のこと、ウィリアムは二人の男性がモルモン書について教えるのを耳にしました。そのうちの一人、デビッド・ホイットマーは、モルモン書の真実性を証する天使を目にしたと宣言します。また、もう一人のハービー・ホイットロックは力と明瞭さをもって教えを宣べ伝え、ウィリアムを驚かせました。

ウィリアムはさらに教えを説くよう彼らに求め、またしてもハービーの言葉に衝撃を受けました。「かつてこれほどの教えを聞いたことはなかった」とウィリアムは日記に綴っています。「神の栄光がその男を包んでいるようだった。」⁹

ジョセフ・スミスに会い、その主張について詳しく知りたいと願ったウィリアムは、デビッドとハービーに同行してインディペンデンスに向かいました。3人が到着するころ、ジョセフはすでにカートランドに戻って来ていましたが、ウィリアムはエドワード・パートリッジ、マーティン・ハリス、ハイラム・スミスに会い、彼らの証を聞きました。また、シオンに住むそのほかの男女と話をし、彼らの中に垣間見える愛と平安に驚嘆しました。¹⁰

ある日、森の中をゆっくりと散歩しながら、ウィリアムはモルモン書と教会の起こりについてハイラムと話をしました。ウィリアムは信じたいという望みを抱いており、それまでに様々なことを耳にしたにもかかわらず、教会に加わるべきだという確信を持ってずにいました。真理を見いだしたという、神からの証を望んでいたのです。

翌朝早く、ウィリアムは導きを求めて祈りました。モルモン書について調べた事柄を思い巡らしていると、モルモン書のおかげで、新たな学びを得られていることに気づきました。そうしてモルモン書が真実であることを確信し、モルモン書について証する務めを光栄に思いました。ウィリアムは、イエス・キリストの生ける教会を見いだしたことを確かに知ったのです。¹¹

ハイラムはその日の遅く、ウィリアムにバプテスマと確認の儀式を施し、二人は間もなくカートランドに赴きました。¹²道中、教えを宣べ伝えていたウィリアムは、自分には聴衆の心をつかみ、聖職者と論じ合う才能があると気づきました。しかし、宣べ伝える際に時折尊大な態度を取り、得意げに話をして御霊が去ってしまったときには、後悔することもありました。¹³

カートランドに到着すると、ウィリアムはジョセフと話をする機会を切望しました。幾つか、答えを求めていた具体的な質問があったのです。ジョセフがそれを識別して答えを明らかにしてくれることを願い、質問を胸の内に秘めていました。ウィリアムは、今後どこへ向かい、どのような人生を送るべきか悩んでいました。家族のないウィリアムは、主の業に完全に自分をささげることもできました。しかし、自分自身の幸福を優先したいという気持ちもあります。

その晩、ウィリアムはジョセフとともに自宅に帰り、主からの啓示をジョセフに求めました。これまで大勢の人が、そうしたことを知っていたからです。ジョセフは同意し、預言者が啓示を受ける間、ウィリアムは主が自分の一つ一つの問いに答えてくださるのを耳にしました。そうして、ウィリアムの不安は喜びに代わります。神の預言者を見いだしたことを確信したのです。¹⁴

数日後の1831年11月1日、ジョセフは教会指導者の評議会を招集しました。エズラ・ブースが地元の新聞に書簡を掲載、ジョセフが偽の預言をし、啓示を公から隠していると非難したばかりでした。この書簡は広く読まれ、多くの人が聖徒たちとそのメッセージを警戒するようになります。¹⁵

多くの聖徒たちも、主の言葉を自分で読むことを望みました。ジョセフが受けた啓示には手書きの写ししかなかったため、ほとんどの教会員にはその内容が知られていませんでした。伝道活動でそれらの啓示を使いたいと思った長老たちは、手で書き写すしかなかったのです。

このことを承知していたジョセフは、啓示を一冊の書物にまとめて出版することを提案しました。ジョセフは、関心のある人々に対して、宣教師が主の言葉をより容易に宣べ伝え、教会に

関する正確な情報を提供するうえで、そのような書籍が役立つと確信していました。

評議会は、この件について何時間にもわたり話し合いました。デビッド・ホイットマーと数人の人々は、啓示を出版することに反対しました。シオンに関する主の計画をさらに公なものとするには、ジャクソン郡の聖徒たちをさらなる窮地に立たせることになるのではと恐れたためです。ジョセフとシドニーはこれに異議を唱え、主は教会が御言葉を出版することを望んでおられると主張しました。¹⁶

さらなる議論の末、評議会は啓示を収めた「戒めの書」を1万部出版することで一致し、シドニー、オリバー、ウィリアム・マクレランに、啓示の書の序文を書き、その日のうちに提示するよう割り当てました。¹⁷

3人は即座に筆を執り、序文を携えて戻って来ましたが、評議会はそれに満足しませんでした。序文に目を通し、一行ごとに議論を交わし、主の御心を伺うようジョセフに求めました。ジョセフが祈ると、主は戒めの書に関する新たな序文を示されました。シドニーは、ジョセフが語る主の言葉を記録しました。¹⁸

新たな序文の中で、主は全人類に、主の声に耳を傾けるよう命じられました。主は、ジョセフにこれらの戒めを授けられたのは、御自分の子供たちが主に対する信仰と信頼を深め、主の完全な福音と永遠の聖約を受け、それを宣言するためであると語られました。また、啓示の内容について懸念していた、デビッドのような人々の恐れについても述べられました。

「主なるわたしが語ったことは、わたしが語ったのであって、わたしは言い逃れをしない。たとえ天地が過ぎ去っても、わたしの言葉は過ぎ去ることがなく、すべて成就する。わたし自身の声によろうと、わたしの僕たちの声によろうと、それは同じである。」¹⁹

ジョセフが序文の言葉を語ると、評議会の数人の会員は、この啓示が真実であることをぜひとも証したいと言いました。部屋にいた残りの人々は、現在の形で啓示を出版することに、依然として気乗りしませんでした。ジョセフが預言者であり、啓示が真実だと知ってはいたものの、ジョセフのかぎられた語彙とつたない文法を通して主の言葉が伝えられたことに、困惑していたのです。²⁰

主はそのような懸念を抱いてはおられません。主はその序文において、啓示は主からその僕らに、「彼らの弱さのあるままに、彼らの言葉に倣って」与えられたことを証しておられます。²¹ 啓示が御自身から出たものであることを人々が理解できるよう、主は新たな啓示を授け、その部屋の中で最も賢い者を選び、ジョセフが受けたような啓示を書かせるよう命じられました。

選ばれた者が啓示を書けなければ、主がジョセフに与えられた啓示は不完全であっても真実であることを、部屋にいる全員が理解し、証をする義務を負うからです。²²

言語を操ることに自信のあったウィリアムは、筆を執って啓示を書こうとしました。ところが書き終わると、ウィリアム自身にも部屋にいた人々にも、書かれた内容が主から与えられたものではないことが分かりました。²³ 彼らは自分たちの誤りを認め、啓示は神の靈感によって預言者に与えられたものであることを証する文書に署名しました。²⁴

彼らは評議会で、ジョセフが啓示を見直し、「聖なる御霊によって見つけることのできる誤りを訂正する」べきであると結論付けました。²⁵

そのころエリザベス・マーシュは、ナンシー・トールという巡回説教師をカートランドの自宅に招き入れていました。ナンシー

は、熱い確信に燃える大きな目をした、小柄で細身の女性でした。彼女は35歳にして、全米の学校や教会、野外集会等で大勢の男女に教えを宣べ伝えることで有名でした。ナンシーと話をしたエリザベスには、ナンシーが高い教育を受けており、確固とした信条をもっていることが分かりました。²⁶

ナンシーは、ある目的を持ってカートランドに来ていました。普段は、意見を異にするほかのキリスト教宗派にも柔軟な姿勢を見せていたナンシーでしたが、彼女は聖徒たちが欺かれていることを確信しており、聖徒たちについてもっと知ることで、人々が彼らの教えに抵抗できるよう助けたいと望んでいたのです。²⁷

エリザベスがそのような目的に同調することはありませんでしたが、ナンシー自身が真実だと思う事柄を擁護しようとしていくことに対しては理解を示しました。ナンシーは聖徒たちが宣べる教えを聞き、近くの川でバプテスマが執行されるのを目にしました。同日、ナンシーとエリザベスは、ジョセフやシドニーをはじめとする教会指導者とともに確認の儀式の集会に出席しました。²⁸

その集会でウィリアム・フェルプスは、モルモン書の真実性を疑うナンシーを詰問しました。「この書物を信じないかぎり、あなたは救われない」と詰め寄ったのです。

ナンシーはウィリアムをにらみつけて言いました。「わたしがその本を手にしていたら、焼いていたことでしょう。」ナンシーは、これほど多くの有能で知的な人々がジョセフ・スミスに従い、モルモン書を信じていることに衝撃を受けたのです。

「スミスさん」とナンシーは預言者に話しかけました。「全能の神の前で、天使がこれらの版の在りかをあなたに示したと、誓って言うことができますか。」

「わたしは誓ったりはしません」とジョセフは苦笑しながら言い、バプテスマを受けたばかりの人々の元へ行って彼らの頭に手を置き、確認を施しました。

エリザベスはナンシーの方を向き、自分自身の確認の儀式について証しました。「ジョセフの手が頭に置かれたとたん、まるでお湯をかぶったかのように聖霊を感じたの。」

ナンシーは、主の御霊をどのように感じるか、理解していないと言わんばかりのエリザベスの物言いに腹を立て、ジョセフにもう一度目をやり、こう言い放ちました。「このような疑わしい主張をして恥ずかしいと思わないのですか。あなたはこの国のどこにでもいる、無知な農家の少年にすぎないわ。」

ジョセフは簡潔に証しました。「その昔、無学な漁師たちに与えられた賜物が、再びもたらされたのですよ。」²⁹



示現と悪夢

1832年1月、ジョセフとエマと双子の子供たちは、カートランドから50キロ南のオハイオ州ハイラムにある、エルサ・ジョンソン、ジョン・ジョンソン夫妻の家で暮らしていました。¹ジョンソン一家はジョセフの両親と同じくらいの年齢で、子供たちのほとんどはすでに結婚し、広い農家から出て行っていました。そのため、ジョセフが教会指導者と集会を持ち、聖書の翻訳に取り組むうえで十分なスペースがあったのです。

バプテスマを受ける以前、エルサとジョンはエズラ・ブースの宗派の信徒でした。事実、エルサが奇跡的にジョセフによって癒されたのをきっかけに、エズラは教会に加わったのです。²エズラは信仰を失いましたが、ホイットマー家とナイト家がニューヨークでそうしたように、ジョンソン一家は引き続き預言者を支援しました。

その冬、ジョセフとシドニーはジョンソン家の2階の部屋で、多くの時間を翻訳に費やしました。2月中旬、ヨハネによる福音

書の中の、義人と悪人の復活に関する記述を読んだジョセフは、天国や人類の救いについて、知るべき事柄がさらにあるのではないかと思い始めました。神が、地上における行いに応じてその子らに報いを与えられるのなら、天国と地獄に関する従来の見解はあまりに単純ではないかと思ったのです。³

2月16日、ジョセフとシドニー、そのほか12人ほどの男性がジョンソン家の2階の部屋に集まりました。⁴ジョセフとシドニーのうえに御霊がとどまり、目の前に示現が開かれ、二人は息をのみました。主の栄光が二人を包み込み、彼らは神の右手にイエス・キリストがおられるのを目にします。天使が御座で賛美し、イエスは御父の独り子であられると証する声が聞こえました。⁵

「わたしは何を見ているのだろうか。」ジョセフは、シドニーとともに目にしたものに驚嘆しながら尋ねました。ジョセフが示現の中で見たものについて説明すると、シドニーは「わたしにも同じものが見える」と言いました。今度はシドニーが同じ質問を尋ね、自分の前に広がる光景について説明しました。それが終わるとジョセフは、「わたしにも同じものが見える」と言いました。

二人は1時間にわたり、このような会話を交わしました。二人が見た示現は、神の救いの計画が地上における人生の前に始まったものであり、神の子らはイエス・キリストの力により、死後に復活することを明らかにしました。二人はさらに、部屋にいるだれもが想像したこともないような形で、天について説明しました。天は一つの王国ではなく、栄光の異なる幾つかの王国に分かれて組織されていると言うのです。

それぞれの王国に関する具体的な詳細を目にしたジョセフとシドニーは、コリント人への第一の手紙15章に記された、復活に関する使徒パウロの説明をさらに詳しく述べました。主は、悪人と、地上で悔い改めなかった人のために星の栄えを用意されました。月の栄えは、立派な人生を送ったものの、イエス・キリスト

の福音に完全には従わなかった人のための栄光です。日の栄えは、キリストを受け入れ、福音の聖約を交わして守り、神の完全な栄光を受け継いだ人のための栄光です。⁶

主は天と復活についてさらなる事柄をジョセフとシドニーに明らかにされましたが、それを記すことのないよう命じられました。「これらは、神を愛し、神の前に自らを清くする者に神が授けてくださる聖なる御霊の力によってのみ、目にし、理解することのできるもの……である。」⁷

示現が閉じると、シドニーは自分の見たものに圧倒され、力なく、その顔は青ざめていました。ジョセフは笑顔で言いました。「シドニーはわたしほど、こういったことに慣れていないのだ。」⁸

ジョセフが天に関する偉大な示現を目にしたことをカートランドの聖徒たちが知るころ、ウィリアム・フェルプスは、インディペンデンスに教会の印刷所を立ち上げようとしていました。ウィリアムは成人になって以降ほとんどの期間を、新聞編集者として過ごした人物です。「戒めの書」に取りかかるのと並行して、ミズーリ州に住む聖徒たちと住人向けの月刊新聞を発行したいと望んでいました。

ウィリアムは自信に満ちた強い論調で、新たな新聞の広告を書きました。ウィリアムはその新聞を *The Evening and the Morning Star* (イブニング・アンド・モーニング・スター) と名付ける予定でした。「*Star* (スター) は、神聖な情報源から光を借り、神の啓示に焦点を当てた新聞となるだろう」と宣言しました。末日が訪れたことを確信していたウィリアムは、福音が回復され、救い主が間もなく地上に戻ってこられることを、義人にも悪人にも警告する内容の新聞にしたいと思っていました。

また、ニュースや詩など、そのほかの関心事も掲載しようと思っていました。ウィリアムは強い意見の持ち主で、自分の考えを述べる機会を辞退することはめったになかったにもかかわらず、その新聞は政治や地元の紛争には介入しないと主張しました。

ウィリアムは、ほかの新聞では政治事に意欲的な編集者で、時折対立する人々の気持ちを逆なでするような意見を記事や社説に織り交ぜていました。⁹ミズーリ州の論争に関与しないことは、至難の業でしょう。それでも、新たな記事や社説を書くと思うと、ウィリアムの胸は躍りました。

ウィリアムは、新聞の中心に福音を据えることに関して誠実でした。また、教会の印刷所としての最優先事項は、啓示を出版することであると心得ていました。「この印刷所は、知恵に導かれるまま、迅速に、多くの神聖な記録を公にする場となるだろう」と読者に約束しています。¹⁰

そのころオハイオ州では、ジョセフとシドニーの示現が騒動を引き起こしていました。多くの聖徒は、新たに明らかとなった天に関する真理をすぐさま受け入れましたが、従来のキリスト教の信条と、示現との折り合いをつけるのに苦勞している人もいました。¹¹ 天に関するこの新たな見解は、あまりにも多くの人を救うことにはならないだろうか。幾人かの聖徒たちは啓示を拒み、教会を去っていきました。

この示現はまた、エズラ・ブースが地元の新聞に投稿した書簡に困惑していた一部の隣人に、追い打ちをかけました。この書簡によってジョセフに対するエズラの批判が広まり、かつて教会員だった人々も加勢して、聖徒とともに礼拝する家族や友人をもつ人々に疑念が沸き起こりました。¹²

1832年3月下旬のある夕方、陽が落ちたころ、男たちの一団が、ジョンソン家から1キロ足らずのレンガ工場に集結しました。彼らは窯で火を焚き、パインタールを熱しました。空が暗くなると、男たちは煤で顔を隠し、夜に紛れて出て行きました。¹³

眠れぬまま横になっていたエマの耳に、窓がカタカタと鳴るかすかな音が聞こえました。エマの注意を引くには十分な音でしたが、異常な音には聞こえなかったので、気に留めませんでした。

隣からは、簡易ベッドに身を横たえたジョセフの規則正しい寝息が聞こえてきました。双子の子供たちがはしかにかかっていたため、ジョセフはその晩、エマが寝られるよう、症状の重い方の子供にずっと付き添って起きていたのです。程なくしてエマが目を覚まし、赤ん坊を受け取ると、ジョセフに休むよう言いました。ジョセフは翌朝、説教をする予定があったのです。

エマが眠りに落ちようとしていると、寝室の扉が勢いよく開き、十数名の男たちが部屋に踏み込んで来ました。男たちはジョセフの腕と足をつかむと、家から引きずり出しました。エマは叫び声を上げます。

手足を強く握られたジョセフは、のたうち回りました。一人がジョセフの髪をつかみ、扉の方に引っ張ります。身をよじって片足が自由になったジョセフは、男の顔を蹴りました。男は後ろ向きによろめきながら玄関前の階段に倒れ、血の滴る鼻を押さえました。しゃがれ声で笑いながら、男は何とか立ち上がり、血まみれの手をジョセフの顔に押し当ててすごみました。

「仕返しだ。」

男たちはジョセフともみ合いながら、家から庭に出来ました。ジョセフは自分を押さえつける男たちの手を振り払い、その屈強

な手足を自由にしようとしたのですが、だれかに首を捕まれ、身体がぐったりとなるまで絞められました。¹⁴

ジョセフは、ジョンソン家から少し離れた牧草地で目を覚まします。男たちはジョセフが逃げないように、地面から少し離れた所でジョセフをしっかりと捕えて放しませんでした。数メートル先には、半裸で草の上に横たわるシドニー・リグドンの姿が見えました。死んでしまっているように見えました。

「助けてくれ」とジョセフは男たちに懇願しました。「命だけは助けてくれ。」

「神に助けを求めればいい」とだれかが叫びました。辺りを見回すと、暴徒の人数が増えているようでした。一人の男が、木製の厚い板を持って近くの果樹園から出て来ると、ジョセフをそれに乗せ、牧草地のさらに奥深くまで運んでいきました。

家からかなり離れた所まで来ると、男たちはジョセフの衣服を引きはがし、抑え込みます。すると、ジョセフの手足を切断しようと、鋭いナイフを手にした別の男がやって来ました。ところが男はジョセフを見ると、切断するのを断りました。

「ちくしょう」と別の男がうなると、ジョセフに飛びかかり、とがった指の爪で預言者の皮膚を引き裂きました。「聖霊はこうやって降りて来るんだよ。」男はそう言い放ちます。

少し離れた所にいる男たちが、ジョセフとシドニーをどうするか言い争っているのが聞こえました。すべては聞き取れませんが、聞き覚えのある名前が一つ二つ聞こえてきました。

言い争いがやむと、だれかが「口にタールを塗りつけてやろう」と言いました。ジョセフは汚れた手で顎をこじ開けられ、瓶に入った酸をのどに流し込まれました。瓶がジョセフの歯で割れ、一本の歯が粉々に砕かれました。

もう一人の男が、どろりとしたタールをへらで口に押し込もうとしましたが、ジョセフは頭を前後に振りました。「このやろう！」と男が叫びます。「頭を上げろ。」男はタールが唇に流れ込むまで、へらをジョセフの口に押し当てました。

別の男たちが大だるを持ってやって来ると、ジョセフの体全体にタールをかけました。タールは傷ついた皮膚や髪の毛に流れ落ちました。男たちはジョセフを羽根で覆い、冷たい地面に投げ捨てて逃げ去りました。

男たちがいなくなった後、ジョセフは唇からタールをはがし、あえぎました。何とか立ち上がろうとするも、力なく倒れてしまいます。もう一度力を振り絞り、この度は何とか立っていられました。剥がれた羽根が、ジョセフの周りをひらひらと舞っていました。¹⁵

ジョセフがよろめきながらジョンソン家の玄関にたどり着くのを見たエマは、暴徒たちが、原形をとどめないほどにジョセフを痛めつけたのだと確信して気が遠くなります。騒動を聞きつけた近所の女性たちが家に駆けつけてきました。ジョセフはぼろぼろになった肉体を覆う毛布が欲しいと言いました。

その晩、人々はジョセフと、長い間牧草地に放置されて息も絶え絶えであったシドニーを介抱しました。エマはジョセフの手足や胸、背中からタールをこすり落としました。その間、エルサ・ジョンソンは食糧庫のラードを使って、皮膚と髪に固まったタールを柔らかくしました。¹⁶

翌日、ジョセフは身支度を整え、ジョンソン家の玄関から説教をしました。ジョセフは暴徒の一味が会衆に紛れているのに気づきましたが、何も言いませんでした。その午後、ジョセフは3人にバプテスマを施しました。¹⁷

依然として、襲撃による影響は甚大でした。打たれてあざだらけになった身体が痛みます。シドニーは意識がもうろうとしたままベッドに横たわり、生死をさまよいました。暴徒たちがシドニーのかかとをつかんで家から引きずり出したため、無防備な頭は階段にたたきつけられ、3月の冷たい地面に引きずられるままにされたのです。

ジョセフとエマの赤ん坊にも、被害がおよびました。双子の妹ジュリアの健康は順調に快復したものの、幼いジョセフの容態は次第に悪化し、その週のうちに亡くなりました。預言者は、息子が亡くなったのは、自分が暴徒に引きずり出された時に家に流れ込んできた冷たい空気のためだと言いました。¹⁸

赤ん坊の埋葬の数日後、ジョセフは深い悲しみに沈んでいたにもかかわらず、自らの務めを再開しました。主が命じられたとおり、4月1日、ニューエル・ホイットニーとシドニーとともにミズーリに出発します。シドニーは襲撃を受けてまだ弱っていたものの、旅をするだけの健康は回復していました。¹⁹ そのころ主は、オハイオの聖徒たちのビショップとして奉仕するようニューエルを召されたばかりでした。またニューエルに、収益性の高い彼の商売で生まれた余剰金を奉献し、インディペンデンスの店と印刷所の支援、また土地購入に充てるよう指示されました。²⁰

主は彼らに、ミズーリに赴いて、シオンの指導者たちと経済的に協力しながら教会を益し、貧しい人々をさらに世話することを聖約するよう求められました。また、聖徒を強め、彼らがシオンの町を建設するという神聖な責任を見失うことのないように望まれたのです。²¹

3人がインディペンデンスに到着すると、ジョセフは教会指導者の評議会を招集し、啓示を読み上げました。それは、エド

ワード・パートリッジとニューエル・ホイットニーをはじめとする教会指導者たちに向けて、教会の事業に関する問題に対処するため、互いに聖約することを求める啓示でした。²²

主はこのように宣言されました。「わたしはあなたがたに次の戒めを与える。すなわち、あなたがたはこの聖約によって結束しなさい。……すべての者はその隣人の益を図るように努め、また神の栄光にひたすら目を向けてすべてのことをなすようにしなければならない。」このようにして結束した彼らは、自分たちを「共同商会」と呼びました。²³

ジョセフはミズーリに滞在中、旧コールズビル支部の会員やその地域に入植した人々のもとを訪れました。教会指導者は協力しながらよく働き、新たに設立された印刷所は *The Evening and the Morning Star* (イブニング・アンド・モーニング・スター) を発行する準備を整えていました。また、多くの教会員は町の建設に意欲的でした。²⁴

ところがジョセフは、指導者の幾人かを含め、一部の聖徒が自分に対して批判的な気持ちを抱いていることを感じ取っていました。彼らは、ジョセフがミズーリに移ってそこに永住するよりも、カートランドにとどまる選択をしたことを快く思っていないでした。また、この地域への最後の訪問の折、ジョセフと幾人かの長老たちが、ミズーリのどこにシオンを設立するべきかについて意見を異にしていたことに関しても、いまだ動揺しているようでした。

彼らが不満を抱いていることを、ジョセフは予期していませんでした。ジョセフが深い悲しみにある家族を残して、彼らを助けようと1,300キロも旅して来たことを、知らないのでしょうか。²⁵

ジョセフがインディペンデンスの聖徒たちを訪れている間、ウィリアム・マクレランはオハイオで霊的に苦しんでいました。宣教師として召されて以来、冬の間中、カートランド東部の町や村で、またカートランド南部へと福音を宣べ伝えました。はじめは幾らかの成功を得て喜んだものの、健康状態の悪化や悪天候、無関心な人々などのために、今やウィリアムは落胆していました。²⁶

教師であったウィリアムは、授業に耳を傾け、言い返すことのない従順な生徒たちに慣れていたので、宣教師として、自分の権能に敬意を払わない人々と頻繁に対立しました。ある時は、長い説教の途中で何度も話を妨害され、うそつき呼ばわりされました。²⁷

何か月もの挫折の末、ウィリアムは、自分を伝道に召したのが主であったのか、それともジョセフ・スミスであったのか、疑問を抱くようになりました。²⁸自分の中でこの件を解決できぬまま、ウィリアムは伝道地を離れ、店員の仕事を見つけました。²⁹空いている時間に聖書を徹底的に調べ、福音が回復された証拠を探し、宗教に懐疑的な人々と議論しました。

やがて、伝道地には戻らないことを選択しました。その代わり、ウィリアムはエメリン・ミラーという名の教会員と結婚し、土地を取得しやすい、ジャクソン郡の100人ほどの聖徒たちに加わることにしました。ジョセフへの啓示の中で、神はウィリアムが伝道を放棄したことを叱責されましたが、ウィリアムはシオンでやり直すことができると信じていました。

ただし、自分の望む方法でやり直したかったのです。1832年の夏、ウィリアムと一行は、教会指導者の推薦状なしにミズーリへと移りました。主は、シオンの発展が速く進みすぎないように、また資源が枯渇することのないよう、移住する聖徒には推薦状を取得するように求めておられたのです。到着したウィリアムは、パートリッジビショップのところに行って財産の奉獻や受け継ぎ

の受け取りをすることもなく、インディペンデンスの二区画を政府から買い取りました。³⁰

ウィリアムをはじめとする人々の到着に、パートリッジビショップとその顧問たちは困り果ててしまいました。転入者の多くは貧しく、奉獻するものをほとんど持っていなかったからです。ビショップは彼らがそこに落ち着けるよう最善を尽くしましたが、シオンの経済がまだ脆弱な中、彼らのために家屋や農場、雇用を手配することは至難の業でした。³¹

しかし、ウィリアムは自分の引き連れた一団が、大勢の人がシオンに来るというイザヤの預言を成就するものだと思っていた。ウィリアムは教師としての働き口を見つけ、自分の信条について親戚にこう書き送りました。

「我々は、ジョセフ・スミスがまことの預言者、すなわち主の聖見者であると信じる。ジョセフは力を持っており、神から啓示を受けている。また、キリストの教会における神聖な権能によりこれらの啓示を受けていると確信している」と証しました。³²

ところが、このような見解はミズーリの隣人たちの心を乱しました。特に、神がインディペンデンスを約束の地の中心に指定された、と一部の教会員が言うのを耳にして、動揺したのです。³³ ウィリアムの一行の到着とともに、シオンの聖徒の数は500人近くにまで達しました。資源はすでに乏しく、地元の物価は跳ね上がっていました。³⁴

聖徒たちが次々と周りに定住していくのを目にしたある女性は、「押し寄せて来る彼らには、罰が必要だわ」と言いました。³⁵



聖なる場所

1832年8月、フィービー・ペックは、ミズーリ州の自宅近くで3人の子供たちがバプテスマを受けるのを誇らしげに眺めていました。その日シオンでは、11人の子供たちがバプテスマを受けました。リディア・パートリッジとエドワード・パートリッジ、またサリー・フェルプスとウィリアム・フェルプスの子供たちと同じく、彼らは主が聖別された地で育った、第一世代の若い聖徒たちでした。

フィービーと子供たちは、前年、コールズビルの聖徒たちとともにシオンに移り住みました。フィービーの亡くなった夫ベンジャミンは、ポリー・ナイトの弟だったので、フィービーはナイト家の一員として暮らしていました。それでも、教会に加わらなかった、ニューヨークに暮らす自分の家族や友人たちを恋しく思っていました。

子供たちがバプテスマを受けて間もなく、フィービーは二人の旧友にシオンについて書き送りました。友人のアナに向けてこ

う述べています。「だれもがここに来ることをいとわないでしょう。主は天の王国の奥義を、その子らに明らかにされているからです。」¹

そのころ、ウィリアム・フェルプスは、*The Evening and the Morning Star* (イブニング・アンド・モーニング・スター) の中で、天に関するジョセフとシドニーの示現について公表したばかりでした。フィービーはアナに、バプテスマを受けてキリストの証に雄々しくあり続ける人は、栄光の最高の位と神の全き祝福を享受する、という約束について告げました。

この約束を念頭に、フィービーはもう一人の友人パティーに、福音のメッセージに耳を傾けるよう強く勧めました。「わたしと同じように理解し、信じることができれば、道は開けるでしょう。あなたはこの地に来て、わたしたちは再会を果たし、神に関する事柄を互いに喜ぶことができますでしょう。」

フィービーは預言者が最近受けた示現と、それによりもたらされた平安について証し、まだ読んだことがなければその言葉を読むようパティーに勧めました。

「どうか、注意深く、祈りの気持ちで読んでください。これらの事柄には注意を向ける価値があり、ぜひ、あなたによく調べてもらいたいからです。」²

その秋、ジョセフは福音を宣べ伝え、共同商会のための購入を行おうと、ニューエル・ホイットニーとともにニューヨーク市へ向かいました。主は、末日にもたらされる災難について大都市の人々に警告するよう、ニューエルを召されていました。ジョセフはニューエルに同行し、主の命令を成し遂げることができるように助けます。³

当時預言者は、福音を宣べ伝え、聖徒たちの集合の地を築き上げる必要にますます迫られていることを感じていました。

カートランドを離れる少し前にジョセフが受けた啓示の中で、神権者に対する務めが明らかにされました。神権者は福音を宣べ伝え、忠実な人々を安全なシオンに、また主が栄光をまもって訪れると約束しておられる神殿に導く責任を負っていると告げられたのです。

そのため神権を受ける者は、キリストとその福音を受け入れた人に儀式を施す義務を負います。これらの儀式によってのみ、主の子供たちは主の力を受け、みもとに戻る備えができると主は教えられました。⁴

ところがジョセフは出発時、ある理由のために、ミズーリにシオンを築く取り組みについて懸念を抱いていました。オハイオ州の教会は、かつて教会員であった人々の反対を受けていたにもかかわらず前進していましたが、ミズーリ州の教会は、許可なく同地域に移り住む人の数が増えるにつれ、秩序を維持するのが困難になっていました。ジョセフと、一部のシオンの指導者との溝もいまだ埋まらず、教会を一つにまとめるには何らかの策を講じる必要がありました。

ニューヨーク市に到着したジョセフは、その街の規模に驚きました。高層ビルが所狭しと、何キロにも連なって立っていました。高価な品物を扱う店や大きな家屋、オフィスビル、富裕層が取引きを行う銀行などが、至る所に立ち並んでいます。様々な民族、職業、階級の人々が急ぎ足で通り過ぎ、周りの人への関心などないかのようでした。⁵

ジョセフとニューエルは、ニューエルが共同商会のために買い付けをしようと思っていた倉庫近くの、4階建てのホテルに宿泊しました。ジョセフは商品を選ぶ作業を退屈に感じるとともに街の中で見受けられた高慢や悪に落胆し、度々ホテルに戻っては、読み、瞑想し、祈りました。やがて、家が恋しくなりました。

エマは何度目かのつらい妊娠後期に差し掛かっており、ジョセフはエマと娘のそばにいることを切望しました。

「家のこと、エマとジュリアのことが洪水のように心に押し寄せてきます。少しの間、家族とともにいられたらと願います」とジョセフは綴っています。

ジョセフは時折ホテルを出て、街を散策したり、教えを宣傳えたりしました。ニューヨーク市の人口は20万を超えており、ジョセフは、主がこの街の優れた建造物や、人々の並外れた発明を喜んでおられると感じました。ところが、周囲の驚嘆すべきものについて神を賛美したり、イエス・キリストの回復された福音に関心を寄せたりする人はいないかのようでした。

ジョセフは妨害を受けることもなく、メッセージを宣傳続けました。エマにこのように書き送っています。「声を上げ、結果は神に、すなわちすべてのものを御手の中に保っておられ〔る〕…… 御方に委ねようと決意しています。」⁶

1か月後、ジョセフとニューエルがオハイオに戻ったころ、31歳のブリガム・ヤングは、兄ジョセフと親友のヒーバー・キンボールとともにカートランドに到着しました。彼らは、ジョセフ・スミスが育った地域からそう遠くない、ニューヨーク中心部で最近改宗したばかりの会員でした。ブリガムは初めてモルモン書について知ったときからずっと、預言者に会いたいと思っていました。ジョセフがカートランドにいることを知ったブリガムは、ジョセフと握手を交わし、目を見たうえで、ジョセフの胸の内を知ろうとしました。バプテスマを受けて以来、モルモン書を使って教えを宣傳伝えてきましたが、その翻訳者についてはよく知らなかったからです。

ジョセフとエマは当時、カートランドにあるホワイトニーの店の上のアパートに住んでいましたが、3人が立ち寄ったとき、預言者は1.5キロほど離れた森へ薪を切りに出かけていました。3人はすぐにその場所へ向かいましたが、そこで何が待ち受けているか、知る由もありませんでした。

森へ歩いていくと、ブリガムたちはジョセフが薪を割っている空地にたどり着きました。ジョセフはブリガムよりも背が高く、簡素な作業服を着ていました。斧を巧みに振り下ろす姿を見て、ブリガムはジョセフが肉体労働に慣れ親しんでいることを見て取りました。

ブリガムはジョセフに歩み寄り、自己紹介をしました。ジョセフは斧を下ろしてブリガムの手を握り、「お会いできてうれしいです」と言いました。

会話を交わすうちに、ブリガムが薪を割り、兄とヒーバーがそれを荷車に乗せる手助けをすると申し出ました。預言者は朗らかで、勤勉かつ友好的な人のようでした。ブリガムと同じく貧しい家の出でしたが、一部の労働者のような下品さはありませんでした。ブリガムはすぐに、ジョセフが神の預言者であることを悟りました。⁷

しばらくして、ジョセフはこの男性たちに家で食事をするよう招きました。到着すると、ジョセフは彼らをエマに紹介しました。エマはベッドに横になり、元気な男の赤ん坊をあやしていました。赤ん坊は数日前、ジョセフとニューエルがニューヨークから戻るほんの数時間前に生まれたばかりでした。エマとジョセフは赤ん坊を、ジョセフ・スミス三世と名付けました。⁸

食事が終わると、ジョセフは小さな集会を開き、ブリガムに祈ってもらいました。頭を垂れたとき、ブリガムは御霊に突き動かされ、聞き慣れない言語を話し出しました。部屋にいた人々は、はっとしました。前年、彼らは大勢の人々が、粗野な態度で

御霊の賜物をまねるのを目にしていたからです。しかし、ブリガムの行為はそれとは異なりました。

人々の戸惑いを感じ取ったジョセフはこう言いました。「兄弟たち、わたしは主から来るものについては決して反対しない。その異言は神から授かったものだ。」

そうして同じ言語で話し始めたジョセフは、これはアダムがエデンの園で話していた言語であると宣言し、パウロが新約聖書で行ったように、異言の賜物を求め、神の子供たちを益するよう聖徒たちに勧めました。⁹

一週間後、穏やかな冬が小さな村にやってくるころ、ブリガムはカートランドを後にしました。ところがクリスマスの数日前、ある地元の新聞に記事が載りました。サウスカロライナ州の政府指導者が輸入品への課税に抵抗し、合衆国からの独立を宣言すると脅していると言うのです。戦争を求めて声を上げる人もいました。¹⁰

ジョセフはこの危機に関する記事を読むと、救い主の再臨に先立って悪と破壊がはびこるといふ聖書の記述に思いをはせました。¹¹全世界が罪の束縛の下にうめいていると、主から告げられたばかりでした。神は間もなく怒りをもって悪人を訪れ、地上の王国を裂き、天を震わせられるでしょう。¹²

そのような災いについて詳しく知ろうと祈ったジョセフは、クリスマスの日に啓示を受けました。主はジョセフに、サウスカロライナ州とそのほかの南部諸州が、国内の他の諸州に反旗をひるがえす時が来ると告げられました。反乱を起こした諸州は他国に助けを求め、奴隷の身に陥っている人々は主人に対して立ち上がり、戦争と自然災害があらゆる国を襲い、地上に不幸と死が広まる、そのような啓示でした。

この啓示は、聖徒たちがもはやシオンと神殿の建設をこれ以上遅らせることはできないという、厳しい注意喚起でした。来たるべき荒廃を避けたいと思うならば、聖徒たちはすぐさま備えなければならないのです。

主は強く訴えかけられました。「主の日が来るまで、あなたがたは聖なる場所に立ち、動かされないようにしなさい。」¹³

戦争についての啓示を受けた2日後、ジョセフはニューエル・ホイットニーの店で教会指導者と集会を持ちました。ジョセフは、ミズーリ州の聖徒たちが自らの指導に対してますます批判を強めていると感じていました。悔い改めて教会に調和を取り戻さなければ、彼らはシオンにおける受け継ぎと、神殿を建設する機会を失うことになるのではないかと、ジョセフは恐れたのです。¹⁴

集会を始めると、ジョセフは教会指導者に、シオンの建設に関する神の御心を求めて祈るように言いました。皆は頭を垂れて祈り、それぞれに神の戒めを守る意欲を示しました。その後、ジョセフは啓示を受け、新たに筆記者となったフレデリック・ウィリアムズが書き留めました。¹⁵

それは、聖徒に向けられた平和のメッセージであり、聖なる者となることを勧めるものでした。主はこのように命じられました。「あなたがたの思いがひたすら神に向いたものとなるように、自らを聖めなさい。」驚いたことに、主はカートランドに神殿を建設し、主の栄光を受ける備えをするよう指示されたのです。

「あなたがた自らを組織しなさい。すべての必要なものを用意しなさい。そして、一つの家、すなわち祈りの家、断食の家、信仰の家、学びの家、栄光の家、秩序の家、神の家を建てなさい。」

さらに主は、塾を開くことを命じられ、このように宣言されました。「すべてが信仰を持っているわけではないので、あなたがたは知恵の言葉を熱心に求め、互いに教え合いなさい。まことに、最良の書物から知恵の言葉を探し求め、研究によって、また信仰によって学問を求めなさい。」¹⁶

ジョセフは啓示の写しをミズーリ州にいるウイリアム・フェルプスに送り、それをカートランドの聖徒たちへ向けた「オリーブの葉」、「主の平和のメッセージ」と呼びました。ジョセフはシオンの聖徒たちに、主から教えられたとおりに自らを聖めなければ、主はほかの人々に神殿建設を託されるだろうと警告しました。

ジョセフは、「シオンが倒れることのないよう、神の警告の声に耳を傾け」ることを懇願しました。「カートランドの同胞は、主の恐怖を知って大いに恐れを抱き、皆さんのために絶えず祈ってくれています。」¹⁷

1833年1月22日、ジョセフとカートランドの聖徒たちは、ホイットニーの店で預言者の塾を開きました。ジョセフの書記の一人であったオーソン・ハイドが、クラスを教えるよう任命されます。ジョセフとそのほか大勢の生徒たちと同様、オーソンは子供時代の大半を、学校に通うことなく、働くことに費やしていました。オーソンは孤児であり、彼の後見人は、収穫が終わってから次の種まきが始まる前、冬の間には学校へ通わせてくれませんでした。それでも、オーソンは記憶力が良く、飲み込みも早かったうえ、成人してから近所の学校に通ったこともありました。¹⁸

預言者の塾で、オーソンは歴史、文法、算数に加え、主が命じられたとおりに霊的なレッスンも教えました。¹⁹クラスに出席する人々は、単なる生徒ではありません。彼らは互いを兄弟と呼

び、仲間としての聖約で結束していました。²⁰ともに学び、話し合い、皆で祈りました。²¹

ある日、ジョセフはオーソンとクラスの生徒たちに靴を脱ぐよう言いました。ジョセフはキリストの模範に倣い、一人一人の前にひざまずいて彼らの足を洗いました。

それが終わると、こう言いました。「わたしがしたように、あなたがたも行いなさい。」ジョセフは互いに仕え、この世の罪に染まらずに清さを保つことを求めました。²²

預言者の塾の開講中、エマは生徒たちがやって来ては2階に上がり、小さな部屋で所狭しと授業を受けているのを目にしました。ある人は塾の神性さに敬意を表して、体を清潔にし、身なりを整えてやってきました。ある人は朝食を取らず、断食をして集会にやって来ました。²³

授業が終わり、その日の生徒たちが全員出て行くと、エマと雇われた何人かの若い女性たちが教室を掃除します。男性たちは授業中にパイプを吸い、タバコを噛んでいたため、彼らが行った後の部屋の空気は濁り、床は吐き出されたタバコでいっぱいでした。エマが全力でこすっても、タバコの染みが床に残るのです。²⁴

エマはこのような状態について、ジョセフに苦情を言いました。ジョセフは普段タバコを吸いませんでしたが、ほかの人が吸っても特段気にしていませんでした。ところがエマの苦情を受け、タバコの使用が神の目に正しいものなのか、疑問が湧きます。

気を揉んでいたのは、エマだけではありませんでした。アメリカ合衆国やそのほか世界各国の改革主義者らは、タバコを吸ったり噛んだりすることを、酒を飲むのと同様に低俗な習慣であると見なしていました。ところが一部の医者は、タバコは多くの病気を治すものと考えていました。飲酒や、人々がよく口にし

ていたコーヒーや紅茶のような熱い飲み物についても、同様の主張がなされていました。²⁵

ジョセフがこの件について主に尋ねると、啓示、すなわち末日の「聖徒たちのための『知恵の言葉』」を受けました。²⁶その中で主は、酒の摂取について戒められ、ぶどう酒は聖餐などの機会に用いるが、蒸留酒は体を洗うためのものであると宣言されました。主はさらに、たばこ熱い飲み物についても警告されました。

主は健康的な食事を取ることを強調し、穀物や薬草、果物を食べ、肉は控えめに用いるよう聖徒に勧められました。主は、従うことを選ぶ人々に、健康と知識と力の祝福を約束されました。²⁷

この啓示は、戒めとしてではなく、警告として宣言されました。多くの人は、こういった強い物質の摂取を断つことを難しいと感じるでしょうし、ジョセフも厳格に順守するようには求めませんでした。ジョセフ自身、これまでのように時折酒を飲んでいましたし、ジョセフとエマはコーヒーや紅茶を飲むこともありました。²⁸

それでも、ジョセフが預言者の塾においてこの言葉を読むと、教室内の男性たちはパイプや噛みたばこの塊を火の中に投げ入れ、主の勧告に進んで従う意志を示しました。²⁹

預言者の塾の最初の講座は3月に閉講し、参加者たちは伝道やそのほかの割り当てを果たすため、各地に散って行きました。³⁰そのころカートランドの教会指導者は、レンガ工場を購入し、神殿の建設資金を集めるために働いていました。³¹

このころ、ジョセフはミズーリ州から一通の書簡を受け取っていました。「オリーブの葉」の啓示を読んだエドワードとその

ほかの人々は、聖徒たちに、悔い改めてカートランドの教会と和解するよう強く勧めました。彼らの働きかけが実り、聖徒たちはジョセフに赦しを請いました。³²

ジョセフは対立のことを喜んで忘れ、主がシオンに命じられたことを成し遂げる方法を模索しました。6月、ジョセフは神殿の建設方法を知ろうと、シドニー・リグドンとフレデリック・ウィリアムズとともに祈りました。祈っていると、彼らは神殿の示現を目にしました。彼らはその外観をつぶさに調べ、窓や屋根、尖塔の構造を観察しました。神殿が真上に移動したかと思うと、今度は神殿内部に移り、そこで内部の大広間を調べました。³³

示現の後、3人はカートランドとインディペンデンスの神殿に関する計画を作成しました。建物は大きな教会のような外観でしたが、内部には二つの広々とした広間があり、一つは2階に、一つは1階にあって、聖徒たちがそこに集まって学ぶことができます。³⁴

ジョセフが次に焦点を当てたのは、最後に訪れた時から二倍ほどの規模に成長していた、シオンの聖徒たちが定住する町の建設を助けることでした。³⁵フレデリックとシドニーの助けを得ながら、2.5キロ平米の町の建設計画を策定しました。碁盤の目に直線の長い道路が交差し、奥まった場所にレンガや石造りの家屋が立ち並び、前面には森、その奥には庭がありました。

土地は0.2ヘクタールごとに分割され、富める者にも貧しい者にも均等に分配される計画でした。農夫は町に住み、郊外の田畑で働きます。町の中心部には神殿、また礼拝や教育、管理運営、貧しい人の世話を目的とするそのほか神聖な建物が配置されます。それぞれの公的な建物には、「聖きを主にささぐ」という文字が刻まれるのです。³⁶

町には1万5,000人ほどを受け入れることができ、ニューヨーク市よりはるかに小規模ながら、国内最大の都市の一つとな

ります。町がいっぱいになると、すべての聖徒がシオンに受け継ぎを得られるまで、計画は繰り返し再現されます。「同じ方法でもう一つの町を区画し、この末日の世を満たすのです」とジョセフは指示しました。³⁷

1833年6月、ジョセフとシドニー、フレデリックは、神殿の建設方法に関する詳しい指示とともに、町の計画書をカートランドからインディペンデンスに送りました。

「わたしたちはこの地における主の宮の建設に着手し、その取り組みは急速に進んでいる」という報告を手紙にしたため、計画書に添えています。「わたしたちは日夜、シオンの救いのために祈っている。」³⁸



始まりに過ぎず

シオンと神殿に関する計画が手紙でミズーリに知らされたちょうどそのころ、9歳になるエミリー・パートリッジはベッドから跳び起き、寝巻きを着たまま急いで外に出ました。エミリーの目に映ったのは、インディペンデンスの神殿用地からそう遠くない所にある自宅の裏庭で、大きな干し草の山の一つが炎に包まれる光景でした。火は夜空高く立ち上り、その鮮かな黄色い光は、燃えさかる炎を見つめ、なす術もなく立ち尽くす人々の後ろに長い影を落としていました。

偶発的な火災は、開拓地では珍しいことではありません。しかし、この火災はそのような類のものではありませんでした。1833年の夏の間中、少数の暴徒たちが聖徒の財産に損害を加えていました。新しい移住者を脅し、ジャクソン郡から追い払うためです。それまでに怪我人は出ていませんでしたが、暴徒たちは攻撃の度に、ますます凶暴になっていくようでした。

エミリーは、ジャクソン郡の人々が聖徒を追い出したいと思う理由をすべて理解できている訳ではありませんでした。自分

の家族と友人が、隣人たちと多くの点で異なっていることは分かっていました。町で耳にするミズーリ住民の話し方、女性たちの服装も、自分たちとは違っていました。夏になると裸足で歩き回る人もいましたし、エミリーがオハイオで使い慣れた洗濯板の代わりに、大きなへらを使って洗濯をする人もいました。

こうしたささいな違いに加え、エミリーがほとんど知らない大きな不一致もありました。聖徒たちはインディアンに伝道し、奴隷制度を認めていませんでした。インディペンデンスの人々は、そのことをいまいまいしく思っていたのです。大半の教会員が住んでいたアメリカ北部諸州では、奴隷の所有が法律で禁じられていました。一方ミズーリでは、黒人を奴隷として所有することは合法であり、古くからの移住者は、この制度を断固として擁護したのです。

通常、聖徒たちは周囲の人々と一定の距離を置いていましたが、だからと言って、疑いの念が和らぐことはありませんでした。シオンに到着する聖徒が増える中、彼らは協力して家を建て、家具をそろえ、畑を耕し、子供を育てました。福千年まで持ちこたえるような、聖なる町の基を築くことを切望していたのです。

インディペンデンスの中央に位置するパートリッジ家の自宅は、この町をシオンにするための足がかりでした。エミリーが以前に暮らしたオハイオの家のような、あか抜けた雰囲気には欠ける、簡素な2階建ての家でした。それでも、その家はインディペンデンスに聖徒が留まることのしるしでした。

燃え盛る干し草の山のように、聖徒も暴徒の攻撃対象となりました。¹

聖徒とジャクソン郡の住民との間に緊張が高まったとき、ウィリアム・フェルプスは地元の教会新聞の数ページを使って、不安を

鎮めようとなりました。*The Evening and the Morning Star*の1833年7月号に、フェルプスは移住してくる教会員にあてた手紙を掲載しました。地域社会の負担とならないよう、負債を返済したうえでシオンに来ることを彼らに勧めたのです。

フェルプスはそのほか様々な助言を書くことで、ジャクソン郡の住民にも新聞を読んでもらい、聖徒たちが法に従う市民であること、またその信条が、地元の住民あるいは経済を脅威にさすものではないことを知ってほしいと望みました。²

ウィリアムは、黒人に対する教会員の姿勢についても取り上げました。ウィリアムは奴隷を自由にしたいと願う人々の心情も理解していましたが、聖徒たちは、自由人である黒人の権利を制限するミズーリの法律に従うことを、読者に知ってほしいと思ったのです。黒人の教会員はわずかでしたが、フェルプスは彼らに、シオンに移動する選択を下した場合は、慎重に行動し、神を信頼するようにと勧めました。

次のような曖昧な書き方をしています。「肌の色に関して教会に特別な取り決めがない以上、分別を働かせるように。」³

郡判事であり、ジャクソン郡民兵を率いる大佐であったサミュエル・ルーカスは、*The Evening and the Morning Star*に掲載された手紙を読んで激怒しました。サミュエルは、ウィリアムが自由黒人にモルモン教徒となり、ミズーリに移住するよう勧めていると思ったのです。ウィリアムの言葉は、黒人の聖徒にミズーリへの入植を思いとどまるよう勧めるものでしたが、サミュエルの不安を和らげるものとはなりませんでした。⁴

暴徒たちはすでに、インディペンデンスや付近の定住地で聖徒に対する嫌がらせを行っていたので、サミュエルが同調者を見つかるのはそう難しいことではありませんでした。1年以上に

わたり、町の指導者たちは聖徒に対する近隣住民の反感をかき立てていました。チラシを配り、町民会議を開き、新しい移住者たちを追放するよう呼びかける者もいました。⁵

当初地元民のほとんどは、聖徒のことを、啓示を受け、按手によって癒し、奇跡を行うなどといったふりをする無害な狂信者であると思っていました。ところが郡に入植する教会員が増え、約束の地として神が自分たちにインディペンデンスをお与えになったと主張すると、サミュエルや町の他の指導者たちは、聖徒とその啓示を、自分たちの財産や政治的影響力に対する脅威と見なしました。

そのような状況にあって、ウィリアムの手紙は最大の不安の一つを煽ることになってしまったのです。ちょうど2年前、別の州で多数の奴隷が反乱を起こし、2日足らずで50人以上の白人男女を殺害するという事件が起きていました。ミズーリや南部諸州の奴隷所有者は、同じような事件が自分たちの地域でも起こるのではないかと恐れていました。聖徒たちが自由黒人をジャクソン郡に招いた場合、彼らの存在により、奴隷が自由を得たいと望み、反乱を起こすのではないかと恐怖を抱く人々もいたのです。⁶

聖徒たちの宗教と言論の自由を守る法律があったため、サミュエルやそのほかの人々は、こうした脅威となる存在を、法的な手段を用いて鎮圧することはできないと判断しました。しかし、好ましからざる人々を自分たちの中から追放する目的で、暴力を用いる最初の町となる必要はありませんでした。固まって行動することで、聖徒を郡から追い出し、処罰を免れることができるのです。

町の指導者はすぐさま集会を開き、新しい移住者に対する反対行動を起こしました。サミュエルとそのほかの人々は、聖徒

に対する不平不満を書き出し、インディペンデンスの人々に声明を提示しました。

その文書は、必要とされるすべての手段を行使して、ジャクソン郡から聖徒を追放するという町の指導者の意図を宣言するものでした。彼らは、聖徒の処分について決定するために、7月20日、裁判所で集会を開くことにしました。何百人ものジャクソン郡住民が、その声明に署名しました。⁷

この騒動について知ったウィリアム・フェルプスは、自分の書いた新聞記事が原因で引き起こされた怒りをなだめようと努力しました。キリストは「黒人も白人も、束縛された者も自由な者も」、すべての人を御自分のもとに招いておられるとモルモン書は宣言していましたが、ウィリアムは郡全体が聖徒に敵対することを懸念しました。⁸

早急に行動を起こしたウィリアムは、奴隷制度について自分が書いた内容を撤回する1枚のチラシを印刷し、こう主張しました。「わたしたちは自由黒人をこの州に迎えることに反対します。またいかなる黒人も教会に入会することはできないと断言します。」⁹黒人会員にバプテスマを施すことに関して、このチラシが伝えた教会の立場は誤ったものでした。しかし、ウィリアムはそのチラシによって、起こり得る暴力が抑制されることを期待したのです。¹⁰

7月20日、ウィリアム、エドワード、そのほかの教会指導者は、郡の指導者と会合を開くためにジャクソン郡裁判所へ向かいました。その日の天候は、7月にしては珍しく穏やかでした。何百人もの人々が、家、農場、事務所を留守にしました。会合に出席し、聖徒に対する行動を起こす備えをするためです。

暴力に訴える前に、教会指導者に対して最後通告を与えることに決めたサミュエル・ルーカスと地域を代表する12人の男

性は、ウィリアムに *The Evening and the Morning Star* の印刷を中止すること、また聖徒が早急にジャクソン郡から出て行くことを要求しました。¹¹

エドワードはシオンのビショップとして、そのような要求を受け入れるならば、聖徒がどれほど多くのものを失うことになるかを承知していました。印刷所を閉鎖するならば、完成間近の『戒めの書』の出版が遅れることになります。また郡を離れることは、貴重な財産を失うだけでなく、約束の地における受け継ぎを諦めることを意味します。¹²

エドワードはこの申し出について考え、カートランドにいるジョセフの助言を求めるために、3か月の猶予が欲しいと言いました。ところがジャクソン郡の指導者たちは、その願いを聞き入れませんでした。エドワードは、ミズーリにいる他の聖徒と相談するために10日の猶予が欲しいと言いました。そうして地域の指導者らが与えた猶予は、15分でした。¹³

決定を強いられたくなかったため、聖徒たちはそこで交渉をやめました。ジャクソン郡の代表者たちが去ると、一人の男がエドワードに向かい、破壊行動が今にも始まることを告げます。¹⁴

裁判所から通りを下った所にある、自宅兼教会の印刷所の1階で、サリー・フェルプスは生まれたばかりで病気にかかった赤ん坊の面倒を見ていました。そのほか4人の子供たちも近くにいます。夫のウィリアムは、何時間も前に家を出ていました。裁判所で行われる集会に出席するためです。ウィリアムはいまだ戻らず、サリーは集会についての知らせを不安げに待っていました。

ドン、という重たい音とともに玄関の扉がガタガタと揺れ、サリーと子供たちは跳び上がりました。外を見ると、男たちが大き

な丸太を激しくたたきつけ、ドアを壊そうとしていたのです。印刷所の周囲には、男女や子供たちからなる大きな人だかりができていました。男たちに声援を送る人もいれば、黙って見ている人もいました。¹⁵

ドアが壊れて開くと、武装した男たちが家の中になだれ込み、サリーと子供たちを通りに引きずり出しました。¹⁶一家の家具や持ち物は玄関の外に投げ出され、窓はたたき壊されます。暴徒たちの中には、印刷所の2階にはい上がって活字やインクを床の上にはばまく者もいれば、建物を破壊し始める者もいました。¹⁷

子供たちが身を寄せ合って自分に抱きつく中で、サリーは男たちが印刷所の2階の窓を壊し、紙や活字を放り投げる様子を目の当たりにしました。次に、彼らは印刷機を持ち上げて窓から放り出し、印刷機は地面にたたきつけられました。¹⁸

大騒動の中、男たちの何人かが、製本前の『戒めの書』の原稿を両腕に抱えて印刷所から出てきました。一人の男が群衆に向けて、「モルモン連中の啓示の本だぞ」と叫びながら、原稿を通りにばらまきました。¹⁹

15歳のメアリー・エリザベス・ロリンズと13歳になる妹のキャロラインは、近くにあった塀のそばに身をかがめ、男たちが『戒めの書』の原稿をまき散らす様子を見ていました。

メアリーは以前に、原稿の一部を見たことがありました。メアリーとキャロラインは、インディペンデンスで聖徒のための商店を経営するシドニー・ギルバートの姪です。ある夜のこと、メアリーはおじの家で、教会指導者が新たに印刷された原稿に記されている啓示を読み、それについて話し合うのを耳にしたことがありました。兄弟たちが話し合う間、集会に御霊が注がれ、中

には異言を語る人もいました。メアリーには、彼らの語った言葉が分かりました。そうして啓示に対する深い畏敬の念を感じるようになっていたメアリーは、それらの啓示が通りに散らばっている光景を見て憤りを覚えました。

メアリーはキャロラインの方を見ると、台無しになる前に原稿を取り戻したいと言いました。男たちは、印刷所の屋根をはがし始めていました。やがて印刷所の壁は崩れ、後にはがれきだけが残るでしょう。

キャロラインは原稿を守りたいと思いつつも、暴徒たちに恐怖を抱きました。「わたしたちを殺すかもしれないわ。」キャロラインはそう言います。

危険を承知の上で、メアリーはキャロラインに、原稿を取り戻すことに決めたと告げます。姉のそばを離れたくなかったキャロラインも、手伝うことに同意しました。

男たちが向こう側を向くと、二人の姉妹は隠れていた場所から飛び出し、腕に抱えられるだけの原稿をつかみました。向きを変えて扉に身を隠そうとすると、何人かの男たちが二人を見つけ、止まるように命じました。二人の男に後を追われる中、姉妹たちは原稿をしっかりと抱え、全速力で走って近くのとうもろこし畑に逃げ込みました。

とうもろこしは2メートルほどの高さがあり、メアリーとキャロラインは自分たちがどの方向に進んでいるのか分かりませんでした。二人は地面に身を伏せて原稿を自分たちの体の下に隠すと、息を潜めながら、二人の男がとうもろこしの間を、足音高く行ったり来たりする音に耳をそばだてました。足音が次第に近づいてくるのが聞こえましたが、しばらくすると、男たちは探すのを諦めてとうもろこし畑を去っていきました。²⁰

エミリー・パートリッジと姉のハリエットが水を汲んでいると、武装した50人程の暴徒が、自分たちの家に近づいてくるのが見えました。泉のそばに身を隠しながら、少女たちは恐ろしい光景を目にしました。男たちが家を取り囲み、父親を外へ連れ出し、引き立てて行ったのです。²¹

暴徒たちは、エドワードを町の広場に連れて行きました。ここでは200人以上から成る群衆が、同じく捕らわれたもう一人の聖徒、チャールズ・アレンを取り囲んでいました。その日の早くから、町民会議を率いていたラッセル・ヒックスがエドワードに近づき、ジャクソン郡を出て行かなければ、それに応じた報いを受けることになるかと告げました。

エドワードはこう言いました。「自分の信仰のために苦しまなければならないとしても、過去にほかの人々が同じく経験してきたことにすぎない。」²²また、自分は間違ったことは何もしていないとヒックスに言い、町を出て行くことを拒否しました。²³

すると、「イエスに助けをもうががいい!」という叫び声が聞こえました。²⁴暴徒はエドワードとチャールズを地面に押しつけ、ヒックスはエドワードビショップの服をはぎ取り始めました。エドワードは抵抗しました。すると群衆の一人が、ビショップのシャツとズボンをはかせたままにするようヒックスに要求しました。

その要求に折れたヒックスは、エドワードの帽子、コート、ベストを引きはがし、暴徒たちに引き渡しました。二人の男が前に出て来ると、エドワードとチャールズの全身にタールを塗り、羽根を貼りつけました。タールは熱く、二人の肌を酸のようにむしばみました。²⁵

すぐ近くでは、ビエナ・ジャックスという名の改宗者が、通りにまき散らされた『戒めの書』の原稿を拾い集めていました。ビ

エナはシオンの建設を援助するためかなりの額の蓄えを奉獻しましたが、今やすべてが水の泡となっていました。

バラバラになった原稿を抱きかかえていると、暴徒の一人が近寄づき、こう言い放ちました。「これはおまえたちがこれから経験する苦しみが始まりに過ぎない。」男は、痛めつけられたエドワードの姿を指さしました。「ほら、おまえのビショップは、タールと羽根にまみれてる。」²⁶

ビエナが顔を上げると、足を引きずりながら歩くエドワードの姿が見えました。タールが塗られていないのは、顔と手のひらだけでした。「神に栄光あれ！」ビエナはそう声をあげました。「エドワードは、タールと羽根のゆえに、栄光の冠を授かることでしょう。」²⁷

サリー・フェルプスは、その晩、帰る家もなく、とうもろこし畑の隣に放置されていた丸太小屋に身を寄せます。子供たちに助けをもらい、ベッドを作るための枝を集めました。

サリーと子供たちが働いていると、とうもろこし畑から二人の人影が現れました。薄明かりの中、サリーが目をやると、キャロライン・ロリンズとメアリー・ロリンズでした。二人の姉妹は、腕に大量の紙を抱えていました。サリーから何を持っているのかと尋ねられると、二人は集めた『戒めの書』の原稿を見せてくれました。

サリーは原稿を受け取ると、枝を積み重ねて作ったベッドの下に安全に隠しました。²⁸夜が迫る中、シオンがどこへ向かっていくのか、サリーには見当もつきませんでした。



暴徒に殺されようとも

インディペンデンスの町の至る所で暴行が勃発すると、ウィリアム・マクレランは暴徒たちを恐れて家から逃げ出し、森の中に隠れました。教会の印刷所を破壊した後、ジャクソン郡の人々はシドニー・ギルバートの店を荒らして回り、多くの聖徒を家から追いやりました。捕えられ、血が出るまで打たれた男性もいました。¹

そのような悲惨な結果を回避したいと、ウィリアムは何日も森の中にとどまりました。ある暴徒が、自分やそのほか名の知れた教会員を捕えた者に懸賞金を出しているということを知ると、西へ何キロか行った、ビッグブルー川沿いにあるホイットマー家の定住地にこっそり逃げ出し、身を隠しました。

孤独と恐怖から、ウィリアムは疑いの念にさいなまれました。モルモン書が神の言葉であることを信じてインディペンデンスにやって来たウィリアムでしたが、今や懸賞金つきのお尋ね者になっていました。暴徒に見つかったら、どうなるのでしょうか。

そのような場面で、モルモン書についての証を擁護することができるでしょうか。回復された福音に対する信仰を宣言することができるでしょうか。福音のために進んで苦しみ、命をささげることができるのでしょうか。

こうした問いに苦しんでいる時、ウィリアムは森でデビッド・ホイットマーとオリバー・カウドリに会いました。懸賞金はオリバーにもかけられていましたが、峠は越したと思えるだけの理由がありました。インディペンデンスの人々は依然として、郡から聖徒たちを追放しようとしていましたが、攻撃は止み、家に戻る教会員もいたのです。

不安を和らげようと、ウィリアムは友人たちに向かい、こう尋ねました。「わたしは目の前に示現が開かれるのを経験したことはありません。でも、お二人は見たのですよね？」ウィリアムは、真理を知る必要がありました。「神に誓って教えてください。あのモルモン書は真実なのですか。」ウィリアムはこう問いかけました。

オリバーはウィリアムを見つめて、こう言いました。「神はわたしたちに聖なる御使いを遣わし、この記録が真実であることを宣言してくださいました。ですから、わたしたちは知っているのです。暴徒に殺されようとも、わたしたちはモルモン書が真実であることを宣言しながら、死なねばなりません。」

デビッドはこう言いました。「オリバーが話したことは確かな真理です。わたしは心から、モルモン書が真実であると宣言します。」

ウィリアムはこう言いました。「わたしは二人の言葉を信じます。」²

1833年8月6日、ミズーリにおける暴力がどれほどのものであったかを知る前、ジョセフはシオンにおける迫害についての啓示を受けました。主は聖徒に、恐れることのないようにと告げられました。主は聖徒たちの祈りを聞き、記録しておられるのです。また、祈りがかなえられることを、主は聖約をもって約束されました。「あなたがたを苦しめたすべてのことは、あなたがたの益のために……ともに働く」と主は聖徒に保証しておられます。³

それから3日後、ミズーリでの暴行に関する詳細な報告を携えて、オリバーはカートランドに到着しました。⁴ 暴徒たちを鎮めるため、エドワード・パートリッジとそのほかの教会指導者は誓約書に署名し、聖徒たちが春までにジャクソン郡を離れることをインディペンデンスの人々に約束しました。だれ一人としてシオンを断念したいと思う者はいませんでしたが、誓約書に署名しなければ、聖徒は間違いなく、さらなる危険にさらされることでしょう。⁵

暴力を恐れたジョセフは、退去するという決定を承認しました。翌日、オリバーはミズーリの教会指導者に手紙を書き、別の定住地を探すよう指示しました。オリバーはこう勧めています。「賢く選ぶように。新しい地でやり直すことになっても、最終的には、シオンにとって害となることはないでしょう。」

ジョセフはこの手紙の最後に、こう付け加えています。「もしわたしが皆さんと一緒にあれば、率先して皆さんの苦しみを担ったことでしょう。わたしの霊が、皆さんを見捨てることはありません。」⁶

その後、ジョセフは何日にもわたり、心を悩ませました。ジョセフがカートランドで激しい批判にさらされていた時に、恐ろしい知らせが届いたのです。その夏、ドクター・フィラスタス・ハールバットという名の教会員が、伝道中の不道德な行為が理由

で破門されました。間もなく、ハールバットは多くの人が出席する集会でジョセフを非難し、教会の批判者から資金を集め始めました。この資金を使い、ハールバットはニューヨークへの旅を計画しました。教会を困難に陥れるのに有用な話を探すのが目的です。⁷

オハイオでの問題は差し迫ったものでしたが、ジョセフはミズーリの状況に細心の注意を払う必要があることを承知していました。暴力について深く考えた結果、ジョセフは一つのことに気がつきました。主はインディペンデンスにシオンを築くという御自身の命令を撤回された訳でもなければ、聖徒がジャクソン郡の地を手放すことを承認された訳でもなかったのです。今、聖徒たちが所有地を離れ、敵に売るなどすれば、それを再び手に入れることは不可能に近いでしょう。

何としても、ミズーリの聖徒のために具体的な指示を受けなければと感じたジョセフは、主に祈りました。「主よ、彼らを救いに来られる前に、さらに何をお求めになるのですか。」ジョセフは答えを待ちましたが、主がシオンに対する新しい指示をお与えになることはありませんでした。

8月18日、ジョセフはエドワードとそのほかの指導者にあてて、個人的に手紙を書きました。「あなたたちに何と言えばよいのか分かりません。」ジョセフはそう認めています。ジョセフは彼らに8月6日付けの啓示の写しを送り、神は彼らを危険から解放されると約束しました。「わたしは必ずそうなるという確かな聖約を神から受けています。しかし神は、その正確な達成方法をわたしの目からとどめておくことを、良しとされているのです。」ジョセフはそう証しています。

その間にも、ジョセフは聖徒たちに、主がすでに与えておられる約束を信頼するよう強く勧めました。忍耐強くあり、印刷所や店を再建し、損失を取り戻すための法的な方法を見いだすよう

勧告しました。また、約束の地を捨て去ることのないよう切に願い、町に関するより詳細な計画書を送りました。

「手にした少しの土地さえも、神の敵に与えたり、売却したりするべきではないというのが、主の御心なのです。」⁸

ジョセフの手紙は9月の初めにエドワードのもとに届き、ビショップは、聖徒たちがジャクソン郡の所有地を売るべきではないというジョセフの言葉に同意しました。⁹暴徒の指導者は、損失に対する賠償を求めるならば、聖徒に危害を加えると脅していましたが、エドワードはその夏に聖徒が耐えた不当行為に関する情報を収集し、それをミズーリ州知事のダニエル・ダンクリンに送りました。¹⁰

ダンクリン知事は、個人的には聖徒を軽蔑していましたが、「わが州では法による統治を行っている」と、法廷に苦情を申し立てるよう聖徒に勧めました。ジャクソン郡の法廷制度が平和のうちに法律を執行できない場合、聖徒は知事にその旨を伝えることができ、知事は聖徒を援助するために介入するということでした。そのときまで、知事は現地の法律を信頼するように勧めました。¹¹

知事の手紙はエドワードと聖徒に希望をもたらし、聖徒は自分たちの共同体を再建し始めました。またエドワードとシオンの教会指導者たちは、提訴を行うために近隣の郡から弁護士を雇いました。¹²聖徒は、攻撃を受けるようなことがあれば、自分たちと所有地を守ろうと決意しました。¹³

インディペンデンスの町の指導者は激怒します。10月26日、50人以上の住民グループが、聖徒をジャクソン郡からできるだけ早く強制退去させるということを投票で決めました。¹⁴

5日後の日没時、ホイットマーの定住地にいた聖徒たちは、インディペンデンスの武装した男たちが、自分たちの方に向かっていくということを知りました。リディア・ホワイトティングと夫のウィリアムは、2歳になる息子と生まれたばかりの双子の赤ん坊を連れて家から逃げ出し、教会員たちが自衛のために集まっている家に向かいました。

その晩の10時、リディアは外で騒がしい音がするのを耳にします。インディペンデンスから来た男たちが、丸太小屋を破壊していたのです。彼らは定住地の至る所に散らばり、窓から石を投げ入れ、ドアを破壊しました。男たちは、家々の上に登って屋根をはがしています。こん棒を使い、家族を家から追い出す者たちもいました。

リディアの耳に、暴徒の近づいてくる音が聞こえます。少し離れた所で、暴徒たちはピーター・ホイットマーとメアリー・ホイットマーの家の戸をこじ開けました。大勢の教会員が避難していた場所です。こん棒を持った男たちが家の中に侵入すると、叫び声が鳴り響きました。女性たちは急いで子供たちのもとへ行き、攻撃してくる者たちに憐れみを請いました。暴徒は男たちを外に連れ出し、こん棒や鞭で痛めつけました。

リディアが隠れていた家では、聖徒たちが恐怖と混乱に陥りました。武器はほとんどなく、自衛の計画も立てていなかった聖徒の中には、パニックに陥り、逃げ出し、大急ぎで近くの森に身を隠す者もいました。子供たちのことを心配したリディアは、自分の横にうずくまっていた二人の少女に双子の赤ん坊を預け、安全な所を目指して走らせました。それから息子を抱き上げると、少女たちの後を追いました。

外は大混乱に陥っていました。暴徒がさらに多くの家を破壊し、煙突を引き倒す中、リディアの横を女性や子供たちが走り去りました。ひどく痛めつけられ、流血していた男たちは、地面

に力なく横たわっていました。リディアは息子を胸にしっかりと抱き締め、森を目指して走りましたが、夫と、双子の赤ん坊を抱えた少女たちを見失いました。

森の中の隠れ場所にたどり着いたとき、リディアは双子の赤ん坊のうち、一人しか見つけることができませんでした。リディアは赤ん坊を抱き、秋の寒さに身を震わせながら、幼い息子と一緒に座り込みました。隠れ場所から、暴徒が自分たちの家を破壊する音が聞こえました。長い夜が明けゆく中、リディアは夫が定住地から無事に逃げられたのかどうか、知る由もありませんでした。

朝を迎え、リディアは恐る恐る森の外に出ました。定住地には疲れ切った目をした聖徒たちがおり、その中に、夫と行方知れずの赤ん坊を捜したのです。幸いなことに、はぐれた赤ん坊は無事で、夫のウィリアムも暴徒には捕らえられていませんでした。

定住地の別の場所でも、再会する家族の姿が見られました。攻撃を受けて殺された人はいませんでしたが、12軒近くの家が跡形もなくなっていました。その日の残りの時間、聖徒たちはがれきの中を調べ、自分たちの所有物を回収しようと努めました。また、傷を負った人々の世話をしました。¹⁵

それからの4日間、シオンの指導者は聖徒たちに、大きなグループ単位で集まり、暴徒の攻撃から自らの身を守るよう告げました。インディペンデンスからやってきた暴徒たちは、この地方全域を攻めていき、近郊の定住地を恐怖に陥れました。教会指導者は、地元の判事に暴徒たちの行為を止めさせるよう懇願しましたが、相手にされませんでした。ジャクソン郡の住民は、自

分たちの中から聖徒を一人残らず追い払おうと決心していたのです。¹⁶

やがて暴徒は、再び、以前よりもさらに激しく、ホイトマー定住地を襲いました。27歳になるフィロ・ディブルの耳に、定住地の方角から銃声が聞こえると、彼とそばにいたそのほかの聖徒たちは定住地の防御に駆けつけました。そこでは、武装して馬に乗った50人ほどの男たちが、とうもろこし畑を踏み荒らし、恐怖におののく聖徒たちをあちこちに追い立てていました。

フィロとその一行を見つけた暴徒が発砲し、一人の男性に重傷を負わせました。聖徒は一斉に撃ち返し、暴徒のうちの二人を殺し、残りを追い散らしました。¹⁷黒色火薬銃の煙が、辺りに立ち込めます。

暴徒が散っていく中、フィロは腹部に痛みを感じました。下を向くと、服が裂け、血にまみれていました。鉛の玉と大粒の散弾が当たっていたのです。¹⁸

銃と火薬を握り締め、フィロはよろめきながら家に戻りました。途中、倒壊した家にうずくまり、暴徒たちから身を隠す女性や子供を目にしました。暴徒たちは、負傷者を助ける者は皆殺しにすると脅していました。意識は遠のき、のどの渇きに苦しむ中、フィロはよろめきながら歩き、やっとのことで家族が身を隠している家にたどり着きました。

妻のセシリアは、夫の傷を見ると走って森の中に入り、必死の思いで助けを求めましたが、道に迷い、助けてくれる人を見つけることはできませんでした。家に戻ったセシリアは、ほとんどの聖徒が、5キロほど離れた所にある、コールズビルの聖徒が暮らす定住地に逃げたと言いました。¹⁹

そのほかの聖徒は地方の至る所に散らばり、とうもろこし畑に身を隠したり、果てしない大草原をさまよい歩いたりしました。²⁰

聖徒がビッグブルー川沿いで暴徒と戦っていたころ、シドニー・ギルバートは、アイザック・モーリー、ジョン・コリル、ウィリアム・マクレラン、そのほか数名の聖徒とともに、インディペンデンス裁判所で判事の前に立っていました。この男性たちは、シドニーの店で略奪行為を行った一人の男を捕らえ、その男を逮捕してもらおうとしたところ、逆にこの男から、暴行と不法監禁のために告発され、その結果、逮捕されてしまったのです。

判事が彼らの訴訟事件を審理する中、裁判所は人で溢れ返っていました。聖徒が自分たちの権利と財産を守ろうと決意していることに対する批判が町中にあふれている状況では、シドニーとその友人たちが公正な審理を受けられる可能性は無きに等しく、審理は見せかけのもののようにでした。

判事が数々の証言に耳を傾ける中、聖徒がビッグブルー川で20人のミズーリ住民を虐殺したという偽りのうわさがインディペンデンスに届きました。怒りと混乱が法廷を満たし、傍聴人は、被告人たちを首吊りにしろと叫び立てました。被告人たちを暴徒に引き渡すことを避け、また群衆による殺害から保護するべく、一人の裁判所書記官は、男性たちに牢に戻るよう命じました。²¹

その晩、激しい怒りが収まった後、ウィリアムは牢に残り、保安官と二人の副保安官が、シドニー、アイザック、ジョンの3人をエドワード・パートリッジとの話し合いに護送しました。教会指導者は、考え得る選択肢について話し合いました。すぐにもジャクソン郡を出て行かなければならないことは分かっていたのですが、土地や家を敵の手に渡るままにしておきたくはありません。最終的に、命を失うよりも、財産を失う方がよいということになりました。シオンから、去らなければならなかったのです。²²

話し合いは午前2時に終わり、保安官は被告人たちを牢に送り届けました。一行が到着すると、武装した6人ほどの男たちが待ち構えていました。

「撃つな！ 撃つな！」暴徒を見ると、保安官はそう叫びました。

男たちが銃を向けると、ジョンとアイザックは逃げ出します。暴徒の何人かが発砲しましたが、当たりませんでした。シドニーは、やって来た二人の男から、銃を胸に向けられました。一歩も退きませんでした。死ぬ覚悟をしたとき、シドニーは撃鉄がカチッと鳴るのを聞き、火薬が光るのを見ました。

がくぜんとし、傷はないかと体のあちこちを触りましたが、無傷でした。銃のうちの一つは壊れ、もう一つは不発に終わったのです。保安官と副保安官は、シドニーを急いで安全な独房に入れました。²³

今や、ジャクソン郡の至る所で戦いに向けた動員が行われていました。使者たちが地方を訪ね回り、聖徒を地域から追放しようと、武装した男たちを募っていたのです。そのころ、ライマン・ホワイトという教会員は、ある者は銃、ある者はこん棒で武装した、100人の聖徒から成る部隊を率い、被告人たちを救助するためにインディペンデンスへと向かっていました。

これ以上の流血を避けるため、エドワードは聖徒たちにジャクソン郡を離れる準備をさせ始めました。保安官が被告人たちを釈放すると、ライマンは一行を解散させました。聖徒が家を退去する間、秩序を守るために郡の民兵が召集されましたが、この民兵に属する男たちの大半は定住地への攻撃に関与した者たちであったため、さらなる暴力行為を阻止するにはほとんど何の役にも立ちませんでした。²⁴

聖徒たちに残された道は、逃げることのみでした。

11月6日、ウィリアム・フェルプスはカートランドの教会指導者あてに手紙を書きました。こう述べています。「恐ろしい状況です。男も女も、子供たちも方々に逃げ惑っています。もしくはその準備をしています。」²⁵

ほとんどの聖徒は、重い足取りで北を目指して歩き、極寒のミズーリ川を船で渡り、近隣のクレイ郡にやって来ました。散り散りになっていた家族も、そこで再会を果たします。雨風が打ちつけ、やがて雪も降り始めました。聖徒たちが川を渡ると、エドワードとそのほかの指導者たちはテントを張り、自然の猛威から身を守るための粗末な丸太小屋を建てました。²⁶

傷がひどくて逃げられなかったフィロ・ディブルは、ホイットマー定住地近くにある自宅で苦しんでいました。医師から死を宣告されるも、フィロは必死に生きようとしました。デビッド・ホイットマーは北へと向かう前、フィロに、生き長らえるという約束の言葉を送りました。その後、訪ねて来たニューエル・ナイトがベッドの傍らに座り、フィロの頭にそっと手を置きました。

フィロは、主の御霊が自分の上にとどまるのを感じました。それが体全体に広がると、自分が癒されるのが分かりました。フィロは立ち上がりました。傷口からは血がにじみ、服の一部はボロボロになっていました。着替えると、あの戦い以来、初めて外に出ました。頭上には、夜空を猛烈な速さで通り過ぎる無数の流れ星が見えました。²⁷

ミズーリ川沿いの野営地で、聖徒たちはテントやあばら家から顔を出し、その流星群を目にしました。エドワードと娘のエミリーは、星が自分たちの周りで滝のように、激しい夏の雨のように落ちるのを目の当たりにして喜びました。エミリーには、苦難にある聖徒を励ますために、神が光を送ってくださったかのように思えました。

父親のエドワードは、それらの流れ星は神が存在しておられることの証であり、幾多の艱難の中にあっても、喜ぶべき理由であると思いました。²⁸

カートランドでは、ドアをノックする音で預言者が目を覚まします。次のように語る声を耳にしたのです。「ジョセフ兄弟、起きてください。天のしるしが見えますよ。」

ジョセフが起きて、外に目をやると、流星が空から電ひょうのように落ちていくのが見えました。「主よ、あなたの業は何とすばらしいことでしょう。」ジョセフはそう叫びました。救い主が戻られ、千年の間、平和のうちに統治される再臨の前に、星が天から落ちるといふ新約聖書の預言を思い出したのです。

「僕であるわたしを憐れんでくださることに感謝します。」ジョセフはそう祈りました。「おお主よ、わたしをあなたの王国にお救いください。」²⁹



イスラエルの陣営

流 星群のあった夜以来、幾日もの間、ジョセフは何か奇跡的な事柄が起こるのを期待していました。しかし、その後の生活に何ら変わりはなく、そのほかのしるしも天には現れませんでした。「少し悲しい気持ちがする。」ジョセフは日記の中でそう打ち明けています。主がシオンの聖徒に向けて新たな啓示を与えられて以来、3か月以上が過ぎ去りました。ところがジョセフは、聖徒たちをどのように助ければよいのか、いまだ分からずにいたのです。天が閉ざされているかのように思えました。¹

ジョセフの不安に拍車がかかります。ドクター・フィラスタス・ハールバットは、近ごろパルマイラとマンチェスターから、ジョセフの若いころについての話を持ち帰っていました。中には、でたらめな話や誇張された話も混じっていました。そのような話がカートランドを出回る中、ハールバットは自分の手をジョセフの血で洗うと誓いました。預言者は、やがてボディガードを使い始めます。²

流星群から1週間ほどがたった1833年11月25日、オーソン・ハイドがカートランドに到着し、ジャクソン郡からの聖徒の退去について報告しました。³悲惨な内容でした。聖徒が苦しみ、約束の地を失うのを、なぜ神はそのままにされるのか、ジョセフはその理由が理解できませんでした。また、シオンの将来を予測することもできません。ジョセフは導きを求めて祈りましたが、主は、安らかにしていて、御自分を信頼するようにと言われただけでした。

ジョセフはすぐさまエドワード・パートリッジに手紙を書きました。「わたしはシオンが、主の定められたときに贖われることを知っています。」ジョセフはそう証しています。「しかし、シオンの清めと艱難、苦難の日々がどれほど続くのか、主はわたしの目から隠しておられます。」

そのほか提供できる情報はほとんどありませんでしたが、1,300キロもの隔たりがあったにもかかわらず、ジョセフはミズーリの友人たちを慰めようと努めました。「皆さんの苦しみについて知り、わたしたちの心には深い同情の念が湧いています。」ジョセフはそう書いています。「こうした大きな試練と苦しみがあったとしても、神の計らいによって、だれ一人としてキリストの愛から離れることがありませんように。」⁴

ジョセフは祈り続け、12月、ついにシオンの聖徒に向けた啓示を受けました。主は、聖徒が苦しみを受けたのは罪のためであると宣言されました。しかし、主は彼らを憐れみ、見捨てることはしないと約束されました。「彼らは必ず懲らしめを受け、……アブラハムのように、試みられなければならない。」主はそうジョセフに語られました。「懲らしめに耐えないで、わたしを否定する者は皆、聖められることはあり得ないからである。」

以前と同様、主は聖徒たちに向けて、シオンの土地を購入し、失ったものを取り戻すための法的かつ平和的な方法を求めるよう指示されました。「シオンがその場所から移されることはない。」主はそう宣言されました。「生き残っている心の清い者は帰って来る。彼らとその子孫は、…… 彼らの受け継ぎの地にやってくるであろう。」⁵

啓示は、インディペンデンスの住民との平和的な交渉を強く勧めましたが、それと同時に、シオンは力によって取り戻せることを主は明らかにされました。主は、僕たちが怠惰であったために奪われ、敵によって破壊された果樹園のたとえを話しました。果樹園の主人はその状態を目にすると、義務を怠った僕たちを叱責し、行動するよう命じました。

主はこう命じられたのです。「僕たちの残りを集めて、わたしの家の勇士であるすべての…… 者たちを率いて行きなさい。…… そして、すぐにわたしの果樹園の地へ行き、果樹園を取り戻しなさい。」主はたとえの意味を説明されませんでした。しかし、このたとえはシオンの贖いに関する主の御心を示すものであることを、聖徒たちに告げられたのです。⁶

2 か月後、パーリー・プラットとライマン・ホワイトが、ミズーリに関する多くの知らせを携えてカートランドにやってきました。川を挟んでジャクソン郡の向かい側に住む人々は好意的で、労働の代価として食料や衣服を与えてくれましたが、聖徒たちはいまだ散在しており、気を落としていました。そして、シオンがいつどのようにして敵から救われるのかを知りたいと望んでいました。⁷

報告を聞くと、ジョセフは椅子から立ち上がり、シオンに赴くと宣言しました。6 か月の間、ジョセフはカートランドの問題に対処しながら、現地の聖徒に励ましの言葉と希望を与えてきました。

この度は、ミズーリの聖徒のために何かをしたいと思ったのです。そして、連れ立ってくれる者を募りました。⁸

1834年4月、ニューヨークにある小さな支部の集会で、27歳になるウィルフォード・ウッドラフは、パーリー・プラットから、主がジョセフ・スミスに与えられた最新の啓示について聞きました。その啓示は、預言者とともにミズーリへ行軍する男性を500人集めるよう呼びかけるものでした。「シオンの贖いは力によって成し遂げられなければならない。だれもわたしのために自分の命を捨てるのを恐れてはならない」と主は宣言されたのです。⁹

パーリーは支部の若者や中年の男性たちに、シオンに向かうよう招きました。可能な者は皆、行くように期待されました。

集会の終了後、ウィルフォードはパーリーに自己紹介をしました。ウィルフォードとその兄アズモンは、3か月前に教会に加わりました。二人ともアロン神権を有する教師です。ウィルフォードは喜んでシオンに行くと言いましたが、出発前に負債を支払い、売掛金を回収する必要がありました。パーリーはウィルフォードに対し、財政的な諸事を片付けて進軍に加わるのはあなたの義務であると告げました。¹⁰

その後、ウィルフォードはシオンに行くことについてアズモンに話しました。主は、健康で丈夫な教会のすべての男性が進軍に参加することを求められましたが、アズモンは家と家族、農場を離れる気にはなれず、居残ることにしました。一方のウィルフォードは結婚しておらず、預言者に同行してシオンに向かいたいと思いました。¹¹

数週間後、ウィルフォードはカートランドに到着し、ブリガム・ヤングとヒーバー・キンボールに会いました。この二人は最近、家族とともにオハイオに移り住んだのでした。ヒーバーは陶

器師で、妻バイレートとの間に二人の子供がいました。ブリガムは大工で、二人の幼い娘がいました。最初の妻ミリアムが亡くなった後、つい先ごろ、メアリー・アン・エンジェルという名の改宗者と結婚したばかりでした。¹² 家族に犠牲を強いることとなるにもかかわらず、二人の男性はともに、進んで行軍に参加しました。

メアリー・アンのいとこ、ジョセフ・ホルブルックとチャンドラー・ホルブルックも、それぞれの妻ナンシー、ユーニス、子供たちを引き連れ、行軍に参加することにしました。陣営には、ミズーリへと行軍する間、料理や洗濯、病人や怪我人の看護をする数人の女性たちがおり、ナンシーとユーニスは彼女たちを助けようと計画しました。¹³

家に残った女性たちは、別の方法で陣営を支援しました。シオンへと旅立つ少し前、ジョセフはこう言いました。「シオンを整えるための資金が幾らか必要です。そして、それが手に入られるということをわたしは知っています。」翌日、ジョセフはボストンのボース姉妹という人物から 150 ドルを受け取りました。¹⁴

5月1日、ウィルフォードと少数の聖徒は、シオンに向けて旅立ちました。ジョセフ、ブリガム、ヒーバー、ホルブルックは、そのほかおよそ 100 人の参加者を引き連れて、何日か後にカートランドを出発し、途中、ウィルフォードと合流しました。

集まった隊員は、主がお求めになった 500 人にはほど遠い人数しかいませんでしたが、¹⁵ 主の言葉を成就するという決意を胸に、一行は意気揚々と西を目指しました。

ジョセフはこの一団に高い期待を寄せ、イスラエルの陣営と呼びました。カナンの地を得るために戦った古代イスラエル人がそうであったように、イスラエルの陣営も武装し、戦う覚悟ができて

いましたが、ジョセフは紛争を平和的に解決することを望んでいました。ミズーリの政府役人が現地の教会指導者に語ったところによれば、ダנקリン知事は聖徒たちが失った土地に帰る際に、喜んで州軍を送り、同行させるということでした。ところがダークリン知事は、暴徒が再び聖徒を追い払うのを阻止することは約束しませんでした。¹⁶

ジョセフは、イスラエルの陣営がミズーリに到着次第、知事に支援を要請し、州軍と協力して聖徒たちをジャクソン郡に戻すつもりでした。聖徒たちを敵から安全に守るため、陣営は1年の間、シオンに残る予定です。¹⁷

陣営内のだれもが養いを得られるように、陣営の隊員は全員のための基金にお金を預けました。旧約聖書の様式に則って、ジョセフは男性たちを部隊に分け、それぞれの隊長を選びました。¹⁸

イスラエルの陣営がさらに西へと移動すると、ジョセフはこの小規模の兵力で敵の領域に入るのを懸念しました。ジョセフの兄ハイラムとライマン・ホワイトは、カートランド北西部にある複数の支部から追加の男性たちを募っていましたが、彼らはまだイスラエルの陣営と合流しておらず、ジョセフは彼らがどこにいるのかも把握していませんでした。ジョセフにはもう一つの心配がありました。スパイが陣営の動きを監視し、その人数を数えていたのです。¹⁹

6月4日、1か月の行軍の後、陣営はミシシッピ川に到着しました。ジョセフは長旅により疲れ果て、体も痛んでいましたが、待ち受けている試練に立ち向かう用意はできていると感じていました。²⁰陣営の動きに関する報告やうわさがすでにミズーリまで届いていること、また何百という定住者が戦いの準備をしていることをジョセフは知りました。聖徒たちには彼らに立ち向かうだけの強さがあるだろうか、ジョセフは考えます。

川の土手に座ると、エマに手紙を綴りました。「陣営はこれ以上期待できないほど良い状態ですが、人数と物資がまったくもって少なすぎます。」²¹

その翌日は蒸し暑く、イスラエルの陣営は川を渡ってミズーリへ行くために待機していました。ミシシッピ川には2キロ以上の幅があり、移動のために陣営が携えていたボートは一艘だけでした。待つ間、隊員の中には狩りや釣りに出かける者もいれば、退屈さを紛らそうとしたり、夏の日差しを避けるために日陰を探したりする者もいました。

陣営は川を渡るまでの2日間、退屈な時間を過ごしました。2日目が終わるころには、疲れ果てた聖徒たちが苛立ちを募らせていました。今や自分たちはミズーリにいる状況下であり、突然の攻撃を恐れる者も大勢いました。その夜、ジョセフの番犬が皆を驚かせました。陣営に到着した最後の部隊に向かって吠え出したのです。

到着した部隊の隊長、シルバスター・スミスは、吠え続けるならその犬を殺すと脅しました。ジョセフは犬をなだめましたが、シルバスターと彼の部隊は、翌朝まで不平を言い続けました。²²

彼らの不平を耳にしたジョセフは、陣営の隊員を召集し、こう宣言しました。「わたしは陣営内にある態度を指摘します。そのような態度を陣営からなくしたいというのがその理由です。」ジョセフは前夜からのシルバスターの行動をまねし始め、犬に対する隊長の脅しを繰り返してみせました。「こうした態度が、世界に分裂と流血を生み出すのです。」ジョセフはそう言いました。

ジョセフと何の縁もゆかりもないシルバスターは、不満げにこう言いました。「その犬が俺を噛んだら、必ず殺すからな。」

ジョセフはこう言いました。「犬を殺すなら、わたしはあなたを鞭打ちます。」

「鞭打たれたら、自分の身を守るまでだ。」シルベスターがこたえます。²³

陣営は、二人の男性がにらみ合うのをじっと見ていました。それまで陣営内で争いが起こったことはありませんでしたが、何週間も行軍を続けたことで、皆が神経をすり減らしていました。

ついに、ジョセフはシルベスターに背を向け、自分と同じように陣営内の雰囲気を感じるかと思ふかと聖徒に尋ねました。ジョセフは彼らに対して、その振る舞いが犬のようだと言いました。「人は決して獣と同じレベルに身を落としてはなりません。」ジョセフはそう言いました。「それよりも上でなければならぬのです。」²⁴

その後、陣営は落ち着きを取り戻し、部隊はミズーリのさらに奥深くへと進んでいきました。ナンシー・ホルブルックとユニース・ホルブルックは忙しく日々の務めを果たしていましたが、ジャクソン郡に一步近づく度に、自分たちの身がさらなる危険にさらされることを理解していました。²⁵

陣営の主力部隊がミシシッピ川を渡って間もなく、ハイラム・スミスとライマン・ホワイトが補充兵を引き連れて到着し、陣営の隊員数は200人以上にまで増えました。²⁶陣営の指導者たちは、依然として攻撃されることを懸念していました。ジョセフは家族のある男性たちに、妻や子供たちのための避難場所を探しに行くように言いました。

陣営の女性たちの中には、取り残されることに反対する者もいました。しかし、男性たちが今まさに出発しようというとき、ジョセフは全員を召集します。ジョセフはこう言いました。「もし

姉妹たちが陣営とともに苦しみに耐えても構わないというのであれば、一緒に付いて行ってもよいでしょう。」²⁷

ナンシー、ユーニス、陣営のそのほかの女性たちは喜んでついて行くと答え、ジョセフが、女性たちも行軍を続けるという選択を与えてくれたことをうれしく思いました。²⁸

数日後、パーリー・プラットとオーソン・ハイドが、悪い知らせを携えて陣営にやって来ました。ダンクリン知事が、聖徒に対する州軍の支援提供を拒否したというのです。²⁹ 知事の助けがなければ、ミズーリの聖徒たちが何事もなくシオンの地に戻るよう助けることはできないと、陣営の皆が承知していました。それでも、ジョセフと隊長たちは行軍し続けることを決めました。ミズーリ川の北に位置するクレイ郡には追いやられた聖徒たちが滞在していましたが、彼らのもとへ行き、ジャクソン郡の人々と和解交渉を行えるよう助けることを期待したのです。³⁰

イスラエルの陣営は、ミズーリ中央部の大草原を横断しました。目的地まで残り1日という所で、黒人奴隷と思しき女性が、陣営に向かって不安げに叫びました。「ここには男たちが何人か待ち伏せしていて、今朝、あんたらが通ったら殺すつもりだよ。」彼女はそう言いました。³¹

陣営は慎重に行軍しました。幌馬車に問題があり、二つに分岐するフィッシング川を見下ろす丘の上で、一晩足止めを食うことになりました。追いやられた聖徒たちのいる所までは、まだ16キロの道のりがあります。テントを張っていると、馬のひずめのけたたましい音が聞こえ、5人の男たちが陣営に乗り込んできました。その見知らぬ男たちは武器を振り回しながら、300人以上の男たちが、聖徒を皆殺しにするべくこちらへ向かっていると豪語しました。³²

イスラエルの陣営に、緊張感が広がっていきます。人数が劣勢であると分かると、ジョセフは周囲に見張りを配置しました。攻撃が差し迫っていることは明らかでした。一人の男性は、こちらから暴徒に打って出ることを願い出ました。

「だめです」とジョセフは答えました。「静かに立って、主の救いを見ようではありませんか。」³³

頭上には、重たげな灰色の雲が広がっていました。20分後、激しい雨が陣営に降り注ぎ、テントから出てきた男性たちは、急いでより良い避難所を捜しました。水かさが増し、下流に流れ込んだため、フィッシング川の土手は消えてなくなりました。³⁴風が陣営に激しく吹きつけ、木々をなぎ倒し、テントをひっくり返していきます。空にはまばゆい稲光がひらめいていました。

ウィルフォード・ウッドラフたちは付近に小さな教会堂を見つけ、^{ひょう}雹がその屋根に打ちつける間、身を寄せ合いました。³⁵しばらくするとジョセフが教会堂に飛び込んできて、帽子と衣服から水を振り落としました。「皆さん、このことには意味があります。」ジョセフは大声で言いました。「この嵐は神が起こされたものです。」

眠ることができなかった聖徒たちは、長椅子に横になり、一晩中賛美歌を歌いました。³⁶朝になってみると、テントと所持品は水浸しになり、陣営中に散乱していました。しかし、修理ができないほどに破損したものは一つもなく、暴徒から攻撃されることもありませんでした。

川の水かさが依然として増え続けていたため、陣営は向こう岸にいる敵から分断されたのでした。³⁷

その後の数日間、イスラエルの陣営はクレイ郡の聖徒たちと連絡を取りました。一方ジョセフは、周辺の郡からやってきた役人

と会合を持ちました。行軍の目的について説明し、シオンの聖徒たちを弁護したのです。「様々な困難の解決を切に望んでいます。」ジョセフは役人たちにそう言いました。「わたしたちが望むのは、すべての人々と平和に暮らすことです。わたしたちが求めるのは、平等の権利、それだけです。」³⁸

役人たちは、同胞である市民が抱いている怒りをなだめることに同意しました。しかし、ジャクソン郡に入ることをないよう陣営に対して警告しました。聖徒がインディペンデンスへ行軍したら、血で血を洗う戦闘が始まる恐れがあるというのです。³⁹

翌日の6月22日、教会指導者との評議会で、ジョセフ・ミスはイスラエルの陣営に関する啓示を受けました。主は、隊員たちがささげた犠牲を受け入れられました。しかし、天の力を得ることに自分たちの努力を向け直すよう命じられたのです。主はこう宣言されました。「日の栄えの王国の律法の諸原則によらなければ、シオンを築き上げることはできない。」

主は、神の御心を行うために学びや経験を通して自らをよく備えるまで、シオンの贖いを待つよう聖徒たちに命じられました。主はこのように説明されました。「わたしの長老たちが高い所から力を授けられるまで、これは成し遂げられない。」この高い所からの力、すなわちエンダウメントは、主の宮であるカートランド神殿で授けられるというのです。

しかし、主はイスラエルの陣営の隊員として行軍した人々を喜ばれました。「わたしは彼らの祈りを聞いた。そして、彼らのささげ物を受け入れる。信仰の試練として、彼らがここまで連れて来られることは、わたしにとって必要であった。」⁴⁰

啓示を耳にした後、陣営の隊員の中には、主の言葉としてそれを受け入れる者もいましたが、異議を唱える者もいました。その啓

示が、ミズーリの聖徒たちのためにもっと多くのことを成す機会を認めないものだと感じたからです。戦わずして家に帰らなければならぬことに對し、怒りや恥を抱く人もいました。⁴¹

それから間もなくして陣営は解散し、わずかながら残った陣営の共有基金が隊員に分け与えられました。陣営に属する人々の中には、ミズーリに残って働き、聖徒たちがもう一度やり直す手助けをしようと計画する人もいれば、ブリガムやヒーバーのように、家族のもとに帰り、神殿を完成させ、エンダウメントの力を受けようと備える人もいました。⁴²

陣営がシオンを贖うことはありませんでしたが、ウィルフォード・ウッドラフは行軍を通して得た知識に感謝しました。ウィルフォードは預言者とともに1,600キロ近くを旅し、彼が神の言葉を明らかにする様子を目の当たりにしてきました。⁴³この経験を通じて、福音を宣べ伝えたいという気持ちにもなりました。

ウィルフォードは自分が将来、伝道に出るかどうかは分かりませんでした。ミズーリに残り、主に求められることをすべて行おうと決心したのでした。⁴⁴



教導の業の管理人

イスラエルの陣営の解散を進めていたとき、壊滅的なコレラの大流行が陣営の隊員たちを襲いました。ほんの数時間前には元気だった聖徒たちが倒れ、動けなくなったのです。彼らは繰り返し嘔吐し、激しい腹痛に苦しみました。陣営は病人のうめき声に満ち、多くの男性が、弱ったために警備の任務を果たせなくなりました。

ナンシー・ホルブルックは、最初に病気になった人の一人でした。義理の姉ユーニスも、間もなくひどい筋肉のけいれんに襲われました。¹ウイルフォード・ウッドラフは昼夜を問わず、隊にいた病人の世話をしました。²ジョセフと陣営の長老たちは病人に祝福を与えましたが、コレラは間もなく、彼らの多くにも同じように襲いかかりました。ジョセフも数日後に具合が悪くなり、生き延びられるのか分からないまま、テントの中でぐったりとしていました。³

人々が死を迎え始めると、ヒーバー・キンボールとブリガム・ヤングたちは毛布で遺体をくるみ、近くの小川に沿って埋めました。⁴

コレラは続けて数日間蔓延しましたが、7月の初旬までには終わりを告げました。それまでに、60人以上の聖徒たちが体調を崩しました。ナンシー、ユース、そして陣営内のほとんどの人と同じように、ジョセフも回復しました。しかし、シドニー・ギルバート、また陣営内の数少ない女性の一人、ベッツィー・パリッシュを含む12人以上の聖徒たちがこの大流行で亡くなりました。ジョセフは犠牲者を追悼し、その家族とともに悲しみました。最後に亡くなったのは、預言者のいとこ、ジェシー・スミスでした。⁵

死に瀕したジョセフは、自分の命がいかに儂いものであるかを思い知らされました。28歳だったジョセフは、神から与えられた使命を全うできるのかと不安を抱きます。⁶もしジョセフが今死ねば、教会はどうなるのでしょうか。教会は、ジョセフの死後も継続していけるほど、堅固になっているのでしょうか。

主の指示に従い、ジョセフは教導の業の重責を分担するため、教会指導者の職務にすでに変更を加えていました。このころには、シドニー・リグドンとフレデリック・ウィリアムズが、教会の大管長会でともに働いていました。また、ジョセフはシオンのステーク、すなわち聖徒が集まる公式の場所としてカートランドを指定しました。⁷

最近では、ペテロが古代においてどのように主の教会を組織したかに関する示現を受け、ジョセフは自分が不在の間にステークを管理する手助けをするよう、カートランドで12人の大祭司からなる高等評議会を組織しました。⁸

コレラが収まって間もなく、ジョセフはさらに教会を整えました。1834年7月、ジョセフはクレイ郡で教会指導者たちと会い、ミズーリにおける高等評議会を組織し、二人の顧問ウィリアム・フェルプスとジョン・ホイットマーとともに教会を管理するよう、デビッド・ホイットマーを招きました。⁹それから、ジョセフはカートランドへ向かいました。神殿を完成させ、聖徒たちがシオンを贖う力を授かるエンダウメントを受けるためです。

ジョセフは、大きな問題が立ちはだかっていることを承知していました。その春カートランドを離れる時、神殿の砂岩壁は1.2メートルでした。数人の熟練工が町に到着すると、ジョセフは主の宮に関する主御自身の計画を、聖徒たちが実現してくれるだろうという希望を抱きました。ところが聖徒たちは、インディペンデンスやその周辺地域において、印刷所、店、何エーカーもの土地を失い、財政的な打撃を受けていました。ジョセフ、シドニー、そのほかの教会指導者も、カートランド神殿の用地を購入し、イスラエルの陣営の資金のために多額の借入れをし、大きな負債を抱えていました。

教会の運営が行き詰まり、低迷する中、聖徒たちから寄付を募る確立されたシステムもなく、教会は神殿にかかる費用を支払うことができませんでした。ジョセフとそのほかの指導者たちが支払いに遅れれば、この神聖な建物は債権者の手に渡ってしまいます。神殿を失ってしまったら、エンダウメントから力を授かり、シオンを贖うことなどできるのでしょうか。¹⁰

カートランドでは、神殿の建設に関して、シドニー・リグドンがジョセフ・スミスと同じく不安を抱いていました。「わたしたちは、定められたときまでにこの建物を完成させるべく、あらゆる

努力を払うべきです。」シドニーは聖徒たちに向けて話します。「この神殿に、教会と世界の救いがかかっているのです。」¹¹

ジョセフがミズーリにいる間は、シドニーが神殿建設の進捗を見守っていました。建設に携わる若者が不足していたため、建設監督者のアルテムス・ミレットは、建設作業のために年配の男性、女性や子供たちも募集しました。多くの女性が、通常は男性が行う仕事を引き受けて石工を助け、神殿に使う石を採石場から運ぶために台車を押しました。ジョセフとイスラエルの陣営がカートランドに戻るころには、壁は基礎からかなりの高さまで建設されていました。

陣営の帰還により、1834年の夏から秋にかけては建設に拍車がかかりました。¹²聖徒たちは来る日も来る日も、石を切り出し、神殿用地に運び、神殿の壁を築きました。聖徒たちが近くの小川から石を切り出すときには、ジョセフも一緒に働きました。何人かは教会の製材所で働き、はりや天井、床に用いる木材を準備しました。そのほかの人々は必要とされる場所で、木材や石を足場まで持ち上げました。¹³

その間、エマをはじめとする女性たちは、作業をする人々のために服を縫ったり、食事を作ったりしました。ヒーバーの妻バイレート・キンボールは、45キロの羊毛を糸に紡ぎ、機はたを織って布にし、自分のためには一足の靴下も作らず、働く人のために服を作りました。

神殿を完成させようという聖徒たちの情熱は、シドニーを元気づけましたが、教会の負債は日ごとに膨らんでいました。シドニーは多額の融資の多くに署名しており、教会がそれを支払えない場合、自分が経済的な破綻に陥ることを承知していました。聖徒たちの貧困、また神殿を完成させるために彼らが払っている犠牲を目にして、シドニーは聖徒たちが建設を終えるまでの材料、あるいは決意を保てないのではないかと恐れました。

この不安に打ち勝とうと、シドニーは時折神殿の壁の頂上に上り、神殿を完成させるために必要な資金を、聖徒たちにもたらせてくださるよう神に嘆願しました。祈りながら、目に溢れる涙が、シドニーの足もとの石に落ちていくのでした。¹⁴

カートランドから 800 キロ北東では、21 歳のキャロライン・ティペットが、ニューヨークからミズーリへ持ってきた衣服やそのほかのものに加え、注意深く大金をしまいでんでいました。彼女と弟のハリソンは西部へ移住しているところで、ジャクソン郡の近くに落ち着きたいと思っていました。二人は聖徒たちに対する迫害について聞きましたが、ミズーリに集まるようにという主の戒めに従って、教会に敵対する者たちより先にシオンの土地を購入したいと思っていました。¹⁵

この戒めは、聖徒たちがシオンから排除されたと知った後に、ジョセフが受けた啓示の一部でした。「ジャクソン郡、そしてその周りの郡で購入することのできるすべての土地を購入〔しなさい〕。資金は寄付ということになっていました。「すべての教会はその金銭をすべて集めなさい。…… 高潔な人々、すなわち賢明な人々を任命し、彼らを派遣してこれらの土地を購入しなさい」と主は指示されました。¹⁶

キャロラインの支部の指導者はこの啓示について知ると、ミズーリに土地を購入するためにお金を集めることに関して、主の助けを得るために断食して祈るよう、小さな聖徒のグループに呼びかけました。支部の会員の中には、この資金のために多額の現金や財産を寄付した者もいました。多くの人々は数ドルを寄付しました。

キャロラインが資金として提供できたのは、約 250 ドルでした。それは、支部内で寄付されたうち最も多い金額であり、その

ような額を彼女が払えるとはだれも思っていませんでした。しかし、彼女はそれが約束の地を贖ううえで聖徒たちの助けになることを知っていました。彼女が寄付すると、合計 850 ドル近くというかなりの金額になりました。

集会後、ハリソンと、いとこのジョンが、土地を購入するためにミズーリへ向かうよう選ばれました。キャロラインは彼らに同行し、寄付したお金を守ることに決めました。ジョンが仕事に区切りをつけ、家族が荷馬車と馬を整えると、3人はミズーリへと出発する準備が整いました。

荷馬車に乗り込むと、キャロラインは西部での新しい生活に期待を膨らませました。ティベット家族は途中、カートランドにとどまる計画だったため、支部の指導者は預言者への紹介状を渡してくれました。お金の出所とその使用意図を説明するためです。¹⁷

1834年の秋の間、ジョセフとそのほかの教会指導者たちは、神殿用地のための支払いをますます滞らせ、負債の利子は積み重なるばかりでした。神殿建設に時間をささげていた幾人かは、教会の財政的な負担を何とか軽くしようと無償で働きました。家族に現金や物品の余剰分があれば、それらを神殿のために教会にささげることもありました。¹⁸

教会内外の人々が、神殿の建設を前進させるため、融資しているお金の返済期間を延長しました。寄付と貸付金で順に資材の支払いをしました。それができなければ、働いていた人を解雇しなければならなかったところでした。¹⁹

こうした努力により、神殿の壁は高くそびえ、その年の最後の月には、木工職人が上階のほりに取りかかるまでになりました。

た。しかし、資金繰りは依然として厳しい状況にあり、教会指導者たちはさらなる資金を求めて常に祈っていました。²⁰

12月のはじめ、ティペット一家がカートランドに到着し、ハリソンとジョンは支部からの手紙を高等評議会に届けました。冬は間近に迫っており、彼らはミズーリへの旅を続けるべきか、冬をカートランドで過ごすべきか、評議会に尋ねました。話し合いの後、高等評議会は春までオハイオにとどまることを勧めました。

資金に窮乏していた評議会は、この若者たちに、春の出発前までに返す約束で、教会に幾らかお金を融資してくれるように頼みました。ハリソンとジョンは、支部の850ドルの一部を教会に貸すことに同意しました。その大部分はキャロラインの寄付だったため、評議会は彼女を集会に呼び、融資の条件について説明しました。キャロラインは快諾します。

次の日、ジョセフとオリバーは喜びに満たされ、ティペット家族がもたらした財政的な援助を主に感謝しました。²¹

その冬、教会はさらなる借金と寄付を重ねましたが、膨らむ神殿の費用を賄うには十分でないことをジョセフは承知していました。しかし、キャロライン・ティペットと家族は、遠くに暮らす教会の支部の多くの聖徒たちが、主の業における自分たちの役割を果たしたいと望んでいることを伝えました。新年になると、ジョセフは聖徒たちが力を授かる神殿を完成させるために、これらの支部を強め、彼らの助けを求める方法を見いだす必要があることに気づきました。

その答えは、ジョセフが数年前に受けていた啓示にありました。オリバー・カウドリとデビッド・ホイットマーに、世に福音を説く十二使徒を見いだすよう命じたものです。彼らは、新約聖書

の使徒たちのように、キリストの特別な証人として行動する人々です。主の御名によってパプテスマを施し、改宗者をシオンの支部に集めるのです。²²

定員会として、十二使徒は巡回高等評議会としても機能し、オハイオとミズーリの高等評議会の管轄外地域を教え導きます。²³ この割り当てにおいて、彼らは伝道活動を導き、支部を監督し、シオンや神殿のための資金を集めることができました。

2月上旬のある日曜日、ジョセフはブリガム・ヤングとジョセフ・ヤングを自宅に招きました。「ここから適度な距離内の支部の地域に住むすべての兄弟たちに、次の土曜の総大会に集まるよう知らせてください」とジョセフは彼らに言いました。その大会で、12人の男性が新しい定員会に指名されると説明しました。

「あなたはその中の一人です」とジョセフはブリガムに告げました。²⁴

翌週の1835年2月14日、カートランドの聖徒たちは大会に集まりました。ジョセフの指示の下、オリバー、デビッド、同じくモルモン書の証人であるマーティン・ハリスが、十二使徒定員会の会員を発表しました。召された人々はこれまでに伝道の召しを受けており、そのうちの8人はイスラエルの陣営に参加していました。²⁵

トーマス・マーシュとデビッド・パッテンはどちらも30代半ばで、十二使徒の中では最年長でした。トーマスは初期の改宗者の一人で、最初の版が印刷中であつたころ、モルモン書の証を得た人物です。デビッドは改宗して以来、3年の間に何度も伝道に出ていました。²⁶

ジョセフが1週間前に明言したように、ブリガムも定員会に召されました。親友のヒーバー・キンボールもその一人です。二人ともイスラエルの陣営において、隊長として忠実に仕えた人々でした。これからブリガムは大工、ヒーバーは陶器師としての仕事を再び離れ、主の用向きを受けて働くことになります。

新約聖書の十二使徒、ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネのように、二人一組の兄弟たちが十二使徒に召されました。パーリーとオーソン・プラットは東へ西へと福音を広めましたが、今度はあちらこちらの教会支部で仕えるべく、献身することとなりました。ルーク・ジョンソンとライマン・ジョンソンは南と北に福音を広めましたが、今度は使徒の権限を携えて出て行くのです。²⁷

主は教養のある人も、そうでない人もお選びになりました。オーソン・ハイドとウィリアム・マクレランは預言者の塾で教えていた人々であり、定員会に確かな知性をもたらしました。若干23歳でありながら、ジョン・ボイントンは宣教師として偉大な成功を目にしており、十二使徒の中で唯一大学教育を受けた人物でした。預言者の弟であるウィリアムは、同様の正式な教育の恩恵を受けてはいませんでしたが、情熱的な話し手であり、反対意見に直面しても恐れることなく、貧しい人々がいればすぐに擁護するような人物でした。²⁸

十二使徒を召した後、オリバーは特別な責任を彼らに与えました。「顔と顔を合わせて神を見るまで、あなたがたは努力をやめてはなりません。…… 信仰を強め、疑いや罪、一切の不信仰を捨ててください。そうすれば、あなたがたが神に近づくのを何も妨げることができないでしょう。」

オリバーは、彼らが遠い国々の民に福音を宣べ伝え、シオンの避け所へと、神の子供たちを大勢集めるだろうと約束しました。

「あなたがたは、この教導の業を管理する者となるでしょう」と彼は証しました。「わたしたちにしかできない業があります。簡潔で、ありのままの福音を宣べ伝えなければなりません。わたしたちはあなたがたを、神とその恵みの言葉に委ねます。」²⁹

十二使徒を組織して2週間後、ジョセフは別の神権定員会を組織し、十二使徒に加わって福音を広め、支部を強め、教会への寄付を集められるようにしました。七十人定員会と呼ばれたこの新しい定員会の会員たちは、皆イスラエルの陣営の参加者でした。彼らは新約聖書の七十人の弟子たちの例に倣って、イエスの言葉を宣べ伝えるため、あらゆる町に二人一組で旅することになっていました。³⁰

主は定員会を管理するために、7人の男性を選ばれました。中には、イスラエルの陣営の行軍の際、預言者と論争した隊の隊長であったジョセフ・ヤングとシルベスター・スミスも含まれていました。カートランドの高等評議会の助けにより、二人はその夏の不一致の原因を解決し、償いをしました。³¹

彼らが召されて間もなく、預言者は新しい定員会に向けて話しました。「あなたがたの中には、ミズーリ州で戦わなかったことについて、わたしに対して怒りを感じている人がいます。しかし、聞いてください。神はわたしたちが戦うことをお望みになりませんでした。」神がミズーリに彼らと呼び寄せたのは、彼らが喜んで犠牲を払い、シオンに命をささげ得るかを試し、信仰の力を増し加えるためであったと、ジョセフは説明しました。

「神は、自分の命をささげ、アブラハムのような犠牲を払った人でなければ、地上の国々で福音の扉を開けるための12人や、その指示の下に働く70人を召して、神の王国を築き上げることはおできにならなかったのです。」³²



わたしを見捨てることなく

1835年の夏の間、使徒たちが東部諸州やカナダに向けて伝道に出発する一方で、聖徒たちは神殿を完成させ、力を授かるのに備えるため、ともに働きました。ミズーリの聖徒たちが苦しんだ暴力や損失を免れて、カートランドでは改宗者が町に集まり、主の業に力を尽くすことによって霊的に成長し、繁栄しました。¹

7月になると、「エジプトの遺物」と題するポスターが町に貼り出されました。エジプト人の墓の中から、何百ものミイラが発見されたというのです。数体のミイラとともに、古代のパピルスの巻き物が合衆国中で展示され、大勢の観客を集めていました。²

遺物を展示していたマイケル・チャンドラーは、ジョセフのことを耳にし、遺物を購入するのではないかとカートランドへやって来ました。³ジョセフはミイラを調べてみましたが、巻き物の方に興味がありました。巻き物には、見慣れない文字や人間、船、鳥、蛇などの不思議な絵が描かれていました。⁴

チャンドラーは預言者に、巻き物を持ち帰り、一晚じっくり調べることを許可しました。ジョセフは、聖書に登場する預言者の何人かの生涯において、エジプトが重要な役割を果たしていたことを知っていました。また、ニーファイやモルモンをはじめとするモルモン書の著者たちも、モロナイが「改良エジプト文字」と呼んだ言葉で記録を綴ったことを知っていました。⁵

巻き物の文字を調べながら、ジョセフはそこに、旧約聖書の族長アブラハムの重要な教えが含まれていることに気がつきました。翌日チャンドラーに会うと、ジョセフはその巻き物を幾らで譲ってくれるか尋ねました。⁶チャンドラーは、巻き物とミイラの双方で、2,400ドルでなければ売らないと言います。⁷

その額は、ジョセフが支払える金額をはるかに超えていました。聖徒たちはいまだ、かぎられた資金で神殿を完成させるのに苦労していましたし、お金を貸してくれる人はカートランドにほとんどいませんでした。それでもジョセフは、巻き物には価値があると信じ、ほかの人々と協力して、その遺物を購入するのに十分なお金を急いで集めました。⁸

ジョセフと筆記者たちが古代の記号を解読しようとし始めると、教会に興奮が広がり、主が間もなく、聖徒たちに向けてさらなるメッセージを明らかにしてくださるという確信を持ちました。⁹

巻き物を調べない間、ジョセフは巻き物とミイラを訪問者に見せていました。エマはその遺物に強い関心を寄せ、アブラハムの記述に関するジョセフの見解の説明に、注意深く耳を傾けました。興味を持つ人々がミイラを見たいと言うと、エマはそれらを見せ、ジョセフが教えてくれたことを彼らにも伝えるのでした。¹⁰

当時のカートランドは、感動的な時を迎えていました。教会への批判が聖徒たちをしつこく悩ませ、ジョセフとシドニーが引き続き負債のことで気をもむ一方、エマは周りに溢れる主の祝福を感じる事ができました。神殿建設に働く人々は、7月に屋根を完成させると、すぐさま高い尖塔を立て始めました。¹¹ジョセフとシドニーは、未完成の建物の中で安息日の集会を開くようになりましたが、時には1,000人近くの人々が、彼らの説教を聞こうとやって来ました。¹²

エマとジョセフは神殿の近くに住んでおり、エマは自宅の庭から、神殿の外壁を青みがかった灰色のしっくいので覆っているアルテムス・ミレットとジョセフ・ヤングを見ることができました。彼らは石の継ぎ目を描いて、切り出された石の塊のように細工していました。¹³アルテムスの指示の下、子供たちは、細かく砕いてしっくいに混ぜるために割った、ガラスや陶器の破片を集めるのを手伝いました。太陽に当たると、そのかけらが宝石のように光を反射し、神殿の壁は輝きを放つのです。¹⁴

エマの家にはいつも活気がありました。多くの人々がスミス家に寝泊まりしており、中には教会の新しい印刷所を運営する男性たちもいました。新たな教会の新聞、*Latter Day Saints' Messenger and Advocate* (末日聖徒のメッセンジャー・アンド・アドボケイト)のほか、ウィリアム・フェルプスの助けを借りてエマが編さんした賛美歌集など、彼らは幾つかのプロジェクトに取り組んでいたのです。¹⁵

エマの賛美歌集は、聖徒たちによる新しい賛美歌や、他のキリスト教会に古くから伝わる作品を取り入れたものでした。ウィリアムは、パーリー・プラットや近ごろ改宗したエライザ・スノーと同様に、幾つかの新しい曲を書きました。最後の賛美歌は、ウィリアムの「主の御霊は火のごと燃え」で、福音を回復された神を讃える賛歌でした。

エマは、印刷工たちが「教義と聖約」という新しい啓示集も出版しようとしていることを知っていました。ジョセフとオリバーの管理の下で編さんされた「教義と聖約」は、出版されていなかった『戒めの書』と、近ごろ受けた啓示、また教会指導者たちが長老たちに向けて行った、信仰にまつわる一連の講義を合わせたものでした。¹⁶ 聖徒たちは聖書とモルモン書と同じように、「教義と聖約」を重要な聖文として受け入れました。¹⁷

その秋、一連のプロジェクトが完成に近づいたころ、神殿の奉獻と力を授かる準備のために、ミズーリの教会指導者たちがカートランドへやって来ました。10月29日、エドワード・パートリッジとそのほか到着した人々に敬意を表して、エマとジョセフは夕食会を開きました。彼らは皆、互いに感じていた一致の精神を喜び、ニューエル・ホイットニーはエドワードに、翌年はシオンで食事をともにしたいと話しました。

エマは友人たちに目を向けると、テーブルにつく人が皆、約束の地に加わることができるよう望むと言いました。

「アーメン」とジョセフが同意します。「御心が成りますように。」¹⁸

食事の後、ジョセフとエマはカートランドの高等評議会に出席しました。ジョセフの弟ウィリアムは、教会のある女性に、彼女の義理娘を身体的に虐待したとして訴えられていました。その事案で証人として話したのは、ジョセフとウィリアムの母であるルーシー・スミスでした。彼女が証言の中で、評議会がすでに聞き入れ、解決した事柄について話し始めると、ジョセフはそれを中断しました。¹⁹

ウィリアムは素早く立ち上がると、母の言葉を疑うのかとジョセフを責めました。ジョセフは弟の方を向き、座るように言いました。ウィリアムはそれを無視して立っています。

平静を保とうと努めながら、「座るんだ」とジョセフは繰り返しました。

ウィリアムは、ジョセフに殴り倒されるまでは座らないと言い張ります。

興奮したジョセフは部屋を出ようとしたが、父親が彼を止め、とどまるように言いました。ジョセフは評議会に静粛にするよう命じて、審理を終えました。集会の終わりまでには、ジョセフはウィリアムに心のこもった別れを告げられるまでに落ち着いていました。

一方ウィリアムは腹の虫が収まらず、ジョセフが間違っていると主張し続けます。²⁰

このころ、ハイラム・スミスと妻のジェルーシャは、宿屋の手伝いに 22 歳の改宗者、リディア・ベイリーを雇いました。ジョセフは数年前、シドニーとともにカナダへ短期の伝道に行った際、リディアにバプテスマを施していました。²¹リディアは間もなくカートランドに移り、ハイラムとジェルーシャは彼女を家族のように世話すると約束しました。

神殿奉獻の準備で町に来ていたミズーリの教会指導者たちのために、リディアは大忙しでした。彼女とジェルーシャは休みなく食事を作り、ベッドを整え、部屋を掃除しました。リディアが宿泊している人と話す暇はめったにありませんでしたが、スミス家の長年の友人であるニューエル・ナイトは別で、リディアはニューエルのことが気になりました。²²

ある日、働いていると、ジェルーシャがリディアに「ナイト兄弟は男やめよ」と言いました。

「あら」とリディアは興味のない素振りで反応します。

「去年の秋に奥さんを亡くしたのよ。ほんとうに悲しがっていたわ」とジェルーシャが言いました。

ニューエルが妻を失ったことを聞き、リディアは自分自身のことを思い出しました。²³リディアは 16 歳にして、カルビン・ペイリーという若者と結婚しました。結婚後、カルビンはひどく酔っ払っては、時にリディアや娘を殴りました。

やがて、カルビンの飲酒のために二人は農地を失い、小さな家を借りることを余儀なくされました。リディアはそこで息子を産みますが、赤ん坊は一日で死んでしまいます。間もなくカルビンに見捨てられたリディアは、娘とともに両親のもとへ戻りました。

生活は快方に向かったかのように思えましたが、今度は娘が病気になりました。娘が亡くなると、リディアは自分に残された最後の幸せの源も、失われてしまったかのように感じました。その死を乗り越えるため、両親はリディアをカナダに住む友人のもとへ送ります。リディアはそこで福音を聞いてバプテスマを受け、それ以来というもの、彼女の人生はさらなる幸福に満たされ、希望を持てるようになりました。それでも、リディアは孤独であり、人とのつながりを求めているのです。²⁴

ある日のこと、ニューエルがスミス家の 2 階にいたリディアに近づきます。「あなたの身の上も、わたしのよう孤独なものでしょう」と言って、ニューエルは彼女の手を取りました。「ひょっとしたら、わたしたちはお互いに合うかもしれませんね。」²⁵

リディアは黙って座っていました。「わたしの身の上を御存じなのですね」と悲しげにつぶやきます。「夫がどこにいるの

か、生きているのか死んでいるのかも、まったく分からないのです。」カルビンと離婚しないかぎり、リディアはニューエルと結婚できないと感じていました。

「徳を失ったり、天の御父に背いたりするよりも、わたしは自分のすべての思い、命をもささげます。」部屋を出る前に、リディアはそう告げました。²⁶

口論の翌日、ジョセフは弟から手紙を受け取りました。ウィリアムは、ジョセフと論争したのではなく、高等評議会が自分を責めたために怒っていました。高等評議会の前でジョセフを非難する権利があると信じていたウィリアムは、ジョセフと個人的に会い、自分の行動を擁護することを強く求めました。²⁷

ジョセフはウィリアムに会うことに同意し、何が起こっていたのか、互いの視点を伝え、何が誤りだったのかを認め、間違っただけの行いに対する謝罪を述べようと提案しました。ハイラムは家族の中でも穏やかな影響を与える人物だったため、ジョセフはハイラムにも参加してもらい、どちらが間違っているか公平な判断をしてもらうことにしました。²⁸

翌日、ウィリアムがジョセフの家にやってくると、兄と弟はこの論争について順に説明しました。ジョセフは、ウィリアムが評議会の前で不適切な発言をし、教会の大管長としてのジョセフの職に敬意を払わなかったことに腹を立てたと言いました。ウィリアムは、自分が不敬だったことを否定し、ジョセフが間違っていると主張しました。

ハイラムは、兄弟たちの話に注意深く耳を傾けました。二人が話し終わると、ハイラムは自分の意見を述べ始めました。ところがウィリアムが割り込み、自分ばかり悪者にされると、ハイラムとジョセフを責めました。ジョセフとハイラムはウィリアムを落

ち着かせようとしたのですが、ウィリアムは怒って家を飛び出て行ってしまいます。その日のうちに、ウィリアムは自分の伝道許可証をジョセフに送りました。

すると間もなく、カートランド中にこの論争が知れ渡りました。普段はとても仲の良いスミス家族は分裂し、ジョセフのきょうだいたちは互いに対立してしまいました。自分に批判的な人々が、その不和をジョセフと教会に対して利用することを懸念して、ジョセフはウィリアムの怒りが収まるのを期待しながら距離を置きました。²⁹

ところが11月初旬、ウィリアムが続けてジョセフを非難すると、間もなく何人かの聖徒たちがどちらかの兄弟の肩を持つようになりました。使徒たちは、ウィリアムの振る舞いを非難し、十二使徒定員会から追放すると警告しました。一方ジョセフは、ウィリアムに対して忍耐強くあるように促す啓示を受けました。³⁰

自分の周囲で繰り広げられる不和を目にして、ジョセフは悲しみを募らせました。その夏、聖徒たちは目的と善意を持ってともに働きました。主はエジプトの記録と、神殿建設が大いに進むことを通して、彼らを祝福されました。

ところが今、力を授かるエンダウメントにもう少しで手が届くというところで、心と意思を一つにすることができていないのです。³¹

1835年の秋の間、ニューエル・ナイトはリディア・ベイリーと結婚しようと決意を固めていました。オハイオ州の法律では、夫に見離された女性は再婚が可能であると信じ、彼はリディアに、過去のことは捨て去るように言いました。同じくニューエルと結婚することを望んでいたリディアは、それでも、それが神の目から見て正しいことかを知る必要があると思いました。

ニューエルは3日間断食して祈りました。3日目のこと、彼はハイラムに、自分がリディアと結婚することを正しいと思うか、ジョセフに尋ねてくれるよう頼みました。ハイラムはジョセフと話してみると請け合い、ニューエルは空腹のまま、神殿の仕事に戻りました。

その日の遅く、ニューエルがまだ働いているところへハイラムがやって来ました。ハイラムは、ジョセフが主に尋ね、リディアとニューエルは結婚するべきだという答えを受けたと話しました。「結婚は早ければ早い方がいい」とジョセフは言いました。「二人はどのような法律にも違反しないと伝えてください。神の律法も、人の法律も恐れる必要はありません。」

ニューエルは大喜びしました。道具を置いたまま宿屋へ走って行くと、ニューエルはジョセフの言葉をリディアに伝えました。リディアも大喜びし、二人は神の憐れみに感謝しました。ニューエルはリディアに求婚し、彼女はそれを受け入れました。そうしてニューエルは台所へ急ぐと、断食を解きました。

ハイラムとジェルーシャは、翌日に結婚式を行うことに賛成しました。リディアとニューエルはジョセフに式を執り行ってほしいと思いましたが、ジョセフは過去に結婚式を行った経験がないことを知っていましたし、法的な権限があるのかも分かりません。

ところが翌日、ハイラムが式への参加者を招く中、二人の司式者を探していることをジョセフに話すと、「ちょっと待った!」とジョセフが叫びました。「わたしが自分で執り行います。」

オハイオ州の法律では、正式に組織された教会の聖職者に対し、夫婦の結婚を執り行うことが許されていました。³²それだけでなく、ジョセフはメルキゼデク神権の職において、神の力により結婚の儀式を執り行うことが自分に認められていると信じていました。「主なるイスラエルの神は、神聖な結婚のきずなに

において、人を結び合わせる権能をわたしに与えられました。これから、この特権を使いたいと思います」とジョセフは宣言しました。

11月の凍るように寒い夕べ、ハイラムとジェルーシャは、結婚式の参列者を家に招き入れました。聖徒たちが祈り、祝いの歌を歌う中、祝宴のごちそうの匂いが部屋いっぱいに広がっていました。ジョセフは立ち上がると、リディアとニューエルに、部屋の前に立ち、互いの手を取るよう言いました。結婚は、エデンの園で神により定められたものであり、永遠の神権により執り行われるべきであると説明しました。

ジョセフはリディアとニューエルの方を向き、二人が夫婦として、生涯ともに歩むという聖約を立てさせました。ジョセフは二人の結婚を宣言し、家族を築くに当たって励ましの言葉を述べ、長生きして繁栄するように祝福しました。³³

リディアとニューエルの結婚は、厳しい冬を過ごしていたジョセフにとって明るい出来事でした。ウィリアムとの一件以来、ジョセフはエジプトの巻き物にも、力を授かるエンダウメントに聖徒たちを備えさせることにも、集中できていませんでした。ジョセフは主の御霊に従い、明るく歩もうと努めていました。ところが家族内の混乱と、教会を導くという重責は困難なものであり、だれかが間違いを犯すと厳しい態度を取ることもありました。³⁴

12月になると、ウィリアムが自宅で非公式な討論会をするようになりました。その話し合いが、御霊により学び教える機会となることを願って、ジョセフは参加することにしました。最初の2回、討論会は円滑に行われましたが、3回目の集まりで、ウィリアムが討論の最中に別の使徒に割って入ると、その雰囲気は緊張したものになりました。

ウィリアムが中断したことで、討論会を続けるべきか疑問を持った人々もいました。ウィリアムは怒りを募らせ、口論が始まります。ジョセフが間に入ると、二人は間もなく互いを侮辱し始めました。³⁵ジョセフ・シニアが息子たちを落ち着かせようとするも、二人とも譲らず、ウィリアムがジョセフに飛びかかりました。

あわてて自分を守ろうとしたジョセフは、コートを脱ごうとしましたが、腕が袖に引っかかってしまいました。ウィリアムは、ジョセフがタールを塗られ羽根をつけられたときに受けた傷を悪化させるほど、何度も強く殴りました。数人がかりでウィリアムを押さえつけるころには、ジョセフは床に横たわり、ほとんど動けないほどになっていました。³⁶

数日して、争いの傷から回復したころ、ジョセフはウィリアムから伝言を受け取りました。「わたしは謙遜な告白をするのをまさしく義務だと感じている」とウィリアムは書いています。召しにふさわしくなかったとして、十二使徒定員会から自分を解任してくれるようジョセフに願い出ました。³⁷

「わたしがしたことのために、わたしを見捨てることなく、何とか救われるようにしてほしい」と彼は嘆願しました。「あなたにしたことを、必ず悔い改めます。」³⁸

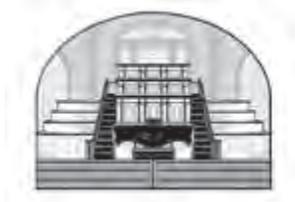
ジョセフはこの手紙に返事を書き、和解することを望んでいと伝えました。「神がわたしとあなたの間から敵意を取り除いてくださいますように。すべての祝福が回復され、過去がとこしえに忘れ去られますように。」³⁹

新年の最初の日、二人は父とハイラムに会いました。ジョセフ・シニアは息子たちのために祈り、互いを赦せるように嘆願しました。父が祈る中、ジョセフはウィリアムとの不和がどれほど父親を苦しめたかが分かりました。神の御霊が部屋に満ち、ジョセフの心は和らぎました。ウィリアムも深く悔いているようで

した。彼は自分の過ちを認め、再びジョセフの赦しを求めました。

ジョセフも自分の過ちを認め、弟に謝りました。それから二人は、高め合い、柔和になって、隔たりを修復するべく懸命に努めることを約束しました。

ジョセフはエマと母親を部屋に招き入れ、ウィリアムとともに約束を繰り返しました。彼らは喜びの涙を流し、頭を垂れました。ジョセフが祈り、家族を再び一致させてくださったことに感謝をささげました。⁴⁰



主の御霊

弟と和解したジョセフは、再び神殿の完成に心を向けました。ヨーロッパの空にそびえる大聖堂に比べると簡素ではありましたが、神殿はオハイオ州のほとんどの建物よりも高く、立派なものでした。旅行者はカートランドへと向かう道で、木の梢の上ののぞく、その色鮮やかな鐘楼しょうろうと光り輝く赤い屋根を容易に見ることができました。まばゆく輝くしっくいしっくいの壁、明るい緑の扉、尖ったゴシック様式の窓が、壮観な眺めを作っていました。¹

1836年1月末までに神殿の内装はほぼ完成し、ジョセフは教会指導者たちを、主が彼らに与えると約束された神の力によるエンダウメントに備えさせました。エンダウメントがどのようなものか、確かなことを知る者はいませんでした。ジョセフは、旧約聖書の中でモーセがアロンの祭司たちを洗い清め、油を注いだように、神権に聖任された人に象徴的な洗いと油注ぎの儀式を施した後、エンダウメントが行われることを説明しました。²

聖徒たちは、エンダウメントに関する洞察を示した新約聖書の節も読んでいました。復活された後にイエスは、「高い所から

力を授けられる」まで、福音を宣べ伝えるためにエルサレムを出発してはならないと使徒たちに勧告しました。その後、五旬節の日がやって来ると、イエスの使徒たちは、激しい風のように御霊が降ったときにこの力を授かり、異言を語りました。³

聖徒たちはエンダウメントに備えながら、似たような、御霊のほとばしる経験を期待していました。

1月21日の午後、ジョセフと顧問たち、ジョセフ・シニアは、神殿の後ろにある印刷所の屋根裏へと続く階段を上りました。彼らはそこで、象徴的に自分たちを清潔な水で洗い、主の名によって互いを祝福しました。彼らは清められると、神殿の隣に行き、カートランドとシオンのビショップリックに加わり、互いの頭に聖別された油を注ぎ、互いを祝福しました。

ジョセフの番になると、父がジョセフの頭に油を注ぎ、アブラハム、イサク、ヤコブの祝福を彼に宣言し、末日のモーセとして教会を導くよう祝福しました。それから、顧問たちがジョセフの頭に手を置き、祝福しました。⁴

儀式を終えると、天が開かれ、ジョセフは将来についての示現を見ました。ジョセフは日の栄えの王国と、その美しい門が炎の輪のように眼前で赤々と燃えあがっているのを目にしました。また、父なる神とイエス・キリストが、栄光に満ちた御座に座っておられるのが見えました。そこには旧約聖書の預言者アダムとアブラハム、ジョセフの母や父、そして兄のアルビンもいました。

兄を見たジョセフは、不思議に思いました。アルビンはモロナイの最初の訪れの後、間もなくして亡くなっており、正しい権能によりバプテスマを受ける機会はありませんでした。彼はなぜ、日の栄えの栄光を受け継ぐことができたのでしょうか。ある説教者が示唆したように、ジョセフの家族はアルビンが地獄にいる

とは信じていませんでしたが、彼の永遠の行く末は分からないままでした。

ジョセフが兄のいる光景に驚いていると、主の声が次のように聞こえました。「この福音を知らずに死んだ者で、もしとどまることを許されていたらそれを受け入れたであろう者は皆、神の日の栄えの王国を受け継ぐ者となる。」

主は、その行いと心の望みに応じてすべての人を裁くと説明されました。アルビンのような状況にある人々は、地上で機会を得られなかったために地獄に行くということはないのです。また主は、責任を負う年齢に達する前に亡くなった幼い子供たちも、ジョセフとエマが埋葬した4人の赤ん坊のように、日の栄えの王国に救われることを説明されました。⁵

示現が閉じると、ジョセフと顧問たちは、別の部屋で祈りながら待っていたカートランドとシオンの高等評議会の会員たちに油を注ぎました。儀式が施されると、彼らの前にさらなる天の示現が開けました。天使を見た人も、キリストの顔を目にした人もいました。

御霊に満たされた人々は、将来起こることを預言し、夜が更けるまで神をあがめました。⁶

2か月後、1836年3月27日の朝のこと、リディア・ナイトは、神殿の階下に座っていました。周りの聖徒たちと肩が触れるほどに混み合った状態です。案内係が長椅子にさらに人を座らせたので、リディアの周りは人で満ちていました。すでに1,000人近くの末日聖徒が部屋の中にいましたが、さらに多くの人々が、ドア係が中に入れてはくれないかと期待しながら正面玄関に集まっていた。⁷

リディアは4か月前にニューエルと結婚して以来、何度か神殿を訪れていました。彼女とニューエルは時折、説教や講義を聞きに行っていたのです。⁸しかし、この度は違います。聖徒たちは今日、主に神殿を奉献するために集まっていました。

部屋の両端には、凝った彫刻の施された3列の教壇があります。リディアの席からは、その後ろにいる教会指導者たちが見えました。彼女の目の前、建物の西端には、大管長会とそのほかのメルキゼデク神権指導者のための教壇があります。後ろには、東の壁に沿って、ビショップリックとアロン神権指導者のための教壇がありました。ミズーリの高等評議会の会員として、ニューエルはこれらの教壇の隣に位置するボックス席の列に座っていました。

奉献式が始まるのを待ちながら、リディアは教壇や、部屋の隅から隅までそびえる高い柱の列に刻まれた美しい木細工もじっくりと眺めることができました。まだ朝早く、側壁に沿った高い窓からは、建物の中に陽射しが降り注いでいました。頭上にはキャンバス地の大きなカーテンがかかっており、一時的に部屋を分ける際、座席の間に下げることができるようになっていました。⁹

案内係がもはや部屋にだれも押し込めなくなると、ジョセフは立ち上がり、座る場所を見つけられない人々に謝りました。ジョセフは、印刷所の1階にある近くの教室を、予備の会場とすることを提案しました。¹⁰

数分後、会衆が席に着くと、シドニーが開会し、2時間以上にわたって力強く語りました。会衆のほとんどが席に着いたままでしたが、短い休憩の後、ジョセフが立って奉献の祈りをささげました。それは、前日にオリバーとシドニーの助けを得て用意したものでした。¹¹

「おお、主よ、何とぞ、あなたがわたしたちに建てるようにお命じになった、あなたの僕であるわたしたちの手で造られたこの宮を受け入れてくださいますように。」ジョセフは宣教師たちが、地の果てまで福音を宣べ伝えるために、力を帯びて出て行くことができるよう願いました。ミズーリの聖徒たちに、世界中の国々の指導者に、散らされたイスラエルのために、祝福があるよう祈りました。¹²

また、聖徒たちに力を授けてくださるよう主に嘆願しました。「あなたに仕える者の油注ぎが、高い所からの力とともに彼らに結び固められますように。」「あなたの僕たちに聖約の証をお与えください。それによって、彼らが出て行って、あなたの御言葉を宣言するときに、彼らが律法を封じ、……あなたの聖徒たちの心を備えることができ[る]ようにしてください。」古代の使徒たちが経験した激しい大風のように、主が神殿をその栄光で満たしてくださいるよう願いました。¹³

「おお、お聞きください、おお、お聞きください、おお、わたしたちの願いをお聞きください、おお、主よ。そしてこれらの願いにこたえ、……この宮をあなたに奉獻することを受け入れてください」と祈りました。¹⁴

ジョセフが最後に「アーメン」と言うと、聖歌隊がウィリアム・フェルプスの新しい賛美歌を歌いました。

主のみたまは火のごと燃え
みさかえ出づ、末の代に
み恵みも、まほろしも見え
み使い、この世に降る¹⁵

リディアは、神殿が神の栄光で満たされるのを感じました。部屋にいたほかの聖徒たちとともに立ち上がり、声を合わせて叫びます。「神と子羊に、ホサナ！ ホサナ！ ホサナ！」¹⁶

神殿の奉獻後、主の御霊と力が現れ、カートランドを包みました。奉獻の夕べ、ジョセフが神殿で教会指導者たちと集っていると、彼らは救い主の使徒たちが五旬節で行ったように、異言を語り始めました。その集会で、語る者の上に天の炎がとどまるのを見た人がいれば、天使を目にした人もいました。屋外では、聖徒たちが神殿の上に輝く雲と火の柱を見ました。¹⁷

3月30日、ジョセフと顧問たちは神殿で集会を開き、十二使徒、七十人、伝道活動のために召されたそのほかの人々を含む、およそ300人の教会指導者の足を洗いました。それは救い主が、十字架につけられる前に弟子たちに行われたことと同じでした。「今年はわたしたちにとって、祝いの年であり喜びの時です」とジョセフは宣言しました。彼らは断食をして神殿に来ていたので、ジョセフはパンとぶどう酒を買っておくように何人かに頼みました。別の人々には、桶に水を入れて持ってくるように言いました。

ジョセフと顧問たちはまず、十二使徒の足を洗い、それからほかの定員会の会員たちの足を洗い、主の御名によって祝福しました。¹⁸数時間の間、夕方にパンとぶどう酒が到着するまで、人々は互いを祝福し、預言し、ホサナと叫んだりしました。

十二使徒がパンを裂き、ぶどう酒を注ぐ間、ジョセフは次のように話しました。カートランドにおける彼らの短い滞在は間もなく終わり、主は彼らに力を授けられ、伝道に送られると言います。「まったく柔和に、まじめな心で出て行きなさい。そして…… イエス・キリストについて教えなさい。」ジョセフは彼らに、自らの信じることに忠実であり、宗教的信条についての論争を避けるように指示しました。

十二使徒には、「すべての国民に王国の鍵を携えて行き、福音の門の錠を開け、また七十人を呼んで、彼らの後について来…… るように求め〔なさい〕」と告げました。教会の組織は今

や整い、部屋にいる人々は、主がそのとき彼らのために備えられたすべての儀式を受けたと言います。

「出て行って、神の王国を築きなさい。」ジョセフは言いました。

ジョセフと顧問たちは、十二使徒に集会を引き継いで家へ帰りました。神殿にいた人々に御霊が再び降り、彼らは預言し、異言を語り、互いに福音を熱心に説き始めました。教え導く天使が幾人かに現れ、救い主の示現を見た人々もいました。

朝方まで、御霊の現れは続きました。人々が神殿を去るときには、今経験したばかりの不思議と栄光のために、霊が高く舞い上がるようでした。彼らは力を授けられ、世界に福音を携えて行く準備ができたと感じました。¹⁹

奉献の1週間後、復活祭の日曜日の午後のこと、1,000人の聖徒たちが、礼拝のため再び神殿にやって来ました。十二使徒が会衆に主の聖餐の儀式を執り行った後、ジョセフとオリバーは下の広間の西側にある一番上の教壇辺りにキャンバス地のカーテンを下ろし、聖徒たちの見えない所で、その後ろにひざまずき、静かに祈りをささげました。²⁰

祈りの後、救い主が彼らの前に現れました。その御顔は太陽よりも輝き、その眼は炎のようであり、頭髮は雪のようでした。御足の下の方の教壇の手すりは、純金のように見えました。²¹

「わたしのすべての民の心を喜ばせなさい。彼らは力を尽くしてわたしの名のためにこの家を建てた人々である」と、救い主は勢いよく流れる水のような御声で宣言されました。「見よ、わたしはこの家を受け入れた。そして、わたしの名はここにあるであろう。わたしは憐れみをもってこの家でわたしの民にわたし自身を現すであろう。」²²主は聖徒たちに、神殿を神聖に保つよう強

く勧め、聖徒たちが力を授かるエンダウメントを受けたことを確認されました。

「まことに、幾千幾万の人の心が、注がれる数々の祝福と、この家で僕たちに授けられるエンダウメントのゆえに、大いに喜ぶであろう。」

「……この家の名声は諸外国に広まるであろう。これはわたしの民の頭に注がれる祝福の初めである」と、主は最後に約束されました。²³

ジョセフとオリバーの周りの示現は閉じましたが、すぐさま天が再び開かれました。彼らはモーセが目の前に立っているのを見ました。モーセはイスラエルの集合の鍵を彼らに委ねました。それによって聖徒たちが世に福音を携え行き、義人をシオンに連れ帰るためです。

次にエライアスが現れ、彼らと彼らの子孫によりすべての世代の人々が祝福されると述べて、アブラハムの福音の神権時代を委ねました。

エライアスが去った後、ジョセフとオリバーの前に別の壮大な示現が開かれました。彼らは、旧約聖書の預言者であり、火の車に乗って天へ上ったエリヤを目にしました。

「マラキの口を通して語られた時がまさに来た」とエリヤは宣言し、先祖の心を子孫に、子孫の心を先祖に向けさせるという旧約聖書の預言を述べました。

「この神権時代の鍵はあなたがたの手にゆだねられている。これによってあなたがたは、主の大いなる恐るべき日が近く、まさに戸口にあるのを知ることができる」とエリヤは続けました。²⁴

ジョセフとオリバーを残して、示現は閉じました。²⁵ 教壇の後ろのアーチ型の窓からは太陽の光が差し込んでいましたが、彼らの前の手すりは、もはや金のように輝いてはいませんでした。

雷のように彼らを震わせた天の声は、カーテンの向こう側にいた聖徒たちを静かな思いで満たしました。

ジョセフは、使者たちが重要な神権の鍵を自分に授けてくれたことを知りました。後にジョセフは、エリヤにより回復された神権の鍵は、地上でつながれたものを天でも結びつけ、親を子に、そして子を親につなぎ、家族を永遠に結び固めると聖徒たちに教えました。²⁶

神殿の奉献後、エンダウメントにより力を授かった宣教師たちは、福音を宣べ伝えるために四方八方へと出て行きました。パートリッジビショップとミズーリから来た聖徒たちは、シオンを建設するという新たな決意をもって再び西へと向かいました。²⁷

リディアとニューエル・ナイトも西へ行きたかったのですが、資金が必要でした。ニューエルはカートランドでのほとんどの時間を、神殿のために無報酬で働くことに使い、リディアは最初に町に着いた時、ほとんどすべてのお金をジョセフと教会に貸していました。二人はその犠牲を後悔してはいませんでした。リディアは、教会に貸したお金があれば旅費を賄って余りあると考えずにはいられませんでした。

旅費をどう工面しようかと頭を悩ませていると、ジョセフが彼らのもとに立ち寄りました。「ニューエル、西部へ出発するのですね。必要なものは揃いましたか」とジョセフが尋ねました。

「まだです」とニューエルは答えました。

「わたしが困っている時に、あなたがどれほど惜しみなく助けてくれたかを忘れてはいません」とジョセフはリディアに言いました。ジョセフは外へ出ると、間もなくリディアが彼に貸した金額以上のお金を携えて戻ってきたのです。

ジョセフは、新たな我が家へ向けて、快適な旅をするのに必要なものを購入するように言いました。ハイラムもまた、ミズーリ行きの蒸気船が出ているオハイオ川まで行くのに必要な馬を数頭提供してくれました。

ナイト夫妻は出発前にジョセフ・スミス・シニアのもとを訪れ、リディアはそこで祝福を受けました。1年以上前のこと、主はジョセフ・シニアを教会の祝福師に召し、聖徒たちに特別な祝福師の祝福を授ける権能を与えました。聖書の中で、アブラハムとヤコブも子供たちのために行っていたことです。

ジョセフ・シニアはリディアの頭に手を置き、祝福の言葉を述べました。「あなたはこれまで多くの艱難に遭い、心を痛めてきました。しかし、あなたは慰めを受けるでしょう。」

主は彼女を愛しておられ、彼女が慰めを受けられるようにニューエルを与えられたことを、リディアに告げます。「二人の霊は固く結ばれ、二人を分かつものは何もありません。苦難や死をも、二人を分かつことはありません」と彼は約束しました。「あなたの命は守られ、安全かつ速やかに、シオンの地に向かうことができるでしょう。」²⁸

祝福の後間もなく、リディアとニューエルは教会とシオンの将来に希望を抱きつつ、ミズーリに向けて出発しました。主は聖徒たちに力を授けられ、高くそびえる神殿の尖塔の下、カートランドは繁栄していました。その時の示現と祝福は、彼らに天国を垣間見せるものであり、地上と天の間の幕が、今にも裂けてしまうかのようでした。²⁹

第 3 部



深みに投げ込まれ

1836 年 4 月 - 1839 年 4 月

たとえあなたが深みに投げ込まれても、
たとえ寄せて来る大波があなたを巻き込もうとしても、
たとえ暴風があなたの敵となっても、たとえ天が暗黒を集め、
すべての元素が結束して道をふさいでも、また何にも増して、
たとえ地獄の入り口が大口を開けてあなたを
のみ込もうとしても、息子よ、あなたはこのことを知りなさい。
すなわち、これらのことはすべて、あなたに経験を与え、
あなたの益となるであろう。

教義と聖約 122:7

1836 - 1839 年

ミズーリ州

• アダム・オンダイ・アーマン

ガラティン •

デイビーズ郡

ファーウェスト •

• ハウンズミル

コールドウェル郡

キャロル郡

クレイ郡

• リバティ

レイ郡

デ・ウィット •

• インディペンデンス

ジャクソン郡

イギリスへの伝道 (1837年)

プレストン • ウォーカー
リバプール • フォールド
• マンチェスター

イギリス

• ヘレフォードシャー





主を試みなさい

神殿の奉献後、ジョセフはカートランドに寄せる希望と楽観的な思いに浸っていました。¹ 1836年の春の間、聖徒たちはあふれんばかりの霊的な賜物を目にします。多くの者が、白く輝く衣をまとった天使の群れが神殿の屋根に立つ光景を目にし、ある人々は、福千年が始まったかのように感じていました。²

ジョセフは、主の祝福が至る所に注がれている様子を目にすることができました。5年前、ジョセフがカートランドに移り住んだ当時、教会には無秩序と無法がはびこっていました。それ以降、聖徒たちは主の言葉にさらに完全に従うようになり、素朴な村はシオンの強固なステークへと変貌を遂げたのです。神殿は、聖徒らが神に従い、ともに働くときに達成できる事柄を示す証としてそびえ立っていました。

カートランドにおける成功を喜びながらも、ジョセフの脳裏からはミズーリの聖徒たちのことが離れませんでした。彼らは今でも、ジャクソン郡のすぐ手前、ミズーリ川沿いの小さな共同体

で身を寄せ合っているのです。ジョセフと顧問たちは、長老たちが力をもたらずエンダウメントを受けた後、シオンを贖ってくださるという主の約束を信頼していました。それでも、いつ、またどのようにして主がその約束を果たされるのか、知る者はいませんでした。

教会の指導者たちはシオンに心を向け、主の御心を知ろうと断食し、祈りました。³その後ジョセフは、主が聖徒たちに、ジャクソン郡とその周辺の土地をすべて購入するよう命じられた啓示について思い起こします。⁴聖徒たちはすでにクレイ郡の土地を幾らか購入し始めていましたが、いつもながら問題となるのは、より多くの土地を購入するための資金を確保することでした。

4月初旬、ジョセフは教会の財政について話し合うために、教会所有の印刷会社で働く何人かと会います。彼らはシオンの贖いのために、自分たちの資産をすべて差し出す必要があると信じており、ジョセフとオリバーに、ミズーリでさらに多くの土地を購入するための資金調達を率いるよう勧めました。⁵

あいにく、神殿建設と以前の土地購入のために、教会はすでに数万ドルもの負債を抱えており、宣教師たちが献金を募っているにしても、カートランドの財政は相変わらず乏しいものでした。聖徒たちの財産の多くは土地であり、金銭を提供できる者はほとんどいませんでした。現金なくしては、教会が負債から抜け出すことも、さらにシオンの土地を購入することもできません。⁶

今一度、ジョセフは主の業のために資金調達の道を探らなければなりません。

322 キロほど北では、カナダ南部のハミルトンという町の外れに立つ、パーリー・プラットの姿がありました。力をもたらずエンダウメントを受けて以来、パーリーにとって最初の伝道に赴くため

に、州最大の町の一つであるトロントに向かっていたのです。金銭もなく、その地域に友人もないパーリーには、主から遣わされ、成すよう命じられた務めをどのように果たせばよいのか、見当もつきませんでした。

数週間前、十二使徒と七十人が福音を宣べ伝えるためにカートランドを去ろうとしていたとき、パーリーは家族とともに自宅にとどまるつもりでした。カートランドの大半の聖徒と同様、パーリーは、この地域で土地を購入して家を建てるために借金し、多額の負債に苦しんでいました。それに、妻サンクフルのことも気がかりでした。彼女は病気で、夫の世話を必要としていたからです。福音を宣べ伝えたいという熱意にあふれながらも、伝道に出るなど、とうてい無理なことに思えました。⁷

ところがその後、ヒーバー・キンボールがパーリーの家を訪れ、友人、また同僚使徒として、彼に祝福を授けてくれました。「何も疑わず、伝道に出るのです」とヒーバーは言います。「負債についても、生活の必要についても、思い煩うことはありません。すべてのものは、主が豊かに与えてくださるでしょう。」

靈感によって語ったヒーバーは、パーリーにトロントへ行くようにと告げ、そこで完全な福音に耳を傾ける備えのできた人々を見いだすだろうと約束しました。また、パーリーはイギリスへの伝道の基を据え、負債を逃れる道をも見いだすであろうと述べました。「さらにあなたは、金銀などの富を得るでしょう」とヒーバーは預言します。「それらを数え上げるのがいとわしいほどになります。」

ヒーバーはサンクフルについても述べ、「あなたの妻は今この時から癒され、息子を産むでしょう」と約束したのです。⁸

それらの祝福はすばらしいものでしたが、与えられた約束が実現するとは思えませんでした。パーリーはこれまで、伝道地で多くの成功を収めてきましたが、トロントは彼にとって見知らぬ新

たな地です。パーリーはそれまでの生涯で、多額の金銭を手にしたことは一度もなく、伝道中に負債を完済できるほど十分な富を得られるとは思えなかったのです。

サンクフルに関する約束は、ほかのどの約束にも増して実現不可能に思えました。彼女はすでに 40 歳を迎えようとしているうえに、虚弱で病気がちだったからです。結婚から 10 年たっても、サンクフルとパーリーには子供がいませんでした。⁹

それでも主の約束を信じ、パーリーはぬかるんだ道を馱馬車に揺られながら、北東に向かいます。ナイアガラフォールズに到着し、カナダ国内に入ると、今度は徒歩でハミルトンまで進みました。故郷への思いと自分に与えられた使命の壮大さに、パーリーはすぐさま圧倒されました。受けた約束が実現されるとうてい思えないようなとき、どのようにして祝福を信じる信仰を働かせればよいのか知りたいと、パーリーは切に望みます。

「主を試みなさい。」突然、御霊がそうささやきました。「何事であれ、主にとって成し難いことがあるかどうかを見なさい。」¹⁰

一方ミズーリでは、12 歳になるエミリー・パートリッジが、クレイ郡に春がやってきたのを目にし、胸をなで下ろしていました。エミリーの父親は神殿の奉献式のためにカートランドにいたため、エミリーと残りの家族は、ビショップリックで父の顧問を務めるジョン・コリルとマーガレット一家とともに、丸太小屋の一室を共有していました。二つの家族が移り住んでくる前、その丸太小屋は家畜小屋として使われていましたが、エミリーの父とコリル兄弟が床にこびりついた家畜の糞をきれいに取り除き、何とか暮らせるようにしたのです。小屋には大きな暖炉が一つあり、二つの

家族はそのぬくもりの周りに身を寄せ合って、凍てつく冬の寒さをやり過ごしたのです。¹¹

その春、エミリーの父親はミズーリに戻り、ビショップとしての務めを再開します。父とそのほかの教会指導者たちは、カートランドで力をもたらずエンダウメントを受けており、シオンの将来に希望を抱いているようでした。¹²

気候がだんだんと暖かくなってくると、エミリーは学校に戻る準備をします。クレイ郡に到着して間もなく、聖徒たちは果樹園近くの丸太小屋で学校を開きました。エミリーは友達と果樹園で遊んだり、頭上を覆う枝から落ちた果物を食べたりするのが大好きでした。授業がないと、エミリーと友達は枝木で家を作ったり、つるで縄跳びをしたりしました。¹³

エミリーの同級生のほとんどは教会に属していましたが、何人かは長年その地域に住む人々の子供でした。そうした子供たちは大抵、エミリーやそのほかの貧しい子供たちに比べて身なりが良く、中には年若い聖徒たちのみすぼらしい服装をからかう子供もいました。それでも大概は、互いの違いにかかわらず、だれもが十分仲良くやっていました。

ところが、子供たちの両親の方はそうではありませんでした。さらに多くの聖徒がクレイ郡にやって来て、広大な土地を購入するようになるにつれ、長年の入植者たちの不安やいらだちが募っていったのです。当初、彼らは聖徒たちをクレイ郡に快く迎え入れ、聖徒たちが川向こうの自宅に戻れるようになるまで、避難所を提供してくれました。教会員がクレイ郡に恒久的な住居を構えるとは、だれも考えていなかったのです。¹⁴

はじめ、聖徒たちと近隣住民の間に生じた緊張が、エミリーの学校生活に影響を及ぼすことはほとんどありませんでした。¹⁵ところが春が深まり、近隣住民の敵対心が増すにつれ、ジャ

クソン郡における悪夢が繰り返され、再び家を失うのではないかという、エミリーと家族の恐れが現実味を帯びてきたのです。

北部への旅を続けながら、パーリーは、目的地にたどり着けるよう主に助けを祈り求めました。少ししてから、パーリーは一人の男性に出会い、彼から10ドルと、トロントに住むジョン・テラーという名の人物への紹介状を受け取ります。パーリーはそのお金でトロント行きの蒸気船への乗船を予約し、間もなくテラーの家に到着しました。

ジョンとレオノーラ・テラーは、イギリス出身の若い夫婦です。夫妻と話しながら、パーリーは、二人がその地域のあるキリスト教団に属しており、聖書によって裏付けることのできない教義はすべて拒否していることを知ります。近ごろ夫妻は神に、御自分のまことの教会から使者を遣わしてくださるよう、断食して祈っていたのでした。

パーリーは回復された福音について話しましたが、二人はあまり興味を示しませんでした。翌朝、パーリーはテラー宅に荷物を置いたまま、その町の聖職者たちを訪れ、自己紹介をします。彼らの会衆に教えを説く機会を得られるのではと期待したのです。その後パーリーは、郡庁舎、あるいはそのほかの公共の場で集会を開く許可をもらえないか確認するために、町の公職者数人に会います。ところが、だれもがこぞって、その要望を拒絶しました。

落胆したパーリーは近くの森に入って祈りをささげ、荷物を取りにテラーの家に戻りました。パーリーが立ち去ろうとすると、ジョンは彼を引きとめ、聖書に対する自身の愛について語りました。¹⁶「プラットさん、どのような類であれ、あなたに提示で

きる教義があるのなら、ぜひとも聖書によってそれを裏付けていただきたいのですが。」ジョンはそう言いました。

「ご希望に沿うことができますと思います。」パーリーはそう告げると、使徒と預言者を信じているかと、ジョンに尋ねました。

「信じています」とジョンは答えます。「聖書はそうした事柄をすべて教えていますから。」

「わたしたちは罪の赦しのために、イエス・キリストの名によって行うバプテスマを教えています」とパーリーは言いました。「聖霊の賜物を授けるための按手についてもです。」

「ジョセフ・スミスとモルモン書、幾つかの新しい啓示についてはどうでしょうか」と、ジョンは尋ねました。

パーリーは、ジョセフ・スミスは正直な男であり、また神の預言者であると証しました。「モルモン書については、この書物を支持することにおいて、わたしには確固とした証があります。あなたが聖書の正当性を支持することがおできになるのと同じくらい、強い証です。」¹⁷

話をしていると、パーリーとジョンの耳に会話が聞こえてきました。レオノーラが別の部屋で、近所に住むイザベラ・ウォルトンと話していたのです。「うちにアメリカからやって来た紳士がいるんだけど、福音を宣べ伝えるために、主が自分をこの町に遣わされたというのよ。」レオノーラはイザベラにそう話していました。「彼が行ってしまうのは残念だわ。」

「その人に、わたしの家に喜んで迎えると伝えてちょうだい」とイザベラは言いました。「うちには空いている部屋とベッドがあるし、食べ物も十分にあるわ。」イザベラの家には、その夜、パーリーが彼女の友人や親戚たちに福音を教えることのできる場所もありました。「彼は主から遣わされた人だと、御霊によって感じるの。わたしたちの益となるメッセージを携えていると思うわ」とイザベラは言います。¹⁸

パーリーと話した後、ジョン・テラーはモルモン書を読み、その教えを聖書と比較し始めました。以前、ジョンはほかの教会の教義を研究したことがありましたが、モルモン書とパーリーが教える原則の中には、何かしら心を引きつけられるものがあると分かりました。すべての事柄が明解であり、神の言葉と一致しているのです。

ジョンはすぐさまパーリーを友人たちに紹介し、こう告げます。「わたしたちの祈りへの答えとなる人がここにあります。彼によると、主がまことの教会を設立されたというのです。」

「モルモンになるつもりですか。」だれかが尋ねます。

ジョンは「分かりません」と答えました。「よく調べ、主に助けを祈り求めることにします。もしこの中に真理があるのなら、わたしは喜んで受け入れますし、間違っているのなら、何のかかわりも持ちたくありません。」¹⁹

程なくして、ジョンとパーリーは、イザベラ・ウォルトンの親族が暮らす近くの農村に出かけて行きました。ジョンの友人であるジョセフ・フィールディングもまた、きょうだいのマーシーとメアリーとともにその村で暮らしていました。彼らの一族もイギリス出身であり、テラー家族とよく似た宗教観を持っていたのです。

ジョンとパーリーがフィールディング家へと続く道を上って行くと、マーシーとメアリーが近所の家に向かって行く姿が見えました。彼女たちのきょうだいは、外に出て来てよそよそしい態度であいさつするなり、二人には来てほしくなかったと言いました。きょうだいたちや町の多くの人々は、二人の説教を聞くことを望んでいなかったのです。

「どうして人々はモルモンの教えに反対するのでしょうか。」パーリーが尋ねます。

「知るものか」とジョセフは言いました。「名前からして、いかにも怪しげじゃないか。」人々は新たな啓示、すなわち聖書の教えに背く教義は何一つ求めていないと、ジョセフは言います。

「そういうことでしたら、あなたがたの偏見をすぐにも取り除いてご覧にいきますよ。」パーリーはそう言うと、ジョセフに、姉妹たちを家に呼び戻すようにと勧めました。その夜、村で宗教的な集まりがあることを知っていたパーリーは、そこで福音を教えたいと思ったのです。

「一緒に夕食を取り、それから皆で集会に出かけましょう」とパーリーは言いました。「もしあなたと姉妹たちが同意してくださるなら、聖書の福音を教え、それに反する新しい啓示には一切触れないことに、わたしも同意しましょう。」²⁰

その夜、フィールディング家のきょうだいであるジョセフとマーシー、メアリーは、人々で埋め尽くされた部屋に座りながら、パーリーの説教にすっかり心を奪われていました。パーリーは、回復された福音、また聖書の教えに反するようなモルモン書の教えについては、何一つ話しませんでした。

程なくして、パーリーはテラー家とフィールディング家の人々にバプテスマを施し、その地域に支部を組織するのに十分な人数が揃いました。ヒーバーの祝福における主の約束は成就し始めており、パーリーはサンクフルのいる自宅に戻ることを強く望みます。負債の幾つかの支払い期限が迫っており、その支払いのために、パーリーはさらにお金を稼ぐ必要があったのです。

カートランドへと旅立つとき、パーリーは新たに得た友人たちと握手を交わしました。友人たちは、それぞれパーリーの手にお金を握らせ、その総額は数百ドルにもなります。それは、最も急を要する借金の支払いに十分足る額でした。²¹

カートランドに到着すると、パーリーは元気そうなサンクフルの姿を目にし、主のもう一つの約束が成就したことを見て取ります。借金の一部を返済した後、パーリーはパンフレットやモルモン書を手元を集め、伝道の業を続けるためにカナダに戻ります。今回は妻を伴っての旅でした。²²旅路の過程でサンクフルはすっかり疲れ果ててしまい、カナダの聖徒たちはその弱々しい姿を目にすると、パーリーへの祝福で約束されている息子を出産するだけの体力が彼女にあるのかと危ぶみました。それでも程なくすると、パーリーとサンクフルは、最初の子供の誕生を待ち望む日々を無事迎えたのでした。²³

プラット夫妻が留守の間、友人のキャロラインとジョナサン・クロスビーが、カートランドにある夫妻の自宅を借りていました。クロスビー夫妻は、神殿の奉獻に先立つ数か月前、カートランドに越して来た若い夫婦です。夫妻はしばしば友人たちと集まって神を礼拝し、賛美歌を歌い、食事をともにしていました。²⁴

神殿の完成に伴い、さらに多くの聖徒がカートランドに向かっていました。地域には広大な土地がありましたが、その多くは未開の地でした。聖徒たちは、急いでより多くの家を建てるために、借金をすることも度々でした。共同体には、現金が乏しかったからです。新たに到着した人々が全員宿泊できるほど十分な数の家を早急に建てることができなかったため、すでに定住していた家族がこうした人々に自宅を解放したり、空部屋を貸し出したりすることもよくありました。

町の住居が不足し始める中で、使徒の一人であるジョン・ボイントンが、プラットの家を自分の家族に貸してくれるようクロスビー夫妻に持ちかけてきます。彼が申し出た金額は、クロスビー夫妻がプラットに支払っている額を上回っていました。²⁵

その申し出は気前の良いものであり、キャロラインには、自分とジョナサンが建築中の家の支払いに、そのお金を充てること

ができると分かっていました。しかし、クロスビー夫妻は夫婦水入らずの生活を楽しんでおり、キャロラインは最初の子供を妊娠中でした。プラットの家を出るなら、高齢の隣人、サブレ・グレインジャーの家に越し、彼女と同居することになるでしょう。グレインジャー姉妹の窮屈な家には、寝室が一つしかないのです。

ジョナサンはキャロラインに、引っ越しについて、彼女が決断するよう頼みました。キャロラインは快適で広いプラットの家を離れたくはありませんでしたし、グレインジャー姉妹と同居することにも気が進みません。キャロラインにとって、金銭のことはそれほど問題ではありませんでした。自分とジョナサンに使えるお金がどれほどあるかは、重要ではないのです。

それでも夫妻には、大家族であるポイントン一家がカートランドに集合するのを、自分たちが助けることになる分かっていました。キャロラインが小さな犠牲を払うだけの価値があるのです。数日後、キャロラインはジョナサンに、引っ越すことにしたと告げました。²⁶

6月下旬、ウィリアム・フェルプスとクレイ郡のそのほかの教会指導者たちは、預言者に手紙を書きました。地元の役人が教会指導者を裁判所に召喚し、郡における聖徒たちの今後について話し合いが持たれたことを知らせるものでした。役人たちの口調は丁寧かつ穏やかであったものの、その言葉には妥協の余地がまったくありませんでした。

聖徒がジャクソン郡に戻ることは不可能であったため、役人は自分たちが、聖徒らだけで生活することのできる場所を新たに探すことを提案しました。そうしてクレイ郡の教会指導者たちは、再び暴力をもって追放される危険を犯すよりは、立ち去ることに同意したのでした。²⁷

その知らせは、年内にジャクソン郡に戻るというジョセフの望みを打ち砕きましたが、その出来事に関してミズーリの聖徒たちを責めることはできませんでした。「あなたがたは、わたしたちよりもずっとよく状況を理解しています」とジョセフは返信しています。「もちろんクレイ郡を立ち去るに関しては、知恵にかなった指示を受けています。」²⁸

ミズーリの聖徒たちが新たな定住先を必要としていることに伴い、ジョセフは土地の購入資金を早急に工面しなければならぬという思いを以前にも増して強くしていました。ジョセフはカートランド近辺に教会の店を開くことにし、そこで売る商品の購入資金を借り入れました。²⁹店はある程度成功を収めますが、多くの聖徒がジョセフの親切と信頼につけ込むようになります。店での掛け買いを、ジョセフが拒まないと分かっていたのです。また幾人かは、自分たちが必要とする物を取り扱うよう主張しましたが、そうした商品から現金収益をあげるのは困難でした。³⁰

7月末になっても、店も、教会指導者たちによるあらゆる試みも、教会の負債を減らすには至りませんでした。必死になったジョセフは、シドニー、ハイラム、オリバーとともにカートランドを後にし、東海岸の町セーレムに向かいます。ある教会員から、金銭が隠されている場所を知っていると聞いたからです。一行はセーレムに到着したものの、金銭は見つけられませんでした。そこでジョセフは主に心に向け、導きを求めます。³¹

返ってきた答えは次のようなものでした。「主なるあなたがたの神であるわたしは、あなたがたの愚かな行為にもかかわらず、あなたがたがこの旅をしてきたことを不快には思わない。……あなたがたの負債について心配することはない。わたしはそれを返済する力をあなたがたに与えるからである。シオンについて心配することはない。わたしはシオンを憐れみをもって扱うからである。」³²

およそ1か月後、一行はカートランドに戻りますが、教会の財政問題は依然として彼らの心に重くのしかかっていました。それでも、その年の秋、ジョセフと顧問たちは、シオンのために必要な金銭を調達できると思われる、新たな事業計画を提示したのでした。



あらゆる罫

ジョナサン・クロスビーは、1836年の秋の間中、カートランドの新しい家のために働きました。11月までに壁と屋根を完成させましたが、床はできておらず、いまだ窓もドアもありませんでした。出産を間近に控えたキャロラインは、できるだけ早く家を完成させるよう、しきりに夫を急き立てます。家主のグレインジャー姉妹とはうまくいっていましたが、キャロラインは一刻も早く窮屈な部屋を出て、自分たちの家に移り住みたかったのです。¹

赤ん坊が生まれる前に家を住める状態にしようと、ジョナサンが一心不乱に働く中、教会指導者がカートランド安全協会の創業計画を発表します。カートランドの低迷する経済を活性化し、教会のために資金を調達することを目的とした村の銀行です。アメリカ合衆国内のそのほかの小規模銀行と同様、協会は借り手に貸付を行い、人々が土地や物資を購入できるようにすることで、地元の経済発展を助長しようとしていたのです。借り手

が利息とともに貸付金を返済すれば、銀行は利益を上げられるはずでした。²

貸付金は、銀行券で融資されることになっていました。安全協会の保有する、限られた金貨や銀貨によって裏打ちされたものです。銀行は保有する正貨を確保するために投資家に株を販売し、株主となった投資家は、経時的に手持ち株の支払いを約束するのです。³

11月上旬までに、カートランド安全協会は30人以上の株主を獲得します。中にはジョセフとシドニーも含まれており、二人は多額のお金を銀行に投資しました。⁴株主たちはこの協会の会長としてシドニーを、出納官としてジョセフを選出し、ジョセフを銀行取引の責任者に任じました。⁵

銀行の設立計画に伴い、オリバーは銀行券の印刷に必要な資材を購入するために東へ向かいます。またオーソン・ハイドは、銀行を合法的に運営すべく、州議会に認可書を申請するために出かけます。一方ジョセフは、古代イスラエルの民に対し、主のもとに金銀を持って来るよう求める旧約聖書の聖文を引用し、すべての聖徒たちに向けて、安全協会に投資するよう呼びかけました。⁶

ジョセフは、神が自分たちの取り組みを承認しておられると感じており、聖徒たちが主の戒めを心にとめるなら、すべてはうまく運ぶと約束しました。⁷預言者の言葉を信じ、さらに多くの聖徒たちが安全協会に投資する一方で、設立されて間もない協会の株を購入することに、より慎重を期す人々もいました。クロスビー夫妻も株の購入を検討しましたが、自宅の建築費用が高額に上っており、余分なお金は持ち合わせていませんでした。⁸

12月初旬ごろ、ジョナサンはついに家の窓とドアの取り付けを終え、キャロラインとともに移り住みます。内装はまだ仕上がっていませんでしたが、上等の料理用ストーブがあったので、

それで暖を取ったり、料理をしたりすることができました。またジョナサンは、容易に水をくみ上げられるように、家の近くに井戸を掘りました。

キャロラインは、自分自身の家を持つことができ、幸せに満たされていました。そうして12月19日、戸外で吹雪が激しく渦巻く中、健康な男の子を産みます。⁹

カートランドが冬の寒さに覆われた1837年1月、カートランド安全協会が開業します。¹⁰営業初日、ジョセフは印刷機から刷り上がったばかりの新たな銀行券を発行しました。銀行券の表には、協会の名称とジョセフの署名が入っています。¹¹さらなる聖徒が融資を受ける中、土地を担保にする者も多くいました。協会の銀行券は、カートランド各地やそのほかの地域にも出回るようになります。¹²

最近アメリカ合衆国北東部からカートランドに移り住んで来たフィービー・カーターは、安全協会に投資することも、貸付を受けることもありませんでしたが、約束されていた繁栄の恩恵にあずかるうとしていました。フィービーは30歳間近でしたが、未婚であり、カートランドには頼れる家族もいませんでした。似たような状況にある女性たちと同様、フィービーには仕事の選択肢がほとんどありませんでしたが、オハイオに越す前にもしていた縫い物や学校の教師を続け、わずかばかりの収入を得ていました。¹³カートランドの経済が回復すれば、より多くの人々が新しい衣服や教育のためにお金を使うようになるでしょう。

けれども、フィービーがカートランドに来ることを決意したのは、経済的な理由からではなく、霊的な事柄のためでした。両親はフィービーのバプテスマに反対しており、彼女が聖徒とともに集合する計画を打ち明けてからというもの、母親は不服を言い

連ねるようになりました。「フィービー、モルモニズムが間違っていると分かったら、帰って来るのよ」と母親は言います。

「ええ、母さん、そうするわ」と、フィービーは約束を交わしました。¹⁴

それでもフィービーは、自分が回復されたイエス・キリストの福音を見いだしたことを知っていました。カートランド到着の数か月後、フィービーはジョセフ・スミス・シニアから祝福師の祝福を受けます。その祝福は、彼女が地上においても天においても、大いなる報いを得ることを確約するものでした。「慰めを得なさい。あなたの苦難は終わったのです」と、主は告げられました。「あなたは長生きし、良き日々を目にすることでしょう。」¹⁵

その祝福の言葉は、家を離れる際に抱いたフィービーの思いを、確かなものとしてくれました。直接別れを告げるのはあまりにも悲しいと、フィービーは手紙を書き、それを家族のテーブルの上に置いておいたのです。手紙にはこう書き綴っています。「子供であるわたしのことは、心配しないでください。主がわたしの面倒を見てくださり、最善のものを与えてくださると信じています。」¹⁶

フィービーには、祝福師の祝福の約束に対する信仰がありました。多くの子供の母親となり、また知恵と知識、理解力を備えた男性と結婚するであろうとの約束を、フィービーは受けていたのです。¹⁷しかし、それまでフィービーには結婚の見通しがまったくありませんでしたし、結婚して子供を持つようになるほとんどの女性より、自分が年を重ねていることを承知していました。

1837年1月のある晩、フィービーは友人たちを訪ねた際、黒髪で青い目をした一人の男性と出会います。その男性はフィービーより数日ばかり年長で、イスラエルの陣営で行軍した後、アメリカ合衆国南部で伝道し、最近カートランドに戻ったところでした。

男性の名前がウィルフォード・ウッドラフであることを、彼女は知ります。¹⁶

その冬の間、カートランドの聖徒たちは、土地や物資を購入するために、引き続き多額の借金を重ねていました。雇用主は時折、労働者に銀行券で対価を支払いましたが、その銀行券は通貨として使用でき、カートランド安全協会の事務所で正貨に換えることもできました。¹⁹

安全協会が開業してから間もなく、グランディソン・ニューエルという男が銀行券を退蔵たいぞうし始めました。近くの町に長年暮らしてきたグランディソンは、ジョセフ・スミスと聖徒たちを憎んでいたのです。聖徒たちがやって来るまで、彼は郡内で幾分際立った存在でしたが、今では聖徒たちを悩ませようと、法的措置をはじめ、様々な方策をしきりに探っていました。²⁰

グランディソンは、教会員が仕事を求めて自分のもとに来て、雇うのを拒みました。宣教師が自宅付近で福音を宣べ伝えようものなら、男たちの一団を使って卵を投げつけさせました。ドクター・フィラスタス・ハールバットがジョセフに対する中傷的な言葉を収集し始めたときには、グランディソンが費用を支援しています。²¹

グランディソンの尽力にもかかわらず、この地域への聖徒の集合は続きました。²²

カートランド安全協会の開業によって、グランディソンによる攻撃は新たな展開を迎えます。オハイオ州における銀行数の増加を懸念する州議会が、オーソン・ハイドに認可書を与えることを拒んだのです。この認可書なくして、安全協会が銀行を名乗ることはできませんが、預金の受付や貸付はできました。この事業の成功は、株主が持ち株の支払いをすることで、当協会が

その保有資産を維持できるようにすることにかかっていました。ところが、支払いに必要なだけの十分な正貨を持っている株主はほとんどいませんでした。そこでグランディソンは、安全協会の保有資産があまりに少ないため、長期間は持ちこたえられないだろうと推測したのです。²³

相当数の人が銀行券を金貨や銀貨に換金するなら、安全協会の事業は破綻することになると踏んだグランディソンは、地方の住民たちを訪ね回り、安全協会の銀行券を買い集めます。²⁴ グランディソンは、そうして集めた札束を安全協会の事務所に持ち込み、現金に換えてくれるよう要求しました。そして、事務員が換金しない場合には、訴えると脅したのです。²⁵

追い詰められたジョセフと安全協会の事務員は、銀行券の換金に応じざるを得ませんでした。後は、さらに多くの投資家を獲得できるよう祈るのみです。

所持金がほとんどないにもかかわらず、ウィルフォード・ウッドラフは、カートランド安全協会の株を20株ほど購入しました。²⁰ ウッドラフの良き友人であるウォレン・パリッシュは、安全協会の秘書官でした。ウィルフォードは、かつてイスラエルの陣営の一員として、ウォレンとその妻ベッツィーとともに西部へ旅をしました。ベッツィーがコレラを発症して亡くなった後、ウォレンとウィルフォードはともに伝道しました。やがてウォレンはカートランドに戻り、ジョセフの筆記者、そして信頼できる友人となりました。²⁷

伝道以来、ウィルフォードは転々とし、しばしばウォレンのような友人の親切に頼って日々の糧を得てきました。しかし、フィービー・カーターに出会ってから、ウィルフォードは結婚について考え始めます。安全協会での投資は、家庭生活を始める前

に自らの経済基盤を築こうとして取った方策の一つだったので
す。

ところが1月末には、安全協会は危機に直面します。グラ
ンディソン・ニューエルが保有銀行券を換金しようとしていたこ
ろ、地元の新聞が、その正当性に疑問を投げかける記事を掲載
したのです。郡内各地のほかの人々と同様、一部の聖徒たちも
また、わずかな労力で富を得ようと土地や物資に投機していま
した。また、持ち株の支払いを要求されても無視する人々もいま
した。程なくして、カートランドとその周辺の労働者や事業家の
多くが、安全協会の銀行券の受け取りを拒否するようになります。²⁸

倒産を恐れるジョセフとシドニーは、安全協会を一時閉鎖
し、別の町に出かけて行って、その地の銀行との提携を図りまし
た。²⁹しかし、安全協会の不穏な幕開けによって、多くの聖徒の
信仰が揺らいでいました。預言者への信頼が人々の投資熱に拍
車をかけていたのですが、ここに及んで、預言者の霊的指導者と
しての資質に疑問を抱くようになったのです。³⁰

これまで主は、ジョセフを通して聖文を明らかにしてこれ
ました。そのため人々は、ジョセフが神の預言者であると信じる
信仰を働かせることが容易にできていたのです。ところが、安全
協会に関するジョセフの言葉が成就されないように思え、また自
分たちの投資が失われ始めると、多くの聖徒たちは不安に陥り、
ジョセフを批判するようになります。

一方ウィルフォードは、安全協会が成功を取めるだろうとい
う信頼を失うことはありませんでした。別の銀行との提携を整
えた後、預言者はカートランドに戻り、批判者たちの苦情に対
応します。³¹その後の教会の総大会で、ジョセフは聖徒たちに、な
ぜ教会が借金をして安全協会のような会社を設立したのか、そ
の理由について説明しました。

聖徒たちは貧しく、日々の衣食にも事欠く中で末日の業に着手しました。それでも主は聖徒たちに、自分の時間と才能をささげ、シオンに集合し、神殿を建てるよう命じられたのです。そのことを、ジョセフは聖徒たちに思い起こさせます。こうした事業は費用を要しますが、神の子らの救いにとってきわめて重要なものです。³²主の業を前進させるために、教会指導者たちは資金の調達方法を見いだす必要があったのです。

それでもジョセフは、聖徒たちが多額の負債を負ったことを悔いていました。「負債を負わせてしまったことは確かです」とジョセフは認めています。「しかし、海外にいる兄弟たちがそれぞれの所持金を携えて帰って来てくれれば、何とかなるでしょう。」聖徒たちがカートランドに集合し、各自の財産を主に奉獻するなら、教会の負債の重荷はかなり軽減されるだろうと、ジョセフは信じていたのです。³³

ジョセフが語っている間、ウィルフォードはその言葉に力を感じました。「ああ、それらの言葉は、まるで鉄筆^{てっぴつ}で書かれたかのように我々の心に刻まれた」とウィルフォードは思いました。「それらを永遠に心にとどめ、我々が生涯、実践していけるようにされたのだ。」預言者が語るのを耳にしてなお、ジョセフが神から召されていることを疑うことのできる者がいるだろうか、ウィルフォードには不思議に思えたのでした。³⁴

ところが、人々の預言者への疑惑は依然として消えませんでした。4月中旬には、金融恐慌が国民を苦しめる中、カートランドの経済状況はますます悪化していきました。数年にわたる過剰な貸付により、イギリスおよびアメリカ合衆国内の銀行は弱体化し、財政破綻への恐れが各地に広がっていったのです。各銀行は負債を抱えており、中には貸付を全面的に停止する銀行も出てきました。銀行の閉鎖に伴い、経済恐慌がたちまち町から町へと広がり、事業の破綻や失業者が急増します。³⁵

そのような状況の中で、カートランド安全協会のような低迷中の会社が生き残る可能性はほぼ皆無だったのです。こうした窮状を立て直す術が、ジョセフにはほとんどありませんでした。それでも一部の者にとっては、全国的な金融恐慌ではなく、ジョセフ個人を非難する方がたやすかったのです。

やがて債権者たちは、ジョセフとシドニーを執拗に追及するようになります。一人の男性が、負債の未払いを理由に、ジョセフとシドニーを相手取って訴訟を起こしました。またグランディソン・ニューエルは、ジョセフに対して偽りの刑事責任を申し立て、預言者が自分に対する陰謀を企てていると主張しました。預言者は日ごとに、自分が逮捕されるか、さもなくば殺されるのではという不安を募らせます。³⁶

ウィルフォードとフィービーは今や婚約しており、ジョセフに結婚式を執り行ってくれるよう頼みました。ところが二人の結婚式当日、ジョセフの姿はどこにも見当たらず、彼はフレデリック・ウィリアムズに司式の任を委ねていました。³⁷

ジョセフが突然姿を消してから間もなく、エマはジョセフから手紙を受け取り、夫が無事であることを知ります。³⁸ジョセフとシドニーは、危害を加えようとする者たちから距離を置くために、カートランドを逃れていたのです。二人の所在地は内密でしたが、ニューエル・ホイットニーとハイラムは連絡方法を知っており、遠くから助言を与えていました。³⁹

エマには、ジョセフの直面している危険がよく分かっていました。ジョセフからの手紙が届いたとき、グランディソン・ニューエルの友人と思われる数人の男たちが、手紙の消印を調べてジョセフの居場所を探ろうとしました。経営の苦しいジョセフの店を偵察して回っている者もいます。

エマは常に楽観的でしたが、子供たちのことは気がかりでした。1歳の息子フレデリックはまだ幼く、周りの状況を理解できませんが、6歳になる娘のジュリアと4歳のジョセフは、父親がすぐには帰って来ないことを知り、不安がるようになっていたのです。⁴⁰

主を信頼すべきであることが、エマには分かっていました。カートランドでこれほど多くの人々が、疑いと不信仰に陥りつつある今となってはなおさらです。エマは4月末、ジョセフにこう書き送っています。「わたしに示すことのできる神への信頼がこれ以上ないとしたら、わたしはほんとうに悲惨な状況に陥るでしょう。それでも、わたしたちがへりくだり、最善を尽くして忠実であるならば、足もとに仕掛けられ得る、あらゆる罣から救い出されると信じています。」⁴¹

そうはいっても、ジョセフの不在に乗じて、債権者たちが財産や金銭など、何でも可能なかぎり差し押さえてしまうのではないかと、エマは心配していました。「わたしの物ではなく、あなたの所持品であると称される物すべてに対して、だれもかれもがわたしより優先権を持っているかぎり、わたしにはどうすることもできません」とエマは嘆いています。

エマはジョセフを家に迎える準備を整えていました。今や信頼できる人はほとんどいません。ジョセフの負債を完済するのに役立つ物であっても、エマはだれに対しても、何一つ渡すことをためらいました。さらに困ったことに、エマは、子供たちがはしかの脅威にさらされていることを恐れていました。

「子供たちが病気するとき、あなたが家にいてくださればどんなによいでしょう」とエマは書いています。「子供たちのことを心にかけていてください。子供たちも皆、あなたのことを思っています。」⁴²

こうした混乱状態の只中、出産に備えてパーリーとサンクフルがカートランドに戻って来ました。ヒーバーが預言したように、サンクフルは男の子を産み、二人はその子をパーリーと名づけます。ところが、サンクフルは出産中にひどく苦しみ、数時間後に息を引き取りました。生まれたばかりの息子を自分一人で世話することができないため、パーリーは赤ん坊を養育してくれる女性の腕に託し、カナダへと戻ります。カナダの地で、パーリーは数人の聖徒たちの協力を得て、イギリスへの伝道計画に着手します。ジョセフ・フィールディングはそのうちの一人で、海外にいる友人や親戚たちに、回復された福音について書き送っていました。⁴³

カナダへの伝道を終えた後、パーリーはオハイオに戻り、カートランドに住むメアリー・アン・フロストという名の、夫を亡くした年若い姉妹と結婚します。また、パーリーは十二使徒定員会会長のトーマス・マーシュから手紙を受け取りますが、その文面は、その年の夏に使徒たちがカートランドで定員会集を開けるようになるまで、イギリスへの伝道を延期するよう求めるものでした。⁴⁴

パーリーがほかの使徒たちの集合を待つ間、ジョセフとシドニーはカートランドに戻り、負債の問題を解決し、聖徒間の緊張を和らげようとしていました。⁴⁵

数日後、シドニーがパーリーを訪れ、支払い期限の過ぎた負債を回収するために来たと告げます。しばらく前、ジョセフはパーリーに、カートランドの土地の購入代金として2,000ドルを貸していました。ジョセフは自身の負債を軽減するために、当時パーリーの負債を安全協会に売却しており、この度、シドニーがお金を回収していたのです。

パーリーはシドニーに、今手元に2,000ドルはないが、支払いの代わりに土地を返却すると申し出ます。それに対してシドニーは、負債を完済するには、土地だけでなく自宅も手放す必要があると伝えました。⁴⁶

パーリーは憤慨します。パーリーに土地を売却した当初、ジョセフは自分に、この取り引きで損失を被ることはないと言ったのです。それに、計り知れないほどの富と負債からの解放を約束してくれた、ヒーバー・キンボールの祝福はどうなるのでしょうか。今やパーリーには、ジョセフとシドニーが自分の持ち物を何もかも奪おうとしているように感じられました。土地と家を失ってしまったら、自分と家族はどうすればよいのでしょうか。⁴⁷

翌日、パーリーはジョセフに、怒りを書き連ねた手紙を送ります。「わたしはついに、これまで我々がかかわってきた投機事業のすべてがサタンの業であると、はっきり確信するに至りました」とパーリーは書いています。「この事業によって、うそや欺きが誘発され、隣人を利用するよう煽り立てられてきたのです。」パーリーはジョセフに、自分は今でもモルモン書と教義と聖約を信じているが、預言者の行動に困惑していると伝えます。

そして、ジョセフに悔い改めるよう、また負債の支払いとして土地を受け取るよう求めました。さもなくば、法的措置を講じざるを得なくなるというのです。

「あなたが自分の兄弟を利用し、貪欲にも強奪しようとしていることに対し、わたしはあなたを告発するという、心痛を伴う必要に迫られています」と、パーリーは警告しています。⁴⁸

パーリーがジョセフに手紙を送ってから数日後の5月28日、ウィルフォード・ウッドラフは日曜日の集会のために神殿に赴きます。カートランドにおける不和が増大する中、ウィルフォードはジョセフの最も忠実な支持者の一人であり続けました。一方、長年ジョセフの傍らで働いてきたウォレン・パリッシュは、金融危機におけるジョセフの役割に関して預言者を非難するようになり、たちまち離反者たちの先導者となっていました。

ウィルフォードは、教会内の鬭争的な気運が消え去るよう祈りました。⁴⁹ところが、それほど長くカートランドにとどまっているわけにはいきませんでした。最近ウィルフォードは、メイン州北東部の沿岸沖にある、フォックス諸島に福音を伝えるようにとの促しを受けていたからです。その近くには、フィービーの両親の家がありました。ウィルフォードはその地に向かう途中、自身の両親と妹に福音を教える機会を持てるのではと期待していました。フィービーは同行して夫の家族と会い、さらに北に進んで、夫を自分の家族にも会わせたいと望んでいました。⁵⁰

家族と一緒にいたいという思いと同じくらい強く、ウィルフォードは、ジョセフのこと、またカートランドにおける教会の状況について心配せずにはいられませんでした。神殿内に座ると、ウィルフォードは説教壇に立つジョセフを目にしました。あまりに多くの敵対勢力に立ち向かう中で、預言者は意気消沈しているように見えます。安全協会の倒産に際し、ジョセフが被った損失はほかのだれよりはるかに多く、数千ドルにも上っていました。⁵¹経営が傾き始めても、ほかの多くの人々とは異なり、ジョセフはこの協会を決して見捨てませんでした。

聴衆全員にしっかりと目を向けながら、ジョセフは主の御名によって語り、批判者たちに向かって自己弁護しました。

その話を聞きながら、ウィルフォードの目には、ジョセフに神の力と御霊が宿っているのが見て取れました。また、シドニーとほかの人々が台に立ち、ジョセフの高潔さについて証するときにも、彼らの上に同じ力と御霊が降るのを感じました。⁵²ところが集会が終わる前、ウォレンが立ち上がり、会衆の面前でジョセフを公然と非難しました。

辛辣な批判にじっと耳を傾けているうちに、ウィルフォードの心は沈み込みます。「ああ、ウォレン、ウォレン。」ウィルフォードはそうつぶやき、悲嘆に暮れるのでした。⁵³



真理は勝つ

1837年の春遅く、使徒のトーマス・マーシュ、デビッド・パッテン、ウィリアム・スミスは、ミズーリの自宅を離れてカートランドへと出発しました。シオンの聖徒たちの多くは今や、インディペンデンスの北東およそ 80 キロほどの所に流れる、ショール川と呼ばれる小川沿いに住み着いていました。聖徒たちはそこで、シオンの町に関するジョセフの計画に基いて定住地の区画を整備し、ファーウェストと呼ばれる町を築きます。近隣住民と聖徒との間で続く問題への平和的な解決策を見いだすべく、ミズーリ州議会はコールドウェル郡を設置しました。ファーウェストおよびショール川周辺の地を取り囲むように広がるこの地を、聖徒たちの定住地としたのです。¹

トーマスは、残りの十二使徒を再び集めたいと強く望んでいましたが、イギリスに福音を宣べ伝えたいというパーリーの望みを知り、その思いがさらに強まります。海外に福音を宣べ伝えることは、主の業における重要な一段階でした。定員会の会長で

あるトーマスは、使徒たちを集め、ともに伝道計画を練りたかったのです。

それにトーマスは、カートランドの離反者から受け取った報告について心配していました。3人の離反者、ルーク・ジョンソン、ライマン・ジョンソン、ジョン・ポイントンは皆、十二使徒定員会の会員だったのです。十二使徒がさらに一致しないかぎり、イギリスへの伝道は成功しないであろうと、トーマスは懸念します。²

オハイオに戻ったヒーバー・キンボールが目にしたのは、6か月前にカートランド安全協会が開業して以来、十二使徒定員会がまさしく分裂していく様でした。教会を債務から救おうとするジョセフの努力が無に帰する中で、オーソン・ハイド、ウィリアム・マクレラン、そしてオーソン・プラットが、ジョセフへの怒りを募らせ始めます。今やパーリー・プラットまでもがジョセフへの批判を口にするようになり、カートランドにおける忠実な使徒は、ブリガム・ヤングとヒーバーのみとなりました。³

ある日、ヒーバーが預言者ジョセフとともに神殿の教壇に座っていると、ジョセフがヒーバーに身を寄せ、こう言いました。「ヒーバー兄弟、主の御霊がわたしにささやきました。『わたしの僕ヒーバーをイギリスに遣わして、わたしの福音を宣言させ、その国に対して救いの扉を開かせなさい。』」

ヒーバーはがく然とします。自分はあまり教養のない、ただの陶器師にすぎないからです。イギリスは世界でも最も強大な国であり、その国民は学識と宗教的献身に富むことで有名でした。ヒーバーはこう祈ります。「おお、主よ、わたしにはどもりがありますし、そのような業にまったく向いていません。どうして、かの地へ福音を宣べ伝えに行けるでしょう。」⁴

それに、家族はどうなるのでしょうか。バイレートと子供たちを残して海外へ伝道に行くなど、ヒーバーにはおよそ考えられないことでした。伝道部を導くのもっとふさわしい使徒がきつとほかにいるはずだと、ヒーバーは思いました。トーマス・マーシュは前任使徒ですし、最初にモルモン書を読んで教会に加わった人々の一人です。主はなぜ彼を遣わそうとなさらないのでしょうか。

あるいは、ブリガムはどうでしょう。ヒーバーはジョセフに、せめてブリガムが自分と一緒にイギリスに行くことはできないのかと尋ねました。ブリガムはヒーバーより年長で、定員会においても自分より前任です。

「いいえ」とジョセフは言いました。ジョセフはブリガムをカートランドにとどめておきたかったのです。⁵

不承不承、召しを受け入れたヒーバーは、出発に向けて準備に取りかかります。ヒーバーは毎日、神殿で祈りをささげ、主の守りと力を願い求めました。間もなくして、ヒーバーの召しに関するうわさがカートランド中に広まり、ブリガムをはじめとする周囲の人々は、伝道に出るというヒーバーの決断を熱意を込めて支援しました。「預言者が君に告げたとおりに行うんだ」と、彼らはヒーバーに言います。「栄えある業を成すための力が祝福されるように。」

ところが、ジョン・ボイントンは力づけるどころか、こう言ってあざ笑います。「墮落した預言者の召しに応じて出かけるなんて、なんて大ばか者なんだ。君を助けるつもりなんてないよ。」ライマン・ジョンソンもまた対立していましたが、ヒーバーの決意を知ると、自分の外套を脱ぎ、それをヒーバーの肩に掛けました。⁶

程なくして、ジョセフ・フィールディングがカナダの聖徒の一団を引き連れてカートランドにやって来ると、ほかの数人とともにイギリスへの伝道の割り当てを受けます。それは、パーリーがカ

ナダへ伝道に行くことでイギリスへの伝道の基盤が据えられるという、ヒーバーの預言を成就するものでした。オーソン・ハイドは自らの不忠実を悔い改め、宣教師一行に加わります。結局、ヒーバーはブリガムのいとこであるウィラード・リチャーズに、自分たちと一緒に出かけよう誘いました。⁷

出発の日、ヒーバーはバイレートと子供たちとともにひざまずき、神に祈りをささげました。海を渡る船旅が安全であるよう、伝道地で有益な働きができるよう、また留守中、家族の必要が満たされるように願い求めたのです。そうして、流れ落ちる涙に頬をぬらしながら、ヒーバーは子供たち一人一人を祝福し、イギリス諸島へと旅立ったのでした。⁸

アメリカ合衆国の経済危機は、1837年の夏になっても続きました。お金も食べ物もほとんどない中、ジョナサン・クロスビーは自分の家を建てるのを中断し、ジョセフとエマのための家の建築に加わります。しかし、ジョセフが職人たちに支払うことができたのは安全協会の銀行券だけでした。それを支払いとして受け入れるカートランドの企業は、日に日に減少していました。間もなくして、協会の銀行券はほとんど価値を失うことになります。

建築に携わっていた職人たちが、一人また一人と、より高い収入を得られる仕事を求めて去っていきます。ところが金融恐慌のために、カートランド周辺でも、そのほか国内のどこでも、ほとんど仕事がありません。そのため物価が高騰し、土地の価格は著しく下落しました。カートランドの人々の大半は、自活する手段もなく、仕事がありません。教会の負債を支払うため、ジョセフは差し押さえの危険を冒しながらも、神殿を抵当に入れざるを得ませんでした。⁹

ジョナサンが預言者の家の建築のために働く間、重い風邪の症状から回復しつつあった妻のキャロラインは、しばしばベッドに横たわっていました。胸の感染症のために息子に乳を与えることができず、食べ物にも事欠く中、キャロラインは、家族の次の食事をどのように賄えばよいかと心を悩ませていました。一家は食料を幾らか収穫できる小さな菜園を持っていましたが、雌牛は一頭もおらず、息子に飲ませるミルクは近所の人から買うしかありません。

友人の多くも同じような状況にあることを、キャロラインは知っていました。時には、だれかが食べ物を分けてくれることもありましたが、大部分の聖徒が家計のやりくりで苦勞する中、人に分けられるほど十分な食べ物がある人は一人としていないように思えました。

やがてキャロラインは、パーリー・プラットやボイントン家、そのほかの親しい友人たちが、自分たちの苦難のために教会を非難する姿を目にするようになります。キャロラインとジョナサンは安全協会のためにお金を失ったわけではありませんでしたが、同じく経済危機のあおりを受けてきたことに変わりはないのです。ほかの多くの人々と同様、クロスビー夫妻もかろうじて生活している状態でしたが、彼女もジョナサンも、教会を離れる、あるいは預言者を見捨てようという気にはなりませんでした。

実際ジョナサンは、仲間内でただ一人の職人となるまで、スミス家の家のために働いたのです。ジョナサンとキャロラインの家の食べ物が底をついたとき、ジョナサンは仕事を一日休んで家族のために食料を見つけようとしたのですが、手ぶらで帰宅しました。¹⁰

「これから、どうすればよいでしょうか。」キャロラインは神に尋ねます。

ジョセフとエマは自分たち自身、財政が苦しいにもかかわらず、さらに乏しい人々に食べ物を分けていました。そのことを知っていたジョナサンは、「朝になったらエマ姉妹の所に行って、自分たちの状況を話してみるよ」と言いました。

翌日、ジョナサンはスミス家の家の仕事に戻ります。彼が話しかける前に、エマの方から近寄って来ました。「お宅に食べ物があるか知らないけれど」とエマが声をかけます。「ほかの人たちは皆行ってしまったのに、あなたはずっとやって来て、働いてくれたわ。」エマの手には、大きなハムがありました。「あなたに差し上げたいと思って。」¹¹

驚いたジョナサンはエマに礼を言い、家の食糧庫が空であることや、キャロラインが病気であることを話しました。それを聞いたエマはジョナサンに、麻袋を持って来て、運べるだけの小麦粉を持ち帰るように言いました。

その日の遅く、ジョナサンは自宅に食べ物を持って帰りました。数日ぶりにまともな食事を取ったキャロラインは、これほどおいしい物をこれまでに食べたことがないと思ったのでした。¹²

6月末には、カートランドの離反者たちの攻撃がさらに激しさを増していました。ウォレン・パリッシュ率いる一団が、神殿での日曜日の集會を妨害し、あらゆる罪状でジョセフを訴えたのです。預言者を擁護しようとする者にはだれであろうと、離反者たちが罵声を浴びせかけ、命を取ると脅しました。¹³

兄がイギリスに旅立つ前、彼とともにカートランドに移り住んだメアリー・フィールディングは、オハイオにおける騒動に心をかき乱されます。ある朝、神殿での集會で、パーリー・プラットはジョセフに悔い改めるように告げ、教会員のほぼ全員が神から離れ去ったと宣言しました。

パーリーの言葉に、メアリーの胸は痛みます。¹⁴ 彼が教えるところによると、今や福音は神の預言者を公然と非難し、教会を罪に定めているというのです。パーリーが怒りを書き連ねた手紙をジョセフに送ったことは、カートランド中に知れ渡っており、パーリー自身もその不満を隠そうとはしませんでした。ジョン・テラーが町に滞在していたとき、パーリーはジョンを脇に呼び、ジョセフに従わないよう警告しました。

「あなたはカナダを離れる前に、ジョセフ・スミスが神の預言者であることを力強く証されました」とジョンはパーリーに思い起こさせます。「そして、あなたはこれらのことを、啓示により、また聖霊の賜物により知ったとおっしゃいました。」

それからジョンは、こう証します。「今わたしは、あなたが当時持っておられたのと同じ証を持っています。この業が6か月前に真実だったのであれば、今でも真実です。当時ジョセフ・スミスが預言者だったのであれば、今でも預言者です。」¹⁵

一方ジョセフは病気になり、ベッドを離れることができなくなります。激しい痛みにはひどく苦しみ、とうとう頭を持ち上げることもできないほど衰弱してしまいました。ジョセフの意識が遠のいたり、戻ったりを繰り返す間、エマと医師はずっとジョセフの傍らに寄り添っていました。シドニーは後に、ジョセフの命がそれほど長くないと思ったと述べています。¹⁶

ジョセフに対する批判者たちは、神がジョセフの罪を罰しておられるのだと言って喜びました。それに引き換え、預言者の友人たちの多くは神殿に行き、ジョセフが癒されるよう一晩中祈り続けました。¹⁷

やがて、ジョセフが回復し始めると、メアリーはバイレート・キンボールとともにジョセフを見舞いました。ジョセフは、病気の間、主が慰めてくださったと言います。メアリーはジョセフが良く

なりつつあるのを目にして喜び、再び健康を取り戻したら、カナダに住む聖徒たちを訪ねるよう勧めました。

次の日曜日、メアリーは神殿で開かれた別の集会に出席します。集会に出席できるほど回復していなかったため、ジョセフは不在でした。するとウォレン・パリッシュが大股で説教壇に上がり、預言者の席に着きました。集会の管理者であったハイラムは、そうした挑発には乗りませんでした。教会の現状について長時間、話をしました。ハイラムが聖徒たちに、交わした聖約を思い起こすよう呼びかけたとき、メアリーはハイラムの謙遜さに敬意を抱きます。

「わたしの心は穏やかです」とハイラムは聴衆に語りました。「今や、幼子のように感じています。」ハイラムは感極まった声で、聖徒たちに向けて、教会はその時点から息を吹き返し始めるだろうと約束しました。

数日後、メアリーは妹のマーシーにこう書き送っています。「ほんとうに力づけられました。間もなく、教会に秩序と平安が戻ってくるのを目にするだろうとの希望を感じたのです。そのためには、わたしたち皆が一つとなり、心を尽くして祈りましょう。」¹⁸

1か月後、メアリーの兄ジョセフ・フィールディングは、駅馬車からプレストン通りに降り立ちました。この町はイギリス西部における産業の中心地であり、緑の牧草地の中央に位置していました。町の工場や製粉所の高い煙突の群れからは、灰色の煙がもくもくと大気中に吐き出され、数多くある教会の尖塔が、すすけた煙の背後にぼんやりと浮かび上がります。町の中心を流れるリブル川は、曲がりくねりながら海に流れ込んでいます。¹⁹

イギリスに遣わされた宣教師たちは、2日前、リバプール港に上陸したばかりでした。御霊の促しに従い、ヒーバーは宣教師たちをプレストンに向かわせます。その地では、ジョセフ・フィールディングの兄弟であるジェームズが牧師をしていたのです。²⁰ ジョセフと姉妹たちはジェームズと手紙のやり取りをしており、彼に自分たちの改宗について伝え、イエス・キリストの回復された福音について証していました。ジェームズはそうした手紙に書かれていた事柄に興味を抱いたようで、自分の会衆に、ジョセフ・スミスや末日聖徒について話していました。

宣教師たちがプレストンに到着した日はちょうど選挙当日で、通りを歩いていると、労働者たちが窓の外に掲げた垂れ幕が頭上に広がっていました。その垂れ幕に書かれた金色の文字は、宣教師に向けられたものではありませんでしたが、あたかもそうであるかのように彼らを鼓舞しました。「真理は勝つ」とあります。

宣教師たちは「アーメン」と歓声を上げました。「神に感謝を。真理は勝つのだから!」²¹

ジョセフ・フィールディングは、さっそく兄を探しに出かけました。カートランドを発って以来、ジョセフは、主がジェームズに福音を受け入れる備えをさせてくださるよう、ずっと祈っていたのです。ジョセフと同様、ジェームズも新約聖書を心から愛し、その教えに従って生活しようと努めていました。もしジェームズが回復された福音を受け入れたなら、宣教師と主の業にとって大いに助けとなることでしょう。

ジョセフと宣教師たちが自宅にいるジェームズを見つけると、ジェームズは一行を招き入れ、翌朝、ボクソール礼拝堂の説教壇に立ち、教えを説くよう勧めてくれました。ジョセフは、兄が自分たちのメッセージに興味を持つようになったのは、主が働きかけてくださったおかげであると信じていましたが、福音への扉

を開くことで、兄がすべてを失うであろうことも承知していました。

ジェームズは、説教をすることで生計を立てていたからです。回復された福音を受け入れるなら、兄は職を失うことになるでしょう。²²

ファーウェストからカートランドに向かう道中、トーマス・マーシュとデビッド・パッテン、ウィリアム・スミスはパーリー・プラットに出会い、彼が別の方角に向かっていることに驚きます。パーリーは損失を取り戻そうと、一部の土地を売って安全協会の持ち株を現金化した後、単身ミズーリに向かっていたのです。²³

十二使徒定員会を再結集するという決意を持ち続けていたトーマスは、パーリーに、自分たちと一緒にカートランドへ戻るよう熱心に勧めます。ところがパーリーは、多くの心痛や落胆を味わった地に戻ることをしぶりました。²⁴それでもトーマスは、もう一度よく考えるようパーリーに説きつけ、預言者と和解できるはずだと請け合いました。

パーリーは考え込みます。ジョセフに手紙を書いたとき、パーリーは、預言者自身のためによかれと思って書くのだと、自分に言い聞かせていました。しかし、パーリーには、自分自身をだましていることが分かっていたのです。パーリーは、柔和な心でジョセフに悔い改めを求めていたわけではありませんでした。むしろジョセフを激しく責め立て、報復しようとしていたのです。

パーリーもまた、自身の背信感情のせいで、ジョセフ自身の困難が見えなくなっていたことに気づいていました。預言者に向かって無遠慮な言葉を投げつけ、利己的だ、強欲だ、などと言って非難するのは不当なことでした。²⁵

恥じたパーリーは、トーマスやほかの使徒たちとともにカートランドに戻ることを決意します。カートランドに到着すると、

パーリーは預言者の家に向かいました。ジョセフはまだ完全に回復したわけではありませんでしたが、徐々に体力を取り戻しつつありました。ジョセフを目にすると、パーリーは涙を流し、自分が彼を傷つけるために言ったり、行ったりしたすべてのことを謝罪しました。ジョセフはパーリーを赦し、彼のために祈り、祝福しました。²⁶

一方トーマスは、十二使徒のほかの会員たちを再び結束させようとして奔走ほんそうします。オーソン・プラットとジョセフを和解させることはできましたが、ウィリアム・マクレランは立ち去ってしまい、ジョンソン兄弟とジョン・ボイントンの反感を和らげることはできませんでした。²⁷

トーマス自身も、ジョセフが自分に相談することなく、ヒーバー・キンボールとオーソン・ハイドをイギリスに派遣したことを知ると、不満を口にするようになります。伝道の業を管理し、イギリスへの伝道活動を指示することは、十二使徒定員会会長であるトーマスの責任ではないでしょうか。トーマスは十二使徒会を呼び集め、使徒たちを海外へ派遣するために、カートランドに来たのではなかったでしょうか。²⁸

トーマスはヒーバーとオーソンのため、また二人が海外で押し進めている業のために祈りましたが、腹立たしさや傷つけられた自尊心をなだめることは容易ではありませんでした。²⁹

7月23日、トーマスはこの件についてジョセフと話し合います。この会談で、二人は意見の相違を解消し、ジョセフはトーマスに向けた啓示を受けます。³⁰「あなたは、十二使徒会に関して、広くすべての国の中でわたしの王国の鍵を持つようにわたしが選んだ人である」と、主はトーマスに明言されました。主はトーマスの罪を赦し、元気を出すよう鼓舞されます。

しかし、たとえ伝道の業に関する事柄であろうと、十二使徒会は大管長会であるジョセフと顧問の権能の下で行動すべきであることを主は断言し、こう言われました。「あなたがたは、どこ

でも彼らがあなたがたを遣わす所に行きなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとともにいるであろう。」主はトーマスに、大管長会の指示に従うなら、伝道地において大いなる成功に導かれるであろうと告げられました。³¹

「どこでもあなたがたがわたしの名を宣言する所で、…… 効果的な門があなたがたのために開かれるであろう」と主は約束されました。

主はまたトーマスに、亀裂の入った定員会を修復する方法を知ることができるように助言を与え、こう語られました。「あなたは謙遜でありなさい。そうすれば、主なるあなたの神は手を引いてあなたを導き、あなたの祈りに答えを与えるであろう。」

主はトーマスと十二使徒会に、ジョセフとの意見の相違は脇に置き、自分たちの務めに心を向けるようにと命じられました。「あなたがたはこの地におけるわたしの教会の諸事について心を悩ますことのないようにしなさい」と主は言い、こう続けられました。「しかし、わたしの前に心を清くしなさい。それから全世界に出て行って、…… すべての造られたものに〔福音〕を宣べ伝えなさい。」

主は語られます。「見よ、あなたがたの召しは何と偉大なことか。」³²



西部への移動

1837年8月、ジェネッタ・リチャーズがイギリスのプレストンに小旅行をしたときのこと、友人のアンとトーマス・ウォームズリーが、アメリカからやって来た宣教師の一行についてしきりに話していました。

長年病気を患い、徐々に痩せ細っていたアンは、ほぼ骨と皮だけになっていました。アンに福音を伝えたとき、ヒーバー・キンボールは、信仰をもち、悔い改めてバプテスマの水に入るなら、癒されるだろうと約束します。程なくして、アンはほかの8人とともバプテスマを受け、新たな教会に加わりました。そうして、着実に健康を取り戻し始めたのです。

バプテスマを受けた人々の多くは、かつてジェームズ・フィールディングの会衆に属していました。フィールディング牧師は宣教師に対し、自分の教会で教えを説くことを許しましたが、彼自身はバプテスマを受けることを拒み、教区の信徒を失ったことを腹立たしく思うようになりました。¹

ジェネッタは、アメリカ人宣教師のメッセージに興味をそそられます。彼女は、プレストンに立ち並ぶ煙突と混雑した通りから24キロほどの所にある、ウォーカーフォールドという小さな農村で暮らしていました。父親が村のキリスト教牧師だったため、ジェネッタは家庭で神の言葉に親しみながら成長しました。

ほんの数週間で20歳の誕生日を迎える今、神の真理についてさらに学びたいとしきりに願っていました。ウォームズリー家を訪れたとき、ジェネッタはヒーバーに会い、天使や金版に書かれた古代の記録、昔の預言者のように今も神から啓示を受ける、生ける預言者について耳にした事柄に衝撃を受けます。

ヒーバーはジェネッタに、その夜行われる自分の説教を聞くように勧めました。出かけて行き、説教に耳を傾けたジェネッタは、さらに聞きたいと思いました。そこで次の日、再びヒーバーの説教を聞き、その言葉が真実であると知ります。

翌朝、ジェネッタはヒーバーに、バプテスマを施してくれるよう頼みました。ヒーバーとオーソン・ハイドはジェネッタをリブル川の岸辺に連れて行き、ヒーバーが彼女を水に沈めてバプテスマを施しました。その後、川のほとりで、二人はジェネッタに確認の儀式を施します。

バプテスマの後、ジェネッタはほかの聖徒たちとともにプレストンにとどまりたいと思いましたが、ウォーカーフォールドにいる両親のもとに戻る必要がありました。ジェネッタは両親に新たな信仰について話したくてたまりませんでした。聖徒に加わるという自分の決意に対し、父親がどのような反応を示すのかについては不安でした。

「主が父上の心を和らげてくださるでしょう」と、ヒーバーはジェネッタに言いました。「今でもわたしには、父上の教会堂で教えを説く特権があるはずですから。」

ヒーバーの言葉のとおりであることを期待し、ジェネッタはヒーバーに、自分のために祈ってくれるよう頼みます。²

その年の夏、ジョセフはトロントの聖徒たちを訪問するために、カナダへと旅をしました。その留守中、カートランド神殿で開かれた日曜日の集会において、ジョセフ・シニアは安全協会にまつわる騒動について話をしました。ジョセフ・シニアは息子の人格を擁護し、部屋の反対側に座っていた離反者たちの振る舞いを非難します。

この祝福師が聖徒たちに語りかけていると、ウォレン・バリッシュが立ち上がり、話をさせるよう求めました。ジョセフ・シニアは話を妨げることのないように言いますが、ウォレンは素早く部屋を横切って壇上に押し進んで来ると、ジョセフ・シニアにつかみかかり、説教壇から引き離そうとします。祝福師は、地元の治安判事を務めるオリバー・カウドリに向かって大声で叫びましたが、オリバーは、長年の友人を助けるために何の行動も起こしませんでした。

父親の危機を目にしたウィリアム・スミスは素早く立ち上がり、ウォレンを抱きかかえて壇上から引きずり落しました。すると、前に飛び出して来たジョン・ボイントンが、剣をさやから抜きました。そして、ウィリアムの胸に刃先を向けると、それ以上一歩でも近づくなら、同僚使徒である彼を突き刺すと脅しました。そのほかの離反者たちが、ポケットからナイフや銃を取り出し、ウィリアムを取り囲みます。

神殿内は瞬く間に大混乱に陥りました。人々はドアを目掛けて走り出し、近く窓から逃げ出す者もいました。数人の警官が室内に飛び込んで来ると、逃げようとする群衆をかき分けて進み、武器を持った男たちと揉み合いになりました。³

数週間後、カートランドに戻ってその出来事を知ったジョセフは、聖徒たちの緊急大会を開き、教会の各指導者への支持を表明するよう呼びかけました。⁴聖徒たちはジョセフと大管長会を支持しましたが、ジョン・ボイントン、ルーク・ジョンソン、ライマン・ジョンソンの各氏を十二使徒定員会の会員として支持することは拒みました。⁵

信任の決議はなされましたが、カートランドの問題は今後も当分続くであろうことが、ジョセフには分かっていました。教会の唯一のステーキであるカートランドは、聖徒たちの集合の地であると思われていました。しかし、町は経済的にも霊的にも混乱の渦中にあり、ジョセフに敵対するよう、離反者たちが信仰の弱い教会員たちをけしにかけていました。多くの人々にとって、カートランドはもはや平安と霊的な力の宿る地ではなくなっていたのです。

最近、主は示現を通してジョセフに、シオンの新たなステーキを確立し、教会の境を広げるよう命じておられました。ジョセフとシドニーは、今こそミズーリへ行き、ファーウェストで新たな入植地を探す時であると確信します。聖徒たちの集合場所となる、もう一つのステーキを確立するためです。⁶

ジョセフには、ミズーリを訪れるべき理由がほかにもありました。カートランドにおける背教が、シオンの教会指導者の間にも広がっているのではないかと懸念していたのです。ファーウェストを築いたとき、ジョン・ホイットマーとウィリアム・フェルプスは、啓示で指示されたように、ピショップリックや高等評議会と協議しませんでした。そのうえ両者は、寄付金を使って自分自身の名義で土地を買い、それを売って個人的な利益を得ていたのです。

二人とも自身の落ち度を認めていましたが、ジョセフとその他の教会指導者たちは、彼らが今でもミズーリの土地の管理において不正を働いているのではないかと疑っていました。⁷

さらにジョセフは、ファーウェストに移り住む準備をしていた、大管長会の会員がもたらす影響についても心配していました。フレデリック・ウィリアムズは、カートランド安全協会の管理を巡ってジョセフと意見が対立しており、二人の友情にはひびが入っていたのです。⁸一方オリバーは、地元の経済および政治分野において、ジョセフの方がより精力的な役割を果たしていることを不快に思うようになっていました。オリバーと、ミズーリにおける教会の長であるデビッド・ホイットマーの両者は、預言者としての役割を担うジョセフが、この世的な事柄にあまりにも多くかかわりすぎていると感じていたのです。⁹

この二人は、ウォレン・パリッシュやその他の離反者たちと結託していたわけではありませんが、この8か月のうちにジョセフへの忠誠心が薄れてきており、ジョセフは彼らがシオンで問題を引き起こすのではと懸念していました。

カートランドを離れる前、ジョセフは兄ハイラムとトーマス・マーシュに、一足先にファーウェストへ行き、自分とこれらの人々との間の亀裂が深まりつつあることについて、忠実な聖徒たちに警告するよう頼みます。¹⁰ハイラムは、妻ジェルーシャのもとを離れることになるにもかかわらず、この務めを引き受けます。妻はわずか数週間後に、6番目の子供の出産を控えていたのです。¹¹

オリバーと預言者ジョセフとの不和は、教会の管理方法を巡る意見の相違にとどまりませんでした。聖書の靈感に携わる中で多妻結婚について学んで以来、ジョセフは、神が時として、御自分の民にこの原則を実践するよう命じてこられたことを知って

いました。ジョセフはこの教えをすぐに実践することはありませんでしたが、数年後、主の天使から、ほかの妻をめとるように命じられます。¹²

ジョセフはこの命令を受けた後、こうした考えに対する生来の嫌悪感をなかなか克服できずに苦しみました。ジョセフには、多妻結婚のもたらす試練が予見できており、この命令から逃れることを願っていました。ところが天使はジョセフに実行を迫り、揺るぎのない高潔さを持つ人々だけに、この啓示を伝えるよう指示します。また天使はジョセフに、主が御自分の選ばれた僕を通して、この慣習を公にするのがふさわしいと思われる時まで、啓示を内密にしておくよう命じました。¹³

ジョセフがカートランドに住んでいた数年間、ファニー・アルジャーという名の若い女性がスミス家で働いていました。ジョセフは彼女の家族をよく知っており、彼らを信頼していました。ファニーの両親は、教会が産声を上げた最初の年に教会に加わった、忠実な聖徒でした。ファニーのおじであるリーバイ・ハンコックは、イスラエルの陣営で行軍した人物です。¹⁴

主の命令に従い、ジョセフはリーバイの助けを借り、またファニーの両親の承諾を得たうえで、ファニーに結婚を申し込みました。¹⁵ファニーはジョセフの教えと結婚の申し出を受け入れ、おじが結婚の司式を執り行いました。¹⁶

教会内で多妻結婚を教える時がまだ来ていなかったため、天使が指示したように、ジョセフとファニーは自分たちの結婚を内密にしていました。¹⁷ところが、カートランドの一部の人々の間でうわさが広まります。¹⁸1836年の秋には、ファニーはジョセフのもとを立ち去っていました。¹⁹

オリバーは、事の次第をどれほど知っていたかは不明ですが、ジョセフとファニーとの関係を手厳しく批判しました。²⁰エマがその結婚について何を知っていたかについても分かっています。

せん。やがて、ファニーは別の男性と結婚し、聖徒たちの一団から離れて暮らします。後年になって、ファニーはきょうだいから、ジョセフとの多妻結婚について尋ねる手紙を受け取りました。

「それについては、すべてわたしたち自身の問題です」とファニーは返信しています。「何もお話することはありません。」²¹

ジョセフとシドニーがファーウェストへと旅立った1837年の秋、ウィルフォード・ウッドラフは、北大西洋のフォックス諸島で、漁師や捕鯨船員たちに混じり、宣教師として暮らしていました。²² ウィルフォードと同僚のジョナサン・ヘイルは、8月の最後の週、風雨に吹きさらされる島の一つに上陸します。両者とも、常緑樹が辺り一面に生い茂るその島についてはほとんど何も知りませんでした。海の小島々から主の民が集められるというイザヤの預言が成就するのを、手助けしたいと願っていたのです。²³

二人がカートランドを出立する前、その地ではだれにもバプテスマを施せないだろうと言う離反者たちがいました。ジョナサンに、フォックス諸島に向かうのを思いとどませようとしたのです。ジョナサンは、彼らの言葉が正しかったと証明したくはありませんでした。²⁴

ウィルフォードとジョナサンは、それまでの数か月間、すでに一緒に働いていました。カートランドを出てから、彼らはコネチカット州にいるウィルフォードの家族に福音を分かち合おうと試みましたが、バプテスマを受けたのは、彼のおじとおば、それに一人のいとこだけでした。²⁵程なくして、フィービー・ウッドラフが彼らに合流すると、一行は海岸沿いを北上して旅し、メイン州のフィービーの両親の家にとどり着きました。フィービーは実家にとどまり、男たちは伝道の旅を続けます。²⁶

ウィルフォードとジョナサンがこの島々で最初に福音を説いた人々の一人は、ギデオン・ニュートンという名の牧師でした。ウィルフォードとジョナサンは彼の家族と食事をともにし、ギデオンにモルモン書を渡しました。その後、宣教師たちはギデオンの教会に行き、ウィルフォードが新約聖書から福音を説きました。²⁷

その翌日から数日にわたり、ウィルフォードとジョナサンは福音を宣べ伝えます。学校の校舎で教えることもしばしばでした。彼らは、その島の人々が聡明かつ勤勉、そのうえ親切であることを知ります。ギデオンとその家族は、ほとんどの集会に出席しました。ギデオン牧師はモルモン書を研究し、この書物が真実であると御霊が証するのを感じます。しかし、その書物を受け入れることができるかどうか、定かではありませんでした。自分の会衆を手放すことになるのであれば、なおさらです。²⁸

島での滞在が1週間を超えたある朝、ウィルフォードはギデオンの教会で、大勢の会衆に教えを宣べ伝えました。説教が温かく歓迎される様子に不安を抱いたギデオン牧師は、その日の遅く、宣教師たちに面と向かい、モルモン書を十分に読んだが、受け入れることはできないと告げます。牧師は、それまで自分が島の人々に及ぼしてきた影響力をもって、宣教師が福音を説くのをやめさせようと画策します。

ギデオンは教会に行って自身の教えを説き、ウィルフォードとジョナサンが今後この島で成功を収めることのないようにしようとしたのです。ところがギデオンが教会に着いてみると、礼拝堂は空でした。彼の説教を聞くために来た者は、だれ一人としていなかったのです。²⁹

その晩、ウィルフォードとジョナサンは、ジャスタス・エイムズという名の船長と、その妻ベッツィーの家に泊まりました。エイムズ夫妻が宣教師のメッセージに興味を持つと、ある日曜日の

集会後、ウィルフォードは夫妻にバプテスマを受けるよう勧めます。うれしいことに、夫妻はその勧めを受け入れます。³⁰

ウィルフォードはジョナサンの方を向くと、この島での伝道は失敗するだろうと予測した、カートランドの離反者たちの言葉を思い起こさせました。「行って、彼にバプテスマを施してください」と、ウィルフォードはジャスタスを指さしながら言いました。「あの男たちが偽預言者であることを、証明するのです。」³¹

ファーウェストで主の業を行いながら、ハイラムは弟の到着を待っていました。ジョセフがジェルーシャからの伝言を持ち帰るのを、日々待ちわびていたのです。ハイラムとトーマスは、ファーウェストが繁栄する様を目にしてきました。聖徒たちは、幅広い街路と、家屋や庭のための広々とした市街地を築く計画を立てていました。通りでは、笑いながら遊ぶ子供たちの横を、馬や荷馬車、荷車などが地響きを立てながら、次々と巧みに通り過ぎて行きます。町には、何軒もの家や丸太小屋、一軒のホテル、それにピショップの倉を含む店が何軒かありました。町の中心地は、神殿のための敷地です。³²

11月上旬、ジョセフとシドニーの乗った馬車がファーウェストに到着しますが、ハイラムへの知らせは携えていませんでした。数週間前に二人がカートランドを発ったとき、ジェルーシャはまだ出産を終えていなかったのです。³³

ジョセフは直ちにファーウェストで大会を開き、将来の発展に向けて居住地を広げるべく、その方策について話し合います。ジョセフとシドニーには、この地域が聖徒の集合と発展に適した地であることが見て取れました。住居が密集することなく、暴力の危険性が少ないからです。大会において、ジョセフは町の拡張計画と、また主が御心を明らかにされるまで、新たな神殿建設の工事を延期することを発表しました。

預言者はファーウェストの聖徒たちに、教会指導者への支持を表明するよう呼びかけました。このとき、フレデリック・ウィリアムズは大管長会における職を解任され、その空席を埋めるために、シドニー・リグドンがハイラムを指名します。聖徒たちはその指名を承認しました。³⁴

数日後、ハイラムはカートランドからの手紙で、待ちに待った知らせを受けます。しかし、その手紙はジェルーシャではなく、弟のサミュエルが書いたものでした。「愛するハイラム兄さん、今夜僕はある義務を果たすために、座ってあなたに手紙を書いています。その義務とは、思慮分別のある者ならだれでも知りたいと願う、家族の近況をありのままに知らせることです。」

ハイラムは、ページのあちこちへと、せわしく目を走らせます。ジェルーシャは健康な女の子を産みましたが、出産によって体力を消耗してしまいました。スミス一家は彼女が健康を取り戻せるよう懸命に看護しましたが、ジェルーシャは数日後に息を引き取ったのでした。³⁵

ハイラムとジョセフは、直ちにカートランドに戻る準備を始めます。出発前、ジョセフは個人的にトーマスとオリバーに会いました。³⁶ 彼らは、ジョセフのファニー・アルジャーとの結婚に対するオリバーの異存について話しましたが、意見の相違を解消することはできませんでした。³⁷ 最後に、ジョセフはオリバーに手を差し伸べ、相互間に生じた不和をすべて取り除きたいと言いました。オリバーはジョセフと握手を交わし、二人は別れます。³⁸

数週間後、ジョセフとシドニー、ハイラムがカートランドに戻って来ました。ハイラムは親戚の家で、母親の突然の死を今も嘆き悲しむ5人の子供たちの姿を目にします。彼らの母親は、神殿の横にある墓地に埋葬されていました。大管長会における

新たな責任を担うハイラムは、自分一人でどうやって子供たちの世話をすればよいのか、まったく考えが及びませんでした。³⁹

ジョセフは兄に、メアリー・フィールディングと再婚するよう勧めます。⁴⁰メアリーは親切で教養のある、教会に献身的な女性であり、ハイラムのすばらしい伴侶、また子供たちにとっても面倒見の良い母親になるだろうと思ったのです。

しばらくして、ハイラムはメアリーに結婚を申し込みます。36歳のメアリーは、それまで何度か結婚の申し込みを受けたことがありましたが、いつも断ってきました。それに、かつて母親から、妻を亡くし、子供を抱える男とは決して結婚しないようにと警告を受けていました。ハイラムとの結婚を承諾すれば、メアリーは即座に6人の子供の母親となるのです。

メアリーはその申し出についてよく考えた末、受けることにします。以前からスミス一家に敬服の念を抱いており、ジョセフをきょうだいのように思い、ハイラムの謙遜さを尊敬していたからです。⁴¹ハイラムとメアリーは、クリスマス前日に結婚しました。⁴²

多くの聖徒は、ジョセフがカートランドに戻って来たことで安堵しますが、ジョセフが教会の調和を回復してくれるという望みはすぐに消え失せます。ウォレン・パリッシュ、ルーク・ジョンソン、ジョン・ボイントンは、大管長会を訴えるために、グランディソン・ニューエルをはじめとする教会の敵対者たちと、週ごとに会合を開いていました。マーティン・ハリスなど、かつて忠実であった者たちが間もなく一団に加わり、その年の末には、離反者の指導者たちが独自の教会を組織します。⁴³

程なくして、バイレート・キンボールは、イギリスにいる夫に向けてオハイオの教会の状況について書き送りました。定員会

で長年ともに働いてきたルーク・ジョンソンとジョン・ポイントンに対するヒーバーの愛を承知しているバイレートは、その悲惨な有様を夫に知らせることにためらいを覚えました。⁴⁴

「心を痛めずにはいられないことでしょう」とバイレートは綴っています。「彼らはモルモン書と、教義と聖約を信じていると公言しながら、実際にはその働きを否定しているのです。」⁴⁵

手紙の最後には、マリンド・ハイドが夫オーソンにあてた伝言が付け加えられていました。ルーク・ジョンソンはマリンドの兄であり、この背教に、彼女の胸はまさに張り裂けんばかりでした。「あなたがカートランドで一度も目にしたことのないような時を、わたしたちは今過ごしています」と、マリンドは書いています。「互いへの信頼が、根こそぎ消え失せてしまったかのようです。」この危機的な日々を乗り越えるための正しい術を自分自身で知るために、マリンドは状況をよく見極め、祈る必要がありました。

「これまでの生涯で、今ほどあなたに会いたいと思ったことはありません」と、マリンドはオーソンに伝えています。⁴⁶

何をもってしても、離反者たちの感情を和らげることはできないように思えました。ジョセフとシドニーがカートランド安全協会を不正に管理し、聖徒たちをだましたと、彼らは主張していました。ウォレンは、預言者はほかの人にも増して神に従順であるべきだと信じており、安全協会の崩壊を理由に、ジョセフがこの標準を満たしていないことを示そうとしたのです。⁴⁷

数か月にわたり、離反した指導者たちとの和解を試みた後、カートランド高等評議会は彼らを破門しました。その後、離反者は自分たちの教会の集会のために神殿を占拠し、いまだジョセフに忠実である者は、一人残らずカートランドから追放すると脅します。

バイレートは、離反者らが聖徒たちから背き去ったのは間違いであると確信していましたが、怒りよりも、むしろ彼らのために悲しみを感じていました。「これら離反者の一団についてわたしが何を言おうと、結局、彼らの幾人かをわたしは愛しており、彼らに対し、深い思いやりと哀れみを感じているのです。」彼女はヒーバーにこう綴っています。⁴⁸安全協会の破綻によって、彼らが霊的にも、この世的にも試みられたことを、彼女は承知していました。バイレートもまた、ジョセフがこの協会を管理するに当たり、誤りがあったと思いましたが、預言者に対する信仰を失うことはありませんでした。

「ジョセフが主の前にへりくだり、悔い改めたと信じるに足るだけの根拠はことごとくあります」と、バイレートはヒーバーに伝えています。彼女は、教会がこの嵐を乗り切るであろうことを信じていたのです。

こう書いています。「主は、懲らしめに耐えないで、御自身を否定する者は聖められないと言っておられます。」それは、ヒーバーが伝道から戻って来るのをバイレートと子供たちだけで待つ間、カートランドにおける敵意に立ち向かうことを意味しているのかもしれませんが。あるいは事態が悪化した場合、家を捨ててミズーリに移ることを意味する場合もあるでしょう。

「もし逃げなければならぬのであれば、そうします」と、バイレートはヒーバーに告げています。⁴⁹

新たな年が幕を開ける中、カートランドの離反者たちは冷酷さと攻撃性を増していきました。暴徒らによる暴力の脅威が絶えず教会に迫っており、預言者は、負債と偽りの嫌疑に追い立てられていました。間もなく、地元の保安官が逮捕令状を携え、預言者

を捜し始めます。もし捕まれば、ジョセフは高額な裁判審理を受けなければならず、投獄されることでしょう。⁵⁰

1838年1月12日、預言者は主の助けを求め、一つの啓示を受けます。「わたしの教会の大管長会に、家族を連れて、道が分かり次第、できるだけ早く西へ移動させなさい」と主は指示されました。

主はジョセフの友人たちとその家族にも、ミズーリへ集合するよう命じられました。「平穏でいなさい。おお、シオンに住む者たちよ。そうでなければ、あなたがたの安全はないであろう。」⁵¹

スミス一家とリグドン一家は、直ちに逃亡計画を立てます。その晩、ジョセフとシドニーの二人が密かにカートランドを抜け出し、すぐ後を双方の家族が荷馬車で続くことになりました。

カートランドがすっかり暗闇に包まれたその夜、ジョセフとシドニーはそれぞれ馬に乗り、町を出ました。⁵²朝になるまで、二人は南へおよそ96キロほど進み、馬が疲れ切ると、立ち止まって妻や子供たちを待ちました。

ジョセフもシドニーも、再びカートランドを目にすることは無いと思いました。双方の家族が到着すると、男たちはそれぞれの荷馬車に同乗し、ファーウェストを目指して出発したのでした。⁵³



聖なる奉獻された地

1838年の冬は、長く寒い冬でした。ジョセフとシドニーの家族が西部へ向かう間、オリバー・カウドリは雨や雪の降りしきる中、シオンの新たなステークのための場所を探しながら、ミズーリ州北部各地を重い足取りで歩いていました。その地域は、それまで見てきた中で最も優れた地の一つでした。オリバーは、聖徒たちが多くの町や工場を築けるような場所を何十か所も見て回っていたのです。けれども、家もまばらな荒れ野ではほとんど食べる物もなく、夜には湿った土の上に眠るしかありませんでした。

3週間後、ファーウェストに戻ったときには、彼の体はくたくたに疲れ切っていました。¹体力を回復したオリバーは、トーマス・マーシュ、デビッド・パッテン、それに高等評議会が、自分とミズーリの教会の会長会、すなわちデビッド・ホイットマー、ジョン・ホイットマー、ウィリアム・フェルプスを不正行為のかどで調査していることを知ります。²

告発のおもな罪状は、その地域での土地の売買に関するものでした。しばらく前、ジョンとウィリアムはファーウェストの教会の土地を売却した利益を着服しており、その件がまだ解決していなかったのです。そのうえ、オリバーとジョン、ウィリアムはつい先日、ジャクソン郡の所有地の一部を売ったところでした。彼らには、ジャクソン郡における個人の所有地を売却する法的権利があるものの、その土地は主に奉獻されたものであり、啓示を通して売却が禁じられていたのです。これら3人の男たちは神聖な聖約を破っただけでなく、シオンに対する信仰の欠如を露呈したのでした。

オリバーはミズーリ高等評議会に姿を現し、自分たちはジャクソン郡の土地の代金を自分自身で支払ったのだから、思いのままに売却できるはずだと主張しました。オリバーはまた、評議会会員の何人かに密かに会い、彼らの真意を問いました。地位や権威をむさぼっているように見えるトーマス・マーシュやそのほかの人々を、信頼していなかったからです。オリバーは、彼らが何らかの方法でジョセフを自分に敵対させるように仕向け、すでにこじれている預言者との友情をさらに損なおうとしているのではないかと疑念を抱いていました。³

「そうした権力争いには、もううんざりです」と、オリバーは兄弟に打ち明けています。「わたしがこの地に来たのは平和を享受するためなのですから、それができないなら、そうすることが出来る場所へ行くまでです。」

オリバーは大管長会の一員であったため、高等評議会の管轄外におり、自らの召しを保持していました。一方デビッド、ジョン、ウィリアムは、それぞれの職を解かれていました。⁴

4日後、オリバーはこの3人に加え、教会からしきりに離れたがっている複数の人々に会いました。彼らの多くは、ウォレン・パリッシュと、カートランドにおける彼の新たな教会に共鳴して

いました。ウォレンと同様、彼らもまた預言者に敵対することを決意していたのです。⁵

来る日も来る日も、聖徒たちはジョセフがファーウェストに戻って来るのを待ちわびていました。その間、オリバーは教会指導者に対する軽蔑の念を強めていきます。オリバーは、自分がこのような行動に及んだ理由を、指導者たちが理解してくれないのではと思っていたのです。「道理をわきまえておらず、無知なのだ」とオリバーはあざ笑っています。「わたしたちは称賛されることも認められることも期待していません。」⁶

それでもオリバーは、モルモン書と福音の回復に対する信仰を保っていましたし、預言者と共有した神聖な経験を忘れることも、否定することもできませんでした。オリバーとジョセフは長年兄弟であり、親友であり、イエス・キリストにともに仕える者だったのです。

しかし今や、そうした日々は記憶の彼方に去ってしまいました。⁷

ジェネッタ・リチャーズがイギリスのウォーカーフォールドの自宅に戻った後、両親のジョンとエリン・リチャーズは、ヒーバー・キンボールやジェネッタのバプテスマについての話を聞き、興味を抱きました。父親はペンと紙を取り出すと、宣教師のヒーバーあてに短い手紙をしたため、自分の教会堂で教えを説くよう勧めました。

「次の日曜日、こちらにお越しください」と書いています。「お互い見知らぬ者同士ですが、わたしたちの神聖な贖い主にとっては、見知らぬ者でないことを望んでいます。」

ヒーバーは次の土曜日に到着し、リチャーズ牧師に温かく迎えられました。「あなたは最近アメリカから来られた聖職者だと聞

いています」と、彼は言いました。「神の祝福がありますように。」彼はヒーバーを自宅に迎え入れ、食事でもてなします。

家族は遅くまでヒーバーと話し込みました。⁸父親とヒーバーが親しくなる様子を眺めていたジェネッタには、二人の違いが明白に映りました。父親は72歳で、かれこれ40年以上もの間、ウォーカーフォールドの説教壇から教えを説いてきました。背は低く、茶色いかつらを着け、ギリシャ語やラテン語を読みます。⁹一方ヒーバーはというと、背が高く、^{かつぶく}恰幅が良く、はげ頭をしています。40歳にも満たず、教養や社会的な洗練さには欠けていました。

それでも、彼らはすぐに親しい友となったのです。翌朝、二人は一緒にウォーカーフォールドの教会堂まで歩きました。アメリカ人宣教師が説教をすると知って、普段に比べ多くの人々が集会にやって来ており、狭い教会堂はあふれんばかりです。歌と祈りをもって敬虔な雰囲気の中で集会を始めると、牧師は説教をするようヒーバーを招きました。

説教壇に立ったヒーバーは、普通の人のような言葉遣いで聴衆に語りかけ、イエス・キリストへの信仰と、心からの悔い改めの大切さについて話しました。そして、人は神から正しい権能を授かった者により、水に沈めるバプテスマと聖霊の賜物を受ける必要があると言いました。

1年前のカナダの改宗者たちと同様、ウォーカーフォールドの人々は、聖書に対する自分たちの解釈と一致するメッセージを受け入れる備えができていました。その日の午後、ヒーバーの説教をもう一度聞こうと、さらに多くの人々が教会堂にやって来ます。ヒーバーが説教を終えると、会衆は涙を浮かべており、ジェネッタの父親は、翌日も説教をするようヒーバーに勧めました。

間もなく、ジェネッタはウォーカーフォールドにおけるただ一人の信者ではなくなりました。月曜日の説教の後、会衆はヒー

バーに、水曜日にも再び説教をしてくれるよう懇願しました。週末までに、ヒーバーは会衆のうちの6人にバプテスマを施します。ウォーカーフォールドの人々はその後も、引き続き説教を聞きたいと望んだのでした。¹⁰

1838年3月14日、ジョセフとエマ、それに夫妻の3人の子供たちは、ほぼ2か月の旅路を経てファーウェストに到着しました。預言者をシオンに迎えることを切望していた聖徒たちは、歓迎会を開き、喜んで一家を迎えました。ジョセフがカートランドに残してきた敵意や反対からすると、聖徒たちの友好的な言葉や優しい抱擁は喜ばしい変化でした。ジョセフを取り囲む聖徒たちには一致の精神があり、彼らは互いへの愛にあふれていたのです。¹¹

ジョセフは、ミズーリで新たにやり直したいと思っていました。カートランドやアメリカ合衆国東部、カナダの教会支部からやって来る聖徒たちが、間もなく到着するでしょう。彼らを迎えるべく、教会はシオンのステークを確立し、そこで人々が平和のうちに集合し、繁栄の機会を得られるようにする必要がありました。

オリバーはすでに新たな集合場所のための土地を探し出し、彼の報告は期待できるものでした。ところがジョセフには、どこであろうと聖徒たちが新たな定住地に入植し始める前に、ファーウェストで増大しつつある離反の動きに対処しなければならぬことが分かっていました。オリバーのような友人が教会から離れていくのを目の当たりにし、ジョセフは深い悲しみに沈みます。しかし、カートランドで起きたような不和の蔓延を、ミズーリで再び繰り返すわけにはいきません。

ジョセフは、ファーウェストにおける相対的な平和を確立する責任を、トーマス・マーシュと高等評議会の指導力に委ねました。ウィリアム・フェルプスとジョン・ホイットマーをその職から解任した当時、高等評議会はすでに二人を破門しており、ジョセフは彼らの決定を承認します。今やオリバーの背教に対処するときであると、ジョセフは確信します。¹²

4月12日、エドワード・パートリッジは、教会におけるオリバーの地位を見直すために、ビショップの評議会を招集しました。オリバーの反抗的な態度は周知のものでした。教会の集会に出席しなくなり、ほかの教会指導者の勧告を無視し、トーマスや高等評議会を侮辱するような手紙を書いていたのです。オリバーはまた、啓示に反してジャクソン郡の所有地を売却し、ジョセフを姦通罪で不当に告発し、神の大義をないがしろにしたことでも非難されていました。¹³

オリバーは聴聞会には出席しないことになりましたが、自らを弁護する手紙をパートリッジビショップに送りつけます。その手紙でオリバーは、ジャクソン郡の土地を売却したことや、教会指導者に従わなかったことを否定しませんでした。それどころか、いかなる啓示、聖約あるいは戒めがあろうとも、自分には土地を売却する法的権利があったと主張しました。さらには、教会における自身の会員権を放棄したのです。¹⁴

終日、評議会は証拠を見直し、オリバーの行動に関する複数の聖徒の証言を聞きました。ジョセフは立ち上がると、かつてオリバーに対して抱いていた信頼について語り、オリバーの告発にこたえてファニー・アルジャーとの関係について説明しました。¹⁵

さらなる証言を聞いた後、評議会はオリバーの件について話し合いました。オリバーと同様、評議会一同は個人の選択と自由に関する原則を大切にしていました。それでもほぼ10年近

くにわたり、主は聖徒たちに、一致するように、また神の王国を築くために、個人の望みを脇に置いて自分の持てるものをささげるように命じてこられたのです。

オリバーはこれらの原則に背を向け、むしろ自分自身の判断に頼り、教会とその指導者、主の戒めを軽視してきたのです。もう一度告発を見直した後、パートリッジビショップと顧問たちは、オリバーを教会から破門するというつらい決断を下したのです。¹⁶

イギリスのリバーリブルバレーでは、春の陽気が冬のつらい寒さに終わりを告げていました。¹⁷ウォーカーフォールドに隣接する町の近くを、緑の放牧地を通して旅しながら、ウィラード・リチャーズは、道を縁取る小さな白い花を摘んでいました。¹⁸彼はその地域の教会支部を巡回中で、ヒーバー・キンボールとオーソン・ハイドがその日の午後、およそ8キロほど離れた集会所で説教するのを聴きに行く予定でした。

イギリスに到着してからの8か月で、ウィラードと同僚たちは、その谷沿いの町や村で千人以上の人々にバプテスマを施しました。新しい聖徒の多くは、イエス・キリストの福音に見いだされる希望や平安のメッセージに引きつけられた若者や労働者階級の人々でした。ヒーバーの飾り気のない物腰は人々を安心させ、すぐさま彼らの信頼を勝ち得たのでした。¹⁹

ウィラードはヒーバーに比べて教養があり、植物療法を学んでいたため、同僚宣教師が得意とする率直な言葉遣いが苦手でした。そのため、同僚は時々ウィラードに、平易な言葉でメッセージを伝え、福音の第一の原則に焦点を当てるよう思い起こさせる必要がありました。それでもウィラードは、抵抗に遭いながらも、マンチェスターの町に近いプレストン南部に教会の強固な

支部を設立しました。彼がバプテスマを施した人々の多くは、空気の悪い工場で長時間働いており、薄給でした。回復された福音について聞いたとき、彼らは御霊を感じ、主の来られる日が近づいているという約束に喜びを見いだしたのです。²⁰

ある教会員の家に着したウィラードが、台所へ入り、摘んだ白い花を吊り下げのやいなや、二人の若い女性が部屋に入ってきました。そのうちの一人がジェネッタ・リチャーズであることを、ウィラードは知ります。

ウィラードは、ジェネッタについて聞いていました。ジェネッタとウィラードは同じ苗字でしたが、親戚ではありません。ジェネッタが教会に入った後、ヒーバーはウィラードに、彼女について手紙を書いて寄りました。そこには、「今日、わたしはあなたの妻にバプテスマを施しました」と綴られていたのです。

33歳になるウィラードは、教会の未婚の男性たちよりずっと年上でした。ヒーバーがジェネッタに、ウィラードについて何か言っていたとしても、何と言ったか、彼には知る由もありません。

その二人の若い女性たちもまた、ウィラードが行く予定の集会に向かっていたので、ウィラードは彼女たちと一緒に歩きながら話をする時間がたっぷりありました。

「リチャーズというのは良い名前です」と、ウィラードは歩きながら言います。「この名前を変えたいと思ったことなど一度もありません。」それから勇気を奮って、こう続けました。「あなたはどうですか、ジェネッタ。」

「わたしもです」とジェネッタは答えました。「それに、わたしは絶対に苗字を変えないと思いますわ。」²¹

ウィラードはその後、ジェネッタの新たな面を知ることとなります。二人がプレストンで会ってから数週間後、ヒーバーとオーソンは、自分たちがアメリカ合衆国へ帰国することになったと発表しました。

二人が出発の準備をしているとき、使徒たちは、プレストンの聖徒たちがよく利用する大きな建物で終日の大会を開きました。²²説教や賛美歌を歌う合間、宣教師たちは 40 人に確認の儀式を執り行い、100 人以上の子供たちを祝福し、数人の兄弟たちに神権の聖任をしました。

聖徒たちに別れを告げる前、ヒーバーとオーソンはジョセフ・フィールディングを新たな伝道部会長に任命し、ウィラードと、ウィリアム・クレイトンという名の若い工場事務員を顧問に召しました。その後、イギリスとアメリカの聖徒の一致のしるしとして、二人は新しい会長会と握手を交わしたのです。²³

その春、ファーウェストにいる預言者に、一つの啓示がもたらされます。「立って光を放ちなさい。それは、あなたがたの光がもろもろの国民のための旗となるためであ[る]。』主は聖徒たちに、そう告げられました。主は、教会の名称を末日聖徒イエス・キリスト教会として宣言され、ファーウェストは聖なる奉獻された地であると明言されました。

「わたしの思いは、ファーウェストの町が、聖徒たちが集まることによって速やかに築かれることであり、また、その周りの他の場所が、..... ステークとして定められることである。」主は聖徒らに、ファーウェストに神殿を建てるよう命じられ、土台を据える日として 1838 年 7 月 4 日を指定されました。²⁴

それから程なくして、ジョセフと何人かの兄弟たちはコールドウェル郡の真北に当たるデイビーズ郡に旅をし、スプリングヒルと呼ばれる場所の教会員の定住地を訪ねました。ジョセフはその地域が、ミズーリにやって来る聖徒たちに適した集合の地となるよう望んでいたのです。²⁵

コールドウェル郡は末日聖徒のために特別に設置された郡であるにもかかわらず、政府はすでに土地の大部分を検分し終えており、その価格は貧しい聖徒たちが購入するにはあまりに高いものでした。一方デイビーズ郡では、未開拓の広大な土地の検分がまだ行われていませんでした。教会員はその地に自由に定住することができ、政府がその地域を検分するころには、すでに土地を耕し、十分な購入資金を得ていることでしょう。²⁶

とはいえ、聖徒らを近隣の郡に移住させることには、多少の危険が伴います。デイビーズ郡の人々は、聖徒たちが定住するのはコールドウェル郡だけであると信じていたのです。そのため、郡内に住み着いていた聖徒たちに、出て行くよう警告する男たちもいました。しかし、その地に聖徒が定住するのを制限する法律はなかったため、抗議行動は間もなく終息しました。²⁷

北に向かって旅をするジョセフは、その地方の美しさに驚嘆します。目前に広がるデイビーズ郡には限りない自由があり、聖徒たちが新たな定住地を築くのに必要なものはすべて揃っていました。

大草原には木がほとんどありませんでしたが、野生の動物が数多くいるようでした。ジョセフは、野生の七面鳥やめんどり、鹿、ヘラジカなどを見かけました。小さな流れや川が、その土地を青々とした肥沃なものにしていました。郡内で最大の川であるグランド川は、蒸気船が運行するのに十分な深さと川幅があり、集合する聖徒たちは容易に旅や交易をすることができます。

ジョセフと仲間たちは、川岸に沿って約 16 キロほどの道のりを馬に乗って進み、スプリングヒルに到着しました。そのこじんまりとした定住地は、広大な緑の谷を見下ろす断崖絶壁のふもとにあります。定住地の指導者であるライマン・ホワイトは、グランド川を渡る連絡船を操縦してわずかばかりの生活費を稼いでいました。²⁸

男たちは断崖絶壁を登り、テントを設置した後、馬に乗って連絡船まで戻りました。ジョセフは聖徒たちのためにその土地を手に入れ、川の近くに町を築きたいと口にします。主はジョセフに、この地は最初の人類であるアダムが、死ぬ前に子供たちを祝福した場所、すなわちアダム・オンダイ・アーマンであることを示されました。²⁹ 預言者ダニエルが預言したように、救い主が地上に戻られるとき、アダムがこの谷で彼の民を訪れることについて、ジョセフは説明しました。³⁰

定住地を持つことは、ジョセフが何にも増して望んでいることでした。1838年6月28日、ライマンの家の近くの森で、ジョセフはその聖なる地にシオンの新たなステークを組織し、聖徒らに集まるよう指示したのです。³¹



自らの自由を宣言し

1838年の6月中旬、両親の家の玄関先に立つウィルフォード・ウッドラフは、イエス・キリストの回復された福音を伝えようという決意を新たにしていました。フォックス諸島に支部を開いた後、最初の子供の出産を間近に控えたフィービーを訪ねるため、ウィルフォードは本土に戻っていたのです。その後ウィルフォードは、ボストンやニューヨーク、そのほか沿岸の町で福音を宣べ伝えることに時を費やしました。そうして北部に戻る前、最後に両親の家に立ち寄ったのです。¹

ウィルフォードは、自分の家族が真理を喜んで受け入れる姿を見ることを、何にも増して望んでいました。父親のアフェクは、生涯を通じて真理を探究してきましたが、その成果はまだ出ていませんでした。妹のユニスもまた、人生にもっと光が欲しいと切望していました。²ところが、数日にわたって家族と教会について話しながら、何かが教えを受け入れる妨げとなっていることにウィルフォードは気づきます。

「非常に気がかりな日々だった」と、ウィルフォードは記しています。³故郷で過ごす時間は残り少なくなっていました。両親のもとにさらに長くとどまるなら、赤ん坊が生まれるのに間に合わなくなるでしょう。

ウィルフォードは家族のため、より熱心に祈りましたが、バプテスマを受けたいという彼らの思いは弱まるばかりです。「悪魔が激しい怒りと誘惑をもって家族全員に襲いかかった」と、ウィルフォードは日記に記しています。⁴

7月1日、ウィルフォードはもう一度家族に福音を伝え、キリストの言葉をあらん限りの熱意を込めて宣言しました。ついに彼の言葉が家族の心に届き、彼らの不安は消え去ります。皆が神の御霊を感じ、ウィルフォードが真理を語ったことが分かったのです。彼らには行動を起こす備えができていました。

ウィルフォードはすぐさま、家族を家の近くの運河へ連れて行きました。一同は水のひとつりで賛美歌を歌い、ウィルフォードが祈りをささげました。それからウィルフォードは水に入って行き、父親と継母、妹、おばといとこ、家族の友人の一人にバプテスマを施したのです。

最後の人を水から上げると、ウィルフォードは喜びに満たされつつ運河から上がりました。「この瞬間を忘れてはいけない」と、彼は自分に言い聞かせます。「神の恵みによろと思わなければ。」

髪や服からしずくをしたたかせながら、一家は家に戻りました。ウィルフォードは一人一人の頭に手を置き、彼らを教会の会員に確認します。⁵

2日後、両親に別れを告げたウィルフォードは、最初の子供がこの世に誕生するのに間に合うことを望みつつ、メイン州へと急いだのでした。⁶

その年の春と夏、聖徒たちは幾つもの群れを成してミズーリに集まりました。カナダで大きな成功を取めた宣教師、ジョン・ページは、トロント地区での改宗者の大きな一団を率いて、シオンに向けて出発しました。⁷カートランドでは七十人定員会が、貧しい幾つかの家族がミズーリへともに旅立てるよう備えるべく、立ち働いていました。道中、物資を分け合い、支え合いながら進むことで、約束の地に安全に到着できるよう望んでいたのです。⁸

7月4日、ファーウェストの聖徒たちは国の独立記念日を祝うためにパレードを行い、新たな神殿の隅石を据えました。パレードを先導するのは、ジョセフ・スミス・シニアと小さな軍団です。後に続くのは、教会の大管長会と、神殿の設計者を含むそのほかの教会指導者たちでした。騎兵隊の一団が、誇らしげにしんがりを務めます。⁹

ともに行進しながら、シドニー・リグドンは聖徒の一致を目の当たりにすることができました。ところがここ数週間にわたり、教会はさらに多くの離反者たちに処罰を下していました。オリバー・カウドリに対する聴聞から間もなく、高等評議会はデビッド・ホイットマーとライマン・ジョンソンを破門に処したのです。¹⁰それから程なくして、ビショップの評議会はウィリアム・マクレランを、大管長会に対する信頼を失い、好色にふけたことで叱責しました。¹¹

それ以来、ウィリアムは教会を去り、ファーウェストから出て行きましたが、オリバーとデビッド、そのほかの離反者たちはその地域にとどまりました。6月、シドニーはこれらの人々を公然と非難します。山上の垂訓の言葉を繰り返すと、彼らを効きめのなくなった塩にたとえ、もはや何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけであると言ったのです。後にジョセフはその叱責への同意を表明しましたが、聖徒らに、離反に対処する際には法律に従うよう注意を促しました。¹²

シドニーの説教は、離反者から教会を守るため、1週間前に
結束した一部の聖徒たちを大いに勇気づけました。¹³彼らには
幾つかの呼び名がありますが、一番よく知られているのは、旧約
聖書のダン族に倣ってつけられたダナイト団という名です。その
グループはジョセフが組織したものではありませんが、彼らの行
動については幾分か容認していたようです。¹⁴

教会を守るという熱意にあふれたダナイト団は、教会内外に
見られる脅威から、聖徒の権利を守ると誓っていました。彼らの
多くは、意見の相違によりカートランドの共同体が崩壊し、ジョセ
フをはじめとする幾人かが暴徒の攻撃を受けるという危機に瀕
し、シオンの理念が崩壊していく様を目の当たりにしてきた者た
ちでした。彼らは一丸となって、同様のどのような脅威からも、
ファーウェストの共同体を守ると固く誓っていたのです。

シドニーが離反者たちを公然と非難したちょうどそのころ、
ダナイト団はオリバーやデビッド、そのほかの者たちに、コールド
ウェル郡から出て行くよう、さもなくば恐ろしい結末を迎えること
になると警告しました。数日のうちに、男たちは永久にその地か
ら逃げ出します。¹⁵

7月4日、独立記念日のパレードが町の広場に到着すると、
聖徒たちは高い棒の先にアメリカ国旗を掲げ、掘り下げた神殿
用地の周りを輪になって練り歩きました。職人たちが注意深く
隅石を据えるのを、神殿の土台の端から聖徒たちが見守りま
す。それからシドニーが近くの台に上がり、会衆に演説をしまし
た。¹⁶

独立記念日には熱烈で感動的な演説をするというアメリカ
の伝統に倣い、シドニーは聖徒たちに、自由について、聖徒らが
耐え忍んできた迫害について、また霊的な教化という点において
神殿の持つ重要な役割について、力強く語りかけました。また

演説の終わりには、教会の敵対者たちに向けて、聖徒たちに手出しをしないよう警告しました。

「もうこれ以上、わたしたちの権利を欲しいままに踏みつぶすことは断じて許しません」と、シドニーは断言します。「だれであろうと、そうしようとする者は命を失うことになります。」

聖徒たちは侵略者になるつもりなどなく、ただ自らの権利を守りたいだけであると、シドニーは聴衆に保証しました。「暴徒たちは我々を妨害しようとやって来るのです」と、シドニーは叫びます。「これは我々と彼らの間の、食うか食われるかの戦いなのです。ですから我々は、彼らの血の最後の一滴がしたたり落ちるまで、彼らを追い詰めるでしょう。さもなければ、彼らが我々を壊滅させることになるのです。」

もはや聖徒たちは、自分たちの家や穀物を断念することはないでしょう。これ以上おとなしく迫害に耐えることはないのです。「我々は今日をもって、決して打ち碎かれることのない目的と決意を持って、自らの自由を宣言する」とシドニーは告げました。「いや、絶対に!!」¹⁷

「ホサナ!」と聖徒たちは歓声を上げました。「ホサナ!」¹⁸

聖徒たちがファーウェストに集結したころ、エライジャ・エイブルという名の宣教師が、何百キロも離れたカナダ東部で福音を宣べ伝えていました。ある夜、エライジャは気になる夢を見ます。自分がニューヨーク州でバプテスマを施したユース・フランクリンという女性が、モルモン書やジョセフ・スミスについて疑いを抱き、悩んでいるという夢でした。確信を持ってないままに、彼女は眠ることも、食べることもできません。自分は騙されたと感じていたのです。¹⁹

エライジャは急いでニューヨーク州へと旅立ちます。ユーニスと夫のチャールズに出会ったのは、その春、彼らが暮らす町で福音を宣べ伝えていたときのことでした。²⁰ エライジャが彼らに伝えた教えは、大まかで統一性のないものでした。貧しい黒人の家庭に生まれたエライジャには、教育を受ける機会がほとんどなかったのです。

それでもほかの宣教師たちと同様、彼もメルキゼデク神権に聖任され、カートランド神殿で儀式を受け、力を授けるエンダウメントを受けていました。²¹ 教養に欠けている点については、信仰と御霊の力で補っていたのです。

エライジャの説教はユーニスを感動させましたが、その後、チャールズが立ち上がり、彼に論争を仕掛けてきました。エライジャはチャールズに近寄ると、彼の肩に手を置いて言いました。「明日、あなたに会いに来ますから、そこで少しお話ししましょう。」

翌日、エライジャはフランクリン家を訪れ、ジョセフ・スミスについて教えましたが、チャールズは依然として納得できないようでした。

「あなたに信じていただくために必要なのは、しるしですか」と、エライジャは尋ねました。

「そうだ」とチャールズは言います。

「あなたは望みのものを得るでしょう。しかし、そのために、あなたは心の痛みを感じることになるでしょう」とエライジャは告げました

程なくしてエライジャが戻ると、チャールズは多くの悲しみを経験した後、ついに赦しを祈り求めるようになったことを知ります。そのときまでに、チャールズとユーニスは教会に加わる備えができており、エライジャは二人にバプテスマを施したのです。²²

当時ユーニスは、自分の信仰に確信がありました。その後、彼女に何が起こったのでしょうか。

それから少したったある日曜の朝、ユーニスは玄関先に立つエライジャの姿を見て驚きます。彼女の胸には、再びエライジャに会ったら言おうと思っていたことがたまっていました。モルモン書は作り話で、ジョセフ・スミスは偽預言者だと言いたかったのです。それでも、戸口でエライジャを見ると、ユーニスは彼を家の中に招き入れました。

幾つか言葉を交わした後、エライジャは言いました。「姉妹、バプテスマを受けた後、救い主が誘惑されたのであれば、あなたも誘惑に遭わないわけではないでしょうね。主が受けられたものとは異なる別の誘惑を、あなたも受けられたことでしょう。」エライジャはユーニスとチャールズに、その日の午後、近くの校舎で教えを説くつもりだと伝えました。そうして、近所の人たちにも説教について知らせるように頼むと、夫妻の家を後にしました。

ユーニスはその集会に行きたくはありませんでしたが、午後になると、夫に向かって次のように言いました。「行って、どんな話をするのか見てくるわ。」

校舎に座っていると、ユーニスはこの度もまたエライジャの言葉に感動しました。それは、新約聖書の聖句に関する教えでした。「愛する者たちよ、あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起きたかのようには驚きあやむことなく」とあります。²³ エライジャの声と回復された福音のメッセージは、ユーニスの心を御霊に向けて開かせました。かつて感じた確信が、たちまち鮮やかによみがえってきたのです。ジョセフ・スミスは神の預言者であり、モルモン書が真実であることを、ユーニスははっきりと知ったのでした。

エライジャは2週間以内に戻るとユニスに約束します。ところが彼の出発後、ユニスは町で、エライジャが女性一人と5人の子供たちを殺害したという偽りのビラを見かけます。通報し逮捕に至れば、懸賞金が出るというのです。

「ところで、あなたはモルモンの長老についてどう思うの。」そう尋ねてくる隣人も何人かいました。町でもう一度布教をする前にエライジャは逮捕されるだろうと、人々は断言しました。

エライジャがだれかを殺したなどと、ユニスは信じませんでした。「彼は約束を守って来てくれるわ。神が彼を守ってくださるでしょう。」²⁴

教会の敵対者が話をでっち上げたに違いありません。奴隷制度が違法となる地域であっても、白人が黒人について偽りを広めることは珍しくありませんでした。厳しい法律と慣習により黒人と白人間の交流が制限されており、時として人々はそうした法律や慣習を強要するために、残酷な策を思いついたのでした。²⁵

2週間後、エライジャは約束どおり、別の教えを伝えるために戻って来ました。校舎内は詰めかけた人々でいっぱいです。だれもかもが、エライジャが逮捕されるか、あるいはもっと悪い事態に見舞われる場面を目にしたいようでした。

エライジャが席に着きました。しばらくしてエライジャは立ち上がり、次のように言います。「友である皆さん、わたしは一人の女性と5人の子供を殺したと流布されており、多額の懸賞金をかけられています。今わたしは、ここにいます。」

ユニスは部屋を見回しました。だれも身動き一つしません。

「わたしに何か手を加えたいなら、今がその時です」とエライジャは続けます。「しかし、わたしが一度説教を始めたなら、手出しはしないいただきたい。」

エライジャは一呼吸置くと、反応を待ちました。聴衆は啞然とし、沈黙したまま彼を見詰めています。少しすると、エライジャは賛美歌を歌い、祈り、力強い説教をしました。

町を立ち去る前、エライジャはユーニスとチャールズに、次のように勧めました。「家売って、もっと西の方へ行ってはどうですか。」その地域では聖徒らに対する偏見が強まっており、およそ65キロほど先には教会の支部があったのです。主は御自分の民がその信仰を守るに当たり、孤立することを望んではおられません。

ユーニスとチャールズはエライジャの勧めを受け入れ、間もなく教えられた支部に集うようになります。²⁶

ミズーリ州に戻ったジョセフは、教会の将来について楽観的でした。ジョセフは、独立記念日におけるシドニーの演説を小冊子にまとめて発行します。ミズーリ州のすべての人々に、今後聖徒たちが、もはや暴徒や離反者たちの脅しに怯えることはないと思ってほしかったのです。²⁷

それでも、以前からの問題の数々がジョセフを苦しめていました。教会の負債の大部分はまだ返済されておらず、度重なる迫害、国内の経済問題、カートランドの財政破綻、そしてミズーリへの多額な移動費のために、多くの聖徒が貧困状態のまま取り残されていました。さらに主は大管長会に、これ以上融資を受けることを禁じられました。²⁸ 教会は基金を必要としていましたが、それを集めるための確実な制度がまだ整っていませんでした。²⁹

最近、教会のビショップであるエドワード・パートリッジとニューエル・ホイットニーは、奉獻の律法に従う方法として什分の一を提案しました。ジョセフは聖徒らが財産を奉獻すべきだ

と知っていましたが、主は什分の一としてどれほどのものを求め
ておられるのか、定かではありませんでした。³⁰

ジョセフはまた、十二使徒定員会についても懸念していました。
2日ほど前のこと、ヒーバー・キンボールとオーソン・ハイド
からファーウェストに、使徒である二人がイギリスへの伝道から
無事帰還し、カートランドに到着したことを報告する手紙が届き
ました。ヒーバーは妻のバイレートと子供たちに再会し、一家は
今やミズーリへ越す準備をしていました。³¹そのほか 6人の使
徒、すなわちトマス・マーシュ、デビッド・パッテン、ブリガム・
ヤング、パーリー・プラット、オーソン・プラット、ウィリアム・スミ
スは、ミズーリにいるか伝道中で、今なお固く信仰を保っていま
した。しかし、残りの4人の使徒は教会を去っており、定員会に
は空席があったのです。³²

7月8日、ジョセフとそのほかの教会指導者たちは、こうし
た問題について祈り、引き続き数多くの啓示を受けました。教会
の負債を清算するに当たり、主はオリバー・グレインジャーとい
う名の聖徒を大管長会の代表に指名されます。聖徒たちがカー
トランドで放棄した財産は売却され、負債の返済に充てられまし
た。³³

その後主は、什分の一に関するジョセフの問いに答えを与え
られました。「わたしは、彼らの剰余の財産をすべてシオンにお
けるわたしの教会のビショップの手にゆだねることを求める」と
主は言われました。「それは、わたしの家を建てるため、シオン
の基を据えるため……である。」また主は続けて、聖徒らが剰
余の財産をささげた後、毎年の全利益の10分の1を納めるよう
に命じられました。

「もしわたしの民がこの律法を守らずに、これを聖なるもの
として保た〔なければ〕、……それはあなたがたにとってシオン
の地ではなくなる」と主は宣言されたのです。³⁴

十二使徒に関し、主はトーマス・マーシュに、ファーウェストにとどまって教会の出版を助けるように、そのほかの使徒たちには伝道をするように命じられました。「彼らができるかぎりへりくだった心で、柔和と謙遜と寛容をもってこれを行うならば、主なるわたしは彼らに、わたしがその家族に必要なものを与えると約束をしよう。またその後、効果的な門が彼らのために開かれるであろう。」主はそう約束されました。

主は十二使徒に、翌年海外に出向くよう望んでおられました。また主は定員会に、これから1年とたたない1839年4月26日に、ファーウェストの神殿用地に集まり、その地からイギリスへの新たな伝道に赴くよう指示されました。³⁵

最後に主は、定員会の空席を満たすために4人の男性を指名されます。新たな使徒のうち、ジョン・テラーとジョン・ページの二人はカナダにいました。3人目となるウィラード・リチャーズは、イギリスの伝道部会長会で奉仕していました。4人目のウィルフォード・ウッドラフはメイン州におり、数日後には父親になる予定でした。³⁶

7月14日、フィービー・ウッドラフは娘のサラ・エマを出産します。ウィルフォードは、健康な赤ん坊が生まれ、妻が無事出産を終えたことに大喜びします。³⁷妻が回復する間、ウィルフォードは、夫を亡くしたフィービーの姉、サラのために働いて時間を過ごしました。「一日芝刈りをして過ごした」と、ウィルフォードは日記に記しています。「慣れない仕事をしたので、夜はくたくたになってしまった。」³⁸

数日後、フォックス諸島で伝道中の宣教師、ジョセフ・ボールから手紙が届きました。そこに書かれた報告によると、カートランドの離反者たちが、当地に住むウィルフォードの改宗者たち

に手紙を送りつけ、彼らの信仰を揺るがそうとしているというのです。フォックス諸島の大半の聖徒はその手紙を無視しましたが、数人が教会を去りました。その中には、ウィルフォードが翌年、ミズーリに連れて行きたいと思っていた人々も含まれていました。³⁹

サラ・エマの誕生から2週間後、ウィルフォードはフォックス諸島へと急ぎます。聖徒たちを強め、シオンへの旅に備えさせるためです。フィービーのもとを離れるに当たり、ウィルフォードは「おお、我が神よ、わたしの旅路に幸いをお与えください」と祈りました。「留守の間、妻と、あなたが与えてくださった娘を祝福してください。」⁴⁰

1週間ばかり後、ウィルフォードがフォックス諸島に到着すると、ミズーリのトーマス・マーシュから手紙が届いていました。その手紙には、「主は十二使徒に、この場所にできるかぎり速やかに集まるように命じておられます」と書かれていました。「ウッドラフ兄弟、これによって、あなたが十二使徒の一人として指名されたということをご理解ください。」主はウィルフォードに、イギリスへの伝道に備えるため、できるかぎり早くファーウェストに来るように望んでおられました。

この知らせに、ウィルフォードはさほど驚きませんでした。数週間前、自分が使徒に召されるのではないかという印象を受けていたからです。しかし、それについてはだれにも話していませんでした。それでもその晩、横になったウィルフォードの胸には様々な思いが渦巻き、眠れぬ夜を過ごしたのです。⁴¹



十分に耐え

1838年8月6日はミズーリ州の投票日でした。その朝、ジョン・バトラーはデイビーズ郡の議員に投票するため、ガラティンの町へ馬を走らせました。¹

ジョンは末日聖徒になってから数年になります。彼と妻のキャロラインはその夏、アダム・オンダイ・アーマン近くの小規模な定住地に越して来たのです。ジョンは地元の民兵団とダナイト団の団長でした。²

ほんの1年前に開かれたばかりのガラティンの町には、家や酒場がひと固まりになって立ち並んでいます。ジョンが町の広場に着くと、そこは郡内各地からやって来た男たちでいっぱいでした。広場の片隅に建つ小さな家の中には、投票所が設けられています。³男たちが列を成して投票所に入っていくと、運動員たちが外の群衆に混じりました。⁴

ジョンは中心となる一団から離れて立つ、聖徒たちの小さな群れに加わりました。デイビーズ郡における人々の対応は、聖徒

たちに対して決して好意的なものではありませんでした。ジョセフがアダム・オンダイ・アーマンにステーキを組織してからというもの、定住地は繁栄し、200戸以上もの家が建てられました。今や聖徒たちは郡の投票に影響を及ぼせるまでになっており、それがほかの多くの定住者たちを怒らせる原因となったのです。問題を避けるために、ジョンと友人たちは一緒になって投票し、すぐさま家に帰るつもりでいました。⁵

ジョンが投票所に近づいたとき、州の代表候補であるウィリアム・ペニストンが、演説をするためにウイスキー樽の上に登りました。その前年、ウィリアムは聖徒らの票を獲得しようとしたが、聖徒の大半が別の候補者を支持していることを知ると、聖徒に暴言を吐くようになったのです。

「モルモンの指導者は皆、馬泥棒でうそつきで偽造者の輩だ。」ウィリアムは近くに集まった男たちに向かい、そう怒鳴り散らしました。ジョンの不安は膨れ上がります。ウィリアムが群衆をたきつけて、今にも彼や友人たちを攻撃させるやもしれません。ほとんどの男たちは前々から聖徒に対して怒りを抱いていたうえに、投票が始まってから、多くの者がウイスキーを飲んでいました。

ウィリアムは投票者に向かい、聖徒たちが彼らの財産を盗み、票を圧倒するだろうと警告しました。⁶また、聖徒らはその地域の住民ではないのだから、投票をする権利はないと言い放ちました。「わたしはクレイ郡からおまえたちを追放するために暴徒をさし向けた」と、ウィリアムはジョンやそのほかの聖徒たちの方を向いて豪語します。「襲撃を免れることはできないぞ。」⁷

さらに、ウイスキーがふんだんに群衆にふるまわれました。何人かの男たちが聖徒をののしる声が、ジョンの耳に聞こえてきます。ジョンは後ずさりし始めました。彼は身長 180 センチを超

える、がっしりとした体格でしたが、ガラティンに来たのは投票のためであって、けんかをするためではありません。⁸

突然、群衆の一人が、末日聖徒の一人に殴りかかろうとしました。別の聖徒が仲間を守ろうと飛び出しましたが、群衆にはねつけられます。3人目の聖徒が近くに積み上げてあった薪をつかみ、襲いかかる相手の頭を打つと、その男はジョンの足もとに倒れました。双方の男たちはこん棒をつかみ上げ、ナイフや鞭を取り出します。⁹

相手の人数は聖徒たちの4倍も勝っていましたが、ジョンは同胞の聖徒と指導者を守ろうと決めていました。山積みになされた柵の横木に気づいたジョンは、その太い檜の棒をつかみ、けんかの輪の中に突っ込んで行きます。「そうだ、君たちはダナイト団だ。さあ、やっつけろ!」と彼は叫びました。

ジョンは、敵を殺さないよう一振りごとに手加減しながら、聖徒たちに殴りかかる男たちをこん棒で打ちつけました。彼の友人たちもまた、棒や石を武器代わりにして反撃します。彼らは立ち向かって来る者を皆打ち倒し、戦いは2分後に終息しました。¹⁰

息を整えながら、ジョンは町の広場を見渡します。負傷した男たちが、ピクリとも動かず地面に横たわっていました。ほかの男たちは、こそこそと逃げて行きます。ウィリアム・ペニストンというと、ウイスキー樽から飛び降り、近くの丘に駆け上って逃げ去りました。

群衆の中から一人の男がジョンに近づいて来ると、今なら、聖徒たちは投票ができると言いました。「棒を置くんだ」と、男は言います。「もう必要ないだろう。」¹¹

ジョンはこん棒をきつく握りしめました。投票したかったものの、狭い家に丸腰で入って行って投票しようとするれば、罨には

まることになると分かっていたからです。そうはせずに、ジョンは背を向けて歩き出しました。

「おまえを捕まえてやる」と別の男が叫び、ジョンが打ちのめした男たちの何人かは、恐らく死に至るだろうと言いました。

「わたしは法律を守る男だ。だが暴徒に裁かれるつもりはない」と言い放つと、ジョンは馬にまたがり、町を後にします。¹²

次の日、ジョンは馬でファーウェストへ向かい、ジョセフに前日の抗争について報告しました。ガラティンで死者が出たという知らせがミズーリ北部各地で瞬く間に広まり、暴徒たちは聖徒を攻撃する準備をしていました。ジョンが報復の標的となることを恐れたジョセフは、ジョンに、家族をデイビーズ郡からすでに移したのかと尋ねました。

「いいえ」とジョンは言いました。

「それではすぐに行って、家族を避難させなさい」と、ジョセフはジョンに言います。「もう一晩でもそこにとどまってはなりません。」

「でも、臆病者にはなりたくないのです。」ジョンはそう答えます。

「行って、わたしの言うとおりにしてください」とジョセフは言いました。¹³

ジョンは直ちに自宅へと向かいました。ジョセフは間もなく、デイビーズ郡の聖徒たちを守るために武装した、志願兵たちの一団とともに出発します。アダム・オンダイ・アーマンに到着すると、ガラティンでの抗争において、双方から死者が一人も出ていないことが判明しました。安堵したジョセフと仲間たちは、ライマン・ホワイトとともにその晩を過ごしました。

翌朝、ライマンと武装した聖徒の一団は、馬で地元の治安判事、アダム・ブラックの家に行きました。アダムが、聖徒らの後を追いかけて暴徒を集めていると噂されていたからです。ライマンはアダムに、デイビーズ郡の聖徒たちを公平に扱うことを保証する声明に署名するよう求めましたが、彼は拒絶します。

その日の遅く、ジョセフと 100 人を超える聖徒たちが、アダムの木造小屋に戻って来ました。ファーウェストにおけるダナイト団の指導者である Sampson・アバードは、配下の男 3 人を引き連れて小屋にやってくると、治安判事に声明への署名を迫りました。ところがアダムはこの度も固辞し、ジョセフに会うことを強く求めました。その時点で、預言者が交渉に加わり、判事が自分で声明をまとめて署名することに同意するという、平和的な解決に至ります。¹⁴

しかし、この平和は長続きしませんでした。アダムは会談後間もなく、ジョセフとライマンが自分の小屋を武装した軍で包囲し、脅威を抱かせたという理由で、二人の逮捕を要求したのです。ジョセフは、多くの市民が聖徒に対して激しい怒りを抱いているデイビーズ郡ではなく、地元のコールドウェル郡で裁判を申請することで逮捕を免れました。¹⁵

一方、ミズーリ州北部各地の人々は、ガラティンからの報告や、定住する聖徒たちの増加について話し合うために会議を招集しました。少数の暴徒集団がデイビーズ郡の教会員の家や納屋を破壊し、近隣の末日聖徒の定住地を標的にしていたのです。¹⁶

ジョセフは緊張を鎮めるため、また自分に対する告訴に応じるために、9月初旬、デイビーズ郡に戻ります。聴聞の間、アダムはジョセフが声明への署名を強要しなかったことを認めました。にもかかわらず、判事は預言者に、2 か月以内に戻って審理を受けるよう命じました。¹⁷

聖徒たちはミズーリ州政府と同盟を結び、間もなく自警団を解散させるために州兵が招集されます。しかしデイビーズ郡内や近隣の人々は、依然として自分たちの土地から聖徒を追い出すつもりでした。

ジョセフは友人への手紙に、「聖徒を迫害する者たちがミズーリ州で眠ることはない」としたためています。¹⁸

8月の最後の日、フィービーとウィルフォード・ウッドラフは、メイン州にあるフィービーの実家からさほど遠くない白い砂浜で、馬を走らせていました。ちょうど干潮でした。大西洋から打ち寄せる波が海岸線で砕け散っています。地平線からさほど離れていない海上を何隻かの船が静かに行き交い、分厚い帆が風に膨らんで大きくうねっています。鳥の群れが頭上を旋回し、水面に舞い降りてきました。

フィービーは馬を止めて浜辺に降り立ち、砂地に散らばる貝殻を拾いました。夫のウィルフォードとともにシオンに向けて西へと旅をするとき、思い出の品として持って行きたかったのです。フィービーは生まれてこのかた、ほとんどの時期を海の近くで暮らしてきたため、貝殻は故郷の風景の一部でした。¹⁹

十二使徒の召しを受けて以来、ウィルフォードはミズーリに行くことをずっと心待ちにしていました。最近、彼はフォックス諸島を訪問し、その島の聖徒の小さな一団に、自分とフィービーとともにシオンへ行くよう呼びかけるために一時滞在していましたが、落胆して本島に戻ります。支部の会員の中にはともに行くことに同意した者もいましたが、ジャスタスとベッツィー・エイムズを含め、島で最初にバプテスマを受けたほかの者たちは、島にとどまることにしたのです。

「自分たちの決断が浅はかだったと分かるときにはもう遅いのだ」とウィルフォードは口にします。²⁰

フィービーも、とりわけ行きたいと強く願っていたわけではありません。彼女は再び両親とともに住む暮らしを大切に思っていたのです。実家は心地良く、温かく、慣れ親しんだ場所でした。メイン州にとどまっていたなら、家族や友人から遠く離れることは決してなかったでしょう。²¹かたやミズーリ州は、2,400 キロほども離れているのです。立ち去るなら、もう二度と家族には会えないかもしれません。そのような犠牲を払う準備が、自分にできているでしょうか。

フィービーはウィルフォードに、そうした気持ちを打ち明けます。家族を置いて行くことに対する彼女の不安に、ウィルフォードは同情的でしたが、故郷への愛着についてはそうではありませんでした。彼はフィービーと同様、シオンが安全と守りの場所であることを知っていたからです。

「たとえメイン州とミズーリ州にいる父母、兄弟姉妹といった多くの人々を見捨てることになろうと、また道中茹でた草しか食べる物がないとしても、わたしはシオンの地へ、すなわち神が遣わされる場所であればどこへでも行くつもりだ。」ウィルフォードはそう日記に記しています。²²

9月の間、フィービーとウィルフォードは、フォックス諸島の支部の人々が本島に来て、西への旅に出発できるようになるのを待っていました。しかし、何日か過ぎても支部の会員が姿を現さないで、ウィルフォードはもどかしくなってきました。その年も後半を迎えています。旅を遅らせれば遅らせるほど、道中、悪天候に見舞われる危険性が高まるのです。

フィービーが出発をさらに躊躇するようになったのには、別の事情がありました。娘のサラ・エマがひどい咳をするようになったのです。寒い中、そのような長旅に娘を連れ出すことが賢

明かどうか、フィービーは迷います。²³ そのようなとき、遠く離れたデイビーズ郡で、投票日に起きた乱闘について誇張した記事が地元の新報に載りました。その知らせに、皆が驚きます。

「行かない方がいいですよ」と、隣人たちはフィービーとウィルフォードに警告します。「殺されてしまいます。」²⁴

数日後、50人ほどのフォックス諸島の聖徒たちが到着し、シオンへの旅の準備が整いました。フィービーには、今が出発の時であり、ウィルフォードにはミズーリの十二使徒会に加わる必要があると分かっていました。それでも故郷や家族のことを思うと、後ろ髪を引かれる思いでした。ミズーリへの道は困難なものになるでしょうし、サラ・エマの健康状態もまだ不安定です。新たな故郷に到着しても、暴徒から安全に守られるという保証はありません。

それでもフィービーは、集合について信仰をもっていました。以前、彼女は主に従うために故郷を出ました。そして今再び、進んでそうしようとしているのです。両親に別れを告げたとき、フィービーは、旧約聖書に登場するルツのように、自分もまた信仰のために故郷と家族を捨てようとしているのを感じました。

出発するのはとてもつらいことでしたが、彼女は神に信頼を寄せ、荷馬車に乗り込んだのでした。²⁵

9月下旬、21歳のチャールズ・ヘイルズは、カナダの聖徒の一団とともに、ミズーリ州デウィットに到着しました。シオンへの集合を呼びかける声に応じた何千もの人々の一人として、その年早く、両親やきょうだいとともにトロントを発ったのです。デウィットはファーウェストの南東およそ113キロの所にある町で、幌馬車隊がコールドウェル郡に向かう前、休息を取り、物資を補給する場を提供していました。²⁶

ところがチャールズが到着したとき、町は包囲されていました。デウィットにはおよそ400人の聖徒が住んでいましたが、定住地内外の人々は、聖徒らにその地域から出て行くよう、そして10月1日までに出て行かなければ、駆逐すると圧力をかけていたのです。デウィットの聖徒たちの指導者、ジョージ・ヒンクルは出て行くことを拒絶し、聖徒たちがとどまり、その地に住む権利のために戦うことを告げました。²⁷

デウィットでの緊張を高めたのは、ダナイト団がミズーリの人々と戦う準備をしているという噂でした。多くの市民が聖徒に対して結集し始め、今やデウィットの外れに陣営を張り、いつでも町を攻撃できるように備えていました。聖徒たちはミズーリ州知事、リルバーン・ボッグズに保護を訴えます。²⁸

カナダの聖徒の大半は抗争を避けることを強く望んでおり、ファウエストに向かいますが、ジョージはチャールズに、暴徒からデウィットを守るためにとどまるよう頼みました。農夫であり、音楽家でもあるチャールズは、銃よりも、鋤すきやトロンボーンに慣れ親しんでいました。しかしジョージは、デウィットの周りに防壁を築き、戦いに備えるための男手を必要としていたのです。²⁹

10月2日、すなわち聖徒が定住地を放棄するよう求められていた期日の翌日、暴徒らは聖徒に向けて発砲し始めます。最初、聖徒たちは応酬しませんでした。ところが2日後、チャールズとおよそ20人ほどの聖徒たちが防壁に沿って位置につき、反撃したところ、一人の男を負傷させてしまいます。

暴徒たちが防壁を襲撃してくると、チャールズたちはやむなく先を争って近くの丸太小屋に逃げ込みました。³⁰ 暴徒たちがデウィットへの道を封鎖したため、聖徒たちは食糧などの物資を補給する手立てを失います。

それから2日後の10月6日の夜、ジョセフとハイラム・スミスは、ライマン・ホワイトと武装した少数の男たちとともに町へ忍び

込みました。彼らは、聖徒たちの食糧などの物資がほとんど底をついていることを知ります。包囲がすぐにも解かれなければ、暴徒が今一度襲撃する前に、聖徒たちは飢えと病で弱ってしまうでしょう。³¹

ライマンは最後までデウィットを守る覚悟ができていましたが、ジョセフは状況がどれほど絶望的か見て取ると、平和的な解決を図るべく話し合いを望みます。³²ミズーリの住民が一人でも包囲攻撃で死ぬようなことがあれば、暴徒が町にやって来て、聖徒たちを一掃することが明らかだったからです。

ジョセフは友好的なミズーリ住民の一人に、ボッグズ知事の支援を仰ぐ嘆願書を託しました。4日後、戻ってきた使者は、知事には攻撃から聖徒たちを守るつもりがないという知らせを携えていました。ボッグズは、抗争は聖徒と暴徒間の問題だと主張していました。

「決着をつけるのは彼らだ」と、ボッグズは言うのです。³³

近隣のほぼすべての郡に敵が集結する一方、聖徒たちは州兵からの確かな支援も受けられずにいるのです。ジョセフは、自分がこの包囲を終わらせなければならないことを悟ります。暴徒に屈することは残念でなりませんが、デウィットの聖徒たちは疲弊しており、人数でも圧倒的に負けていました。これ以上定住地を守ろうとするのは、致命的な誤りとなるやもしれません。不本意ながらもジョセフはデウィットを断念し、ファーウェストに撤退することを決断したのでした。

10月11日の朝、聖徒たちは運べるだけのわずかな財産を荷馬車に積み込むと、大草原を渡る旅へと出発します。³⁴チャールズは自分も同行したかったのですが、出発の準備が整っていない別のカナダ人の聖徒に、残って助けてほしいと頼まれます。チャールズは、自分も友人もすぐにほかの聖徒たちに追いつくことができるだろうと思い、同意しました。

ところが、二人でやっと町から抜け出たと思うと、馬が動けなくなつたため、友人は引き返すことになります。敵地にこれ以上とどまることは気が進まなかつたので、チャールズはたった一人で出発し、慣れない大草原に足を踏み入れました。どこを歩いているのかほとんど分からないまま、チャールズはコールドウェル郡の方角、北西に進路を取つたのでした。³⁵

10月15日、デウィットの聖徒たちがファーウェストに到着して数日後、ジョセフは町のすべての男たちを招集します。ミズーリ州北部のあちこちで横行する暴徒の攻撃から逃れ、何百人もの聖徒たちがファーウェストに撤退していました。大半の人々は今や町中に散らばり、荷馬車やテントで暮らしていました。気候が寒くなる中、ひと固まりになって寄り添う聖徒たちは、悲惨な状況に置かれていました。³⁶

ジョセフには、事態が急速に手に負えない状況になりつつあるのが見て取れました。敵があらゆる方角から集結しているという知らせが、次々に届きます。暴徒がジャクソン郡とクレイ郡で攻撃を仕掛けてきたとき、聖徒たちはおとなしく耐えようとしてしました。争いを避け、自分たちの権利を回復するために弁護士や判事を頼りました。しかし、そうした結果はどうだったでしょう。嫌がらせはもううんざりでした。もっと毅然として敵に立ち向かいたいと、ジョセフは望みます。聖徒たちにはもう選択肢がありませんでした。

「我々はもう十分に耐えてきた」と、ジョセフは周りの男たちに叫びます。「『法律！ 法律！』と叫ぶ大馬鹿者はだれだ。いつだって法律は我々に対して施行されるもので、我々に有利に働くことなど決してないではないか。」

何年もの間、土地を奪われてきた聖徒に対する犯罪は、罰せられずにきたのです。そのため、ジョセフは政治家や弁護士への信頼をほとんど失っていました。そのうえ聖徒を助けようとする知事の態度によって、その思いはますます強まる一方でした。「今後我々は、自分たちのことは自分たちの手で処し、自分たち自身で管理するのだ」と、ジョセフは言い放ちます。「わたしたちは知事に訴えましたが、何一つしてくれません。郡の民兵にも働きかけましたが、彼らも何もしてくれません。」

州政府自体も暴徒と変わらないと、ジョセフは確信します。「わたしたちはデウィットの暴徒らに降伏しました」と、ジョセフは言います。「そうして今、彼らはデイビーズでも攻撃をしようと準備しています。」ジョセフは、どのようなものであれ、これ以上聖徒から何かを奪われることを拒絶しました。³⁷

聖徒たちは自衛するか、さもなくば敵に立ち向かって死ぬかだと、預言者は断言するのです。³⁸



神と自由を

デウィットが陥落した後、町を包囲していた男たちはアダム・オンダイ・アーマンに向けて北進しました。近隣の郡では、別の暴徒らがファーウェストとショール川沿いの定住地を襲撃する準備をしており、聖徒たちをデイビーズからコールドウェル郡へ追い払い、そしてコールドウェルから地獄へ落とすと誓っていたのです。¹かつて教会を法的に支援してくれたことのある州兵の司令官、アレクサンダー・ドニファン將軍は、州兵の公認部隊であり、おもに末日聖徒から成るコールドウェル郡の民兵に、敵軍から自らの共同体を守ってもらうよう強く勧めました。

デイビーズ郡の聖徒たちが重大な危機に瀕していることを知ったジョセフとシドニーは、コールドウェル郡の民兵とそのほかの武装した男たちをアダム・オンダイ・アーマンに集結させます。馬にまたがり、ジョセフとハイラムも一団とともに北へと向かいました。²

1838年10月16日、部隊はアダム・オンダイ・アーマンの外れに野営します。降りしきる雪が辺り一面を覆い尽くしていました。下流では、アグネス・スミスが、夜になって落ち着いたところでした。アグネスはジョセフの末弟、ドン・カーロスと結婚していますが、夫は遠くへ出かけており、二人の幼い娘のほか、家にいるのは彼女だけでした。

真夜中近く、男たちの集団が家に押し入り、彼女を取り囲みました。銃口を突きつけられたアグネスは、恐怖におののきながら娘たちを抱き寄せます。暴徒は彼女たちを、雪の降り積もる外へ連れ出しました。

体を温めてくれる上着も毛布もないまま、アグネスと娘たちは、男たちが家に火をつける間、しっかりと身を寄せ合っていました。炎は瞬間に燃え広がり、夜空に黒煙をもくもくと巻き上げています。アグネスの持ち物は何もかも、たちまち炎に飲み込まれました。

逃げなければ、とアグネスは思います。最も安全な場所はアダム・オンダイ・アーマンです。ほんの5キロばかり先ですが、辺りは暗く、雪はくるぶしまで積もっており、幼い娘たちが自分の足で歩いて行くには遠すぎます。恐らく何時間もかかるでしょう。しかし、ほかに選択肢があるでしょうか。家にとどまるわけにはいきません。

アグネスは娘たちをそれぞれ両脇に抱え、重い足取りで西へと向かいました。その間、暴徒たちはさらに多くの聖徒を雪の中に追い出し、次々と家に火を放っていきました。アグネスの足は濡れ、寒さで感覚がなくなっていました。子供たちを抱きかかえているため、腕と腰が痛みます。

間もなく、氷の張った川に行き着きました。その流れは、両方向に何キロも続いています。深さはあるものの、渡れないほどではありません。この寒い気候の中、濡れることは危険を伴いま

すが、ほんの数キロ先には助けがあります。娘たちを安全な場所に連れて行きたければ、渡る以外に方法はないのです。

娘たちをさらに高く抱き上げると、アグネスは川に入り、流れの中を腰まで水に浸かりながら歩いて行きました。³

10月17日の早朝、アグネスと娘たちは、やっとの思いでアダム・オンダイ・アーマンにたどり着きます。ひどい寒さに、彼女たちの体はすっかり弱っていました。襲撃によるほかの犠牲者たちも、同じような苦しみを越えて到着しました。多くは女子供で、寝間着以外はほとんど何も着ていませんでした。彼らの話によると、暴徒たちは人々を土地から追い出し、家に火を放ち、家畜や馬や羊を散らしてしまったというのです。⁴

避難してきた人々の姿を見て、ジョセフはがく然とします。独立記念日の説教で、シドニーは、聖徒たちがこちらから攻撃を仕掛けることはないと言いました。しかし、敵を野放しにしていたら、デウィットの聖徒たちに起こったのと同じことが、アダム・オンダイ・アーマンでも起こり得るのです。

暴徒たちを弱め、早急に争いを終結させようと望んだ聖徒たちは、敵を支援し、武器を供給している近くの定住地に向かって行軍することを決定します。男たちを4つの部隊に分けると、教会指導者と民兵の指導者たちは、ガラティンとそのほか二つの定住地を奇襲するよう命じました。4番目の隊は、徒歩で周辺区域を巡察することになります。⁵

翌朝の10月18日は霧に包まれていました。馬に乗ったデビッド・パッテンは、100人の武装した男たちとともにアダム・オンダイ・アーマンを出発し、ガラティンに向かいました。⁶町に到着すると、逃げ遅れた数人を除き、町はほぼもぬけの空でした。

通りの霧が晴れると、男たちは雑貨店に押し入り、アダム・オンダイ・アーマンに避難した聖徒たちが必要としている、日用品や物資を腕いっぱい抱え込みました。数人の男たちが重い木箱や樽を店から運び出し、持って来た荷馬車に積み込みます。棚が空になると、男たちはほかの店や住居に入り、キルトや寝具、上着などの衣服を持ち出しました。

奇襲は数時間続きました。運べるだけの物すべてを持ち去ってしまうと、男たちは店やそのほかの建物に火を放ち、馬に乗って町を出て行きました。⁷

アダム・オンダイ・アーマンを見下ろす丘の頂上から、聖徒たちの目には、遠くに帯状の煙が一筋、弧を描きつつガラティンの上空に吸い込まれていくのが見えました。⁸民兵とともに定住地にやって来たトーマス・マーシュは、そのような争いの形跡を見て震え上がります。奇襲により州政府が教会に敵対するようになり、無実の人々が苦しむこととなるに違いないと思ったのです。トーマスは、ジョセフとシドニーがその熱のこもった話や説教で、暴徒による攻撃の脅威を誇張していると信じていました。打ちのめされ、避難してきた人々が定住地に流れ込んで来たときでさえ、家々への襲撃が実際にあったにしても、単発的な出来事にすぎないと思っていたのです。

トーマスがジョセフに同意することは、もはやほとんどありませんでした。その前の年、使徒たちをイギリスへの伝道に備えさせるべくカートランドに行ったとき、トーマスは自分を差し置いて伝道が始まったことを知って失望しました。主は謙遜になるように、そして預言者に背かないようにと、トーマスに勧告されました。それでも彼はイギリス伝道部の成功について疑問を抱き続

け、自分の指導力なくして成功するはずがないと思っていたのです。

後にミズーリに移住してからのこと、妻のエリザベスが、チーズ作りのために牛乳を交換するという取り決めのことで、ほかの女性と口論します。ビショップと高等評議員がその件について聞き、エリザベスに対して不利な裁定を下すと、トーマスはジョセフと大管長会上訴しましたが、彼らもまた、トーマスの妻に対して反対の裁定を下しました。⁹

この出来事に、トーマスの自尊心は傷つきます。彼は自分の憤りを隠すのに必死になります。ところが怒りは増す一方で、ほかの人も皆が怒りを抱くよう願います。ジョセフはそれまですでに二度、トーマスに教会を去るつもりかと問いたされました。するとトーマスは、「わたしが教会を離れるなら、あなたは善人たちが去って行くのを目にすることになるでしょう」と答えるのでした。¹⁰

トーマスが預言者の悪い面だけを見るようになるのに、さほど時間はかかりませんでした。ミズーリにおける危機に関してジョセフを責め、暴力行為への対応についてあら探しをしました。ほかにも同じように感じている人々がいることを、彼は知っていました。そうした一人が、同僚使徒のオーソン・ハイドです。彼の信仰はイギリスから戻った後、再び揺らくようになっていたのです。¹¹

奇襲部隊がアダム・オンダイ・アーマンに戻って間もなく、暴徒らがファーウェストに迫っているという知らせが届きます。驚いた聖徒たちの部隊は、町と家族を守るため、急いでコールドウェル郡に戻りました。¹²

トーマスも彼らとともに戻りましたが、町を守るためではありませんでした。それどころか持ち物をまとめると、夜の闇の中、ファーウェストから立ち去ったのです。トーマスは、神の罰が

ジョセフと彼に従う聖徒たちに下されようとしていると信じていました。暴徒あるいは政府がファーウェストを倒すようなことがあれば、それは神の思し召しだと彼は思ったのです。¹³

南に向かって旅をしながら、トーマスはミズーリ州から遠くへ離れたと思っていました。ところが州を出る前に、ある文書を書く必要があったのです。¹⁴

襲撃や抗争がミズーリ州北部全域で激化する中、チャールズ・ヘイルズは行方不明になってしまいます。デウィットを去ってからは、チャールズは進んでいる道がファーウェストに通じているのか分からないまま、大草原を歩き回りました。最後に家族に会ってから何週間にもなります。家族がファーウェストにたどり着いたのか、暴徒を逃れて無事であるのか、知る由もありませんでした。

自分にできる最良のことは、進み続け、あらゆる衝突を避け、だれか正しい方向を教えてくれる人を見つけることでした。

ある夕方、チャールズは畑でトウモロコシを収穫している男を見かけます。その男はたった一人で、武装はしていないようでした。もし彼が聖徒に対して冷淡な思い、あるいは敵意を抱いていたとしても、彼にできることは、最悪でも、チャールズを畑から追い出すことぐらいでした。しかし、もし彼が友好的であれば、寝る場所と、何か食べる物を提供してくれるかもしれません。

チャールズは農夫に近づくと、一晩泊めてもらえないかと尋ねました。農夫は質問には答えず、その代わりにチャールズがモルモンかと聞いてきました。

食事と暖かい寝床がかかっていることを承知のうえで、チャールズはそうだと答えました。すると農夫は、提供できるものは何もないと言い、ファーウェストはずっと先だと告げました。

「この辺りのことはまったく分からないのです」とチャールズは農夫に言いました。さらに、道に迷ってしまい、もうこれ以上歩けないと訴えました。足には水ぶくれができ、ひどく痛みます。日が暮れようとしており、これからもう一晩、大草原で冷たい夜を過ごさねばならないのです。

農夫は彼を哀れに思った様子で、チャールズに、デウィットが包囲されている間、家に男たちを何人か泊めたと言いました。その男たちは暴徒の仲間で、絶対にモルモンを泊めないと彼に誓わせたのです。

それでも、農夫はチャールズに、近くで寝床を見つげられる場所と、ファーウェストへの道を教えてくれました。ささやかなことですが、それが彼にできる精いっぱいでした。

チャールズは農夫に礼を言い、日が陰っていく中、再び歩き始めるのでした。¹⁵

10月24日の夜、ドルシラ・ヘンドリックスは、コールドウェル郡の自宅から、窓の外を恐ろし気にじっと見ていました。近くのファーウェストでは、聖徒たちが油断なく警戒しています。デイビス郡での奇襲によって、ミズーリ州兵の中の味方の多くを敵に回してしまい、その抗争全体に関し、聖徒たちが責めを受けるようになったのです。¹⁶そのとき、ドルシラの家から南へ数キロほどの地点で、一人の暴徒が野火を放ち始め、草原に黒煙が立ち込めました。¹⁷

不穏な気配を感じたドルシラと夫のジェームズは、家を捨ててファーウェストへと逃げる準備をします。これからの数週間は食糧が不足することが分かっていたので、夫妻は庭のキャベツを収穫してきざみ、塩と交互に漬け込んでキャベツの塩漬けを作りました。

二人は夜遅くまで作業をしました。10時ごろ、ドルシラとジェームズは、キャベツが塩水に漬かるように、重しとして使う石を探しに庭に出ました。ジェームズの後ろを歩くドルシラには、おぼろげな月明りの中に浮かび上がる、夫の長身の後ろ姿がはっきりと見えました。夫の背の高さに心打たれながらも、もう二度と夫の立ち姿を見られないのではないかという思いが浮かび、はっとします。

その後、仕事を終えた二人が床に就くと、隣人のチャールズ・リッチが玄関のドアをたたきました。暴徒が南の定住地を襲撃したと知らせに来たのです。聖徒の家族は家を追われ、2、3人の男性が暴行を受け、捕えられました。今や、チャールズ・リッチとデビッド・パッテンは、捕虜になった聖徒を取り戻すために救援隊を組織しようとしていたのです。

ジェームズが馬を連れに行っている間、ドルシラは起き上がり、暖炉の火を起こしました。それからジェームズのピストルをつかみ取ると、彼の上着のポケットに忍び込ませました。夫が戻ると、ドルシラはジェームズの剣を手に取り、夫の腰に注意深く巻きつけます。外套を着ながら、ジェームズは妻に別れを告げると、馬にまたがりました。ドルシラはそのとき、別にもう一丁の銃を彼に手渡します。

「背中を撃たれないようにね」とドルシラは言いました。¹⁸

チャールズ・ヘイルズは、よろめきながらファーウェストにたどり着くやいなや、救援隊に加わるよう依頼されます。疲れ果て、足も痛めていましたが、チャールズは馬と銃を借りると、そのほか40人の男たちとともに出発しました。¹⁹

一団は南に向かって馬を進めながら、辺境の定住地からも男たちを集めたので、隊は75人ほどになりました。捕虜たちは、

ファーウェストから19キロほど離れたクルックト川沿いの陣営に捕らわれています。チャールズとともに馬を進める男たちの中に、カナダでチャールズにバプテスマを施した、使徒のパーリー・プラットがいました。

その晩は暗く、厳粛な雰囲気でした。聞こえてくるのは、蹄の音と、鞆さややホルスターに入った武器のこすれあう音だけです。遠くに、草原が燃え上がる赤々とした炎が見えました。頭上では、時折、流れ星が輝いています。²⁰

夜明け前、男たちはクルックト川に到着しました。敵の陣営に近づくと、一行は馬を降りて幾つかの隊に分かれます。「主の勝利を信じよう。」皆が集まると、デビッド・パッテンがそう言いました。デビッドは隊員たちに、自分に続いて川の浅瀬を渡るよう命じます。²¹

チャールズと男たちが静かに低い丘を登り進んで行くと、川沿いに焚火が見えてきました。丘の頂上に着くと、「だれだ」という見張り兵の鋭い声が聞こえます。

「味方だ」とデビッドは言いました。

「武装しているのか」と見張り兵が尋ねます。

「そうだ。」

「では武器を置け。」

「こちらへ来て取るといい。」²²

「置くんぞだ！」

その後の混乱の中、見張り兵は聖徒らに向けて発砲し、チャールズのそばに立っていた若者が胴体を撃たれ、身をよじらせた。見張り兵は後ずさるやいなや、丘を駆け下りて行きました。²³

「自由のために戦え」とデビッドは叫びます。「みんな、突撃だ！」

チャールズと男たちは丘を駆け下りると、道に沿って隊列を組み、低木やハシバミの茂みの後ろに身を潜めました。下の方では、陣営の男たちがテントから駆け出し、川岸に沿って隠れます。救援隊が陣営に一斉射撃する準備ができる前に、敵の隊長が「さあ、やつらにお見舞いしてやれ!」と叫ぶ声が聞こえました。²⁴

敵の放った弾がチャールズの頭上すれすれを通り過ぎました。ところが、道沿いに陣取っていたジェームズ・ヘンドリックスは、首に銃弾を受け、地面に崩れ落ちます。²⁵

「撃て!」デビッド・パッテンが叫び、銃声が鳴り響く中、朝が明けていきます。

両軍の男たちが銃に弾丸を込める間、不気味な静けさが戦場を覆っていました。チャールズ・リッチが「神と自由を!」と叫ぶと、聖徒たちは、デビッド・パッテンがもう一度突撃を命じるまで、チャールズの言葉を何度も繰り返し叫びました。

ミズーリの男たちが、川向こうに撤退する前にもう一戦交えようと発砲する中、聖徒たちは丘を猛烈な勢いで駆け下りました。銃に弾を込めているとき、デビッドは道に迷った男の姿を目に捉え、後を追います。その男は素早く身を転じ、デビッドの白い上着が目に入ると、至近距離から使徒デビッドに向けて発砲しました。弾は腹部を貫通し、デビッドは倒れ込みます。²⁶

ミズーリの男たちは散って行き、小競り合いは終わりを告げます。陣営の隊員一人と聖徒の一人が、死んで野原に横たわっていました。デビッド・パッテンともう一人の聖徒は死に瀕しています。²⁷ジェームズ・ヘンドリックスにはまだ意識がいましたが、首から下の感覚がまったくありません。²⁸

チャールズ・ヘイルズと一団の男たちのほとんどは怪我を負っておらず、かすり傷程度でした。彼らは敵の陣営を搜索し、捕えられていた聖徒たちを見つけます。その後、彼らはジェーム

ズとデビッドをほかの負傷者とともに、丘の上の荷馬車まで運びました。

日の出までに、聖徒たちは馬に乗り、ファーウェストへと北に向かったのです。²⁹

戦いが終わって間もなく、クルックト川での小競り合いに関する誇大な報告が、ミズーリ州知事、リルバーン・ボッグズの執務室に届きます。中には、その戦いで、聖徒がミズーリの住民を50人虐殺したという報告や、死者が60人に上るといった報告もありました。戦いについての噂があまりにも数多く広まったため、ボッグズは実際に何が起こったのかを知る手立てがありませんでした。

開拓者による抗争があった時代は、にわかごしらえの民兵はしばしば無法者の自警団のように見えましたし、実際そのような振る舞いをしていました。あの朝、聖徒たちが攻撃したのは、彼らが想定していた暴徒ではなく、ミズーリの州兵隊だったのですが、そのために、州に対する反乱と見なされたのです。³⁰

長年インディペンデンスに住むボッグズは、聖徒をジャクソン郡から駆逐することを支持しており、聖徒の権利を守りたいとはまったく思っていませんでした。それでも、彼はそれまで今回の抗争に関して中立の立場を取っていました。双方から支援を要請されたときでさえそうでした。³¹ところが、モルモンが押し寄せて来たという知らせが広まると、ミズーリ州各地の住民たちが知事に手紙を書き、聖徒への対抗措置を取るよう求めたのです。

州知事の執務機を行き交う手紙や声明の中に、教会の使徒であるトーマス・マーシュが書いた一通の宣誓供述書がありました。そこには、ジョセフはミズーリ州を、国家を、ひいては世界を

も手中に収めようとしていると主張する文面が記されていました。

「真のモルモンはだれもが、スミスの預言は国の法律に優先すると信じているのです」と、トーマスは警告しています。³²さらにその宣誓供述書には、それが真実であることを証言するオーソン・ハイドの声明が添えられていました。³³

これらの文書はボッグズに、彼が聖徒に対して論証するのに必要とするものをすべて与えることになります。クルックト川での衝突から間もなく、ボッグズはミズーリ州兵の複数の部隊に、モルモン軍を鎮圧し、聖徒らを降伏させるよう命じました。また、ミズーリ部隊の第一師団の司令官に知事令を出しました。

1838年10月27日、知事は次のように記しています。「実に恐ろしいモルモン教徒に関する情報、すなわち公然と法律に武力で反抗し、州民に抗争を仕掛けている彼らの行為を提起する。それゆえ、可能なかぎり迅速に業務を遂行することを命じる。モルモン教徒を敵として扱い、撲滅するか、州外に追放しなければならぬ。」³⁴



天使のごとく戦い

1838年10月30日の午後、コールドウェル郡の小さな定住地ハウズミルは、清々しく爽やかでした。青空の下、子供たちはショール川の土手で遊んでいました。女たちは川で洗濯をし、食事の支度をしています。男たちは冬に向けて畑で作物を収穫し、川沿いの製粉所で働く者もいました。¹

アマダ・スミスは、娘のアルビラとオルテンシアを近くで遊ばせながら、テントの中に腰かけていました。夫のウォーレンは、3人の若き息子、ウィラード、サーディアス、アルマとともに鍛冶屋にいます。²

スミス家は、ハウズミルをただ通り過ぎるつもりでした。彼らは、その夏のはじめにカートランドを発った、貧しい聖徒たちの一団にいました。度重なる問題によりスミス家の旅路は進まず、一団に乗り遅れてしまったのです。一団のほとんどがすでにファーウェストに到着する中、アマダとウォーレンは先へ進むことに気を揉んでいました。³

テントで休んでいたアマンダは、外の素早い動きを目にし、凍りつきます。武装し、顔を黒く塗った男たちが、定住地に押し寄せていたのです。⁴

その地域に住むほかの聖徒たちと同様、アマンダは暴徒の襲撃を心配していました。ハウズミルに立ち寄る前のこと、彼女のいた小さな一団に男たちが近づいたかと思うと、荷馬車を襲撃され、武器を押収され、解放されるまで3日間にわたり監禁された経験があったからです。⁵

彼女の一団がハウズミルに到着したとき、地元の指導者はその定住地が安全であることを断言しました。定住地における聖徒たちの指導者であったデビッド・エバンズは、聖徒たちと平和に過ごすことを望んだ近隣住民と停戦の約束を交わしていたのです。それでも用心のため、エバンズは定住地の周囲に見張りを置いていました。

そして今、ハウズミルの聖徒たちに危険が差し迫っています。アマンダは幼い娘たちを素早く抱き上げると、水車池近くの森へと走りました。背後に発砲音が聞こえたかと思うと、木々の中を走り抜けるアマンダやそのほかの人々に銃弾の雨が降り注ぎます。⁶

鍛冶屋の近くで、デビッドが帽子を振って降伏を叫ぶも、暴徒はそれを無視し、逃げる聖徒たちに向かってさらに銃撃を続けます。⁷

アマンダは弾丸の飛び交う中、娘たちをしっかりと抱えて谷に走り込みました。谷底に着くと、アマンダと娘たちは池に架かっていた板を急いで渡り、反対側の丘を登り始めます。

隣を走っていたメアリー・ステッドウェルは、暴徒に両手を挙げて和平を請いました。ところが暴徒は再び発砲し、弾丸が彼女の手を吹き飛ばしました。

アマダは、メアリーを倒れた木の後ろに避難させようと叫びます。アマダと娘たちはさらに森の奥へと走り、丘の反対側の茂みの後ろに身を潜めました。

暴徒の目から逃れると、アマダは娘たちを引き寄せ、定住地に発砲音が響き渡るのを聞いていました。⁸

銃撃が始まったとき、アマダの6歳の息子アルマと兄のサーディアスは、父の後について鍛冶屋の中に入りました。そこは、聖徒たちの所有する数丁の銃を保管していた場所です。中では、10人以上の男たちが店をとりでとして、必死に攻撃者をかわそうとしていました。銃を持っていた者は、丸太の壁のすき間から暴徒に向けて発砲します。

アルマとサーディアスは、ほかの少年たちとともに、おびえながら鍛冶屋のふいごの下にもぐり込みました。外にいた暴徒は、店を囲んで聖徒たちに近づいてきます。幾人かが和平を叫びながらドアを飛び出るも、暴徒の銃撃に倒れました。⁹

銃声が次第に大きくなり、緊張が高まる中、アルマはふいごの下に隠れたままでいました。暴徒は店の周りに移動すると、壁のすき間から銃を押し込み、近距離から発砲しました。一人、また一人と、聖徒たちは胸や腕、ももを撃たれ、地に倒れていきます。¹⁰ふいごの下にいたアルマには、痛みとうめく人々の声が聞こえてきました。

暴徒は入口を破壊すると、逃げようとする人々に向けてさらに発砲します。3発の銃弾が、アルマの隣に隠れていた少年に命中し、少年の体はぐったりとなりました。男に見つかり、同じく発砲を受けたアルマは、腰に深い傷を負いました。¹¹別の男はサーディアスに気づくと、外に引きずり出します。男はこの10歳

の少年の頭に銃口を乱暴に押しつけると、引き金を引いて即死させました。¹²

一人の暴徒が、顔を背けて言います。「こんな小さな男の子たちを殺すなんて。」

「シラミの卵はやがてシラミになる。」別の男はそう答えました。¹³

知事の撲滅令を知らないまま、ファーウェストの聖徒たちは希望を抱いていました。暴徒が町を攻撃する前に、ボッグズが助けを送ってくれると思っていたのです。10月30日、250名近くの部隊が遠くから近づいてくるのを目にすると、聖徒たちは喜びに包まれました。知事がついに、自分たちを守るために州兵を送ってくれたと思ったのです。¹⁴

隊を率いていたのは、過去に聖徒たちを助けたことのあるアレクサンダー・ドニファン將軍でした。ドニファン將軍は、ファーウェストのすぐ外に位置していた聖徒たちの隊の反対側に、部隊を一行に形成し、聖徒たちは休戦の白旗を掲げました。將軍は知事からの書面による命令を待っている状態でしたが、彼とその部隊はファーウェストを守るためにやって来たものではありませんでした。彼らは聖徒たちを制圧するためにそこにいたのです。¹⁵

聖徒たちの兵はミズーリ州軍を数で上回っていましたが、コールドウェル郡の連隊を任されていた末日聖徒、ジョージ・ヒンクルは不安を感じ、自分の隊に後退するよう命じます。人々が退却する中、ジョージの命令に混乱したジョセフが隊の中に駆けつけました。

「後退するのか？」とジョセフは叫びます。「神の御名において、一体どこへ退却するっていうんだ。」ジョセフは男たちに、戻って隊を成すよう言いました。¹⁶

ミズーリ州軍からの使者が、アダム・ライトナーとその家族を町から安全に逃すようにという命令を携えて、聖徒たちに近づきます。アダムは教会員ではありませんでしたが、20歳のメアリー・ロリンズと結婚していました。数年前、インディペンデンスにおいて、暴徒から「戒めの書」の原稿を守った若い女性です。

アダムとメアリーは、アダムの姉リディアとその夫ジョン・クレミンソンとともに、ファーウェストから呼び出されたのでした。兵士たちの要求を知ると、メアリーはリディアの方を向き、行くべきだと思いかと尋ねます。

「わたしたちはあなたに従うわ」とリディアは言いました。

メアリーは、ファーウェストにいる女性と子供たちを、襲撃の前に立ち去らせてもらえるかと使者に尋ねました。

「いいえ」と使者は答えます。

「わたしの母の家族は逃がしてもらえますか」とメアリーが尋ねると、答えはこうです。

「知事の命令は、あなたがた二家族以外はだれも逃れられないということです。」¹⁷

「それなら、わたしは行きません」とメアリーは言いました。「彼らが死ぬところでわたしも死にます。わたしは正真正銘のモルモンです。それを恥とはしません。」

「夫や子供のことを考えてみたらどうですか」と使者は言います。

「望むなら、夫は子供と一緒に逃げればいいでしょう。でも、わたしは残る人々とともに苦しみを受けます」とメアリーは答えました。¹⁸

使者が去ろうとすると、走り寄ったジョセフがこう告げました。「5分で撤退するよう軍に言うんだ。さもなれば地獄を見るだろう。」¹⁹

州軍の民兵は列に戻り、間もなくミズーリの部隊は本営に後退しました。²⁰その日の遅く、1,800人以上を要する隊が、サミュエル・ルーカス将軍の命令により到着しました。5年前、ジャクソン郡から聖徒たちを追放した際の指導者です。²¹

ファーウェストで武装した聖徒たちは300人以下でしたが、彼らは家族と住居を守ると決意していました。預言者は聖徒たちの兵を町の広場に集め、戦う準備をするよう告げます。²²

「天使のごとく戦うのです」とジョセフは言いました。ミズーリ州軍が攻撃を仕掛けるなら、主は人数の少ない聖徒たち一人につき、二人の天使を送ってくださるとジョセフは信じていたのです。²³

それでも預言者は、戦闘を望んではいませんでした。その晩、聖徒たちはできるだけものを積み上げ、町の東、南そして西の境に、3キロに渡る防壁を築きます。男たちは家と荷馬車の間に柵の横木をくさびで打ち付け、女たちは襲撃を見越して物資を集めました。

見張りは夜を徹して行われました。²⁴

ハウズミルでは、アマンダ・スミスの長男、11歳のウィラード・スミスが水車池近くの大木の後ろから現れ、鍛冶屋へゆっくりと近づきました。銃撃が始まったとき、彼は父親や兄弟たちとともにとどまろうとしましたが、店まで押し進むことはできず、材木の山の後ろに避難していたのです。散った暴徒がウィラードの居所を見つけると、彼は弾丸を素早くかわしながら走り、暴徒が定住地を去るまで家から家へと移動しました。

鍛冶屋に着くと、ウィラードは戸口に崩れ落ちた父親の遺体を見つけました。また、頭部を撃たれ恐ろしく損傷した、弟サーディアスの姿を目にします。店の床には、12人以上の身体が積

み重なるように横たわっていました。ウィラードはその中を探して、弟アルマを見つけます。アルマはほこりの中、動かずぐったりと横たわっていましたが、まだ息をしていました。ズボンの撃たれた部分は血にまみれています。²⁵

ウィラードはアルマを腕に抱くと、外へ運び出しました。母が森からこちらへやって来るのが見えます。「わたしのかわいいアルマを殺したのね!」アマンダは二人を見ると叫びました。

「いいえ、母さん。死んだのは父さんとサーディアスだ」とウィラードは答えました。

彼は弟をキャンプへ運び、慎重に寝かせます。暴徒はテントを荒らし回り、ベッドを切り裂き、麦わらを散らしていきました。アマンダはアルマのためにベッドを作ろうと、できるだけ麦わらを平らにし、それを布で覆いました。それから傷を見るために、アルマのズボンを切り裂きます。²⁶

傷はひどく痛々しいものでした。股関節が完全にやられています。アマンダはどう息子を助けたらよいのか見当もつきません。

助けを求めるためにウィラードを遣わしたくとも、どこへ行かせればよいのでしょうか。薄い布製のテント越しに、負傷した人々のうめき声、また夫、父親、息子や兄弟を亡くした聖徒たちの嘆き声が聞こえてきました。アマンダの助けとなりそうな人は、すでにほかの人を世話しているか、悲嘆に暮れています。彼女は、神に頼らなければならないことを悟りました。²⁷

アルマが意識を取り戻すと、アマンダは、主は新たな腰を形成することがおできになると思うかと彼に尋ねました。アルマは、母アマンダがそう思うのなら、自分もそう思うと答えます。

アマンダは、アルマの周りにほかの3人の子供たちを集めました。「おお、天のお父様、あなたは、わたしの哀れな傷ついた

息子を御覧になっています。また、わたしに何の経験もないことを御存じです。天のお父様、何をすべきかお教えてください。」²⁸

祈り終わると、アマダは行動を指示する声を耳にします。起こした火がまだ外でくすぶっていたので、彼女は灰汁を作るために水と灰を混ぜました。その中に清潔な布を浸して、傷がきれいになるまで何度も繰り返し、そっとアルマの傷を洗います。

それからウィラードを、ニレの木の根を集めに行かせました。彼が戻ると、アマダは根をどろどろになるまで挽き、それを折りたたんで湿布にしました。彼女はアルマの傷に湿布を当てると、麻でそれを包んで、息子に言いました。

「この姿勢で動かないでいるのよ。そうすれば主が、あなたの新しい腰を作ってくださるからね。」²⁹

息子が眠り、ほかの子供たちがテントの中において安全だと分かると、アマダは外に出て泣きじゃくるのでした。³⁰

翌日の10月31日の朝、ジョージ・ヒンクルとそのほかの末日聖徒の隊の指導者は、休戦の白旗の下、ドニファン将軍と会いました。ドニファンはいまだ知事からの命令を受けていませんでしたが、聖徒の撲滅が承認されていることは承知していました。彼はいかなる和平の話し合いも、命令の内容を見るまでは待たなければならないと言いました。今や、過去に聖徒の敵であったルーカス将軍が軍を指揮していると、ドニファンはジョージに告げます。³¹

ファーウェストに戻ると、ジョージはその情報をジョセフに報告しました。このころ、ハウズミルからの使者も、虐殺の知らせを携えて到着します。17人が殺され、12人以上が負傷したのです。³²

その二つの報告を耳にし、ジョセフは深い悲しみに襲われます。ミズーリの人々との摩擦は、強奪や小競り合いの域を越え、ますます悪化していました。暴徒と軍が聖徒の防壁を破壊すれば、ファーウェストの人々はハウズミルの人々と同じ運命に苦しむことでしょう。³³

「なりふり構わず和平を請ってください」と、ジョセフはジョージに強く要請しました。預言者は、聖徒たちが虐殺されるくらいなら、自分が命を差し出すか、20年牢に入ると言いました。³⁴

その日の遅く、知事の命令が届くと、ジョージとそのほかの軍の指導者は、ファーウェスト近くの丘でルーカス將軍と会う手はずを整えました。將軍は午後に到着し、撲滅令を読み上げました。聖徒たちは衝撃を受けます。ファーウェストは3,000人近くのミズーリ州軍に囲まれ、そのほとんどがしきりに戦いを求めています。ルーカスが命じるだけで、軍は町にあふれるでしょう。

ところが將軍は、聖徒たちが指導者を引き渡し、武器を捨て、自分たちの土地を売って永久に州から去るならば、喜んで慈悲を示そうと言いました。將軍は、ジョージがこの条件の同意を取りつけるのに1時間を与えました。さもなくば、彼の軍が聖徒たちを全滅させると言うのです。³⁵

ジョージは、ジョセフがその条件を受け入れるか分からないまま、夕方ファーウェストへと戻りました。コールドウェル郡の隊長として、ジョージは敵と交渉する権限を持っていました。しかしジョセフは、州軍からのいかなる提案に同意する前にも、ジョージが大管長会に相談することを望んでいたのです。

時間が経過し、ミズーリ州軍が町を襲う態勢を整える中、ジョージはジョセフに、ルーカス將軍がジョセフとそのほかの教会指導者と、この衝突を終わらせる件について話したいと要請していることを伝えました。聖徒たちを危険な目に遭わせたくない

と思っていたジョセフは、休戦の旗の下、話し合うことに同意します。軍の一員ではありませんが、ジョセフはこの衝突を解消するために何でもしたいと望んでいました。³⁶

預言者とジョージは、シドニー・リグドン、パーリー・P・ブラット、ライマン・ホワイト、ジョージ・ロビンソンとともに、日が暮れる少し前にファーウェストを発ちます。ミズーリ州軍の野営地へ向かう途中、ルーカス将軍が幾人かの兵士と大砲を携えて彼らに会いに来るのが見えました。ジョセフは、安全にミズーリ州軍の野営地まで行けるよう、彼らが自分たちを護衛しに来てくれたのだと思いました。

将軍はジョセフたちの前に馬を止めると、兵士たちに彼らを取り囲むよう命じます。ジョージ・ヒンクルは、将軍の前に進み出て言いました。「連れて来ると約束した捕虜です。」

ルーカス将軍は剣を抜き、言いました。「諸君は捕虜だ。」ミズーリ州軍はけたたましい戦いの声を上げ、捕虜たちに迫りません。³⁷

ジョセフはがく然としました。ジョージは何をしたのだろうか。預言者の混乱は怒りへと変わり、ルーカスと話すことを要求しましたが、将軍はそれを無視して去ってしまいます。

軍は、ジョセフたちをミズーリ州軍の野営地へと連行しました。大勢の兵士たちが、恐ろしい脅し文句と侮辱を彼らに浴びせます。ジョセフと彼の仲間がその間を通ると、男たちは勝利を叫び、顔や衣服に唾を吐きかけました。

ルーカス将軍はジョセフたちを嚴重な見張りの下に置き、冷たい地面で床に就くよう指示しました。自由人としての日々は終わりを告げ、彼らは今、戦争の捕虜となったのです。³⁸



終わりはいかにして

リディア・ナイトは、ミズーリ州軍の野営地から聞こえてくる荒れ狂った叫び声や怒声を耳にして、何か良くないことが起こっているのではないかと恐れます。彼女は、預言者が和平の交渉をするためにそこへ行ったと知っていました。ところが耳に届いたのは、えさに飢えたオオカミの群れの鳴き声のようです。

不安を抱きつつ窓から外を見詰めていると、夫が家に向かって走ってくるのが見えました。「かつてないほど祈ってくれ」とニューエルが言いました。州軍が預言者を捕えたというのです。

リディアは不安になりました。前の晩、クルックト川での戦いからの隠れ場所を求めて、二人の兵士が家のドアをノックしました。ミズーリ州軍は戦いに携わった聖徒たちを懲らしめると断言していたので、その兵士たちに場を提供すれば、家族を危険な目に遭わせるかもしれません。しかし、リディアは彼らを追い払うことはせず、家にかくまいました。

こうなると、彼らの安全が気がかりです。ニューエルは夜になると、見張りのために出かけます。夫がいない間に州軍が町に入り、家に隠れている男たちを見つければ、州軍は彼らを殺すかもしれません。それに、彼女と子供たちはどうなるでしょうか。

その晩家を出るとき、ニューエルは用心するよう警告しました。「外に出てはいけないよ。不審者がうろついているから。」

ニューエルが行ってしまうと、リディアは祈り始めました。二人は神殿の奉獻後、西へ向かい、家を構え、今では二人の子供がいます。暴徒が攻撃を始めるまでは、幸せな生活を送っていました。すべてを台無しにされたくはありません。

ミズーリ州軍の叫び声が、今もなお遠くに響いています。それを聞いて身震いしましたが、祈りが心を静めてくれました。彼女は、神が天を治めておられることを知っていました。何が起ろうとも、それは変わりません。¹

翌朝の 1838 年 11 月 1 日、ニューエルは少しの間帰宅しました。ジョージ・ヒンクルが、町の広場に聖徒たちの兵を集めるよう指示します。ミズーリ州軍は野営地の外に隊を組み、ファーウェストに進軍できるよう配置に就いていました。

「終わりは来るのかしら」とリディアは尋ねました。「心配と恐怖で心が張り裂けそうだけど、御霊はすべてうまく行くとささやいているよ。」

「神がそうされているんだ。」ニューエルは銃を持ち、言いました。「さよなら、神の守りがあるように。」²

聖徒たちの連隊が広場に集まる間、ルーカス將軍はファーウェスト南東の大草原に隊を進行させ、聖徒たちのいかなる抵抗をも制圧する準備を整えるよう指示しました。午前 10 時、

ジョージは広場から隊を率い、ミズーリ州軍の近くに配置させます。それからルーカス将軍に歩み寄ると、剣と銃をベルトから外し、将軍に渡しました。³

ミズーリ州兵は机を持って来ると、それを自分たちの隊の前に置きました。ジョージは自分の隊へ戻ると、一人ずつ机のところに行き、武器をミズーリ州軍の二人の民兵に渡すよう聖徒たちに指示します。⁴

大きく数を上回る敵に囲まれたニューエルと聖徒たちは、応じるよりほかありませんでした。ニューエルは銃を渡す番になると、大股で机のところに行き、ルーカス将軍をにらみつけて言いました。「将軍、銃はわたし個人の財産です。それを取り上げる権利はだれにもありません。」

将軍はこう言い放ちます。「武器を置くだ。さもなければ撃つ。」

ニューエルは憤慨して銃を手放し、列に戻りました。⁵

すべての聖徒が武装を解くと、町には防御手段がなくなりました。ルーカス将軍は聖徒たちの兵をファーウェストに連行し、町の広場に捕虜としてとどめます。

それから、自分の隊に町を占拠するよう命じました。⁶

ミズーリ州軍はすぐさま家屋やテントに押し入ると、棚や樽を引っかけ回し、武器や貴重品を探して歩きました。寝具、衣服、食糧、金銭を奪い去り、家屋の丸太、柵、納屋を燃やし、牛、羊、豚を撃って、道に放置していきます。⁷

ナイト家では、3人の州兵がドアに近づいてくるのをリディアが待ち構えていました。「家に男はいるか」と一人が尋ねます。

「夫はあなたがたの監視下にいます」とリディアは答え、家に入らせないようにしました。中に入れれば、かくまっている男たちが見つかってしまいます。

「家に武器はあるか。」

「夫が銃を持って行きました」とリディアは言います。後ろでは、子供たちが見知らぬ男を見て怖がり、泣き始めました。リディアは勇気を振り絞って男の方に向き直ると、「もう行ってちょうだい!」と叫びました。「小さな子供たちがどんなに怖がっているか分かるでしょう。」

「家には男も武器もないんだな」と男は言いました。

「夫は広場で捕虜になっていて、銃は彼が持って行ったと言ったでしょう」とリディアは答えました。

男は不満をもらしながら、ほかの男たちと怒って出て行きました。

リディアは家の中へ戻りました。まだ身が震えていましたが、州兵たちは去り、家の中にいた者たちは皆無事だったのです。⁸

町の広場では、厳重に見張られる聖徒たちの連隊と一緒にいたヒーバー・キンボールが、聞き覚えのある声で名前を呼ばれるのを耳にしました。見上げると、以前使徒であったウィリアム・マクレランが彼の方にやって来ます。ウィリアムは、派手な赤い継ぎ当てをした帽子やシャツで着飾っていました。⁹

「ヒーバー兄弟、今や落ちぶれた預言者、ジョセフ・スミスをどう思うかね」とウィリアムは尋ねます。彼は兵士の一団とともにいました。彼らは、家から家へと欲しいままに略奪して町を回っていたのです。

「自分を見てごらんよ」とウィリアムは続けます。「かわいそうに、おまえの家族は服をはぎ取られ、略奪されてる。おまえの兄弟たちも同じだ。ジョセフと一緒にいて満足か？」¹⁰

ヒーバーは、聖徒たちにとって状況が絶望的であることを否定できませんでした。ジョセフは捕えられ、聖徒たちは武器を持たないまま攻撃されています。

それでもヒーバーは、ウィリアム、トーマス・マーシュ、オーソン・ハイドがしたように、ジョセフと聖徒たちを見捨てることなど自分にはできないと分かっていました。ヒーバーは、ともに直面してきたすべての試練にあってジョセフに忠実であり、自分の所有するすべてを失っても、忠実であり続けようと決心していたのです。¹¹

「君はどうなんだ？」と、今度はヒーバーがウィリアムに尋ねました。「君は何をしているんだい？」回復されたイエス・キリストの福音に対するヒーバーの証と、聖徒たちを見捨てることへの拒否は、ウィリアムからの質問に答えるのに十分でした。

「わたしは以前の100倍、ジョセフと一緒にいて満足だよ」とヒーバーは続けました。「モルモニズムは真実であり、ジョセフはまことの生ける神の預言者だ。」¹²

州軍が町を略奪して回る間、ルーカス将軍は自分の隊が聖徒たちを脅かし、所有物を盗むのを止めようとしませんでした。定住地のあちらこちらで、ミズーリ州兵は聖徒たちを家から追い出し、道へ逃れた聖徒たちをののしりました。抵抗する者には鞭を打ち、殴りかかります。¹³家に隠れていた女性に暴行し、襲いかかった兵士もいました。¹⁴ルーカス将軍は、聖徒たちが謀反の罪を犯したとし、その行為の代償を払わせ、自らの軍の力を知らしめたいと思っていました。¹⁵

ルーカスの将校たちは、一日中教会指導者を集めました。ジョージ・ヒンクルの助力により、州軍はメアリーとハイラム・スミスの家へ押し入ります。ハイラムは病気でしたが、州軍は銃剣の先で彼を外へ追い出し、ジョセフやほかの捕虜たちのもとへ連れて行きました。¹⁶

その日の夕方、ルーカス将軍は捕虜を軍事裁判にかける準備をするに当たり、モーゼス・ウィルソンという民兵将校を遣わし、ライマン・ホワイトを連れ出し、裁判でジョセフに対する不利な証言をするよう説得を試みました。

「我々は君を傷つけたり、殺したりしたくはない。ジョセフを糾弾する証言をすれば、君の命を助け、望む役職をやろう。」モーゼスはライマンに持ちかけます。

「ジョセフ・スミスは人の敵ではありません。彼の忠告を聞いていなければ、とっくにあなたを打ちのめしているでしょう」とライマンは強い調子で答えました。

「変わったやつだ。今晚、軍法会議がある。出席するかね?」とモーゼスが言いました。

「強制されない限り、行きません。」¹⁷

モーゼスはライマンをほかの捕虜たちのもとへ戻し、ルーカス将軍は会議を開きました。ジョージ・ヒンクルを含め、数人の州軍将校が参加しました。その場においてたった一人の法律家であったドニファン将軍は、ジョセフのような一般市民を審理する権力は州軍にないとして、裁判に反対の声を上げます。

ルーカス将軍はそれを無視して裁判を開始し、捕虜がだれ一人として出席しないまま、審理を足早に進めました。ジョージはルーカスに、捕虜たちに対する慈悲を示してほしいと思いましたが、将軍は反逆罪での銃殺を言い渡します。将校の過半数がその裁定を支持しました。¹⁸

裁判の後、モーゼスはライマンに結果を伝えます。「君の運命は決まった。」

ライマンは軽蔑のまなざしで言いました。「銃殺してその結果を受けるがいい。」¹⁹

その日の夜遅く、ルーカス将軍はドニファン将軍に、翌日の朝9時、ジョセフとそのほかの捕虜たちを町の広場に連行し、聖徒たちの前で銃殺するように命じました。ドニファンは激怒します。²⁰

ドニファンは、「命令に従えば、名誉も不名誉もなく、わたしは地獄へ行くでしょう」と捕虜たちだけに話しました。彼は、自分の隊を日の出前に撤退させるつもりであることを告げます。²¹

そうしてルーカス将軍に、「これは冷酷な殺人です。あなたの命令には従いません」と伝言を送りました。「もしあなたが彼らを処刑するなら、わたしはこの世の法廷の場であなたの責任を追及します。必ずそうします。」²²

約束どおり、ドニファン将軍の隊は翌朝引き揚げました。ルーカス将軍はジョセフとほかの捕虜たちを処刑せずに、彼らをジャクソン郡の本部に連れて行くよう命じます。²³

ジョセフは武装兵に囲まれながら、身の回りの物を家に取りに行くため、荒らされたファーウェストの通りを連れられて行きました。ジョセフが帰宅すると、エマと子供たちは涙を流し、ジョセフがまだ生きていたことを知って安堵します。ジョセフは家族だけにしてほしいと衛兵に頼みましたが、聞き入れられませんでした。

エマと子供たちは別れがたく、ジョセフにすがりつくも、衛兵が剣を抜き、彼らを引き離しました。5歳のジョセフが父親に

しっかりと抱きついて泣きじゃくります。「なぜ一緒にいられないの？」²⁴

すると、衛兵の一人が幼いジョセフを剣でつきました。「離れる小僧、突き刺すぞ！」²⁵

外へ出ると、州軍は聖徒たちの集まる中、捕虜たちを連行し、幌馬車の中に入るよう命じます。それから州軍は、聖徒たちと指導者たちとの間に武装兵の壁を作り、幌馬車を包囲しました。²⁶

荷馬車が遠ざかるのを待っていたジョセフは、人々のざわめきの向こうから慣れ親しんだ声を耳にします。「わたしは預言者の母親です。わたしを助けてくださる親切な方はいませんか！」ルーシー・スミスがそう叫んでいたのです。

荷馬車の厚い幌ほろで、捕虜たちが外を見ることはできませんでしたが、ハイラムは荷馬車の前で幌の下に手を押し出し、母親の手を取りました。衛兵がすぐさま、「撃つぞ」と脅し、ルーシーに下がるよう命じます。ハイラムは母親の手が離れたのを感じ、荷馬車が今にも動き出してしまうと思いました。

そのとき、荷馬車の後ろにいたジョセフは、幌の反対側で響く声を耳にしました。「スミスさん、あなたのお母さんと妹さんはここです。」

ジョセフは幌の下の方に手を押しつけ、母親の手を取りました。「ジョセフ、あなたの声を聞かないまま立ち去るなんて耐えられません」とルーシーが語りかけます。

「神の祝福がありますように、母さん。」ジョセフがそう言うと、馬車ががたんと揺れて動き出しました。²⁷

幾日かが過ぎたある晩、捕虜たちはミズーリ州リッチモンドの丸太小屋の床に横たわっていました。ルーカス将軍は捕虜たちを

ジャクソン郡に連行した後、裁判に向けてリッチモンドへ送る前に、彼らを動物のように見せ物にしたのです。

それぞれが足首にかせをつけられ、重たい鎖でほかの捕虜とつながれたまま眠ることを余儀なくされていました。床は堅く、冷たく、暖をとる火はありません。²⁸

目覚めたまま横たわっていたパーリー・プラットは、看守たちが聖徒への強姦や殺害についてひどい言葉で語り合うのを耳にし、気が滅入っていました。立ち上がって、話をやめるように男たちを叱責したいと思いましたが、黙っていました。

突然、隣で鎖が鳴るのを聞いたかと思うと、ジョセフが立ち上がり、雷のような声でこう言い放ちました。「黙れ。地獄の鬼どもめ。イエス・キリストの御名によっておまえたちを叱責し、口をつぐむように命じる。もう一刻たりともそのような言葉を聞いてはられない。」

驚いた看守たちは武器を握りしめて見上げました。ジョセフは威厳を放ち、彼らをにらみつけて命じます。「そのような話をやめよ。さもなければおまえたちかわたしのどちらかが、今すぐ死ぬことになる。」

辺りは静まり返り、看守たちは銃口を下げました。部屋の隅にうづくまる者もいれば、恐れてジョセフの足もとにひれ伏す者もいました。預言者は静かに、威厳をもって見下ろしながら、動かずに立っていました。彼らは許しを請い、次の看守の交代まで口を閉ざしていたのでした。²⁹

1838年11月12日、ジョセフと60人以上の聖徒たちは、反逆、殺人、放火、強盗、住居侵入、窃盗の罪を審理するための十分な証拠があるかを裁定するため、リッチモンド裁判所に連行されま

した。オースティン・キング判事は、捕虜たちを裁判にかけるべきか判断しようとしていました。³⁰

審理は2週間以上続きました。ジョセフを不利にした重要な証人は、ダナイト団の指導者であった Sampson・アバードです。³¹ファーウェストでの包囲の間、Sampsonはミズーリから逃れようとしたが、州軍が彼を捕え、捕虜たちに不利な証言をしなければ彼を起訴すると脅したのです。³²

Sampsonは自らの身を守ろうと、自分がダナイト団として行ったすべてのことは、ジョセフの指示の下で遂行されたと主張しました。彼は、ミズーリ州政府と国家に対抗して権利のために戦うのは、末日聖徒に対する神の御心であるとジョセフが信じていることを証言しました。

Sampsonは、教会は旧約聖書でダニエルが述べているようなものであり、地上を満たし、地上の王国を滅ぼすことをジョセフが信じているとも言いました。³³

驚いたキング判事は、ダニエルの預言について質問し、ジョセフはそれを信じていると証言しました。

「書きとめておきなさい」と判事は書記官に言います。「反逆の重要な証拠です。」

ジョセフの弁護人は異議を唱えて言いました。「判事、聖書が反逆の罪にあるとすることになります。」³⁴

起訴側は、以前に教会指導者であった者も含めて40人以上を呼び立て、捕虜たちにとって不利な証言をさせました。訴えられるのを恐れたジョン・コリル、ウィリアム・フェルプス、ジョン・ホイットマーたちは、ミズーリ州と取引を行い、自分たちの自由と引き換えにジョセフを糾弾する証言をすることを承諾したのでした。彼らは宣誓をして、この衝突の間に目にした暴力について説明し、それらすべての責任をジョセフに負わせます。

一方、聖徒たちの弁護は数人の証人によるもので、だれも判事の見解を揺るがすことはできませんでした。ジョセフに代わって証言できたであろうそのほかの証人は、皆嫌がらせを受けたり、裁判所から追い払われたりしていたのです。³⁵

審理が終わるまでに、パーリー・プラットを含む5人の聖徒が、クルックト川の戦いに関連する殺人罪の裁判に向けてリッチモンドで投獄されました。

残るジョセフとハイラム・スミス、シドニー・リグドン、ライマン・ホワイト、カレブ・ボールドウィン、アレクサンダー・マクレーは、反逆罪の裁判を待つため、リバティーという町の監獄に移送されました。有罪になれば、処刑されるかもしれません。³⁶

一人の鍛冶屋がかせで6人を拘束し、大きな荷馬車に連れて行きました。捕虜たちはそれに乗り込み、でこぼこした木の上に座りました。頭がやっと、荷台の高い囲いから出るような状態です。

道のりは一日がかりでした。リバティーに到着すると、荷馬車は町を中心を抜けて裁判所を通り過ぎ、北にある小さな石牢いしろうへと進みます。12月の寒い日、ジョセフたちを待っていたかのように、牢の扉が開いていました。

捕虜たちは一人ずつ、荷馬車を降りて監獄の入口へと歩を進めました。好奇心に満ちた人々の群れが、捕虜たちを一目見ようと周囲に押し寄せます。³⁷

ジョセフは最後に荷馬車から出ました。扉にたどり着くと、彼は群衆に向かって帽子を取り、丁寧に会釈しました。そうして向き直ると、暗い獄へと下りて行ったのでした。³⁸



地獄，われに迫るとも

1838年11月半ば，ファーウェストの聖徒たちは飢えと寒さに苦しんでいました。ミズーリ州軍が家を破壊し，町の食糧のほとんどを食べ尽くしてしまったためです。畑に残された作物は凍っていました。¹

ルーカス将軍に代わってファーウェストのミズーリ州軍を指揮したジョン・クラーク将軍は，前任者と同様，聖徒たちに対して同情することはありませんでした。²彼は聖徒たちを侵略者，法に従わない者として非難しました。「あなたがたは反抗的であり，法を犯したのだから，これらの苦難は自ら招いたものだ」と彼は聖徒たちに言い放ちます。

冬が迫っていたため，クラーク将軍は聖徒たちが春までファーウェストにとどまることに同意しましたが，それ以降はすぐさま立ち去るよう勧告しました。「人々のねたみや，今あなたがたに降りかかっている同様の災難を被ることのないように，決し

てビショップや会長たちと再び集まらないことだ」と彼は警告します。³

ハウズミルの状況はさらに深刻なものでした。虐殺の翌日、暴徒は聖徒たちに州外へ退去するように命じ、さもなくば殺すと告げました。アマダ・スミスとそのほか生き残った者たちは、去りたくとも、暴徒たちに馬、衣服、食糧など、長旅に必要な物を略奪されていました。アマダの息子アルマのように、多くの負傷者は遠くへ移動できるような状態ではなかったのです。⁴

定住地の女性たちは祈りの会を開き、負傷者を癒してくださいるよう主に願いました。暴徒たちがこの会について耳にすると、彼らは女性たちが会を続けるなら、定住地を全壊させると脅します。その後、女性たちは秘密裏に祈り、出発の準備をする間、極力注意を集めないようにしました。

しばらくして、アマダは家族をテントから小屋へ移動させました。⁵殺された夫と息子のために悲嘆に暮れながらも、彼女は幼い4人の子供を自分一人で世話しなければなりませんでした。息子が回復する間、ハウズミルに長居することは気がかりでしたが、出発できたとしても、自分と子供たちはどこへ向かえばよいのでしょうか。

ミズーリ州北部にいた聖徒たち皆がそう思っていました。春までにミズーリを去らなければ、知事が発した撲滅令を州軍が実行に移すのではないかと恐れが募ります。しかし、導いてくれる指導者もおらず、どのようにしてミズーリを発って旅をすればよいのか、その後どこに集まればよいのか、見当もつきません。⁶

聖徒たちがファーウェストを離れる準備をする中、フィービー・ウッドラフはオハイオ州西部の道沿いの宿屋で、ひどい頭痛と熱のために寝込んでいました。彼女とウィルフォードは2か月の

間、西へと旅をしていました。フォックス諸島の聖徒たちとともにシオンにたどり着こうと、雪や雨の中を重い足取りで進んでいたのです。娘のサラ・エマを含め、多くの子供たちを病気が襲いました。⁷その冬シオンに着くことはできないとして、一団からはすでに二家族が離れていました。⁸

宿屋に立ち寄る前、フィービーは荷馬車が悪路にさしかかる度に苦しんでいました。⁹ある日、ついに彼女が呼吸困難となったため、ウィルフォードは一団の歩みを止め、フィービーが回復できるようにしたのです。

フィービーはまさに瀕死の状態でした。ウィルフォードは彼女を祝福し、苦しみが和らぐようあらゆる手を尽くしましたが、熱は上がる一方です。ついに彼女はウィルフォードをそばに呼び、イエス・キリストの福音について証し、試練のさなかにあって信仰を保つよう彼に強く勧めました。次の日、フィービーの息は完全に止まり、彼女は霊が自分から離れるのを感じました。¹⁰

フィービーは、ウィルフォードが息絶えた自分の身体を見下ろしているのを目にします。すると二人の天使が部屋に入って来て、そのうちの一人が、彼女には選択肢があると告げました。天使たちとともに霊界に行き休むか、この世に戻り、待ち受ける試練を耐え忍ぶかという選択です。

とどまれば、その道のりは困難であろうことをフィービーは承知していました。彼女は、苦勞の絶えない、不確かな未来に進む人生に戻ることを望んだでしょうか。ウィルフォードとサラ・エマの顔を見ると、答えはすぐに分かりました。

「ええ、わたしは戻ります。」

フィービーがそう決断すると、ウィルフォードは信仰を取り戻しました。彼は聖別された油を彼女に注ぎ、頭に手を置いて、死の力を叱責しました。祝福を終えると、フィービーは息を吹き返します。目を開けると、彼女は二人の天使が部屋を去るのを目にしたのです。¹¹

ミズーリでは、リバティーの監獄にいたジョセフ、ハイラム、そのほかの捕虜たちが、暖を取ろうと身を寄せ合っていました。狭く、じめじめとした地下牢は、地面より低く、厚さ1.2メートルの石と材木の壁で囲われていました。天井近くに二つの小さな窓があり、そこから多少の光が入りましたが、地下牢の悪臭を取り除くには用を成しませんでした。石の床には、捕虜のベッドとして汚れたわらが積まれています。あまりの飢えに、配給されるひどい食物を口にすると、そのせいで嘔吐を催すこともありました。¹²

エマは12月上旬にジョセフを訪れ、ファーウェストの聖徒たちについて知らせました。¹³ジョセフは彼らの苦しみを耳にし、自分を裏切った者たちに対する憤りを増します。彼は聖徒たちへの手紙を口述して書き取らせ、この男たちの背信を非難し、耐え忍ぶよう聖徒たちを励ましました。

「シオンは死んでいるようではあるが、必ず生きる」とジョセフは宣言します。「平和の神はあなたがたとともにあり、魂の敵から逃れる道を備えてくださる。」¹⁴

1839年2月、ハイラムの妻メアリーと妹のマーシーは、生まれたばかりの息子ジョセフ・F・スミスとともに捕虜たちを訪ねました。メアリーは、11月に出産する以前からハイラムに会っていませんでした。出産と厳しい寒さのために、リバティーまで旅をする体力がなかったのです。ハイラムはメアリーに会いに来てくれるよう頼みましたが、彼女は再び夫に会う機会があるかどうか分かりませんでした。¹⁵

監獄に入ると、看守が跳ね上げ戸を開け、二人は捕虜たちとその晩を過ごすため、地下牢に下りて行きました。看守は扉を閉め、厳重な鍵をかけます。¹⁶

その夜は、だれも眠れませんでした。狭苦しい場所でやせ衰え、不潔な様子でいるジョセフ、ハイラム、そのほかの捕虜た

ちを目にし、二人は衝撃を受けます。¹⁷ハイラムは腕に赤ん坊の息子を抱くと、メアリーと静かに言葉を交わしました。彼とほかの捕虜たちは心配を抱えていました。ジョセフとハイラムが脱獄を計画しているに違いないと、看守と衛兵がいつも警戒していたのです。

翌朝、メアリーとマーシーは捕虜たちに別れを告げ、地下牢から出て行きました。衛兵が二人を外へ案内すると、跳ね上げ戸がバタンと閉められ、ちようつがい蝶番が甲高い音を立てました。¹⁸

その冬ファーウェストで、ブリガム・ヤングとヒーバー・キンボールはジョセフから手紙を受け取ります。「教会の運営の責任はあなたがた、すなわち十二使徒にある」と述べられていました。ジョセフは二人に、トーマス・マーシュの代わりに定員会の会長として、年長の使徒を指名するよう指示しました。¹⁹最も年上であったデビッド・パッテンは、クルックト川で撃たれて亡くなっていました。そのため37歳のブリガムが、ミズーリ州から聖徒たちを導くこととなります。

ブリガムはすでに、教会の秩序を保ち、ジョセフの不在中における決定を行うために、ミズーリ高等評議会の助けを求めていました。²⁰しかし、さらに成すべきことがありました。

クラーク將軍は聖徒たちがミズーリを去るのに春まで猶予をくれましたが、武装した暴徒たちは町中におり、2月末までとどまる者はだれでも殺すと断言していたのです。多くの聖徒たちは恐れを抱き、貧しい人々を残したまま、逃げる手段のある者はできるだけ早く立ち退きました。²¹

1月29日、ブリガムはファーウェストの聖徒たちに、互いに助け合って州から避難するという約束を交わすように強く勧めました。「わたしたちは、撲滅令から安全に逃れられるまで、貧しい人々を見捨てることは決してしません。」

すべての聖徒たちが取り残されないようにするため、ブリガムとそのほかの指導者たちは、避難を導く目的で、ファーウェストにおいて7人から成る委員会を設立します。²²委員会は貧しい人々のために寄付と物資を集め、聖徒たちの必要を慎重に調査しました。大部分が整備された道をたどり、聖徒たちに敵意を抱く地域を避けられるように、何人かの男性が州を横切る道を偵察します。選ばれた道筋はすべて、260キロ離れた、州の東の境界線であるミシシッピ川に合流していました。

計画されたミズーリ州からの脱出は、速やかに始まりません。²³

2月上旬、エマは4人の子供たちとともにファーウェストを出発しました。8歳のジュリア、6歳のジョセフ三世、2歳のフレデリック、7か月のアレクサンダーです。²⁴エマとジョセフが所有していたものはほとんどすべて、盗まれたか、ファーウェストに残して行きました。そのためエマは、荷車と馬を提供してくれた友人とともに旅をしました。エマは、ジョセフが所有する大切な原稿も携えて行きました。²⁵

一家は、ミズーリの凍った大地を1週間以上旅します。その道すがら、馬が一頭死にました。ミシシッピ川に着くと、広い川には冬の厳しい寒さのために氷が張っていました。運航できる船はありませんでしたが、氷は一団が歩いて渡れるほどの厚さです。

エマは、フレデリックとアレクサンダーを腕に抱き、氷の上に踏み出します。幼いジョセフがエマのスカートの端をつかみ、ジュリアはその反対側にしっかりとしがみついていた。遠くの川岸に足が上がるまで、3人は慎重に、滑りやすい道を横切って歩きました。²⁶

無事にミズーリ州の外へ逃れたエマは、イリノイ州クインシー近くの町の人々が、思いのほか親切なことに気がつきました。彼らは凍った川を横切る聖徒たちを助け、食料や衣服を寄付し、さらに助けが必要な人には住まいや仕事を提供してくれたのです。²⁷

エマはクインシーに到着後間もなく、夫に手紙を書き送っています。「わたしはまだ生きており、それが思いやりある神の御心ならば、あなたのためにも、さらなる苦しみを喜んで受けましょう。」フレデリックが病気にかかっていたが、それ以外の子供たちは元気に過ごしていました。

「幼い子供たちのほか、家とわたしたちが所有していたほとんどのものを後に残して、あのわびしい牢獄に閉じ込められたあなたを残して、ミズーリ州を出る旅路に着きました。その時わたしが抱いていた心の思いと感情を知る者は、神のほかにはありません。」

それでもエマは神の正義を信じ、より良い日々がやって来ると希望を持っていました。「神がわたしたちの苦しみを記録なさらず、罪ある彼らにその不法行為の報復をしてくださらないのなら、残念ながらわたしが間違っていたのでしょうか。」²⁸

聖徒たちがミズーリ州から避難する中、アルマの怪我のために、スミス一家はいまだハウズミルを離れることができませんでした。アマンダは、主が息子の腰を治してくださると信頼しながら世話を続けていました。

ある日、「母さんは、主が腰を治してくださると思うの?」とアルマが尋ねました。

「そうよ。主はわたしに、示現ですべてを示してくださったの」とアマンダは答えます。²⁹

やがて、定住地近くにいた暴徒たちはさらに敵意を強め、聖徒たちが立ち退く最終期日を決めました。その日が来ても、アルマの腰はまだ癒えておらず、アマンダは立ち去ることを渋ります。恐れを抱きながらも、声に出して祈りたいと思った彼女は、トウモロコシの莖の束に隠れ、主に強さと助けを願い求めました。祈り終わると、慣れ親しんだ賛美歌のフレーズを繰り返す声が聞こえました。

主、われに頼るものの霊
敵の手には渡し得ず
地獄、彼に迫るとも
われその霊を見捨てはせず
必ずわれは見捨てず³⁰

その歌詞はアマンダを強め、何者をも自分を傷つけることはできないと感じるほどでした。³¹間もなくして、川から水を運んでいると、家の中で子供たちが叫んでいるのが聞こえました。恐怖を感じてドアに駆け込むと、なんとアルマが部屋中を走り回っています。

「母さん、ほく、治ったよ!」と彼は叫びました。柔らかい軟骨が腰に形成され、歩けるようになったのでした。

アルマが歩けるようになると、アマンダは荷造りをし、馬を盗んだミズーリ住民の家へ行き、それを返してくれるように言います。彼はえさ代として5ドル払えば、返してもいいと言いました。

アマンダはそれを無視して庭へ行き、馬を取り返すと、子供たちとともにイリノイ州へと出発したのでした。³²

日に日に多くの聖徒たちがファーウェストを去る中、ドルシラ・ヘンドリックスは、自分と家族が取り残されるのではないかと心

配していました。ハウズミルで4発の銃弾を受けた末日聖徒のアイザック・リーニーは、見捨てられはしないと彼女に断言します。それでもドルシラは、夫がどのように旅路につけるか分かりませんでした。

クルクト川で首を負傷したジェームズは、いまだにまひを抱える状態でした。戦いが終わった後、ドルシラは負傷して近所の人に置かれた男性たちの中に、横たわる夫を見つけたのです。悲しみに圧倒されながらも、彼女は冷静さを保ってジェームズを連れ帰り、彼の手足の感覚を回復しようと幾つかの治療を試みました。しかし、どれも助けにはなりませんでした。

ファーウェストでの降伏から数週間後、彼女は東へと移動する費用を捻出するため、土地を売って働きます。幾らかの物資と小さな荷車を購入できましたが、それを引く家畜を手に入れることはできませんでした。

荷車を引く方法がないままではミズーリ州で立ち往生することになると、ドルシラは分かっていました。ジェームズは神権の祝福を受け、肩や足を幾らか動かせるようになっていましたが、長い距離を歩けるほどではありません。夫を無事に州外へ連れ出すには、助けが必要でした。

退去の期日が近づくと、ドルシラはますます不安を募らせません。夫を殺しに行くかと警告する、暴徒からの脅迫が始まりました。

ある晩、ドルシラがジェームズの傍らで赤ん坊の世話をしていると、外で犬の吠える声が聞こえました。「母さん!」と長男のウィリアムが叫びます。「暴徒が来る!」その直後、ドアをたたく音が響きました。

ドルシラがそこにいるのはだれかと尋ねると、ドアを開けなければ押し入ると脅す声が外から聞こえました。ドルシラは子

供の一人にドアを開けるように言い、部屋は瞬く間に、武装した男たちでいっぱいになりました。皆、偽ひげで顔を隠しています。

「立て」と彼らはドルシラに命令しました。

男たちがジェームズを殺すのではないかと恐れたドルシラは、夫のそばを動きません。一人の男が近くのテーブルにあったろうそくをつかむと、家の中を捜索始めました。彼は、この地域のダナイト団を捜していると言います。

暴徒はベッドの下や家の裏をくまなく見て回りました。それからジェームズにかぶせてあった覆いを取ると、彼を問いただそうとしましたが、ジェームズに力はなく、十分話すことさえできません。薄明かりの中、白く、弱々しいジェームズの顔が映し出されます。

暴徒が水を欲しがると、ドルシラは場所を教えました。飲み終えると、男たちは拳銃に弾を込めます。「これでいい」と一人が言いました。

ドルシラは、男たちが銃の引き金に指をかけるのを目にします。彼らが立ち上がると、ドルシラは身構えました。ところが、男たちは部屋の中に少しの間とどまった後、外に出て去って行きました。

しばらくすると、ジェームズを気の毒に思った医者が、治癒の助けとなる方法をドルシラに教えます。ジェームズはゆっくりと力を取り戻し、また友人のアイザックが、彼らのために一対の牛を見つけてくれました。

こうして、ミズーリを永久に去るのに必要なものが揃ったのです。³³

フォックス諸島支部の仲間とともにイリノイ州に着くと、ウィルフォードとフィービー・ウッドラフは、聖徒たちがミズーリ州から

排除されたことを知ります。3月半ば、さらに多くの教会員がクインシーに定住する中、ウッドラフ家は聖徒たちと合流し、教会指導者に会うため、そのにぎやかな川沿いの町に向けて発ちました。³⁴

解放されるまで、ミズーリの監獄で数週間苦しんだエドワード・パートリッジは、体調が思わしくないままクインシーの教会を導く助けをしていました。一方、ヒーバーとそのほかの前任指導者たちは、いまだミズーリからの避難を指揮していました。³⁵

ウィルフォードとフィービーは、エマと子供たちが、地元判事であるジョン・クリーブランドとサラの家に住んでいるのを見つけます。彼らは、クインシー内外で暮らす預言者の両親ときょうだい、またブリガムとメアリー・アン・ヤング、ジョンとレオノーラ・テラーにも会いました。³⁶

翌日、50の貧しい家族がミズーリを発てるよう、ファーウェストの避難委員会が資金と家畜を必要としている状況についてブリガムが発表します。クインシーの聖徒たちも同じく貧しい身でしたが、さらに苦しむ人々に慈愛の手を差し伸べるよう求められました。それにこたえた聖徒たちは、50ドルと複数の家畜を寄付します。³⁷

翌日、ウィルフォードはミシシッピ川の岸へ行き、新たに到着した教会員の野営地を訪れました。その日は寒く雨の降る日で、逃れてきた人々は疲れと空腹を抱いたまま、泥の中に身を寄せ合っています。³⁸クインシーの人々が思いやってくれたように、ウィルフォードは、聖徒たちが間もなく自分たちの居場所を必要とすることを理解していました。

幸運にも、パートリッジビショップたちは、クインシーの北を流れる川の湾曲に沿った沼地を売りたいという、アイザック・ガランドという男性と話をしていました。彼らがシオンとして思い描いていた、乳と蜜の流れる地とはとうてい思えませんでした、そ

こは直ちに居住し、聖徒たちが新たに集合する場所を提供してく
れたのでした。³⁹



おお神よ、あなたはどこに

リ) バティーの監獄にいた捕虜たちにとって、時間の経過はゆっくりとしたものでした。監獄での最初の1か月は、思いやりある言葉や、衣類、食物を携えて、家族や友人が訪問してくれました。ところが冬も終わりに近づくと、聖徒たちがイリノイ州へ避難するにつれ、監獄への手紙や友好的な訪問者の数は激減し、捕虜たちはさらに孤立感を深めていきます。¹

1839年1月、聖徒たちは郡の審判前に上訴を試みましたが、ひどく健康を害していたシドニー・リグドンだけが保釈されました。残されたジョセフ、ハイラム、ライマン・ホワイト、アレクサンダー・マクレー、カレブ・ボールドウィン、春の審判を待つために地下牢へ戻されます。²

ジョセフは、監獄での生活で疲れ切っていました。やじ馬は鉄格子の窓をのぞき、ジョセフをじろじろ見たり、みだらな言葉を浴びせたりします。ジョセフと捕虜たちには、わずかなとうもろこしのパンしか食べるものがないことが度々でした。12月以来、寝床として使っていたわらは押しつぶされ、もはやまったく役に立ち

ません。暖を取ろうと火をつけると、地下牢は煙で充満し、むせてしまいます。³

間もなくやって来る裁判の日には、自分たちが偏った陪審員により有罪とされ、罰を受ける可能性が高いことを承知していました。ジョセフたちは一度ならず逃亡を試みましたが、その都度衛兵に捕えられてしまうのでした。⁴

天からの召しを受けて以来、ジョセフは主に従い、聖徒たちを集めようと努め、反発を受けながらも前進し続けてきました。しかし、年月を重ねるにつれ、教会が繁栄すればするほど、いつ崩壊してもおかしくない状態に陥るのです。

暴徒は聖徒たちをジャクソン郡のシオンから追い出しました。カートランドの教会は、内部の意見の相違により分断し、神殿は債権者の手に渡ってしまいました。今や、近隣住民との恐ろしい戦争が終わりを告げ、失望し、家を失った聖徒たちはミシシッピ川の東岸に沿って散在しています。

ミズーリの人々が聖徒たちを放っておいてくれさえすれば、州内で平穏無事に過ごせたであろうに、とジョセフは思いました。聖徒たちは神を愛する善良な人々であり、家から引きずり出され、打たれ、死ぬまで放置されるような人々ではありません。⁵

この不当な出来事に、ジョセフは怒りを覚えました。旧約聖書において、主は御腕の力で敵を征服し、主の民を危機からしばしば救い出されました。しかし今、聖徒たちが撲滅の危機にさらされているときに、主は介在してくださらないのです。

なぜでしょうか。

家を追い出し、土地を盗み、口にするにも耐え難い暴力を振るう者たちが野放しで、懲らしめを受けないでいる中、愛にあふれる天の御父はなぜ、これほど多くの無実の男女、子供たちを苦しむままにされたのでしょうか。なぜ主の忠実な僕たちを、愛する者たちから遠く離れた地獄のような監獄の中で、もがくままにされるのでしょうか。聖徒たちが神を最も必要としているとき

に、彼らを見捨てられることには、どのような目的があるのでしょうか。でしょうか。

「おお、神よ、あなたはどこにおられるのですか。」ジョセフは叫びます。「あなたの御手はいつまでとどめられるのですか。」⁶

ジョセフが必死に神に祈りをささげる中、クインシーの使徒たちは、生命にかかわるであろう重要な決断を迫られていました。前年のこと、主は 1839 年 4 月 26 日に、ファーウェストの神殿用地に集まるよう命じられました。そこは、彼らが神殿のために基礎を作り続けていた場所です。そこから、再びイギリスへの伝道に発とうとしていたのです。指示された期日まで約 1 か月になると、ブリガム・ヤングはファーウェストに戻り、主の命令を文字どおり果たすよう使徒たちに求めました。

クインシーの幾人かの教会指導者は、もはや使徒たちがその啓示に従う必要はないと信じ、暴徒が聖徒たちを殺すと断言している場所へ戻るのは愚かなことだと思いました。使徒たちがイリノイ州で大いに必要とされているときに、主は彼らが敵地まで何百キロも旅をして、命を危険にさらすようなことを求めてはおられないと、疑いなく結論づけていたのです。⁷

それに加え、定員会は混乱状態に陥っていました。トーマス・マーシュとオーソン・ハイドは背教し、パーリー・プラットは監獄に、ヒーバー・キンボールとジョン・ページはいまだミズーリにいたのです。新たに召されたウィルフォード・ウッドラフ、ウィラード・リチャーズ、そしてジョセフのいとこであるジョージ・A・スミスはまだ聖任されておらず、ウィラードはイギリスで福音を宣べ伝えていました。⁸

それでもブリガムは、主が命じられたからにはファーウェストに集まるための力がもたらされるとして、それを実行に移すべきだと感じていました。

ブリガムは、クインシーの使徒たちがその決断において一致団結することを望みました。旅をするには、教会の将来が不確かなときにあって家族を残していかなければなりません。使徒たちが捕えられたり、殺されたりすれば、その妻や子供たちは、待ち受ける試練に自分たちだけで立ち向かわねばならないのです。

それがどれほど重要なことであるかをわきまえたうえで、オーソン・プラット、ジョン・テラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ジョージ・A・スミスは、主の命令に従うよう求められることは何でも行うと同意しました。

決定を下した後、ブリガムはこう宣言しました。「主なる神が語られたことだ。従順になり、残りは主の御手に委ねるのが、我々の務めである。」⁹

リバティーの監獄では、聖徒たちへの懸念と、彼らに対して行われた不当行為への思いが、ジョセフの心を満たしていました。3月19日の夜、ジョセフはエマ、弟のドン・カーロス、パートリッジビショップから手紙を受け取ります。¹⁰ジョセフと捕虜たちは手紙に多少元気づけられましたが、ジョセフは聖徒たちが散り散りになり助けを必要としているときに、自分が不潔な地下牢に囚われているという思いを消し去ることはできませんでした。

手紙が届いた次の日、ジョセフは聖徒たちに向けて2通の手紙を書き始めます。ジョセフが手紙にその思いを打ち明けるのは、初めてのことでした。筆記者を務めていた仲間の捕虜に書き取らせ、預言者は失意にある聖徒たちを支えようとした。

「わたしたちに対するあらゆる種類の悪事やむごい仕打ちは、ただわたしたちの心をつなぎ、愛によって結びつけることしかできないでしょう。」¹¹

それでもジョセフは、聖徒たちを絶望的な状況に追いやった、何か月にもわたる迫害を無視することはできませんでした。ジョセフはボグズ知事、州軍、聖徒たちに危害を加えた者を痛烈に批判しました。ジョセフは祈って主にこう叫び求めます。「あなたの怒りがわたしたちの敵に向かって燃えますように。そして、あなたの心の憤りをもって、あなたの剣でわたしたちへの不当な扱いに報復してください。」¹²

しかし、ジョセフは敵だけに非があるわけではないことも承知していました。教会指導者を含む幾人かの聖徒たちは、自分たちの罪を隠し、高慢と野心を満たして、人々を力づくで従わせようしました。彼らは聖徒たちの間で、力と地位を悪用したのです。

ジョセフは靈感を通してこう述べました。「わたしたちは悲しむべき経験によって学んだ。すなわち、ほとんどすべての人は、少しばかりの権能を得たと思うや、すぐに不義な支配を始めようとする性質と傾向がある。」¹³

義になかった聖徒たちは、より高い原則に従って行動しました。主はこう宣言されます。「いかなる力も影響力も、神権によって維持することはできない、あるいは維持すべきではない。ただ、説得により、寛容により、温厚と柔和により、また偽りのない愛によ[る]。」そうでなければ、神権により人々の生活を祝福する御霊と権能は失われるのです。¹⁴

さらに、ジョセフは罪なき聖徒たちに代わって訴えました。「おお、主よ、彼らがどれほど長くこれらの不当な扱いと不法な虐げを受ければ、あなたの心は彼らに和らぎ、あなたの胸は彼らに対する哀れみの情に動かされるのですか。」¹⁵

主はこう答えられました。「息子よ、あなたの心に平安があるように。あなたの逆境とあなたの苦難は、つかの間にすぎない。その後、あなたがそれをよく堪え忍ぶならば、神はあなたを高い所に上げるであろう。あなたはすべての敵に打ち勝つであろう。」¹⁶

主は、ジョセフを忘れてはおられないことを確信させました。「たとえ地獄の入り口が大口を開けてあなたをのみ込もうとしても、息子よ、あなたはこのことを知りなさい。すなわち、これらのことはすべて、あなたに経験を与え、あなたの益となるであろう。」

救い主はジョセフに、聖徒たちの苦しみが主の苦しみに勝ることはないと思ひ起こさせました。主は聖徒らを愛しており、苦痛を終わらせることができになります。それでも、贖いの犠牲の一部として彼らの悲しみと苦痛を背負い、ともに苦難を経験することを、主は選ばれたのです。そのような苦しみは主を憐れみで満たし、試練にあつて主に頼るすべての者を助け、精錬する力を与えます。主はジョセフに、確固としてとどまるように勧め、決して彼を見捨てることはない約束されました。

「あなたの命数は知られており、あなたの寿命が短くされることはない。それゆえ、人のなし得ることを恐れてはならない。とこしえにいつまでも、神はあなたとともにいるからである。」¹⁷

主が監獄にいたジョセフに平安を告げるころ、ヒーバー・キンボールとミズーリの聖徒たちは、預言者を解放してくれるよう州の最高裁判所に絶え間なく陳情を行っていました。判事たちはヒーバーの嘆願に同情的で、ジョセフの収監の正当性に疑問を抱く人もいましたが、結局はこの件に関して対策が取られることはありませんでした。¹⁸

落胆したヒーバーは、ジョセフに報告を行うためリバティーへ戻ります。衛兵は彼が地下牢に入ることを許さず、ヒーバーは監獄の窓の外に立ち、友人たちに呼びかけました。ヒーバーは、最善を尽くしたものの、何も変わらなかったと告げました。

ジョセフは返事をして言いました。「元気を出してください。できるだけ早くすべての聖徒たちを脱出させるのです。」¹⁹

ヒーバーは、その地域にまだ潜む危険に用心しつつ、数日後にはファーウェストに紛れ込みます。少数の指導者と数家族を除いて、町は空っぽでした。ヒーバーの家族は2か月前に立ち去っており、それ以来何の音さたもありません。彼は、家族と捕虜たち、そして暴徒に苦しめられて亡くなった人々のことを考えながら、意気消沈し、孤独を感じました。ジョセフ同様、この苦しみに終わりが来ることを心から望んでいたのです。

そのような惨めな状況と、ジョセフの釈放がかなわなかったことについて思いを巡らせていると、主の愛と感謝の思いがヒーバーを満たします。ひざ上に紙を置くと、ヒーバーは感じた気持ちを記しました。

「わたしがいかなるときも、終わりまであなたとともにあることを覚えておきなさい」と主が語られるのを耳にしたのです。「わたしの御霊はあなたの心の中であって、王国にかかわる平和をもたらす事柄をあなたに教えるであろう。」

主は、家族について心配することのないよう告げました。「わたしは彼らに食物を与え、衣服を与え、隣人を与えよう」と約束されたのです。「あなたが忠実であり、出て行って地の諸国にわたしの福音を宣べ伝えるなら、平安は永遠に彼らの上にとどまるであろう。」²⁰

ヒーバーは書き終えると、心と思いに平安が満ちました。

暗い、みじめな地下牢で主が語ってくださった後、ジョセフはもう、神が自分と教会を見捨てるのではないかと恐れることはなくなりました。エドワード・パートリッジと聖徒たちにあてた手紙の中で、ジョセフは末日の業について大胆に証しました。「地獄はベスビオ山〔の〕激しく燃える火山の溶岩のように、その怒りを噴き上げるかもしれません。それでも『モルモンの教え』は倒れません。」ジョセフは確信を胸に、宣言します。

「『モルモンの教え』は真理です。その創始者は神です。神はわたしたちの盾です。神によって、わたしたちは生を受けました。神の声によって、わたしたちは時満ちる時代の初めに神の福音の神権時代に召されました。」²¹

ジョセフは聖徒たちに、ミズーリで苦しんだ不当な扱いに関する公式の記録をまとめるよう要請しました。合衆国大統領やそのほかの政府役人に届け、目を通してもらうためです。ジョセフは、失ったものについて法的補償を求めることは聖徒たちの義務であると信じ、こう勧告しました。

「わたしたちの力の限りすべてのことを喜んで行おう。そして願わくは、その後、わたしたちがこの上ない確信をもって待ち受けて、神の救いを目にし、また神の腕が現されるのを見ることができるよう。」²²

ジョセフが手紙を送った数日後、彼と捕虜たちは監獄を去り、ガラティンの大陪審に出廷します。監獄を離れる前、ジョセフはエマに手紙を書き送りました。「幼いフレデリック、ジョセフ、ジュリア、アレクサンダーに会いたいです。お父さんが完全な愛をもって愛していること、暴徒から逃れて子供たちのもとに帰るために最善を尽くしていることを伝えてください」と書いています。²³

捕虜たちがガラティンに着くと、部屋にいた弁護士の中には酒を飲んでいる者がいました。外では男たちがうろつき、窓から

中をぼんやりとのぞいています。椅子に腰かける判事は、11月の審理で聖徒たちを訴えた弁護士でした。²⁴

デイビーズ郡で公平な審理は望めないと確信したジョセフとほかの捕虜たちは、裁判地の変更を申し出ました。要請は聞き入れられ、一人の警官と4人の新たな衛兵とともに、捕虜たちは別の郡の裁判所へと向かいます。²⁵

衛兵たちは捕虜に情け深く、新しい場所へ移動する間、彼らを思いやりをもって扱ってくれました。²⁶ガラティンでは、ジョセフは持ち前のレスリングの強さで、彼らの中で最も屈強な者を倒し、尊敬されました。²⁷聖徒たちについての世論も変わってきています。ミズーリ住民の中には、知事の撲滅令に対して不快感を募らせ、とにかくこの問題全体を終わりにして、捕虜たちの解放を望む人が増えていたのです。²⁸

デイビーズ郡を去った翌日、捕虜たちは立ち寄った店で、衛兵のためにウイスキーを買いました。その晩遅く、警官が捕虜たちに近づいて来て言いました。「わたしは酒を飲んで寝るとしよう。あなたがたはしたいようにするのがいい。」

警官と3人の衛兵が酒を飲む間、ジョセフと仲間たちは、残りの衛兵の助けを借りて二頭の馬に乗り、暗闇の中を東へ向かったのです。²⁹

2日後、ジョセフと捕虜たちが無事に自由の身となっていたころ、5人の使徒たちはミシシッピ川を渡り、ファーウェストに向けて反対方向へ旅を始めました。プリガム・ヤング、ウィルフォード・ウッドラフ、オーソン・プラットが一つの馬車に乗り、ジョン・テラーとジョージ・A・スミスは、神殿建設を任されていたアルフィアス・カトラーとともに進みました。

彼らは指定された日にファーウェストにたどり着けるよう、急いで大草原を横切りました。道中、ミズーリを逃れて家族と一緒に東へ向かっていた使徒のジョン・ページに会い、彼も加わるように説得します。³⁰

7日間の旅の後、4月25日の月夜の晩、使徒たちはファーウェストに入ります。人気のない通りには草が茂り、辺りはしんとしていました。ジョセフの逃亡を知ってファーウェストに戻ってきたヒーバー・キンボールは、隠れ場所から姿を現し、町に彼らを迎え入れました。

皆は数時間をとともに過ごします。そうして、朝日が東の地平線を照らし始めると、彼らは静かに広場へ向かい、町に残っていた数人の聖徒たちを連れ立って神殿用地へと歩いて行きました。彼らはそこで賛美歌を歌い、神殿の基礎を再び築くようにという主の戒めを果たすべく、アルフィアスが神殿用地の南東の隅に大きな石を転がしました。³¹

石の上に座るウィルフォードの周りを、使徒たちが囲みます。使徒たちは彼の頭に手を置き、ブリガムが彼を使徒の職に聖任しました。それが終わると、ジョージがウィルフォードと代わり、同じように聖任されました。

果たせることをすべて成したと感じながら、朝日の中、使徒たちは頭を垂れて順番に祈りをささげました。その後、皆で「アダム・オンダイ・アーマン」を歌いました。イエス・キリストの再臨と、シオンの平安がミズーリの戦争で廢れた大草原に広がり、世界を満たす日を待ち望む賛美歌です。

それから、アルフィアスは元あった場所へ石を戻し、主がシオンを取り戻す方法を聖徒たちに備えてくださる時まで、その基礎を主の御手に委ねました。³²

次の日、使徒たちはミズーリを何とか立ち去ろうとしていた最後の家族に追いつこうと、52キロの道のりを移動します。彼ら

は間もなく、イギリスに向けて出発するつもりでした。しかし、まずイリノイにいる愛する家族と合流し、どこであろうと、新たな集合の地に家族を落ち着かせたいと思っていたのです。³³

このころ、クインシーに船が到着し、幾人かの粗野な身なりの乗客が下船します。このうちの一人に、青白く痩せた男の姿がありました。つばの広い帽子をかぶって襟を折り返した青いジャケットを着込み、無精ひげを生やした顔を覆っていました。破れたズボンは、履き古した長靴にたくし込んでいます。³⁴

ファーウェストの聖徒たちの中で、以前警官であったデイミック・ハンテントンは、岸を登ってくる髪の乱れたこの人物を眺めていました。男性の顔と歩き方が、彼の目にとまります。しかし、よく見てみるまでは分かりません。

「ジョセフ兄弟、あなたですか?」と彼は叫びました。

ジョセフは、友人をなだめるように手を挙げます。「静かに!」注意を促してそう言いました。「わたしの家族はどこですか。」³⁵

ジョセフと捕虜たちは逃亡して以来、ミズーリ州政府の力の及ばない、自由の待つミシシッピ川まで、ミズーリの裏道を目立たないように移動し続けてきたのでした。³⁶

デイミックは預言者との再会に衝撃を受けながらも、エマと子供たちは町から6キロのところに住んでいると告げました。

「できるだけ早く、わたしを家族のところへ連れて行ってください」とジョセフは言います。

デイミックとジョセフは人目を避けながら、裏道を通って町を抜けると、クリーブランド家へ向かいました。到着すると、ジョセフは馬から降り、家へ向かって歩き出します。

エマが戸口に現れ、すぐに彼だと気づきました。走り出したエマは、門まで半分のところで、ジョセフをその腕に抱き締めたのでした。³⁷

第 4 部



時満ちる時代

1839 年 4 月 - 1846 年 2 月

わたしの名のためにこの家を建てて、わたしがそこで民に儀式を示すことができるようにしなさい。わたしは創世の前から隠されてきたこと、すなわち時満ちる神権時代に関することを、わたしの教会に示そうと思うからである。

教義と聖約 124:40 - 41

1839 - 1846 年



デモイン川

ミシシッピ川

•デイクソン



アイオワ準州



モンローズ

•ノーブ



レイマス



•カーセージ
•ウォーソー



トゥプアイ



太平洋

イリノイ州

クインシー



イリノイ川



スプリングフィールド

ミズーリ州

ミシシッピ川





町を築き上げ

1839年4月下旬、聖徒と再会を果たした数日後のこと、ジョセフは馬で北へと向かいました。教会指導者が購入を希望していた、クインシーから80キロ離れたコマースの町とその周辺の土地を視察するためです。直近の半年間で初めて、預言者は武装した護衛を伴わず、暴力の脅威に迫られることもなく旅をしていました。ついに、人々が聖徒を歓迎してくれる州で、友人たちに囲まれたのです。人々は聖徒の信条に敬意を払っているようでした。

獄中、ジョセフはコマース周辺の土地を売っている男性に手紙を書き、教会員をその地に定住させようと考えていることを伝えました。「購入に関心を示している人が特になければ、わたしたちがあなたから購入したい」と、ジョセフは綴っています。¹

ところがファーウェストの陥落以来、多くの聖徒は一つの地域に集合するという見識に疑問を抱くようになります。エドワー

ド・パートリッジは、争いを避け、貧しい人を養う最善の方法は、国内に点在する小さな地域ごとに集合することではないかと考えました。²一方ジョセフは、集合するよ^うにという聖徒への指示を、主は取り消しておられないことを承知していました。

コマースに到着したジョセフは、ぬかるむ氾濫原^{はんらんげん}が、ミシシッピ川の広大な湾曲を見下ろす、木の生い茂った断崖までなだらかに上っていくのを目にしました。その地域には、何軒かの家が点在しています。川の向こう側、アイオワ準州のモンローズ近くにも、さらに購入可能な土地があり、そこには幾つかの廃れた兵舎がありました。

ジョセフは、聖徒たちがこの地域に、栄えるシオンのステークを建設できると確信します。これまで見た中でえり抜きの地というわけではないものの、ミシシッピ川が海まで続くコマースは、海外から聖徒を集め、営利事業を営むのに適した場所でした。また、定住している人もまばらです。

それでも、その地に聖徒を集めることには危険が伴います。ジョセフの望むように教会が発展すれば、ミズーリの人々のように近隣住民が恐れを抱き、聖徒に敵対するかもしれません。

ジョセフは祈りました。「主よ、わたしが何をするをお望みですか。」

「一つの町を建て、聖徒たちをこの地に招きなさい。」それが主の答えでした。³

その春、ウィルフォード・ウッドラフとフィービー・ウッドラフは、モンローズの兵舎に移り住みます。近所には、ブリガム・ヤングとメアリー・アン・ヤング、オーソン・プラットとサラ・プラットも住んでいました。家族を落ち着かせると、3人の使徒は定員会

のほかの会員とともに、イギリスに向けて伝道に出る計画を立てました。⁴

間もなく、何千人もの聖徒が新たな集合地に移り住みます。テントや荷馬車で生活しながら、家を建て、食料や衣服を手に入れ、川の両側の農地を開墾するために出て行って働きました。⁵

新たな定住の地が発展すると、十二使徒は度々ジョセフと会合を持ちました。ジョセフは新たな活力を帯びて教え、使徒たちを伝道に備えます。⁶また、神がジョセフに明らかにされた事柄の中で、十二使徒に知らされていないことはないと教えました。「聖徒の中の最も小さき者でさえ、可能なかぎり速やかに、あらゆる事柄を知ることができる」とジョセフは宣言しています。⁷

ジョセフは福音の第一原則の中から、復活と裁き、またシオンの建設について教えました。かつての使徒の裏切りを念頭に、ジョセフは彼らに忠実であるよう訴えます。「天を裏切ることのないよう、注意してください。イエス・キリストを、仲間を、また神の啓示を裏切ることのないよう注意してください。」⁸

このころオーソン・ハイドは、ミズーリ州でジョセフを非難し、聖徒を見捨てたことを恥じ、十二使徒定員会に戻りたいという望みを口にしていました。次に困難が訪れたら、オーソンが再び裏切るのではないかと恐れたシドニー・リグドンは、オーソンを使徒職に復帰させることに乗り気ではありませんでした。しかし、ジョセフはオーソンを歓迎し、十二使徒の一員としての地位を回復しました。⁹7月、パーリー・プラットはミズーリの監獄から脱獄し、使徒たちと再会を果たします。¹⁰

そのころには、湿地帯から上ってきた蚊の群れが、新たに移り住んだ人々をはばかりなく刺し、多くの聖徒は致命的なマラリア熱とひどい悪寒に倒れました。しばらくすると、ほとんどの

十二使徒も病にかかり、イギリスに出発することができないほどの状態に陥ります。¹¹

7月22日月曜日の朝、ウィルフォードは自宅の外から自分を呼ぶジョセフの声を耳にしました。「ウッドラフ兄弟、ついてきてください。」

ウィルフォードが外に出ると、ジョセフが数人の男性と一緒に立っています。午前中、彼らは家から家へ、テントからテントへと歩いて回って、病人の手を取り、癒していたのです。コマースの聖徒に祝福を受けると、彼らはフェリーで川を渡り、モンローズの聖徒を癒しに向かいました。¹²

ウィルフォードは彼らとともに村の広場を横切り、友人であるエライジャ・フォーダムの家を訪れました。エライジャの目はくぼみ、皮膚は青白くなっています。妻のアンナは、夫の埋葬衣を準備しながら泣きはらしていました。¹³

ジョセフはエライジャに近づいて手を取ると、「フォーダム兄弟、癒される信仰がないのですか」と尋ねました。

「手遅れではないでしょうか。」フォーダムはそう口にします。

「イエスがキリストであると、信じてはいないのですか。」

「信じています、ジョセフ兄弟。」

「エライジャ、ナザレ人イエスの御名によって命じます。立ち上がり、癒しを受けなさい。」

その言葉は、家全体を揺り動かしたかのようでした。床から起き上がったエライジャの顔に、血の気が戻ります。エライジャは服を着替え、食べ物を求めると、外にいるジョセフについて行き、大勢の人々に仕える手助けをしました。¹⁴

その晩、フィービー・ウッドラフは、エライジャとアンナを訪れて驚きます。ほんの数時間前、アンナは夫のことを諦めかけていたのに、今エライジャは、庭仕事をするだけの元気があるとい

うのです。フィービーは、エライジャが快復したのは神の業にはかならないと確信したのです。¹⁵

病人を祝福し、癒しを施すジョセフの取り組みが、コマースとモントローズにおける病気の広がりをとどめることはなく、一部の聖徒は亡くなりました。死者が増えるにつれ、18歳のジーナ・ハンテントンは、母親も病に倒れるのではないかと不安を募らせます。

ジーナは、父親と兄弟の助けに頼りながら、日々母親の世話をしていましたが、やがて家族全員が病気にかかりました。ジョセフは彼女たちの様子を時折確認し、一家を助け、ジーナの母親が心地良く過ごせるよう何ができるかを知ろうと努めました。

ある日、ジーナを呼び寄せた母親は、「死ぬときが来たわ」と弱々しく言いました。「でも、怖くないの。」母親は、復活についての証をジーナに伝えます。「救い主が地上の聖徒を訪れるため義人とともに来られるとき、わたしも勝利のうちに出てくるでしょう。」

母親が亡くなると、ジーナは悲しみに打ちひしがれます。一家の苦しみを知るジョセフは、引き続き彼らの世話をしました。¹⁶

ある時ジョセフが訪問すると、ジーナがこう尋ねました。「向こう側に行ったとき、母を母だと認識できるでしょうか。」

「自分の母を認識できるばかりか、あなたは永遠の母、すなわち天の御父の妻にお会いし、親しくなるでしょう。」

「天に御母がいらっしゃるのですか。」ジーナは尋ねます。

「確かにいらっしゃいます」とジョセフは言いました。「御母がいらっしゃらなかったとしたら、どうして御父は御自分の親としての称号を使うことがおできになるでしょうか。」¹⁷

8月初旬、ウィルフォードはジョン・テラーとともにイギリスへ出発しました。テラーは、この新たな伝道地に最初に出発した使徒の一人です。当時、フィービーはもう一人の子供を妊娠しており、またジョンの妻レオノーラと3人の子供たちは、病気にかかって熱を出していました。¹⁸

オーソン・プラットとサラはほんの11日前に娘のリディアを亡くしたばかりで、いまだ深い悲しみの淵にありましたが、パーリー・プラットとオーソン・プラットは次の使徒としてイギリスに出発することとなります。パーリーの妻メアリー・アン・プラットは、伝道地の使徒に加わるため、彼らとともに発ちました。最も若い使徒であったジョージ・A・スミスは、伝道を開始した当時に病気を患っており、婚約者であるバスシバ・ビグラーとの結婚を延期していました。¹⁹

メアリー・アン・ヤングは、9月の中旬、ブリガムに別れを告げます。ブリガムは再び病に冒されていましたが、求められることを行おうと決意していました。メアリー・アン自身も病にかかっていたうえ、ブリガムが留守の間、5人の子供を養うためのお金はわずかしかなかった。それでも、ブリガムにその務めを果たしてほしいと望んでいたのです。

「行って、あなたの使命を果たしてきてください。そうすれば、主はあなたを祝福してくださるでしょう」とメアリーは言いました。「わたしは、自分と子供たちのためにできるかぎりのことをします。」²⁰

ブリガムが出発して数日後、メアリー・アンは、ミシシッピ川の向こうにあるキンボール家まで行ったところで、ブリガムが疲労で倒れたことを知ります。メアリー・アンはすぐに川を渡り、ブリガムが出発する体力を取り戻すまでと、世話をしに向かいました。²¹

メアリー・アンがキンボール家に行くと、バイレートが二人の息子とともに病床に伏していました。井戸から重い水入れを運べるのは、4歳の息子をおいてほかにはいない状態です。ヒーバーは病のために立ち上がることもできませんでしたが、翌日ブリガムとともに出発すると決意していました。

メアリー・アンは、朝に荷馬車が到着するまでの間、ブリガムを看病しました。出発しようと立ち上がったヒーバーは、取り乱した様子です。ヒーバーは高熱のために床で震えるバイレートを抱き締めてから、子供たちに別れを告げ、おぼつかない足取りで荷馬車に乗り込みました。

ブリガムは元気な姿を見せてメアリー・アンと姉のファニーに別れを告げようとしたのですが、無駄な努力に終わります。体力を取り戻すまでとどまるようファニーが強く勧めると、ブリガムはこう答えました。

「こんなに気分が良いのは初めてだ。」

「うそだわ」とファニーが言い放ちます。

ブリガムは懸命に荷馬車によじ登り、ヒーバーの隣に座りました。荷馬車が丘を下っていくと、ヒーバーは病気の家族を残してきたことを心苦しく思い、御者の方を向き、止まるように告げました。「こんなにつらいなんて」とブリガムにこぼします。「立ち上がって家族を励まそう。」

家の方では、外が騒がしくなり、バイレートが驚いてベッドから飛び起きるほどでした。よろめきながら戸口まで歩いて行くと、メアリー・アンとファニーが、少し離れた場所の何かを見詰

めています。バイレートも目をやると、自然と笑みがこぼれました。

ブリガムとヒーバーが、互いに寄りかかりながら荷馬車の後部に立ち、「万歳！ 万歳！」と叫びながら帽子を振っていたのです。「イスラエルに、万歳！」

「行ってらっしゃい！」女性たちは大声で言いました。「神様の祝福がありますように！」²²

使徒たちが次々とイギリスに出発する中、イリノイ州とアイオワ州の聖徒は、ミズーリ州で受けた不当な扱いについて詳しく述べた文書を作成しました。獄中のジョセフから、そう指示を受けていたのです。秋までに、教会指導者はこのような記録を何百も集め、正式な請願書を準備しました。聖徒たちは、失った家屋や土地、家畜等の財産の補償として、合計 200 万ドル以上を要求します。ジョセフは自ら、この請願書を合衆国大統領と連邦議会に届けようと計画しました。

マーティン・バン・ビューレン大統領は高尚な指導者であり、市民の権利を擁護してくれる人物だと思ったからです。ジョセフは、大統領やワシントン D. C. にいるそのほかの立法者たちが、聖徒の苦しみについて読み、ミズーリ州で失った土地と財産の補償を行うことに同意するよう望んでいました。²³

1839 年 11 月 29 日、イリノイ州の自宅から 1,600 キロ近くを旅したジョセフは、ワシントンにある大統領官邸の正面玄関にたどり着きます。彼の横には、友人で法律顧問のエライアス・ヒグビーと、イリノイ州議員のジョン・レイノルズがいました。²⁴

守衛が玄関で彼らを出迎え、中に入るよう手招きしました。官邸はつい最近改装されたばかりで、西部に暮らす聖徒たちの

倒れ落ちそうな住まいとは著しい対照を成すその官邸の部屋の優雅さに、ジョセフとエライアスは圧倒されます。

案内人は、3人を2階の部屋に連れて行きました。バン・ビューレン大統領は、訪問者と話をしているところでした。請願書と数通の紹介状を手にドアの外で待つ間、ジョセフはレイノルズ議員に、自分のことを一介の「末日聖徒」とだけ紹介するよう頼みます。議員はこの要請に驚き、愉快に思いつつ、ジョセフの望みどおりにすることに同意しました。レイノルズ議員は、聖徒を支援することに積極的ではなかったものの、大人数に上る聖徒の存在は、イリノイ州の政治に影響を及ぼすであろうと考えていたのです。²⁵

ジョセフは、このように小規模な代表団で大統領に面会するとは思ってもいませんでした。10月にイリノイ州を出発した時点では、シドニー・リグドンにこの集会の指揮をとってもらう予定でした。ところがシドニーは病気にかかり、旅の途中で足止めを余儀なくされてしまったのです。²⁶

ようやく応接間の戸が開き、3人は部屋に足を踏み入れます。ジョセフと同様、マーティン・バン・ビューレンはニューヨークの農家の息子でしたが、ジョセフよりも随分年輩のずんぐりむっくりした色白の男性で、その豊かな白髪が顔の大部分を覆っていました。

レイノルズ議員は、約束どおりにジョセフを一介の末日聖徒として紹介します。大統領は聞き慣れないその肩書にはほほえみ、預言者の手を握りました。²⁷

ジョセフは大統領とあいさつを交わすと、紹介状を渡して待ちました。バン・ビューレンはそれに目を通すと、顔をしかめます。「あなたがたを助ける？ 一体わたしに何ができるのかね」と素っ気なく言い放ちました。²⁸

ジョセフは、何と言ったらよいか見当もつきません。²⁹これほど早く大統領にはねつけられるとは思ってもいなかったの

す。ジョセフとエライアスは大統領に、請願を拒否すると決める前に、せめて聖徒の苦しみについて読んでほしいと懇願しました。

「あなたがたのためにできることは何もない。」大統領はきっぱりと言いました。「わたしがあなたがたの肩を持てば、ミズーリ州全体を敵に回すことになり、次の選挙で支持してもらえなくなるだろう。」³⁰

ジョセフとエライアスは落胆しながら官邸を後にし、請願書を議会に届けました。立法者がそれを確認し、話し合うまでに、何週間も要するであろうことは承知の上です。³¹

待っている間、ジョセフは東部の教会支部を訪問し、ワシントンと周辺の町や市で教えを宣べ伝えることにしました。³²

1840年1月11日、ウィルフォード・ウッドラフとジョン・テラーはイギリスのリバプールに到着しました。ウィルフォードがイギリスを訪れるのはこのときが初めてでしたが、ジョンは家族や旧友と再会を果たします。二人は荷物を手に取ると、ジョンの義弟、ジョージ・キャノンの自宅に向かいました。ジョージと妻のアンは彼らを見て驚き、夕食に招きました。

キャノン家には5人の子供がいます。長子のジョージは、聡明で読書好きな13歳の子供でした。夕食後、ウィルフォードとジョンは、一家にモルモン書と *A Voice of Warning*（「警告の声」）を渡しました。後者は、パーリー・プラットが数年前にニューヨーク市で出版した伝道用のパンフレットです。ジョンは一家に福音の第一原則を教え、これらの書物を読むよう勧めました。³³

キャノン一家は、ウィルフォードとジョンがプレストンへの列車に乗り、ジョセフ・フィールディングとウィラード・リチャーズに

会いに行く間、宣教師たちの荷物を預かってくれました。³⁴ヒーバー・キンボールとオーソン・ハイドが1年前にその伝道地を離れた後、ジョセフとウィラードはイギリスの聖徒と結婚していました。ヒーバーの予想どおり、ウィラードはジェネッタ・リチャーズと一緒にいました。

プレストンでの集会の後、ジョンはリバプールに戻ります。一方ウィルフォードは南東のスタッフォードシャーという産業地域に向かい、すぐさま一つの支部を確立しました。ある晩、その地の聖徒と集会を持ったウィルフォードは、御霊が自分に宿るのを感じます。「あなたはこの集会を最後に、長い間彼らと会うことができない」と、主はウィルフォードに告げられました。

この言葉にウィルフォードは驚きました。スタッフォードシャーでの業は始まったばかりで、ウィルフォードはその地域で教える約束を幾つも取りつけていたのです。しかし、翌朝さらに導きを求めて祈ると、大勢の人が神の言葉を待つ、さらに南の地域へ向かうよう御霊に促されました。

ウィルフォードは翌日、スタッフォードシャーの聖徒の一人であるウィリアム・ベンボーとともに南方に向けて出発し、ウィリアムの兄弟ジョン・ベンボー、その妻であるジェーン・ベンボーの農場を訪れます。³⁵ジョンとジェーンは実りの多い121ヘクタールの農場に、白いレンガ造りの大きな家を構えていました。到着したウィルフォードとウィリアムは、朝の2時まで寝ることなく、ベンボー夫妻と回復について話しました。

二人は豊かな暮らしを送っていましたが、霊的には満たされていなかったのです。そのころ、彼らはイエス・キリストの真実の福音を見いだすべく、ほかの人々とともに所属していた教会を離れたばかりでした。同胞教会と名乗るその一団は、ベンボー農場から数キロ南のガドフィールド・エルムやそのほかの地域に

教会堂を建てていました。彼らは自分たちの中から説教者を選び、さらなる光を神に求めていたのです。³⁶

その晩、ウィルフォードの話に耳を傾けたジョンとジェーンは、ついに完全な福音を見いだしたことを確信します。翌日、ウィルフォードはベンボー家の自宅で大勢の隣人に教えを説き、間もなく近くの池でジョンとジェーンにバプテスマを施しました。

その後の数週間にわたり、ウィルフォードは150人以上の同胞教会の会員にバプテスマを施します。中には、46人の無給の聖職者も含まれていました。バプテスマを求める人が増えてくると、ウィルフォードはウィラード・リチャーズに手紙を書き、助けを求めます。³⁷

「一日に4, 5回、バプテスマを施すために呼ばれるのだ！
とうてい一人ではできない！」³⁸

2月5日、67歳のマシュー・デービスは、モルモンの預言者ジョセフ・スミスが、その晩ワシントンで教えを説くと耳にしました。マシューはニューヨーク市の大衆新聞の特派員です。妻のメアリーが末日聖徒に興味を抱いているのを知り、ぜひとも預言者の話を聞き、その教えを妻に伝えようと思っていたのです。

説教を聞いていたマシューは、ジョセフが質素な身なりをした、体格のよい、端正な顔立ちの農夫で、その立ち振る舞いに威厳があるのを見て取ります。その話しぶりから、ジョセフは公式な教育こそ受けていないものの、意志が強く、聡明な人物であることが分かりました。預言者は誠実で、その声に軽率さや狂信の気はありません。

「時間の許すかぎり、皆さんにわたしたちの信条をお伝えします。」ジョセフはそう言って説教を始め、神とその属性について証を述べました。「神は天地のすべてを統治しておられます」と

ジョセフは宣言します。「神は人の墮落をあらかじめ定めておられました。が、憐れみ深い神は同時に、全人類のために贖いの計画も備えておられたのです。」

「わたしはイエス・キリストの神性を信じています。また、アダムにより墮落した全人類の罪のために亡くなられたことを確信しています。」ジョセフは、あらゆる人は清く汚れのない状態で生を受けるのであり、幼くして亡くなったすべての子供は天国に行くと述べました。なぜなら、彼らは善悪を知らず、罪を犯すことができないからです。

じっと耳を傾けていたマシューは、ジョセフの言葉に感銘を受けます。ジョセフは、神は初めもなく終わりもない永遠の御方であり、あらゆる男女の魂も同様であると教えました。マシューは、預言者が次の世における報いや罰についてはほとんど語らないことに気づきました。ただし、神の罰には始まりと終わりがあることを信じていると言います。

2時間後、預言者はモルモン書の証を述べて説教を終えました。ジョセフがこの書物を記したのではなく、神により、天から直接受け取ったものであると宣言したのです。

説教を思い返していたマシューは、その晩、社会に害を与えるような内容を何一つ耳にしなかったことに気づきました。マシューは翌日、妻への手紙にこうしたためています。「ジョセフの教えには、もしそれに従うならば、人に対する辛辣な気持ちが和らぎ、道理をわきまえた人物にならしめるような教えが多くあった。」

預言者の教えを受け入れるつもりはありませんでしたが、マシューはその平和のメッセージを称賛しました。「暴力も激しい怒りも、非難の言葉もなかった」と綴っています。「彼の宗教は、柔和と謙遜さと、穏やかな説得の宗教のように思う。」

こう締めくくっています。「モルモンに対する見解が変わったよ。」³⁹

ジョセフは、議会在聖徒の請願を確認するのを待つ間、家族から離れていることに嫌気がさすようになりました。その冬には、「愛するエマ、わたしの心はあなたと幼い子供たちにしっかりと結ばれています」と書き送っています。「子供たち全員に、わたしが彼らを愛していて、できるかぎり早く帰るつもりだと伝えてください。」⁴⁰

ジョセフはエマと結婚した当時、その結びつきは死とともに終わりを迎えると思っていました。⁴¹しかし、主はその後、結婚と家族は、神権の力を通して墓を超えて続くことを明らかにされます。⁴²そのころ、パーリー・プラットと東部諸州の教会支部を訪問していたジョセフは、義にかなった聖徒は永遠に家族関係を養い、愛情のうちに増し加えることができると語っていました。地上でどれほどの距離が忠実な家族を隔てたとしても、いつの日か来たる世で一つに結ばれるという約束を、彼らは信じていたのです。⁴³

ジョセフはワシントンで待つ間、もったいぶった言葉や空しい約束に満ちた、政治家たちの尊大に構えた演説を聞くのにも辟易してきました。「彼らは、ささいなときにも美辞麗句を並べ立てる傾向が強く、儀式的な態度や会釈、へつらい、言葉の意味の歪曲などにより、機知に富んだ言葉を披露しようとする」と、兄ハイラムへの手紙に記しています。「深刻で重要な事柄について話しているようには見えず、むしろ愚かなことを言い連ねて人の歓心を買おうとしているように見える。」⁴⁴

国内で最も影響力を持っていた上院議員、ジョン・C・カルフーンとの面会が不成功に終わり、ワシントンで時間を無駄にし

ていることに気づいたジョセフは、家に帰ることにしました。だれもが自由と正義について語っていましたが、ミズーリの人々に、聖徒に対する待遇の責任を取らせようとする人はいないようでした。⁴⁵

預言者がイリノイ州に戻った後も、エライアス・ヒグビーは聖徒の損失に対する補償を求め続けました。3月、聖徒たちの請願書を確認した上院は、ミズーリの代表者に、州の行為を擁護することを許しました。この件について検討した結果、立法者たちは何の対応も行わないことを決定します。聖徒の苦しみは認めるも、議会は州政府の行為に干渉する権限を持たないものと考えていました。聖徒の損失を補償できるのは、ミズーリ州のみだと言うのです。⁴⁶

「わたしたちの働きは、とうとうここで終わってしまいました。」落胆したエライアスはジョセフにこう綴っています。「この件に関して、できるかぎりのことはすべて行ったのです。」⁴⁷



美しき地

コマースでのマラリアの流行は 1840 年に入っても続き、エミリー・パートリッジと姉のハリエットは、病人のいるテントや荷馬車、未完成の家々を巡りました。16 歳になるエミリーは、厳しい生活環境に慣れていました。10 年間近く、彼女の家族は質素な家を次々と追われ、オハイオで享受していたような安定した家庭生活を楽しむことはありませんでした。

二人の姉妹は、自分たちも熱と震えに倒れるまで、病人の世話をしました。娘たちの命が危険にさらされていることに気づいたエドワード・パートリッジとリディア・パートリッジは、二人の娘をテントから移動させ、川沿いにある空き倉庫の小さな貸し部屋に移り住ませました。エドワードはその後、家族の家を建てるため、1.6 キロ離れた土地に通い詰めます。

ミズーリでの苦難により、パートリッジビショップは健康を害しており、働ける状態ではありませんでした。間もなくビショップ自身が熱を出すも、薬を飲んで治療し、少し調子が良くなると、

家の建設作業を1、2週間ほど行いました。再び病状が悪くなると、さらに薬を飲んで仕事に戻るといふ繰り返りだったので、

一方、窮屈で暑苦しい倉庫の一室は、エミリーとハリエツト、同じく病気にかかったきょうだいたちの役には立ちませんでした。エミリーの熱は1840年の春まで続き、一方、病状が悪化の一途をたどったハリエツトは、5月中旬に18歳で亡くなりました。¹

ハリエツトの死は、パートリッジ家を悲しみのどん底に突き落とします。葬儀の後、エドワードは自分たちの土地にある、未完成の牛舎に家族を移そうとしました。そちらの方が、住まいとしてはまだましだと考えたのです。ところが、エドワードは過労により倒れてしまいます。一家を助けるため、親しい聖徒であったウィリアム・ローとジェーン・ローは、エミリーときょうだいたちを自宅に迎え入れ、健康が回復するまで看病しました。

エドワードは何日も寝たきりとなり、ハリエツトの死後わずか1週間半で他界します。エミリーは二人の死を深く悲しみました。エミリーは生前ハリエツトと仲が良く、また父が、家族と教会を養うためにすべてを犠牲にしたことを知っていました。不満を持つ聖徒や信仰を失った離反者、敵対する隣人に悩まされても、父の態度が変わることはありませんでした。²

やがて、エミリーは病と悲しみの霧から逃れましたが、その生活は一変してしまいます。貧窮した家族を養うため、エミリーと19歳の姉エライザは、仕事を見つけなければならなかったのです。手に職のあったエライザは裁縫師として雇ってもらいましたが、エミリーには働き口がありません。もちろん、皿を洗う、床を掃く、磨くといった家事はできましたが、それは地域の大半の人にもできることです。³

幸い、聖徒たちは、彼女の父がどれほど教会のために犠牲を払ったかを忘れてはいませんでした。*Times and Seasons*（「タイムズ・アンド・シーズンズ」）という聖徒の新たな新聞に掲載されたパートリッジビショップの追悼記事には、「彼ほど教会員の信頼を得た人はいなかった」と書かれてありました。「宗教は彼のすべてであった。彼は宗教のために生き、人生をささげた。」⁴

パートリッジビショップの追悼、また家族への献身を称え、聖徒たちはビショップが建て始めた家を完成させ、家族が自宅と呼べる場所を持てるようにしたのです。⁵

1840年の春には、ミシシッピ川を擁する新たな市が順調な始まりを見せていました。聖徒たちは溝や用水路を掘って川沿いの沼地の水はけを良くし、より快適に暮らせるように土地を改良します。道路の建設を計画し、基礎を築き、家の骨組みを作り、庭に種をまき、畑を耕しました。6月までには250軒ほどの新たな家が建ち、聖徒たちの懸命な働きの証となりました。⁶

コマースという名称に満足していなかったジョセフは、到着後間もなく、その地をノーブーと命名します。大管長会の宣言の中で、このように説明しています。「わたしたちの市の名称はヘブライ語に起源があり、美しい状態または場所を意味します。また、安息という意味も含んでいます。」⁷ジョセフは、ノーブーがその名前のおりの場所となり、何年かにわたる争いから聖徒が解放されることを願いました。

しかしながら、平和と休息が容易には訪れないことをジョセフは承知していました。オハイオ州とミズーリ州で経験した反対や迫害を避けるため、聖徒たちは互いのきずなを強め、隣人と永続する友情を育む必要があったのです。⁸

このころ、ジョセフはウィリアム・フェルプスから一通の手紙を受け取ります。ウィリアム・フェルプスは教会を捨て、ミズーリ州の裁判所でジョセフに不利な証言をした後、オハイオ州に移り住んでいました。ウィリアムはこのように記しています。「わたしは自分の置かれている状況を知っています。あなたも、神もそれを御存じです。もし友人たちが助けてくれるなら、わたしは救いを得たいのです。」⁹

その欠点にもかかわらず、ウィリアムが誠実であることを知っていたジョセフは、間もなくこのように返事をしたためました。「あなたの行動のために、わたしたちが大きな苦しみを受けたのは確かです。しかし、杯はすでに飲み干され、天の御父の御心が行われました。そして、わたしたちは今なお生きています。」ジョセフはミズーリ州での暗い日々を喜んで忘れ、ウィリアムを赦し、再び教会の中で働けるようにしました。

ジョセフはこのように綴っています。「さあ、愛する兄弟、戻って来てください。戦いは終わったのです。初めに友であった者たちが、ついに再び友となったのですから。」¹⁰

ジョセフはまた、聖徒たちにさらなる霊的な導きをもたらす必要に迫られていることを感じていました。リバティーの監獄において、その寿命が知られていると主から告げられたジョセフは、自分は40歳まで生きるとは思わないと友人に打ち明けていました。ジョセフは手遅れになる前に、神から明らかにされた事柄を聖徒たちに教える必要があったのです。¹¹

しかしながら、ジョセフは町の建設と教会の物質的な問題への対処にほとんどの時間を費やしていました。それまでジョセフは、教会が抱える問題に終始積極的に携わり、長らくパーティリッジビショップのような人々に頼りながら重荷を負ってきました。エドワードが亡くなった今、ジョセフはニューエル・ホイットニービショップや、ノーブーで召されたそのほかのビショップたち

の力を借りるようになっていました。それでもジョセフは、霊的な教導の業に焦点を当てられるよう、物質面において教会の運営を導くうえで、さらなる助けを必要としていたのです。¹²

その後間もなくして、ジョセフはもう一通の手紙を受け取ります。今回は、ジョン・クック・ベネットという名の見知らぬ人からでした。ジョンは、ノーブーに越して教会に加わり、聖徒に奉仕するつもりだと述べていました。ジョンは医者としてイリノイ州軍の高官を務めており、牧師や教授の職に就いていたこともあります。「あなたのそばにいられば、さらに幸いです。すぐにお返事をいただきたい」と綴られていました。¹³

その後数日のうちに、ジョセフはジョンからさらに2通の手紙を受け取ります。「わたしが力になります」とジョンは約束しました。「あなたの同胞がわたしの仲間になり、あなたの神がわたしの神になる日が間もなく来るようにと望んでいます。」ジョンはジョセフに、自分の演説の腕前と不屈の精力は、聖徒にとって貴重な財産になると伝えました。¹⁴

さらに、このように主張します。「あなたとともに歩みたいという望みは日々募るばかりです。あなたが良しとされるなら、わたしは仕事を直ちに片付け、あなたの幸せに満ちた住まいへ向かしましょう。」¹⁵

ジョセフは、ジョンのような資質を持った人物が聖徒に加わることを望んでいるという事実を励まされながら、手紙を読み返しました。彼のように能力を持ち合わせた者がいれば、イリノイ州に教会を確立するうえで役立つに違いありません。

ジョセフは、ジョンにこのように書き送りました。「このような時節にこちらへ来て、神の民とともに苦難を味わっていただければ、わたしはだれよりも喜び、あなたを心から歓迎しましょう。」¹⁶

ノーブーが形になっていくと、ジョセフの心は聖徒たちの集合に向けられます。そのころイギリスでは、海を越えてノーブーへ向かうよう、使徒たちが41人から成る聖徒の一行を遣わしたばかりでした。ジョセフは、その後の数か月、数年間で、さらなる一団を迎えるものと期待していました。

「ここは、主たる集合の地である」と、ジョセフは7月の説教で宣言します。「だれでも望むものはここへ来て、ノーブーの貧困を自由にとともにすることができるのです。」

ジョセフは、ミズーリを追われ、政府への請願が失敗に終わったことで、大勢の人々がシオンと集合の今後に不安を抱いていることを承知していました。ジョセフが望んでいたのは、シオンとは、ジャクソン郡のわずかな土地以上のものであると聖徒たちが理解することです。「聖徒の集う場所こそ、シオンである」とジョセフは宣言しました。

主は今や、ノーブーと周辺地域にステークを確立するよう命じておられるのです。やがてさらに多くの聖徒がシオンに集まれば、教会はさらなるステークを組織し、主はその地を祝福してくださいでしょう。

ジョセフは説教を終える前、このように発表しました。「教会が支えてくれるのなら、わたしはソロモンの神殿のように、見事な神殿を建てる義務を自分自身に課しましょう。」ジョセフは腕を伸ばし、絶壁の上の場所を指さしました。聖徒はそこに、神聖な建造物を築くのです。ジョセフは希望を込めて語りました。「もし神の御心により生き長らえて、完成した神殿を目にすることができるならば、わたしは言うでしょう。『おお、主よ、これで十分です。主よ、あなたの僕を安らかに行かせてください』と。」¹⁷

数週間後、ノーブーで高い気温が続き、病がさらなる人々の命を奪う中、ジョセフの友人、シーモア・ブランソンが他界します。¹⁸ 葬儀において、ジョセフはシーモアの妻ハリエットと、集つ

ていた何千人もの聖徒に慰めの言葉をかけました。話をしていると、息子のサイラスを10代で失くしたジェーン・ネイマンが目にとまりました。サイラスはバプテスマを受ける前に亡くなっていたのです。

ジェーンが息子の魂の福利について心配しているのを知っていたジョセフは、自身の兄アルピンのように、バプテスマを受けることなく亡くなった人々の救いについて、主から受けた教えを話すことにしました。¹⁹

ジョセフは聖書を開くと、使徒パウロがコリント人に向けて書いた言葉を読みました。「そうでないとすれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらないとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。」²⁰パウロの言葉は、生者が死者のために身代わりでバプテスマを受けられることの証拠であると言います。そうして、肉体が死んでも霊はなお生き続けている人々が、バプテスマの恩恵を受けられるようになるのです。

神の救いの計画は、神の律法に進んで従うすべての人を救うために定められており、中にはイエス・キリストやその教えを知ることなく亡くなった無数の人々も含まれる、とジョセフは述べました。²¹

説教が終わって間もなく、ジェーンは教会の長老とともに川へ行き、サイラスの代わりにバプテスマを受けます。その晩、バプテスマのことを耳にしたジョセフは、長老がその儀式の際にどのような言葉を用いたかと尋ねました。使われた言葉をありのまま伝えられたジョセフは、その長老がバプテスマを正しく執行したことを確認したのです。²²

1840年9月、ジョン・ベネットがノーブーに到着すると、ジョセフはノーブーと教会の法的、政治的な問題への対処について熱心に助言を求めました。ジョンは預言者と同じくらいの年齢でしたが、預言者よりも教養のある人物でした。白髪交じりの黒髪に黒い目、細身で背が低い、端正な顔立ちの男性です。ジョンはすぐにバプテスマを受け入れました。²³

ルーシー・スミスは、病弱な夫が人気者の転入者に注目していることを非常に気にかけていました。パートリッジビショップと同様、ジョセフ・シニアも病の身でミズーリ州を出発し、ノーブーの厳しい夏の気候のために、さらに健康を害していたのです。ルーシーは夫がいずれ快復することを望んでいましたが、ある日吐血した夫を見て、その死が近いのではないかと恐れていました。

ジョセフとハイラムは父の容体が悪化していることを知り、その病床に駆けつけます。²⁴

ジョセフが父に付き添う間、ルーシーは家族の残りの人々に知らせを送りました。ジョセフは父に、死者のためのバプテスマと、それが神のすべての子供にもたらす祝福について伝えました。ジョセフ・シニアは喜びに満たされ、アルビンのために儀式を執行するよう懇願します。

間もなく、ルーシーはほとんどすべての子供たちとともに、夫のベッドを囲みました。ジョセフ・シニアは、語る力がまだあるうちに、別れの祝福をそれぞれの子供に授けることを望みます。ジョセフの番になると、ジョセフ・シニアは息子の頭に手を置いて、このように言いました。

「いつまでも忠実でありなさい。そうすればあなたは祝福を受け、あなたの後の子孫も祝福を受けるでしょう。あなたは自分の業を終えるまで生き長らえるのです。」

ジョセフは叫びました。「おお、父さん、そうなのですか。」

「そうだ、確かに」と祝福師は言いました。「あなたの成すべき業として神から与えられている、すべての業の計画を整えるのです。」

ジョセフ・シニアは子供たちに祝福を受け終わると、ルーシーの方を向きました。「母さん、あなたはこの世で最も特別な女性の一人だ。」

ルーシーはその言葉を受け入れようとしませんでした。夫はさらに言葉を続けました。「同時に死ぬたらいいと常々思っていたが、わたしが死んでも、死にたいなどと願ってはいけないよ。わたしが逝ったら、君はここに残って子供たちを慰めなければならないからね。」

少し間を置いた後、ジョセフ・シニアは叫びました。「アルビンが見える。」そうして手を組むと、呼吸が次第に遅く、息はますます短くなり、ジョセフ・シニアは静かに息を引き取ったのでした。²⁵

ジョセフ・シニアの死の数週間後、聖徒たちは1840年10月の総大会のためにノーブーに集まりました。ジョセフは死者のためのバプテスマについてさらに教えを説き、死者の霊は、生存している親族が自分の身代わりに救いの儀式を受けるのを待っていると説明します。²⁶

総大会の部会と部会の間、聖徒たちはミシシッピ川へと急ぎました。そこには数人の長老が腰まで水に浸かった状態で立っており、亡くなった祖父母や父、母、きょうだい、子供のためにバプテスマを受けるよう手招きしています。間もなく、ハイラムは兄アルビンのためにバプテスマを受けました。²⁷

バイレート・キンボールは川に立つ長老を眺めながら、10年以上前に亡くなった母のためにバプテスマを受けたいと切に

願いました。ヒーバーに、イギリスから帰って儀式を執行してほしいと思いましたが、ジョセフは聖徒たちに、できるだけ早く死者を贖うよう強く勧めていたため、母親のためにすぐさまバプテスマを受けることにします。²⁸

エマ・スミスもまた、家族に思いをはせていました。父のアイザック・ヘイルは、1839年1月に亡くなっています。エマやジョセフと和解することはありませんでした。亡くなる数年前、ジョセフを非難し、モルモン書を「偽りと悪に満ちたでっちあげ」と述べた自身の手紙の出版を、教会の批判者に許可したほどです。²⁹

それでも父を愛していたエマは、川で父のためにバプテスマを受けました。³⁰父が回復された福音をこの世で受け入れることはありませんでしたが、永遠にそのままではないという望みを、エマは抱いていたのです。

その年の秋、ジョセフとジョン・ベネットはノーブーにおける憲章の草案を作成します。その文書は、聖徒が自らを治め、ミズーリ州で彼らを苦しめたような様々な不当行為から身を守ることができるよう、聖徒に可能なかぎりの自由を与えるべく意図されていました。もし州議会が憲章を承認すれば、ノーブー市民は市の法律を自ら通過させ、地元の裁判を運営し、大学を設立し、市民軍を組織することができるようになります。³¹

教会に関するジョセフの計画も、膨らみ続けました。さらなる聖徒が集まることを予期し、預言者はノーブー近隣の新たな開拓地に幾つかのステークを設立します。また、エルサレムをアブラハムの子孫の集合の地として奉獻するため、オーソン・ハイドとジョン・ページをパレスチナへの伝道に召しました。パレスチ

ナに行く際、使徒たちはヨーロッパを横断する必要があり、そうすれば多くの町で福音を宣べ伝える機会を得られます。³²

ジョセフと大管長会はこう宣言しました。「あらゆる地、あらゆる国から、あらゆる言語、国語の民、あらゆる皮膚の色の人々がこの地に押し寄せ、主の聖なる神殿で、わたしたちとともに万軍の主を礼拝する日がやがて訪れるでしょう。」³³

12月の初旬、ジョン・ベネットは、ノーブー憲章を承認するようというイリノイ州議会への働きかけに成功し、聖徒は市にまつわる計画を実行する権限を与えられます。ジョンが勝利のうちにノーブーへ戻ると、ジョセフは事あるごとに彼を称賛しました。³⁴

1か月あまりが経過した1841年1月19日、主は聖徒に新たな啓示を授けられます。主は、エドワード・パートリッジとジョセフ・スミス・シニアを確かにみもとに迎え入れたこと、またクルクト川の戦いで殺されたデビッド・パッテンも同様であると告げられました。ハイラム・スミスは父の後継として教会の祝福師に召され、ジョセフとともに預言者、聖見者、啓示者として奉仕するよう指名され、オリバー・カウドリが一時教会で果たしていた役職を担うこととなります。³⁵

さらに主はジョン・ベネットに、ジョセフの傍らに在りよう、聖徒を代表し、教会外の人々に対して引き続き語るよう指示し、義にかなった働きを条件に祝福を約束されました。「彼は勧告を受け入れるならば、報いを失うことはないであろう」と主は宣言されます。「わたしは彼が行ってきたことを見た。彼がそれを続けるならば、わたしは彼の行いを受け入れ〔よう〕。」³⁶

主は、ジャクソン郡にシオンを建設するべく払われた聖徒の過去の努力を受け入れられましたが、今後はノーブーを築き上げ、さらに多くのステークを確立するように、またノーブーハウス

と呼ばれる宿を建設し、旅人が休息を取り、神の言葉とシオンの栄光について熟考する場を提供するよう指示されました。³⁷

最も重要なことに、主は新たな神殿を建設するよう聖徒たちに命じられます。主はこのように宣言されました。「わたしの名のためにこの家を建てて、わたしがそこで民に儀式を示すことができるようにしなさい。」³⁸

死者のためのバプテスマは、これらの儀式の一つでした。これまで、主はミシシッピ川でバプテスマを行うことを許しておられましたが、神殿内に特別なバプテスマフォントを奉獻するまでの間は、儀式を中止するよう命じられました。「この儀式はわたしの家に属するものであ[る]」と、主は宣言されます。³⁹

そのほかの神殿儀式と靈感あふれる新たな真理は、追って告げられることになりました。主はこのように約束しておられます。「わたしは創世の前から隠されてきたこと、すなわち時満ちる神権時代に関することを、わたしの教会に示そうと思うからである。わたしはこの家に関するすべてのことと、その神権と、これを建てる場所をわたしの僕ジョセフに示そう。」⁴⁰

主は、聖徒の勤勉さと従順に対する報いを約束し、力を尽くして神殿建設のために働くよう強く勧められました。このように命じておられます。「わたしの名のためにまことにこの場所に一つの家を建てて、わたしから命じられるすべてのことに忠実であることを身をもって示し、…… わたしがあなたがたを祝福し、あなたがたに誉れと不死不滅と永遠の命を冠として与えることができるようにしなさい。」⁴¹

新しい年が明け、聖徒には明るい将来が待ち受けているかのようでした。1841年2月1日、ジョン・ベネットはノーブー市長に選出され、市裁判所の裁判長にも就任しました。さらに、新たに創設された大学の総長、市民軍しょうしょうの少将、大管長会顧問補佐を務めることとなります。⁴² ジョセフをはじめとする教会指導者は、

ジョンが市を導いて立派なものとする手腕を持っていると確信していました。

ジョンの権能と責任が拡大するにつれ、エマは、ジョンが聖徒を大いに助けてきたことを否定できなくなりました。それでもエマは、ほかの聖徒のようにジョンに好意を持つことはできませんでした。ジョンは横柄な将校のごとく町をかつ歩^ほし、ジョセフに良い印象を与えようとするとき以外は、常に自分のことに没頭し、思いやりに欠けている、エマはそう感じていました。

多才で有用な人物であるにもかかわらず、ジョン・ベネットの何かが、エマを不安にさせていたのです。⁴³



彼らをこの地に集め

1841年春、メアリー・アン・デービスが夫の顔に最後にもう一度目をやると、棺の蓋が閉められ、その亡骸は、夫の友人たちの手でイギリス、ティリーにある教会墓地の片隅へと運ばれていきました。ジョン・デービスは、わずか25歳、人生の真つ盛りに亡くなりました。男性たちが夫の棺を運び去ってしまうのを見ていたメアリーは、突然孤独を感じました。黒い喪服に身を包んでたたずむ彼女は、今やその村でたった一人の末日聖徒なのです。

ジョンが亡くなったのは、信仰のゆえでした。ジョンとメアリーはその1年前、聖徒たちの集会で出会いました。ウィルフォード・ウッドラフが、近くのヘレフォードシャーにおいて、同胞教会の会員数百人にバプテスマを施してから間もないころのことです。メアリーもジョンも、同胞教会で礼拝したことはありませんでしたが、回復された福音はその地域に瞬く間に広がり、多くの人々の関心を集めていました。¹

メアリーとジョンは、その地域に集会所を設立したいと望む宣教師たちに自宅を開放するようになります。イギリス伝道部の発展は目覚ましく、わずか4年後、イギリスとスコットランドには6,000人を超える聖徒がいました。²様々な教会の説教師が街頭で教えを説き、魂の救いのためにしのぎを削るロンドンにおいてすら、宣教師たちは40人前後の聖徒たちが集う支部を建てたのです。その支部を率いたのは、ロレンゾ・スノーという若きアメリカ人の長老でした。³

しかし、依然として国内に強い反対勢力があることには、変わりはありません。たいていの町では安価なパンフレットがばらまかれ、あらゆる類の宗教概念が説かれていたのです。⁴中には、アメリカ合衆国から持ち込まれた反モルモンのチラシを増刷したものもあり、末日聖徒に対する警戒を呼びかけていました。⁵

誤った内容を正したいと思ったパーリー・プラットは、自分でパンフレットを書くようになり、月刊新聞である *Latter-day Saints' Millennial Star* (「末日聖徒のミレニアルスター」) の編集を始めました。ノーブーとイギリス全土における聖徒たちの情報を載せた新聞です。ブリガム・ヤングも、賛美歌とモルモン書をイギリスの聖徒たちのために印刷する手配を整えました。⁶

ティリーでは、自宅で宣教師たちが教えを説き始めるやいなや、メアリーとジョンに敵意が向けられるようになります。荒くれ者が集会に乱入し、宣教師を追い払うことも度々でした。とうとうある日、男たちはジョンを床に殴り倒して容赦なく蹴りつけました。このときに負った怪我から、ジョンが回復することはありませんでした。その後間もなく、転倒したジョンは、打ち所が悪かったためにかっけつ 咯血してしまいます。宣教師たちは敵意を抱く近隣住民からの妨害を受け、この夫婦を見舞うことすらできません

でした。ジョンはベッドから起き上がることなく衰弱していき、ついに息を引き取ります。

葬儀が終わると、メアリーはノーブーへの集合の旅に加わることを決意しました。少し前のこと、ブリガム・ヤングとヒーバー・キンボールを含む数人の使徒たちが、春に帰国し、その際にイギリスの聖徒たちを大挙して連れて行くと発表していたのです。メアリーは、比較的少数の聖徒の一団とともに、間もなく北アメリカに向けて旅立つことにしました。

家族でただ一人の教会員であったメアリーは、親きょうだいのもとに別れを告げに行きます。反対されるだろうと思っていた父親からは、いつ、どの船で発つのかと聞かれたただけでした。

港町ブリistolに向けて出発した日、メアリーは悲しみに打ちひしがれました。ほんの数か月前にジョンと結婚式を挙げた教会を通り過ぎると、挙式以来起こった出来事が次々と思い出されたのです。

24歳にして夫を亡くしたメアリーは、独り身で新天地に向かい、神の民とともに運命をたどることにしたのでした。⁷

一方ノーブーでは、新聞編集者であるトーマス・シャープが壇上でジョセフ・スミスの横に腰かけ、集まった数千人の聖徒たちを見渡していました。1841年4月6日、教会設立11周年を迎える、総大会の第1日目のことです。吹奏楽団が演奏を始めると、群衆のざわめきがかき消されました。間もなく、新たな神殿の隅石が置かれ、この大切な日を記念する聖徒たちの式典が始まります。

トーマスは教会員ではありませんでしたが、その日を聖徒たちとともに過ごすようにと、ノーブー市長のジョン・ベネットから招かれていました。⁸理由は容易に推測できました。トーマスは

新聞の編集者ですから、わずかな言葉で物事の評判を高めることも貶めることもできます。そこで、彼は将来協力者になり得る人物としてノーブーに呼ばれたのでした。

聖徒たちと同様、トーマスにとって、そこは不慣れな土地でした。23歳にも満たないトーマスは、弁護士として働く目的で、その前年に西部へやって来ており、ノーブーから南に1日ほど行ったウォーソーの町に居を構えていました。彼は到着から数か月のうちに、その郡で唯一の非モルモン系新聞の編集者となり、文章に力があるともっばらの評判になったのです。⁹

トーマスは聖徒たちの教えには興味がなく、信仰に対する彼らの献身的な態度に多少感銘を受けていただけでした。¹⁰しかし、その日の行事に強烈な印象を受けたことは認めざるを得ませんでした。

耳をつんざくような号砲が一斉に響きわたると、ノーブー部隊という名の、650人の男性から成る市民軍の行進が始まりました。陸軍士官の金の肩章けんしょうを付け、パリッとした青い軍服に身を包んだジョセフ・スミスとジョン・ベネットが、部隊を先導します。一行は町中を行進し、丘を登り、掘ったばかりの神殿の土台まで向かいます。聖徒たちはトーマスに敬意を払い、ジョセフと補佐官からさほど遠くない隊列の先頭近くに席を用意しました。¹¹

定礎式は、シドニー・リグドンによる信仰を鼓舞する話で始まりました。1時間にわたり、神殿を建てるべくそれまでに聖徒たちが払った労苦と努力について語ったのです。話が終わるとジョセフが立ち上がり、作業員たちに指示して土台の南東の隅に巨大な石を降ろさせると、こう宣言しました。

「大管長会を表すこの隅の頭石は、今、偉大なる神を拝してしっかりと据えられました。これは、聖徒たちに神を礼拝する場があり、人の子に枕する所があるようにするためです。」¹²

神聖な式典が終わると、ジョセフはトーマスをはじめとする来賓たちを自宅に招き、七面鳥の晩餐でもてなしました。ジョセフは、彼らがノーブーで歓迎されていることを知ってもらいたかったのです。信仰を異にしている、せめてもてなしの心は受け入れてもらえればと思っていました。¹³

トーマスが定礎式に関する好意的な記事を翌日の新聞に載せてくれたことを知り、ジョセフは喜びます。教会が組織されて以来初めて、重要な場所において近隣の人々からの同意と、行政の支援、味方を得たような気がしました。¹⁴

ジョセフはノーブーでの友好と平和の時をうれしく思う一方、たとえ聖徒たちの信仰が試されることになろうとも、主がすべての戒めに従うよう自分に望んでおられることを知っていました。そして、多妻結婚ほど大きな試練となる戒めはなかったのです。¹⁵

ジョセフは結婚と家族が神の計画の中心であることを、啓示を通して理解していました。主は預言者エリヤをカートランド神殿に遣わし、鎖の輪のように数々の世代を結び固める神権の鍵を回復されました。主の指示の下、夫婦はこの世から永遠にわたって結び固められることを、ジョセフはさらに多くの聖徒たちに教え始めます。この結び固めによって、人はアブラハムの祝福を受け継ぐ者となり、御自分の子供たちに対する神の永遠の計画を成し遂げられるようになるのです。¹⁶

モルモン書の預言者ヤコブは、神が多妻結婚を命じられないかぎり、どの男性も「妻は一人しか持つてはならない」と教えています。¹⁷アブラハムとサラの物語から分かるように、さらに多くの人々に永遠の祝福を与え、主のために聖約の民を起す方法として、神は時として御自分に忠実に従う者に多妻結婚を命じら

れることがありました。アブラハムにとってハガルとの結婚は試練でしたが、その結果として子孫が生まれ、偉大な国民がもたらされたのです。多妻結婚は同様に、それを実践する聖徒たちにとって試練になると思われましたが、従順に従い犠牲を払う者に、主は昇栄を約束されました。¹⁸

カートランドを出てから数年は困難な状況が続いたため、ジョセフは当時、多妻結婚について聖徒たちに話しませんでした。しかし、ノーブーでは状況が異なります。聖徒たちはついに、ある程度平和で安定した生活が営めるようになったのです。

ジョセフはまた、アメリカ合衆国憲法に希望を抱いていました。信教の自由を守る内容だったからです。その年の早い時期に、ノーブー市議会はこの権利を認めました。ノーブーにおいて、すべての宗教団体が自由に礼拝することを許可すると謳う条例を可決したのです。この条例は、キリスト教徒にも非キリスト教徒にも同じように適用されました。ノーブーにはイスラム教徒がいなかったにもかかわらず、この条例には、時に一夫多妻を実践するイスラム教徒の権利を守ることまで具体的に記してあったのです。¹⁹ 首都において、ジョセフは政治家に失望しましたが、神の御心に従って生きる権利を保護してくれるアメリカ共和制の原則を信じ、それに信頼を寄せていました。²⁰

それでもなお、多妻結婚の実施が人々に衝撃をもたらすことが分かっていたジョセフは、それを公に教えることをためらっていませんでした。通常とは異なる婚姻形態を提唱する宗教団体や、理想都市を目指す共同体は存在したものの、聖徒たちはこれまで常に一夫一婦制を説いていました。多くのアメリカ人と同様、たいのみの聖徒たちは、多妻結婚というと、自分たちよりも文明の遅れた社会を連想したのです。

ジョセフ自身は、多妻結婚に対する自分自身の見解や、この戒めに従うことへの葛藤に関する記録を残していません。エマ

も、この戒めについていつ知ったのか、それが自分たちの結婚生活にどのような影響をもたらしたかについて、何も明らかにしていないのです。しかし、二人に近い人々の残した記録を見ると、それが双方にとって苦悩の源であったことは明白です。

危険を伴い、また自分自身ためらいがあるにもかかわらず、ジョセフはこれについて早く聖徒たちに教えなければならないと感じていました。この原則を忠実な男女に密かに伝えるならば、強力な支持を得て、公に教えられるようになる時に向けた備えができるかもしれません。多妻結婚を受け入れるうえで、人々は偏見を乗り越え、社会的な慣習を見直す必要があるでしょう。伝統にそぐわないことを神が命じられる際には、信仰を大いに行使して神に従うことが求められたのです。²¹

1840年の秋ごろ、ジョセフは、25歳のルーザ・ビーマンに多妻結婚について話すことから始めました。ルーザの家族は、最初にモルモン書を信じて回復された福音を信奉するようになった家族の中に数えられます。ルーザは両親の死後、姉メアリーとその夫ベイツ・ノーブルとともにノーブーに移って来ました。ベイツは、イスラエルの陣営に参加した経歴を持つ退役軍人です。²²

ジョセフが多妻結婚についてルーザと話す間、ベイツはその場にいました。²³「あなたにこれを明らかにしたということは、わたしの命をあなたの手に託したということなのですよ」と、ジョセフはベイツに言いました。「間違っても、わたしを裏切って敵に寝返るようなことのないようにしてくださいね。」²⁴

ほどなくして、ジョセフはルーザに結婚を申し込みました。この申し出にどうこたえたのか、いつ、どのような理由でそれを受け入れたのかについて、ルーザは何も記録を残していません。1841年4月5日、総大会前日の夕方、ジョセフは儀式のためにルーザとベイツに会います。ベイツはジョセフから権能を受け

て二人を結び固め、ジョセフが語る儀式の言葉を、そのとおりに繰り返したのです。²⁵

その年の夏、ジョン・ベネットが郡の裁判所の要職に就くことになると、聖徒たちは歓喜します。一方、郡には憤慨した人々もいました。聖徒たちが政治的権力を増していくことを恐れたのです。彼らはジョンの要職への抜擢を、聖徒たちの票を勝ち取るための政敵の画策だと考えました。²⁶

敵対政党の党員であったトーマス・シャープは、その職に就くジョンの資質について、公に疑問を呈しました。ジョンの評判にも、そのころジョンの受けたバプテスマが本心からのものであったかどうかについても、疑問を投げかけたのです。新聞の社説において、彼はジョンの就任に異議を唱えるよう市民に呼びかけます。²⁷

トーマスはまた、その地域に集まって来ていた何百人ものイギリスの聖徒たちの中にくすぶる不満についても、誇張した報告を書きました。「その多くは、教会を離れる決心をしている」と記したのです。「この教会の町における悲惨な状況を伝え、移民を計画している友人たちに警告を与える手紙が、イギリスに何通も送られている。」彼らの不満の核となるのは預言者の使命に対する不信感であると、ジョンは主張します。²⁸

社説を読んで激怒したジョセフは、手紙を口述させてトーマスに送り、その内容の撤回を求めました。

拜啓——わたしは購読をやめるつもりです。わたしの顔に泥を塗ることを目的とした内容の、汚らわしい記事売り物にしているからです。虚偽の記事を載せる、薄っぺらで悪の根源のような新聞に将来性はありませ

ん。これは、多少なりとも倫理観のある人にとって、侮辱的な新聞です。

軽蔑を込めて、敬具
ジョセフ・スミス

追伸——どうか、上記の文を貴殿の卑劣な新聞
に掲載してください。²⁹

憤ったトーマスは、ジョセフの預言者としての召しをあざける内容の注釈を添えて、この手紙を次号の新聞に掲載します。聖徒たちを打ちのめすために新聞を利用していると、トーマスを非難する者もいました。³⁰そのためトーマスは、聖徒たちは台頭しつつある政治的脅威であって、郡のほかの市民の権利を脅かしているという自身の見解を読者に広めようとしています。

トーマスはその証拠として、そのころジョセフが発表した宣言を再印刷しました。聖徒はどこにしようと集合し、ノーブーを建設するようと呼びかける内容です。「ジョセフの意思が彼らの法令となるのであれば、あなたがたの大切な権利と貴い特権はどうなるのか。いや、どうなってしまうのだろうか。」トーマスはこう綴り、読者に警告を与えています。³¹

トーマスの批判が激しくなるにつれ、聖徒に敵対する者が郡内に増えることをジョセフは懸念しました。³²神殿の隅石が据えられ、イギリスから移民たちが海路はるばるやって来るというのに、これほど多くの事柄が危機に瀕していたのです。聖徒たちは、インディペンデンスやファーウエストを失ったように、ノーブーを手放すわけにはいきませんでした。

イギリス南西部にあるブリストル港のにぎやかな埠頭^{ふとう}では、大小の帆船がひしめき合っていました。³³北アメリカ行きの船に乗

り込んだメアリー・アン・デービスが船内を見ると、ベッドは清潔で、ノミなどいそうにもありません。メアリーもほかの乗客も、ベッド脇に置く手荷物はトランクーつしか許可されておらず、そのほかの身の回り品は預けなければなりませんでした。

船荷の積み込みが完了するまでの1週間、メアリーはブリストルに滞在することとなります。プライバシーのため、メアリーもほかの乗客も、隣のベッドとの間にカーテンを吊るし、広い部屋を小さな区画に分けていました。乗客は路地を歩き回り、ブリストルの景色や雰囲気を楽しんでいます。

メアリーは、そのうち両親が見送りに来てくれるのを待ち望んでいました。そうでなければなぜ、父は船の名前と出航する港を知ろうとしたのでしょうか。

しかし、両親はまったく姿を見せませんでした。その代わり、弁護士たちが毎日船を訪れるようになります。メアリーの出発を阻止しようと父親が雇った弁護士でした。夫を亡くした、黒い瞳に喪服姿の若い女性について、聞き込みをしています。メアリーは失望したものの、シオンに集合する決意は揺るがず、喪服をしまい込むと、船にいるほかの若い女性たちと同じような服装に着替えたのでした。

船は間もなく、カナダに向けて出航します。2か月後、上陸を果たしたメアリーとほかの隊員たちは、蒸気船、列車、運河船を乗り継いで南へと旅を進め、カートランド近辺の港に到着しました。聖徒たちに会うことを心待ちにしていたメアリーと友人たちは、町に向かって進みます。そこではウィリアム・フェルプスが、教会の小さな支部を率っていました。³⁴

カートランドには、かつての姿がまったく見受けられません。毎週日曜日、神殿で集会を開いていたウィリアムは、説教壇によく独りで腰かけていました。会衆に混ざったメアリーは、荒れ果ててしまったかのような神殿に思いをはせます。

数週間後、イギリスの聖徒たちの別の隊が、カートランドに到着しました。隊の一員であるピーター・モーガンは、休みなく進む計画で、蒸気船に乗って五大湖を横切り、シカゴに到着すると、陸路ノーブーへと向かう予定です。メアリーと何人かの聖徒たちは、早く旅を終わらせたいとの思いから、モーガンと6人の幼い子供たちの一行に加わりました。³⁵

ノーブーへの道すがら、メアリーとピーターは親しくなります。モーガンは、イギリス北西部の鉛鉱えんこうで働いていました。妻のルースは、家族で移民を計画する少し前、出産時に亡くなっています。イギリスにとどまることも考えましたが、ピーターはブリガム・ヤングの話聞き、ノーブーに行くべきことを確信したのでした。³⁶

メアリーはノーブーに着くと、イギリスから来た友人たちを捜します。通りを歩いていると、樽の上に立って宣教している人がいたので、足を止めて話に耳を傾けました。教えを説いていたのは陽気な男性で、その分かりやすい説教が小さな群衆の心を捉えているようです。彼は時折身を乗り出すと、目の前にいる長身の男性の両肩に、まるで机にもたれかかるかのように手を置きました。

メアリーには、この男性がジョセフ・スミスだということがすぐに分かりました。5か月にわたる旅の末、メアリーはついに、神の預言者を目の前にして聖徒の中に立っていたのです。³⁷

そのころ地球の裏側では、初めてエルサレムを目にしたオーソン・ハイドが感慨にふけっていました。古代の都市が、谷に囲まれた丘の頂上に、分厚い塀に囲まれて建っているのです。町の西門に近づくと、旅に疲れたオーソンの目に、その塀と、奥にそびえ立つ塔が映りました。³⁸

オーソンはジョン・ページとともにエルサレムを訪れたいと思っていましたが、合衆国を発つ前、ジョンは家に帰ってしまいます。独りで旅立ったオーソンは、イギリスを通してヨーロッパを横切り、大陸の大都市を幾つも目にしながら進みました。そうして南東のコンスタンチノーブルに向かうと、蒸気船を捕まえ、沿海都市ヤッファまで向かいました。そこでイギリス紳士たちと重武装の僕たちに出会ったオーソンは、その一行とともにエルサレムに行けるよう話を取りつけたのです。

その後の数日にわたり、オーソンはほこりの舞うエルサレムのでこぼこ道を行き巡り、町の宗教指導者や政府の指導者と会合を持ちました。エルサレムには一万人前後の人が暮らしており、そのほとんどはアラビア語を母語としています。さびれた町には、数世紀にわたる紛争と手入れの不行き届きのために、がれきと化した地域が幾つもありました。

それでもオーソンは、聖書で読んだことのある場所を訪れ、エルサレムとその聖なる歴史に対する感嘆の念を抱きます。救い主のたとえに出てくる日々の営みを人々が行っている光景を目にすると、イエスがおられた時代に自分がいる様子を思い浮かべました。ゲツセマネでは、オリーブの木から小枝をもぎ、贖罪について思い巡らせます。³⁹

1841年10月24日、オーソンは日の出前に起きると、十字架につけられる前夜にイエスが歩かれた場所近くの坂道を下って行きました。オリブ山に登り、振り返って谷の向こう側のエルサレムに目を向けると、壮大な「岩のドーム」が、救い主のおられた時代の神殿跡地近くにそびえ立っているのが見えました。⁴⁰

再臨前、アブラハムの子孫の幾人かがエルサレムに集合するという主の約束を知っていた使徒オーソンは、腰を下ろすと祈りの言葉を書きました。散らされたイスラエルの残りの者たちを、彼らの約束の地に導いてくださるよう神に願ったのです。⁴¹

「御言葉のとおり、彼らをこの地に集めてください。彼らを雲のように、窓辺に群がる鳩のように来させてください。」

オーソンは祈り終わると、その地に石を積み上げました。谷を渡って戻って来ると、シオンの山にさらに多くの石を積み上げ、自らの使命を果たしたことの簡素な記念としたのです。そうしてオーソンは、家へと戻る長い旅路に就いたのでした。⁴²



これによって彼らを試し

1842年1月5日、ノーブーに店を開いたジョセフは、多くの客を明るく迎え入れていました。「わたしは聖徒たちに仕え、すべての人の僕になるのが大好きなのです」と、ジョセフは友人に書き送っています。「そして、主がふさわしいと思われるときに昇栄することを願っています。」¹

昇栄の教義は、ジョセフの心に重くのしかかっていた。² 2月になると、カートランドで購入したエジプトの巻物のことが、また気になり始めます。アブラハム書の翻訳がまだ終わっていません。³この新たに発見された聖典には、神が御自分の子供たちを地上に送られたのは、忠実に進んで神の戒めに従うかどうかを試すためであるという教えが書かれていました。

救い主はこの地球を創造される前、こう宣言されたのです。「わたしたちはこれによって彼らを試し、何であろうと、主なる彼らの神が命じられるすべてのことを彼らがなすかどうかを見よ

う。」神の戒めに従った者は、昇栄して栄光を加えられます。神に従わなかった者は、この永遠の祝福を失うのです。⁴

ジョセフは、聖徒たちがこの真理を知ることにより、昇栄に向けて成長し、神のみもとに入れるようになってほしいと願っていました。カートランドでは、力を授けられたことにより、多くの男性が伝道地での困難を乗り越える力を得ました。しかし、神はノーブー神殿においてさらなる霊的な力を授けると約束しておられたのです。主は、さらに多くの儀式と知識を教会の忠実な男女に明らかにすることによって、黙示者ヨハネが新約聖書で預言したように、彼らを王や女王、祭司や女祭司にしてくださいませ。⁵

ジョセフは十二使徒とそのほか信頼できる友人たちに、この聖なる力の授与に備え、主に従順になるよう勧めました。また、さらに何人かの聖徒に多妻結婚の原則を教え、それが神から与えられたものであることを証します。前年の夏、イギリスから帰還した使徒たちがノーブーに到着して1週間とたたないころ、ジョセフはこの原則をそのうちの何人かに教え、主の戒めとしてそれに従うよう指示していました。⁶昇栄やさらなる力の授与のために、多妻結婚が必須であるというわけではありませんでしたが、主への従順と自らの命を主にささげるとい意志は、必ず求められるものでした。

ジョセフと同様、使徒たちは当初、この新しい原則に抵抗を示しました。ブリガムは別の妻を迎えるという決断を下すのに非常に苦しみ、さっさと墓に入る方が良いと思いましたし、ヒーバー・キンボールとジョン・テーラー、ウィルフォード・ウッドラフは、できるかぎりこの原則に従うのを遅らせたいと願いました。⁷

主の戒めに従ったジョセフは、ルイーザ・ビーマンとの結婚以来、ほかの女性たちとも結び固められていました。多妻結婚について女性に教える際には、自分と結び固められることが正

しいという霊的な確信を、自分自身で求めるようにとジョセフは教えます。すべての女性がジョセフの招きを受け入れたわけではありませんが、何人かは従いました。⁸

ノーブーでは、一部の聖徒たちがこの世から永遠にわたる多妻結婚をしました。それは、彼らの婚姻関係がこの世から次の世にわたって続くことを意味しています。一夫一婦制の結婚と同じく、これらの結婚に性的な関係が伴い、子供をもうける場合もありましたが、永遠に向けた多妻結婚もあり、その場合、結び固めは来世において効力を生じるものであることを当事者たちは理解していました。⁹

場合によっては、教会に不満を抱く聖徒や教会員でない男性と市民結婚をしている女性が、あるいは立派な教会員と結婚している女性でさえ、別の男性と永遠の結び固めをすることができました。結び固めの儀式が終わると、女性は現在の夫との生活を続ける一方、来世で永遠の結婚と昇栄の祝福を受けることを期待していたのです。¹⁰

1842年のはじめ、ジョセフはこのような結び固めをメアリー・ライトナーに申し込みます。メアリーの夫アダムは、教会員ではありませんでした。会話をすることで、主は二人を来世のために結び固めるよう命じておられると、ジョセフはメアリーに告げました。¹¹

メアリーは尋ねます。「神があなたにそう言われたのであれば、なぜわたしにはそう語られないのですか。」

ジョセフはそれに答えて言いました。「心から祈ってください。あなたは証を得る必要があると、天使がわたしに告げましたから。」¹²

ジョセフの勧めは、メアリーを不安にさせます。ジョセフは多妻結婚について彼女に教える際、永遠の結婚の聖約に伴う永遠の祝福について説明していました。¹³メアリーがアダムとの結婚で交わした約束は、この世だけの婚姻関係です。今やメアリーは、アダムがまず正しい権能によってバプテスマを受けることに同意しないかぎり、アダムと永遠の聖約を交わすことはできないということを理解しました。¹⁴

メアリーはバプテスマについてアダムに話し、教会に入ってくれるよう頼みます。ところがアダムは、ジョセフを尊敬しているが、回復された福音を信じているわけではないため、バプテスマを受けるつもりはないと言い放ちます。¹⁵

永遠の結婚という祝福を切望するものの、アダムと一緒にそれを享受することができないと分かり、メアリーはどうすべきか迷いました。疑問が次々と湧き上がってきます。ついにメアリーは、主が天使を遣わしてジョセフの勧めが正しいことを確信させてくださるようにと祈りました。¹⁶

ある晩、おばの家に泊まっていたとき、メアリーは部屋に光が現れるのを目にしました。ベッドの上に座っていると、白い衣をまとった天使が自分の横に立っていたのです。メアリーは驚きに打たれます。天使の顔は美しく輝き、その視線は稲光のようにメアリーを貫きました。

恐れを抱いたメアリーがベッドカバーを頭から被ると、天使は行ってしまいました。

メアリーは次の日曜日、答えを受けたかとジョセフに尋ねられます。

「証を得たというわけではありませんが、見たことのないのを目にしました。」そう答えざるを得ませんでした。「天使を見たのです。怖くて、死ぬかと思いました。口が利けなかったのです。」

ジョセフは言いました。「それは、生ける神の天使です。あなたは忠実であれば、さらに偉大なことを見るでしょう。」¹⁷

メアリーは引き続き祈りをささげます。天使を目にしたメアリーは、ジョセフの言葉を信じる信仰が強められていました。そうして、その後の数日間、メアリーは否定することも無視することもできない霊的な証を、ほかにも幾つか受けることになります。この世にいる間、アダムは依然として夫ではありましたが、来世で享受できるすべての祝福を確実に受けられるようにしたいと思いました。¹⁸

間もなくして、メアリーはジョセフの申し出を受け入れ、ブリガム・ヤングによって来世のために結び固められます。¹⁹

ジョセフの指示の下、ジョン・テラーとウィルフォード・ウッドラフは、預言者の翻訳したアブラハム書を出版し始めました。*Times and Seasons* (「タイムズ・アンド・シーズンズ」) の1842年3月号に掲載したのです。聖徒たちはこの記録を読むと、世界の創造や人生の目的、神の子供たちの永遠の行く末について新たな真理を見だし、歡喜しました。アブラハムがウリムとトンミムを持っていたことや、顔と顔を合わせて主と言葉を交わしたことを知ったのです。また、地球とそこに存在するすべてが、御父の霊の子供たちに昇栄をもたらすために、すでに存在していた物質から組織されたとも書かれていました。²⁰

アブラハム書の出版と、そこで教えられている啓発的な教義によって人々の興奮が冷めやらぬ中、聖徒たちは引き続き犠牲を払って自分たちの新しい町を築き、神殿を建設します。

このころまでに、ノーブーには1,000棟を超える丸太小屋があり、木造の家やどっしりとしたれんが造りの家も続々と建てられていました。²¹ジョセフは機能的な町を築き上げるために、町を

「ワード」と呼ばれる4つの区域に分け、ビショップを任命して各ワードを監督させます。それぞれのワードは、主の宮を建設する労働者たちを10日に一度送ることにより、神殿建設を助けることになっていました。²²

ノーブーにおいて裁縫で生計を立てていた未婚の女性、マーガレット・クックは、神殿が次第に出来上がっていく様子を見ていました。マーガレットは教会への最も初期の改宗者の一人、サラ・キンボールの下で働いています。サラの夫は羽振りの良い商人で、末日聖徒ではありません。

マーガレットは裁縫をしながら、神殿建設の作業について、時折サラと話しました。壁はまだ数メートルの高さだというのに、職人たちはすでに神殿地下に臨時の場所を設けており、死者のためのバプテスマ用の大きなフォントを据えつけていたのです。腕の良い職人により松材の板で作られた楕円形のフォントが、12頭の手彫りの牛の背に載せられ、細かな模様で縁取られています。フォントが奉獻されると、聖徒たちは死者のためのバプテスマを再び執行し始めました。²³

自身も神殿に貢献したくてたまらなかつたマーガレットは、まともな靴もなければ、ズボンもシャツもない労働者が大勢いることに気がつき、彼らのために新しいシャツを一緒に作らないかと、サラに持ちかけました。マーガレットが縫ってくれるのなら、シャツの生地は提供するとサラは言います。二人は、ノーブーに暮らすほかの女性たちの手も借りて協会を作り、作業を指示することもできると考えました。²⁴

その後間もなくして、サラは12人ほどの女性たちを家に呼び、この新たな協会について話し合います。彼女たちはその文才で知られていたエライザ・スノーに、規約の草稿を依頼しました。エライザはすぐさま仕事に取りかかり、草稿が出来上がると預言者に目を通してもらいました。

この種の規約の中では最高のものだと、ジョセフは言います。「しかし、これは皆さんが望んでいるものではありません。姉妹たちに伝えてください。皆さんのささげ物は主に受け入れられており、主は皆さんに、この規約以上に良いものを備えておられます。」数日のうちに集会を開くので店に来るようと、ジョセフは協会の人々に告げました。

「わたしは女性たちを神権の下に、神権の規範に倣って組織します」とジョセフは言います。²⁵「それができる鍵を、今やわたしは手にしているのです。」²⁶

次の木曜日、1842年3月17日のこと、エマ・スミスは階段を上り、ジョセフの店の上にある大きな部屋に行きました。そのほか19人の女性が、新しい協会を組織するために集まっていました。中には、マーガレット・クック、サラ・キンボール、エライザ・スノーがいます。ジョセフも、ウィラード・リチャーズとジョン・テラーとともに出席していました。リチャーズはイギリスから帰還して以来、ジョセフの筆記者として働いていました。²⁷

出席していた女性のうち最年少は15歳のソフィア・マークス、最年長は54歳のサラ・クリーブランドです。ほとんどの女性はエマと同年代でした。イギリス生まれのレオノーラ・テラーを除き、皆がアメリカ合衆国東部の出身で、聖徒たちとともに西部に来ていました。サラ・キンボールやサラ・クリーブランドのように裕福な人も少数いましたが、それ以外は皆、余分な服も持ち合わせていないような状況でした。

出席した女性たちは、互いのことをよく知っていました。フィリンド・メリックとデスデモーナ・フルマーはハウズミルの大虐殺からの生還者でしたし、アタリア・ロビンソンとナンシー・リグドンは、実の姉妹でした。エマ・スミスとバスシバ・スミスは、エ

ライザ・スノーとソフィア・パッカーと同様、婚姻によっていとこ同士になっています。サラ・クリーブランドとアン・ホイットニーは、苦難に遭うエマを助けた人物でした。エマと家族が行き場を失った際、彼らを自分の家に受け入れてくれたのです。エルビラ・コールズはエマの家に寄宿し、子供たちの世話を手助けしていました。²⁸

エマは、ノーブーで女性の協会を設けるのは良いアイデアだと思います。その少し前のこと、ジョセフと町の男性たちは、数世紀の歴史のある「フリーメーソン」という友愛結社に入りましたが、それは、ハイラム・スミスやジョン・ベネットのように長年この結社の会員であった人々が、市内にフリーメーソンの支部を組織する手助けをした後のことでした。一方、ノーブーの女性たちは、それとは異なる類の協会が欲しいと思っていました。²⁹

「主のみたまは火のごと燃え」を全員で歌い、ジョン・テラーが祈りをささげると、ジョセフが立ち上がります。この新たな協会は、困っている人を探し出して助け、間違っている人を正し、地域社会を強める業を女性たちに担ってもらうためにある、ジョセフはそう説明しました。そうして、その場にいた女性たちに、会長を選ぶよう勧めます。二人の顧問は、神権定員会と同様、会長が選ぶこととなります。女性が初めて、教会の中で公式に権能と責任を持つことになるのです。³⁰

エマの友人、アン・ホイットニーが、会長としてエマの名前を挙げると、満場一致で可決されました。次に、エマはサラ・クリーブランドとアンを自分の顧問に任命します。

ジョセフは、1830年にエマのために受けた啓示を読み上げると、エマはその時点で聖文を解き明かし、教会の女性たちを教える責任に聖任、または任命されていたと言いました。主がエマを「選ばれた婦人」と呼ばれたことをジョセフは説明しま

す。なぜなら、エマは管理する責任を務めるべくして選ばれたからです。

次に、ジョン・テラーがサラとアンをエマの顧問として聖任し、エマをこの新たな召しに確認すると、必要な力が得られるように祝福しました。ジョセフはそのほかの指示を与えると、集会の進行をエマに任せます。すると、この協会の名称を決めたらどうかとジョンが提案しました。

エマの顧問たちは「ノーブーの女性扶助協会」がよいのではと言いましたが、ジョンは、国内に数多くある女性の協会の名称に合わせて、「ノーブー女性慈善協会」にしたらどうかと提案します。³¹

エマは「慈善」より「扶助」の方が好ましいと思いましたが、エライザ・スノーは、「扶助」だと、大災害時の大がかりな救援のような印象を与えと言いました。この協会は日常生活の問題に、より重きを置くのではなかったでしょうか。

「わたしたちはとてつもなく大きなことを行うのです」とエマは主張します。「大勢の教会員を乗せた船が早瀬^{はやせ}で立ち往生したら、救助を求める大きな声上がることを想定しなければなりません。途方もない出来事が起こり、すぐにでも助けに行かなければならない状況に陥るかもしれないのです。」

この言葉が決め手になりました。「それは認めざるを得ません」とジョンが言います。「力あるご意見です。返す言葉がありません。」

詩を書いていたため、日ごろから言葉選びに注意深かったエライザは、その名称をほんの少し変えることを勧めました。「ノーブーの女性扶助協会」ではなく、「ノーブー女性扶助協会」とするよう提案したのです。女性たちは皆、賛成しました。

「良いことをしたいという望みは、どの会員も同じはずです」とエマは皆に言いました。何よりも、慈愛がこの協会の原動力で

あるべきでした。新約聖書でパウロが教えているように、心に慈愛が満ちていなければ、良い行いも無益なのです。³²

ジョセフはその年の春、扶助協会と頻繁に集会を持ちます。この組織は急速に発展し、古くからの教会員も、バプテスマを受けたばかりの移民も加わって、会員の数は増えていきました。ジョセフの店で3度目の集会を開くころには、出席を希望する女性全員を入れる余地がないほどでした。ジョセフは、神殿で力を授かるために会員を備えるうえで、扶助協会が助けとなることを望んでいました。世のあらゆる悪から離れ、古代の神権の規範に則って運営される、えり抜きの協会でなければならぬと、女性たちに教えたのです。³³

一方でジョセフは、婚外で性的な関係を持っている男性がノーブーに何人かおり、そのような行為は人に知られないかぎり許されると主張しているという報告を受け、心を悩ませていました。主の貞潔の教えを腐敗させるこの誘惑は、戒めにまったく気をとめない男性たちによって広まって行きます。規制をかけなければ、彼らは聖徒たちにとって大きなつまずきの石となりかねません。

3月31日、ジョセフは、ある手紙を扶助協会で見上げるようエマに頼みました。教会役員がそのような行為を認めたことは一度もないと伝える内容で、こう宣言していました。「わたしたちはそのような行為をやめさせたいと考えています。あらゆる物事において、神の戒めを守ることを望んでいるからです。」³⁴

ジョセフが何よりも望んでいたのは、聖徒たちが昇栄の祝福を受けるにふさわしくなることでした。その春、ジョセフは聖徒たちに告げました。「神のおられる所に行きたいのであれば、神のような者となり、神が従っておられる原則に従わなければなり

ません。神のような状態から堕ちると、わたしたちは悪魔のもとに身を落とすこととなり、知識を失います。そして、知識なしに人が救われることはないのです。」³⁵

ジョセフは、扶助協会の会長会が教会の女性たちを導き、彼女たちがそのような知識と義を自分自身で育むことができるようにしてくれると信頼していました。

「この協会は、神が確立された秩序によって、すなわち指導者として任じられた人々を通して指示を受ける」とジョセフは宣言しています。「わたしは今、神の名によって皆さんのために鍵を回します。これから後、この扶助協会には喜びがあり、知識と英知が注がれることでしょう。」³⁶

1842年5月4日、ブリガム・ヤング、ヒーバー・キンボール、ウィラード・リチャーズがジョセフの店に行くと、階上の部屋が模様替えされていました。壁には描かれたばかりの壁画がありますし、近くには背の低い木々や草花があり、庭園を思わせます。部屋の別の部分は、カーテンのように吊り下げられた布で仕切られていました。³⁷

ジョセフは特別な集会のために、その朝、この3人の使徒を店に招いたのです。兄ハイラムとウィリアム・ローも招かれていました。二人とも大管長会の一員であり、ジョセフの最も身近な相談相手です。また、ビショップであるニューエル・ホイットニーとジョージ・ミラー、ノーブーのステーキ会長であるウィリアム・マークス、教会指導者のジェームズ・アダムズも出席していました。³⁸

その後日が暮れるまで、預言者はこの男性たちに、ある儀式を紹介します。その一部はカートランド神殿や古代ヘブル人の幕屋で授けられていたのと同様の儀式で、洗いと油注ぎが含まれ

ていました。この男性たちには、体を覆い、交わした聖約を思い起こさせる神聖な下着が与えられました。³⁹

神がジョセフに明らかにされたこの新たな儀式は、昇栄に必要な真理を教えていました。それは、世界の創造とエデンの園に関して聖文に書かれていることを、アブラハム書の翻訳から新たに分かった事柄を含めて説明しており、救いの計画を通して人を段階的に導くための儀式でした。男性たちは、アブラハムとそのほか古代の預言者たちのように、神の御前に帰るのに必要な知識を授かったのです。⁴⁰儀式において、この男性たちは、義にかなった貞潔な人生を送り、自らをささげて主に仕えることを聖約します。⁴¹

ジョセフはこの儀式を「エンダウメント」と呼び、彼らを信頼して、その日学んだ特別な知識を口外しないよう求めました。カートランドでの力の授与と同様、この儀式は神聖であり、霊的な思いを持つ人に向けられたものです。教会の長老たちに霊的な賜物と神の力を豊かに注いただけではありません。神殿が完成するやいなや、男性も女性もこの儀式を受け、神との聖約の関係を強化し、神の王国のために人生をささげることに、さらなる力と守りを見いだすことができるようになるのです。⁴²

儀式終了後、ジョセフはブリガムに幾つかの指示を与えました。「段取りがうまくできていたわけではありません」と、使徒ブリガムに伝えます。「しかし、わたしたちは置かれた状況で最善を尽くしました。そこでお願いしたいのが、この儀式をすべて整理して体系化することです。」⁴³

その日、店を出た男性たちは、エンダウメントから学んだ真理に畏敬の念を抱いていました。儀式の幾つかの部分はフリーメーソンの儀式に似ていると、ヒーバー・キンボールは思いました。フリーメーソンの集会において、男性たちは、ソロモンの神殿の設計者に関する象徴的な話を表す動作をします。フリー

メーソンの会員は身振りや言葉を学び、それをだれにも漏らさないと誓うのです。すべては、自分たちが堅固な土台を築き上げ、光と知識を少しずつ加えられていることを象徴していました。⁴⁴

しかし、男性と女性のためにあるエンダウメントは神権の儀式であり、フリーメーソンにはない神聖な真理を教えていたため、ヒーバーはそれをほかの人にも知ってもらいたいと心から望みました。

ヒーバーは、イギリスにいるパーリー・プラットとメアリー・アン・プラットにこう書き送っています。「わたしたちは預言者を通して、神権について、ある貴いものを受けました。これを受けたならば、あなたも心からの喜びを感じることでしょう。これに関して書面でお伝えすることはできません。書き記してはならないものだからです。ですから、こちらに来て、御自分でそれを受けてください。」⁴⁵



裏切り者か味方か

1842年5月6日、ミズーリ州インディペンデンスの街路では、激しい雨が打ちつけていました。自宅で夕食を終えたリルバーン・ボッグズは、椅子に腰かけて新聞を読み始めます。¹

ミズーリ州知事の任期が満了してから1年以上たった今も、ボッグズは積極的に政治活動を行っており、今度は州議会上院の補欠選挙に出馬していました。長年の間に多くの敵を作っていたため、ボッグズが選挙に勝つ見込みは低いものでした。数千もの聖徒たちをミズーリから追放するきっかけとなった撲滅令の発布を批判されたほか、一部のミズーリ州民は、アイオワ準州との境界線を巡る騒動での、知事の強引な対処に不満を抱いていたのです。また別の人々は、ボッグズによる新しい州庁舎の資金調達方法に疑問を投げかけていました。²

ボッグズは窓に背を向けながら、新聞の見出しに目をやっていました。涼しく、暗い晩、外の雨音がかすかに聞こえます。

その瞬間、だれかがボッグズに気づかれることなく、泥まみれの庭を音を立てずに横切ると、窓に大きなピストルを向けました。銃身から閃光が走り、ボッグズは読んでいた新聞の上に倒れ込みます。頭から首にかけて、血が流れ落ちていきました。

銃声を聞いたボッグズの息子は、すぐさま部屋に駆けつけると、助けを呼び求めます。そのころすでに、発砲した人物は武器を地面に投げ捨て、泥に足跡だけを残し、目撃されることなく逃げ去ったのでした。³

捜査員がボッグズを撃った人物を特定しようと奮闘する一方、ノーブーにいたハイラム・スミスは、異なる種の犯行について調べていました。5月の初旬、数人の女性がジョン・ベネット市長の恐ろしい悪行について訴えたのです。市議会議員の前で、ハイラムはその内容に耳を傾けました。ジョンは彼女たちのもとに密かにやって来て、内密にしておくかぎり、彼と性的な関係を持って罪にならないと主張したと言います。ジョンはそれを「霊のうえでの妻」と呼んで彼女たちにうそをつき、ジョセフがそのような行為を認めていると請け合いました。⁴

はじめ、女性たちはジョンの言葉を信じませんでした。ところが彼はしつこく迫り、自分の語っていることは真実だと友人たちにも証言させるほどでした。うそをついていれば、罪の責任はすべて自分にあると言い、もし彼女たちが妊娠してしまったら、医師である自分が墮胎手術を行うと約束したのです。女性たちは次第にジョンを断り切れなくなり、同じ手口で迫ってきたジョンの友人たちにも負けてしまいました。

ハイラムは震え上がります。ジョンがはじめに主張していたような誠実な人物でないことは、以前から気づいていました。ジョンがノーブーに来て、市長になって間もないころ、彼の過去に

ついでにうわさを耳にしたのです。ジョセフがジョージ・ミラー・ビショップを派遣し、うわさの真相を確かめたところ、ジョンは町から町へと移り住み、自分の豊かな才能を使って人を利用してきたことが分かりました。

ジョージの調べによって、ジョンに子供がいること、何年もの間虐待し、裏切ってきた女性とまだ婚姻関係にあることも判明したのです。⁵

ウィリアム・ローとハイラムがこれらの調査結果を確かめた後、ジョセフはジョンに直接会い、過去に犯した罪悪についてけん責しました。ジョンは行状を改めることを約束しましたが、ジョセフは彼に対する信用を失い、以前のように信頼を寄せることができませんでした。⁶

女性たちの証言を聞いた今、ハイラムはさらに踏み込んで対処する必要を確信します。ハイラム、ジョセフ、ウィリアムはジョンを教会から破門する内容の通告文を作成し、そのほかの教会指導者もそれに署名しました。ジョンの罪に関する詳細はいまだ調査中であり、公表せずに事態の収拾をつけることが望ましいと思われたため、破門については通知を控えることにしました。⁷

一つ確かなのは、市や聖徒たちにとって、市長が危険人物と化したことです。ハイラムは、何とかそれを食い止めなければならないと感じていました。

ハイラムの調査について知ると、ジョンはひどくうろたえます。頬に涙を伝わせてハイラムの執務室に出向き、憐れみを請うたのです。これほど多くの女性を欺いたことが人に知られたら、自分の人生は台無しだと言い、ジョセフと話してすべてを正したいと申し出ました。

二人が表へ出ると、ジョンは預言者が庭を横切って自分の店に入って行くのを目にします。するとジョンは預言者に向かって手を伸ばし、「ジョセフ兄弟、わたしは罪人です」と叫びました。ジョンは泣きはらし、目を真っ赤にしています。「罪を認めます。どうかほかの人には言わないでください。」

「なぜわたしの名前を語って非道な罪悪を犯すのですか」とジョセフは強く問いたました。「あなたに不徳を教えたことがありましたか。」

「決してありません！」

「公の場でも、そうでないときでも、わたしの言動に不徳や不義が見られましたか。」

「いいえ。」

「市議会議員の前でこれを誓いますか。」

「はい。」

ジョンは後に続いてジョセフの執務室に行き、書記からペンと紙を受け取ります。市議会議員が到着すると、ジョセフは部屋から出ました。ジョンは机で背を丸めながら、預言者から神の律法に反する事柄を教えられたことはなかったという告白文を書きます。⁸そうして彼は、ノーブー市長の職から退任したのでした。⁹

2日後の5月19日、市議会はジョンの辞職願を受け取り、ジョセフを市長に任命します。議会を閉会する前、ジョセフはジョンに何か申し開きがあるかと尋ねました。

「教会の指導者に悪意はありませんし、皆さんとともに住み続けたいと思います。いつか信頼と会員権を全面的に回復していただける日が来ることを願っています」とジョンは述べました。「わたしの信仰が試される日が来ることがあれば、わたしが裏切り者か味方であるかが、そのとき分かるでしょう。」¹⁰

翌週の土曜日、イリノイ州の新聞にリルバーン・ボッグズ襲撃事件に関する最新情報が掲載されます。頭部の大怪我にもかかわらず、元知事はかろうじて一命を取りとめたと報じられていました。警察の犯人探しは進展がありませんでした。ボッグズの政敵が犯人ではないかと言う人々もいましたが、聖徒による犯行ではないかと記事は書き立て、ジョセフはいつかボッグズが暴力によって命を落とすと預言していたと主張しました。

「よって、うわさの根拠は十分にある」と結論づけたのです。¹¹

身に覚えのない犯罪について訴えられることに嫌気がさしていたジョセフは、記事を読んで気分を害します。新聞記者に対し、「貴紙はリルバーン・W・ボッグズ氏の死をわたしが予告したと言って、はんぜん判然と不当な仕打ちをしておられます」と書き送りました。「わたしの手はいかなる人の血にも染まっておらず、心は清いまです。」¹²

この言いがかりは、ジョセフが公の場で自らを弁明する時間がないときに寄せられました。当時、彼はジョン・ベネットの行動を1週間かけて調べている最中だったのです。¹³大管長会と十二使徒定員会、ノーブー高等評議会は、来る日も来る日もジョンから被害を受けた人々の証言を聞きました。ジョセフは被害者の話を聞いていくうちに、ジョンが神の律法をどれほどゆがめ、ジョセフが聖徒たちの間で確立しようとしてきた、永遠の聖約に基づいた夫婦関係を嘲笑してきたかが分かりました。

聴聞会の中で、ジョセフはハウズミルの虐殺で夫を失ったキャサリン・ウォーレンの証言を聞きました。5人の子供を育てていた彼女は非常に貧しく、家族を養うのに苦勞していました。

キャサリンは、ノーブーで彼女を最初にだましたのはジョン・ベネットだったと言います。「ジョンは自分の望みを遂げようと

迫ってきました」と、彼女は高等評議會の前で語りました。「わたしはそのような罪を犯すつもりはないし、もし妊娠してしまったら教会に汚名を着せることになる」と話しました。」しかし、教会の指導者に認められていることだとジョンがうそをつくと、彼女は屈してしまいます。

間もなくして、ジョンの友人も同じうそをつき、キャサリンをだましました。

「去年の冬、わたしは自分のしてきたことが怖くなり始めました」とキャサリンは高等評議會に語ります。彼女はジョセフや教会指導者たちがジョンの行動を認めていないことを知り、ジョンについて訴えようと決意したのです。ジョセフと高等評議會はキャサリンの話聞き終えると、その会員権を保たせ、彼女をだました男たちを破門しました。¹⁴

調査が完了すると、ジョンも同じく正式な破門通知を受け取ります。彼は再び憐れみを請い、懲罰を内密に扱うよう評議會に訴えました。そのよううわさを聞けば、年老いた母親の胸は張り裂け、悲しみのために死んでしまうと言うのです。¹⁵

ハイラムと同じく、ジョセフはジョンに憤りを感じていましたが、聖徒たちはボッグズ銃撃事件で濡れ衣を着せられ、新聞記者たちはノーブー内の不祥事を見つけようと躍起になっていたため、ジョセフと教会指導者たちは事件に世間の注目が集まらないよう注意深く行動していました。そこで、ジョンの破門を公表せず、彼がすべてを改めるかどうか、様子を見ることにしたのです。¹⁶

それでも、ジョセフはジョンにだまされた女性たちについて心配しました。女性たちの側に落ち度がなかったとしても、性的な過ちを犯した女性に周囲が厳しく反応し、追放することは珍しくありません。ジョセフは扶助協会の女性たちに、慈愛を示し、人を非難するのに遅くあるよう勧めました。

「悔い改め、自らを正してください。しかし、周りの人々を追いやるような方法は取らないでください。」ジョセフは聖徒たちが罪悪を受け入れないのと同時に、人を退けることがないように望んでいました。「心を清く保ってください。イエスは人々を罪から救われます。」ジョセフは皆に思い起こさせます。「イエスはこう言われました。『わたしがするのを見たその行いを、あなたがたもしなさい。』これこそ、人々が行動する際の、偉大な基準となる言葉です。」

「ひまなうわさ話や無駄なおしゃべりはよしましょう」とエマも賛成します。しかし、悪を伏せて解決することは良くないとも思っていました。「罪を覆い隠してはいけません」とエマは女性たちに語ります。「神の律法と国の法律に反する罪は特にそうです。」周囲の人々が同様の過ちを犯すのを防ぐためにも、罪を犯した人を明るみに出すほうが良いと考えたのです。¹⁷

一方、ジョセフは事件を内密に扱いました。ジョンの過去の行動から、彼の悪行が明らかになり、威信を失うと、その町から離れる傾向のあることが分かりました。聖徒たちが辛抱強く待てば、ジョンは自ら町を出て行くかもしれません。¹⁸

1842年5月27日、扶助協会は10回目の集会を、聖徒たちが礼拝行事でしばしば訪れていた森の近くで開きました。扶助協会の会員数は数百人にのぼり、中にはアマンダ・スミス、リディア・ナイト、エミリー・パートリッジをはじめとする数十人の女性とともに、1か月前に加わったフィービー・ウッドラフがいました。¹⁹

毎週開かれていた集会は、フィービーが慌ただしい日常生活を離れ、周りの人々の必要について知り、教会の女性に向けて特別に用意された説教を聞く機会となっていました。

集会で話すことが多かったのはジョセフとエマですが、この日はニューエル・ホイットニー・ビショップが、主が間もなく女性にお与えになる祝福について語りました。エンダウメントを受けたばかりだったホイットニー・ビショップは、主の業から目を逸らすことのないように、また主の力を受ける備えをするように強く勧めます。「女性なくして、地上にすべてのものが回復されることは不可能です」と彼は断言しました。

神は忠実な聖徒たちに数多くの貴いものを授けられると約束します。「無益な事柄に注意を向けるのをやめ、神の目がわたしたちに注がれていることを覚えていなければなりません。幾度となく判断を誤ることがあっても、正しいことを行おうと努め、最善を尽くすなら、神の御前に義とされるのです。」²⁰

ニューエルの説教の2日後、フィービーとウィルフォードは崖を登り、建設中の神殿へ向かいます。二人は家族として様々な苦難を乗り越えてきました。その一つは、ウィルフォードがイギリスにいる間、娘のサラ・エマを亡くしたことです。二人はその当時、結婚して以来、最も落ち着いた生活をしており、さらに二人の子供を家族として迎えていました。

ウィルフォードは *Times and Seasons* (「タイムズ・アンド・シーズンズ」) の事務所を管理しており、その安定した仕事によって家族を養うことができました。ウッドラフ家は市内の簡素な家に住んでいましたが、神殿用地の南側に新たなれんが造りの家を建てていました。近隣には多くの友人が住んでおり、中にはイギリスで経営していた大農場を売却して聖徒たちと合流した、ジョン・ベンボーとジェーン・ベンボーもいます。²¹

それでも、ホイットニー・ビショップが教えたように、聖徒たちは義を行うべく努力し続け、主の業に携わり、道から逸らせるものを避ける必要がありました。

焦点を保つうえで、神殿はますます重要な存在となっていたのです。5月29日、フィービーは神殿の地下に下りてバプテスマフォントに入り、自分の祖父母と大おじのために身代わりのバプテスマを受けます。²²ウィルフォードが彼女を水に沈めたとき、フィービーは亡くなった親族が回復された福音を受け入れ、イエス・キリストに従い、主の犠牲を覚えるための聖約を交わすという信仰がありました。

ジョン・ベネットは、破門の通知を受け取ってから2週間が過ぎてもなお、ノーブーにいました。扶助協会はそのころまでに、ノーブーの女性たちにジョンの犯罪について警告し、彼が教会指導者に関して広めていた類の偽りを全面的に否定します。²³ジョンの過去についてさらに思わしくない情報が明らかになると、ジョセフは元市長の破門について告知し、その重罪について公表すべき時が来たと感じました。

6月15日、ジョセフは *Times and Seasons* (「タイムズ・アンド・シーズンズ」) でジョンの破門について短く発表します。²⁴数日後、神殿用地で行われた千人以上の聖徒たちに向けた説教の中で、ジョセフはジョンがうそをつき、女性をだまして利用したことについてはっきりと語りました。²⁵

その3日後、ジョンは怒り狂いながら、聖徒たちの下劣さに耐えられないと言い、扶助協会に暴徒を送り込むという脅し文句を吐いてノーブーを後にします。エマは臆することなく、扶助協会にジョンの人格を非難するパンフレットを作成することを提案しました。「わたしたちはただ神を恐れ、戒めを守ります。そうするときに栄えるのです。」エマは女性たちにそう語りました。²⁶

ジョセフはジョンについてさらに告発する記事を発行し、元市長の長年にわたる逸脱行為について詳しく伝えました。「悔い改めの精神を示すどころか、罪なき人々にうそをついてだまし、最も忌まわしく品位のない方法で姦淫の罪を犯したことで、どのような正しい人の信頼も敬意も受けるに値しないことを自ら最後に証明したのです。」²⁷

一方、ジョンは近くの町で部屋を借り、イリノイ州で名のある新聞社に、ジョセフや聖徒たちに関する憎しみに満ちた投書を書き送りました。ジョン自らが犯した数多くの罪も含め、ジョセフが様々な犯罪を行っているという言いがかりをつけます。自分の主張を裏付け、自らの罪を隠すために、事実とかけ離れた、大げさな作り話をしたのです。

ある投書では、新聞記事に書かれていた内容を繰り返し、ジョセフが5月のリルバーン・ボッグズ襲撃を命じたと言い、預言者はボッグズが暴力によって殺されることを予告したと書きました。そして、ジョセフは「預言を成就するため」、友人でありボディガードをしていたポーター・ロックウェルをミズーリに送り込んだと付け加えたのです。²⁸

聖徒たちは、ジョンの書いた内容が偽りに満ちたものであることが分かりましたが、ジョンの投書は、ミズーリで聖徒たちを敵視していた人々の怒りの炎をさらに大きくしました。襲撃から回復したボッグズは、自分の殺人を企てた人物に正義が下されることを要求します。事件当日、ポーター・ロックウェルがちょうどインディペンデンスの親族を訪ねていたことを知ると、ボッグズは殺人未遂事件の共謀者としてジョセフを訴えます。そうして、新たにミズーリ知事となったトーマス・レイノルズに対し、ジョセフを逮捕し、ミズーリに連行して審理を行うようイリノイ州当局に要請することを求めたのです。²⁹

レイノルズ知事は賛同し、今度はイリノイ州知事のトーマス・カーリンに、罪を犯した後ミズーリを脱出した逃亡者のごとくジョセフを扱うよう要求しました。³⁰

3年前にミズーリを出て以来、ジョセフがミズーリに戻る機会はなかったことを知っており、またジョセフが銃撃にかかわっていた証拠もないために、聖徒たちは激怒します。ノーブー市議会と、聖徒たちに友好的なイリノイ州民の一团は、すぐさま知事に請願書を送り、ジョセフを逮捕することのないように求めました。³¹エマ、エライザ・スノー、アマンダ・スミスは、知事に会うためにクインシーへ赴き、扶助協会がジョセフを支持する内容の請願書を手渡します。カーリン知事は彼女たちの嘆願に耳を傾けたものの、最終的にはジョセフとポーターの逮捕状を出しました。³²

8月8日、保安官代理と二人の警官がノーブーに到着し、ボググズを襲撃した犯人としてポーターを、共謀人としてジョセフを逮捕しました。ところが、保安官が二人を連行する前に、ノーブー市議会は逮捕に関する調査を行う権利を要求しました。ジョセフはこれまでも不当に逮捕されたことがあり、ノーブー市憲章により、法律の悪用に対して聖徒たちが自己防衛する権限が認められていたのです。

逮捕状を差し止める権限が市議会にあるかどうか不確かであった保安官は、ジョセフとポーターを市の警察署長に預け、対応を知事に確認するためノーブーを出て行きました。2日後に戻ると、保安官は被告人たちを探しましたが、その姿を見つけることはできませんでした。³³



苦境は絶えず

1842年8月11日、一筋の月明かりが暗い川面を照らす中、ジョセフと友人のエラスタス・ダービーは、小舟を静かに漕ぎながらミシシッピ川を下っていました。前方には、ノーブーとモンテローズの間に位置する、木々の茂った二つの中州^{なかす}の輪郭が見えます。中州の間を進んでいくと、二人は岸に停泊する別の舟を見つけ、それに向かって漕ぎ出しました。¹

その前日、公平な裁判が行われたいのではないかと懸念したジョセフとポーターは、逮捕を免れるためにノーブーを脱出したのです。ポーターは東側から州を去りましたが、ジョセフは西へ向かい、川を渡ってアイオワ準州に住むおじジョンの家に行き、イリノイ州保安官とその一団の管轄区域外に逃げました。ジョセフは一日中そこに身を隠していましたが、家族や友人に会いたいという思いを募らせます。

ジョセフとエラスタスが中州に小舟を停泊させると、エマ、ハイラム、ジョセフと親しい友人たちが出迎えました。ジョセフは

エマの手を握りながら皆と同じ舟に乗り、ノーブーの状況について皆が話すのを静かに聞いていました。²

ジョセフが想像していた以上に、事態は深刻でした。友人たちの聞いた話では、アイオワ州知事もジョセフとポーターに逮捕状を出しており、おじの家に隠れていても、もはや安全ではない状況だったのです。川の両側で、保安官がジョセフを探していることでしょう。

それでもジョセフの友人たちは、逮捕の件は違法であり、ミズーリでジョセフを敵視する人々による、預言者を何とか捕えるための大胆な陰謀だと確信していました。状況が落ち着くまで、イリノイ側にある友人の農場に潜伏することが、ジョセフにとって最善の策だったのです。³

中州を離れる間、ジョセフの心は感謝で満たされていました。これまで逆境に直面したとき、ジョセフのもとを離れ、裏切った人々もいました。しかし、この友人たちはジョセフを助けようと暗い夜更けにやって来て、彼の傍らに立ち、彼が大事にしている真理を擁護することを選んだのです。

「彼らこそ、わたしの兄弟です。わたしは生きながらえるでしょう。」

何よりも感謝していたのは、エマの存在です。「繰り返し訪れる苦境にあっても、苦難を恐れず、堅く揺らくことのない、変わらず愛情あふれるエマが、またそばにいるのだ。」⁴

エマはその後の数週間にわたり、ジョセフと定期的に連絡を取ります。直接会えないときは手紙を送り、彼女の行動をすべて監視している保安官たちの目を盗めるときには、安全な家でジョセフと会い、次の作戦を練りました。ジョセフと聖徒たちのメッセー

ジのやり取りを請け負うこともしばしばで、エマはジョセフが信頼できる人を選び、危険な人々を避きました。⁵

保安官たちは、必要とあらばイリノイ州のすべての家を調べると脅していたため、自分がすぐに捕まってミズーリに連れ戻されるのではないかと聖徒たちが心配していることを、ジョセフは承知していました。友人の中には、聖徒たちが神殿建設のために木材を伐採しているイリノイ北部の針葉樹林に逃げるよう勧める者もいました。⁶

ジョセフは遠くへ逃げることをためらい、それよりもイリノイにとどまり、事態が収拾するまで様子を見たいと思いました。それでも、エマが望むならば遠くへ逃げようと考えていました。「わたしの安全は君のそばにある」とジョセフは書いています。「君と子供たちが行かないのなら、わたしも行きません。」

ジョセフは心のどこかで、短い間だけでも家族をよそへ連れて行きたいと思っていました。エマにこう綴っています。「わたしたちの暮らす社会の一部に存在する、卑劣で、下品で、邪悪な無作法に疲れ切っている。家族と6か月でも骨休みができれば、生きた心地がすると思うのだが。」⁷

エマはその日のうちに、こう返信しました。「あなたが行かなくてはならないのなら、いつでも一緒に行く用意はできています。しかし、ここを去らずともあなたが守られるという確信がまだあります。あなたを助ける道は一つとは限りません。」⁸

次の日の夜、エマはイリノイ州知事のトーマス・カーリンに手紙を書き、ジョセフの潔白を証言します。殺人未遂事件の日、ジョセフはミズーリにおらず、起訴内容に対して無罪であると弁明しました。ジョセフはミズーリでは公平な裁判を受けられず、恐らく殺害されるだろうとエマは考えていたのです。

「父親が不当な理由で再び投獄されたり、あるいは殺害されたりする姿を目にし、純粋な心を持つわが子たちが深い悲しみで

胸を痛めることのないようにしてください」とエマは懇願しました。⁹

間もなくして、知事はエマに返事を書き送ります。知事の返答は丁寧で、注意深く言葉を選んで綴られており、ジョセフに対する自分の行動はもっぱら義務感によるものであると書かれていました。それでも、ジョセフが法に従うことを望んでいると述べ、逮捕状を取り下げる気持ちがあるかどうかについては触れませんでした。¹⁰

エマはくじけずに2通目の手紙を書き、今度は夫を逮捕することが違法である理由について説明しました。

「人々や夫に対し、このような迫害を続けることは、イリノイ州や合衆国のどこであれ、あるいはあなた御自身やそのほかの人々にとって、どのような益があるのでしょうか。」

そのように手紙に綴ると、エマは返事を待つのでした。¹¹

一方、ノーブーの大半の聖徒たちは、ジョセフがわずか数キロ離れた場所に身を潜めていることを知りませんでした。ある人は彼がワシントン D. C. に戻ったと思い、ヨーロッパに向かったと考える者もいました。保安官たちが、ジョセフの居所を示す手がかりを探しながらノーブーの通りを歩き回る姿を見て、聖徒たちはジョセフの身を案じます。¹²それでも、主が預言者を守ってくださると信頼し、皆は日々の営みを続けました。

イギリスから移民してきたほかの人々と同じく、メアリー・デービスはノーブーの新しい家にいまだ慣れずにいました。ノーブーに着いた後、メアリーはカートランドで知り合ったピーター・モーガンと結婚します。ピーターは若くして妻を亡くしており、子供がいたため、メアリーは彼らの継母となりました。二人はエル

サレムに伝道中のオーソン・ハイドの家を借り、家族を養うための仕事を見つけるのに苦労しているところでした。¹³

ノーブーにおいて、農場労働者や建築労働者には多くの仕事がありました。ところがピーターのようにイギリスの多忙な炭鉱業や製造業に携わってきた優れた技術者には、依然として働き口が少なかったのです。地元の実業家たちは製粉所や工場、いもの 鋳物工場をノーブーに建てようとしていましたが、こういった事業は始まったばかりで、イギリスからやって来た技術者を全員雇うことはできませんでした。¹⁴

安定した仕事が見つからないまま、メアリーとピーターは持ち物の一部を売って食糧や薪を買い、何とか最初の冬をしのぎました。ジョセフはピーターがイギリスで炭鉱夫として働いていたことを知ると、自分がノーブーの南側に所有している土地に見つけた石炭の鉱脈を抽出してもらいたいと、彼を雇います。その石炭が優れた品質のものであることが分かると、ピーターは鉱脈を取り尽くすまで、馬車3台分の石炭をジョセフのために採掘しました。¹⁵

ノーブーに移民してきた貧しい家族の中には、近隣の町や都市でよりよい収入を得られる仕事を探すためにノーブーを出る人々もいましたが、メアリーとピーターは町にとどまり、手元にあるもので工夫してやり繰りしました。ハイド家の未完成の床に板を置き、ベッドの代わりに羽毛のマットレスを敷きました。テーブルの代わりには大きな木箱を使い、戸棚がなかったので食器は外に出したままでした。¹⁶

ノーブーの夏は厳しい暑さでしたが、午後を過ぎて気温が下がると、モーガン家のように家事を一旦置いて、一緒に街中を家族で散歩する人々がいました。通りでは、政治や地元のニュース、福音について立ち話をする人々の姿がしばしば見られます。聖徒たちは講習会をしたり、演劇を鑑賞したり、結成されたばかり

りのノーブー吹奏楽団が当時の流行音楽を奏でるのを聞いたりしました。子供の一団は常にどこかにおり、ミシシッピ川の向こうに太陽が沈み、暗くなった空に星が瞬く時間まで、ビー玉や縄跳びなど、^{こが}戸外の遊びに興じるのでした。¹⁷

8月の終わりまでには、ジョン・ベネットがその夏のはじめに公開した投書が合衆国内の様々な新聞紙に採り上げられたために、教会の立場が悪くなり、宣教師が回復された福音のメッセージを伝えることがだんだんと難しくなってきました。対処として、教会指導者は数百人の長老を伝道に召し、否定的なメディアに対抗します。

8月29日、長老たちは指導を受けるため、神殿用地の近くの森で会合を開きました。ハイラムの話の最中、ジョセフが壇上にのぼって席に着くと、会衆がざわつきます。長老たちの多くは、その月のはじめにジョセフが潜伏し始めて以来、彼を目にしていなかったのです。

イリノイ州当局はいまだジョセフを探し回っていましたが、そのころにはノーブー地区を離れていたため、ジョセフは幾らか警戒を緩めることができました。1週間と少しの間、家で家族と静かに過ごし、十二使徒や教会の指導者たちと内密に会っていたのです。¹⁸

長老たちとの大会の2日後、ジョセフは扶助協会の集会に出席できるほど、自分の身が十分安全であると感じました。ジョセフは女性たちに対し、近ごろ自分に負わせられている試練や訴状について語ります。「わたしは間違いを犯しますが、訴えられているような過ちは犯していません。わたしが犯す過ちは、ほかの人と同様、人間的な弱さによるものです。過ちなしに生きる人はいません。」

また自分を擁護し、知事に掛け合ってくれたエマと女性たちに感謝を述べました。「女性扶助協会はわたしの福利のため、敵に対して最も勇ましい戦いをしてくださいました。皆さんの掛け合いがなかったら、事態はいっそう深刻になっていたことでしょう。」¹⁹

その週末、ジョセフとエマは元使徒のジョン・ボイントンを家に招きます。ジョンはかつて聖徒たちに敵対しており、あるときはカートランド神殿の中で、ジョセフの兄弟に剣を突きつけて脅したことさえありました。しかし、ジョセフとの意見の違いはもう過去のものとなっていました。皆で昼食を取っていると、イリノイ州の保安官と二人の武装警官が、預言者を逮捕するようにとの新たな令状を携え、突如家に押し入ります。ジョンが男たちの気を反らす間、ジョセフは裏口から逃げ出し、畑のとうもろこしの間を通り抜け、店の中に隠れました。

家では、エマが保安官に搜索令状を見せるように求めます。保安官は持っていないと答え、男たちとともに、エマを押し切って強引に家の中へ入って行きました。部屋から部屋を荒らし回り、すべてのドアやカーテンの裏を調べましたが、何も見つかりません。

その夜、保安官たちが町を去った後、ジョセフは友人であるエドワード・ハンターとアン・ハンターの家に移動しました。²⁰「わたしは、自分の身の安全とこの民の安全のために、少しの間、この地を離れることがわたしにとって適切であり賢明であると考えました。」ジョセフはこう手紙に書き、数日後、聖徒たちに送っています。しかし、自分の試練に言及するだけでなく、死者のバプテスマに関する新たな啓示について述べました。

「さらにまた、まことに、主はこのように言われます。『わたしの神殿の仕事と、わたしがあなたがたに定めたすべての仕事を継続して行い、中止しないようにしなさい。』」主は聖徒たちに、地上と天の両方で死者の贖いが記録されるよう、自分たちが執

り行った身代わりのバプテスマの記録を残し、証人も立てるよう
に指示をお与えになりました。²¹

数日後、ジョセフは聖徒たちに向けて、この儀式に関する追加の指示を書き送ります。ジョセフはマラキ書を引用して、「先祖と子孫の間にある事項について固いつながりがなければ、地はのろいをもって打たれる」と綴りました。過去と現在の世代がともに働いて死者を贖い、時満ちる神権時代をもたらすのだと説明しました。この時代において、まだ啓示されていない事柄を含め、主が聖徒たちのためにとっておかれているすべての鍵、力、栄光が明らかにされるのです。

ジョセフは生者と死者に対する神の憐れみを知り、喜びを抑えきれませんでした。潜伏し、不義の理由で敵対者に搜索されている間も、イエス・キリストの回復された福音への喜びに満たされていたのです。

「わたしたちの受けた福音について、何を聞くでしょうか」と聖徒たちに問いました。「喜びの声です。天からの憐れみの声、地からの真理の声。」ジョセフはモルモン書について、天使が神権とその鍵を回復したことについて、また神が御自分の計画を教えに教え、訓戒に訓戒をもって明らかにされていることについて、喜びを込めて記しました。

「わたしたちはこのような偉大な大義において前進しようではありませんか。……心を喜び楽しませ、大いに喜んでください。地は声を放って歌いなさい。死者は、王なるインマヌエルに向かって永遠の賛美の歌を語り出さなさい。」すべての創造物はイエス・キリストについて証しており、主が罪と死に打ち勝たれたことは確かです。

「天から聞こえる声は、何と栄えあることでしょう」とジョセフは喜びました。²²

1842年秋、カーリン知事はエマの2通目の手紙に返信し、夫に対する忠誠を称賛したものの、最終的には彼女を助けることを断りました。²³ ちょうど同じころ、ジョン・ベネットは本一冊分ほどの長さの論文を出版し、ジョセフや聖徒たちについて暴露しました。さらに、「ノーブーにおける秘密の夫妻体系」と題した講演会を催し始め、ジョセフの一夫多妻婚について、自分が耳にした根も葉もないうわさや、自分の作り話を大いに盛り込み、聴衆の興味を引いたのです。²⁴

ジョンの敵対活動が好調を極めている状況と、カーリン知事に仲裁を断られたことで、ジョセフはますます追い込まれてきました。ミズーリにいる敵が彼の死を望んでいるかぎり、捕まって裁判にかけられるわけにはいかないのですが、かといって、残りの生涯を隠れて過ごすこともできません。逮捕されないよう逃げ続けるなら、自分をかくまってきた家族や聖徒たちに、いつ州の矛先が向けられてしまうでしょうか。²⁵

ジョセフが身を隠してから3か月が経過した12月、カーリン知事の任期が満了します。新しく知事に就任したトーマス・フォードは、ジョセフの件で直接仲裁に入ることを断ったものの、預言者の窮状に同情し、裁判所はジョセフにとって良い判決を下すだろうとの確信を示しました。²⁶

新たな知事が信頼に値するかは分かりませんでした。ジョセフに選択肢はありませんでした。1842年のクリスマス翌日、ジョセフはウィリアム・ローの兄弟であり、ノーブー軍の大佐を務めるウィルソン・ローのもとに出頭します。その後、彼らは州都のスプリングフィールドへ行き、ジョセフに対するミズーリ州知事の逮捕状が合法であるか、また裁判のためにミズーリへ送還されるか否かを審議されることになりました。²⁷

ジョセフがスプリングフィールドに到着したことで、町は大騒動になります。新しい州庁舎の向かいにある裁判所は好奇心

に満ちた傍聴人であふれかえり、神の預言者と称する男を一目見ようと皆が互いに押し合い、首を伸ばしていました。

「どっちがジョー・スミス？」とだれかが尋ねました。「あの大柄な男か。」

「鼻がずいぶん大きいな」と別の人が口にします。「預言者にしては、にこやか過ぎる。」²⁸

イリノイで最も尊敬されている人物の一人、ナサニエル・ポープ判事が審議を進行しました。ジョセフは弁護士のジャスティン・バターフィールドとともに、法廷の前方に着席していました。近くでは、ジョセフの書記としてウィラード・リチャーズがノートを開き、審議の議事録を取っています。数人の聖徒たちも、混雑した部屋の中に入り込みました。²⁹

ポープ判事の考えでは、ジョセフに対する訴訟はボッグズ襲撃事件の共犯かどうかではなく、事件が起きた際にジョセフがミズーリにいて、その後逃げたか否かが論点でした。イリノイ州の若き検察官であるジョサイア・ランボーンは、冒頭の陳述において、ジョセフがボッグズ氏の死を預言したという申し立てを中心に語りました。ジョセフがボッグズ氏の銃撃事件を預言したのなら、その責任はジョセフにあり、ミズーリで裁判にかけられるべきだと論じたのです。³⁰

ランボーンが陳述を終えると、今度はジョセフの弁護士が反論します。ジョセフは銃撃事件の際、ミズーリにいなかったため、ボッグズ知事の訴えとジョセフに対する訴訟は誤りであるとしたのです。「ジョセフがミズーリから逃げたという証拠は一切ありません」とバターフィールド氏は主張しました。「彼が逃亡したということが証明されないかぎり、移送する必要はありません。逃亡したという証拠が必要です！」

それからバターフィールドは、ジョセフの無罪を証言する証人を喚問しました。「どのようなことがあっても、被告人はミズー

りに移送される必要はないと考えます」と彼は結論づけました。³¹

翌日の1843年1月5日の朝、ジョセフと弁護士が判事の判決を聞くために戻ると、法廷は期待でざわついていました。聖徒たちは不安を胸に待ちます。もしポープ判事がジョセフを有罪と認めれば、預言者はその日のうちに敵の手に引き渡される可能性があったからです。

ポープ判事は、9時になって間もなく到着しました。着席すると、代理人たちに感謝を示し、判決を述べ始めます。ウィラード・リチャーズは、今回の訴訟について長々と語られる内容をすべて書きとめようと、ペンを走らせました。

弁護人が前日に論じたように、判事もジョセフをミズーリに行かせ、裁判にかけることは違法であると結論づけました。もはやジョセフを留置する理由はないと判断し、「スミスを釈放せよ」と宣言します。

ジョセフは椅子から立ち上がると、判事たちにお辞儀をしました。5か月の潜伏の末、ジョセフはついに自由の身となったのです。³²



永遠の聖約にあって 一致する

1843年1月10日、ジョセフがノーブーに戻ると、帰還を喜ぶ友人や家族がこぞって彼の家に集まりました。それから間もなくして、ジョセフとエマは裁判の勝利と二人の16回目の結婚記念日を祝うために夕食会を開きます。ウィルソン・ローとエライザ・スノーは、この祝宴のために歌を作曲し、ジョセフとエマは食事を提供しました。客は笑い、語り合います。¹

ジョセフは、愛する人々と一緒にいられる幸せを噛み締めていました。「もし母、兄弟や姉妹や友人たちに再会できる望みがないとしたら、わたしは今にも心が張り裂けてしまうことだろう」と思いをはせます。²生者と死者のためのバプテスマ、エンダウメント、そして永遠の結婚の儀式が、神聖な聖約を交わす手段として聖徒たちに与えられたことを知り、ジョセフは慰めを得ました。聖約は彼らを結び固め、その関係が墓を越えて続くことを確かにしてくれるのです。

しかし、女性はおろか数人の男性がエンダウメントを受けただけで、多くの聖徒ははまだ永遠の結婚の聖約について知りませんでした。自分が使命を終えるまで生き長らえるという約束を固く信じていたジョセフは、聖徒たちにこれらの儀式を紹介するため、何とか神殿を完成させたいと思っていました。自分に残された時間がなくなりつつあると感じていたのです。

ジョセフは素早く前進し、聖徒たちにも歩み続けるように呼びかけます。神聖な儀式を受け、神の律法に従う人々には驚くべき祝福が授けられると、ジョセフは信じていました。これまで以上に、ジョセフの目標は、自身が受けた天与の知識を多くの聖徒たちに広め、それによって聖徒たちが聖約を交わして守り、昇栄へと向かうよう助けることでした。³

その冬のミシシッピ川は硬く凍りつき、水面を行き来するいかだや川船が、通常どおり運航できなくなっていました。雪が降り、氷の混じった風が平地や崖に吹きつけることも度々です。多くの聖徒は、短靴たんぐつに薄い上着、擦り切れた肩掛けしか持ち合わせていなかったため、寒さや雪泥せつでいをしのいで長く外にいられるのは少数の者だけでした。⁴

冬も終わりに近づいたころ、厳しい寒さが続く中、エミリー・パートリッジはスミス家で洗濯をしながら子供たちの面倒を見ていました。彼女と姉のエライザは、母親が新しい夫と暮らす場所からそう遠くないスミス家で、2年以上住み込みで働いていました。⁵

エミリーは扶助協会に所属しており、女性たちとよく話をしていました。時折、多妻結婚についての話題も耳にします。静かにその慣習を受け入れた30人以上の聖徒たちの中には、彼女の義理の姉妹二人と、一人の義理の兄弟が含まれていました。

エミリーはというと、多妻結婚に関して個人的には何も知りません。⁶

1年近く前、伝えたいことがあるとジョセフに告げられたことがありました。ジョセフは手紙を書き送ろうとしましたが、エミリーは多妻結婚について何か言われることを心配して、その申し出を断っていました。後になって、自分の判断を後悔したエミリーは、その慣習について知っていたわずかばかりの事柄、またジョセフとのやり取りについて姉に話します。ところがエライザが動揺する様子を見せたので、エミリーはそれ以上何も言いませんでした。⁷

だれにも秘密を打ち明けられないまま、エミリーは深い水の中、一人もがいているかのように感じました。彼女は主に頼り、何をすべきかを知ろうと祈りました。数か月後、エミリーは天からの確認を受けます。その内容が多妻結婚に関するものであっても、ジョセフが彼女に話そうとしていたことを聞くべきだと感じたのです。⁸

3月4日、エミリーが19歳を迎えた数日後、ジョセフはヒーバー・キンボールの家で彼女に話がしたいと言いました。エミリーは仕事を終わると、すぐに出かけます。多妻結婚の原則を受け入れる準備はできていました。予想どおり、ジョセフは彼女に多妻結婚について教え、自分と結び固めを受けてくれないかと尋ねました。エミリーは同意し、ヒーバーが儀式を行いました。⁹

4日後には、姉のエライザもジョセフと結び固められます。二人の姉妹は互いに話すことができるようになり、自分たちが理解していることや、交わした聖約について感じていることを分かち合いました。¹⁰

聖徒たちは、ジョン・ベネットが暴露した告発内容に対してジョセフを擁護し続けます。ジョンが書いたことの大半は、誇張されているか、まったく偽りの情報でしたが、ジョセフが複数の女性と結婚しているという主張は正しいものでした。ハイラム・スミスとウィリアム・ローはこの事実を知らずに、ジョンの発言をすべて激しく否定し、従順に多妻結婚を実施している聖徒たちの行動を意図せず非難していたのです。¹¹

これにより、ブリガム・ヤングは不安を募らせます。大管長会の会員が多妻婚の実施を知らないままであるかぎり、一夫多妻は非難され続けることとなり、ジョセフとほかの人々が主の戒めを守れなくなると思ったのです。

ジョセフはすでに、多妻結婚について兄やウィリアムに教えるようとしていましたが、どれも失敗に終わっていました。あるとき評議会では、ジョセフがその話題を切り出すと、ウィリアムが中断して言いました。「天からの使いがわたしに現れ、男性は一人以上の妻を持つようにと明らかにするなら、わたしはその使いを殺すでしょう。」

ブリガムは、ハイラムやウィリアムの行動にジョセフが頭を抱えていることを理解していました。ある日曜日のこと、ブリガムが夕方の用事を済ませると、ジョセフが突然自宅にやって来ました。「わたしの家に行って教えてほしいのですが」とジョセフは言います。

ブリガムは通常、聖徒たちに会うのを楽しみにしていましたが、その晩はハイラムも教える予定です。「わたしは行かない方が良いでしょう」とブリガムは言いました。¹²

ブリガムと妻のメアリー・アンは、祈りと靈感を通して、多妻結婚を実施すべきだと知るようになりました。メアリー・アンの同意を得て、ブリガムは1842年6月、ルーシー・アン・デッカーという女性と結び固められます。ジョセフがブリガムに初めてそ

の原則を教えた1年後のことです。ルーシーは最初の夫と離婚しており、世話の必要な幼い子供たちを抱えていました。¹³

ジョセフはこう言い張りました。「ブリガム兄弟、一緒に行ってくれないのなら、わたしは今晚自宅に帰りません。」

気が進まないながらも、ブリガムは教えを説くことに同意し、預言者とともに家へ向かいます。二人が到着すると、ハイラムは暖炉のそばに立ち、そこに集った大勢の人々に話していました。彼は聖書、モルモン書、教義と聖約を手を持ち、それらが神の王国を築くために与えられた律法であると宣言しました。

ハイラムはこう言い放ちます。「これら以上のものは、人のものであり、神のものではありません。」

ブリガムは、ハイラムの説教を聞きながら感情を高ぶらせます。傍らではジョセフが、手で顔を覆いながら座っていました。ハイラムが説教を終えると、ジョセフはブリガムを軽く押して言います。「今です。」

ブリガムは立ち上がると、ハイラムが置いた聖典を手に取りました。すると、部屋の中の皆が見えるように、自分の前に一冊ずつ聖典を置きました。「わたしは、生ける神の預言者なしに、ライ麦の灰をこれら3冊の書物と交換するようなことはしません。」¹⁴ 末日の預言者なくして、聖徒たちはジョセフ・スミスを通して神が福音を明らかにされる以前の状態から、一步も前進することはできないと言いました。

ブリガムは話し終わると、自分の説教がハイラムの心を動かしただけを見て取ります。ハイラムは立ち上がると、聖徒たちに自分を赦してくれるよう謙遜に請いました。ブリガムは正しい、とハイラムは認めます。聖典は重要なものですが、生ける預言者にとって代わるものはないのです。¹⁵

その春、ジョセフは近くの小さなステークを訪問するために、しばしばノーブーを離れます。どこへ行くにも、新しい書記のウィリアム・クレイトンを同行させました。ウィリアムはイギリス出身の聡明な若者で、1840年、妻のルースとともにノーブーへ来て間もなく、預言者に雇われました。¹⁶

4月1日、ウィリアムはジョセフと、エルサレムから戻ったばかりのオーソン・ハイドに同行し、ラムスという町での集会のため、半日旅をしました。¹⁷翌朝ウィリアムは、再臨まで御父と御子を心の中に住まわせることができるのは、聖徒の特権であるとオーソンが説くのを聞きます。¹⁸

その後、ジョセフの姉ソフロニアの家で食事を楽しんでいると、ジョセフが言いました。「ハイド兄弟、幾つか訂正をしたいと思うのですが。」

「ありがたくお聞きしますよ」とオーソンは答えました。

「御父と御子が人の心の中に住まわれるという考えは、昔からの諸教派の観念であって、誤りです」とジョセフは言います。「わたしたちは、御二人の御姿を見るでしょう。わたしたちは、救い主がわたしたちのような人であるのを目にするのです。」¹⁹

ジョセフはその件について、その晩続けて行われた大会で次のように教えました。「御父は人間の体と同じように触れることのできる骨肉の身体を持っておられる。御子も同様である。しかし、聖霊は骨肉の体を持たず、霊の御方であられる。」²⁰

ジョセフが話す間、ウィリアムは自分の日記に、説教の内容をできるかぎり書きとめました。彼はジョセフの語った深遠な真理に引きつけられ、さらに知りたいという望みを強めます。

ウィリアムは、人が生涯で得た知識と英知は復活のときによみがえるというジョセフの教えを記録しました。ジョセフはこう説きます。「もしある人が精励と従順によって、この世でほかの

人よりも多くの知識を得るならば、来るべき世でそれだけ有利になる。」²¹

1か月後、ジョセフとウィリアムはラムスに戻り、ベンジャミン・ジョンソンとメリッサ・ジョンソンの家に滞在します。ジョセフはジョンソン夫妻に、男女は新しくかつ永遠の結婚の聖約において永遠に結び固められ、神権の位であるこの聖約に入ることによってのみ、昇栄することができることを教えました。そうでなければ、その関係は墓を越えると断たれ、永遠に進歩し、増し加えられることはなくなるのです。

ジョセフの永遠の結婚に関する説明は、ウィリアムに畏敬の念を起こさせました。彼は日記に、「わたしは妻と永遠の聖約によって一つとなることを強く望み、間もなくそうなることを祈る」と記しています。²²

エルサレムからオーソン・ハイドが戻ると、ピーターとメアリー・モーガンはノーブーのハイドの家から越さなければならなくなりました。ほかに住む当てもなかった一家は、神殿委員会から得た市の区画に野営しました。その土地の支払いのために、ピーターが神殿で働くことが前提です。一方メアリーは、イギリスから持ってきた綿を食物と交換しました。

間もなく、ピーターは石工として働き始めます。神殿のために、石灰岩を切り出して加工するのです。²³それまでに、神殿の壁は場所によって3.7メートルほどになっており、聖徒たちが神殿内で集会を持てるように臨時の床が張られていました。²⁴

建物は、ピーターやメアリーがカートランドで訪れた神殿に比べ、さらに大きく、壮大なものになろうとしていました。1階と2階に、集会のための部屋が設けられるのは同じです。しかし、ノーブー神殿の外装は、星、月、太陽の彫刻が施された石で飾ら

れようとしていました。それは、預言者ヨハネが「ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた」と教会を表現したように、ジョセフの復活の示現の中で説明された、王国の栄光を連想させるものでした。²⁵

労働者たちは何週にもわたり、町の北にある採石場から石を切り出すために火薬を用いました。それから、のみを使って岩を粗い塊にし、牛に引かせて神殿近くの作業場へ運び出します。そこでは、ピーターのような男性たちが、岩の塊を正しい寸法で切って磨き、熟練の職人たちがさらに彫刻を加え、装飾的な石に加工します。石が整うと、背の高いクレーンにそれを取りつけ、設置する場所まで持ち上げるのでした。²⁶

自分たちの土地でたゆみなく働きながら、ピーターとメアリーは菜園を作り、自分たちの家を建て、これから先に待ち受ける穏やかな日々を心待ちにしていました。²⁷

ジョセフに結び固められて2か月後、エミリー・パートリッジは衣服の洗濯や繕い、子供たちの世話をしながら、スミス家で変わらず毎日働いていました。ジュリア・スミスはその春12歳になり、絵を習っていました。²⁸男の子たちも成長しています。幼いジョセフは10歳、フレデリックは6歳、アレクサンダーはもうじき5歳になります。年長の子供たちは、エミリーの妹リディアとともに学校へ通っていました。幼いジョセフは、彼女の9歳の弟、エドワード・ジュニアとも遊びます。²⁹

ジョセフとの結び固めを選ぶに当たり、エミリーは主の戒めに従順に行動しているという自分の証を信頼していました。彼女と姉のエライザは、結婚について公表せずにいました。二人や多妻結婚を実施しているそのほかの人々は、それを一夫多妻とは呼びませんでした。それはこの世的な用語であり、神権の儀

式とも関係がないと考えたからです。³⁰ ジョセフやほかのだれかが、公に「一夫多妻」または「霊のうえで妻」を持ったと非難されるとき、多妻結婚を実施していた人々は、自分たちの聖約による関係を指してはいないと理解していました。³¹

聖書は別として、ジョセフには従うべき模範や前例がなく、主の御言葉にどのように従うべきかについて、主は常に具体的な指示を与えられたわけではありません。ほかの戒めや啓示と同じく、ジョセフは最善の判断により前進するほかありませんでした。何年も後になって、エミリーとそのほかの人々は、ジョセフが従順にこの原則に従ったこと、またノーブーでの多妻結婚に関する彼ら自身の経験について回想を記しました。彼らの記録の多くは、簡潔かつ断片的なものです。³²

ジョセフとエマは、多妻結婚について感じていた思いを書き残さなかったため、多くの疑問が答えられないままとなっています。エミリーは、多妻結婚に関するスミス夫妻の葛藤を幾らか記録しました。時としてエマは完全にその慣習を拒否し、別の折には、気が進まないながらも戒めとして受け入れました。多妻結婚を実施するよという主の指示と、エマからの反対の狭間で苦しみながら、ジョセフはエマに知らせることなく女性たちと結婚したこともありました。これは、かかわった人々皆を苦しめる状況を生むこととなります。³³

5月の初旬、エマはエミリーとエライザを呼ぶと、多妻結婚の原則について説明しました。³⁴ エマは、ジョセフに結び固められる次の二人の妻を自分で選ぶことができるなら、それに同意するとジョセフに話していたのです。そうしてエマはエミリーとエライザを選んだのですが、ジョセフがすでに彼女たちと結び固められていたことを、エマが知らずにいたことは明白です。³⁵

すでに行われた結び固めについて触れるよりも、それについては話さないことが最善だとエミリーは考えました。³⁶ 数日後、

エミリーとエライザは再びジョセフに結び固められ、この度はエマが証人となったのでした。³⁷

5月14日、ジョセフが大会に出かけている間、ハイラムは神殿で説教を行いました。一人以上の妻を持つ男性に反対する内容です。承認なくして行われる多妻結婚をヤコブが非難した、モルモン書の記述に言及し、これを実施することは神の前に恥ずべきことだと言い放ちました。³⁸

説教の後、ハイラムは自分が教えたことについて疑問を持ち始めます。多妻結婚の話はノーブー中で飛び交い、ジョセフが複数の妻を持っているという話はだれもが知るところとなりました。³⁹

ハイラムはこれが真実でないことを願いましたが、ジョセフが何かを隠しているのではないかと思っていました。ジョセフはこれまでに、多妻結婚の実施を暗に示したことがありました。ハイラムの反応を見るためだったのでしょう。ハイラムは、ジョセフが十二使徒に話した事柄に関して、自分には教えられていないことがあると感じ取ります。

その説教から間もないある日、ハイラムは自宅近くでブリガムを見かけ、話しても良いかと尋ねました。「十二使徒に明らかにされていながら、わたしにはまだ理解できていない事柄があるのではと思っています」と彼は言いました。「そうですか。」

二人は、囲い板が積まれた場所に腰かけます。「あなたのおっしゃっていることが何か、定かではありませんが、自分がその内容を知っているということは言えます」とブリガムは慎重に答えました。

「わたしは長い間、男性が一人以上の妻を持つべきだという啓示をジョセフが受けたことに、不信感を抱いていました」とハイラムは打ち明けます。

「あなたが神の前に手を挙げて、ジョセフと彼の行い、また彼が教えている教義に反する言葉を決して言わないと誓うなら、お話ししましょう」とブリガムが告げました。

ハイラムは立ち上がると、「そうすると心から誓います」と言いました。「わたしは真理を知りたいのです。」

多妻結婚に関してジョセフに与えられた主の啓示についてブリガムが教えると、ジョセフが戒めに従って行動していることを確信し、ハイラムは涙を流します。⁴⁰

1843年5月下旬、エマとジョセフは店の2階の部屋で、ずっと待ち望んでいた儀式をついに執り行い、永遠に結び固められます。⁴¹それからジョセフは、ブリガムとメアリー・アン・ヤング、ウィラードとジェネッタ・リチャーズ、ハイラムとメアリー・フィールディング・スミス、そして夫を亡くした、メアリーの姉妹であるマーシー・トンプソンに、翌日ジョセフのもとに来て、同じ儀式を受けるように招きました。⁴²

集会の前、ハイラムは自分の複雑な家族状況について懸念しました。永遠の結婚の祝福が、神権により結び固められた人にだけあるというのなら、6年前に亡くなった自分の最初の妻、ジェルーシャはどうなるのでしょうか。

死者のためのバプテスマをするのと同じ原則で、彼女を自分に結び固めることができるとジョセフは言いました。

「2番目の妻はどうすればよいのですか。」ハイラムは尋ねます。

彼女とも永遠の聖約を交わすことができると、ジョセフは言いました。

メアリーは、この特別な結び固めにおいてジェルーシャの身代わりをすることに同意します。「わたしはわたし自身で、あなたに永遠に結び固められます」と彼女はハイラムに言いました。「あなたを愛していますから、離れたくはありません。」⁴³

5月29日の朝、ジョセフたちは店の2階に集まり、それぞれの夫婦を永遠に結び固めました。その場においてたった一人のやもめであったマーシー・トンプソンは、ほかの人々とは違う気持ちにならざるを得ませんでした。それでも、数年前にマリアア熱で亡くなった夫のロバートと結び固められると知り、神が自分や自分の状況を心にとめてくださっているのを感じます。⁴⁴

マーシーが儀式を受ける番になると、ロバートの代理を務めるのは、彼女の義理の兄弟であるハイラムが最適だとジョセフは言いました。ジョセフは彼女をロバートに結び固め、それからハイラムをジェルーシャに結び固めました。身代わりを務めるのはメアリーです。⁴⁵

ブリガムは賛美歌と祈りで集会を閉会し、午前中の残りの時間を、友人たちと神について語って過ごしました。心地の良い一致した雰囲気、ここ数年、聖徒たちを悩ませてきた事柄がすべて静まったかのようでした。⁴⁶



裁きは神の手に

1843年6月1日、アディソンとルーザ・プラットは娘たちとともに、ノーブーの蒸気船の船着き場へと歩いて行きました。アディソンはその日、ハワイ諸島へ3年の伝道に発とうとしていたのです。アディソンは腕に末娘のアンを抱き、姉のエレン、フランシス、ロイスは、父親の旅立ちに言い知れぬ不安を感じながら、暗い顔つきで後についてきました。¹

最近、ブリガム・ヤングと話していた時のこと、ハワイと太平洋で捕鯨船の若き船員として過ごしたころのことを、アディソンは懐かしげに語りました。ブリガムはアディソンに、教会の設立されてないハワイ諸島で伝道部を開いてくれないかと尋ねます。アディソンは、一緒に行ってくれる人がいれば喜んで引き受けると答えました。間もなくジョセフと十二使徒は、ハワイ諸島に長老たちの一団を導く指導者として彼を召します。²

アディソンの割り当てを聞くと、ルーザは3日間泣きました。ハワイは何千キロも遠くにあり、未知の危険な場所に思えて

仕方ありません。ノーブーに自分の家はなく、お金も、必要なものと交換するための品物も持ち合わせていません。娘には、衣服や学校教育が必要になるでしょう。アディソンがいなければ、子供たちのために自分がすべてを与えなければなりません。

ルーザーは家族と一緒に蒸気船乗り場へと歩きながら、心細く思いつつも、アディソンが召しへのふさわしさを備えていたことに喜びを感じるようになりました。福音を宣べ伝えるために夫が家を離れている間、一人で町に残る女性は彼女だけではありません。宣教師が四方八方へ出発したその夏、ルーザーは自分の試練に立ち向かい、主を信頼する決心をしたのでした。

アディソンは、感情を抑えきれずにいました。自分を家族から遠く離れた場所へ運んで行く蒸気船のデッキに乗り込んだとたん、アディソンはハンカチを目に押し当て、涙をぬぐいました。岸では、娘たちも泣き出しています。フランシスは、お父さんにはもう会えないと泣きじゃくりました。³

海をよく知っていたアディソンは、待ち受ける危険を理解していました。それでも、伝道に向けて十二使徒から任命を受けた際、大嵐に遭遇するときに自然を支配する力と勇気を祝福されます。そして、アディソンが忠実に務めるならば、無事に家族のもとへ帰還できることを御霊により約束されたのです。⁴

数日後、エマとジョセフ、子供たちはノーブーを離れ、イリノイ州ディクソンにいるエマの姉妹を訪問するため、北へと向かう旅に出ました。出発前、エマはアン・ホイットニーに会い、扶助協会の女性たちを励まして、引き続き貧しい人々や神殿建設に携わる男性たちを助けるように指示します。⁵

最近、ジョセフは神殿の儀式について聖徒たちに話していました。神殿を建てているのは、そこで主がエンダウメントを授け

られるようにするためであると教えたのです。神殿に深い関心を抱いていたエマは、そのことをアンに話し、神殿の業を速めるために扶助協会として何ができるかを話し合っしてほしいと伝えました。

「神殿委員会に話してみましよう。要望があれば、わたしたちにできることは何でもしましよう」とエマは提案します。⁶

この責任を受けたアンは、その年最初の扶助協会集会を招集し、神殿建設の取り組みを手助けする方法を提案するよう女性たちに求めました。喜んで寄付を呼びかけ、新しい衣服を作るために羊毛やそのほかの材料を集めると言った姉妹たちがいれば、編み物や洋裁をし、必要に応じて古い衣類を修繕すると申し出た姉妹たちもいました。ある女性は、年配の女性たちに糸を提供し、冬に神殿で働く人のために靴下を編んでもらってはどうかと提案します。

ポリー・ストリングムとルイーザ・ビーマンは、作業する人のために衣服を作ることにしました。メアリー・フェルショーは、石鹼を寄付できると言います。フィリンダ・スタンリーは、亜麻布を作るために亜麻を寄付し、毎日1リットルの牛乳を提供することを提案します。エステル・ジーンは、自分で紡いだ糸を寄付すると申し出ました。

チェイス姉妹は、「天使は皆さんのことを喜んでいます」と証し、女性たちが主の宮の建設を喜んで助けようとしていることを称えました。

集会を終える前、アンは部屋にいた母親たちに、自分の娘たちが神殿に参入する準備をするように勧めます。愛をもって母親を指導したアンは、神聖な壁の中では厳粛に礼節をもって行動するよう教えました。⁷

320 キロ離れた所では、スミス一家がエマの妹を訪問していました。ところが6月21日、ウィリアム・クレイトンとスティーブン・マーカムが憂慮すべき知らせを携えて到着します。ミズーリ州知事は、ジョセフがミズーリ州で裁判を受けることを再度要求しました。この度は、過去の反逆罪で起訴されています。またイリノイ州のフォード知事も、預言者を逮捕するために別の令状を発行したと言うのです。

「心配にはおよびません」とジョセフは言いました。「ミズーリ州民がわたしに危害を加えることはできません。」⁸

数日後、家族で夕食を食べていると、末日聖徒の長老だと言乗る二人の男がドアをノックしました。エマの義理の兄弟が、ジョセフは庭の納屋近くにいると伝えます。

その直後、エマと家族は外で騒がしい物音を耳にします。すぐさまドアへ駆け寄ると、男たちがピストルをジョセフの胸に突きつけ、引き金に指をかけていました。一人の男がジョセフの襟元をつかむと、怒声を上げます。「1ミリでも動いたら、撃つぞ!」

「撃つなら撃て!」そう言ってジョセフは胸を突き出しました。「銃など恐れるものか。」

スティーブン・マーカムは外へ飛び出すと、男たちに突進します。驚いた男たちは銃を彼に向け、素早くジョセフに銃口を戻すと、あばらに銃口を突き立て、「動くな!」とスティーブンに叫びました。

男たちは揉み合いながらジョセフを荷車の背に追い込むと、そこでジョセフを捕えます。「諸君、わたしは人身保護令状の取得を望む」とジョセフは言いました。令状があれば、ジョセフの逮捕が法律に則ったものかどうかを地元の判事が裁定できるのです。

「^{いま}忌々しいやつだ!」そう言うと、二人は再び銃でジョセフのあばらをこづきました。「令状など取れはしない!」

スティーブンは荷車まで走ると、くつわをつかんで馬を抑えました。エマは家の中に駆け込むと、ジョセフの外套と帽子を驚掴みにします。そのとき、ジョセフは家のそばを一人の男性が通り過ぎるのを見て、「この男たちはわたしを連れ去るつもりだ!」と叫びました。ところが男性が止まることなく歩き続けたため、ジョセフはスティーブンに向き直り、助けを呼ぶように言いました。

「行くんだ!」とジョセフは叫びます。⁹

ジョセフを捕えたのは、イリノイ州とミズーリ州の保安官でした。その午後、彼らはジョセフを近くの宿屋に閉じ込め、弁護士に会わせることも許しませんでした。スティーブンはすぐさま、ジョセフに対する不当な扱いを地元当局に報告すると、彼らは間もなく保安官らを誘拐と虐待の罪で逮捕させました。それからスティーブンは、近くの裁判所から人身保護令状を入手しようと奔走します。令状を得るには、ジョセフは96キロ離れた場所で行われる審理に出席しなければなりませんでした。

判事が町にいないと分かると、ジョセフ、ジョセフを捕えた保安官、そして彼らを捕えた保安官は、この法的な混乱を解決してくれる別の裁判所を探しに出発しました。¹⁰

ノーブーでは、ジョセフの拘束を知ったウィルソン・ローとハイラムが、彼を救うために100人以上の男性を集めます。何人かを川を上る蒸気船で送り、ほかの人々には馬に乗って預言者を探し出すように命じ、四方八方へと送り出しました。

自分を助けに来た最初の二人に遭遇すると、ジョセフは安堵します。「今回わたしはミズーリへは行きません」とジョセフは保安官たちに言いました。「彼らはわたしの仲間です。」二人だった救助者は瞬く間に20人に上り、続々と数を増していきま

す。一団はノーブーへと向かうことになりました。そこで、地方裁判所がこの拘束の合法性を裁定してくれると信じていたのです。¹¹

正午までに町の外れに到着すると、預言者は数人の弁護士と、馬で救助に来てくれた人々に囲まれます。子供たちとすでにノーブーに戻って来ていたエマは、ジョセフに会おうとハイラムとともに馬でやって来ました。ノーブー吹奏楽団が愛国心あふれる曲を演奏し、人々は祝砲を撃ちました。草原の花で飾られた馬に引かれる馬車のパレードも、間もなく一団に加わります。

通りの両側に並んだ群衆は、目の前を行列が通り過ぎると、預言者が無事に戻ったことを喜んで声援を送りました。行列はゆっくりとくねって、ジョセフの家へ向かいました。馬車が着くと、ルーシー・スミスが息子を抱き締め、子供たちは家の外に走り出てきます。

「父さん、ミズーリの人たちはもう父さんを連れて行かないよね?」と7歳のフレデリックが言いました。

周りに集まった何百人もの聖徒たちに向かい、ジョセフは柵のてっぺんに登って言いました。「神のおかげで、わたしは再びミズーリの人々の手から逃れてきました。皆さんの思いやりと愛に感謝しています。イエス・キリストの御名により、皆さんを祝福します。」¹²

期待していたとおり、ノーブーの裁判所はジョセフの拘束を違法であると宣言しました。ジョセフを捕えた二人の保安官は憤慨し、判決に対する異議を知事に申し立てます。ところがフォード知事は、裁判所の決定に干渉し、イリノイ州中の批判的な聖徒たちの怒りを買うことを拒否しました。彼らは、ジョセフが再び訴追を逃れるのではないかと恐れ始めたのです。¹³

一方で何百人もの聖徒たちは、引き続きノーブーとその近隣のステーキに集まってきていました。東部のコネチカット州では、ジェーン・マニングという若い女性が、母親、きょうだいたち、自分の所属する支部の会員たちとともに運河船に乗り込み、ノーブーへと出立しました。一行を率いていたのは、彼らの支部会長を務める、宣教師のチャールズ・ワンデルです。

ほかの支部会員は皆白人でしたが、ジェーンと家族は違いました。奴隷ではありませんでしたが、黒人の末日聖徒だったのです。ジェーンはコネチカット州で生まれ育ち、人生の大半を、裕福な白人夫婦の下で働いてきました。彼女はキリスト教の教会に入りましたが、すぐさま不満を感じるようになります。

その地域で末日聖徒の長老が教えているのを知ると、話を聞こうと決心しました。彼女の牧師は反対しましたが、ジェーンは説教を聞きに行き、それが真実の福音であると確信します。その地域で最大の支部は、ほんの数キロのところであり、彼女は次の日曜日にバプテスマと確認を受けたのです。¹⁴

ジェーンは熱心な改宗者となりました。バプテスマの3週間後には、祈りをささげる間、異言の賜物が与えられました。それから一年がたった今、彼女と家族はシオンに集合しようとしていたのです。¹⁵

運河を進み、ジェーンと家族は何事もなくニューヨークを横切りました。彼らは支部の皆と、そこからオハイオを南に抜けてイリノイへと向かう予定でした。ところが運河の役人が、運賃を支払わなければマニング家族に続けて旅をさせることはできないと言うのです。

ジェーンは混乱します。オハイオに到着するまで、お金を払う必要はないと思っていたからです。なぜ今、支払う必要があるのでしょうか。支部の白人で、前もって運賃を払うよう要求された人はいませんでした。

マニング一家は手持ちのお金を数えましたが、旅費を払うに十分な金額はありません。彼らはワンデル長老に支援を求めましたが、援助をしてはくれませんでした。

船が離れて見えなくなると、ジェーンと家族はほとんど所持金もないまま、その場に取り残されました。ノーブーまでは、1,300 キロ以上の行程があります。西へと向かう手段は自分の足だけであると悟ったジェーンは、その小さな隊をシオンへ率いて行こうと決心しました。¹⁶

7月12日の朝、ウィリアム・クレイトンがジョセフの事務所に行くと、預言者とハイラムが入ってきました。「その啓示を書いてくれるなら、わたしが持って行ってエマに読み聞かせましょう。わたしは彼女にその真実性を確信させることができます。そうすれば、今後は安心していられるでしょう。」ハイラムはジョセフに言います。

「兄さんは、わたしほどエマのことが分かっていません」とジョセフは言いました。その年の春と夏、ジョセフはエマが個人的に選んだ数人を含め、別の女性たちと結び固められていました。¹⁷しかし、妻になる人を選ぶ過程に携わっても、その原則に従うことはエマにとって容易ではありませんでした。

「教義はとても明解です」とハイラムが言いました。「この教義の真実性、純粹さ、これが天からのものであることを、わたしは分別ある男女ならだれにでも確信させることができます。」

「やってみましょう」と答えると、ジョセフはウィリアムに、紙を用意して、自分の語る主の言葉を書くように頼みました。¹⁸

啓示の内容の大半は、すでにジョセフに知らされてきました。それは、新しくかつ永遠の結婚の聖約を、それにかかわる祝福と約束とともに説明したものです。また1831年、ジョセフ

が聖書を翻訳しているときに知った、多妻結婚に関する条件も明らかにされました。啓示の残りの部分は、多妻結婚に関する疑問や葛藤に言及した、ジョセフとエマのための新たな勧告でした。

結婚を、墓を越えて永続するものとするには、男女が神権の権能によって結婚し、交わした聖約が約束の聖なる御霊により結び固められ、その聖約に最後まで忠実でなければならない、主はそう明らかにされました。これらの条件を満たした人々は、昇栄の栄えある祝福を受け継ぐことができるのです。¹⁹

主はこう宣言されました。「それで、彼らは神々となる。彼らには終わりが無いからである。……すべてのものが彼らに従うので、彼らはすべてのものの上にあるであろう。」²⁰

主は、多妻結婚と御自分の聖約、すなわち忠実さのゆえに数え切れないほど多くの子孫をアブラハムに祝福された約束について語られます。²¹主は御自分の計画を成就するうえで、一人の男性と一人の女性の間での結婚を初めから定めておられました。しかし、義にかなった家庭の中で子供を育て、彼らに昇栄をもたらすための一つの方法として、時として主が多妻結婚を認められることもあったのです。²²

この啓示は聖徒たちに向けられたものでしたが、ジョセフの妻たちに関する、エマへの勧告で締めくくられています。主はこのように指示されました。「わたしのはしためエマ・スミスは、わたしの僕ジョセフに与えられた……者をすべて受け入れなさい。」主はエマに対し、ジョセフを赦して彼とともにあるように、また彼女を祝福して増し加えることを約束する聖約を守るように命じ、それを果たすときに喜ぶべき理由を告げられました。主はまた、聖約を破り、主の律法に背く者に降りかかる悲惨な結果についても警告されます。²³

ジョセフが啓示の口述を終えると、ウィリアムの綴った内容は10ページ近くになっていました。ウィリアムは筆を置き、ジョセフに啓示を復唱します。預言者がその正確性を確認すると、ハイラムはそれを携えてエマのもとに向かいました。²⁴

その日の遅く、ジョセフの事務所に戻ったハイラムは、生涯でこれほど厳しい話をしたことはいまだかつてなかったと伝えました。エマに啓示を読み聞かせると、彼女は怒ってそれを受け入れないと言ったのです。

「兄さんはわたしほど、エマのことは分からないと言ったでしょう」とジョセフは静かに言いました。ジョセフは啓示の紙を折ると、ポケットにしまい込みました。²⁵

次の日、ジョセフとエマは、胸の痛むような話し合いを何時間も続けます。正午前、ジョセフはウィリアム・クレイトンを部屋へ呼ぶと、仲裁に入ってくれるよう頼みました。ジョセフもエマも、^{らち}埒の明かない窮地に追い込まれているようです。二人は互いに深く愛し合い、相手を気遣い、また交わした永遠の聖約を尊びたいと思っていました。しかし、主の戒めを守ろうとするそれぞれの葛藤が、二人を引き裂こうとしていたのです。²⁶

エマは、とりわけ将来について心配しているようでした。ジョセフの敵が多妻結婚について知ったら、どうなるのでしょうか。再び監獄へ行くのでしょうか。それとも殺されてしまうのでしょうか。彼女と子供たちは生活をジョセフに頼っていましたが、家族の経済状態は教会のそれと密接に関連していました。彼に何かあったら、どのように生活していけばよいのでしょうか。

ジョセフとエマは泣きながら話し、その日の終わりによりやく問題へ向き合うことができました。エマにもっと経済的な安心を与えるため、ジョセフは彼女と子供たちに幾らかの財産を譲渡

します。²⁷ その年の秋以降、ジョセフがさらなる多妻結婚を実施することはありませんでした。²⁸

1843年8月の終わり、スミス一家は川近くの2階建ての家に越します。ノーブーマンションと呼ばれたその新しい家は、4人の子供たち、ジョセフの年老いた母親、家族のために住み込みで働いていた人々が住める大きな家でした。ジョセフは、その家の大部分をホテルとして使う計画を立てていました。²⁹

数週間後、ノーブーが夏から秋に移り変わろうとするころ、ジェーン・マニングとその家族が、預言者と寝床を探してジョセフとエマの家にたどり着きました。「どうぞお入りになって。」疲れ切った一家にエマが声をかけます。ジョセフはその晩彼らが寝る場所を案内してから、皆に椅子を勧めました。

「あなたがこの小さな一団のリーダーですね」とジョセフはジェーンに言いました。「あなたの旅の経験を話してくれませんか。」

ジェーンはジョセフとエマに、ニューヨークからの長い旅路について語りました。「わたしたちは靴が擦り切れ、足が痛んで割れ、血が滴るまで歩きました。永遠の父なる神に足を治してくださいるようにお願いすると、祈りは答えられ、わたしたちの足は癒されました。」

彼らは野宿をしたり、道の近くの納屋で寝たりして夜を明かしました。道中、一家を監獄に入れてやると脅した人々もいました。彼らが自由の身であり、逃亡奴隷ではないことを証明する書類を持っていなかったからです。³⁰ また、橋のない深い川を渡らなければならないときもありました。彼らは暗い夜や凍のような朝を耐え忍び、できるときにはほかの人に手を差し伸べてきま

した。ノーブーに近づいたころ、病気の子供を祝福すると、その信仰によって子供が癒された経験もあります。

「喜び、賛美歌を歌い、神のかぎりない慈しみと憐れみに感謝しながら旅を続けました」とジェーンは語りました。

「神の恵みがありますように」とジョセフは言います。「あなたたちはもう、友人に囲まれているのですから。」

マニング一家は、1週間スミス家に滞在しました。その間、ジェーンはノーブーに送った荷物を探しましたが、途中で紛失したか、盗まれたということしか分かりませんでした。一方、彼女の家族は、それぞれ仕事や住む場所を見つけて間もなく出ていきました。

ある朝、ジェーンが泣いているのに気づいたジョセフは、理由を尋ねました。「皆、居場所を見つけて出て行ったのに、わたしは何も見つけていません」とジェーンは答えます。

「よろしければ、ここがあなたの家になりますよ」とジョセフは彼女を安心させました。ジョセフはジェーンをエマのもとへ連れていき、状況を説明します。「ジェーンには家がないんだ。彼女のための部屋はあるだろうか?」

「ええ、彼女が望むなら」とエマは言いました。

ジェーンはすぐさま、賑わうスミス家の一員となり、ほかの家族も下宿人も彼女を歓迎します。ジェーンの荷物は見つかりませんでした。ジョセフとエマはすぐに店から新しい衣類を与えました。³¹

その秋、家族が新しい家に落ち着くと、エマは多妻結婚についてますます悩まされるようになります。³² 13年前の彼女に対する啓示の中で、主はエマが聖約を尊んで絶えず戒めを守るなら、義の冠を授けると約束されました。主はさらに言われました。「あな

たはこのことを行わなければ、わたしのいる所に来ることはできない。」³³

エマは、ジョセフと主と交わした聖約を守りたいと思いましたが、多妻結婚はしばしば耐え難いものでした。ジョセフの多妻結婚の妻たちを一家に迎えることを許していても、エマは彼女たちの存在を不快に思い、思わしくない態度で接することもあったのです。³⁴

結局、エマはエミリーとエライザ・パートリッジに、家を出ていくよう求めました。そばにいたジョセフと一緒に、エマは姉妹たちを部屋に呼ぶと、すぐさまジョセフとの関係を終わりにしなければならぬと伝えます。³⁵

捨て去られたと感じたエミリーは、エマとジョセフに腹を立て、部屋を出ていきました。「主が命じられるときには、主の言葉を軽んじてはなりません」とエミリーはつぶやきます。彼女はエマの望むようにするつもりでしたが、結婚の聖約を破ることは拒みませんでした。

ジョセフは姉妹たちの後を追って部屋を出ると、1階でエミリーを見つけました。「エミリー、大丈夫かい？」

「このような状況では、だれもがこのように感じるでしょうね。」エミリーはジョセフをちらりと見て言います。今にも地の底に沈みそうなほど暗く見えるジョセフを、エミリーは気の毒に思いました。彼女はさらに何か言おうとしましたが、言葉が出る前に、ジョセフは部屋を出て行ってしまいました。³⁶

何十年もの時が過ぎ、歳を取ったころ、エミリーは当時のつらい日々を振り返っています。その年になってようやく、エミリーは多妻結婚に対するエマの複雑な心境と、それが彼女にもたらした痛みを、よりよく理解できるようになったのです。³⁷

「エマや、ほかのどの女性にとっても、その当時多妻結婚を実施するというのはつらいことだったと分かります。そして、あの

ような状況でエマよりもよく対処できた人がいるかどうか、わたしには分かりません。」³⁸

「わたしではなく、神が裁かれるのです。」エミリーはそう結んでいます。³⁹



力を合わせて

1843年11月初旬、フィービー・ウッドラフは、4か月にわたって東部諸州へ伝道に出ていたウイルフォードの帰宅を温かく迎えます。ウイルフォードは家族への土産を持ち帰り、荷馬車には *Times and Seasons* (「タイムズ・アンド・シーズンズ」) の事務所用の印刷用具を積んでいました。フィービーと子供たちは、その事務所に住んでいます。¹

7月にもう一人の娘を出産したフィービーは、1か月近く、ウイルフォードの到着を首を長くして待っていたのです。ウッドラフ家は非常に仲が良く、ウイルフォードが伝道で家を離れるのを嫌がっていました。ほかの使徒やその夫人たちとは違い、彼らはまだ永遠に結び固められておらず、儀式を受けるのを心待ちにしていました。

ウイルフォードが留守の間、フィービーは彼に手紙を書き、二人の愛が永遠に引き裂かれるようなことがあると思うかと尋ねます。ウイルフォードは、二人の愛は墓を越えて深められるという願いを表した詩で返事を書きました。²

ウィルフォードの帰還から1週間が過ぎた11月11日、ウッドラフ夫妻はジョンとレオノーラ・テラーの家を訪ねます。ここではハイラム・スミスが、復活と贖い、また新しくかつ永遠の聖約による昇栄について教えていました。それからハイラムはフィービーとウィルフォードを永遠に結び固め、皆は楽しい夕べをともに過ごしました。³ウッドラフ夫妻は、間もなくエンダウメントを受ける備えを始めます。

最初のエンダウメントから1年以上が経過したその秋のはじめ、ジョセフはさらに多くの聖徒にエンダウメントを授け始めます。約束どおり、ジョセフは女性にもエンダウメントを授け、9月28日にはノーブーのマンションハウスにて、エマに儀式を施しました。⁴エマは程なくして、ジェーン・ロー、ロザンナ・マークス、エリザベス・ダーフィー、メアリー・フィールディング・スミスに洗いと油注ぎを行いました。末日において、女性が初めて神殿儀式を執行したのです。⁵

エマはその後数週間のうちに、ルーシー・スミス、アン・ホイットニー、マーシー・トンプソン、ジェネッタ・リチャーズ、レオノーラ・テラー、メアリー・アン・ヤングらに儀式を施しました。間もなくほかの女性たちも、エマの監督の下、儀式を執行するようになります。⁶

12月には、フィービーとウィルフォードが洗いと油注ぎ、エンダウメントの儀式を受けました。⁷その年の終わりまでに、42人の男女がエンダウメントを授けられます。彼らはジョセフの店の2階にしばしば集まっては、祈り、永遠に関する事柄について学んだのです。⁸

その秋、エンダウメントを受けた聖徒たちと定期的に集会を持つ一方で、ウィリアム・ローは自分が不貞の罪を犯したという事実

をジョセフとハイラムに隠していました。罪を犯したウィリアムは、自分の心に背いたと感じていたのです。⁹

このころ、ハイラムは結婚に関する啓示の写しをウィリアムに渡します。「家に持ち帰って読んでください。取り扱いには注意して、また持って来てください」とハイラムは言いました。ウィリアムは啓示を研究し、妻のジェーンに見せます。ウィリアムはその信ぴょう性に疑問を抱きましたが、ジェーンはそれが正しいことであると確信していました。

ウィリアムがジョセフに啓示を見せると、ジョセフはそれが本物であることを確認します。¹⁰ウィリアムはその教えを断念するよう嘆願しましたが、ジョセフは、主が多妻結婚について聖徒たちに教えるよう自分に命じられたこと、もし従わなければ罪ありとされることを証言しました。¹¹

ある時、病気にかかったウィリアムは、ついに自分が不貞を働いたことをハイラムに告白します。生きるも死ぬも、自分にはその価値がないと感じていることを認めたのです。それでもウィリアムは、ジェーンと永遠に結び固められたいと思っており、それが可能であるかをジョセフに尋ねました。ジョセフがその問いを主に差し出すと、ウィリアムは不貞を働いたために儀式を受けることができないと、主は明らかにされます。¹²

今やウィリアムの心は、ジョセフに対する怒りで燃え始めました。¹³ 12月下旬、ウィリアムとジェーンは、エンダウメントを受けた聖徒たちに会うことを止めてしまいます。¹⁴ジェーンは、財産を密かに売り、ノーブーから去ることを勧めますが、ウィリアムはジョセフを打ち負かしたいと思っていました。¹⁵彼は預言者に敵対する人々と密かに画策を始め、間もなく大管長会の地位を失います。

ウィリアムは、ジョセフとのかかわりを断つことができ何よりだと明言しました。ところが、ジェーンが勧めたようにノーブー

を離れて新たな道を行く代わりに、ウィリアムはかつてないほど預言者に妨害を加え、その死を求めてさらに躍起になったのです。¹⁶

ウィリアム・ローの背教は不穏なものでしたが、今までに例のないものではありませんでした。1844年のはじめ、肌寒い日曜の朝のこと、「神にかかわる事柄を受け入れる心の準備をさせようと、わたしはこれまで何年も聖徒たちに働きかけてきました」と、ジョセフは会衆に向けて語りました。「しかし、よく目にしているように、ある人々は神の業のためにあらゆる苦しみを受けた後、何か自分たちの言い伝えと相いれない事柄に出会うと、たちまちガラスのように砕け散ってしまいます。」

教会が組織されてからというもの、ジョセフは、自分が教えた原則を受け入れられなかったり、預言者はこうあるべきだという期待に自分がこたえられなかったときに、人々が信仰を失うのを見てきました。教会を離れる人々は、多くの場合、静かに去って行きました。ところが、エズラ・プース、ウォレン・パリッシュ、ジョン・ベネットのような人々の場合、預言者、教会、その教えに敵対するに至り、それはしばしば聖徒らに対する暴力へと発展したのです。ウィリアムがどのような反応を示すかは、まだ分かりません。

一方ジョセフは、神殿で行われる救いの儀式に向けて聖徒たちを備え続けました。「今、この神殿が完成して、そこに入ることができたらどんなによいでしょう」とジョセフは大勢の聴衆に語りました。「すべての聖徒に勧めます。力を尽くして生存するすべての親族を神殿に集め、彼らが結び固められて救われるようにしてください。」¹⁷

しかし、神殿を完成させることができ初めて、聖徒たちにとってそれが可能になることを預言者は承知していました。ジョセフはすでに、ノーブー周辺地域での混乱が高まっていることを懸念していました。夏に行われた州議会議員選挙の後、預言者を批判する人々は、聖徒たちの投票を左右したとして預言者を非難し、抗議します。「そのような人間は、とりわけ自らを大きな集団の長の身に置いたときに、最も危険な人物となり得る」と、彼らは断言するのです。¹⁸

緊張がどれほど速く増幅するかを心得ていたジョセフは、公に様々な意見を交換する場で聖徒たちを擁護できる協力者を、政府の中に見つけないかと思っていました。数か月前、預言者はこれから行われる国政選挙の5人の大統領候補者に手紙を書きました。ミズーリ州における損失を取り戻そうとする、聖徒たちの取り組みを支援してくれるかを知るためです。候補者のうち、3人が返事をくれました。そのうちの二人は、補償を検討するのは州の責任であり、大統領が出る幕ではないと主張します。3人目は同情的ではありましたが、最終的には曖昧な返答で手紙を終えていました。¹⁹

候補者たちが援助に対して消極的であることに失望したジョセフは、自らアメリカ合衆国の大統領候補になることを決意します。選挙に勝つ見込みは低いものでしたが、ジョセフは自分が立候補することで、聖徒たちの抗議を公にし、不当に扱われてきた人々の権利を擁護しようとしたのです。預言者は、何百人もの聖徒たちが、自分に代わって国中で選挙運動をしてくれると見込んでいました。

1844年1月29日、十二使徒定員会はジョセフを大統領候補者として正式に推薦し、預言者もその推薦を受諾しました。「大統領の座に就いたなら、わたしは人々の権利と自由を守ります。」²⁰

一方、南アフリカの沿岸を離れた捕鯨船において、アディソン・プラットは、船員たちが4艇の小型ボートを海に下ろし、巨大なクジラを追って全力で漕ぐ様を見ていました。ボートをクジラの横に近づけ、男たちが鉤もりをその背に打ち込むと、クジラは水中深く沈み、ボートは波頭はとうに引き寄せられます。

その素早い動きで曳航索えいこうさくが切れてしまうと、クジラは再び水面に出て、今度は船の近くまで来ました。もっとよく見ようとマストに上ったアディソンが目にしたのは、大きなクジラが、その力強い体に刺さった2本の鉤から逃れようと、うなりながら身をよじらせて水を吹き出している姿でした。ボートが近づくと、クジラは攻撃を避けようと再び潜り、さらに遠くで水面に浮かび上がります。男たちはもう一度追跡しようと試みましたが、クジラは行ってしまいました。

その様子を見ながら、アディソンはノーブーに移って間もないころに受けた祝福師の祝福を思い出しました。ハイラム・スミスは、アディソンが「出て行って、地の面をあちらこちらに行き来する」ことを約束しました。祝福を終えると、ハイラムはこう告げます。「あなたは捕鯨に行くべきだと思います。」²¹

アディソンと仲間の宣教師たちが海に出てから、すでに数か月がたちます。一行は大西洋を南下して喜望峰を回り、オーストラリアの先の島々に向かっていました。ハワイ行きの船を見つけられなかったため、アディソンたちはさらに南方タヒチに向かう捕鯨船の乗船券を予約しました。

航海はほぼ1年を要するため、アディソンと宣教師たちは、船員仲間たちと回復された福音について話そうとすでに試みていました。

捕鯨船での日々は楽しいものでしたが、夜になると、アディソンは時折不吉な夢に悩まされます。ある晩アディソンは、ジョセフと聖徒たちが船に乗り、嵐に向かって突き進んで行く夢を見ま

した。船は浅瀬を突っ切ると海底にぶつかり、船体は粉々になりました。浸水すると、船首が水の中に沈み始めます。聖徒たちの中には溺死した者もいれば、沈みゆく船から何とか逃げ出した者もいましたが、結局は飢えたサメに食べられてしまうのでした。²²

数日後に見た別の夢では、自分の家族と教会がノーブーから離れるのを目にします。彼らが肥沃な谷に落ち着くの見届けまで、アディソンは長い間探しました。その夢の中で、ルイーザと子供たちは、耕された畑に囲まれた、山腹の小屋に住んでいました。彼女はアディソンを迎えると、畑の上端の方にある家畜小屋や乳牛の牧草地を見ようと彼を散歩に誘います。庭には柵がないため、豚の世話に手がかりましたが、ルイーザには土地を見守ってくれる良い番犬がいました。²³

このような夢から目を覚ますと、アディソンは家族のことが心配になり、敵が再び聖徒らを苦しめているのではないかと恐れるのでした。²⁴

その冬、マーシー・フィールディング・トンプソンとメアリー・フィールディング・スミスは、神殿建設の資金調達の一環として、ノーブーの女性たちからペニーを集めていました。前年の暮れ、シオンを築くために何ができるかを知ろうと祈っているとき、マーシーはペニー基金を始めるようにとの靈感を受けます。「神殿のためのガラスと釘を買うために、姉妹たちが1週間に1セントをささげられるようにしなさい」と御霊が彼女にささやいたのです。

マーシーがその案をジョセフに申し出ると、預言者はそれを進めるように、そして主が彼女を祝福してくださるだろうと告げました。女性たちはマーシーの計画に熱心にこたえます。毎週、

マーシーとメアリーはペニーを集め、支援をしてくれた女性たちの名前を丁寧に記録しました。

ハイラムも女性たちの活動を奨励し、大管長会として全面的に支援することにしました。自分のペニーをささげたすべての女性は、主の律法の書にその名を記されるであろうとハイラムは宣言します。その書は、ジョセフと書記たちが、什分の一や啓示、そのほか神聖な事柄を記したものです。²⁵

ノーブーでペニー基金が行われるようになると、姉妹たちはイギリスにある *Millennial Star* (「ミレニアルスター」) の事務所に手紙を書き、当地の教会の女性たちからもペニーを募りました。「これは、こちらにいるわたしたちが神殿基金のために毎週わずかな寄付を始めたことをお知らせするものです」と姉妹たちは綴っています。「すでに1,000人が参加しており、さらに多くの人々も加わる予定で、この偉大な業を大きく前進させる助けになるとわたしたちは信じています。」²⁶

イギリス伝道部の女性たちは間もなく、自分たちの集めたペニーを海の向こう、ノーブーまで送ったのでした。

ウィリアム・フェルプスの助けを得て、ジョセフは大統領としての独自の政策を展開し、国の至る所で公表するためにパンフレットの下書きをします。²⁷ジョセフは、暴徒を罰するためのさらなる権力を大統領に与え、奴隷解放に向けて奴隷の所有者に補償を行い、刑務所を教育と更生の場に変革し、アメリカインディアンの全面的な承諾をもって、国土を西部に拡大することを提案しました。有権者に向けて、自分が末日聖徒だけでなく、すべての人々を擁護する者であるということを知ってほしかったのです。²⁸

預言者は、再臨に向けて世を備えるに当たり、人々が神の律法と調和して生きることを選ぶ、神権政治による民主主義によって、正しく平和な社会を築くことができると信じていました。もし預言者の選挙運動が失敗に終わり、虐げられ、抑圧された人々が保護を受けることなく取り残されるなら、アメリカ合衆国以外のどこかに、末日においてそのような人々を守る場所を築きたいと、ジョセフは考えていたのです。

ミズーリ州やイリノイ州での絶え間ない脅威に加え、聖徒たちが増加の一途をたどっていたため、ジョセフは近ごろ、西部に自由の地を探すよう促されていました。ノーブーを立ち去るつもりはありませんでしたが、市が対応し得る以上に教会が成長することを、ジョセフは期待していたのです。ジョセフは、聖徒たちが地上に神の王国を打ち建てる場所を見つけ、また福千年に向けて主の民を治めることのできる、正しい法律を確立したいと思っていました。

ジョセフはこのことを念頭に、当時アメリカ合衆国の国境を越えていたカリフォルニアやオレゴン、テキサスといった地を思い浮かべていたのです。「派遣団を送り、その地を調べてください」と、預言者は十二使徒に指示します。「神殿の完成後に移ることができ、1日で町を築き、健全にわたしたち自身の政府を持てるような良き場所を、見つけていただきたいのです。」²⁹

3月10日、11日の両日、預言者は男性たちの新たな評議会を組織します。地上に主の王国を築くうえでの監督を担う場です。³⁰その評議会は、神の王国の評議会、または五十人評議会として知られました。評議会において活気ある話し合いが行われることを望んでいたジョセフは、心の思いを話し、感じていることを発言するよう会員たちを励ましました。

最初の集会を終える前、評議会の会員は、神の御心を反映した新たな憲章の下に、自分たちの政府を作ることについて熱

心に語り合いました。彼らは、それが人々にとっての基準となること、また末日に御自分の子供たちを集めるため、主がもろもろの国民に一つの旗を掲げるというイザヤの預言を成就するものになることを信じていたのです。³¹

このころ、教会指導者たちとの集会において、ジョセフは幾分意気消沈しているように見えました。預言者は、何か重大なことが起ころうとしていることを確信していたのです。「敵がわたしの命を奪うのかもしれませんが。そうなったら、わたしが持っている鍵と力は、皆さんに授けられていなければ地上から失われてしまいます」と預言者は言いました。主の業が続くことを確信して死ぬことができるように、十二使徒にすべての神権の鍵を授けなければならないと感じていることを告げたのです。³²

「今から後、皆さんが自分たちの後継者を任命するまで、この教会を導く責任は皆さん、すなわち十二使徒の肩に置かれなければなりません」と、預言者は使徒たちに語ります。「こうしてこの力とこれらの鍵を、地上に存続させることができるのです。」

待ち受ける道のりは容易なものではないだろうと、ジョセフは彼らに警告しました。「もし皆さんが命を犠牲にするよう召されたら、命をささげてください」と預言者は言います。「皆さんを殺した後、敵はもはや害を加えることはできません。危険のただ中に、死の谷に向かう必要があるだろうとも、悪を恐れなくてください。イエス・キリストは、皆さんのために死んでくださったのです。」³³

ジョセフは、自分がいなくとも主の業を遂行できるよう、必要なすべての神権の鍵を使徒の頭に結び固めます。中には、結び固めの神聖な鍵も含まれていました。³⁴ジョセフはさらにこう述べています。「わたしはこの教会を導くという重荷と責任を、わたしの肩から皆さんの肩に移します。さあ、力を合わせ、雄々

しく担ってください。主はわたしにしばしの休みを与えられるからです。」

ジョセフはもはや、気を落としてはいませんでした。表情は晴れやかで、力がみなぎっています。「わたしの心はコルクのように軽くなりました。自由になったと感じます。」預言者はこう口にしました。「こうして解放されたことを神に感謝します。」³⁵



公的不法妨害

大管長会から解任された後、ウィリアム・ローはジョセフを避けるようになりました。1844年3月下旬、ハイラムは二人を和解させようと試みましたが、ウィリアムは預言者が多妻結婚を支持するかぎり、関係を修復したくはないと言います。¹同じころ、ジョセフはウィリアムと町にいる数人が、自分と家族を殺そうと共謀していることを耳にしました。²

ジョセフは共謀者たちに対してきっぱりと声を上げ、聖徒たちにこう述べました。「彼らに対する逮捕状を請求するつもりはありません。彼らのだれをも恐れていないからです。彼らには、卵を抱いてじっとしている鶏さえ脅かすことはできません。」³預言者は、ノーブーで反逆の気運が増していることを懸念しながらも、死の脅威は、聖徒たちに教えを説く自分の時間が終わりに近づいているという予感をより確かなものとしただけでした。⁴

その春、エマー・ハリスという名の教会員が、ジョセフに知らせを携えてやって来ました。共謀者たちが、ハリスと19歳の息

子、デニソンを彼らの集会に招待したと言うのです。「ハリス兄弟、このような集会に出たり、彼らに関心を持たないように忠告します」とジョセフは言いました。しかし、共謀者たちへの対応を探るべく、デニソンには集会に出席してほしいと預言者はエマーに告げます。

その後、ジョセフはこれからの割り当てに備えさせるために、デニソンと彼の友人、ロバート・スコットに会って話をしました。共謀者たちと接触するには危険が伴うことを知っていたので、ジョセフは若い二人に、集会では可能なかぎり口を開かず、だれも怒らせることのないように警告しました。⁵

1844年4月7日、総大会の2日目のこと、ジョセフは陰謀に関する懸念には触れず、聖徒たちに向けて説教をしました。預言者が台に立つと、群衆の中を強い風が吹き抜けました。「皆さんが心から注意を向けてくださらなければ、わたしの話を皆さんの耳にお届けすることはできません。」風の吹き荒れる中、ジョセフは大声で叫びます。預言者は、最近亡くなった友人、キング・フォレットについて話をすると言います。愛する者を亡くした人々、皆に慰めをもたらすためです。⁶

ジョセフはまた、すべての聖徒たちに、次の世で自分たちを待ち受けるものを垣間見てもらうことを望んでいました。たとえ一瞬でも、霊的な幕を開き、神の本質について、また神から与えられた可能性について教えたいと思っていたのです。

「神とはどのような御方でしょうか」と預言者は聖徒たちに尋ねました。「どなたか御存じの方はいらっしゃいますか。神を目にしたり、神の言葉を耳にしたり、語り合ったことのある人はいますか。」ジョセフは集まった人々に問いを投げかけます。「もし幕が今日裂け、この世界の軌道を保ち、あらゆる世界と万物を

その力で支えておられる偉大な神が御自身を現されたなら、すなわち、もし今日皆さんが神を目にしたならば、皆さんは神が人に似た形をしておられること、体、形、姿のすべてが、皆さん自身のようにであられることを知るでしょう。」

知識を求め、聖約を守ることは、御父が聖徒らのために備えられた究極の計画を成就する助けになると、ジョセフは説明しました。「皆さんはどのようにして自ら神々……となるかを学ばなければなりません。……低い階級から別の階級へ、恵みから恵みへ、高みから高みへと進んで行き、……永遠の力をもって座に着いている人々のように、栄光のうちに座に着くことができるようになるのです。」

この計画は死に打ち勝つものであることを、預言者は集まった人々に思い起こさせます。「嘆き悲しむ者にとって、この知識は何と大きな慰めを与えることでしょうか。地上の幕屋は横たえられて朽ちても、彼らは〔不死不滅の栄光をもって〕再びよみがえり……そこにはもはや悲しみも、苦しみも、死もなく、彼らは神の相続人となり、イエス・キリストと共同の相続人となるのです。」⁷

その過程には時間がかかり、多くの忍耐、信仰と学びを必要とします。「この世ですべて理解すべきものではありません」と、預言者は聖徒たちを安心させました。「すべてを理解するには、死んだ後にも長い時間がかかるのです。」

説教が終わりに近づくと、ジョセフは内省的になり、亡くなった家族や友人について話しました。「彼らがないのは少しの間にすぎません」と預言者は語ります。「彼らは霊の状態であり、わたしたちは世を去るときに、母親、父親、友人、すべての愛する人々と喜びの言葉を交わすでしょう。」幼子を亡くした母親たちに向けては、子供たちと再会することを約束しました。永遠に

において、聖徒たちはもはや暴徒を恐れながら生きることもなく、喜びと幸福の中に住まうと言います。⁸

聖徒たちの前に立つジョセフは今や、かつて森で知恵を求めた、粗野で教養なき農家の少年ではありませんでした。日ごとに、また年を重ねるごとに、主は石のごとくジョセフに磨きをかけ、御自分の御手によりよく使われる者として形造られたのです。⁹しかし、聖徒たちはジョセフの生涯と使命についてほとんど理解していませんでした。

「皆さんはわたしの心を知り得ません」と預言者は言いました。「わたしの経験してきたことを信じなくても、わたしはだれもとがめません。もし自分が経験していなかったなら、わたし自身も信じていなかったでしょう。」預言者はいつの日か、自分の生涯が正しく評価され、聖徒たちが自分についてよりよく理解できるようになることを望みます。

ジョセフが説教を終えて席に着くと、聖歌隊が賛美歌を歌いました。ジョセフはそれまで、2時間半近くにわたって話し続けていたのです。¹⁰

ジョセフの説教は聖徒たちに靈感をもたらし、皆は御霊で満たされました。大会の1週間後、エレン・ダグラスはイギリスにいる両親にあてて、「耳にした教えに、わたしたちの心は喜びで満たされました」と書いています。1842年、エレンと夫と子供たちは、ノーブーに向けて航海した最初のイギリス人改宗者たちの中にいました。ジョセフが説教で教えた真理は、多くの犠牲を払って聖徒たちと集合した理由を、彼らに思い起こさせるものでした。

多くのイギリス人改宗者と同じく、ダグラス一家はほとんどの貯金をノーブーへの移住に費やしており、困窮状態にありまし

た。エレンの夫ジョージは到着して間もなく亡くなり、彼女自身もひどい高熱に襲われ、8人の子供たちの世話をすることができませんでした。程なくして友人が、扶助協会から助けを得るよう勧めます。エレンは、町に到着してから扶助協会に加わっていました。

「わたしは助けを求めることを躊躇しました。」エレンは大会後に綴った両親への手紙でそう告白しています。「ところが彼女は、わたしには助けが必要であり、長い間病気も患っているのだから、もしわたしが助けを求めないのなら、彼女が代わりに依頼すると言いました。」エレンは子供たちが多くの物、とりわけ衣服を必要としていることを承知していました。エレンはとうとう、扶助協会の会員に助けを頼むことに同意します。

「彼女は、わたしが何を一番必要としているかを尋ねてきました。そうして彼女たちは荷馬車でやって来て、これまで世界中のどんな場所でももらったことのないようなプレゼントを持って来てくれたのです。」

彼女と子供たちは土地の購入資金を貯める間、借りた土地で牛を飼い、数十羽の鶏を育てました。「これまでの人生で今が一番楽しい」と、エレンは両親に伝えました。「わたしは、神がイギリスへイスラエルの長老たちを送ってくださり、彼らを信じる心をわたしに与えてくださったことに喜びを感じ、神をほめたたえます。」

彼女は、預言者ジョセフ・スミスについての証で手紙を結んでいます。「わたしの話したことが真理であると知る日が来でしょう。」¹¹

その春、デニソン・ハリスとロバート・スコットはウィリアム・ローの秘密の集会に出席し、そこで耳にしたことをジョセフに報

告します。¹²ウィリアムは当時、自分が教会を改革する者だと考えていました。彼はモルモン書と教義と聖約を信じているといまだに公言していましたが、多妻結婚と、ジョセフが近ごろ教えを説いた神の本質については怒りを募らせていました。¹³

デニソンとロバートは共謀者の中に、ウィリアムの妻ジェーンと、彼の兄ウィルソンを見つけました。また、ロバートとチャールズ・フォスターもいました。神殿周辺の土地開発についてジョセフと衝突するまでは、ジョセフの友人であった人々です。¹⁴ジョン・ベネットの古くからの支持者であるチョーンシーとフランシス・ヒグビーも、地元の荒くれ者として知られるジョセフ・ジャクソンとともに出席していました。¹⁵

預言者は、デニソンとロバートが自分のために、進んで命を危険にさらしたことに感銘を受けます。共謀者との2回目の集会に続いて、預言者は若者たちにもう一度出席するよう指示しました。「何も発言しないでください。わたしや聖徒たちに対して共謀するような約束を決して交わしてはいけません」と預言者は勧告しました。ジョセフは、共謀者たちが命を奪おうとする可能性についても警告します。

その次の日曜日、デニソンとロバートがいつも集会の開かれる場所に行くと、マスカット銃や銃剣を持って見張りをする男たちがいました。二人は家に入り、共謀者たちが意見を戦わせるのに静かに耳を傾けます。ジョセフは死に価するという事で皆同意してはいましたが、その方法については合意に至りませんでした。

集会が終わる前、フランシス・ヒグビーは、共謀者一人一人に団結の誓いをさせました。部屋にいた男女はそれぞれ、右手に聖書を持って誓いの言葉を口にします。デニソンとロバートの番がまわってくると、二人は前に進むことを拒みました。

「ジョセフ・スミスに対する皆の力強い宣誓を聞かなかったのですか」と、共謀者たちは説き伏せます。「我々にはジョセフを破滅させ、人々を危険から救い出す厳粛な義務があるのです。」

「わたしたちが皆さんの集会に来たのは、皆さんがわたしたちの友であると思ったからです」と若者たちは言いました。「そこには何の悪意もないと思っていました。」

リーダーたちはデニソンとロバートを捕らえ、地下室に連行するよう見張り人に命じます。若者たちはそこでもう一度、宣誓する機会を与えられました。「まだ拒絶するつもりなら、我々は君たちの血を流さなければならない」と男たちは言います。

若者たちはこの度も拒否し、死を覚悟しました。

「待て！」地下室からだれかが声をあげました。「この件について話し合おう。」

共謀者たちはすぐさま再び論争を始めます。若者たちは、一人の男が、自分たちを殺すのはリスクが高すぎると話しているのを耳にしました。「奴らの親が搜索を始めたら、俺たちにとっては危ないことになる」と彼は説得します。

デニソンとロバートは武装した見張り人たちに川まで連れて行かれ、解放されました。見張り人たちは、「口を開こうものなら、おまえたちを見つけ次第、夜昼構わず殺す」と警告しました。¹⁶

若者たちはそこを離れるとすぐさま、ジョセフと、彼とともにいた用心棒にそのことを報告します。話に耳を傾けながら、預言者は若者たちが無傷であったことに感謝しつつ、深刻な表情を浮かべました。「兄弟たち、これがどのような結末をもたらすか、皆さんには分からないでしょう。」

「彼らがあなを殺すと思うのですか」と用心棒が尋ねます。「あなたは殺害されてしまうと言うのですか。」

ジョセフはその質問に直接答えなかったものの、ウィリアム・ローと共謀者たちは自分のことを誤解していると、若者たちに向けて断言しました。「わたしは偽預言者ではありません」とジョセフは宣言します。「闇の啓示を受けた訳でも、悪魔から啓示を受けた訳でもないのです。」¹⁷

春のざわめきの中、ジョセフは神による民主主義の理想的な体制と、それを治める法律と慣習について話し合うために、定期的に五十人評議会と集会を持っていました。4月の総大会から間もないある集会において、評議会はジョセフを預言者、祭司、王として支持します。

評議会の会員に政治的権威はなく、その支持により世間的に何らかの影響があった訳ではありません。しかし、それは再臨に先立って、地上における主の王国の頭としての、ジョセフの神権の職と責任を確認するものでした。また、それは救い主の称号である王の王にさらなる意味を与え、キリストが義にかなった聖徒たちを御国の民とし、祭司とするという黙示者ヨハネの証を暗示していました。¹⁸

その日の午後、ジョセフは評議会の数人が教会の会員でないことに言及します。五十人評議会においては、何であれ宗教的意見について話し合うことはないと言明し、預言者は宣言しました。「わたしたちはすべての人が平等の権利を持ち、敬われるべきであるという、明白な自由の原則に基づいて行動します。」ジョセフはそう告げます。「この組織において、すべての人は自由意志によって神を選び、自分にとって望ましい宗教を選ぶ特権があります。」

話しながら、ジョセフは長い定規を手にとると、大げさに学校の教師がするような仕草をしました。「不寛容な態度を取るよ

うな誘惑を少しでも感じたら、それをはねつけるべきです。」ジョセフは、宗教にかかわる不寛容の精神は、地を血で染めることになると言います。「あらゆる統治体制、あるいは政治的やり取りにおいて、人の宗教的な見解に疑問を投げかけるべきではない」と預言者は宣言しました。「人は宗教的差別から影響を受けることなく、法律によって裁かれるべきです。」

話し終えると、ジョセフは思いがけず定規を半分に折ってしまい、部屋にいた皆を驚かせます。

「定規〔訳注——ジョセフが折った定規 (ruler) と規則 (rule) の意味をかけている〕が我々の議長の手により折られたので、あらゆる専制政治は我々の前に打ち碎かれるであろう」と、ブリガム・ヤングが気の利いた冗談を言いました。¹⁹

4月の終わりごろまでに、ウィリアムとジェーン・ローたちはますます公然と敵対行為に手を染めるようになっており、32人の教会指導者から成る評議会は、二人とロバート・フォスターをそのクリスチャンらしからぬ振る舞いのために破門することとなりました。聴聞会で自己弁護をするように彼らを招集した者はいなかったため、ウィリアムは激怒し、評議会の決定を拒否します。²⁰

その後、何人かの使徒と大勢の長老たちが伝道に向けてノーブーを離れ、ジョセフの大統領選挙運動が始まると、教会を批判する人々はさらに声を上げるようになります。ロバート・フォスターとチョーンシー・ヒグビーは、預言者に対する訴訟に用いるための証拠を探しました。²¹ 4月21日、ウィリアム・ローは公の集会を開きます。ウィリアムは墮落した預言者としてジョセフを非難し、新たな教会を組織しました。

集会において、ウィリアムの追従者たちは、新しい教会の長として彼を就任させます。その後、彼らは毎週日曜日に集まり、他の不満を抱く聖徒たちを惹きつける方法を練ったのでした。²²

一方、若き新聞編集者のトーマス・シャープは、聖徒たちがイリノイに移って間もなく敵対するようになり、紙面をジョセフと教会に対する批判で埋め尽くしました。

「皆さんは、モルモン教会の指導者たちによる、度重なる侮辱と無礼について何も御存じないでしょう」と彼は言い放ち、聖徒らに対する非難を正当化します。「これらのことについて御存じであれば、そのような無法者、詐欺師、たかり屋の集まりを暴こうとする我々に、小言を言うようなことはできないでしょう。」²³

5月10日、ウィリアムと彼の追従者たちは、*Nauwoo Expositor*（「ノーブーエクスポジター」）を発行する計画を発表しました。彼らの言葉によれば、この新聞は「ノーブーの町で現実にあった事実に関する率直で簡潔、完全な声明」です。²⁴フランシス・ヒグビーは、自分の人格を公然と誹謗中傷したと非難してジョセフを訴え、一方ウィリアムとウィルソンは、ジョセフの多妻結婚を、姦通罪として告訴する根拠に用いました。²⁵

「神の王国に関しては、悪魔はいつも、神に対してまさに同じ時期に自分の王国を打ち建てます。」自分に対する偽りの訴えが山積する中、ジョセフは聖徒たちへの説教でこのように語りました。その後、ジョセフとエンダウメントを受けた聖徒たちは店の2階に集まり、敵から救い出されるようにと祈ります。²⁶ジョセフは逮捕を避けたいと思っていましたが、再び身を潜めたくはありませんでした。妊娠中のエマの具合が非常に悪かったため、そばを離れたくなかったのです。²⁷

5月の終わりになると、預言者は郡の中心地カーセージに向かい、自分に対する告訴への法的取り調べに応じるのが最善であると判断します。²⁸ 20人以上の友人たちが、町までジョセフ

に同行しました。訴訟が判事の前に提示されるも、検察官側には証人がおらず、取り調べを進めることができません。聴聞会は数か月延期となり、執行官はジョセフに帰宅を許可しました。²⁹

ジョセフの釈放は、トーマス・シャープを激怒させます。「ジョー・スミスはノーブーの外では安全でないということを確信するに十分なことを我々は見聞きしており、近々、暴力的手段による彼の死を聞いても我々は驚かないであろう」と彼は社説の中で宣言しました。「ノーブーでの緊張は今や頂点に達しており、ほんの少しの挑発行為より、激しい怒りとなって噴出するだろう。」³⁰

ジョセフへの反対が増大しながらも、聖徒たちは自分たちの町を築き続けます。ルーザ・プラットは、夫が南太平洋へ伝道に出ている間、4人の娘たちの寝食をまかなうのに苦勞していました。出発前、アディソンは少しばかりの材木を購入していましたが、ルーザがその土地で家を建てるに十分なものとは言えません。隣接する州にわずかな土地を所有していたルーザは、近くの製材所へ行くと、自分の土地を担保に、掛けで材木を購入できないかと頼みました。

自分が女性であるために断られるのを心配して、「女性を疑う必要はありません」と、ルーザは所長に主張します。「一般的に、女性の方が男性よりきっちりしていますから。」

所長は、彼女に掛け売りをするに関して心配はないようです。程なくして、ルーザは小さな家を建てるのに必要な材木を手に入れたのでした。残念ながら、仕事のために彼女が雇った男たちには度々失望させられることとなり、信頼できる職人を見つかるまで、新たな職人を何度も雇わざるを得ませんでした。

家の建築中、ルーザは裁縫をして働きます。娘たちがはしかにかかると、ルーザは病気が回復するよう祈りながら、昼夜を問わず看病しました。外から見るかぎり、彼女はそのような状況でもうまくやっているように見えました。しかし、自分の肩にかかる重荷を思うとき、ルーザは度々孤独や無力さ、ふがいなさを感じるのです。

家が完成すると、ルーザは家族を入居させます。彼女は自分で作った敷物を敷き、自ら稼いで購入した家具を備え付けました。

数か月のうちに、ルーザは製材所への負債を返済し、物々交換や掛け買いをしながら、わずかな収入で娘たちと生き延びました。食糧が底をつき、ルーザが新たな借金を負う中、子供たちは「母さん、どうしよう」と尋ねます。

「主に文句を言いなさい」とルーザは素っ気なく答えます。彼女は、自分の祈りは何だったのかと思いました。自分に借金がある人々について文句を言ったのでしょうか。自分を雇って働かせても賃金を支払わなかった人々に、ルーザは抗議したのでしょうか。

ちょうどそのとき、山積みの木材を携えた男が到着します。ルーザが売り、収入を得られる資源です。それから別の男が、45キロの小麦粉と11キロ近くの豚肉を持ってやって来ました。

「あら、母さんはなんて幸運な人なの!」と娘のフランシスが口にします。

感謝でいっぱいになったルーザは、自分のつぶやきを控えようと決意したのでした。³¹

ウィリアム・ローの宣言どおり、*Nauwoo Expositor*（「ノーブーエクスポジター」）は6月初めにノーブーの通りで配られました。前

置きにはこのように宣言されています。「我々は、ジョセフ・スミスによる不道徳な原則を破壊することを切に求めている。それがイエス・キリストと弟子たちの教える原則と調和してはいないということを、我々は確かに知っている。」

紙面上で、ウィリアムと追従者たちは主張を繰り広げます。ジョセフはエンダウメントを紹介し、多妻結婚を実施し、昇栄と神の本質について新たな教義を教えることにより、回復された福音から逸れてしまったと言うのです。³²

彼らは郡の住民たちに、聖徒たちの政治的影響力が高まっていることを警告しました。また、ジョセフが教会と、州におけるそれぞれの役割を混同しているとして非難し、大統領への立候補についても糾弾したのです。

「我々の大いなる力をもって立ち上がり、地の表から暴君と異端者を一掃しようではないか」と、彼らは不気味な口調で宣言しました。³³

その新聞が発行された翌日、ジョセフは *Expositor* (「エクスポジター」) についての対策を協議するためノーブー市議会を招集します。聖徒の隣人たちの多くは、すでに教会に対して敵意を抱いていたため、ジョセフは *Expositor* (「エクスポジター」) が彼らを暴動へ駆り立てるのではないかと懸念しました。「そのような媒体が存在するのは安全とは言えない。彼らはそこで暴徒たちの思考を形成している」とジョセフは言います。³⁴

ハイラムは、自分たちをミズーリから追いやった暴徒たちのことを市議会に思い起こさせました。ジョセフと同じく、それを食い止める法律を可決しないかぎり、その新聞は聖徒らに対立するよう人々を扇動するのではと懸念していたのです。

土曜の夜も更けていたので、皆は議会を月曜まで休止としました。³⁵ 次の月曜日、市議会は朝から夜まで開かれ、再び対策についての話し合いが行われました。ジョセフはその新聞が公的

不法妨害であると宣言し、印刷機を破壊することを提案します。³⁶

ジョン・テラーは同意しました。*Times and Seasons*（「タイムズ・アンド・シーズンズ」）の編集者として、ジョンは報道と言論の自由を重んじていましたが、ジョセフと同様、偽りの中傷から自分たちの身を守る憲法上の権利を信じていました。*Expositor*（「エクスポジター」）とその印刷機を破壊することが論争の的になったとしても、彼らは合法的にそれを実行する権利を法律が認めていると信じていたのです。

ジョセフは報道の自由についてイリノイ州憲法から声に出して読み、部屋にいたすべての人々が法律を把握できるようにしました。権威ある法律書のページをめくると、別の議員が、地域の平和を乱す妨害行為を絶やすことの法的正当性について読みました。法的根拠が提示されると、ハイラムは印刷機を破壊し、活字を四散しさんさせるというジョセフの提案を繰り返したのです。³⁷

ウィリアム・フェルプスは、アメリカ合衆国憲法およびノーブー市憲章、土地に関する法律を見直したことを議会に話しました。ウィリアムによると、新聞社は妨害行為を犯しており、市が即刻破壊すると宣言することは法的に十分正当であると言います。

議会は投票により印刷機の破壊を決定し、ジョセフは市の警察署長に実行を命じます。³⁸

その晩、ノーブーの警察署長は100人近くの男たちを引き連れて*Expositor*社に到着しました。彼らは大槌で社屋に押し入ると、印刷機を通りに引きずり出して粉々にしました。それから活字の入った引き出しの中身をかき出し、がれきに火を放ちます。新聞の残部はすべて、炎の中に投げ込まれました。³⁹

翌日、トーマス・シャープは号外で印刷機の破壊について報道します。「こうなれば、戦争と撲滅しかない。市民は立て！一人残らず！」と書きました。「とやかく論議をしている時間はない。各人が自らの成すべきことを果たすのみ、あとは火薬と銃弾に物を言わせるだけだ！」⁴⁰



ほふり場に引かれて行く 小羊のように

トーマス・シャープが武装を呼びかけると、ノーブーの聖徒たちに対する怒りは野火のごとくその地方に広がりました。住民は *Expositor* 社の破壊に抗議し、ウォーソーとカーセージの近くに結集します。町の長は地域の男たちに、聖徒に対する蜂起への参加を求めました。¹ 2 日間で、300 人から成る武装暴徒がカーセージに組織され、ノーブーに進軍し、聖徒らを撲滅する準備は整いました。²

ノーブーから 160 キロ近く北東では、ピーター・モーガンとジェイコブ・パートがホテルで食事をしていました。ジョセフの指示により、彼らは教会が購入する炭層を探しに、その地域へやって来たのです。石炭を採掘し、教会の蒸気船、*Maid of Iowa* (メイド・オブ・アイオワ) 号を使ってミシシッピ川で運べば利益が得られると、ジョセフは確信していました。³

食事が運ばれるのを待つ間、新聞を開いたピーターは、ノーブーで大規模な抗争があり、数千人が犠牲になったという記事

を読みました。衝撃を受け、メアリーと子供たちのことが心配になったピーターは、ジェイコブにその記事を見せました。

そうして二人は次の船で帰宅します。ノーブーから 50 キロ近くのところに差し掛かったとき、抗争は起きていなかったということを知り、ピーターたちは安堵しました。しかしながら、暴力行為が勃発するのは時間の問題のように思えました。⁴

市議会は、印刷機を破壊するという決定に当たり論議を尽くしたにもかかわらず、その後起こる抗議については過小評価していました。ウィリアム・ローは町から姿を消していましたが、彼の追従者の中には神殿を壊し、ジョセフの家に火をつけ、教会の印刷所を破壊すると脅しをかける者もいました。⁵フランシス・ヒグビーは、ジョセフと市議会の議員たちを、印刷機の破壊時に暴動を扇動したかどで告訴します。ヒグビーは、10 日以内で、ノーブーに一人のモルモンも残らないようにすると断言しました。⁶

6月12日には、カーセージからやって来た警官が、ジョセフと市議会議員たちを逮捕しました。ノーブー地方裁判所は、告訴が事実無根であるとしてジョセフたちを釈放しましたが、それはジョセフを批判する者たちの怒りをさらにかき立てます。翌日、ジョセフは 300 人の男たちがカーセージに集まっており、ノーブーに進軍する準備を整えているということを知りました。⁷

ミズーリ州で経験したような、近隣住民との全面戦争を防げないかと、ジョセフたちはフォード知事に急ぎの手紙を書いて市議会の取った行動を説明し、暴徒らの攻撃に抗する助けを嘆願しました。⁸ジョセフは聖徒らに、落ち着きを保つように、また町の防備を固め、決して騒動を起こすことのないようにと勧告します。それからジョセフはノーブー部隊を招集して市に戒厳令を敷き、通常法律を停止、軍部に統轄を委ねました。⁹

6月18日の午後、部隊はノーブーのマンションハウス前に集結します。民兵の指揮官として、ジョセフは軍服に身を包んで演台に立ち、男たちに向けて口を開きました。「わたしを滅ぼせば敵は満足するだろうと思っている人々がいます。しかし皆さんに申し上げますが、彼らはわたしの血を流すとすぐさま、完全な福音の霊をわずかにでも心に宿しているすべての人の血を求めてやって来るでしょう。」

剣を抜いて高く掲げると、ジョセフはこれまで認められることのなかった自由を守るため、男たちに呼びかけました。「皆さんは死ぬまでわたしとともに戦ってくれますか。命を危険にさらしてでも、わが国の法律を支持しますか」とジョセフは尋ねます。

「もちろんだとも！」と群衆は叫びました。

「わたしは皆さんを心から愛しています」とジョセフは言いました。「皆さんは苦難のときにわたしと一緒に耐えてくれました。わたしは皆さんを守るために喜んで自分の命をささげます。」¹⁰

市議会が印刷機を破壊した理由をジョセフから聞くと、トーマス・フォード知事は聖徒が誠意を持って行動したことを理解しました。地域にとって不法妨害となるものを公表し、破壊することについては法的根拠や前例がありました。ところが知事は市議会の判断には同意せず、彼らの行為が正当化できるとは考えていませんでした。結局のところ、新聞社を合法的に破壊するというようなことは、社会が通常そういった仕事を不法者らに任せていた時代においてはまれなことだったのです。10年以上前、ジャクソン郡の聖徒たちの新聞社を自警団が破壊したときもそうです。¹¹

また知事は、法的に何が許されていようとも、イリノイ州憲法下での言論の自由を守ることに重きを置いていました。「印刷機を破壊するに当たっての貴君の指示は、人民の法律と自由に対する非常にいまましい侵害行為であった」と知事は預言者への手紙に書きました。「それが虚言に満ちていたとしても、破壊する権限を認めるものではない。」

ノーブー市憲章は、預言者が考えているほどの権限を地元の裁判所に認めているわけではない、と知事はさらに主張します。フォード知事は、暴動のかどで告訴されたジョセフと市議会議員たちに、ノーブー市外の裁判所に出頭し、その指示に従うよう勧告しました。知事は預言者たちに向けて、「わたしは平和を保つことを切望しているのです」と言います。「ちょっとした軽率さが、戦争状態にまで発展するかもしれません。」もし市の指導者たちが自首して裁判を受けるならば、彼らを守ると知事は約束しました。¹²

カーセージは聖徒らを憎む男たちであふれていることを承知していたジョセフは、知事が約束を守れるのか疑わしく思っていました。だからといってノーブーに残っていれば、さらなる批判者たちの怒りを買って暴徒らを町に引き寄せ、聖徒たちを危険にさらすこととなります。ますます、聖徒を守る最良の方法は、ノーブーを発って西部へ行くか、ワシントン D. C. で助けを求めらるかだと思われました。

ジョセフは知事に手紙を書き、町を出て行く計画を知らせます。「あらゆる神聖なものによって、わたしたちは知事閣下が無力な子供たちを暴徒の暴力から守ってくださるよう要請するものです」とジョセフは書きました。もし聖徒が何か間違ったことをしたのであれば、自分たちはその誤りを正すために力のかぎり何でも行くとジョセフは断言します。¹³

その晩、家族に別れを告げたジョセフは、ハイラム、ウィラード・リチャーズ、ポーター・ロックウェルとともに小船に乗りこみ、ミシシッピ川を渡ります。船が水漏れしていたため、ポーターが漕ぐ間、兄弟たちとウィラードはブーツで水をかき出していました。数時間後の6月23日の朝、一行はアイオワ準州に到着、ジョセフはノーブーに戻り、馬を連れてきてくれるようポーターに指示します。¹⁴

ポーターが発つ前、ジョセフはエマへの手紙を託しました。そこには、もしエマや子供たち、そして母親の生活に必要なであれば、財産を売却するようとの指示が綴られていました。ジョセフは、気を落とさないようにとエマに告げます。「神の御心であるなら、わたしは再び君に会えるだろう。」¹⁵

その朝遅く、エマは帰宅して出頭するようジョセフを説得するため、ハイラム・キンボールと甥のロレンゾ・ワットソンをアイオワに送りました。ジョセフと兄のハイラムが出頭するまで、知事はノーブーを軍で占拠するつもりであるということ、二人はジョセフに伝えます。その後間もなく、ポーターはレイノルズ・カフーンとともに、町に戻ることを再度請うエマからの手紙を携えて戻りました。ハイラム・キンボール、ロレンゾとレイノルズは、ノーブーを去り、聖徒たちを危険にさらしているジョセフを、臆病者呼ばわりしました。¹⁶

「臆病者と言われるくらいなら、死んだ方がましです」とジョセフは言い放ちます。「この命が友にとって価値のないものなら、わたしにとっても何の価値もありません。」預言者は今や、ノーブーを去っても聖徒たちを守ることはならないと知ったのです。それでも、自分がカーセージに行くまで生き延びられるかどうか、ジョセフには分かりませんでした。「わたしはどうしたらよいのだろう」と預言者はポーターに尋ねます。

「最年長はあなたですから、何が最善かは分かっているはずですよ」とポーターは言いました。

「一番年上なのはハイラム兄さんです」とジョセフは兄に向かって言いました。「わたしたちは、どうすべきだろう。」

「戻って出頭しよう。後は結果を見届けるまでだ」とハイラムは言いました。

「兄さんが行くならわたしも行きます。でも、わたしたちは殺されてしまうでしょう」とジョセフは言いました。

「生きるも死ぬも、運命に身を委ねるだけだ」とハイラムは口にしめます。

ジョセフは少しの間思い巡らした後、船を取って来るようレイノルズに頼みました。彼らは出頭することにしたのです。¹⁷

その日の午後ジョセフが帰宅すると、エマの心は沈みました。夫と再会を果たしたものの、エマは自分が夫を死なせるために呼び寄せてしまったのではないかと恐れたのです。¹⁸ジョセフは今一度、聖徒たちに説教することを望んでいましたが、そうする代わりに家族と家にとどまっていた。ジョセフとエマは子供たちを集め、ジョセフが家族に祝福を授けます。

翌朝早く、ジョセフとエマ、子供たちが家を出ると、ジョセフは一人一人に口づけをしました。¹⁹

「あなたは帰って来るでしょう？」とエマは涙ながらに言います。

ジョセフは馬にまたがると、ハイラムと他の男たちとともにカーセージへ向かいました。「わたしはほふり場に引かれて行く小羊のように行く。しかし、わたしは夏の朝のように心穏やかである」と預言者は言いました。「わたしの良心は、神に対してもすべての人に対しても、責められることがない。」²⁰

日が昇り、神殿のまだ完成していない壁に金色の光を放つ中、預言者たちは神殿に向かって丘を登りました。ジョセフは馬を止め、町を見渡します。「ここは地上で最も美しい場所で、最も素晴らしい人々が住んでいる」とジョセフは言いました。「彼らはこの先に待ち受けている試練については何も知らない。」²¹

ジョセフが家を離れたのは、ほんのつかの間でした。ノーブーを出てから3時間ほどすると、預言者と友人たちは軍隊に遭遇します。知事から指示を受け、州があてがった武器をノーブー部隊から没収するところだったのです。ジョセフは戻って、その命令が遂行されるのを見届けることにしました。もし聖徒らが抵抗すれば、暴徒に攻撃する理由を与えかねないということを、ジョセフは承知していました。²²

ノーブーへ着くと、ジョセフはエマと子供たちに再会するために家へ戻ります。再び別れを告げたジョセフは、一緒に来るかとエマに尋ねましたが、彼女は子供たちととどまらなければならないことを知っていました。ジョセフは重々しい、物思いに沈んだ面持ちで、自らの運命を確信した厳格な表情をしていました。²³ ジョセフが去る前に、エマは祝福を頼みます。時間がなかったため、ジョセフはエマに、自分の求める祝福を書きとめるように伝え、戻ったら祝福を施すと約束しました。

彼女は祝福の中で、天の御父からの知恵と識別の賜物が与えられることを望み、ペンを走らせます。「神の御霊がわたしを知り、理解してくれることを望みます」とエマは綴りました。「神の御計画を理解できるよう、豊かで、活発な精神を得たいと望んでいるのです。」

彼女は11月に生まれる予定の赤ん坊を含め、子供たちを育てる知恵を望み、永遠の結婚の聖約における希望についても述

べました。「わたしは心から夫を尊び、敬うことを望みます。常に夫への信頼を抱いて生き、夫と一致して行動し、神が夫の横に備えておられる場所を保ちたいのです。」

最後にエマは謙遜を祈り求め、従順な者に神が備えられた祝福にあつて喜びを得られるように願いました。「わたしは人生に何が起ころうとも、すべてに神の御手があると認められるようになることを望んでいるのです」とエマは綴っています。²⁴

6月24日、月曜の真夜中少し前、ジョセフとハイラムがカーセージに到着すると、怒声やののしりが浴びせられました。ノーブーで聖徒から武器を取り上げた民兵たちの一団が、騒がしいカーセージの通りの中、ジョセフとハイラムを護衛します。カーセージ連隊として知られた別の部隊は、その晩兄弟たちが滞在しようとして計画していたホテルの近くの広場に陣を張っていました。

ジョセフがカーセージ連隊の前を通ると、彼らはジョセフを一目見ようと押し合いへし合いしました。「いまましい預言者はどこだ」と一人の男が叫びます。「道を空けてジョー・スミスを見せろ!」連隊は叫び声や怒声を上げ、宙に銃を放り投げました。²⁵

翌朝、ジョセフと友人たちは保安官のもとに出頭します。9時を少し過ぎると、フォード知事はジョセフとハイラムに、集結した州兵の中を一緒に歩くように言いました。周りに群がった州兵と暴徒らは、カーセージ連隊が再びやじを飛ばし、帽子を放り投げ、剣を抜くまでは静かにしていました。前の晩と同様、彼らは兄弟たちに向けてわめき声を上げ、あざけり笑います。²⁶

その日、法廷において、ジョセフとハイラムは騒擾罪そうじょうでの裁判を待つために釈放されました。ところが兄弟たちが町を出る前に、ウィリアム・ローの仲間の二人が、ノーブーで戒厳令を敷い

たことへの訴状を携えてやって来ます。彼らは政府とイリノイ州民に対する反逆罪で訴えられており、それは保釈されることのない死罪に値しました。

ジョセフとハイラムはその晩、郡の刑務所の監房に監禁されます。友人の中には、ジョセフとハイラムを守ろうと、二人を離れず、ともにとどまることを選んだ者もいました。その晩、ジョセフはエマに励ましとなる知らせの手紙を書きました。「知事は彼の軍隊をノーブーに進行させることに今同意したばかりで、わたしも彼とともにいきます」と預言者は報告します。²⁷

翌日拘留者たちは、カーセージの監獄の2階にある、より快適な部屋に移されました。部屋には3つの大きな窓とベッド、掛け金の壊れた木の扉がありました。その晩、ハイラムはモルモン書を声に出して読み、ジョセフは看守に向けて、それが神から与えられた真正なものであるという力強い証を述べます。イエス・キリストの福音が回復され、天使たちは今なお人類を教え導いており、神の王国が再び地上に回復されたことを証したのです。

日没後、ウィラード・リチャーズはろうそくが燃え尽きるまで、起きて書き物をしていました。ジョセフとハイラムはベッドに横になり、二人の訪問者、スティーブン・マーカムとジョン・フルマーは、床上のマットレスに寝ていました。近くの硬い床には、ジョン・テラーとダン・ジョーンズが横になっています。ジョーンズは、1年少し前に教会に入った、川船の船長を務めるウェールズ人です。²⁸

真夜中の少し前、彼らはジョセフのすぐ近くの窓外から銃声を聞きました。預言者は起き上がり、ダンの隣の床に移動します。ジョセフは彼に、死ぬことが怖いかと静かに尋ねました。²⁹

「そのときが来たのですか。」ダンは強いウェールズなまりで聞きました。「このような業に携わっていると、わたしは死をそれほど恐ろしいものとは思いません。」

「あなたは死ぬ前にウェールズに行き、召された伝道の業を全うすることでしょう」とジョセフは囁きました。

真夜中をまわったころ、ダンは監獄の前を部隊が行軍する音で目を覚まします。起き上がって窓の外を見ると、下には男たちが大勢集まっていました。「何人で入るか」と、だれかが尋ねるのが聞こえます。

驚いたダンは、ほかの拘留者たちを急いで起こしました。階段を上る足音が聞こえると、皆は扉に駆け寄ります。部屋に押し入れられたときのことを考え、だれかが椅子を武器にしようと抱え込みました。襲撃を待つ間、墓地にいるかのような静けさが彼らを包みます。

「来るがいい！」ジョセフはついに叫びました。「用意はできている。」

ダンやほかの拘留者たちは、扉の向こうで襲撃をしようか戻ろうかと決めかねている、男たちの混乱した様子を聞き取ることができました。騒ぎは夜明けまで続き、ついに拘留者たちは、男たちが階段を降りて行くのを耳にしました。³⁰

翌日の 1844 年 6 月 27 日、エマはウィラード・リチャーズに書き取らせたジョセフからの手紙を受け取ります。フォード知事と民兵はノーブーへ向かっていました。ところが手紙にあった約束にもかかわらず、知事はジョセフを伴ってはいませんでした。それどころか、知事はカーセージの民兵の一師団を解散し、監獄の護衛にはカーセージ連隊の小さな一団ぜいじやくだけをとどめたため、拘留者たちは襲撃に対してますます脆弱ぜいじやくになります。³¹

それでもジョセフは、これ以上警戒を増すことのないように、聖徒たちが誠意を持って知事に接することを望んでいました。「撲滅令の危険はないが、注意するに越したことはない」とジョセフはエマに綴っています。³²

手紙の終わりに、ジョセフは自らの手で追伸を書きました。「わたしは自分が正しく、最善を尽くしてきたことを知っており、運命にすべてを委ねています」とジョセフは断言します。ジョセフは妻に、自分の愛を子供たちと友人たちに伝えてくれるよう頼みました。「反逆罪に関しては、わたしは何も犯しておらず、彼らはそのようなことを何一つ立証できません」と預言者は付け加えました。その件で、自分やハイラムに何らかの危害が及ぶのを恐れる必要はないとジョセフはエマに告げました。「神が皆を祝福してくださいますように」と結んでいます。³³

フォード知事はその日の遅く、ノーブーに到着すると、聖徒らに向けて話をしました。起こりつつある危機に関して知事は聖徒たちを責め、その影響の責任は聖徒たちに負ってもらうと警告します。「*Expositor*社を打ち壊し、市に戒厳令を敷いたのは重大な罪であり、それには重い償いをしてもらわねばならない。したがって、あなたがたは不測の事態に備えて心構えをしておくように」と知事は明言しました。³⁴

もし聖徒らが背くならば、ノーブーは灰と化し、聖徒らも滅ぼされるだろうと知事は警告します。「あなたがた次第ですよ」と知事は言いました。「少しでも市民が暴れようものなら、すでに火のついた怒りのたいまつが、現実に用いられることになるだろう。」³⁵

知事の話は聖徒らを怒らせましたが、ジョセフが平和を保つように忠告していたため、彼らは知事の警告を聞き入れ、州の法律を支持することを固く誓います。満足した知事は話を終える

と、自分の軍に大通りを行進させました。兵士たちは行進しながら剣を抜き、威圧的な態度で振り回すのでした。³⁶

その日の午後、カーセージの監獄では時がゆっくりと流れていました。夏の暑さのために、預言者たちは上着を脱ぎ、風を入れるために窓を開けました。外ではカーセージ連隊の8人の男たちが監獄を警備し、残りの民兵は近くで陣を張っていました。扉のすぐ向こう側では、別の看守が座っています。³⁷

スティーブン・マーカムとダン・ジョーンズたちは、ジョセフの使いで出かけていました。前の晩からとどまっていた者たちの中では、ウィラード・リチャーズとジョン・テラーだけが、ジョセフとハイラムと残っていました。その日の早く、訪問者たちは拘留者らに二丁の拳銃をひそかに手渡します。襲撃に備えての、6連発拳銃と単発銃です。スティーブンも、「矯正の鞭」と呼んだ頑丈な杖を置いて行きました。³⁸

気分を落ち着かせ、時間をやり過ごすため、ジョンは近ごろ聖徒たちの間で人気のあるイギリスの賛美歌を歌いました。その詩は助けを必要とする謙遜な旅人について歌っており、その旅人は最後に自分が救い主であることを明らかにするのです。

この旅人見る間に
姿変わり
救い主となり、
わが前に立ちぬ
『恐るな、わがため恥じず
なせし業
おぼえらる』と、
われ呼びて言いたまいぬ

ジョンが歌い終わると、ハイラムはもう一度歌ってくれるようにと頼みます。³⁹

午後4時になると、それまでの看守が新しい看守と交代になりました。ジョセフは扉の近くで看守と話し始め、その間ハイラムとウィラードは静かに語っていました。1時間ほどすると、看守が部屋に入って来て、襲撃に備えてより頑丈な監房に移りたいかと拘留者たちに尋ねます。

「夕食が終わったら移りたいと思います」とジョセフは言いました。看守は去り、ジョセフはウィラードの方を向きました。「もしわたしたちが拘置所に入るなら、あなたも一緒に来ますか」とジョセフは尋ねます。

「わたしが今、あなたを見捨てると思いますか。」ウィラードはそう答えました。「もしあなたが反逆罪で絞首刑の判決を受けるとしたら、わたしがあなたの代わりに刑を受けましょう。そうすれば、あなたは自由の身になるのです。」

「それはできません」とジョセフは言います。

するとウィラードは、「いえ、わたしはそうします」と断言するのでした。⁴⁰

数分後、扉近くでかすかな物音を耳にしたかと思うと、3、4発の銃声が鳴り響きました。ウィラードが開いた窓から外を見ると、下では泥や火薬で顔を黒くした大勢の男たちが、監獄に殺到しています。ジョセフは拳銃を一丁掴み、一方ハイラムはもう一丁の拳銃を手に取りました。ジョンとウィラードは杖を手にする、こん棒のように握り締めます。暴徒たちが階段を駆け上り、押し入ろうとしたため、4人は全員で扉を押さえつけました。⁴¹

暴徒たちが扉に向けて発砲し、発砲音が吹き抜けの階段に響き渡りました。弾丸が木の扉を突き破ると、ジョセフ、ジョン、ウィラードは扉の脇に飛び退きます。銃弾はハイラムの顔を直撃

し、彼は扉からよろめきました。もう一発の弾が腰に命中すると、拳銃が火を噴き、ハイラムは床に倒れました。⁴²

「ハイラム兄さん！」ジョセフが叫びます。6連発銃を握り締め、預言者は扉を数センチ開けて発砲しました。さらなるマスケット弾が部屋に飛んで来ると、ジョセフは暴徒らに向けて手あたり次第発砲し、ジョンは戸口から迫り来る銃身や銃剣を杖を使ってたたき落します。⁴³

ジョセフの拳銃が2、3度不発に終わると、ジョンは窓に駆け寄り、深い窓台まどだいによじ登ろうとしました。部屋を縦断したマスケット弾が足に当たり、ジョンはバランスを失います。ジョンは身体感覚を失って窓台に激しくぶつかり、その懐中時計は5時16分を指して動きを止めました。

「撃たれた！」とジョンは叫びます。

暴徒らが繰り返し発砲する中、ジョンは床を這ってベッドの下にもぐりこみました。その間、銃弾がジョンの腰を引き裂き、肉を吹き飛ばしました。さらに二発の弾が、手首とひざ上の骨に命中します。⁴⁴

部屋の向こう側では、ウィラードが目の前のマスケット銃身と銃剣をたたき落としながら、ジョセフとともに全力で扉を押さえつけていました。突然、ジョセフは拳銃を床に落とし、窓に向かって飛び出します。ジョセフが窓台をまたごうとすると、二発の弾が背中を打ち抜きました。もう一発が窓を突き抜け、預言者の心臓下を貫通します。

「おお、わたしの神、主よ」と叫ぶと、預言者の身体は前方によろめき、窓の外に頭から落ちました。

鉛の弾が飛び交う中、ウィラードは部屋を横切って窓に駆け寄り、頭を外に突き出しました。下を見ると、血にまみれたジョセフの体に暴徒たちが群がっています。預言者は、石積みの井戸の左側に横たわっていました。友がまだ生きているという望み

ほふり場に引かれて行く小羊のように

を抱きながら、ウィラードが見守るも、ジョセフは数秒たってもびくりともしませんでした。

主の預言者、聖見者、ジョセフ・スミスは死んだのです。⁴⁵



全能の神の土台

6月28日の日の出前、自宅のドアを激しくたたき音に応じたエマは、甥のロレンゾ・ワツソンが、ほこりまみれで玄関先に立つ姿を目にします。甥の言葉は、エマが最も恐れていたことを決定づけるものでした。¹

間もなく、ジョセフの死を知らせながら馬で通りを駆け抜けるポーター・ロックウェルの叫び声に、町中の人々が目を覚まします。²瞬く間に、大勢の人々がスミス家の外に集まって来ました。しかし、エマは子供たちとともに家の中に閉じこもったきり、ほんの一握りの友人や下宿人以外、だれにも会おうとしません。義母のルーシー・スミスは、寝室の床を行ったり来たりしつつ、窓の外にぼんやりと視線を投げかけています。子供たちは別の部屋で、身を寄せ合ってうずくまっていました。³

エマは座り込み、独り静かに悲しみに沈みました。しばらくすると、エマは両手に顔をうずめて泣き叫びます。「なぜわたしは夫に先立たれ、子供たちは孤児になってしまったの。」

そのむせび泣きを聞きつけ、ノーブー市警察署長のジョン・グリーンが部屋に入って来ました。ジョンはエマを慰めようと、エマの苦難は彼女にとって命の冠となるだろうと言いました。

「夫こそがわたしの冠でした」とエマは強く言い返します。「ああ神よ、なぜこのようにわたしをお見捨てになったのですか。」⁴

その日の遅く、ウィラード・リチャーズとサミュエル・スミスが馬に乗り、ジョセフとハイラムの遺体を乗せた荷車をノーブーに運び込みました。二人の遺体は、暑い夏の日差しから保護するために木製の箱に収められ、木の小枝で覆われていました。⁵

ウィラードとサミュエルの両者は、前日の襲撃にひどく動揺していました。サミュエルは監獄にいる兄たちを訪ねようとしていましたが、カーセージにたどり着く前に暴徒の一人から発砲を受け、2時間以上もの間、馬に乗って追いかけて回されたのです。⁶一方ウィラードは、耳たぶに小さな傷を負っただけで襲撃から生き残りました。弾丸がウィラードの周囲を飛び交い、左右にいる友人を直撃するも、彼の衣服には穴一つ空くことがないだろうという、1年前にジョセフが述べた預言が成就したのです。⁷

それに対しジョン・テラーは、深い傷を負ったために町を離れることができず、カーセージのホテルで生死をさまよっていました。⁸その前夜、ウィラードとジョンは聖徒たちに向けて、ジョセフとハイラムの殺害に対して報復することのないよう嘆願する短い手紙を書きます。ウィラードが手紙を書き終わると、失血のために弱り切っていたジョンは、かろうじて手紙に署名することができたのでした。⁹

ウィラードとサミュエルが神殿に近づいて来ると、聖徒の一団が荷馬車を出迎え、町に入るまでその後につき従いました。

荷馬車がゆっくりと神殿の敷地を通り過ぎ、丘を下ってノーブーマンションに向かう間、ノーブーに暮らすほとんどの人々がその行列に加わりました。聖徒たちは町を歩いて通り抜けながら、人目をはばかることなくすすり泣いています。¹⁰

その行列がスミス家に到着すると、ウィラードは、ジョセフが最後にノーブー部隊に向けて話をした演台に上がりました。一万人の群衆を見渡すウィラードには、その多くが知事や暴徒たちに怒りを抱いているのが見て取れました。¹¹

「法によって正されることを信じましょう」とウィラードは懇願します。「報復は主に委ねるのです。」¹²

その夜、ルーシー・スミスは心の準備をして、エマとメアリー、孫たちとともに、ノーブーマンションの食堂の外で待ち構えていました。それより前に、数人の男がジョセフとハイラムの遺体を家に運び入れ、二人の遺体を洗って衣服を着せていました。ルーシーと家族はそのときから、遺体と対面するのを待ち続けているのです。ルーシーはかろうじて正気を保ち、殺害された息子たちの姿を見る強さを与えてくださるようにと祈っていました。

遺体の準備が整うと、最初にエマが部屋に入るも、すぐさま床に崩れ落ちてしまい、部屋の外に連れ出されます。メアリーはエマの後に続き、震えながら足を進めました。母親にしっかりとしがみつくだ下の幼い二人の子供たちとともに、メアリーはハイラムの傍らにひざまずくと、夫の頭を両腕に抱きかかえてむせび泣きました。「愛するハイラム、撃たれてしまったの？」メアリーはそう言うと、夫の髪を優しくなでました。深い悲しみがメアリーを襲います。

友人たちの助けを借りて間もなく部屋に戻って来たエマは、ハイラムの傍らにいるメアリーに寄り添います。義理の兄の冷た

い額に手を置くと、優しく語りかけました。それから、友人たちを振り返って言いました。「さあ、夫に会う用意ができたわ。もう大丈夫よ。」

エマは立ち上がると、だれの助けも借りずにジョセフの遺体へ歩み寄ります。エマは夫の傍らにひざまずくと、その頬に手を当てて言いました。「ああ、ジョセフ、ジョセフ！ 彼らはとうとうあなたをわたしから奪い去ったのね！」¹³ 幼いジョセフはひざまずき、父親にキスをしました。

ルーシーはあまりの悲しみに襲われ、一言も発することができません。「わが神よ」とルーシーは心ひそかに祈ります。「なぜこの家族をお見捨てになったのですか。」自分たち家族が経験してきた試練の記憶が次々と胸に迫ってきます。しかし、息子たちの生気を失った顔に目をやると、その表情は平安に満ちているように見えました。ルーシーは、ジョセフとハイラムが今や、敵の手の届かない所にいることを悟ります。

それから、次のように語る声を聞きました。「わたしは彼らをわたし自身のもとに取り上げた。彼らは安息を得るだろう。」¹⁴

翌日、この兄弟たちを称えようと、何千もの人々がノーブーマンションの外に列を成します。気温が高く、雲一つない夏の日のことでした。何時間もの間、一つのドアから入った聖徒たちが棺の傍らを通り過ぎては、別のドアから出て行きます。兄弟たちの遺体は、白い布と柔らかい黒のビロードで裏打ちされた立派な棺に収められていました。二人の顔の上はガラス板で覆われており、哀悼者たちは最後にひと目、その顔を見ることができたのでした。¹⁵

二人に対面した後、ウィリアム・フェルプスは何千人もの聖徒から成る群集に向かい、預言者の葬儀のために説教をしました。「聖見者ジョセフについて、何を言えばよいでしょう」とウィ

リアムは問いかけます。「ジョセフは大衆の意見に振り回されることなく、ひたすらイエス・キリストの御名によって語りました。」

ウィリアムは次のように証しました。「主の戒めと律法を授けるため、神殿を建てるため、そして愛と恵みをもって向上するよう人々に教えるため、ジョセフは生を受けたのです。また地上に、そして啓示、預言者、使徒といった純粹かつ永遠の原則の上に、わたしたちの教会を築き上げるべく、ジョセフは召されたのです。」¹⁶

葬儀の後、メアリー・アン・ヤングは、この悲劇についてブリガムに手紙を書き送っています。ブリガムは東に数百キロ離れた地で、十二使徒定員会の幾人かとともに、ジョセフの選挙運動に携わっていました。「あなたが家を離れてから、わたしたちはこの地でひどい苦難に見舞われてきました」とメアリーは書いています。「愛する兄弟であるジョセフ・スミスとハイラムが、残忍な暴徒の犠牲となったのです。」メアリー・アンはブリガムに、自分たち家族が無事であることを知らせましたが、どの程度安全であるかは分かりませんでした。この3週間、ノーブーにあてられた手紙はほぼ届かず、暴徒の攻撃による脅威が続いていたのです。

「わたしは祝福されて、この嵐のただ中にあっても穏やかな気持ちを保ち続けています」とメアリー・アンは綴っています。「家に戻る道中、どうか気をつけてください。あなたの命が危険にさらされることのないようにと望んでいます。」¹⁷

同日、バイレート・キンボールもまたヒーバーに手紙を書いています。「これほど困難な状況の下で、あなたに手紙を書くのは初めてです。」バイレートはヒーバーに、そう述べています。「神が、このような状況を今後二度と目にする事のないよう計らってくださいますように。」

バイレートが聞いたところによると、ウィリアム・ローと彼の追従者たちは、今なお復讐を果たそうと教会指導者をつけねらっていると云います。ヒーバーの身を案ずるバイレートは、夫の帰宅に気が進みません。「わたしたちが皆無事に再会できるよう、今はひたすら主の守りを祈り続けています」とバイレートは書いています。「あなたの命がねらわれていることは疑いようもありません。しかし、主があなたに知恵を授けてくださり、彼らの手から逃れられますように。」¹⁸

間もなくフィービー・ウッドラフは両親に向けて、カーセージでの襲撃について知らせる手紙を書きました。「キリストの死がそうであったように、こうした出来事が御業をとどめることはないばかりか、今後御業はますます速やかに押し進められることでしょう。」フィービーはそう証しています。「ジョセフとハイラムは今や、わたしたちとともにいたときよりもはるかに良い働きを、教会のために成すことのできる場所にいると信じています。」

そして、「わたしの信仰はかつてないほど強められています」とフィービーは明言するのです。「この手紙を書いている今から1時間のうちに自分の命が失われるとしても、わたしは決して真のモルモニズムに対する信仰を捨てません。それが神の業であることを確かに知っているからです。」¹⁹

メアリー・アンやバイレート、フィービーの手紙が東部へと送られている間、ブリガム・ヤングとオーソン・プラットは、ジョセフとハイラムが殺されたとの噂を耳にするも、その話の信ぴょう性を確認する相手がいませんでした。その後の7月16日、二人が訪問中であったニューイングランド支部の教会員の一人が、この悲劇の詳細を伝えるノーブーからの手紙を受け取りました。手紙を読むと、ブリガムは自分の頭が打ち砕かれたかのような衝撃

を受けます。かつて味わったことのないほどの絶望を感じたのです。

ブリガムは直ちに、神権に思いをはせます。ジョセフは、聖徒たちにエンダウメントを施し、彼らを永遠にわたって結び固めるのに必要なすべての鍵を持っていました。それらの鍵がなければ、主の業を推し進めることはできません。ブリガムは少しの間、ジョセフがそれらの鍵を墓へ持ち去ったのではと恐れました。

その後ブリガムは、瞬時に受けた啓示により、ジョセフがそれらの鍵を十二使徒定員会に授けたときのことを思い起こします。ブリガムは片手で自身のひざを強く打ち鳴らすと、こう言いました。「王国の鍵はまさにここに、教会とともにあるのだ。」²⁰

ブリガムとオーソンは、東部諸州にいるほかの使徒たちと会うために、ボストンへ向かいます。二人は急いで家に戻るつもりであり、ノーブーに家族を残しているすべての宣教師にも、同じく家に戻るようにと助言しました。²¹

「元気を出しなさい」と、ブリガムはその地域の聖徒たちを励まします。「ある業を成すために神が一人の男を送られたからには、その務めを果たすまでは、地獄のすべての悪霊をもってしても彼を殺すことはできないのです。」ジョセフは亡くなる前に、神権のすべての鍵を十二使徒に授けており、御業を押し進めるために聖徒たちが必要とするものはことごとく残されていると、ブリガムは証したのです。²²

ノーブーでは、夫の死を嘆き悲しみながらも、子供たちや義母を自分一人で養っていくことについてエマが心配し始めます。ジョセフは、自分の家族の資産を教会の所有物から分けようと、広範囲にわたる法的措置を試みていましたが、依然としてかなりの負債が残されており、遺言もありませんでした。教会が早急に教会

の資産管理者としてジョセフに取って代わる管財人を指名しな
 かがり、自分たち家族は困窮状態から抜け出せないのではない
 か、とエマは恐れました。²³

ノーブーの教会指導者たちは、指名する権能を持つのはだ
 れかということに関して、意見が分かれています。一部の人々
 は、生存する預言者の兄弟のうち最年長のサミュエル・スミスが
 その責任を受け継ぐべきだと信じていましたが、サミュエルは暴
 徒たちにカーセージから追われた後、病気になり、7月末に突如
 として亡くなってしまいます。²⁴そのほかの人々は、地元ステーク
 の指導者たちが新たな管財人を選ぶべきだと考えていました。
 ウィラード・リチャーズとウィリアム・フェルプスは、東部諸州へ
 伝道に赴いている十二使徒が戻って選定に参加できるようにな
 るまで、決断を延ばしたいと思いました。

ところがエマは決定を強く望んでおり、直ちに委任管財人を
 指名するよう教会指導者たちに求めます。エマがその職に選ん
 だのは、ノーブーのステーク会長を務めるウィリアム・マークスで
 した。²⁵しかしながらニューエル・ホイットニー・ビショップは、そ
 の選択に強く反対します。ウィリアムは多妻結婚を拒み続けてお
 り、神殿の儀式にほとんど関心を示していなかったからです。

「もしマークスが任命されるなら、彼が最も重要な事柄に好
 意的にならないかぎり、我々の霊的な祝福が損なわれるだろう。」
 ビショップは個人的にそう言明します。教会が、金融持株会社
 や法的債務を伴う単なる法人以上の組織であることを承知して
 いたニューエルは、主がジョセフに明らかにされた事柄を完全に
 支持する者こそ、新たな管財人になるべきだと信じていたのだ
 です。²⁶

そのころになると、傷の癒えたジョン・テラーは、ノーブー
 に戻って来られるほどに回復していました。パーリー・プラット
 もまた伝道から戻り、ジョン、ウィラード・リチャーズ、ウィリアム・

フェルプスらと合流すると、ほかの使徒たちの帰りを待つよう、エマとウィリアム・マークスに強く勧めます。早急に決断を下すよりも、正しい権能を通して新たな管財人を選定することの方が、はるかに重要だと信じていたのです。²⁷

その後の8月3日、シドニー・リグドンがノーブーに戻って来ます。大統領選挙におけるジョセフの副大統領候補者であったシドニーは、候補者の法的要件を満たすべく別の州に移動していましたが、預言者の死について知り、大急ぎでイリノイに戻ることにしたのです。教会を導く権利を有する大管長会における、自身の地位を確実なものとするためでした。

シドニーは自らの主張を強固なものにしようと、自分は神からの示現を受け、教会が後見人を、すなわちジョセフを失った教会を養い、今後もジョセフに代わって語り続ける者を必要としていることを示されたと宣言しました。²⁸

シドニーの到着は、パーリーやノーブーにいるそのほかの使徒たちを困惑させます。管財人を巡る対立によって、教会は重要な決断を下すために管理役員を必要としていることが明らかとなりました。ところがウィリアム・マークスと同様、シドニーは、主がジョセフに明らかにされた教えと慣習の多くを拒んできたことを、使徒たちは承知していました。さらに重要なことに、ジョセフはここ数年シドニーをほとんど当てにしておらず、彼には神権のすべての鍵を授けていないことも明白だったのです。²⁹

到着の翌日、シドニーは教会を導くことを公然と申し出ます。ところが、神殿を完成させることについても、聖徒たちに霊的な力を授けることに関しても、何一つ言及することはありませんでした。シドニーはそれよりも、前途に危険な時代が待ち受けていると聖徒たちに警告し、この末日の間、自分が果敢に彼らを導くと約束したのです。³⁰

後に教会指導者のある集会で、シドニーは、2日以内に聖徒たちを集めて新しい指導者を選び、管財人を指名するべきだと主張します。危機感を抱いたウィラードとそのほかの使徒たちは、シドニーの主張を検討し、定員会の残りの会員が戻って来るのを待つために、もうしばらく時間が必要だと伝えます。

ウィリアム・マークスはその要求を呑み、4日後の8月8日に集会を開くことにしたのです。³¹

8月6日の夜、ブリガム・ヤング、ヒーバー・キンボール、オーソン・プラット、ウィルフォード・ウッドラフ、ライマン・ホワイトらが、蒸気船でノーブーに到着したとの知らせが広まります。聖徒たちはすぐさま、それぞれの家に向かう使徒たちを通りて出迎えました。³²

翌日の午後、新たに到着した使徒たちがウィラード・リチャーズ、ジョン・テラー、パーリー・プラット、ジョージ・A・スミスに加わり、シドニーとそのほかの教会評議員とともに集会を持ちます。³³この時までには、8月8日に新たな指導者を選ぶことについて、シドニーの考えが変わっていました。シドニーは当初の要望に代えて、その日聖徒たちとともに祈りの集いを開きたいと言い出したのです。教会指導者たちが一体となって「互いの心が熱く燃える」まで、決断を先送りしたいとのことでした。³⁴

それでもシドニーは、依然として教会を導く自らの権利を主張していました。「教会はジョセフに倣って築き上げられる必要があるとの示しをわたしは受けました」と、シドニーは評議会に告げます。「我々が受ける祝福はすべて、ジョセフを通して与えられるべきなのです。」またシドニーは、最近自分の受けた示現

が、10年以上前にジョセフとともに自身が目にした、天の壮大な示現の続きであると断言するのです。

「わたしはジョセフの代弁者に聖任されています。」シドニーは1833年にジョセフが受けた啓示を引き合いに出し、そう言い募ります。「そこで、わたしがノーブーに来て、教会が正しい方式で管理されていることを確認する必要があったのです。」³⁵

シドニーの言葉は、ウィルフォードに何の感銘も与えませんでした。「それは低い次元に属する示現だった」とウィルフォードは日記に記しています。³⁶

シドニーが話し終わると、今度はブリガムが立ち上がり、ジョセフは使徒職に付随する鍵と力のすべてを十二使徒に授けたことを証します。「だれが教会を導こうと、わたしは意に介しません」とブリガムは言います。「しかし知るべきは、神がそれについて何と言われるかということです。」³⁷

シドニーの祈りの集いが開かれるはずの8月8日、ブリガムは早朝に行われた定員会との集会に姿を現しませんでした。ブリガムにしては、かつてないことです。³⁸外に出ると、ブリガムは何千人もの聖徒たちが神殿近くの森に集まっているのを目にしました。風が激しく吹きささぶ朝で、荷馬車の中に立つシドニーの背後では、強い風が絶えず吹き荒れていました。シドニーは祈りの集いを開くどころか、自分を教会の後見人とするよう再び提示します。

シドニーはさらに1時間以上にわたって話をし、ジョセフとハイラムは永遠にわたってそれぞれの神権の権能を保持するであろうことや、二人がその死後も十二分に教会を導くことのできる教会評議会を組織したことについて証しました。「すべての人が自分の職、すなわち自身の召しにおいて、エホバの前に立つことになるだろう」とシドニーは宣言しました。そして再び、自分自身の職はジョセフの代弁者としての召しであると提示します。シドニー

はこの件について、会衆による投票を望んではいませんでしたが、聖徒たちに自身の見解を知らしめたいと思っていたのです。³⁹

シドニーが話し終わると、ブリガムは群衆に、もうしばらくその場にとどまるよう呼びかけました。そして、どのような教会の実務であれ、それを整える前にジョセフの死を悼む時間を持ちたいと言いました。それでもブリガムは、新たな指導者を選ぶことが聖徒間における緊急事項であることを認識していました。聖徒たちの中に、神の御心に反して権力を握ろうとする者たちがいることを憂慮していたからです。

こうした問題を解決するべく、ブリガムは聖徒たちに、新たな教会指導者を支持するため、その日の午後にもう一度集まるよう求めます。彼らは定員会によって、また教会組織として投票を行おうとしていました。「我々は5分のうちに、そうした実務を行うことができます」とブリガムは言います。「我々は互いに対立した行動を取るつもりはありません。すべての男女がアーメンとすることでしょう。」⁴⁰

その日の午後、エミリー・ホイトは集会のために森へと戻りました。預言者のいここであるエミリーは30代後半で、教師養成学校の卒業生です。この数年にわたり、エミリーと夫のサミュエルはジョセフやハイラムとの親交を深めており、兄弟たちの突然の死は二人に深い悲しみをもたらしました。それでもエミリーとサミュエルは、シドニーの祈りの集いに出席しようと、アイオワ準州の川を渡り、その日ノーブーにやって来たのでした。⁴¹

2時ごろ、神権定員会と評議会が一堂に会し、壇上とその周りの席に着きました。それからブリガム・ヤングが、聖徒たちに話をするために立ち上がりました。⁴²「リグドン会長が教会の大管長であることについて多くが語られました」とブリガムは言います。「しかし皆さんに申し上げます。全世界における神の王

国にかかわる鍵を有しているのは十二使徒定員会であります。」⁴³

エミリーはブリガムの話に耳を傾けながら、話者がジョセフではないことを確かめるために、思わずブリガムを見上げずにはいられませんでした。ブリガムの顔の表情や話しぶり、またその声音でさえ、ジョセフそのものだったのです。⁴⁴

「預言者であるジョセフ兄弟は、偉大な業のために土台を据えました。我々はその土台の上に築き上げるのです」とブリガムは続けます。「今や全能者の土台が据えられており、我々はこの世にかつて存在しなかったような王国を築くことができます。サタンが聖徒たちを滅ぼし尽くしてしまう前に、我々が王国を築くことでしょう。」

それでも聖徒たちは、主の御心に従い、信仰によって生き、ともに働く必要があるとブリガムは宣言しました。「シドニー・リグドンまたはウィリアム・ロー、あるいはほかのだれかに導いてほしいのなら、彼らは皆さんを歓迎することでしょう。しかし、主の御名によって皆さんに申し上げます。十二使徒会と預言者ジョセフの間に立つことのできる者は、だれ一人としていないのです。なぜでしょうか。ジョセフは全世界のために、この最後の神権時代における神の王国の鍵を十二使徒の手に委ねたからです。」⁴⁵

エミリーは、ジョセフに授けられた御霊と力が今やブリガムにとどまっていることを感じつつ、十二使徒会を教会の指導者として支持するよう聖徒たちに呼びかける使徒ブリガムの姿を見守りました。「今や、すべての男女、すべての定員会が整えられています」とブリガムは言います。「聖徒から成る全会衆の皆さん、これに賛同してくださる方は皆、右の手を挙げてそれを示してください。」

エミリーと全会衆が、それぞれの手を挙げました。⁴⁶

「成すべきことは多くあります」とブリガムは言います。「基は預言者によって据えられています。その上に、我々が築き上げるのです。すでに据えられている土台のほかに、別の土台が据えられることなどあり得ません。そして主の御心であるならば、我々は自身のエンダウメントを受けるでしょう。」⁴⁷

7年後、エミリーはブリガムが聖徒たちに語るのを目にしたときの経験を記し、壇上に立つブリガムがいかにもジョセフのようであったかを証しています。その後の数年のうちに、数十人もの聖徒たちが、その日ジョセフの預言者の外套がブリガムの肩に掛けられたのを目にしたときの様子を記し、エミリーの証に自身の証を加えることとなったのでした。⁴⁸

エミリーはこう書いています。「聖徒たちの諸事を管理するブリガムの権能に疑念を抱く人がいるなら、その人たちに申し上げたいことは一つだけです。神の御霊を受け、自分自身で知ってください。そうすれば、主御自身が示してくださるでしょう。」⁴⁹

大会の翌日、ウィルフォードは、町全体が引き続き陰鬱な空気に覆われているのを感じます。「預言者と祝福師はもういない」とウィルフォードは日記に書きました。「そして、何事かを成そうとする望みはわずかなものに思える。」そうは言いつつも、ウィルフォードと十二使徒会は直ちに仕事に取りかかります。その日の午後、十二使徒会はピショップであるニューエル・ホイットニーとジョージ・ミラーに会い、二人を教会の管財人として働くよう任命し、ジョセフの財政に関する問題の解決に当たらせたのです。⁵⁰

3日後には、アマサ・ライマンを十二使徒定員会に召し、アメリカ合衆国の東部諸州とカナダを分割して、大祭司による管轄

区域としました。ブリガム、ヒーバー、ウィラードらは幾人かをこれらの職に召し、アメリカにおける教会の監督に当たさせます。一方ウィルフォードは、フィービーとともにイギリスに赴き、伝道部を管理し、印刷設備を整えることとなります。⁵¹

ウィルフォードが伝道に備える間、ほかの使徒たちはノーブーの教会員を強めるべく尽力しました。聖徒たちは8月8日の集会で十二使徒会を支持しましたが、何人かの男たちが、教会を分裂させて人々を引き離すべく、すでに画策し始めていました。そうした連中の一人に、教会の新会員であったジェームズ・ストラングがいました。彼は、自分を真の後継者に任命すると記された、ジョセフからの手紙を持っていると主張します。ジェームズはウイスコンシン準州に家を構えており、その地に聖徒たちを集合させようと目論んでいたのです。⁵²

ブリガムは聖徒たちに、離反者に従わないよう警告します。「散り散りになってはなりません。」ブリガムは強い口調で、聖徒たちに呼びかけました。「ここノーブーにとどまって、神殿を築き、自分自身のエンダウメントを受けるのです。」⁵³

神殿を完成させること、それが教会員に残された重点事項でした。イギリスへと旅立つ前日の8月27日の夜、フィービーとウィルフォードは友人たちとともに神殿を訪れました。2階のほぼ最上部にまで達しようとしている神殿の壁の基礎部分に立つと、ウィルフォードとフィービーは、月明かりに照らし出された建物の壮大さと荘厳さに心打たれます。

二人ははしごを使って壁の最上部に登り、ひざまずいて祈りをささげました。ウィルフォードは、聖徒たちに神殿を築く力を与えてくださった主に感謝を述べ、彼らが神殿を完成させてエンダウメントを受けられるよう、そして世界中に神の業を確立できるようにと懇願しました。またウィルフォードは、伝道地において自分とフィービーを守ってくださるよう、主に願い求めました。

「わたしたちが義をもって使命を果たせるようにしてください」とウィルフォードは祈ります。「そして再びこの地に戻り、平和のうちに主の家の中庭を歩めるようにしてください。」⁵⁴

翌日、ウィルフォード夫妻が出発する直前のこと、ブリガムはフィービーに、彼女を待ち受ける業に向けて祝福を与えました。「あなたは伝道において、夫と同様に祝福され、多くの善を行う仲立ちとなるでしょう。」ブリガムはそう約束します。「心からへりくだって行くならば、あなたは無事に戻って、主の神殿で聖徒たちと会し、そこで喜びを得るでしょう。」

その日の午後、ウィルフォードとフィービーはイギリスへと旅立ちます。二人とともに出発した宣教師の中には、ジョセフの預言を成就すべくウェールズへと向かう、ダン・ジョーンズとその妻ジェーンがいたのです。⁵⁵



力を授けられ

1844年の秋、十二使徒定員会は各地に住むすべての聖徒に向けて書簡を送り、こう言明しました。「神殿は、今わたしたちが最も心に向ける必要のある最優先事項です。」十二使徒定員会は聖徒たちに、この先さらに御業を速めるため、金銭や物資、労働力を送るよう奨励しました。力をもたらすエンダウメントが彼らを待っているからです。必要なことはただ一つ、それを受け取るための場所でした。¹

聖徒たちもまた、使徒たちの緊迫した思いを共有します。9月下旬、ピーター・モーガンはウィラード・リチャーズにあてて、ミシシッピ川を160キロほど上った所にある、聖徒たちの新たな炭鉱について手紙を書き送りました。ピーターとメアリーは最近、ノーブーにある自宅を売り払い、その代金を教会のために炭鉱の購入に充てると、家族とともに作業現場近くの粗末な小屋に越しました。しかし、ピーターはかねてから、ノーブーに戻り、主の家のために石の切り出し作業に携わりたいと切望していました。

「わたしの心にあるのはただ一つ、神殿が築かれつつある今、自分がその助けをする特権にあずかっていないことです」と、ピーターはウィラードに述べています。²

神殿の壁が次第に高くなるにつれ、ブリガムは、ジョセフが始めた業を継続させることを決意します。預言者の模範に従い、ブリガムはエンダウメントを受けた聖徒たちとともにしばしば祈り、教会が守られ、一致があるよう主に嘆願しました。またジョセフの死後中断されていた死者のためのバプテスマを、神殿の地下室において再び執行し始めます。伝道地へと戻って行く長老や七十人の数も、ますます増えていきました。³

しかし、問題が絶えることはひと時としてありませんでした。9月、ブリガムと十二使徒会は、シドニー・リグドンが自分たちに対し陰謀を企てており、ジョセフを墮落した預言者と非難していることを知ります。そこで、一同はシドニーを背教者と断じ、ホイットニー・ビショップと高等評議会が彼を破門に処しました。シドニーはその後間もなくノーブーを去り、聖徒たちは決して神殿を完成させることがないだろうと予告しました。⁴

エマ・スミスもまた、依然として家族の福利に心をくわいており、使徒たちを全面的に支持することを拒みます。エマは、ジョセフの遺産を整理するために、十二使徒会が指名した管財人と協力して事に当たりますが、ジョセフの文書類やそのほかの資産について口論となり、心を痛めます。使徒たちが引き続き多妻結婚について教え、個人的にそうした結婚を実践していることにもまた、エマは悩まされていたのです。⁵

多妻結婚の妻としてジョセフに結び固められていた女性たちが、ジョセフの遺産を要求することはありませんでした。ジョセフの死後、彼女たちの幾人かはそれぞれの家族のもとに帰りました。そのほかの女性たちは、ジョセフがいなくなった今、彼女たちの世話をし、必要な物を提供すると聖約した十二使徒会

員と結婚しました。使徒たちは密かに、引き続きさらなる聖徒たちに多妻結婚を紹介します。また自分たちも新たな多妻結婚の妻をめとり、彼女たちと家族を築き始めました。⁶

1845年のはじめ、聖徒たちにとって最大の問題が教会外から勃発します。トーマス・シャープとそのほか8人の男たちが、ジョセフとハイラムを殺害した罪で起訴されましたが、彼らが有罪になるとは聖徒たちのだれ一人として期待していませんでした。その一方で州議会議員たちは、ノーブー市憲章を廃止することで、教会員の政治的な力を弱めようとしています。フォード知事はそうした動きを支援し、1845年の1月末には、ノーブーに住む聖徒たちの、法律を制定および施行する権利が州議会によりはく奪され、ノーブー部隊ならびに地元の警察部隊は解体されま
す。⁷

こうした守りを失った今、聖徒たちが敵からの攻撃を受けやすい状態になったことをブリガムは危惧します。いまだ神殿は完成にほど遠く、町から逃れるなら、聖徒たちはエンダウメントを受ける望みをほとんど持てなくなるでしょう。主から託された業を果たすための時間が必要でした。しかし、たとえもう1年であっても、これ以上ノーブーにとどまり続けるなら、すべての人の命が危険にさらされかねません。

聖徒たちが成すべきことを知るために、ブリガムはひざまずき、祈ります。主からの答えは簡潔なものでした。とどまり、神殿を完成させるよう命じられたのです。⁸

3月1日の朝、38歳のルイス・ダナは、五十人評議会に加わった最初のアメリカインディアンとなりました。ジョセフの死後、評議会集会は中断されていましたが、ノーブー憲章が廃止され、聖徒たちがノーブーで過ごせる日数の残り少ないことに気づいた

十二使徒会は、評議會を招集し、町の統轄と退去を助けるべく画策します。

オナイダ族の一員であるルイスは、1840年、家族とともにバプテスマを受けました。何度か伝道の業に携わり、一度はアメリカ合衆国西部のインディアン特別保護区へ赴き、はるか遠くのロッキー山脈にまで果敢な旅をしたこともあります。ルイスは西部のインディアン部族の中に、何人かの友人や親戚を見知っていたので、ブリガムはルイスを評議會に招き、部族の人々やその土地について彼が知っていることを教えてくれるよう頼みました。

「主の御名によって、わたしにできることは何でも喜んで行うつもりです」とルイスは評議會に伝えます。⁹

この数年にわたり、聖徒は自分たちに手を貸すことを拒む国の指導者たちに対し、激しい怒りを募らせてきました。教会指導者たちは今や、郡を離れることを決意し、ジョセフの計画、すなわち預言者イザヤが預言したように、もろもろの国民に一つの旗を掲げることのできる新たな集合場所を確立し、そこで平和のうちに神の律法に従って生活するという計画を遂行しようとしていました。ブリガムはジョセフと同じく、インディアン諸族が暮らす西部に新たな集合場所を設けたいと考えていました。散らされたイスラエルの枝として、インディアン諸族を集めたいと望んでいたからです。

ブリガムは評議會に向けて、ルイスと評議會の会員数名を遠征隊として西部に派遣することを提議します。幾つかの部族から集まったインディアンたちと会い、聖徒たちが西に移動する目的を説明するためです。それだけでなく、集合に適した場所を特定したいという思いもありました。¹⁰

ヒーバー・キンボールはその計画に同意し、こう述べます。「遠征隊が集合場所を探している間に、神殿が完成し、聖徒たちは自身のエンダウメントを受けられるようになるでしょう。」¹¹

評議会が遠征隊の件を承認すると、ルイスは隊を率いることに同意します。3月の残りど4月の間、ルイスは評議会集会に出席し、評議員仲間に、遠征隊に最適な身支度や、目標達成に向けた助言を与えました。¹² 4月末までに、ルイスの旅に同行する4人の男性が評議会によって指名されます。中にはブリガムの兄弟フィニアスと、最近の改宗者ソロモン・ティンダルもいました。ソロモンはモヒガンインディアンで、デラウェア家の養子となっていた人物です。¹³

遠征隊はその後間もなくノーブーを出発、ミズーリを通過し、南西を目指し、はるか遠くの保護地区へと旅したのでした。¹⁴

南太平洋に浮かぶトゥブアイ島で、アディソン・プラットは、妻と子供たちを置いてノーブーを去ってから、およそ2年の月日が流れたと目算していました。機会あるごとにアディソンが故郷へ手紙を書き送っていたように、ルイーザもまた夫に手紙を綴っていたことは間違いありませんが、アディソンはまだ一度も家族からの便りを受け取っていませんでした。

それでもアディソンは、まるで故郷にいるかのように感じさせてくれるトゥブアイの人々に感謝していました。この小さな島にはおよそ200人の住民がおり、アディソンは懸命に働いて彼らの言語を学び、多くの友人を作りました。この島に来てから1年がたつと、アディソンがバプテスマを施した人々は、王の最年長の娘、レパを含む60人に達していました。ナボタとテリーという名の夫婦にもバプテスマを施しましたが、二人は自分たちの持ち物をすべてアディソンに分け与え、家族同様に接してくれています。ナボタとテリーがノーブーの聖徒たちのために祈り、アディソンを伝道に遣わしてくださった主に感謝を述べるのを聞くことは、アディソンにとってまさに霊のごちそうでした。¹⁵

ルイーザや娘たちについて考えると、アディソンの胸には故郷を恋しく思う気持ちが込み上げてきましたが、それと同時に、彼女たちが犠牲を払ってくれている理由について思い巡らす機会ともなりました。アディソンがトゥブアイにいるのは、イエス・キリストを愛し、神の子供たちの救いを願っているためです。島を横断してトゥブアイの聖徒たちを訪れると、アディソンはしばしば温かい気持ちと愛を感じ、彼自身の目にも周りの人々の目にも涙が溢れるのでした。

「わたしがこの地で有する友人たちは、永遠の福音のきずなによってのみ作り得る友にほかならない」とアディソンは日記に記しています。¹⁶

3か月後の1845年7月、アディソンは、遠く離れた地、タヒチで伝道していた宣教師仲間のノア・ロジャーズからの手紙により、ジョセフとハイラムの死を知ります。その殺害について読むと、血管を流れる血が凍り付くかのようでした。¹⁷

およそ1週間後、ノアが再びアディソンに手紙をよこします。タヒチとその周辺の島々で働く宣教師たちは、アディソンがトゥブアイで成したほどの成功を得ておらず、ノアはノーブーからの知らせに動揺していました。ノアは故郷に妻と9人の子供たちを残して来ており、彼らの安全が気がかりでした。ミズーリにおける対立の間、彼の家族は多くの苦しみを味わってきたのです。ノアはこれ以上、自分がない状況で家族を試練に耐えさせることを好まず、次の船に乗って家に帰るつもりでいました。¹⁸

アディソンには、ノアの後が続くだけの理由がすべてそろっていました。ジョセフが亡くなってしまった今、家族や教会についての不安が尽きないのはアディソンも同じです。「どのような結末が待っているかは、主だけが御存じだ」と、アディソンは日記に書いています。¹⁹

ノアの出航が数日後に迫っていましたが、アディソンはトゥブアイの聖徒たちとともにとどまることを選びます。次の日曜日、アディソンは3つの説教を、二つは地元の方言で、一つは英語で行いました。²⁰

イリノイ州において、ルーザ・プラットは、ノーブーの南にある小さな居住地、バークリークへと、友人のエラスタスとルハマ・ダービーを訪ねて行きました。²¹そこに滞在中、近隣にある聖徒の居住地に暴徒たちが火を放ち、エラスタスは直ちに、その地を守るべく出かけて行きました。残された二人の女性は家の防御を託されますが、バークリークもまた暴徒たちの襲撃を受けるに違いありません。

その晩、ルハマはあまりの恐ろしさに寝入ることができず、ルーザが眠っている間、自分が見張りに立つと言い張ります。朝になり目を覚ましたルーザは、疲れ切ってもなお警戒を続ける友人の姿を目にします。緊迫した1日が事もなく過ぎ、再び夜になりました。ルーザは、その夜の見張りは自分に任せるよう、ルハマを説得しようとしています。怯えきったルハマは、最初はルーザに任せるのをためらう様子でしたが、説得の末にようやく眠りに就きました。

数日後、エラスタスが帰って来るころには、二人の女性はすっかり疲れ果てていましたが、無事でした。エラスタスの話によると、近隣の居住地に住む聖徒たちはテントや幌馬車の中で暮らしており、雨や夜風にさらされていると言います。²²その知らせを聞き及んだブリガムは、ノーブー郊外に住む聖徒たちに、町の安全な場所に集合するようと呼びかけました。ブリガムはフォード知事に、聖徒たちが春までにその地域を離れることを約

束します。暴徒の敵意を抑え、また神殿を完成させるようにとの主の命令を果たす時間を稼ぎたいと思ったのです。²³

これについて知ると、ルイーザは動揺を隠せませんでした。アディソンは地球の反対側におり、自分には家族を移動させるだけの力も資材もないと感じたのです。ノーブーを去ることについて考えれば考えるほど、ルイーザの不安はますます膨らんでいくのでした。²⁴

雨の降り続く1週間が過ぎ、1845年10月、教会の大会を迎えるころには、ノーブーの上空は明るく晴れ上がっていました。例年になく温かい日です。町の各地から集まった聖徒たちが神殿へと丘を登って行き、新たに建てられたアッセンブリーホールの1階に席を見つけました。建物内部の残りの部分はほとんど未完成でしたが、外壁や屋根は出来上がっており、ドーム型の鐘楼しょうろうが日光に照らされ、そびえ立っています。²⁵

アッセンブリーホールに列を成して入って行く聖徒たちを見守っていたブリガムは、引き裂かれるような思いでした。神殿やノーブーを捨てたくはありませんでしたが、最近の暴徒たちによる攻撃は、これ以上聖徒たちがこの町にとどまっているなら起こり得ることのほんの序の口にすぎないのです。²⁶その春、ジョセフとハイラムを殺害した罪で訴えられた男たちが無罪放免になったことで、イリノイ州では聖徒たちの権利と自由が尊重されないであろうことがさらに明らかとなりました。²⁷

インディアンへの遠征隊に関するルイス・ダナからの報告は良好なものでした。この数週間にわたり、使徒たちと五十人評議会は、新たな集合場所となり得る地について議論を重ねてきました。教会の指導者たちは、ロッキー山脈の向こう側にあるグレートソルトレーク盆地に関心を抱きます。ソルトレーク盆地に

関する説明は期待できるものであり、聖徒たちがその付近に定住し、やがては太平洋沿岸にまで広がり住むようになると、ブリガムは信じていました。²⁸

ところがその盆地は広大で、見知らぬ荒れ野を2,200キロほども渡って行った先にあります。道らしき道はほとんどなく、食糧や物資を購入できる店は無きに等しい状態です。ノーブーを去らなければならないことを、聖徒たちはすでに承知していました。しかし、それほど長く、また危険をはらんだ旅に出ることなどできるでしょうか。

主の助けがあれば不可能ではないと確信していたブリガムは、教会員を元気づけ、彼らの不安を取り除くために、大会を開くことを計画します。午後の部会で最初にパーリー・プラットが話をし、西部へ移動するという教会の計画について触れました。「主は我々を、より幅広い活動の場へ導こうとしておられます。そこには聖徒たちが成長し、増し加わっていくのに必要な、さらなる余地があるのです」とパーリーは宣言します。「我々はその地で、自由と平等の権利による純粋な原則を享受できるでしょう。」

次にジョージ・A・スミスが説教壇に立ち、聖徒たちがミズーリで直面した迫害について話しました。撲滅令による脅威にあっても、聖徒たちはだれ一人として置き去りにはしないと聖約し、一丸となってミズーリ州から退避しました。ジョージは聖徒たちに、今回も同様に行い、自力で旅をすることができない人々を助けるため、皆が全力を尽くすように求めます。

ジョージの話が終わると、今度はブリガムが聖徒たちに、西へ行くことを望む者をだれ一人置き去りにはしないと、互いと主に聖約するよう提案しました。ヒーバー・キンボールが賛意の表明を呼びかけると、聖徒たちはその誓約を喜んで実行するしるしとして、それぞれの手を挙げました。

「皆さんが交わした聖約に忠実であるならば、偉大な神がこの民に、その聖約をことごとく成し遂げるための手立てを豊かに与えてくださることを、わたしは今預言いたします。」ブリガムはそう約束したのです。²⁹

大会に続く数か月のうちに、聖徒たちはのこぎりやハンマー、^{かな}金床、裁縫針といったあらゆる道具を使って荷馬車を作り、西に向かう旅支度を整えました。また働き人たちは、神殿にかかわる労力を倍加しました。聖徒たちが町を去る前に儀式を受けられるように、神殿の完成を間に合わせるためです。³⁰

エンダウメントと結び固めのために、労働者たちが神殿の中二階を仕上げている間、地下室では絶えず死者のためのバプテスマが執り行われていました。ブリガムは主の指示により、今後は男性が女性のために、あるいは女性が男性のためにバプテスマを受けることのないように指導します。³¹

「ジョセフはその生涯のうちに、贖いの教義にかかわるすべてを受けたわけではありません」と、ブリガムはその年の初旬、聖徒たちに教えました。「しかしジョセフは、この大いなる民が神の日の栄えの王国における救いと昇栄に必要なものをすべて享受する方法、それらを教える方法を理解する者たちの手に、その鍵を託したのです。」

儀式にかかわる変更は、主が絶えず御自分の民にその御心を明らかにされることを示すものです。「主は常に、こうした方法でこの民を導かれます」とブリガムは明言しています。「ここにも少し、そこにも少しと教えられます。このようにして、主は御自分の民の知恵を増し加えられます。少しを受け、与えられたものに感謝する者には、その後も続けてさらに多くのものが与えられるのです。」³²

12月には神殿の中二階が完成し、使徒たちはその部屋をエンダウメントの儀式に備えます。聖徒たちの助けを得て、使徒たちは大きなホールを分厚いカーテンで幾つかの部屋に仕切り、植物や壁画を飾りました。また中二階の東端に当たる広い空間を仕切って、そこを神殿内で最も神聖な場所である日の栄えの部屋とし、鏡や絵画、地図、見事な大理石の時計などで装飾しました。³³

それから使徒は聖徒たちに、神殿に参入し、それぞれの祝福を受けるよう奨励します。すでにエンダウメントを受けた男女が、今度は儀式において、代わる代わる様々な役割を果たしました。神殿内の部屋を通して聖徒たちを案内しながら、儀式執行者たちは神の子供たちのための計画についてさらに詳しく教え、福音に従った生活をし、神の王国を築くために自らをささげるという聖約の下に聖徒たちを導きました。³⁴

バイレート・キンボールとアン・ホイットニーは、女性たちに洗いと油注ぎの儀式を執り行いました。その後エライザ・スノーが、すでにエンダウメントを受けた女性たちの助けを借りて、残りの儀式の間、女性たちを案内します。ブリガムはマーシー・トンプソンを、専任で神殿内の儀式を助ける働きに召しました。³⁵

新しい年が明けると、使徒たちはこの世と永遠にわたる結び固めを夫婦に施し始めました。間もなくして1,000組を超える夫婦が、結婚の新しくかつ永遠の聖約に入りました。そうした夫婦の中には、サリーとウィリアム・フェルプス、ルーシーとアイザック・モーリー、アンとフィロ・ディブル、キャロラインとジョナサン・クロスビー、リディアとニューエル・ナイト、ドルシラとジェームズ・ヘンドリックスのほか、自らの人生をシオンにささげ、地方から地方へと教会に従って行った男女たちがいます。

使徒たちはまた、子供たちを両親に、すでにこの世を去った配偶者に男女を結び固めました。ジョセフが金版を家に持ち帰った朝、ともに喜びを分かち合ったジョセフ・ナイト・シニアは、身代わりによってその妻ポリーと結び固められました。ポリーは、ミズーリ州ジャクソン郡で最初に葬られた聖徒です。聖徒たちの中には、特別な養子縁組による結び固めを通して、親しい友人の永遠の家族に加えられた者もいました。³⁶

各儀式の中で、神権によって主に、そして互いに結び合わされることで、聖徒たちとその家族が鎖のごとくつながれるという主の計画が現実のものとなったのです。³⁷

その年の冬、聖徒たちが春に出発するという約束を守ることを疑わしく思っていた教会の敵対者たちは、動きをとどめることがありませんでした。ブリガムと使徒たちは無実の罪で告訴されており、人目を避けざるを得なくなります。時には神殿に身を隠すことさえありました。³⁸ 聖徒たちの忠誠心を疑う合衆国政府が、政府軍を送って彼らを郡内から立ち去らせようとしている、あるいは海外勢力と結託して西部の地を管理下に収めようとしているといったうわさが駆け巡ります。³⁹

立ち退きへの強い圧力を感じた使徒たちは、教会指導者とその家族、また迫害の標的となっている人々をできるだけ速やかにノーブーから離れさせるべきだと判断します。ミシシッピ川を渡ってアイオワ州に逃れるなら、もうしばらくの間、敵対者らを押しとどめ、さらなる暴力を防ぐことができると、使徒たちは信じていたのです。

1846年1月の初旬、使徒たちは五十人評議会とともに、最終的な脱出計画を立てます。旅立つに先立ち、使徒たちは代理人を任命すると、後に残された資産を管理し、貧しい人々の旅の

助けとなり得る物を売却するよう指示しました。また幾人かの男たちに、その地にとどまり、神殿の完成と奉獻に当たるよう依頼します。

ブリガムと十二使徒会は、今や聖徒たちをロッキー山脈の向こうの盆地に集合させることを決定していました。神殿で日々断食と祈りを重ねた後、ブリガムは、ジョセフがある山の頂を指差す光景を示現で目にします。その頂には、旗印となる1枚の布が風にはためいていました。ジョセフはブリガムに、その山のふもとに一つの町を築くよう告げたのです。

ブリガムは、その地域を望む者などほとんどいないだろうと確信していました。そこは、山並みの東に広がる平原ほど肥沃な地ではないからです。それでもブリガムは、それらの山々が聖徒たちにとって敵からの防御となり、また穏やかな気候をもたらしてくれることを期待しました。いったん盆地に定住してしまえば、太平洋沿岸に港を築き、イギリスやアメリカ合衆国東部からの移住者を受け入れられるとの期待もあります。⁴⁰

2日後に評議会が再開されると、ブリガムは、イザヤの預言を成就し、もろもろの国民に一つの旗を掲げるというジョセフの望みについて再び思い巡らします。「主の家が山の頂に築かれ、自由の旗が谷を臨んで誇らしげにはためかないかぎり、預言者のその言葉が実現されることは決してないでしょう。」ブリガムは評議会に向けて、そう語りました。

「わたしはその場所がどこであるかを知っています」とブリガムは宣言します。「その旗をどのように立てるかを、知っているのです。」⁴¹

2月2日、何千人もの聖徒たちが神殿の儀式を受けた後、使徒たちは神殿における業を休止し、それに代わって、幌馬車を積ん

で凍てついたミシシッピ川を渡るための船を準備すると発表しました。ブリガムは幌馬車隊の隊長に使者を送り、4時間以内に出発の用意をするよう指示します。それから夜遅くまで、ブリガムは聖徒たちにエンダウメントを施し続け、神殿の記録者たちによって、すべての儀式が正しく記録されるようにしました。⁴²

翌日ブリガムが目を覚ますと、聖徒たちの一団が神殿の外で待ち構えており、自身のエンダウメントを受けたいと切望します。ブリガムは彼らに、出発を遅らせることは賢明ではないと伝えました。これ以上エンダウメントを行うためにとどまるなら、彼らが町から逃れる道が妨げられるか、あるいは断ち切られる恐れがあったからです。ブリガムは聖徒たちに、今後さらに多くの神殿が建てられ、遠く西の地でその祝福にあずかる機会が与えられるだろうと約束しました。

そうしてブリガムはその場を立ち去ろうとしますが、聖徒たちはブリガムの期待したように解散するどころか、神殿へと階段を上り、ホールを埋め尽くしました。振り向いたブリガムは、聖徒たちに続いて神殿内に入りました。聖徒たちの不安気な顔を目にすると、ブリガムの考えが変わります。この先待ち受けている苦難に耐えるために、聖徒たちは力をもたらずエンダウメントを必要としていました。死のとげに打ち勝ち、神のもとへ帰るために、その力がぜひとも必要であることが、彼らには分かっていたのです。

その日の残りの時間、神殿ワーカーは何百人もの聖徒たちに儀式を施しました。⁴³翌日の1846年2月4日、幌馬車の先発隊が列を成してノーブーから出て行く中、さらに500人の聖徒たちがエンダウメントを受けました。

2月8日、ブリガムと使徒たちは最後に、神殿の最上階で集会を開きました。一同は祭壇の周りにひざまずき、祈りをささげます。西へと向かう聖徒たちのうえに、またノーブーにとど

まって神殿を完成させ、主に奉献しようとしている聖徒たちのうえに、それぞれ神の祝福を祈り求めたのでした。⁴⁴

その後数週間にわたり、聖徒たちから成る幾つかの隊が、幌馬車や牛を平底船ひらそこに積み入れて川を渡り、すでに対岸に渡っていた人々に合流しました。川から数キロ西にある高い絶壁を登りながら、多くの聖徒たちはノーブーを振り返り、万感の思いで神殿に別れを告げます。⁴⁵

ルイーザ・プラットは来る日も来る日も、町を去って行く友人や隣人たちを見送りました。アディソンがそばにおらず、その支えなくして西へ向かうことを考えると、ルイーザの胸はいまだ恐ろしさに震えます。予期せぬ危険に満ちた旅になることをだれもが予測していました。それなのに、それまで彼女に、旅の用意ができていたか尋ねてくれた人はだれもいませんでした。アディソンを伝道に召した男性たちのだれ一人として、移動の助けも申し出てくれないのです。

そんなある日、ルイーザの胸の内を聞いた一人の友人が彼女にこう言いました。「プラット姉妹、あなたには助けがなくても自分で旅に出かけられるだけの賢明さがあると、彼らは思っているのよ。それに、ほかの人たちを助けることさえ期待しているんだわ。」

少しの間考えると、ルイーザはこう言います。「それなら、わたしに何ができるか、彼らに見せることにするわ。」⁴⁶

雪が周囲を渦巻く中、エミリー・パートリッジは、ミシシッピ川西岸沿いに横たわる倒木に腰掛け、寒さに震えていました。6日前に川を渡った母親と姉妹たちが近くで野営しているはずですが、

彼女たちがどこにいるのか、エミリーには分かりませんでした。すでにノーブーを去った多くの聖徒と同様、エミリーは空腹で疲れ切っており、この先の旅を思うと、不安でたまりません。信仰のために家から追い出されたのは、これで4回目です。⁴⁷

思い出せるかぎりのほとんどの期間、彼女は末日聖徒として生きてきました。エミリーは少女のころ、イエス・キリストに仕え、シオンを築くために、迫害や貧困に苦しむ両親の姿を目にしてきました。16歳になり、暴徒が家族をミズーリ州から追いやったとき、エミリーはすでにそれまでの生涯の大半を、避け所と平安を得られる場所を探し求めることに費やしていました。

22歳を迎えようとしている今、彼女は再び別の旅を始めようとしているのです。ジョセフの死後、エミリーは多妻結婚の妻として、ブリガム・ヤングと結婚しました。前年の10月、ブリガムとエミリーは、エミリーの父親にちなんで名付けられた息子、エドワード・パートリッジ・ヤングをもうけます。その2か月後、エミリーは神殿に参入し、自身のエンダウメントを受けました。

赤ん坊がその旅を生き延びられたなら、その子は山間部で成長し、母親が若かりしころ経験したような暴徒の脅威を免れることでしょう。しかし、エミリーがジャクソン郡やノーブーで経験したような暮らしぶりを、その子が知ることは決まてないでしょう。その子はジョセフ・スミスに会うことも、ジョセフが日曜の午後、聖徒たちに教えを説く声を聞くことも、決まてないのです。

エミリーは川を渡る前、預言者の死の5か月後に生まれたジョセフとエマの幼い息子、デビッド・ハイラムに会うためにノーブーマンションを訪れました。かつてエマとエミリーの間にあった悪感情はなくなっており、エマはエミリーを家に招き入れ、優しく対応してくれました。

エマと子供たちは、西部に行くつもりはありませんでした。エマにとって多妻結婚は受け入れがたく、また財産に関する争い

も継続中であったため、エマと教会、および十二使徒会との関係はこじれたままだったのです。エマは今でもモルモン書を信じていましたし、預言者としての夫の召しについても力強い証を持ち続けていました。それでも、エマは使徒たちに従って行くよりも、スミス家の人々とともにノーブーにとどまることを選んだのでした。⁴⁸

ミシシッピ川沿いに腰かけるエミリーの服に、大きな雪片^{せつぺん}が降り積もるにつれて、彼女の体はますます冷え切っていきます。ブリガムは今なおノーブーにおり、聖徒たちの退去を見届けています。エミリーは立ち上がって赤ん坊を抱き上げると、温もりと見覚えのある顔を探し求めて、たき火から別のたき火へとさまよいました。間もなくして、エミリーは姉のエライザに再会し、シュガークリークと呼ばれる地にある聖徒たちの野営地に合流します。そこでエミリーが目にしたのは、数家族がテントや幌馬車の中で身を寄せ合う姿でした。彼らは温もりと、寒く先行きの見えない未来に対する慰めを求めて、しっかりと互いの体にしがみついていた。⁴⁹

夜が明けたら何が待ち受けているのか、野営地のだれにも分かりません。それでも彼らは、暗闇の中に闇雲に飛び込もうとしていたわけではありません。彼らは神殿で神と聖約を交わしており、旅の間自分たちを導き、支えてくださる神の力に対する信仰を強めていました。ロッキー山脈の頂を横切^{いただき}って西へ向かう途中のどこかで集合の地を見だし、新たな神殿を建て、地上における神の王国を築くことになると、聖徒たちは確信していたのです。⁵⁰

備考

資料の一部は短縮表記で参照されていますが、「出典一覧」セクションにはすべての資料の完全な情報が掲載されています。多くの資料はデジタルで入手可能です。saints.lds.org/jpnあるいは福音ライブラリーにて、本書の電子版にアクセスし、そこにあるリンクから利用することができます。

「テーマ」という言葉が「注」に載っている場合は、追加情報がオンライン (saints.lds.org/jpn) に掲載されています。

はじめに

1. Woodruff, Journal, Oct. 20, 1861
2. Joseph Smith and others, History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, edited by B. H. Roberts (Salt Lake City: Deseret News, 1902–1912 [vols. 1–6], 1932 [vol. 7]); B. H. Roberts, A Comprehensive History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints: Century I. 6 vols. (Salt Lake City: Deseret News, 1930)
3. 教義と聖約 69 : 8 (Revelation, Nov. 11, 1831–A, at josephsmithpapers.org)
4. モーサヤ 3 : 19 参照

第 1 章：信仰をもって願い求める

1. Raffles, “Narrative of the Effects of the Eruption,” 4–5, 19, 23–24
2. Raffles, “Narrative of the Effects of the Eruption,” 5, 7–8, 11
3. Wood, Tambora, 97
4. Wood, Tambora, 78–120; Statham, Indian Recollections, 214; Klingaman and Klingaman, Year without Summer, 116–18
5. Wood, Tambora, 81–109; Klingaman and Klingaman, Year without Summer, 76–86, 115–20
6. Klingaman and Klingaman, Year without Summer, 48–50, 194–203
7. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 131; Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 2, [11]–book 3, [2] テーマ：ジョセフ・スミスの足の手術
8. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [3]; Stilwell, Migration from Vermont, 124–50
9. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [4]; Bushman, Rough Stone Rolling, 18–19, 25–28 テーマ：ジョセフ・シニアとルーシー・マック・スミスの家族
10. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [5]; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 131–32
11. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [2]; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 131
12. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [5]–[6]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 67; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 132 テーマ：ルーシー・マック・スミス
13. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [6]–[7]
14. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 3, [7]; Tucker, Origin, Rise, and Progress of Mormonism, 12 テーマ：ジョセフ・シニアとルーシー・マック・スミスの家族
15. Cook, Palmyra and Vicinity, 247–61 テーマ：バルマイラとマンチェスター；ジョセフ・スミスの時代のキリスト教の教会
16. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1–2, in *JSP*, H1:11–12
17. Joseph Smith — History 1:5–6; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, [1]–2, in *JSP*, H1:208–10 (draft 2) テーマ：ジョセフ・スミスの時代の宗教的信条
18. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 2, [1]–[6]; “Records of the Session of the Presbyterian Church in Palmyra,” Mar. 10, 1830

19. Asael Smith to "My Dear Selfs," Apr. 10, 1799, Asael Smith, Letter and Genealogy Record, 1799, circa 1817-46, Church History Library
20. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, miscellany, [5]; Anderson, Joseph Smith's New England Heritage, 161-62
21. Joseph Smith — History 1:8-10; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 2, in *JSP*, H1:208-10 (draft 2) テーマ: ジョセフ・スミスの時代の宗教的信条
22. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [8]-[10]; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1, in *JSP*, H1:11 テーマ: 聖なる森とスミス一家の農場
23. テーマ: 覚醒と信仰復興
24. 使徒 10: 34 - 35; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 2, in *JSP*, H1:12
25. Neibaur, Journal, May 24, 1844, available at josephsmithpapers.org: ジョセフ・スミス — 歴史 1:10; Joseph Smith, "Church History," *Times and Seasons*, Mar. 1, 1842, 3:706, in *JSP*, H1:494
26. Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:87; ジョセフ・スミス — 歴史 1:8 - 9; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 2, in *JSP*, H1:210 (draft 2)
27. "Wm. B. Smith's Last Statement," *Zion's Ensign*, Jan. 13, 1894, 6; ヤコブ 1:5
28. ジョセフ・スミス — 歴史 1:11 - 14; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 2-3, in *JSP*, H1:210-12 (draft 2); ヤコブ 1:6

第 2 章 : 彼に聞きなさい

1. ジョセフ・スミス — 歴史 1:14; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:212 (draft 2); Interview, Joseph Smith by David Nye White, Aug. 21, 1843, in [David Nye White], "The Prairies, Nauvoo, Joe Smith, the Temple, the Mormons, &c.," *Pittsburgh Weekly Gazette*, Sept. 15, 1843, [3], available at josephsmithpapers.org
2. Interview, Joseph Smith by David Nye White, Aug. 21, 1843, in [David Nye White], "The Prairies, Nauvoo, Joe Smith, the Temple, the Mormons, &c.," *Pittsburgh Weekly Gazette*, Sept. 15, 1843, [3], available at josephsmithpapers.org; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:12
3. Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88
4. ジョセフ・スミス — 歴史 1:15; Hyde, *Ein Ruf aus der Wüste*, 15-16; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:212 (draft 2)
5. ジョセフ・スミス — 歴史 1:16; Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:212 (draft 2)
6. ジョセフ・スミス — 歴史 1:16 - 17; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:12-13; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:214 (draft 2); Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88
7. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:13
8. Interview, Joseph Smith by David Nye White, Aug. 21, 1843, in [David Nye White], "The Prairies, Nauvoo, Joe Smith, the Temple, the Mormons, &c.," *Pittsburgh Weekly Gazette*, Sept. 15, 1843, [3], available at josephsmithpapers.org
9. ジョセフ・スミス — 歴史 1:5 - 26; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:13; Levi Richards, Journal, June 11, 1843; Joseph Smith, "Church History," *Times and Seasons*, Mar. 1, 1842, 3:706, in *JSP*, H1:494
10. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:13
11. Pratt, Interesting Account, 5, in *JSP*, H1:523
12. ジョセフ・スミス — 歴史 1:20; Interview, Joseph Smith by David Nye White, Aug. 21, 1843, in [David Nye White], "The Prairies, Nauvoo, Joe Smith, the Temple, the Mormons, &c.," *Pittsburgh Weekly Gazette*, Sept. 15, 1843, [3], available at josephsmithpapers.org; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:214 (draft 2); Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:13
13. ジョセフ・スミス — 歴史 1:20; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:214 (draft 2)

14. See Bushman, "Visionary World of Joseph Smith," 183-204
15. ジョセフ・スミス — 歴史 1:21; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 3, in *JSP*, H1:216 (draft 2); Neibaur, Journal, May 24, 1844, available at josephsmithpapers.org
テーマ: ジョセフ・スミスの時代のキリスト教の教会
16. ジョセフ・スミス — 歴史 1:22, 27; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 4, in *JSP*, H1:216-18 (draft 2); Interview, Joseph Smith by David Nye White, Aug. 21, 1843, in [David Nye White], "The Prairies, Nauvoo, Joe Smith, the Temple, the Mormons, &c.," *Pittsburgh Weekly Gazette*, Sept. 15, 1843, [3], available at josephsmithpapers.org
17. ジョセフ・スミス — 歴史 1:21 - 25; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 4, in *JSP*, H1:216-18 (draft 2)
18. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 3, in *JSP*, H1:13; see also Historical Introduction to Joseph Smith History, circa Summer 1832, in *JSP*, H1:6
19. ジョセフは、生涯でこの経験に関する 4 つの記録を自身で書いたか、ほかの人の執筆を監督した。最初の記録は Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1-3, in *JSP*, H1:11-13 から閲覧可能。この経験についてジョセフが語るのを聞いた別の 5 人も、それぞれの記録を書き記した。9 つの記録は Primary Accounts of Joseph Smith's First Vision of Deity, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org で閲覧可能。各記録の類似点および相違点に関する分析は、「最初の示現の記録」, 「福音のテーマ」(www.lds.org/topics?lang=jpn&old=true) 参照。テーマ: ジョセフ・スミス — 最初の示現の記録
20. ジョセフ・スミス — 歴史 1:26; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 4, in *JSP*, H1:218 (draft 2)

第 3 章: 金の版

1. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 4-5, in *JSP*, H1:220 (draft 2); Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1, in *JSP*, H1:11
2. "Joseph Smith as Revelator and Translator," in *JSP*, MRB:xxi; Turley, Jensen, and Ashurst-McGee, "Joseph the Seer," 49-50; モーサヤ 8:17; アルマ 37:6-7, 41; 教義と聖約 10:1, 4 (Revelation, Spring 1829, josephsmithpapers.org) も参照
3. Bushman, Rough Stone Rolling, 48-49; Bushman, "Joseph Smith as Translator," 242
テーマ: 聖見者の石
4. Lucy Mack Smith, History, 1845, 95; アルマ 37:23 も参照
5. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 4, in *JSP*, H1:13-14; ジョセフ・スミス — 歴史 1:28 - 29; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 5, in *JSP*, H1:218-20 (draft 2)
6. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [10]
7. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 4, in *JSP*, H1:13-14; ジョセフ・スミス — 歴史 1:29 - 33; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 5, in *JSP*, H1:218-22 (draft 2); Pratt, Interesting Account, 6, in *JSP*, H1:524; Hyde, Ein Ruf aus der Wüste, 17-20 テーマ: 天使モロナイ
8. Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88
9. ジョセフ・スミス — 歴史 1:35; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 5, in *JSP*, H1:222 (draft 2); Joseph Smith History, circa Summer 1832, 4, in *JSP*, H1:14; Oliver Cowdery, "Letter IV," LDS Messenger and Advocate, Feb. 1835, 1:65-67; Turley, Jensen, and Ashurst-McGee, "Joseph the Seer," 49-54; "Mormonism — No. II," Tiffany's Monthly, July 1859, 164 テーマ: 聖見者の石
10. ジョセフ・スミス — 歴史 1:36 - 41; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 5-6, in *JSP*, H1:222-26 (draft 2); Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88-89
11. Oliver Cowdery, "Letter IV," LDS Messenger and Advocate, Feb. 1835, 1:78-79; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [11]
12. ジョセフ・スミス — 歴史 1:42 - 43; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 6, in *JSP*, H1:226 (draft 2)
13. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [10]-[11]; Oliver Cowdery, "Letter IV," LDS Messenger and Advocate, Feb. 1835, 1:79-80; Oliver Cowdery, "Letter VII," LDS Messenger and Advocate, July 1835, 1:156-57; ジョセフ・スミス — 歴史 1:44 - 46;

- Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 6-7, in *JSP*, H1:230-32 (draft 2); Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:88-89
14. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [11]; see also Smith, *William Smith on Mormonism*, 9
 15. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [11]; Smith, Biographical Sketches, 82; ジョセフ・スミス — 歴史 1: 48 - 49; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 7, in *JSP*, H1:230-32 (draft 2); Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:89
 16. Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:89
 17. Oliver Cowdery, "Letter VIII," *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:195-97
テーマ: 宝探し
 18. Oliver Cowdery, "Letter VIII," *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:195-97; ジョセフ・スミス — 歴史 1: 51 - 52; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 6-7, in *JSP*, H1:230-32 (draft 2); see also Packer, "A Study of the Hill Cumorah," 7-10
 19. ジョセフ・スミス — 歴史 1: 52; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 7, in *JSP*, H1:232 (draft 2) テーマ: 金版
 20. Joseph Smith, "Church History," *Times and Seasons*, Mar. 1, 1842, 3:707, in *JSP*, H1:495
 21. Oliver Cowdery, "Letter VIII," *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:197-98; see also Pratt, *Interesting Account*, 10, in *JSP*, H1:527-29
 22. Oliver Cowdery, "Letter VIII," *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:198-99
 23. Knight, *Reminiscences*, 1; Joseph Smith, Journal, Nov. 9-11, 1835, in *JSP*, J1:89; ジョセフ・スミス — 歴史 1: 53 - 54; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 7, in *JSP*, H1:232-34 (draft 2); see also Jessee, "Joseph Knight's Recollection of Early Mormon History," 31
 24. Joseph Smith, Journal, Aug. 23, 1842, in *JSP*, J1:116-17
 25. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 3, [12]; book 4, [3]; Smith, Biographical Sketches, 83
 26. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [1]-[3]; Smith, *Biographical Sketches*, 86-87; see also Lucy Mack Smith, History, 1845, 89; and Bushman, *Refinement of America*, 425-27 テーマ: ジョセフ・シニアとルーシー・マック・スミスの家族
 27. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [3]-[5]
 28. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [6]-[8]; "Wm. B. Smith's Last Statement," *Zion's Ensign*, Jan. 13, 1894, 6
 29. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [7]; Joseph Smith, Journal, Aug. 23, 1842, in *JSP*, J2:116-17
 30. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [2]-[3]
 31. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 4, [2]-[3]; Smith, *Biographical Sketches*, 85-86; Knight, *Reminiscences*, 1; ジョセフ・スミス — 歴史 1: 54; Lucy Mack Smith, History, 1845, 88; see also Jessee, "Joseph Knight's Recollection of Early Mormon History," 31
 32. Smith, *Biographical Sketches*, 86

第4章: 目を覚ましていなさい

1. Agreement of Josiah Stowell and Others, Nov. 1, 1825, in *JSP*, D1:345-52
2. Smith, Biographical Sketches, 91-92; Oliver Cowdery, "Letter VIII," *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:200-202; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 7-8, in *JSP*, H1:234 (draft 2); Smith, *On Mormonism*, 10 テーマ: 宝探し
3. Agreement of Josiah Stowell and Others, Nov. 1, 1825, in *JSP*, D1:345-52
4. Pratt, *Autobiography*, 47; Burnett, *Recollections and Opinions of an Old Pioneer*, 66-67; Woodruff, Journal, July 4, 1843, and Oct. 20, 1855; Emmeline B. Wells, "L. D. S. Women of the Past," *Woman's Exponent*, Feb. 1908, 36:49; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289; see also Staker and Ashton, "Growing Up in the Isaac and Elizabeth Hale Home"; and Ashurst-McGee, "Josiah Stowell Jr. - John S. Fullmer Correspondence," 108-17

5. Baugh, "Joseph Smith's Athletic Nature," 137-50; Pratt, *Autobiography*, 47; Burnett, *Recollections and Opinions of an Old Pioneer*, 66-67; *Recollections of the Pioneers of Lee County*, 96; Younggreen, *Reflections of Emma*, 61, 67, 65, 69; Emmeline B. Wells, "L. D. S. Women of the Past," *Woman's Exponent*, Feb. 1908, 36-49
6. *Joseph Smith History, 1838-56*, volume A-1, 8, in *JSP*, H1:234 (draft 2); Smith, *Biographical Sketches*, 92; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 51-53; Staker, "Isaac and Elizabeth Hale in Their Endless Mountain Home," 104
7. *Joseph Smith History, 1838-56*, volume A-1, 7-8, in *JSP*, H1:234-36 (draft 2); Knight, *Reminiscences*, 2; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290
8. William D. Purple, "Joseph Smith, the Originator of Mormonism," *Chenango Union*, May 2, 1877, [3]; see also *An Act for Apprehending and Punishing Disorderly Persons* [Feb. 9, 1788], *Laws of the State of New-York* [1813], 1:114 テーマ: 1826年—ジョセフ・スミスの裁判
9. "Mormonism — No. II," *Tiffany's Monthly*, July 1859, 169
10. Knight, *Reminiscences*, 2
11. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, 96; see also Knight, *Reminiscences*, 2
12. See "The Original Prophet," *Fraser's Magazine*, Feb. 1873, 229-30
13. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 97
14. Knight, *Reminiscences*, 2; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289
15. Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289; *Joseph Smith History, 1838-56*, volume A-1, 8, in *JSP*, H1:236 (draft 2)
16. Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290; Joseph Lewis and Hiel Lewis, "Mormon History. A New Chapter, about to Be Published," *Amboy Journal*, Apr. 30, 1879, 1; see also Oliver Cowdery, "Letter VIII," in *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1835, 2:201
17. *Joseph Smith History, 1838-56*, volume A-1, 8, in *JSP*, H1:236 (draft 2); Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 4, [11]-[12]; book 5, [1]-[3] テーマ: 聖なる森とスミス一家の農場
18. "Mormonism — No. II," *Tiffany's Monthly*, July 1859, 167-68
19. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [4]-[6]
20. Knight, *Reminiscences*, 2
21. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [6]
22. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 105
23. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 6, [1]
24. "Mormonism — No. II," *Tiffany's Monthly*, June 1859, 165-66; Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [6]
25. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [6]-[7]; Knight, *Reminiscences*, 2
26. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [7]-[8]
27. Knight, *Reminiscences*, 2-3; *Joseph Smith History, 1838-56*, volume A-1, 5, in *JSP*, H1:222 (draft 2); アルマ 37:23 も参照
28. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [8]-[10]; "Mormonism — No. II," *Tiffany's Monthly*, Aug. 1859, 166; Smith, *Biographical Sketches*, 103; 創世 25:29 - 34 も参照
29. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [10] and adjacent paper fragment
30. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [11] テーマ: 金版
31. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [11]
32. "The Old Soldier's Testimony," *Saints' Herald*, Oct. 4, 1884, 643-44; Salisbury, "Things the Prophet's Sister Told Me," 1945, *Church History Library*; Ball, "The Prophet's Sister Testifies She Lifted the B. of M. Plates," 1954, *Church History Library*; Smith, William Smith on Mormonism, 11; Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [11]; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290
33. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 5, [11]-[12] テーマ: ルーシー・マック・スミス

第5章：すべてが失われた

1. ジョセフ・スミス—歴史 1:59; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 8, in *JSP*, H1:236–38 (draft 2); Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [1]–[2]; Knight, Reminiscences, 3
2. Knight, Reminiscences, 3–4; Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [1]–[3]; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1, in *JSP*, H1:11
3. “Mormonism — No. II,” Tiffany’s Monthly, Aug. 1859, 167–68; Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [3]–[4]; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 8, in *JSP*, H1:238 (draft 2) テーマ：モルモン書の証人
4. “Mormonism — No. II,” Tiffany’s Monthly, Aug. 1859, 168–70
5. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 8–9, in *JSP*, H1:238 (draft 2); Knight, Reminiscences, 3; “Mormonism — No. II,” Tiffany’s Monthly, Aug. 1859, 170
6. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [6]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 121
7. “Mormonism — No. II,” Tiffany’s Monthly, Aug. 1859, 170
8. “Mormonism — No. II,” Tiffany’s Monthly, Aug. 1859, 170; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:240 (draft 2)
9. Isaac Hale, Affidavit, Mar. 20, 1834, in “Mormonism,” Susquehanna Register, and Northern Pennsylvanian, May 1, 1834, [1]
10. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:240 (draft 2); Knight, Reminiscences, 3
11. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [3]; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:240 (draft 2); “Letter from Elder W. H. Kelley,” Saints’ Herald, Mar. 1, 1882, 68; 教義と聖約 9:7 – 8 (Revelation, Apr. 1829–D, at josephsmithpapers.org) も参照
12. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 5, in *JSP*, H1:15; Knight, Reminiscences, 3
テーマ：モルモン書の翻訳
13. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:238–40 (draft 2); Joseph Smith History, circa Summer 1832, 5, in *JSP*, H1:15
14. MacKay, “Git Them Translated,” 98–100
15. Bennett, “Read This I Pray Thee,” 192
16. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:240 (draft 2); Bennett, Journal, Aug. 8, 1831, in Arrington, “James Gordon Bennett’s 1831 Report on ‘The Mormonites,’” 355
17. [James Gordon Bennett], “Mormon Religion — Clerical Ambition — Western New York — the Mormonites Gone to Ohio,” Morning Courier and New-York Enquirer, Sept. 1, 1831, [2]
18. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:240–42 (draft 2); Jennings, “Charles Anthon,” 171–87; Bennett, “Read This I Pray Thee,” 178–216
19. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244 (draft 2); Bennett, Journal, Aug. 8, 1831, in Arrington, “James Gordon Bennett’s 1831 Report on ‘The Mormonites,’” 355; Knight, Reminiscences, 4 テーマ：マーティン・ハリスと学者との面会
20. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 5, in *JSP*, H1:15; イザヤ 29:11 – 12; 2 ニューフェイス 27:15 – 19
21. Lucy Mack Smith, History, 1844–45, book 6, [8]; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244; Joseph Smith III, “Last Testimony of Sister Emma,” Saints’ Herald, Oct. 1, 1879, 289–90
22. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244 (draft 2); Isaac Hale, Affidavit, Mar. 20, 1834, in “Mormonism,” Susquehanna Register, and Northern Pennsylvanian, May 1, 1834, [1]; Agreement with Isaac Hale, Apr. 6, 1829, in *JSP*, D1:28–34
23. Briggs, “A Visit to Nauvoo in 1856,” 454; see also Edmund C. Briggs to Joseph Smith, June 4, 1884, Saints’ Herald, June 21, 1884, 396
24. Joseph Smith III, “Last Testimony of Sister Emma,” Saints’ Herald, Oct. 1, 1879, 289–90; Briggs, “A Visit to Nauvoo in 1856,” 454

25. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244 (draft 2); Isaac Hale, Affidavit, Mar. 20, 1834, in "Mormonism," *Susquehanna Register*, and *Northern Pennsylvanian*, May 1, 1834, [1]
26. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [8]
27. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [3]-[5], [8]-[9]
28. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [9]-[10]; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289-90
29. エマ・スミスが回想録の中で述べていることによると、彼女はジョセフとオリバー・カウドリが 1829 年にモルモン書の翻訳を完成させる間、その同じ部屋で働いていた。また、1828 年にはジョセフとマーティンの翻訳の場に同席していたと思われる。(Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290)
30. William Pilkington, Affidavit, Cache County, UT, Apr. 3, 1934, in William Pilkington, *Autobiography and Statements*, Church History Library; "One of the Three Witnesses," *Deseret News*, Dec. 28, 1881, 10
31. Briggs, "A Visit to Nauvoo in 1856," 454; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289-90
32. See Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [10]; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 5, in *JSP*, H1:15; Knight, *Reminiscences*, 5; and Historical Introduction to Preface to the Book of Mormon, circa Aug. 1829, in *JSP*, D1:92-93
33. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 9, in *JSP*, H1:244 (draft 2); Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [10]
34. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [10]-[11]; book 7, [1]
35. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 5, in *JSP*, H1:15
36. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 9-10, in *JSP*, H1:244-46 (draft 2); Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [1]; Knight, *Reminiscences*, 5
37. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 9-10, in *JSP*, H1:244-46 (draft 2)
38. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [1]-[2] テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ヘイル・スミスの家族
39. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [1]-[2]
40. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [2]-[4]
41. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [5]
42. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [5]-[7] テーマ：モルモン書の失われた原稿
43. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [7] テーマ：ルーシー・マック・スミス

第 6 章：神の賜物と力

1. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [9]
2. 教義と聖約 10 : 2 (Revelation, Spring 1829, at josephsmithpapers.org) 参照
3. See Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [5]-[7]
4. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [8]-[9]
5. 教義と聖約 3 : 1 (Revelation, July 1828, at josephsmithpapers.org); Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [8]-[9]; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 10, in *JSP*, H1:246 (draft 2)
6. 教義と聖約 3 章 (Revelation, July 1828, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, circa Summer 1832, [6], in *JSP*, H1:16; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [8]-[9]
7. Lucy Mack Smith, History, 1845, 138; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [8]-[11]
8. Preface to Book of Mormon, circa Aug. 1829, in *JSP*, D1:92-94; "Testamoney of Martin Harris," Sept. 4, 1870, [4], Edward Stevenson Collection, Church History Library; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [5]; Historical Introduction to Revelation, Mar. 1829 [DC 5], in *JSP*, D1:14-16
9. "Testamoney of Martin Harris," Sept. 4, 1870, [4], Edward Stevenson Collection, Church History Library; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 6, [9]; book 8, [5]

10. 教義と聖約 5 章 (Revelation, Mar. 1829, at josephsmithpapers.org)
11. Revelation, Mar. 1829 [DC 5], in *JSP*, D1:17
12. Isaac Hale, Affidavit, Mar. 20, 1834, in "Mormonism," *Susquehanna Register*, and *Northern Pennsylvanian*, May 1, 1834, [1]; "considered" in original changed to "consider."
13. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [6]-[7]
14. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [11]
15. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [12]; "Mormonism," *Kansas City Daily Journal*, June 5, 1881, 1; Morris, "Conversion of Oliver Cowdery," 5-8
16. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [12]; Knight, *Reminiscences*, 5; 教義と聖約 4 章 (Revelation, Feb. 1829, at josephsmithpapers.org); see also Darowski, "Joseph Smith's Support at Home," 10-14
17. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [12]
18. Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:15
19. 教義と聖約 6 章 (Revelation, Apr. 1829-A, at josephsmithpapers.org); Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 7, [12]; book 8, [1]
20. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 15, in *JSP*, H1:284 (draft 2); Joseph Smith History, circa Summer 1832, [6], in *JSP*, H1:16; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [1]; see also 教義と聖約 6:22 - 23 (Revelation, Apr. 1829-A, at josephsmithpapers.org)
21. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [3]-[4]; Joseph Smith History, circa Summer 1832, [6], in *JSP*, H1:16
22. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [4]; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 13, in *JSP*, H1:276 (draft 2); Agreement with Isaac Hale, Apr. 6, 1829, in *JSP*, D1:28-34; Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:14
23. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 18, in *JSP*, H1:296 (draft 2)
24. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 15, in *JSP*, H1:284 (draft 2); Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [4]; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290 テーマ: 初代末日聖徒の日常生活
25. 「モルモン書の翻訳」福音のテーマ, topics.lds.org; Joseph Smith History, 1838 - 56, volume A-1, 15, in *JSP*, H1:284 (draft 2); Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:14; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 290; "Golden Bible," *Palmyra Freeman*, Aug. 11, 1829, [2] テーマ: モルモン書の翻訳
26. 教義と聖約 10:45 (Revelation, Spring 1829, at josephsmithpapers.org); 1 ニーフアイ 9:5: モルモンの言葉 1 章: 教義と聖約 3 章 (Revelation, July 1828, at josephsmithpapers.org)
27. 教義と聖約 10:42 - 43 (Revelation, Spring 1829, at josephsmithpapers.org) テーマ: モルモン書の失われた原稿
28. Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:14; モーサヤ 8:16 - 18; オムナイ 1:20; モーサヤ 8:8 - 13, 28:11 - 15, 20; アルマ 37:21, 23; エテル 3:24 - 28 も参照
29. 教義と聖約 6:5, 11, 22 - 24 (Revelation, Apr. 1829-A, at josephsmithpapers.org)
30. 教義と聖約 6:10 - 13 (Revelation, Apr. 1829-A, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 8:4 - 8 (Revelation, Apr. 1829-B, at josephsmithpapers.org); Historical Introduction to Revelation, Apr. 1829-B [DC 8], in *JSP*, D1:44-45; Revelation Book 1, 13, in *JSP*, MRB:15
31. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [1]; Paul and Parks, *History of Wells, Vermont*, 81; Historical Introduction to Revelation, 1829-B [DC 8], in *JSP*, D1:44-45; see also Baugh, *Days Never to Be Forgotten*; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 73; and Morris, "Oliver Cowdery's Vermont Years and the Origins of Mormonism," 106-29 テーマ: 古い棒
32. 教義と聖約 6 章 (Revelation, Apr. 1829-A, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 8 章 (Revelation, Apr. 1829-B, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 13-14, in *JSP*, H1:276-78 (draft 2); see also Book of Commandments 7:3; 教義と聖約 8:6 - 7

33. 教義と聖約 9 章 (Revelation, Apr. 1829–D, at josephsmithpapers.org); Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:14

第 7 章：ともに働く僕たち

1. Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:14; Staker, “Where Was the Aaronic Priesthood Restored?,” 158, note 49
2. 3 ニーファイ 8 章; Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:15–16; see also Kowallis, “In the Thirty and Fourth Year,” 136–90
3. 3 ニーファイ 9:13
4. 3 ニーファイ 10:9; 11:1
5. 3 ニーファイ 11:10; 15:21 – 24。ヨハネ 10:16 も参照
6. 3 ニーファイ 11:33
7. 3 ニーファイ 11:23 – 33
8. Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:13–16
9. 教義と聖約 13:1 (Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 17–18, in *JSP*, H1:292–94 [draft 2]); Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:15; Staker, “Where Was the Aaronic Priesthood Restored?,” 142–59 テーマ：アロン神権の回復
10. Oliver Cowdery to William W. Phelps, Sept. 7, 1834, *LDS Messenger and Advocate*, Oct. 1834, 1:15
11. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 17–18, in *JSP*, H1:292–94 (draft 2); “Articles of the Church of Christ,” June 1829, in *JSP*, D1:371
12. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 18, in *JSP*, H1:294–96 (draft 2)
13. “Mormonism,” *Kansas City Daily Journal*, June 5, 1881, 1; James H. Hart, “About the Book of Mormon,” *Deseret Evening News*, Mar. 25, 1884, [2]; Joseph F. Smith to John Taylor and Council of the Twelve, Sept. 17, 1878, draft, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 21, in *JSP*, H1:306 (draft 2)
14. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 18, in *JSP*, H1:296 (draft 2)
15. “Mormonism,” *Kansas City Daily Journal*, June 5, 1881, 1; Dickinson, *New Light on Mormonism*, 250; “The Book of Mormon,” *Chicago Tribune*, Dec. 17, 1885, 3; Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 21, in *JSP*, H1:306 (draft 2)
16. Lucy Mack Smith, *History*, 1844–45, book 8, [8]; Orson Pratt and Joseph F. Smith, Interview with David Whitmer, Sept. 7–8, 1878, [10], in Joseph F. Smith to John Taylor and Council of the Twelve, Sept. 17, 1878, draft, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library; Cook, *David Whitmer Interviews*, 26–27
17. Orson Pratt and Joseph F. Smith, Interview with David Whitmer, Sept. 7–8, 1878, [10], in Joseph F. Smith to John Taylor and Council of the Twelve, Sept. 17, 1878, draft, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library
18. James H. Hart, “About the Book of Mormon,” *Deseret Evening News*, Mar. 25, 1884, [2]
19. Skousen, “Another Account of Mary Whitmer’s Viewing of the Golden Plates,” 40; [Andrew Jenson], “Eight Witnesses,” *Historical Record*, Oct. 1888, 621
20. Orson Pratt and Joseph F. Smith, Interview with David Whitmer, Sept. 7–8, 1878, [10], in Joseph F. Smith to John Taylor and Council of the Twelve, Sept. 17, 1878, draft, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library
21. Skousen, “Another Account of Mary Whitmer’s Viewing of the Golden Plates,” 40; [Andrew Jenson], “Eight Witnesses,” *Historical Record*, Oct. 1888, 621
22. [Andrew Jenson], “Eight Witnesses,” *Historical Record*, Oct. 1888, 621; Orson Pratt and Joseph F. Smith, Interview with David Whitmer, Sept. 7–8, 1878, [10], in Joseph F. Smith to John Taylor and Council of the Twelve, Sept. 17, 1878, draft, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library; Stevenson, *Journal*, Dec. 23, 1877
23. Whitmer, Address to All Believers in Christ, 30

24. "Letter from Elder W. H. Kelley," *Saints' Herald*, Mar. 1, 1882, 68; see also Bushman, *Rough Stone Rolling*, 77
25. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 34, in *JSP*, H1:352-54 (draft 2) テーマ：モルモン書の翻訳；金版
26. 2 ニーフай 3：7 - 19 [訳注 — 「ヨセフ」に該当する英語は "Joseph"]
27. Joseph Smith History, circa Summer 1832, [5], in *JSP*, H1:15; 2 ニーフай 26：16：27：15 - 21
28. 教義と聖約 17 章 (Revelation, June 1829-E, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 5：11 - 18 (Revelation, Mar. 1829, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 23, in *JSP*, H1:314-17 (draft 2)
29. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [11]
30. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 24-25, in *JSP*, H1:316-18 (draft 2)
31. "Letter from Elder W. H. Kelley," *Saints' Herald*, Mar. 1, 1882, 68; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 24-25, in *JSP*, H1:316-20 (draft 2); "Testimony of Three Witnesses," in Book of Mormon, 1830 edition, [589] テーマ：モルモン書の証人
32. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 25, in *JSP*, H1:320 (draft 2)
33. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 8, [11]; book 9, [1]
34. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [1]; 2 ニーフай 27：14
35. "Testimony of Eight Witnesses," in Book of Mormon, 1830 edition, [590] テーマ：モルモン書の証人
36. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [2]

第 8 章：キリストの教会の幕開け

1. Copyright for Book of Mormon, June 11, 1829, in *JSP*, D1:76-81
2. "Prospect of Peace with Utah," *Albany Evening Journal*, May 19, 1858, [2]; "From the Troy Times," *Albany Evening Journal*, May 21, 1858, [2]; John H. Gilbert, Memorandum, Sept. 8, 1892, photocopy, Church History Library
3. 教義と聖約 19 章 (Revelation, circa Summer 1829, at josephsmithpapers.org); see also Historical Introduction to Revelation, circa Summer 1829 [DC 19], in *JSP*, D1:85-89; and Knight, *Reminiscences*, 6-7
4. McBride, "Contributions of Martin Harris," 1-9; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 34, in *JSP*, H1:352 (draft 2)
5. John H. Gilbert, Statement, Oct. 23, 1887, Church History Library; Indenture, Martin Harris to Egbert B. Grandin, Wayne County, NY, Aug. 25, 1829, Wayne County, NY, Mortgage Records, volume 3, 325-26, microfilm 479,556, U. S. and Canada Record Collection, Family History Library; Historical Introduction to Revelation, circa Summer 1829 [DC 19], in *JSP*, D1:85-89
6. Copyright for Book of Mormon, June 11, 1829, in *JSP*, D1:76-81; John H. Gilbert, Memorandum, Sept. 8, 1892, photocopy, Church History Library; Porter, "The Book of Mormon," 53-54
7. John H. Gilbert, Memorandum, Sept. 8, 1892, photocopy, Church History Library; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [8]; Joseph Smith to Oliver Cowdery, Oct. 22, 1829, in *JSP*, D1:94-97
8. John H. Gilbert, Memorandum, Sept. 8, 1892, photocopy, Church History Library; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [2]; "Printer's Manuscript of the Book of Mormon," in *JSP*, R3, Part 1:xxvi テーマ：モルモン書の印刷と出版
9. Oliver Cowdery to Joseph Smith, Nov. 6, 1829, in *JSP*, D1:100-101; モーサヤ 3：18 - 19, 5：5 - 7, 4 ニーフай 1：17; see also Oliver Cowdery to Joseph Smith, Dec. 28, 1829, in *JSP*, D1:101-4
10. Thomas B. Marsh, "History of Thomas Baldwin Marsh," *LDS Millennial Star*, June 4, 1864, 26:359-60; June 11, 1864, 26:375-76
11. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [9] アプナー・コールが出版したモルモン書の抜粋の一例については以下を参照。"The Book of Mormon," *Reflector*, Sept. 16, 1829, 10; "Selected Items," *Reflector*, Sept. 23, 1829, 14; "The First Book of Nephi,"

- Reflector, Jan. 2, 1830, 1; and "The First Book of Nephi," Reflector, Jan. 13, 1830, 1
 テーマ：モルモン書に対する批判
12. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [9]-[12]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 166-68
 13. Chamberlin, Autobiography, 4-11
 14. Copyright for Book of Mormon, June 11, 1829, in *JSP*, D1:76-81; John H. Gilbert, Memorandum, Sept. 8, 1892, photocopy, Church History Library; "Book of Mormon," Wayne Sentinel, Mar. 26, 1830, [3] 羊皮で製本された本もあった
 15. Title Page of Book of Mormon, circa early June 1829, in *JSP*, D1:63-65; see also Lucy Mack Smith to Solomon Mack, Jan. 6, 1831, Church History Library
 16. Testimony of Three Witnesses, Late June 1829, in *JSP*, D1:378-82; Testimony of Eight Witnesses, Late June 1829, in *JSP*, D1:385-87
 17. Tucker, Origin, Rise, and Progress of Mormonism, 60-61
 18. See Lucy Mack Smith to Solomon Mack, Jan. 6, 1831, Church History Library
 19. Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1, in *JSP*, H1:10; 教義と聖約 27:12 - 13 (Revelation, circa Aug. 1830, in Doctrine and Covenants 50:3, 1835 edition, at josephsmithpapers.org); Oliver Cowdery to Phineas Young, Mar. 23, 1846, Church History Library; "Joseph Smith Documents Dating through June 1831," in *JSP*, D1:xxxvii-xxxix; see also Cannon and others, "Priesthood Restoration Documents," 163-207 テーマ：メルキゼデク神権の回復
 20. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 27, in *JSP*, H1:326-28 (draft 2)
 21. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 37, in *JSP*, H1:364 (draft 2); Stevenson, Journal, Dec. 22, 1877; Jan. 2, 1887; An Act to Provide for the Incorporation of Religious Societies (Apr. 5, 1813), Laws of the State of New-York (1813), 2:212-19 テーマ：キリストの教会の設立集会
 22. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 37-38, in *JSP*, H1:364-71 (draft 2)
 23. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 37, in *JSP*, H1:366; 教義と聖約 21 章 (Revelation, Apr. 6, 1830, at josephsmithpapers.org); "History of Joseph Smith," *Times and Seasons*, Oct. 1, 1842, 3:928-29
 24. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 9, [12]; Knight, Reminiscences, 8; see also Bushman, *Rough Stone Rolling*, 110
 25. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 38, in *JSP*, H1:372 (draft 2); Joseph Smith, "Latter Day Saints," in Rupp, *He Pasa Ekklesia*, 404-5, in *JSP*, H1:506
 26. Knight, Reminiscences, 7

第9章：命があろうとなかろうと

1. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 39, in *JSP*, H1:378 (draft 2)
2. 例えば、マルコ 16:17 - 18 を参照。 テーマ：御霊の賜物
3. モーサヤ 3:19
4. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 39, in *JSP*, H1:380 (draft 2); Knight, Reminiscences, 7; see also Historical Introduction to Revelation, Apr. 1830-E [DC 23:6-7], in *JSP*, D1:136
5. Joseph Smith History, circa June-Oct. 1839, [11]-[13] (draft 1); Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 39-41 (draft 2); Joseph Smith History, circa 1841, 70-72 (draft 3), in *JSP*, H1:380-87 テーマ：御霊の賜物
6. Pratt, Autobiography, 30-37; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 26-27
7. Pratt, Autobiography, 37-38
8. Pratt, Autobiography, 38-43
9. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 42, in *JSP*, H1:390 (draft 2) テーマ：エマ・ヘイル・スミス
10. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 42-43, in *JSP*, H1:390-94 (draft 2); Diedrich Willers to L. Mayer and D. Young, June 18, 1830, in Quinn, "First Months of Mormonism," 331 テーマ：教会の名称

11. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 43-44, 47, in *JSP*, H1:394-98, 412 (draft 2); Knight, Reminiscences, 8
12. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 44-47, in *JSP*, H1:396-412 (draft 2); Knight, Reminiscences, 8; Bushman, Rough Stone Rolling, 116-18; 使徒 4:1-3; 5:17-33; 6-7; 24-26
13. 教義と聖約 24:7, 9 (Revelation, July 1830-A, at josephsmithpapers.org)
14. 教義と聖約 25:7, 9, 12 (Revelation, July 1830-C, at josephsmithpapers.org); see also Grow, "Thou Art an Elect Lady," 33-39 テーマ: エマ・ヘイル・スミス
15. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 52-53, in *JSP*, H1:432 (draft 2) テーマ: 御霊の賜物
16. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 53, in *JSP*, H1:436 (draft 2); Deed from Isaac and Elizabeth Hale, Aug. 25, 1830, in *JSP*, D1:167-71; Knight, Autobiography, 141
17. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 53-54, in *JSP*, H1:436 (draft 2)
18. Knight, Autobiography, 146; Bushman, Rough Stone Rolling, 119-21
19. Knight, Autobiography and Journal, 22; Knight, Autobiography, 145-47
20. Knight, Autobiography, 145-47; 教義と聖約 28 章 (Revelation, Sept. 1830-B, at josephsmithpapers.org); Covenant of Oliver Cowdery and Others, Oct. 17, 1830, in *JSP*, D1:204; 教義と聖約 29 章 (Revelation, Sept. 1830-A, at josephsmithpapers.org); 3 ニーフアイ 21:23 - 24; エテル 13:3 - 10 も参照。啓示によると、聖なる町の場所は「レーマン人の中」とあるが、出版前に「レーマン人に近い境の地」に変更された (Book of Commandments 30:9, in *JSP*, R2:80) テーマ: アメリカインディアン, シオン/新エルサレム, イスラエルの集合
21. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 58, in *JSP*, H1:452 (draft 2); Minutes, Sept. 26, 1830, in *JSP*, D1:192
22. 教義と聖約 30:5 - 8 (Revelation, Sept. 1830-D, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 32 章 (Revelation, Oct. 1830-A, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 60, in *JSP*, H1:458-60 (draft 2); Givens and Grow, Parley P. Pratt, 36
23. Lucy Mack Smith, History, 1845, 189-90
24. Pratt, Autobiography, 49 テーマ: 初期の宣教師, オハイオ州カートランド
25. Smith, "Copy of an Old Note Book," 31-35; Lucy Mack Smith, History, 1845, 186-87 テーマ: 初期の宣教師
26. Rigdon, "Life Story of Sidney Rigdon," 18; Keller, "I Never Knew a Time," 23; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 73
27. "Sidney Rigdon and the Spaulding Romance," Deseret Evening News, Apr. 21, 1879, [2]
28. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 73; see also Maki, "Go to the Ohio," 70-73
29. Rigdon, "Life Story of Sidney Rigdon," 19; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 73; "Mormonism," Painesville Telegraph, Feb. 15, 1831, [1]
30. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 72-73; 1 テサロニケ 5:21
31. Rigdon, "Life Story of Sidney Rigdon," 17; Keller, "I Never Knew a Time," 24; "Records of Early Church Families," Utah Genealogical and Historical Magazine, Oct. 1936, 27:161-62
32. Mather, "Early Days of Mormonism," 206-7; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 74; "Sidney Rigdon," Millennial Harbinger, Feb. 7, 1831, 100-101; see also Ezra Booth, "Mormonism - Nos. VIII-IX," Ohio Star, Dec. 8, 1831, 1
33. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 75 テーマ: オハイオ州カートランド

第 10 章: 集められる

1. Allen, Autobiographical Sketch, [1]-[2]; 1830 U. S. Census, Mentor, Geauga County, OH, 266; Smith and Allen, "Family History of Lucy Diantha (Morley) Allen"; see also Givens and Grow, Parley P. Pratt, 39 テーマ: 初代末日聖徒の日常生活
2. See Givens and Grow, Parley P. Pratt, 39-40; and 使徒 2:44; 4:32 テーマ: 奉獻と管理の職
3. Oliver Cowdery to Joseph Smith, Nov. 12, 1830, in *JSP*, D1:213

4. Staker, Hearken, O Ye People, 5-9
5. See Minute Book 2, Aug. 31, 1838; and Knutson, "Sheffield Daniels and Abigail Warren."
6. Oliver Cowdery to Joseph Smith, Nov. 12, 1830, in *JSP*, D1:211-14
7. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 75-76; Pratt, Autobiography, 61; "Williams, Frederick Granger," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
8. Pratt, Autobiography, 54-55
9. Partridge, Genealogical Record, 2, 5; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 10, [11]
10. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 10, [11]
11. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 10, [11]-[12]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 191 テーマ：聖餐会
12. 教義と聖約 36 章 (Revelation, Dec. 9, 1830, at josephsmithpapers.org)
13. *JSP*, D1:224, note 158; License for Edward Partridge, Dec. 15, 1830, Edward Partridge, Papers, Church History Library
14. 教義と聖約 35 : 20, 22 (Revelation, Dec. 7, 1830, at josephsmithpapers.org)
15. *JSP*, D1:151, note 207; see also Maki, "Joseph Smith's Bible Translation," 99-104 ジョセフ・スミスが聖書の翻訳に取りかかったのは、モーセに関するこの啓示を受けた後だった可能性がある : see Visions of Moses, June 1830, in *JSP*, D1:150-56 テーマ：聖書のジョセフ・スミス訳
16. モーセ 1 章 (Visions of Moses, June 1830, at josephsmithpapers.org)
17. Bible Used for Bible Revision, at josephsmithpapers.org; Old Testament Revision 1, at josephsmithpapers.org; 創世 5 : 18 - 24
18. 4 ニーファイ 1 : 1 - 18 ; 創世 5 : 22 - 24 ; モーセ 7 : 18 - 19, 62, 69 (Old Testament Revision 1, 16-19, at josephsmithpapers.org)
19. モーセ 7 : 28, 62 (Old Testament Revision 1, 16-17, 19, at josephsmithpapers.org) テーマ：シオン/新エルサレム, 奉獻と管理の職
20. 教義と聖約 37 章 (Revelation, Dec. 30, 1830, at josephsmithpapers.org)
21. 教義と聖約 29 : 8 (Revelation, Sept. 1830-A, at josephsmithpapers.org) テーマ：イスラエルの集合
22. Whitmer, History, 9, in *JSP*, H2:21; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 88
23. Whitmer, History, 5-6, in *JSP*, H2:18
24. 教義と聖約 38 : 18 - 19, 32 (Revelation, Jan. 2, 1831, at josephsmithpapers.org) テーマ：天からの力
25. Whitmer, History, 9, in *JSP*, H2:21; Knight, Autobiography and Journal, 28 テーマ：教会内での対立
26. Knight, Autobiography and Journal, 28
27. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," Woman's Exponent, Sept. 1, 1878, 7:51; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 10, [12]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 190; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 92 テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ヘイル・スミスの家族
28. See Staker, Hearken, O Ye People, 74-81
29. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," Woman's Exponent, Sept. 1, 1878, 7:51; Tullidge, Women of Mormondom, 41-42
30. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," Woman's Exponent, Aug. 15, 1878, 7:41
31. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," Woman's Exponent, Sept. 1, 1878, 7:51
32. Staker, Hearken, O Ye People, 45 テーマ：奉獻と管理の職
33. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 112; Staker, Hearken, O Ye People, 139; Pratt, Autobiography, 65
34. Whitmer, History, 26, in *JSP*, H2:38
35. Hancock, Autobiography, 79; see also McBride, "Religious Enthusiasm among Early Ohio Converts," 105-11 テーマ：御霊の賜物
36. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," Woman's Exponent, Sept. 1, 1878, 7:51

37. Orson F. Whitney, "Newel K. Whitney," Contributor, Jan. 1885, 125; [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," *Woman's Exponent*, Sept. 1, 1878, 7:51

第 11 章：わたしの律法を受けるであろう

1. [Elizabeth Ann Smith Whitney], "A Leaf from an Autobiography," *Woman's Exponent*, Sept. 1, 1878, 7:51; Staker, Hearken, O Ye People, 226
2. 1830 U. S. Census, Kirtland, Geauga County, OH, 268-73; Staker, Hearken, O Ye People, 402, 413; *JSP*, D1:530-31
3. 1 コリント 1:2 参照
4. Joseph Smith to Hyrum Smith, Mar. 3-4, 1831, in *JSP*, D1:272 テーマ：アメリカインディアン
5. Jackson, "Chief Anderson and His Legacy."
6. Pratt, *Autobiography*, 56-60 テーマ：レーマン人のルーツ
7. Joseph Smith to Hyrum Smith, Mar. 3-4, 1831, in *JSP*, D1:272. ハイラムにあてたこの手紙の中で、ジョセフは 1 月 29 日にオリバー・カウドリから届いた手紙の文を書き写している
8. "Mormonism," *Painesville Telegraph*, Feb. 15, 1831, [1]; 教義と聖約 41:3 (Revelation, Feb. 4, 1831, at josephsmithpapers.org)
9. 教義と聖約 41:9 - 11 (Revelation, Feb. 4, 1831, at josephsmithpapers.org) テーマ：ピショップ
10. Whitmer, *History*, 12, in *JSP*, H2:24; Historical Introduction to Revelation, Feb. 9, 1831 [DC 42:1-72], in *JSP*, D1:247; see also Harper, "The Law," 93-98
11. 教義と聖約 42:1 - 72 (Revelation, Feb. 9, 1831, at josephsmithpapers.org)
12. 教義と聖約 42:30 - 36 (Revelation, Feb. 9, 1831, at josephsmithpapers.org) テーマ：奉獻と管理の職
13. 教義と聖約 42:61 (Revelation, Feb. 9, 1831, at josephsmithpapers.org)
14. 教義と聖約 50:2 - 3, 21 - 25 (Revelation, May 9, 1831, at josephsmithpapers.org)
15. "History of Thos. Baldwin Marsh," *Deseret News*, Mar. 24, 1858, 18; Thomas Marsh and Elizabeth Godkin Marsh to Lewis Abbott and Ann Marsh Abbott, [circa Apr. 11, 1831], Abbott Family Collection, Church History Library テーマ：シオン/新エルサレム
16. Faulring and others, *Joseph Smith's New Translation of the Bible*, 57 テーマ：聖書のジョセフ・スミス訳
17. 創世 17:5
18. Old Testament Revision 1, 28 [Genesis 11:11-12:2], at josephsmithpapers.org
19. モルモン書ヤコブ 2:27 - 30
20. "Report of Elders Orson Pratt and Joseph F. Smith," *LDS Millennial Star*, Dec. 16, 1878, 50:788; 教義と聖約 132:1 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org); 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」, lds.org テーマ：ジョセフ・スミスと多妻結婚
21. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 11, [2]; Knight, *Autobiography and Journal*, 28-29
22. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 11, [4]-[6]; Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 196-97
23. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 11, [7]-[9]
24. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 11, [11]-[12]
25. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 202-3
26. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 12, [2] テーマ：ルーシー・マック・スミス
27. Oliver Cowdery to "My Dearly Beloved Brethren and Sisters in the Lord," Apr. 8, 1831, in *JSP*, D1:292
28. Pratt, *Autobiography*, 60; Rust, "Mission to the Lamanites," 45-49
29. Oliver Cowdery to "Dearly Beloved Brethren," May 7, 1831, in *JSP*, D1:294-97; Richard W. Cummins to William Clark, Feb. 15, 1831, U. S. Office of Indian Affairs, Central Superintendency, Records, volume 6, 113-14; Pratt, *Autobiography*, 61

30. Joseph Smith History, 1834-36, 9, in *JSP*, H1:28; Murdock, *Autobiography*, 197; Lucy Diantha Morley Allen, "Joseph Smith, the Prophet," *Young Woman's Journal*, Dec. 1906, 17:537 テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ヘイル・スミスの家族
31. Joseph Smith History, 1834-36, 9, in *JSP*, H1:28; Murdock, *Autobiography*, 9
32. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 12, [6]

第12章：多くの艱難の後に

1. Young, "What I Remember," 1-2
2. 教義と聖約 42:30 - 33 (Revelation, Feb. 9, 1831, at josephsmithpapers.org); Knight, *Autobiography and Journal*, 29-30; see also Darowski, "Journey of the Colesville Branch," 40-44
3. Young, "What I Remember," 4; Partridge, *Genealogical Record*, 6, 64; Lyman, *Journal*, 8
テーマ：初代末日聖徒の日常生活
4. Lyman, *Journal*, 8; Partridge, *Genealogical Record*, 6; Minutes, circa June 3-4, 1831, in *JSP*, D1:317-27; 教義と聖約 44:1 - 2 (Revelation, Feb. 1831-B, at josephsmithpapers.org)
5. 教義と聖約 52章 (Revelation, June 6, 1831, at josephsmithpapers.org)
6. 教義と聖約 52:42 (Revelation, June 6, 1831, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 38:18 (Revelation, Jan. 2, 1831, at josephsmithpapers.org); 民数 33:54;34:2; エレミヤ 11:5
7. Lyman, *Journal*, 8
8. Partridge, *Genealogical Record*, 6
9. Darowski, "Journey of the Colesville Branch," 41-42
10. Knight, *Reminiscences*, 9; Knight, *Autobiography*, 288-89; see also Staker, *Hearken, O Ye People*, 138-39
11. Whitmer, *History*, 26, 29, in *JSP*, H2:37, 41; Knight, *Autobiography and Journal*, 29-30; see also 教義と聖約 49章 (Revelation, May 7, 1831, at josephsmithpapers.org); and *Historical Introduction to Revelation*, May 7, 1831 [DC 49], in *JSP*, D1:297-99
12. 教義と聖約 54:8 (Revelation, June 10, 1831, at josephsmithpapers.org)
13. Knight, *Reminiscences*, 9
14. Knight, *Autobiography and Journal*, 33 テーマ：シオン／新エルサレム
15. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume A-1, 126-27
16. [William W. Phelps], "Extract of a Letter from the Late Editor," *Ontario Phoenix*, Sept. 7, 1831, [2]; Ezra Booth, "Mormonism — No. V," *Ohio Star*, Nov. 10, 1831, [3] テーマ：ジョセフ・スミスの預言
17. Ezra Booth, "Mormonism — No. VI," *Ohio Star*, Nov. 17, 1831, [3]; "History of Luke Johnson," *LDS Millennial Star*, Dec. 31, 1864, 834; see also Bushman, *Rough Stone Rolling*, 162, 168-69 テーマ：ミズーリ州インディペンデンス
18. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume A-1, 127-29; Anderson, "Jackson County in Early Mormon Descriptions," 275-76, 290-93; Ezra Booth, "Mormonism — No. V," *Ohio Star*, Nov. 10, 1831, [3]; Ezra Booth, "Mormonism — No. VI," *Ohio Star*, Nov. 17, 1831, [3]; [William W. Phelps], "Extract of a Letter from the Late Editor," *Ontario Phoenix*, Sept. 7, 1831, [2]; Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, *Letters*, Church History Library; Richard W. Cummins to William Clark, Feb. 15, 1831, U. S. Office of Indian Affairs, Central Superintendency, Records, volume 6, 113-14
19. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume A-1, 127
20. 教義と聖約 57:1 - 4 (Revelation, July 20, 1831, at josephsmithpapers.org); see also Woodworth, "The Center Place," 122-29 テーマ：シオン／新エルサレム, *イスラエルの集合*
21. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, *Letters*, Church History Library; *Joseph Smith History*, 1838-56, volume A-1, 126-27; 教義と聖約 57章 (Revelation, July 20, 1831, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 58:14 - 15 (Revelation, Aug. 1, 1831, at josephsmithpapers.org)
22. Ezra Booth, "Mormonism — No. VII," *Ohio Star*, Nov. 24, 1831, [1]

23. 教義と聖約 58:3 - 4, 15 - 16 (Revelation, Aug. 1, 1831, at josephsmithpapers.org)
24. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library テーマ: ビショップ
25. Knight, Reminiscences, 9; Whitmer, History, 31-32, in *JSP*, H2:43-45; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 137, 139
26. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 139; 詩篇 87:2 - 3
27. Knight, Reminiscences, 9; Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library
28. Knight, Reminiscences, 9
29. 教義と聖約 59:1 - 2 (Revelation, Aug. 7, 1831, at josephsmithpapers.org)
30. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 142; Phelps, "A Short History of W. W. Phelps' Stay in Missouri," [2]; "Missouri River," Geographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
31. Ezra Booth, "Mormonism — No. VII," *Ohio Star*, Nov. 24, 1831, [1]; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 164; Historical Introduction to Revelation, Aug. 12, 1831 [DC 61], in *JSP*, D2:37-39; Book of Commandments 62 [DC 61], at josephsmithpapers.org; see also [William W. Phelps], "The Way of Journeying for the Saints of the Church of Christ," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1832, 53
32. Ezra Booth, "Mormonism — No. VII," *Ohio Star*, Nov. 24, 1831, [1]; see also McBride, "Ezra Booth and Isaac Morley," 130-36
33. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library; 教義と聖約 57章 (Revelation, July 20, 1831, at josephsmithpapers.org)
34. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library; Young, "What I Remember," 5
35. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library. The original letter has "and shall for some time many privations here"; "have" added for clarity
36. Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library; Young, "What I Remember," 5 テーマ: 初代末日聖徒の日常生活
37. Young, "What I Remember," 5; Edward Partridge to Lydia Clisbee Partridge, Aug. 5-7, 1831, Edward Partridge, Letters, Church History Library

第 13 章: 再び与えられた賜物

1. Historical Introduction to Revelation, Aug. 12, 1831 [DC 61], in *JSP*, D2:38-39
2. 教義と聖約 61:36 - 37 (Revelation, Aug. 12, 1831, atjosephsmithpapers.org)
3. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 146; Historical Introduction to Revelation, Sept. 11, 1831 [DC 64], in *JSP*, D2:61-63
4. Ezra Booth, "For the Ohio Star," *Ohio Star*, Oct. 13, 1831, [3]; Staker, Hearken, O Ye People, 296-302; Minutes, Sept. 6, 1831, in *JSP*, D2:59-61 テーマ: 教会内での対立
5. 教義と聖約 64:7 - 10, 21, 33 - 34 (Revelation, Sept. 11, 1831, at josephsmithpapers.org)
6. Elizabeth Godkin Marsh to Lewis Abbott and Ann Marsh Abbott, Sept. 1831, Abbott Family Collection, Church History Library; イザヤ 29:17:35:1
7. Elizabeth Godkin Marsh to Lewis Abbott and Ann Marsh Abbott, Sept. 1831, Abbott Family Collection, Church History Library テーマ: 初期の宣教師
8. McLellin, Journal, Sept. 22, 1831; William McLellin to "Beloved Relatives," Aug. 4, 1832, photocopy, Church History Library; see also Shipps and Welch, *Journals of William E. McLellin*, 82-83
9. McLellin, Journal, July 18, 1831

10. McLellin, Journal, July 30–Aug. 19, 1831
11. McLellin, Journal, Aug. 19–20, 1831
12. McLellin, Journal, Aug. 20 and 24, 1831
13. McLellin, Journal, Aug. 26–Oct. 4, 1831
14. McLellin, Journal, Oct. 25–30, 1831; Shipps and Welch, Journals of William E. McLellin, 57, note 52; 教義と聖約 66 章 (Revelation, Oct. 29, 1831, at josephsmithpapers.org); Godfrey, “William McLellin’s Five Questions,” 137–41
15. Minutes, Nov. 1–2, 1831, in *JSP*, D2:94–98; Ezra Booth to Rev. Ira Eddy, Sept. 12, 1831, Ohio Star, Oct. 13, 1831, [3]; Ezra Booth, “Mormonism — No. II,” Ohio Star, Oct. 20, 1831, [3] テーマ：教会内での対立
16. Whitmer, Address to All Believers in Christ, 54–55
17. Minutes, Nov. 1–2, 1831, in *JSP*, D2:94–98; “Letter from Elder W H Kelley,” Saints’ Herald, Mar. 1, 1882, 67 テーマ：「戒めの書」、ジョセフ・スミスの啓示
18. “Letter from Elder W H Kelley,” Saints’ Herald, Mar. 1, 1882, 67; 教義と聖約 1 章 (Revelation, Nov. 1, 1831–B, at josephsmithpapers.org); Historical Introduction to Revelation, Nov. 1, 1831–B [DC 1], in *JSP*, D2:103–4
19. 教義と聖約 1:38 (Revelation, Nov. 1, 1831–B, at josephsmithpapers.org)
20. Minutes, Nov. 1–2, 1831, in *JSP*, D2:97; Testimony, circa Nov. 2, 1831, in *JSP*, D2:110–14; 教義と聖約 67 章 (Revelation, circa Nov. 2, 1831, at josephsmithpapers.org); Historical Introduction to Revelation, circa Nov. 2, 1831 [DC 67], in *JSP*, D2:108–9; Historical Introduction to Revelation, Nov. 1, 1831–B [DC 1], in *JSP*, D2:103–4
21. 教義と聖約 1:24 (Revelation, Nov. 1, 1831–B, at josephsmithpapers.org)
22. 教義と聖約 67:7–8 (Revelation, circa Nov. 2, 1831, at josephsmithpapers.org); Historical Introduction to Revelation, circa Nov. 2, 1831 [DC 67], in *JSP*, D2:108–9
23. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 162; “Manuscript Revelation Books,” in *JSP*, MRB: xxx–xxx1
24. Testimony, circa Nov. 2, 1831, in *JSP*, D2:110–14; Minutes, Nov. 1–2, 1831, in *JSP*, D2:94–98
25. Minutes, Nov. 8, 1831, in *JSP*, D2:121–24
26. See Brekus, Strangers and Pilgrims, 5, 213
27. Towle, Vicissitudes Illustrated, 137 テーマ：初期の教会への反対
28. Towle, Vicissitudes Illustrated, 138, 142
29. Towle, Vicissitudes Illustrated, 141–45

第 14 章：示現と悪夢

1. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 204
2. George A. Smith, “Sketch of Church History,” Deseret News, supplement, Dec. 21, 1864, 90; Staker, Hearken, O Ye People, 282–85; see also Hinsdale, “Life and Character of Symonds Ryder,” 250 テーマ：癒し
3. Joseph Smith History, 1838–56, volume A-1, 183; Faulring and others, Joseph Smith’s New Translation of the Bible, 58; see also ヨハネ 5:29; and Staker, Hearken, O Ye People, 319–24 テーマ：聖書のジョセフ・スミス訳
4. Historical Introduction to Vision, Feb. 16, 1832 [DC 76], in *JSP*, D2:179–83; Dibble, “Recollections of the Prophet Joseph Smith,” 303
5. 教義と聖約 76:11–24 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org) テーマ：示現 (教義と聖約 76 章)
6. 1 コリント 15:39–40; 教義と聖約 76:50–112 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org); Dibble, “Recollections of the Prophet Joseph Smith,” 303–4; Historical Introduction to Vision, Feb. 16, 1832 [DC 76], in *JSP*, D2:180–82
7. 教義と聖約 76:116 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org)
8. Dibble, “Philo Dibble’s Narrative,” 81; Dibble, “Recollections of the Prophet Joseph Smith,” 304

9. "Phelps, William Wines," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; Bowen, "Versatile W. W. Phelps."
10. William W. Phelps, *The Evening and the Morning Star* Prospectus, in *Evening and Morning Star*, June 1832 (published Jan. 1835), 1-2
11. Murdock, Journal, 18; Brigham Young, in *Journal of Discourses*, May 18, 1873, 16:42; Brigham Young, Discourse, May 18, 1873, in *Historian's Office, Reports of Speeches, 1845-85*, Church History Library; Brigham Young, in *Journal of Discourses*, Aug. 29, 1852, 6:281; Wilford Woodruff, in *Journal of Discourses*, Apr. 9, 1857, 5:84; Joseph Young, "Discourse," *Deseret Weekly News*, Mar. 18, 1857, 11; "Items for the Public," *The Evening and the Morning Star*, July 1832, 25; see also McBride, "The Vision," 148-54
12. Cahoon, Diary, Nov. 1831; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 205; see also Ezra Booth's letters printed weekly in the *Ohio Star* from Oct. 13 to Dec. 8, 1831 テーマ：教会内での対立
13. Hayden, *Early History of the Disciples in the Western Reserve*, 220-21; Ryder, "A Short History of the Foundation of the Mormon Church," 3-4; Staker, *Hearken, O Ye People*, 344-49; Tullidge, *Women of Mormondom*, 404
14. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 205-6; see also Staker, *Hearken, O Ye People*, 349-50
15. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 206-7; "History of Luke Johnson," *LDS Millennial Star*, Dec. 31, 1884, 834-35; see also Staker, *Hearken, O Ye People*, 351-52 テーマ：自警主義
16. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 207-8; "History of Luke Johnson," *LDS Millennial Star*, Dec. 31, 1884, 835
17. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 208
18. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 208-9; Joseph Smith III, "Last Testimony of Sister Emma," *Saints' Herald*, Oct. 1, 1879, 289 テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ハイル・スミスの家族
19. Staker, *Hearken, O Ye People*, 354-55; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 209; Whitmer, *History*, 38-39, in *JSP*, H2:50-51; see also *Minutes*, Apr. 26-27, 1832, in *JSP*, D2:229-33; and *Minutes*, Apr. 30, 1832, in *JSP*, D2:237-40
20. 教義と聖約 72 章 (Revelation, Dec. 4, 1831-A, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 78 章 (Revelation, Mar. 1, 1832, at josephsmithpapers.org) テーマ：ピシヨップ
21. 教義と聖約 78 : 14 (Revelation, Mar. 1, 1832, josephsmithpapers.org)
22. 教義と聖約 82 章 (Revelation, Apr. 26, 1832, josephsmithpapers.org); *Historical Introduction to Revelation*, Apr. 26, 1832 [DC 82], *JSP*, D2:233-35
23. 教義と聖約 82 : 15, 19 (Revelation, Apr. 26, 1832, at josephsmithpapers.org); see also Godfrey, "Newel K. Whitney and the United Firm," 142-47 テーマ：共同商会 (「共同制度」)
24. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 213; "Joseph Smith-Era Publications of Revelations," in *JSP*, R2:xxvi; Newel K. Whitney, Statement, circa 1842, *Historian's Office, Joseph Smith History Documents*, circa 1839-56, Church History Library
25. Joseph Smith to William W. Phelps, July 31, 1832, in *JSP*, D2:257-71 テーマ：教会内での対立
26. McLellin, *Journal*, Nov. 1831-Feb. 1832
27. McLellin, *Journal*, Feb. 16, 1832
28. McLellin, *Journal*, Feb. 25, 1832
29. "History of Luke Johnson," *LDS Millennial Star*, Dec. 31, 1864, 26:835
30. William McLellin to "Beloved Relatives," Aug. 4, 1832, photocopy, Church History Library; Joseph Smith to Emma Smith, June 6, 1832, in *JSP*, D2:251; 教義と聖約 75 : 6 - 8 (Revelation, Jan. 25, 1832-A, at josephsmithpapers.org); see also Shippy and Welch, *Journals of William E. McLellin*, 79-85
31. Joseph Smith to William W. Phelps, July 31, 1832, in *JSP*, D2:262; Corrill, *Brief History*, 18-19, in *JSP*, H2:146 テーマ：ピシヨップ, 奉獻と管理の職
32. William McLellin to "Beloved Relatives," Aug. 4, 1832, photocopy, Church History Library; see also Shippy and Welch, *Journals of William E. McLellin*, 83-84; and イザヤ 2 : 3

33. "To His Excellency, Daniel Dunklin, Governor of the State of Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]
34. "The Elders in the Land of Zion to the Church of Christ Scattered Abroad," *The Evening and the Morning Star*, July 1832, [5]; William McLellan to "Beloved Relatives," Aug. 4, 1832, photocopy, Church History Library; see also Shipps and Welch, *Journals of William E. McLellan*, 83
35. Delilah Lykins to Isaac and Christina McCoy, Sept. 6, 1831, quoted in Jennings, "Isaac McCoy and the Mormons," 65-66

第15章：聖なる場所

1. Phebe Crosby Peck to Anna Jones Pratt, Aug. 10, 1832, Church History Library; see also Johnson, "Give Up All and Follow Your Lord," 93
2. Phebe Crosby Peck to Anna Jones Pratt, Aug. 10, 1832, Church History Library; "A Vision," *The Evening and the Morning Star*, July 1832, [2]-[3]; 教義と聖約 76 章 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org); see also Johnson, "Give Up All and Follow Your Lord," 94-96
3. 教義と聖約 84 : 112 - 17 (Revelation, Sept. 22-23, 1832, at josephsmithpapers.org) テーマ：共同商会 (「共同制度」)
4. 教義と聖約 84 章 (Revelation, Sept. 22-23, 1832, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 229
5. Joseph Smith to Emma Smith, Oct. 13, 1832, in *JSP*, D2:304-14; see also Pasko, *Old New York*, 1-2
6. Joseph Smith to Emma Smith, Oct. 13, 1832, in *JSP*, D2:304-14
7. Brigham Young, Sermon, Nov. 20, 1864, George D. Watt Papers, Church History Library, as transcribed by LaJean Purcell Carruth; Joseph Young to Lewis Harvey, Nov. 16, 1880, Church History Library; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 1856-58, 3-4; "History of Brigham Young," *LDS Millennium Star*, July 11, 1863, 25:439
8. テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ヘイル・スミスの家族
9. Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 1856-58, 3-4; Joseph Young to Lewis Harvey, Nov. 16, 1880, Church History Library; see also 1 コリント 12 - 14 章；教義と聖約 45 章 (Revelation, circa Mar. 7, 1831, at josephsmithpapers.org) テーマ：御霊の賜物、異言の賜物
10. News Item, Painesville Telegraph, Dec. 21, 1832, [3]; see also Woodworth, "Peace and War," 158-64
11. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 244; マタイ 24 章；Joseph Smith — Matthew; 教義と聖約 45 章 (Revelation, circa Mar. 7, 1831, at josephsmithpapers.org); see also "Revenge and Magnanimity," Painesville Telegraph, Dec. 21, 1832, [1]; and "The Plague in India," Painesville Telegraph, Dec. 21, 1832, [2]
12. 教義と聖約 84 : 49, 117 - 118 (Revelation, Sept. 22-23, 1832, josephsmithpapers.org)
13. 教義と聖約 87 章 (Revelation, Dec. 25, 1832, josephsmithpapers.org) テーマ：ジョセフ・スミスの預言
14. Historical Introduction to Minutes, Dec. 27-28, 1832, in *JSP*, D2:331-33; Historical Introduction to Revelation, Dec. 27-28, 1832 [DC 88:1-126], in *JSP*, D2:334-36; Joseph Smith to William W. Phelps, Jan. 11, 1833, in *JSP*, D2:364-67
15. Minutes, Dec. 27-28, 1832, in *JSP*, D2:331-34
16. 教義と聖約 88 : 68, 118 - 119 (Revelation, Dec. 27-28, 1832, at josephsmithpapers.org) テーマ：預言者の熟、カートランド神殿
17. Joseph Smith to William W. Phelps, Jan. 11, 1833, in *JSP*, D2:367
18. See Hyde, Orson Hyde, 6, 9; "History of Orson Hyde," 1, in Historian's Office, *Histories of the Twelve*, 1856-58, 1861, Church History Library; Joseph Smith History, circa Summer 1832, 1, in *JSP*, H1:11; and Waite, "A School and an Endowment," 174-82

19. 教義と聖約 88:78 - 80 (Revelation, Dec. 27-28, 1832, at josephsmithpapers.org); Backman, *Heavens Resound*, 264-68
20. Coltrin, *Diary and Notebook*, Jan. 24, 1833
21. Minutes, Jan. 22-23, 1833, in *JSP*, D2:378-82
22. Minutes, Jan. 22-23, 1833, in *JSP*, D2:378-82 テーマ: 洗足
23. School of the Prophets Salt Lake City Minutes, Oct. 3, 1883
24. School of the Prophets Salt Lake City Minutes, Oct. 3, 1883; Brigham Young, Discourse, Feb. 8, 1868, in George D. Watt, *Discourse Shorthand Notes*, Feb. 8, 1868, Pitman Shorthand Transcriptions, Church History Library; see also Brigham Young, in *Journal of Discourses*, Feb. 8, 1868, 12:158 テーマ: 知恵の言葉 (教義と聖約 89 章)
25. Woodworth, "Word of Wisdom," 183-91; Harper, *Word of Wisdom*, 45-49; Historical Introduction to Revelation, Feb. 27, 1833 [DC 89], in *JSP*, D3:11-19
26. Revelation, Feb. 27, 1833, at josephsmithpapers.org. 現代の教義と聖約は、この啓示に関するもう一つの初期の写しに基づいており、「カートランドに会した大祭司の集まりと、教会員、シオンの聖徒たちのための『知恵の言葉』」が含まれている (教義と聖約 89:1; see also Revelation Book 2, 49)
27. 教義と聖約 89 章 (Revelation, Feb. 27, 1833, at josephsmithpapers.org); Johnson, Notebook, [1]; "The Word of Wisdom," *Times and Seasons*, June 1, 1842, 3:800; Revelation Book 1, 168, in *JSP*, MRB:313 テーマ: 知恵の言葉 (教義と聖約 89 章)
28. 教義と聖約 89:1 - 4 (Revelation, Feb. 27, 1833, at josephsmithpapers.org); Minute Book 2, Jan. 26, 1838; Historical Introduction to Revelation, Feb. 27, 1833 [DC 89], in *JSP*, D3:11-20
29. School of the Prophets Salt Lake City Minutes, Oct. 3, 1883
30. Minutes, Mar. 23, 1833-B, in *JSP*, D3:50-54; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 287
31. Minutes, Apr. 2, 1833, in *JSP*, D3:55-56; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 283; Minutes, May 4, 1833, in *JSP*, D3:81-82
32. Joseph Smith to "Brethren in Zion," Apr. 21, 1833, in *JSP*, D3:64-67; Historical Introduction to Revelation, Dec. 27-28, 1832 [DC 88:1-126], in *JSP*, D2:334
33. 教義と聖約 95 章 (Revelation, June 1, 1833, at josephsmithpapers.org); Robison, *First Mormon Temple*, 8 テーマ: カートランド神殿
34. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 14, [1]; 教義と聖約 95:13 (Revelation, June 1, 1833, at josephsmithpapers.org); Minute Book 1, June 3, 1833
35. "The Elders Stationed in Zion to the Churches Abroad," *The Evening and the Morning Star*, July 1833, [6]
36. Plat of the City of Zion, circa Early June-June 25, 1833, in *JSP*, D3:121-31; Hamilton, *Nineteenth-Century Mormon Architecture and City Planning*, 13-19
37. Plat of the City of Zion, circa Early June-June 25, 1833, in *JSP*, D3:127-28 テーマ: シオン/新エルサレム
38. Joseph Smith to Church Leaders in Jackson County, MO, June 25, 1833, in *JSP*, D3:155-56

第 16 章: 始まりに過ぎず

1. Young, "What I Remember," 6-7; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2] テーマ: ジャクソン郡での暴行
2. "The Elders Stationed in Zion to the Churches Abroad," *The Evening and the Morning Star*, July 1833, [6]-[7]
3. "Free People of Color," *The Evening and the Morning Star*, July 1833, [5] テーマ: 奴隷制度とその廃止
4. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]-[3]
5. Parley P. Pratt and others, "The Mormons' So Called," *The Evening and the Morning Star*, Extra, Feb. 1834, [1] テーマ: 初期の教会への反対

6. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]-[3]; see also Breen, *The Land Shall Be Deluged in Blood*; and Oates, *Fires of Jubilee*
テーマ：奴隷制度とその廃止
7. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]-[3]; John Whitmer to Oliver Cowdery and Joseph Smith, July 29, 1833, in *JSP*, D3:191-94
テーマ：自警主義
8. Reeve, *Religion of a Different Color*, 116-19; 2 ニーフアイ 26 : 33; Staker, Hearken, O Ye People, 182-84
9. *The Evening and the Morning Star*, Extra, July 16, 1833, [1]; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 326
10. 「人種と神権」福音のテーマ, topics.lds.org
11. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; see also Whitmer, *History*, 42, in *JSP*, H2:54-55
12. See Joseph Smith to Church Leaders in Jackson County, MO, June 25, 1833, in *JSP*, D3:148
13. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; Whitmer, *History*, 42, in *JSP*, H2:54-55
14. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:18, in *JSP*, H2:209 テーマ：ジャクソン郡での暴行
15. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; Robert Weston, *Testimony, Independence, MO, 581, Reorganized Church of Jesus Christ of Latter Day Saints v. Church of Christ of Independence, MO, and others*, typescript, *Testimonies and Depositions*, Church History Library
16. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; Edward Partridge and others, *Memorial to the Legislature of Missouri*, Dec. 10, 1838; Edward Partridge, *Affidavit*, May 15, 1839, copy, Edward Partridge, *Papers*, Church History Library
17. *Minute Book 2*, Dec. 10, 1838, 164; John Patten, *Affidavit*, Oct. 28, 1839, in Johnson, *Mormon Redress Petitions*, 517; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:18, in *JSP*, H2:209
18. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:18, in *JSP*, H2:209; Young, "What I Remember," 8
19. Young, "What I Remember," 9 テーマ：戒めの書
20. "Mary Elizabeth Rollins Lightner," *Utah Genealogical and Historical Magazine*, 1926, 17:195-96
21. Young, "What I Remember," 7-8
22. Edward Partridge, *Affidavit*, May 15, 1839, copy, Edward Partridge, *Papers*, Church History Library. The original source has "If I must suffer for my religion it was no more than others had done before me."
23. Young, "What I Remember," 7; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 327; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]
24. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 327-28; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]
25. Edward Partridge, *Affidavit*, May 15, 1839, copy, Edward Partridge, *Papers*, Church History Library; "Tar and Feathers," *Deseret Weekly*, Dec. 23, 1893, 25-26; Young, "What I Remember," 7-8, 10; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 327-28 テーマ：自警主義
26. 教義と聖約 90 : 28 - 31 (Revelation Mar. 8, 1833, at josephsmithpapers.org); Vienna Jaques, *Statement*, Feb. 22, 1859, Church History Library
27. Vienna Jaques, *Statement*, Feb. 22, 1859, Church History Library; Young, "What I Remember," 8
28. "Mary Elizabeth Rollins Lightner," *Utah Genealogical and Historical Magazine*, 1926, 17:196; Young, "What I Remember," 9

第 17 章：暴徒に殺されようとも

1. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]; Schaefer, William E. McLellin's Lost Manuscript, 167
2. Schaefer, William E. McLellin's Lost Manuscript, 166-67
3. 教義と聖約 98 : 3 (Revelation, Aug. 6, 1833, at josephsmithpapers.org)
4. Oliver Cowdery to Church Leaders in Jackson County, MO, Aug. 10, 1833, in *JSP*, D3:238, 240
5. John Whitmer to Joseph Smith, July 29, 1833, in *JSP*, D3:186-98; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]-[3]
6. Oliver Cowdery to Church Leaders in Jackson County, MO, Aug. 10, 1833, in *JSP*, D3:238-43
7. Historical Introduction to Letter to Church Leaders in Jackson County, MO, Aug. 18, 1833, in *JSP*, D3:260 (「ドクター」はハールバットのの名前であり、称号ではない) テーマ：初期の教会への反対
8. Joseph Smith to Church Leaders in Jackson County, MO, Aug. 18, 1833, in *JSP*, D3:258-69; Revised Plat of the City of Zion, circa Early Aug. 1833, in *JSP*, D3:243-58 テーマ：ジョセフ・スミスの啓示
9. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:19, in *JSP*, H2:211; Historical Introduction to Letter, Oct. 30, 1833, in *JSP*, D3:331-35
10. "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [2]-[3]; Joseph Smith to "Dear Brethren," Oct. 30, 1833, in *JSP*, D3:331-36; Edward Partridge to Joseph Smith, between Nov. 14 and 19, 1833, in *JSP*, D3:344-51
11. Daniel Dunklin to Edward Partridge and others, Oct. 19, 1833, William W. Phelps, Collection of Missouri Documents, Church History Library; "To His Excellency, Daniel Dunklin," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [3]; [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:19, in *JSP*, H2:212 テーマ：アメリカの法的・政治的制度
12. William W. Phelps and others to William T. Wood and others, Oct. 30, 1833, copy, William W. Phelps, Collection of Missouri Documents, Church History Library
13. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:19, in *JSP*, H2:213
14. Joseph Smith to "Dear Brethren," Oct. 30, 1833, in *JSP*, D3:336-41; "The Outrage in Jackson County, Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [7]
15. Lydia B. [Hurlbut Whiting] English, Affidavit, in Johnson, Mormon Redress Petitions, 447-48 テーマ：ジャクソン郡での暴行
16. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Dec. 1839, 1:20, in *JSP*, H2:213-14
17. Dibble, Reminiscences, [7]; Dibble, "Philo Dibble's Narrative," 82; [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Jan. 1840, 1:33, in *JSP*, H2:217. 亡くなった聖徒は、アンドリユー・バーバー。そのほかトーマス・リンビルとヒュー・ブラゼールが殺されている (*JSP*, H2:57, note 173.)
18. Dibble, "Philo Dibble's Narrative," 83; Philo Dibble, Affidavit, Adams Co., IL, May 13, 1839, Mormon Redress Petitions, 1839-45, Church History Library
19. Dibble, "Philo Dibble's Narrative," 83-84; Dibble, Reminiscences, [8]
20. Dibble, Reminiscences, [8]
21. "From Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Jan. 1834, [5]; [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Jan. 1840, 1:33, in *JSP*, H2:218
22. "The Outrage in Jackson County, Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Dec. 1833, [8]; [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Jan. 1840, 1:33, in *JSP*, H2:217-19
23. "From Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Jan. 1834, [5]; Pratt, History of the Late Persecution, 19
24. [Edward Partridge], "A History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Jan. 1840, 1:34-35, in *JSP*, H2:219-20; "From Missouri," *The Evening and the Morning Star*, Jan. 1834, [5]

25. [William W. Phelps] to "Dear Brethren," Nov. 6-7, 1833, in *JSP*, D3:341.
26. Pratt, *History of the Late Persecution*, 20-22; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 75-76; Lyman, *Journal*, 9
27. Dibble, "Philo Dibble's Narrative," 84-85; Dibble, *Reminiscences*, [8] テーマ：癒し
28. Edward Partridge to Joseph Smith, between Nov. 14 and 19, 1833, in *JSP*, D3:347; Emily Dow Partridge Young, "Autobiography," *Woman's Exponent*, Feb. 15, 1885, 13:138; Partridge, *Autobiographical Writings*, circa 1833-36, in Edward Partridge, *Miscellaneous Papers*, Church History Library; see also *JSP*, H1:192
29. Joseph Smith, *Journal*, Nov. 13, 1833, in *JSP*, J1:16-17

第 18 章：イスラエルの陣営

1. Joseph Smith, *Journal*, Nov. 14-19 and 25, 1833, in *JSP*, J1:18 テーマ：ジョセフ・スミスの啓示
2. See Grua, "Joseph Smith and the 1834 D. P. Hurlbut Case," 35-37 テーマ：初期の教会への反対
3. Joseph Smith, *Journal*, Nov. 25, 1833, in *JSP*, J1:20
4. Joseph Smith to Edward Partridge and others, Dec. 10, 1833, in *JSP*, D3:375-81; see also Joseph Smith to Church Leaders in Jackson County, MO, Aug. 18, 1833, in *JSP*, D3:258-69; Joseph Smith to Emma Smith, June 6, 1832, in *JSP*, D2:246-57; 教義と聖約 95 章 (Revelation, June 1, 1833, at josephsmithpapers.org); and ローマ 8:38 - 39. 原文は、「わたしたちがあなたたちの苦しみにして知るとき」
5. 教義と聖約 101:1 - 5, 17 - 18 (Revelation, Dec. 16-17, 1833, at josephsmithpapers.org); see also Grua, "Waiting for the Word of the Lord," 196-201
6. 教義と聖約 101:43 - 62 (Revelation, Dec. 16-17, 1833, at josephsmithpapers.org)
7. Wight, *Reminiscences*, 5-6; Pratt, *Autobiography*, 114; Minutes, Feb. 24, 1834, in *JSP*, D3:453-57; "Elder John Brush," 23-24; William W. Phelps to "Dear Brethren," Dec. 15, 1833, in *JSP*, D3:383
8. Minutes, Feb. 24, 1834, in *JSP*, D3:456-57 テーマ：シオンの陣営 (イスラエルの陣営)
9. 教義と聖約 103:15, 27 (Revelation, Feb. 24, 1834, at josephsmithpapers.org); Woodruff, *Journal*, Apr. 1, 1834
10. Woodruff, *Journal*, Apr. 1, 1834
11. Woodruff, *Journal*, Apr. 11, 1834
12. Woodruff, *Journal*, Apr. 26, 1834; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 1856-58, 3 テーマ：初代末日聖徒の日常生活
13. Holbrook, *Reminiscences*, 34-35; Radke, "We Also Marched," 152-54, 160-61
14. Woodruff, "History and Travels of Zion's Camp," 3-4; *JSP*, D4:138, note 182
15. Holbrook, *Reminiscences*, 34; Woodruff, *Journal*, May 1, 1834; Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 477-78
16. William W. Phelps to Joseph Smith, Dec. 15, 1833, in *JSP*, D3:382-86; Robert W. Wells to Alexander Doniphan and David R. Atchison, Nov. 21, 1833, copy, William W. Phelps, Collection of Missouri Documents, Church History Library; Daniel Dunklin to David R. Atchison, Feb. 5, 1834, in "Mormon Difficulties," *Missouri Intelligencer* and Boon's Lick Advertiser, Mar. 8, 1834, [1] テーマ：シオンの陣営 (イスラエルの陣営)
17. It Becomes Our Duty to Address You on the Subject of Immediately Preparing [Kirtland, OH: May 10, 1834], copy at Church History Library; Sidney Rigdon and Oliver Cowdery to "Dear Brethren," May 10, 1834, in Cowdery, *Letterbook*, 49-50; Sidney Gilbert and others to Daniel Dunklin, Apr. 24, 1834, copy, William W. Phelps, Collection of Missouri Documents, Church History Library
18. Kimball, "Journal and Record," 8; see also 申命 1 章
19. Joseph Smith to Emma Smith, June 4, 1834, in *JSP*, D4:52-59; Bradley, *Zion's Camp*, 27-28
20. Joseph Smith to Emma Smith, June 4, 1834, in *JSP*, D4:54

21. Joseph Smith to Emma Smith, June 4, 1834, in *JSP*, D4:52-59; "The Outrage in Jackson County, Missouri," *The Evening and the Morning Star*, June 1834, [8]
22. "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:788-89; George A. Smith, *Autobiography*, 29; Minutes, Aug. 28-29, 1834, in *JSP*, D4:125
23. Minutes, Aug. 28-29, 1834, in *JSP*, D4:129-30, emphasis added
24. Minutes, Aug. 28-29, 1834, in *JSP*, D4:129-30 テーマ：教会内での対立
25. Kimball, "Journal and Record," 11; see also Crawley and Anderson, "Political and Social Realities of Zion's Camp," 413
26. Kimball, "Journal and Record," 11; *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 477-78
27. Holbrook, *Reminiscences*, 36
28. Holbrook, *Reminiscences*, 36
29. George A. Smith, *Autobiography*, 33; Pratt, *Autobiography*, 123-24; Daniel Dunklin to John Thornton, June 6, 1834, in "The Mormons," *Missouri Intelligencer and Boon's Lick Advertiser*, July 5, 1834, [2]
30. Rich, *Diary*, June 14, 1834
31. George A. Smith, *Autobiography*, 36; "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:789 テーマ：奴隷制度とその廃止
32. George A. Smith, *Autobiography*, 36-37; McBride, *Reminiscences*, 5; "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:789-90
33. Hancock, *Autobiography*, 145; Holbrook, *Reminiscences*, 37
34. George A. Smith, "My Journal," 216; George A. Smith, *Autobiography*, 37; McBride, *Reminiscences*, 5-6; "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:790
35. "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:790; George A. Smith, *Autobiography*, 37; Woodruff, *Journal*, May 1834
36. *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-2 (fair copy)*, 332
37. *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 496-97; "Extracts from H. C. Kimball's Journal," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1845, 6:790
38. Declaration, June 21, 1834, in *JSP*, D4:65-69; George A. Smith, *Autobiography*, 38; Holbrook, *Reminiscences*, 37-38; McBride, *Reminiscences*, 6; *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 497-98; "Propositions, &c. of the 'Mormons,'" *The Evening and the Morning Star*, July 1834, [8]
39. George A. Smith, *Autobiography*, 39-40; McBride, *Reminiscences*, 6; Holbrook, *Reminiscences*, 38; Baldwin, *Account of Zion's Camp*, 13; *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 497-98
40. 教義と聖約 105 章 (Revelation, June 22, 1834, at josephsmithpapers.org) テーマ：天からの力
41. See Historical Introduction to Revelation, June 22, 1834 [DC 105], in *JSP*, D4:70-72
42. Account with the Church of Christ, circa Aug. 11-29, 1834, in *JSP*, D4:135-55; 教義と聖約 105 章 (Revelation, June 22, 1834, at josephsmithpapers.org)
43. Wilford Woodruff, in *Journal of Discourses*, Dec. 12, 1869, 13:158
44. Wilford Woodruff, in *Journal of Discourses*, July 27, 1862, 10:14; *Minute Book 2*, Nov. 5, 1834

第 19 章：教導の業の管理人

1. Holbrook, "History of Joseph Holbrook," 17-18
2. Woodruff, *Journal*, [June 1834]
3. *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 505 テーマ：癒し
4. *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 506; addenda, 16, note 18
5. "Afflicting," *The Evening and the Morning Star*, July 1834, [8]; *Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1*, 509
6. George A. Smith, in *Journal of Discourses*, Nov. 15, 1864, 11:8; *Joseph Smith, Journal*, Jan. 11, 1834, in *JSP*, J1:25; "A Mormon Battle," *Erie Gazette*, July 31, 1834, [3]

7. Note, Mar. 8, 1832, in *JSP*, D2:201-4; Minutes, Feb. 17, 1834, in *JSP*, D3:435-39 テーマ：大管長会, ワードとステーク
8. Minutes, Feb. 17, 1834, in *JSP*, D3:435-39 テーマ：高等評議会
9. Minutes and Discourse, circa July 7, 1834, in *JSP*, D4:90-96
10. See Robison, First Mormon Temple, 45-58; Bushman, Rough Stone Rolling, 306-8; and Staker, Hearken, O Ye People, 401-34
11. Kimball, "Journal and Record," 20
12. Ames, Autobiography and Journal, [10]; see also Probert and Manscill, "Artemus Millet," 60-62
13. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 553; Johnson, Reminiscences and Journal, 17-18; Staker, Hearken, O Ye People, 421-26, 436 テーマ：カートランド神殿
14. Kimball, "Journal and Record," 20
15. Tippets, Autobiography, [9]-[10]; see also 教義と聖約 101 : 67 - 73 (Revelation, Dec. 16-17, 1833, at josephsmithpapers.org)
16. 教義と聖約 101 : 70 - 73 (Revelation, Dec. 16-17, 1833, at josephsmithpapers.org)
17. Tippets, Autobiography, [8]-[10]; Minutes, Nov. 28, 1834, in *JSP*, D4:182-88; Editorial Note and Joseph Smith, Journal, Nov. 29, 1834, in *JSP*, J1:46-47
18. See Staker, Hearken, O Ye People, 412-28, 435-37
19. See 教義と聖約 90 : 28 - 29 (Revelation, Mar. 8, 1833, at josephsmithpapers.org); Tullidge, Women of Mormondom, 441; Staker, Hearken, O Ye People, 436, notes 8-9; Joseph Smith, Journal, Sept. 23, 1835, in *JSP*, J1:62; and Ames, Autobiography and Journal, [12]
20. Ames, Autobiography and Journal, [10]; Corrill, Brief History, 21, in *JSP*, H2:151; Joseph Young to Lewis Harvey, Nov. 16, 1880, Church History Library; Robison, First Mormon Temple, 50
21. Tippets, Autobiography, [11]-[12]; Minute Book 1, Nov. 29-30, 1834; Editorial Note and Joseph Smith, Journal, Nov. 29, 1834, in *JSP*, J1:46-47
22. 教義と聖約 18 章 (Revelation, June 1829-B, at josephsmithpapers.org)
23. 教義と聖約 102 : 30 (Revised Minutes, Feb. 18-19, 1834, at josephsmithpapers.org)
24. Young, History of the Organization of the Seventies, 1
25. Minutes, Discourse, and Blessings, Feb. 14-15, 1835, in *JSP*, D4:219-28 テーマ：十二使徒定員会
26. Patten, Journal, [1]-[2], [4]-[14]
27. See biographical entries for Luke Johnson, Lyman Eugene Johnson, Parley Parker Pratt, and Orson Pratt, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
28. See biographical entries for Orson Hyde, William Earl McLellin, John Farnham Boynton, and William B. Smith, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org.
29. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 574; Minutes and Blessings, Feb. 21, 1835, in *JSP*, D4:237-47
30. ルカ 10 : 1 テーマ：七十人定員会
31. Minutes and Blessings, Feb. 28-Mar. 1, 1835, in *JSP*, D4:255-64; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 577-78; Minutes, Aug. 11, 1834, in *JSP*, D4:97-101; Minutes, Aug. 23, 1834, in *JSP*, D4:108-9; Minutes, Aug. 28-29, 1834, in *JSP*, D4:120-35; Sylvester Smith to Oliver Cowdery, Oct. 28, 1834, in LDS Messenger and Advocate, Oct. 1834, 1:10-11
32. Young, History of the Organization of the Seventies, 14

第 20 章：わたしを見捨てることなく

1. William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, June 2, 1835, in *JSP*, D4:335-36; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, in Historian's Office, Journal History of the Church, July 20, 1835; this entry was copied from the original letter in possession of a grandson of William W. Phelps テーマ：オハイオ州カートランド

2. Historical Introduction to Book of Abraham Manuscript, circa Early July–circa Nov. 1835–A [Abraham 1:4–2:6], in *JSP*, D5:71–77; “Egyptian Antiquities,” *Times and Seasons*, May 2, 1842, 3:774
3. Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 595–96; “Egyptian Antiquities,” *Times and Seasons*, May 2, 1842, 3:774; Oliver Cowdery to William Frye, Dec. 22, 1835, in Oliver Cowdery, Letterbook, 68–74; “Egyptian Mummies,” *LDS Messenger and Advocate*, Dec. 1835, 2:234–35; Certificate from Michael Chandler, July 6, 1835, in *JSP*, D4:361–65
4. “Egyptian Mummies,” *LDS Messenger and Advocate*, Dec. 1835, 2:234–35; see also “Egyptian Papyri,” at josephsmithpapers.org
5. Historical Introduction to Certificate from Michael Chandler, July 6, 1835, in *JSP*, D4:362; Tullidge, “History of Provo City,” 283; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, in Historian’s Office, *Journal History of the Church*, July 20, 1835; モルモン 9: 32
6. Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 596; Oliver Cowdery to William Frye, Dec. 22, 1835, in Oliver Cowdery, Letterbook, 68–74; Historical Introduction to Certificate from Michael Chandler, July 6, 1835, in *JSP*, D4:362; Tullidge, “History of Provo City,” 283
7. *JSP*, D4:363, note 9; Joseph Coe to Joseph Smith, Jan. 1, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; Orson Pratt, in *Journal of Discourses*, Aug. 25, 1878, 20:65
8. Joseph Coe to Joseph Smith, Jan. 1, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; Peterson, *Story of the Book of Abraham*, 6–8
9. William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, in Historian’s Office, *Journal History of the Church*, July 20, 1835 テーマ：アブラハム書の翻訳
10. Lyman and others, *No Place to Call Home*, 44
11. William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, in Historian’s Office, *Journal History of the Church*, July 20, 1835; “The House of God,” *LDS Messenger and Advocate*, July 1835, 1:147; see also Robison, *First Mormon Temple*, 153
12. “Short Sketch of the Life of Levi Jackman,” 17 テーマ：聖餐会
13. Staker, *Hearken, O Ye People*, map 8, 413; Anderson, *Joseph Smith’s Kirtland*, 155; Lysander Gee to Joseph Millet, July 18, 1885, copy, in Millet, *Record Book*, 34; Probert and Manscill, “Artemus Millet,” 60
14. Millet, “J. Millet on Cape Breton Island,” 93–94; Probert and Manscill, “Artemus Millet,” 64
15. Minutes, Sept. 14, 1835, in *JSP*, D4:414–15; 教義と聖約 25 章 (Revelation, July 1830–C, at josephsmithpapers.org); Minutes, Apr. 30, 1832, in *JSP*, D2:240; see also Hicks, *Mormonism and Music*. テーマ：賛美歌
16. Collection of Sacred Hymns, 120–21; Backman, *Heavens Resound*, 281–82; Robinson, “Items of Personal History,” *Return*, Apr. 1889, 58; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, Sept. 16, 1835, Church History Library; Historical Introduction to Revelation, Aug. 2, 1833–B [DC 94], in *JSP*, D3:203–4; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, May 26, 1835, William W. Phelps, Papers, Brigham Young University; Preface to *Doctrine and Covenants*, Feb. 17, 1835, in *JSP*, D4:234–37
17. Minutes, Aug. 17, 1835, in *JSP*, D4:382–96 テーマ：教義と聖約, 「信仰に関する講話」
18. Minutes, June 23, 1834, in *JSP*, D4:80–84; Joseph Smith, *Journal*, Oct. 29, 1835, in *JSP*, J1:76–77
19. Joseph Smith, *Journal*, Oct. 29, 1835, in *JSP*, J1:77; Minutes, Oct. 29, 1835, in *JSP*, D5:26–29; see also Lucy Mack Smith, *History*, 1844–45, book 11, [4]–[5] テーマ：教会宗紀
20. Joseph Smith, *Journal*, Oct. 29 and 30, 1835, in *JSP*, J1:77–79
21. Knight, *Autobiography and Journal*, [63]; Gates, *Lydia Knight’s History*, 16–23; Hartley, “Newel and Lydia Bailey Knight’s Kirtland Love Story,” 10–14
22. Knight, *Autobiography and Journal*, [56] テーマ：初代末日聖徒の日常生活
23. Gates, *Lydia Knight’s History*, 26–27
24. Knight, *Autobiography and Journal*, [60]–[63]; Gates, *Lydia Knight’s History*, 10–12; Hartley, “Newel and Lydia Bailey Knight’s Kirtland Love Story,” 9–10
25. Knight, *Autobiography and Journal*, [56]. 原文資料には、「彼女はわたしと同じように孤独な身の上だと思うと彼女に言った」とある
26. Knight, *Autobiography and Journal*, [56]; Gates, *Lydia Knight’s History*, 27

27. Joseph Smith, Journal, Oct. 30, 1835, in *JSP*, J1:79
28. Joseph Smith, Journal, Oct. 30-31, 1835, in *JSP*, J1:79-80
29. Joseph Smith, Journal, Oct. 31, 1835, in *JSP*, J1:80
30. Joseph Smith, Journal, Oct. 31 and Nov. 3, 1835, in *JSP*, J1:80, 83; Revelation, Nov. 3, 1835, in *JSP*, D5:32-36
31. See Tyler, "Recollection of the Prophet Joseph Smith," 127-28 テーマ:教会内での対立
32. Historical Introduction to Marriage License for John F. Boynton and Susan Lowell, Nov. 17, 1835, in *JSP*, D5:65-66; see also Bradshaw, "Joseph Smith's Performance of Marriages in Ohio," 23-69
33. Knight, Autobiography and Journal, [56]-[59]; Gates, Lydia Knight's History, 28-31; Joseph Smith, Journal, Nov. 24, 1835, in *JSP*, J1:109-10; Hartley, "Newel and Lydia Bailey Knight's Kirtland Love Story," 6-22
34. See Bushman, Rough Stone Rolling, 298-300; and Joseph Smith, Journal, Nov. 8 and Dec. 12, 1835; Jan. 16, 1836, in *JSP*, J1:86, 120, 158
35. Joseph Smith, Journal, Nov. 18, Dec. 12 and 16, 1835, in *JSP*, J1:106, 120-21, 124
36. Historical Introduction to Letter from William Smith, Dec. 18, 1835, in *JSP*, D5:112; Joseph Smith, Journal, Dec. 16, 1835, in *JSP*, J1:124; Joseph Smith History, 1834-36, 149-50, in *JSP*, H1:147-48; Joseph Smith to William Smith, circa Dec. 18, 1835, in *JSP*, D5:115-21
37. William Smith to Joseph Smith, Dec. 18, 1835, in *JSP*, D5:109-15; Joseph Smith, Journal, Dec. 18, 1835, in *JSP*, J1:129-30
38. William Smith to Joseph Smith, Dec. 18, 1835, in *JSP*, D5:114; Joseph Smith, Journal, Dec. 18, 1835, in *JSP*, J1:130
39. Joseph Smith to William Smith, circa Dec. 18, 1835, in *JSP*, D5:115-21; Joseph Smith, Journal, Dec. 18, 1835, in *JSP*, J1:131-34
40. Joseph Smith, Journal, Jan. 1, 1836, in *JSP*, J1:141

第 21 章 : 主の御霊

1. Robison, First Mormon Temple, 78-79; Staker, Hearken, O Ye People, 437 テーマ:カートランド神殿
2. Whitmer, History, 83, in *JSP*, H2:92; Joseph Smith, Journal, Nov. 12, 1835, in *JSP*, J1:97-98; レビ 8 章 ; 出エジプト 29: 4 - 7
3. ルカ 24: 49 ; 使徒 1 - 2 章 ; 教義と聖約 38 章 (Revelation, Jan. 2, 1831, at josephsmithpapers.org); William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, Apr. 1836, William W. Phelps, Papers, Brigham Young University Spelling in Luke 24:49 standardized from "endued" to "endowed." テーマ:天からの力, 異言の賜物
4. Joseph Smith, Journal, Jan. 21, 1836, in *JSP*, J1:166-71; Cowdery, Diary, Jan. 21, 1836; Partridge, Journal, Jan. 21, 1836
5. Joseph Smith, Journal, Jan. 21, 1836, in *JSP*, J1:167-68; 教義と聖約 137 章 (Visions, Jan. 21, 1836, at josephsmithpapers.org)
6. Joseph Smith, Journal, Jan. 21, 1836, in *JSP*, J1:168-71
7. Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:200; Post, Journal, Mar. 27, 1836; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, Apr. 1-3, 1836, in Harper, "Pentecost and Endowment Indeed," 346
8. Gates, Lydia Knight's History, 32
9. Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:200-201; Gates, Lydia Knight's History, 32-33
10. Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:200
11. Minutes and Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, in *JSP*, D5:194-99; Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:203; Cowdery, Diary, Mar. 26, 1836 テーマ:神殿の奉獻と祈り
12. 教義と聖約 109 章 (Minutes and Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:203-10

13. 教義と聖約 109 : 35 - 38 (Minutes and Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:207
14. 教義と聖約 109 : 78 (Minutes and Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:210
15. Collection of Sacred Hymns, 120-21; Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:210
テーマ：賛美歌
16. Joseph Smith, Journal, Mar. 27, 1836, in *JSP*, J1:211; Minutes and Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, in *JSP*, D5:209; Gates, Lydia Knight's History, 33
17. Benjamin Brown to Sarah M. Brown, Mar. 1836, Benjamin Brown Family Collection; *JSP*, J1:211, note 443; see also Harper, "Pentecost and Endowment Indeed," 336
18. テーマ：洗足
19. Joseph Smith, Journal, Mar. 27 and 30, 1836, in *JSP*, J1:211, 213-16; Post, Journal, Mar. 27-28 and 30, 1836; Cowdery, Diary, Mar. 27, 1836; William W. Phelps to Sally Waterman Phelps, Apr. 1836, William W. Phelps, Papers, Brigham Young University; Partridge, Journal, Mar. 27, 1836; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, addenda, 3-4; see also Waite, "A School and an Endowment," 174-82 テーマ：天からの力, 聖会
20. Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:219; see also *JSP*, J1:218
21. Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:219; 教義と聖約 110 : 1 - 3 (Visions, Apr. 3, 1836, at josephsmithpapers.org)
22. Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:219; 教義と聖約 110 : 3, 6 - 7 (Visions, Apr. 3, 1836, at josephsmithpapers.org)
23. 教義と聖約 110 : 8 - 10 (Visions, Apr. 3, 1836, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:222
24. 教義と聖約 110 : 11 - 16 (Visions, Apr. 3, 1836, at josephsmithpapers.org); マラキ 4 : 6; Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:222; see also Robert B. Thompson, Sermon Notes, Oct. 5, 1840, Joseph Smith Collection, Church History Library; Coray, Notebook, Aug. 13, 1843; Joseph Smith, Journal, Aug. 27, 1843, in *JSP*, J3:86; and Woodruff, Journal, Mar. 10, 1844
25. Joseph Smith, Journal, Apr. 3, 1836, in *JSP*, J1:222
26. Woodruff, Journal, Jan. 21, 1844; see also Burgess, Journal, [303]-[6]; and 教義と聖約 128 : 17 - 18 (Letter to "The Church of Jesus Christ of Latter Day Saints," Sept. 6, 1842, at josephsmithpapers.org) テーマ：結び固め
27. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 728-29; Whitmer, History, 84, in *JSP*, H2:93
28. Gates, Lydia Knight's History, 34-37; Knight, Autobiography and Journal, [67]-[68] テーマ：祝福師の祝福
29. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 733; see also Collection of Sacred Hymns, 120

第 22 章：主を試みなさい

1. See, for example, JS, Journal, Mar. 30, 1836, in *JSP*, J1:216
2. Backman, Heavens Resound, 304-5; Tyler, "Incidents of Experience," 32
3. Minutes, Mar. 30, 1836, in *JSP*, D5:219
4. 教義と聖約 105 : 28 (Revelation, June 22, 1834, at josephsmithpapers.org); Minutes, Apr. 2, 1836, in *JSP*, D5:223-24
5. Minutes, Apr. 2, 1836, in *JSP*, D5:222-24
6. "Anniversary of the Church of Latter Day Saints," LDS Messenger and Advocate, Apr. 1837, 2:488; Kimball, "Journal and Record," 33; Minute Book 1, June 16, 1836; see also Historical Introduction to Revelation, Aug. 6, 1836, in *JSP*, D5:272-74 テーマ：カナダ
7. Pratt, Autobiography, 141, 145; see also Givens and Grow, Parley P. Pratt, 82
8. Pratt, Autobiography, 141-42
9. See Givens and Grow, Parley P. Pratt, 71, 82, 91

10. Pratt, *Autobiography*, 142, 145–46 The original source has “and see if anything was too hard for him.”
11. Emily Dow Partridge Young, “Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Feb. 15, 1885, 13:138
12. Joseph Smith to Lyman Wight and Others, Aug. 16, 1834, in *JSP*, D4:102–8; Emily Dow Partridge Young, “Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Mar. 1, 1885, 13:145; Partridge, *History*, Manuscript, circa 1839, [18]
13. Emily Dow Partridge Young, “Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Feb. 15, 1885, 13:138
テーマ：初代末日聖徒の日常生活
14. Partridge, *Journal*, June 29, 1836; Emily Dow Partridge Young, “Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Feb. 15, 1885, 13:138; “Public Meeting,” *LDS Messenger and Advocate*, Aug. 1836, 2:363–64; Partridge, *History*, Manuscript, circa 1839, [17]–[18]
15. Emily Dow Partridge Young, “Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Feb. 15, 1885, 13:138
16. Pratt, *Autobiography*, 146
17. John Taylor, Sermon, Oct. 6, 1866, George D. Watt Papers, Church History Library, as transcribed by LaJean Purcell Carruth
18. Pratt, *Autobiography*, 147
19. John Taylor, Sermon, Oct. 6, 1866, George D. Watt Papers, Church History Library, as transcribed by LaJean Purcell Carruth
20. Pratt, *Autobiography*, 164–65; “Diary of Joseph Fielding,” book 1, 5. The original has “go over to meeting together.”
21. “Diary of Joseph Fielding,” book 1, 5; Pratt, *Autobiography*, 165–66
22. Pratt, *Autobiography*, 166
23. John Taylor, “History of John Taylor by Himself,” 10–11, in *Histories of the Twelve*, Church History Library
24. Jonathan Crosby, *Autobiography*, 14; Caroline Barnes Crosby, *Reminiscences*, [19]
25. Jonathan Crosby, *Autobiography*, 14–15; Caroline Barnes Crosby, *Reminiscences*, [15], [19]–[20]
26. Caroline Barnes Crosby, *Reminiscences*, [21]–[22]
27. Historical Introduction to Letter to William W. Phelps and Others, July 25, 1836, in *JSP*, D5:269; Partridge, *Journal*, June 29, 1836; “Public Meeting,” *LDS Messenger and Advocate*, Aug. 1836, 2:359–61; Partridge, *History*, Manuscript, circa 1839, [17]–[18]
28. Sidney Rigdon and Others to William W. Phelps and Others, July 25, 1836, in *JSP*, D5:268–71
29. Minutes, Apr. 2, 1836, in *JSP*, D5:222–24; Historical Introduction to Revelation, Apr. 23, 1834, in *JSP*, D4:19–22
30. Minutes, June 16, 1836, in *JSP*, D5:247–53; Staker, “Raising Money in Righteousness,” 144–53; Staker, *Hearken, O Ye People*, 445–46; Brigham Young, in *Journal of Discourses*, Oct. 9, 1852, 1:215; Oct. 8, 1855, 3:121
31. Historical Introduction to Revelation, Aug. 6, 1836, in *JSP*, D5:271–75; see also Kuehn, “More Treasures Than One,” 229–34
32. 教義と聖約 111 : 1, 5 – 6 (Revelation, Aug. 6, 1836, at josephsmithpapers.org) The word “on” was added; the original has “coming this journey.”

第 23 章：あらゆる異

1. Jonathan Crosby, *Autobiography*, 15; Caroline Barnes Crosby, *Reminiscences*, [53]–[54]; see also Lyman and others, *No Place to Call Home*, 46
2. Historical Introduction to Constitution of the Kirtland Safety Society Bank, Nov. 2, 1836, in *JSP*, D5:300; “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:285–90; Staker, *Hearken, O Ye People*, 463
テーマ：カートランド安全協会

3. Kirtland Safety Society Notes, Jan. 4–Mar. 9, 1837, in *JSP*, D5:331–40; Staker, Hearken, O Ye People, 463–64; Historical Introduction to Constitution of the Kirtland Safety Society Bank, Nov. 2, 1836, in *JSP*, D5:302
4. Mortgage to Peter French, Oct. 5, 1836, in *JSP*, D5:293–99; Kirtland Safety Society, Stock Ledger, 1836–37; “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:285–86; Staker, Hearken, O Ye People, 464
5. Historical Introduction to Constitution of the Kirtland Safety Society Bank, Nov. 2, 1836, in *JSP*, D5:303; *JSP*, D5:304, note 91; “Minutes of a Meeting,” *LDS Messenger and Advocate*, Mar. 1837, 3:476–77; Staker, Hearken, O Ye People, 465
6. Historical Introduction to Kirtland Safety Society Notes, Jan. 4–Mar. 9, 1837, in *JSP*, D5:331; Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 750; Articles of Agreement for the Kirtland Safety Society Anti-Banking Company, Jan. 2, 1837, in *JSP*, D5:324, 329–31; イザヤ 60 : 9, 17 : 62 : 1 も参照
7. Woodruff, Journal, Jan. 6, 1837
8. Jonathan Crosby, *Autobiography*, 14–15
9. Caroline Barnes Crosby, *Reminiscences*, [39]
10. “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:286; Kirtland Safety Society Notes, Jan. 4–Mar. 9, 1837, in *JSP*, D5:331–35
11. Woodruff, Journal, Jan. 6, 1837; Kirtland Safety Society Notes, Jan. 4–Mar. 9, 1837, in *JSP*, D5:331–40
12. Editorial, *LDS Messenger and Advocate*, July 1837, 3:536; Willard Richards to Hepzibah Richards, Jan. 20, 1837, Levi Richards Family Correspondence, Church History Library; Historical Introduction to Mortgage to Peter French, Oct. 5, 1836, in *JSP*, D5:295; “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:286; Staker, Hearken, O Ye People, 481
13. Ulrich, “Leaving Home,” 451; see also Kirtland Safety Society, Stock Ledger, 1836–37
14. Tullidge, *Women of Mormondom*, 412
15. Woodruff, Journal, Apr. 1837 テーマ：祝福師の祝福
16. Phebe Carter to Family, circa 1836, in Wilford Woodruff Collection, Church History Library
17. Woodruff, Journal, Apr. 1837
18. Woodruff, Journal, Apr. 10, 1837
19. Staker, Hearken, O Ye People, 481–84
20. Hall, Thomas Newell, 132–34; Adams, “Grandison Newell’s Obsession,” 160–63
21. “The Court of Common Pleas,” *Chardon Spectator and Geauga Gazette*, Oct. 30, 1835, 2; Eber D. Howe, Statement, Apr. 8, 1885; Maria S. Hurlbut, Statement, Apr. 15, 1885, in Collection of Manuscripts about Mormons, 1832–54, Chicago History Museum; Adams, “Grandison Newell’s Obsession,” 168–73
22. Young, Account Book, Jan. 1837; “Our Village,” *LDS Messenger and Advocate*, Jan. 1837, 3:444; Staker, Hearken, O Ye People, 482; see also Agreement with David Cartter, Jan. 14, 1837, in *JSP*, D5:341–43; and Agreement with Ovid Phinney and Stephen Phillips, Mar. 14, 1837, in *JSP*, D5:344–48 テーマ：初期の教会への反対
23. An Act to Prohibit the Issuing and Circulating of Unauthorized Bank Paper [Jan. 27, 1816], Statutes of the State of Ohio, 136–39; “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:288–89
24. Staker, Hearken, O Ye People, 468–77
25. Staker, Hearken, O Ye People, 484; *JSP*, D5:287, note 19; 329, note 187
26. Kirtland Safety Society, Stock Ledger, 219; Staker, Hearken, O Ye People, 391
27. Woodruff, Journal, June 28, 1835; *JSP*, D4:72, note 334; “Parrish, Warren Farr,” Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; see also Staker, Hearken, O Ye People, 465, 480
28. Kimball, “History,” 47–48; Staker, Hearken, O Ye People, 482–84; “A New Revelation — Mormon Money,” *Cleveland Weekly Gazette*, Jan. 18, 1837, [3]; “Mormon Currency,” *Cleveland Daily Gazette*, Jan. 20, 1837, 2; “Rags! Mere Rags!,” *Ohio Star*, Jan. 19, 1837; Jonathan Crosby, *Autobiography*, 16; Woodruff, Journal, Jan. 24 and Apr. 9, 1837; “Part 5: 5 October 1836–10 April 1837,” in *JSP*, D5:287–90
29. “Bank of Monroe,” *Painesville Republican*, Feb. 9, 1837, [2]; “Monroe Bank,” *Painesville Telegraph*, Feb. 24, 1837, [3]; “Kirtland, — Mormonism,” *LDS Messenger and Advocate*,

- Apr. 1837, 3:490-91; "Part 5: 5 October 1836-10 April 1837," in *JSP*, D5:291; Staker, Hearken, O Ye People, 492-501
30. Woodruff, Journal, Jan. 10 and 17, 1837; Feb. 19, 1837; Charges against Joseph Smith Preferred to Bishop's Council, May 29, 1837, in *JSP*, D5:393-97
31. Woodruff, Journal, Feb. 19, 1837
32. Woodruff, Journal, Apr. 6, 1837
33. Joseph Smith, Discourse, Apr. 6, 1837, in *JSP*, D5:352-57
34. Woodruff, Journal, Apr. 6, 1837
35. "For the Republican," Painesville Republican, Feb. 16, 1837, [2]-[3]; Staker, Hearken, O Ye People, 498; "Joseph Smith Documents from October 1835 through January 1838," in *JSP*, D5:xxx
36. Transcript of Proceedings, June 5, 1837, State of Ohio on Complaint of Newell v. Smith, Geauga County, Ohio, Court of Common Pleas Record Book T, 52-53, Geauga County Archives and Records Center, Chardon, Ohio; Woodruff, Journal, May 30, 1837; Hall, Thomas Newell, 135; Historical Introduction to Letter from Newel K. Whitney, Apr. 20, 1837, in *JSP*, D5:367-69
37. Woodruff, Journal, Apr. 13, 1837; see also "The Humbug Ended," Painesville Republican, June 15, 1837, [2]
38. Historical Introduction to Letter from Emma Smith, Apr. 25, 1837, in *JSP*, D5:371
39. Newel K. Whitney to Joseph Smith and Sidney Rigdon, Apr. 20, 1837, in *JSP*, D5:370
40. Emma Smith to Joseph Smith, Apr. 25, 1837, in *JSP*, D5:372; Emma Smith to Joseph Smith, May 3, 1837, in *JSP*, D5:376 テーマ：ジョセフ・スミスとエマ・ヘイル・スミスの家族
41. Emma Smith to Joseph Smith, Apr. 25, 1837, in *JSP*, D5:372
42. Emma Smith to Joseph Smith, May 3, 1837, in *JSP*, D5:375-76 テーマ：エマ・ヘイル・スミス
43. Woodruff, Journal, Mar. 26, 1837; Pratt, Autobiography, 181-83; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 92
44. Pratt, Autobiography, 181-83, 188; Geauga County, Ohio, Probate Court, Marriage Records, 1806-1920, volume C, 220, May 14, 1837, microfilm 873,464, U. S. and Canada Record Collection, Family History Library; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 93-95; Thomas B. Marsh and David W. Patten to Parley P. Pratt, May 10, 1837, in Joseph Smith Letterbook 2, 62-63
45. Pratt, Autobiography, 183; Historical Introduction to Notes Receivable from Chester Store, May 22, 1837, in *JSP*, D5:383-84; Historical Introduction to Letter from Parley P. Pratt, May 23, 1837, in *JSP*, D5:386-87
46. Historical Introduction to Letter from Parley P. Pratt, May 23, 1837, in *JSP*, D5:386-87
47. See Givens and Grow, Parley P. Pratt, 97-98
48. Parley P. Pratt to Joseph Smith, May 23, 1837, in *JSP*, D5:389-91. Parley's letter was first published the following year in an antagonistic newspaper. For further analysis, see Historical Introduction to Letter from Parley P. Pratt, May 23, 1837, in *JSP*, D5:386-89; and Pratt, Autobiography, 183-84
49. Woodruff, Journal, May 28, 1831 テーマ：教会内での対立
50. Woodruff, Journal, May 31 and July 16, 1837; Woodruff, Leaves from My Journal, 26; see also Ulrich, House Full of Females, 17-18 テーマ：初期の宣教師
51. "Joseph Smith Documents from October 1835 through January 1838," in *JSP*, D5:xxxii
52. Woodruff, Journal, May 28, 1837; West, Few Interesting Facts, 14
53. Woodruff, Journal, May 28, 1837

第24章：真理は勝つ

1. Plewe, Mapping Mormonism, 48-49; "Joseph Smith Documents from October 1835 through January 1838," in *JSP*, D5: xxvi-xxvii; "Far West, Missouri," Geographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：シオン/新エルサレム

2. Thomas B. Marsh and David W. Patten to Parley P. Pratt, May 10, 1837, in Joseph Smith Letterbook 2, 62-63
3. Allen and others, Men with a Mission, 22 テーマ：カートランド安全協会
4. Kimball, "History," 54; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 116 テーマ：イギリス, 初期の宣教師
5. Kimball, "History," 54
6. Kimball, "History," 55
7. Kimball, "History," 55
8. Tullidge, Women of Mormondom, 113-15; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 120-22
9. Jonathan Crosby, Autobiography, 16; Joseph Smith and Others, Mortgage to Mead, Stafford & Co., July 11, 1837, in *JSP*, D5:404-10
10. Jonathan Crosby, Autobiography, 16; Caroline Barnes Crosby, Reminiscences, [39]-[41]
11. Jonathan Crosby, Autobiography, 16-17. The original source has "provision" rather than "provisions"; it also has "make a present" rather than "make you a present."
12. Jonathan Crosby, Autobiography, 17; Caroline Barnes Crosby, Reminiscences, [41]
13. Mary Fielding to Mercy Fielding, circa June 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library; see also Whitney, Life of Heber C. Kimball, 112-14 テーマ：教会内での対立
14. Mary Fielding to Mercy Fielding, circa June 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library
15. John Taylor, "History of John Taylor by Himself," 15, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library; see also Roberts, Life of John Taylor, 40; and Parley P. Pratt to Joseph Smith, May 23, 1837, in *JSP*, D5:386-91
16. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 762; Mary Fielding to Mercy Fielding, circa June 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library
17. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 763; Warren Parrish, Letter to the Editor, Painesville Republican, Feb. 15, 1838, [3]
18. Mary Fielding to Mercy Fielding, circa June 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library
19. Fielding, Journal, 17; Kimball, "History," 60, 62; Watt, Mormon Passage of George D. Watt, 17; see also Ostler, "Photo Essay of Church History Sites in Liverpool and the Ribble Valley," 61-78 テーマ：イギリス
20. Whitney, Life of Heber C. Kimball, 133; Allen and others, Men with a Mission, 25-29
21. Fielding, Journal, 17: "Mission to England," *LDS Millennial Star*, Apr. 1841, 12:290; Kimball, "History," 60; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 134
22. Joseph Fielding to Mary Fielding and Mercy Fielding Thompson, Oct. 2, 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library; "Mission to England," *LDS Millennial Star*, Apr. 1841, 12:290; Fielding, Journal, 17-18
23. Givens and Grow, Parley P. Pratt, 101; Kirtland Safety Society, Stock Ledger, 47
24. "History of Thomas Baldwin Marsh," 5, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library
25. Parley P. Pratt, "To the Public," Elders' Journal, Aug. 1838, 50-51
26. Pratt, Autobiography, 183-84; John Taylor, "History of John Taylor by Himself," 15, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library; see also Givens and Grow, Parley P. Pratt, 102
27. "History of Thomas Baldwin Marsh," 5, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library; Woodruff, Journal, June 25, 1857; see also Historical Introduction to Revelation, July 23, 1837 [DC 112], in *JSP*, D5:410-12
28. See Cook, "I Have Sinned against Heaven," 392-93; and Historical Introduction to Revelation, July 23, 1837 [DC 112], in *JSP*, D5:410-11
29. 教義と聖約 112:1 - 2 (Revelation, Feb. 23, 1837, at josephsmithpapers.org)参照
30. Historical Introduction to Revelation, July 23, 1837 [DC 112], in *JSP*, D5:410-14.
31. テーマ：大管長会, 十二使徒定員会
32. 教義と聖約 112 章 (Revelation, July 23, 1837, at josephsmithpapers.org); see also Darowski, "The Faith and Fall of Thomas Marsh," 54-60

第 25 章：西部への移動

1. Kimball, "History," 62-63; see also *Illustrated Itinerary of the County of Lancaster*, 159
テーマ：癒し
2. Kimball, "History," 63-64
3. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 14, [8]; Snow, *Biography and Family Record of Lorenzo Snow*, 20-21; "Cowdery, Oliver," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; see also Huntington, *Diary and Reminiscences*, 28-29
テーマ：教会内での対立
4. Historical Introduction to Minutes, Sept. 3, 1837, in *JSP*, D5:420-22; Mary Fielding to Mercy Fielding Thompson, circa Aug. 30, 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library; Huntington, *Diary and Reminiscences*, 28-29; Esplin, "Emergence of Brigham Young," 295-96
5. Minutes, Sept. 3, 1837, in *JSP*, D5:422-23 テーマ：教会員の同意
6. Mary Fielding to Mercy Fielding Thompson, Oct. 7, 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library; Minutes, Nov. 7, 1837, in *JSP*, D5:468-72; Minutes, Nov. 10, 1837, in *JSP*, D5:472-76; see also Minutes, Sept. 17, 1837-B, in *JSP*, D5:444-46
テーマ：ファーウェスト
7. Historical Introduction to Revelation, Sept. 4, 1837, in *JSP*, D5:431-33; Thomas B. Marsh to Wilford Woodruff, *Elders' Journal*, July 1838, 36-38; Minute Book 2, Apr. 7, 1837
8. Williams, "Frederick Granger Williams of the First Presidency of the Church," 256
9. Oliver Cowdery to Lyman Cowdery, Jan. 13, 1834, in Cowdery, *Letterbook*, 19; Romig, *Eighth Witness*, 314-15
10. Minutes, Sept. 17, 1837-A, in *JSP*, D5:442-43; Joseph Smith to John Corrill and the Church in Missouri, Sept. 4, 1837, in *JSP*, D5:426-31
11. ハイラム・スミス家の聖書 テーマ：ハイラム・スミス
12. Historical Introduction to Letter from Thomas B. Marsh, Feb. 15, 1838, in *JSP*, D6:12; Jenson, "Plural Marriage," *Historical Record*, May 1887, 6:232-33; "Report of Elders Orson Pratt and Joseph F. Smith," *LDS Millennium Star*, Dec. 16, 1878, 40:788 テーマ：ジョセフ・スミスと多妻結婚
13. Lorenzo Snow, Affidavit, Aug. 28, 1869, Joseph F. Smith, Affidavits about Celestial Marriage, Church History Library; Tullidge, *Women of Mormondom*, 368
14. Benjamin F. Johnson to George F. Gibbs, circa Apr. -circa Oct. 1903, Benjamin Franklin Johnson, Papers, Church History Library; Mosiah Hancock, Narrative, in Levi Hancock, *Autobiography*, circa 1896, 63; Historical Introduction to Minutes and Blessings, Feb. 28-Mar. 1, 1835, in *JSP*, D4:255; Minutes and Blessings, Feb. 28-Mar. 1, 1835, in *JSP*, D4:259; Young, *History of the Organization of the Seventies*, 4 テーマ：フアンジャー
15. Mosiah Hancock, Narrative, in Levi Hancock, *Autobiography*, circa 1896, 63; Historical Introduction to Letter from Thomas B. Marsh, Feb. 15, 1838, in *JSP*, D6:12; see also Andrew Jenson, *Research Notes*, Andrew Jenson Collection, Church History Library; Benjamin F. Johnson to George F. Gibbs, circa Apr. -circa Oct. 1903, Benjamin Franklin Johnson, Papers, Church History Library; Eliza Jane Churchill Webb to Mary Bond, Apr. 24, 1876; Eliza Jane Churchill Webb to Mary H. Bond, May 4, 1876, Biographical Folder Collection (labeled Myron H. Bond), Community of Christ Library-Archives; and Bradley, "Relationship of Joseph Smith and Fanny Alger," 14-58
16. Mosiah Hancock, Narrative, in Levi Hancock, *Autobiography*, circa 1896, 63
17. Mosiah Hancock, Narrative, in Levi Hancock, *Autobiography*, circa 1896, 63; Eliza Churchill Webb to Myron H. Bond, May, 4, 1876, Biographical Folder Collection (labeled Myron H. Bond), Community of Christ Library-Archives; Historical Introduction to Letter from Thomas B. Marsh, Feb. 15, 1838, in *JSP*, D6:13; Tullidge, *Women of Mormondom*, 368
18. Benjamin F. Johnson to George F. Gibbs, circa Apr. -circa Oct. 1903, Benjamin Franklin Johnson, Papers, Church History Library
19. Hales, *Joseph Smith's Polygamy*, 1:123

20. Historical Introduction to Letter from Thomas B. Marsh, Feb. 15, 1838, in *JSP*, D6:13; see also Minutes, Apr. 12, 1838, in *JSP*, D6:91; and Oliver Cowdery to Warren Cowdery, Jan. 21, 1838, in Cowdery, Letterbook, 80–83
21. Benjamin F. Johnson to George F. Gibbs, circa Apr. –circa Oct. 1903, Benjamin Franklin Johnson, Papers, Church History Library. This letter quotes what Fanny Alger said to others about her relationship with Joseph Smith.
22. Historical Introduction to Travel Account and Questions, Nov. 1837, in *JSP*, D5:478–80
23. Woodruff, Journal, Aug. 18, 1837; Historical Introduction to Letter from Wilford Woodruff and Jonathan H. Hale, Sept. 18, 1837, in *JSP*, D5:447–48; イザヤ 11:11
24. Woodruff, Leaves from My Journal, 34
25. Woodruff, Journal, July 12 and Aug. 20, 1837; Woodruff, Leaves from My Journal, 30–31; Historical Introduction to Letter from Wilford Woodruff and Jonathan H. Hale, Sept. 18, 1837, in *JSP*, D5:447–48
26. Woodruff, Journal, Aug. 8–18, 1837
27. Woodruff, Journal, Aug. 20, 1837
28. Woodruff, Leaves from My Journal, 33; Woodruff, Journal, Aug. 20–25, 1837
29. Woodruff, Journal, Aug. 27, 1837; Hale, Journal, Aug. 27, 1837
30. Woodruff, Journal, Aug. 27 and Sept. 3, 1837; Hale, Journal, Aug. 27 and Sept. 3, 1837
31. Woodruff, Leaves from My Journal, 33–34; Woodruff, Journal, Sept. 3–4, 1837
32. See Romig, Eighth Witness, 305–8
33. Hyrum Smith Family Bible: Travel Account and Questions, Nov. 1837, in *JSP*, D5:480–81; Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 775
34. Minutes, Nov. 6, 1837, in *JSP*, D5:464–68; Minutes, Nov. 7, 1837, in *JSP*, D5:468–72
35. Samuel Smith to Hyrum Smith, Oct. 13, 1837, Hyrum Smith, Papers, Church History Library; Obituary for Jerusha T. Smith, Elders' Journal, Oct. 1837, 16; Lucy Mack Smith, History, 1845, 34; Lucy Mack Smith, History, 1844–45, miscellany, [11]
36. Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 775
37. Oliver Cowdery to Warren Cowdery, Jan. 21, 1838, in Cowdery, Letterbook, 81
38. Oliver Cowdery to Warren Cowdery, Jan. 21, 1838, in Cowdery, Letterbook, 81
39. Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 779; Samuel Smith to Hyrum Smith, Oct. 13, 1837, Hyrum Smith, Papers, Church History Library; Obituary for Jerusha T. Smith, Elders' Journal, Oct. 1837, 16; Lucy Mack Smith, History, 1845, 34; Lucy Mack Smith, History, 1844–45, miscellany, [11]
40. Smith, Life of Joseph F. Smith, 41–42, 120
41. Mary Fielding to Mercy Fielding, circa June 1837; Mary Fielding to Mercy Fielding Thompson, July 8, 1837; Mary Fielding to Mercy Fielding Thompson and Robert Thompson, Oct. 7, 1837, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library
42. Hyrum Smith Family Bible: Geauga County, Ohio, Probate Court, Marriage Records, 1806–1920, volume C, 262, microfilm 873,461, U. S. and Canada Record Collection, Family History Library; Smith, Life of Joseph F. Smith, 120
43. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19–24, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library; Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 779; Thomas B. Marsh to Wilford Woodruff, in Elders' Journal, July 1838, 36–37; John Smith and Clarissa Smith to George A. Smith, Jan. 1, 1838, George Albert Smith, Papers, Church History Library; Hepzibah Richards to Willard Richards, Jan. 18, 1838, Willard Richards, Journals and Papers, Church History Library
44. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19–24, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library; Historical Introduction to Revelation, Jan. 12, 1838–A, in *JSP*, D5:495–96
45. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19–24, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library. 手紙の原本に「モルモン書と聖約」とあるのは、教義と聖約を指している
46. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19–24, 1838; Marinda Johnson Hyde to Orson Hyde, Jan. 29, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library; Joseph Smith History, 1838–56, volume B-1, 779; Thomas B. Marsh to Wilford Woodruff, in Elders' Journal, July 1838, 36–37; John Smith and Clarissa Smith to George A. Smith, Jan. 1, 1838, George Albert Smith, Papers, Church History Library;

- Hepzibah Richards to Willard Richards, Jan. 18, 1838, Willard Richards, Journals and Papers, Church History Library; Historical Introduction to Revelation, Jan. 12, 1838-A, in *JSP*, D5:495-96
47. Warren Parrish to "The Editor of the Painesville Republican," Painesville Republican, Feb. 15, 1838, [3]; Warren Parrish to Asahel Woodruff, Sept. 9, 1838, Wilford Woodruff, Collection, Church History Library
 48. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19-24, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library. The original letter has "there is some of them, that I love, and have a great feeling, and pity for them."
 49. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Jan. 19-24, 1838, Heber C. Kimball, Collection, Church History Library; see also 教義と聖約 101:5 (Revelation, Dec. 16-17, 1833, at josephsmithpapers.org)
 50. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 780; "History of Luke Johnson," *LDS Millennial Star*, Jan. 7, 1865, 27:5
 51. Revelation, Jan. 12, 1838-C, in *JSP*, D5:501-2
 52. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 780
 53. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 780; Historical Introduction to Revelation, Jan. 12, 1838-C, in *JSP*, D5:500-501

第26章：聖なる奉獻された地

1. Oliver Cowdery to Joseph Smith, Jan. 21, 1838, in *JSP*, D5:502-5; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 4, 1838, in Cowdery, Letterbook, 83; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 780
2. Oliver Cowdery to Joseph Smith, Jan. 21, 1838, in *JSP*, D5:502-5; Minute Book 2, Jan. 20, 1838
3. Minute Book 2, Jan. 20 and 26, 1838; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 4, 1838, in Cowdery, Letterbook, 83-86; Phineas H. Young to Brigham Young and Willard Richards, Dec. 14, 1842, Brigham Young Office Files, Church History Library; see also 教義と聖約 42:30-36 (Revelation, Feb. 9, 1831, at josephsmithpapers.org); 教義と聖約 58:34 - 36 (Revelation, Aug. 1, 1831, at josephsmithpapers.org); and 教義と聖約 105:28 - 29 (Revelation, June 22, 1834, at josephsmithpapers.org)
4. Minute Book 2, Jan. 26 and Feb. 5-9, 10, 1838; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 4, 1838; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 24, 1838, in Cowdery, Letterbook, 85, 87-90 テーマ：高等評議会, 教会宗紀
5. Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 4, 1838, in Cowdery, Letterbook, 85-87
6. Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 24, 1838, in Cowdery, Letterbook, 88
7. Oliver Cowdery to Warren Cowdery, Jan. 21, 1838; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 4, 1838; Oliver Cowdery to Warren Cowdery and Lyman Cowdery, Feb. 24, 1838, in Cowdery, Letterbook, 80-96; see also Bushman, "Oliver's Joseph," 1-13 テーマ：オリバー・カウドリ
8. Thompson, Journal of Heber C. Kimball, 65; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 154
9. See Pickup, Pick and Flower of England, 61-63
10. Whitney, Life of Heber C. Kimball, 154-57
11. Joseph Smith, Journal, Mar. -Sept. 1838, 16, in *JSP*, J1:237; Joseph Smith to the Presidency in Kirtland, Ohio, Mar. 29, 1838, in *JSP*, D6:57-59
12. Joseph Smith to the Presidency in Kirtland, Ohio, Mar. 29, 1838, in *JSP*, D6:57-59
13. Minutes, Apr. 12, 1838, in *JSP*, D6:83-94; Synopsis of Oliver Cowdery Trial, Apr. 12, 1838, in *JSP*, J1:251-55

14. Minutes, Apr. 12, 1838, in *JSP*, D6:87-89; Synopsis of Oliver Cowdery Trial, Apr. 12, 1838, in *JSP*, J1:254
15. Minutes, Apr. 12, 1838, in *JSP*, D6:91
16. Minutes, Apr. 12, 1838, in *JSP*, D6:89-94; Synopsis of Oliver Cowdery Trial, Apr. 12, 1838, in *JSP*, J1:254-55 テーマ：教会宗紀, オリバー・カウドリ
17. Thompson, Journal of Heber C. Kimball, 76; Kimball, On the Potter's Wheel, 23
18. Whitney, Life of Heber C. Kimball, 157; Richards, Journal, Mar. 22, 1838
19. Allen and others, Men with a Mission, 17-19, 46-47 テーマ：初期の宣教師, イギリス
20. Allen and others, Men with a Mission, 9, 17, 19, 46-47; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 174, 191
21. Richards, Journal, Mar. 22, 1838; Thompson, Journal of Heber C. Kimball, 21; Kimball, "Journal and Record," 64; Allen and others, Men with a Mission, 61-62; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 157.
22. Kimball, Journal of Heber C. Kimball, 32
23. Fielding, Journal, 59-63; Allen and others, Men with a Mission, 52-53
24. 教義と聖約 115 章 (Revelation, Apr. 26, 1838, at josephsmithpapers.org) テーマ：教会の名称, ファーウエスト
25. Joseph Smith, Journal, Oct. 181, 1838, in *JSP*, J1:270-71
26. Walker, "Mormon Land Rights in Caldwell and Daviess Counties," 28-30
27. LeSueur, "Missouri's Failed Compromise," 134-35
28. Joseph Smith, Journal, May 18-June 1, 1838, in *JSP*, J1:270-71; "Part 1: 15 February-28 June 1838," in *JSP*, D6:163
29. Joseph Smith, Journal, May 18-June 1, 1838, in *JSP*, J1:271; 教義と聖約 107 : 53 (Revelation, circa Apr. 1835, at josephsmithpapers.org); Olmstead, "Far West and Adam-ondi-Ahman," 237-38; 教義と聖約 27 : 11 (Revelation, circa Aug. 1835, at josephsmithpapers.org); Historical Introduction to Revelation, circa Aug. 1835, in *JSP*, D4:408-9
30. Joseph Smith, Journal, May 18-June 1, 1838, in *JSP*, J1:271; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 798 テーマ：アダム・オンダイ・アーマン
31. Minutes, Feb. 28, 1838, in *JSP*, D3:162-67

第 27 章：自らの自由を宣言し

1. Woodruff, Journal, Apr. 26-June 12, 1838
2. Woodruff, Journal, June 12 and July 1, 1838
3. Woodruff, Journal, Apr. 30, 1838
4. Woodruff, Journal, Apr. 1, 1838
5. Woodruff, Journal, Apr. 1, 1838
6. Woodruff, Journal, Apr. 3, 1838
7. "History of John E. Page," *LDS Millennial Star*, Feb. 18, 1865, 27:103
8. Kirtland Camp, Journal, Mar. 6, 10, and 13, 1838; Baugh, "Kirtland Camp, 1838," 58-61
テーマ：イスラエルの集合, 七十人定員会
9. Aug. 1838, 60. "Celebration of the 4th of July," Elders' Journal, Aug. 1838, 60
10. Synopsis of David Whitmer and Lyman Johnson Trials, Apr. 13, 1838, in *JSP*, J1:256-57
11. Joseph Smith, Journal, May 11, 1838, in *JSP*, J1:268; "History of William E. Mc. Lellin," 2-3, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library
12. Corrill, Brief History, 30, in *JSP*, H2:165-66; Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 20-25, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; *JSP*, H2:97, note 295; see also マタイ 5 : 13 テーマ：教会内での対立
13. Corrill, Brief History, 30, in *JSP*, H2:165-66; Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 22-23, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; *JSP*, H2:97, note 295
14. *JSP*, D6:170, note 6; 「19 世紀の末日聖徒の平和と暴力」福音のテーマ, topics.lds.org テーマ：ダナイト団

15. Corrill, Brief History, 30-31, in *JSP*, H2:166-67; Sampson Avard and Others to Oliver Cowdery and Others, circa June 17, 1838; Constitution of the Society of the Daughter of Zion, circa Early July 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; Joseph Smith, Journal, July 27, 1838; Editorial Note, in *JSP*, J1:274-75, 293; "Part 2: 8 July-29 October 1838," in *JSP*, D6:169-70
16. "Celebration of the 4th of July," Elders' Journal, Aug. 1838, 60; Joseph Smith, Journal, July 4, 1838, in *JSP*, J1:275-76
17. Oration Delivered by Mr. S. Rigdon on the 4th of July, 1838, 3-12 テーマ：シドニー・リグドン
18. "Celebration of the 4th of July," Elders' Journal, Aug. 1838, 60; Pratt, Autobiography, 190; Ebenezer Robinson, "Items of Personal History of the Editor," Return, Oct. 1889, 149
19. Eunice Ross Kinney to Wingfield Watson, Sept. 1891, 2-3, typescript, Wingfield Watson, Correspondence, Church History Library
20. 1840 U. S. Census, Van Buren, Wayne Co. , MI, 255[B]; 1850 U. S. Census, Burlington, Racine Co. , WI, 152[B]; 1870 U. S. Census, Suamico, Brown Co. , WI, 422[A]. Full biographical research for Eunice Ross Franklin (Kinney) and Charles O. Franklin in possession of editors テーマ：エライジャ・エイブル
21. Elder's Certificate for Elijah Able, Mar. 31, 1836, in Kirtland Elders' Certificates, 61; Nuttall, Diary, May 31, 1879, 29; Reeve, Religion of a Different Color, 196-97
22. Eunice Ross Kinney to Wingfield Watson, Sept. 1891, 1-2, typescript, Wingfield Watson, Correspondence, Church History Library
23. Eunice Ross Kinney to Wingfield Watson, Sept. 1891, 2-3, typescript, Wingfield Watson, Correspondence, Church History Library; 1 ペテロ 4 : 12
24. Eunice Ross Kinney to Wingfield Watson, Sept. 1891, 3, typescript, Wingfield Watson, Correspondence, Church History Library
25. See Kerber, "Abolitionists and Amalgamators," 28-30 テーマ：奴隷制度とその廃止
26. Eunice Ross Kinney to Wingfield Watson, Sept. 1891, 3-4, typescript, Wingfield Watson, Correspondence, Church History Library
27. Selections from Elders' Journal, Aug. 1838, in *JSP*, D6:216-17; Joseph Smith, Journal, Aug. 1-3, 1838, in *JSP*, J1:296; Oration Delivered by Mr. S. Rigdon on the 4th of July, 1838 (Far West, MO: Journal Office, 1838)
28. 教義と聖約 115 : 13 (Revelation, Apr. 26, 1838, at josephsmithpapers.org)
29. Historical Introduction to Revelation, July 8, 1838-C, in *JSP*, D6:184-87
30. Minute Book 2, Dec. 6-7, 1837; Harper, "Tithing of My People."
31. Joseph Smith, Journal, July 6, 1838, in *JSP*, J1:278-80; Kimball, "History," 84
32. See "Organizational Charts," in *JSP*, D6:672-74
33. 教義と聖約 117 : 5 - 6, 12 - 15 (Revelation, July 8, 1838-E, at josephsmithpapers.org) テーマ：ジョセフ・スミスの啓示
34. 教義と聖約 119 章 (Revelation, July 8, 1838-C, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith, Journal, July 8, 1838, in *JSP*, J1:288 テーマ：什分の一, 奉獻と管理の職
35. 教義と聖約 118 章 (Revelation, July 8, 1838-A, at josephsmithpapers.org); see also Tait and Orton, "Take Special Care of Your Family," 242-49
36. 教義と聖約 118 : 6 (Revelation, July 8, 1838-A, at josephsmithpapers.org); Minutes, Elders' Journal, Aug. 1838, 61; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 803 テーマ：十二使徒定員会
37. Woodruff, Journal, July 14, 1838
38. Woodruff, Journal, July 16, 1838
39. Woodruff, Journal, July 20, 1838
40. Woodruff, Journal, July 30, 1838
41. Woodruff, Journal, Aug. 9, 1838; Woodruff, Leaves from My Journal, 51

第 28 章：十分に耐え

1. Butler, "Short History," 17-18; Hartley, *My Best for the Kingdom*, 39; Durham, "Election Day Battle at Gallatin," 39-40
2. Butler, "Short History," 17; Hartley, *My Best for the Kingdom*, 48-50
3. Butler, "Short History," 15-16; Hartley, *My Best for the Kingdom*, 39; Durham, "Election Day Battle at Gallatin," 39-40
4. Butler, "Short Account of an Affray," [1]; Rigdon, *Appeal to the American People*, 17-18
5. Britton, *Early Days on Grand River*, 6-7; Butler, "Short History," 18; Corrill, *Brief History*, 28, in *JSP*, H2:162-63
6. Historian's Office, *Journal History of the Church*, Aug. 6, 1838; Butler, "Short History," 18; Butler, "Short Account of an Affray," [1]
7. John D. Lee and Levi Steward, Statement, circa 1845, in *Joseph Smith History Documents, 1839-60*, Church History Library; Butler, "Short Account of an Affray," [1]; see also Greene, *Facts Relative to the Expulsion*, 18
8. Butler, "Short History," 18; Butler, "Short Account of an Affray," [1]; Hartley, *My Best for the Kingdom*, 11
9. Butler, "Short History," 18; Butler, "Short Account of an Affray," [1]
10. Butler, "Short Account of an Affray," [1]-[4]
11. Butler, "Short History," 19
12. Butler, "Short Account of an Affray," [4]; Butler, "Short History," 18. The original source has "They then said they must take me prisoner" and "I told them I was a law abiding man, but I did not intend to be tried by a mob テーマ：1838年—ミズーリ・モルモン戦争
13. Butler, "Short History," 20
14. Affidavit, Sept. 5, 1838, in *JSP*, D6:223-25; Joseph Smith, *Journal*, Aug. 7-9 and 10, 1838, in *JSP*, J1:298-301; see also *JSP*, J1:300, note 225 テーマ：ダナイト団
15. Joseph Smith, *Journal*, Aug. 11, 13, and 16-18, 1838, in *JSP*, J1:302-4; *JSP*, J1:303, note 234; 304, notes 237-38; see also "Public Meeting," *Missouri Republican*, Sept. 8, 1838, [1], "for the country" edition
16. Historical Introduction to Discourse, Aug. 12, 1838, in *JSP*, D6:213; "The Mormons in Carroll County," *Missouri Republican*, Aug. 18, 1838, [2]; "Public Meeting," *Missouri Republican*, Sept. 3, 1838, [2]; Corrill, *Brief History*, 35, in *JSP*, H2:173-74; *JSP*, D6:534, note 326 テーマ：自警主義
17. Recognizance, Sept. 7, 1838, in *JSP*, D6:226-28; "The Mormon Difficulties," *Niles' National Register*, Oct. 13, 1838, 103; Joseph Smith, *Journal*, Sept. 2, 4, and 7, 1838, in *JSP*, J1:312-13, 314, 316-17
18. Joseph Smith to Stephen Post, Sept. 17, 1838, in *JSP*, D6:244
19. Woodruff, *Journal*, Apr. 31, 1838
20. Woodruff, *Journal*, Apr. 11, 1838
21. "On Leaving Home," in Phebe Carter Woodruff, *Autograph Book*, Church History Library
22. Woodruff, *Journal*, Sept. 11 and 25, 1838. The word "me" has been added for clarity.
23. Woodruff, *Journal*, Sept. 11 and 15; Sept. 25-Oct. 1, 1838
24. Woodruff, *Journal*, Apr. -25, 1838
25. Woodruff, *Journal*, Sept. 11, 22-25, 1838; Oct. 3-4, 1838; see also ルツ 1:15 - 16
26. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 830; Rockwood, *Journal*, Oct. 1838-Jan. 1839, Oct. 29, 1838; "De Witt, Missouri," Geographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
27. History of Carroll County, Missouri, 249-50; Murdock, *Journal*, 95; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:365
28. History of Carroll County, Missouri, 250-52; Joseph Dickson to Lilburn W. Boggs, Sept. 6, 1838; David Atchison to Lilburn W. Boggs, Sept. 17, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 827-28; Citizens of De Witt, MO, to Lilburn W. Boggs, Sept. 22, 1838, copy, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives

29. "Biographies of the Seventies of the Second Quorum," 208-9, in Seventies Quorum Records, Church History Library; Horace G. Whitney, "Nauvoo Brass Band," Contributor, Mar. 1880, 134; Baugh, Call to Arms, 67
30. "Biographies of the Seventies of the Second Quorum," 208-10, in Seventies Quorum Records, Church History Library; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 828, 831; Baugh, Call to Arms, 67; History of Carroll County, Missouri, 251-52; Murdock, Journal, 100-102
31. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 833-35; History of Carroll County, Missouri, 253; Sidney Rigdon, Testimony, July 1, 1843, [3], Nauvoo, IL, Records, Church History Library
32. Switzler, Switzler's Illustrated History of Missouri, [246]
33. Joseph Smith, Bill of Damages, June 4, 1839, in *JSP*, D6:496-97; Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 834-35; see also Switzler, Switzler's Illustrated History of Missouri, [246]; History of Carroll County, Missouri, 255
34. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 833-36; Joseph Smith, Bill of Damages, June 4, 1839, in *JSP*, D6:497-98
35. "Biographies of the Seventies of the Second Quorum," 209, in Seventies Quorum Records, Church History Library
36. Joseph Smith History, 1838-56, volume B-1, 836-37; Rockwood, Journal, Oct. 1838-Jan. 1839, Oct. 14, 15, and Nov. 11, 1838
37. Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 78-80, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA テーマ：アメリカの法的・政治的制度
38. Corroll, Brief History, 36, in *JSP*, H2:176 テーマ：1838年—ミズーリ・モルモン戦争

第 29 章：神と自由を

1. Memorial to the U. S. Senate and House of Representatives, circa Oct. 30, 1839-Jan. 27, 1840, in *JSP*, 7:159-60
2. Rigdon, Appeal to the American People, 41-42; Document Containing the Correspondence, 99, 124-26; Baugh, Call to Arms, 84-85
3. Memorial to the U. S. Senate and House of Representatives, circa Oct. 30, 1839-Jan. 27, 1840, 22, in *JSP*, D7:162; Rigdon, Appeal to the American People, 43; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Rigdon, Appeal to the American People, 43; see also Baugh, Call to Arms, 85, 95, note 30
4. Rigdon, Appeal to the American People, 43
5. Rigdon, Appeal to the American People, 41-42; Document Containing the Correspondence, 99, 124-26; Baugh, Call to Arms, 84-86
6. Historical Introduction to Agreement with Jacob Stollings, Apr. 12, 1839, in *JSP*, D6:417; Sampson Averd, Testimony, Nov. 12, 1838, 7, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; Corroll, Brief History, 37, in *JSP*, H2:177; Huntington, Diary and Reminiscences, 22-23
7. Corroll, Brief History, 37, in *JSP*, H2:177; Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 85, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; Philip Covington, Statement, Sept. 2, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; Huntington, Diary and Reminiscences, 22; J. H. McGee, Porter Yale, and Patrick Lynch, Testimonies, in Document Containing the Correspondence, 141-43, 145 テーマ：1838年—ミズーリ・モルモン戦争
8. Baugh, Call to Arms, 87; see also Huntington, Diary and Reminiscences, 22
9. George A. Smith, in Journal of Discourses, Apr. 6, 1856, 3:283-84
10. "History of Brigham Young," *LDS Millennium Star*, June 25, 1864, 26:406
11. See Thomas B. Marsh and Orson Hyde to Lewis Marsh and Ann Marsh Abbott, Oct. 25-30, 1838, in Joseph Smith Letterbook 2, 18-19; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:268; Thomas B. Marsh, in Journal of Discourses, Sept. 6, 1857, 5:206-7
12. Corroll, Brief History, 38, in *JSP*, H2:178; Baugh, Call to Arms, 99-102

13. Thomas B. Marsh and Orson Hyde to Lewis Marsh and Ann Marsh Abbott, Oct. 25-30, 1838, in Joseph Smith Letterbook 2, 18-19
14. See Thomas B. Marsh and Orson Hyde, Affidavit, Oct. 24, 1838, copy, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; and Darowski, "The Faith and Fall of Thomas Marsh," 54-60 テーマ: トーマス・B・マーシュ
15. Hales, Windows, 34-35
16. Lilburn W. Boggs to John B. Clark, Oct. 27, 1838, copy, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City
17. Hendricks, Reminiscences, 19
18. Hendricks, Reminiscences, 19
19. Hales, Windows, 35, 38; Pratt, History of the Late Persecution, 33; Thomas B. Marsh and Orson Hyde, Affidavits, Oct. 24, 1838, copy, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:440
20. Pratt, Autobiography, 194-95; "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:440
21. "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:440; Corrill, Brief History, 39, in *JSP*, H2:180; Holbrook, Reminiscences, 48
22. Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 96-97, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; John Lockhart, Testimony, in Senate Document 189, 35-36
23. Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 96-97, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; Baugh, Call to Arms, 47-48
24. "The Mormons," *Missouri Argus*, Nov. 8, 1838, [2]; "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1838, 26:441
25. Holbrook, Reminiscences, 48; "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:441
26. "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:440-41; Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, 98, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; Corrill, Brief History, 39, in *JSP*, H2:180; Pratt, History of the Late Persecution, 35
27. Pratt, History of the Late Persecution, 35-36; "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1864, 26:441; see also *JSP*, H2:246, notes 163-64
28. Hendricks, Reminiscences, 20
29. "History of Brigham Young," *LDS Millennial Star*, July 9, 1884, 26:441; see also Samuel Bogart to David R. Atchison, Oct. 23, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City テーマ: 1838年—ミズーリ・モルモン戦争
30. Samuel Bogart to David R. Atchison, Oct. 23, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; Pratt, History of the Late Persecution, 37 テーマ: 自警主義
31. Sashel Woods and Joseph Dickson to "Sir," Oct. 24, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City
32. Thomas B. Marsh, Affidavit, Oct. 24, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City
33. Orson Hyde, Affidavit, Oct. 24, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City
34. Lilburn W. Boggs to John B. Clark, Oct. 27, 1838, copy, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City テーマ: 撲滅令

第30章: 天使のごとく戦い

1. See Baugh, "Joseph Young's Affidavit of the Massacre at Haun's Mill," 192; Greene, Facts Relative to the Expulsion, 22
2. Tullidge, Women of Mormondom, 121; Smith, Notebook, 9-10; Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 166; Baugh, Call to Arms, 118. The account in Tullidge, Women of Mormondom, quotes a first-person statement by Amanda Barnes Smith

3. Smith, Notebook, 9-10; "Amanda Smith," *Woman's Exponent*, Apr. 1, 1881, 9:165; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:145, in *JSP*, H2:260; Kirtland Camp, Journal, Oct. 24, 1838
4. Smith, Notebook, 10; Tullidge, *Women of Mormondom*, 121; Amanda Smith, Affidavit, May 7, 1839, in Johnson, *Mormon Redress Petitions*, 538; Isaac Leany, Statement, Apr. 20, 1839, photocopy, United States Congress, Material Relating to Mormon Expulsion from Missouri, 1839-43, Church History Library; Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 166 テーマ：ハウنزミルの大虐殺
5. Smith, Notebook, 9; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:145, in *JSP*, H2:260; Baugh, *Call to Arms*, 116-17
6. "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:145, in *JSP*, H2:261; Tullidge, *Women of Mormondom*, 121-22; Smith, Notebook, 10; "Amanda Smith," *Woman's Exponent*, Apr. 1 and 15, 1881, 9:165, 173; Amanda Smith, Affidavit, May 7, 1839, in Johnson, *Mormon Redress Petitions*, 538
7. Lewis, *Autobiography*, 12; Smith, Notebook, 10-11; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:146, in *JSP*, H2:261
8. Smith, Notebook, 11; Tullidge, *Women of Mormondom*, 121-22, 126; "Amanda Smith," *Woman's Exponent*, Apr. 15 and May 1, 1881, 9:173, 181; Ellis Eamut, Statement, circa 1839, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library; Baugh, *Call to Arms*, 120; Dunn, *Amanda's Journal*, 3
9. Lewis, *Autobiography*, 12-14; Ellis Eamut, Statement, circa 1839, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library; Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 166; Smith, Notebook, 12
10. "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:146, in *JSP*, H2:262; *History of Caldwell and Livingston Counties*, 147; Greene, *Facts Relative to the Expulsion*, 22; Baugh, *Call to Arms*, 120-23
11. 82; Smith, Notebook, 13; Tullidge, *Women of Mormondom*, 123
12. Smith, Notebook, 12; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 1840, 1:147, in *JSP*, H2:263; Tullidge, *Women of Mormondom*, 127
13. Tullidge, *Women of Mormondom*, 127
14. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 8, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City テーマ：1838年—ミズーリ・モルモン戦争
15. Thorp, *Early Days in the West*, 88; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 8-9, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Baugh, *Call to Arms*, 137-38; Corrill, *Brief History*, 40, in *JSP*, H2:183
16. Durham, *Gospel Kingdom*, 354; Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1842, in *JSP*, J2:199-200
17. "Mary Elizabeth Rollins Lightner," *Utah Genealogical and Historical Magazine*, July 1926, 199. The original source is a first-person account from Mary Lightner and has "our two families" rather than "your two families."
18. "Mary Elizabeth Rollins Lightner," *Utah Genealogical and Historical Magazine*, July 1926, 199. Original source has "I then said that he could go, and take the child with him, if he wanted to, but I would suffer with the rest."
19. Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1842, in *JSP*, J2:200
20. Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City
21. "Lucas, Samuel D.," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
22. Ebenezer Robinson, "Items of Personal History of the Editor," *Return*, Jan. 1890, 2:206; Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City
23. James C. Owens, Testimony, Nov. 1838, [47], in State of Missouri, "Evidence" : Ebenezer Robinson, "Items of Personal History of the Editor," *Return*, Jan. 1890, 2:206; Burr Rigs, Testimony, in Document Containing the Correspondence, 135
24. Corrill, *Brief History*, 40, in *JSP*, H2:183; George Hinkle, Testimony, in Document Containing the Correspondence, 127; Pratt, *History of the Late Persecution*, 39
25. Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 166-67; Baugh, *Call to Arms*, 123

26. Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 167; Tullidge, *Women of Mormondom*, 123
27. Smith, *Notebook*, 13; Tullidge, *Women of Mormondom*, 123-24; Dunn, *Amanda's Journal*, 3-5
28. Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 167; Tullidge, *Women of Mormondom*, 123
29. Tullidge, *Women of Mormondom*, 124; Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 167; Dunn, *Amanda's Journal*, 4 テーマ:癒し
30. Tullidge, *Women of Mormondom*, 124-25 テーマ:アマンダ・バーンズ・スミス
31. Corrill, *Brief History*, 40-42, in *JSP*, H2:183-85; Baugh, *Call to Arms*, 139-40
32. Foote, *Autobiography and Journal*, Oct. 30, 1838; Albert Perry Rockwood, *Journal*, Nov. 2, 1838; Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 11, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
33. Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 9-10, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Pratt, *Autobiography*, 219-24
34. Corrill, *Brief History*, 41, in *JSP*, H2:183
35. Corrill, *Brief History*, 41-42, in *JSP*, H2:183-86; Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City; Baugh, *Call to Arms*, 140-41 テーマ:撲滅令
36. "Extract, from the Private Journal of Joseph Smith Jr.," *Times and Seasons*, Nov. 1, 1839, 1:5, in *JSP*, H1:477-79; Reed Peck to "Dear Friends," Sept. 18, 1839, Henry E. Huntington Library, San Marino, CA; Baugh, *Call to Arms*, 141
37. Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 12-13, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
38. Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 12-13, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Pratt, *History of the Late Persecution*, 40; *JSP*, H2:251, note 181; Corrill, *Brief History*, 42, in *JSP*, H2:186; "Extract, from the Private Journal of Joseph Smith Jr.," *Times and Seasons*, Nov. 1, 1840, 1:5, in *JSP*, H1:477-79

第31章: 終わりはいかにして

1. Gates, *Lydia Knight's History*, 43-46
2. Gates, *Lydia Knight's History*, 47
3. Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City; Ebenezer Robinson, "Items of Personal History of the Editor," Return, Feb. 1890, 210
4. Gentry and Compton, *Fire and Sword*, 358-60
5. Gates, *Lydia Knight's History*, 47
6. Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City
7. Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, *Mormon War Papers*, Missouri State Archives, Jefferson City; Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 11, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Brigham Young, *Testimony*, July 1, 1843, [2], Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Kimball, "History," 94
8. Gates, *Lydia Knight's History*, 48-49
9. Ebenezer Page, "For Zion's Reveille," *Zion's Reveille*, Apr. 15, 1847, 55
10. Kimball, "History," [88]
11. See Whitney, *Life of Heber C. Kimball*, 83
12. Kimball, "History," [88]
13. Gates, *Lydia Knight's History*, 48; Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 13, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
14. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, 3, in *JSP*, D6:362; Hyrum Smith, *Testimony*, July 1, 1843, 13, 24; Brigham Young, *Testimony*,

- July 1, 1843, [2], Nauvoo, IL, Records, Church History Library; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:271-72 テーマ: 1838 年—ミズーリ・モルモン戦争
15. See "Mormonism," United States' Telegraph, Aug. 21, 1833, [2]; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 13, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; and Samuel D. Lucas to Lilburn W. Boggs, Nov. 2, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City
 16. Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 20-21, 23, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 13, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
 17. Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 24, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; "History of Lyman Wight," *LDS Millennial Star*, July 22, 1865, 29:457
 18. Lyman Wight, Journal, in History of the Reorganized Church, 2:260; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:271; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 13-14, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Eliza R. Snow to Isaac Streater, Feb. 22, 1839, photocopy, Church History Library; Alanson Ripley, Letter to the Editor, *Times and Seasons*, Jan. 1840, 1:37; see also Baugh, Call to Arms, 150-51
 19. Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 24, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
 20. History of Caldwell and Livingston Counties, 137; Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 24, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, July 1840, 1:130-31, in *JSP*, H2:258
 21. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 14, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; History of Caldwell and Livingston Counties, 137; Rigdon, Appeal to the American People, 51
 22. History of Caldwell and Livingston Counties, 137; see also Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1842, in *JSP*, J2:198; and Rigdon, "Lecture," 59-60
 23. Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1842, in *JSP*, J2:198
 24. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 14-15, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Joseph Smith and Others to Edward Partridge and the Church, circa Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:395; 教義と聖約 122 : 6; Joseph Smith, Bill of Damages, June 4, 1839, [6], in *JSP*, D6:502
 25. Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1842, in *JSP*, J2:198; Joseph Smith, Bill of Damages, June 4, 1839, [6], in *JSP*, D6:502; see also Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 26, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
 26. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 15, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 16, [3]
 27. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 16, [3]-[4]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 280-81 テーマ: ルーシー・マック・スミス
 28. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 15-16, 18, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Parley P. Pratt to Willard Richards, Nov. 7, 1853, Deseret News, Nov. 12, 1853, [3]
 29. Parley P. Pratt to Willard Richards, Nov. 7, 1853, Deseret News, Nov. 12, 1853, [3]; Pratt, Autobiography, 228-30
 30. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 18, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; see also "King, Austin Augustus," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ: アメリカの法的・政治的制度
 31. Transcript of Proceedings, Richmond, MO, Nov. 1838, State of Missouri v. Joseph Smith and Others for Treason and Other Crimes, in State of Missouri, "Evidence" ; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:272-73; Madsen, "Joseph Smith and the Missouri Court of Inquiry," 93-136; *JSP*, H2:167, note 140
 32. Document Containing the Correspondence, 90; Gentry and Compton, Fire and Sword, 240, 408-9; Rigdon, Appeal to the American People, 66
 33. Sampson Avard, Testimony, Nov. 1838, [2]-[23], State of Missouri v. Joseph Smith and Others for Treason and Other Crimes, in State of Missouri, "Evidence" ; Document Containing the Correspondence, 97, 99
 34. Pratt, Autobiography, 230; Parley P. Pratt, Testimony, July 1, 1843, 8, Nauvoo, IL, Records, Church History Library

35. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 18–19, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; LeSueur, "High Treason and Murder," 7–13; Court Documents for State of Missouri v. Joseph Smith and Others for Treason and Other Crimes, in State of Missouri, "Evidence" ; Document Containing the Correspondence, 97–151
36. Pratt, History of the Late Persecution, 55; see also Document Containing the Correspondence, 150; and State of Missouri, "Evidence," [124]–[25]
37. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 21, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Joseph Smith to Emma Smith, Dec. 1, 1838, in *JSP*, D6:293–94; Littlefield, Reminiscences of Latter-day Saints, 79–80; "Jail, Liberty, Missouri," Geographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
38. Littlefield, Reminiscences of Latter-day Saints, 80 テーマ：リパティアーの監獄

第 32 章：地獄、われに迫るとも

1. Joseph Smith History, 1838–56, volume C-1, 856–57; Greene, Facts Relative to the Expulsion, 13–14; "History, of the Persecution," *Times and Seasons*, Sept. 1840, 1:161–62, in *JSP*, H2:272–73
2. John B. Clark to Lilburn W. Boggs, Nov. 10, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City; see also Esplin, "Emergence of Brigham Young," 348
3. "Speech of General Clarke," Nov. 6, 1838, in Joseph Smith Letterbook 2, [i]–1; Greene, Facts Relative to the Expulsion, 26–27; see also John B. Clark, Report to Lilburn W. Boggs, Jefferson City, MO, Nov. 29, 1838, Mormon War Papers, Missouri State Archives, Jefferson City. The earliest copies of John B. Clark's discourse have "Never again organize yourselves with bishops, presidents, etc."
4. Smith, Notebook, 14–15; "Amanda Smith," *Woman's Exponent*, May 15, 1881, 9:189
5. Tullidge, Women of Mormondom, 129; "Amanda Smith," *Woman's Exponent*, May 15, 1881, 9:189
6. See Hartley, "Saints' Forced Exodus from Missouri," 347–90
7. Woodruff, Journal, Oct. 1, 27, and 31, 1838; Historical Department, Journal History of the Church, Oct. 9, 1838
8. Woodruff, Journal, Nov. 3, 7, 9, and 16, 1838
9. Woodruff, Journal, Nov. 23–30, 1838; Historical Department, Journal History of the Church, Oct. 9, 1838
10. Woodruff, Journal, Dec. 1–2, 1838; Historical Department, Journal History of the Church, Oct. 9, 1838
11. Historical Department, Journal History of the Church, Oct. 9, 1838 テーマ：癒し
12. "Clay County, Missouri," Historical Record, Dec. 1888, 7:670; "Liberty Jail," history.lds.org; Joseph Smith to Isaac Galland, Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:380; Joseph Smith to Emma Smith, Apr. 4, 1839, in *JSP*, D6:403; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 21–22; Lyman Wight, Testimony, July 1, 1843, 30–31, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Bray, "Within the Walls of Liberty Jail," 258–59 テーマ：リパティアーの監獄
13. History of the Reorganized Church, 2:309
14. Joseph Smith to the Church in Caldwell County, MO, Dec. 16, 1838, in *JSP*, D6:294–310
15. Hyrum Smith Family Bible: History of the Reorganized Church, 2:315; Thompson, Autobiographical Sketch, 3–4
16. History of the Reorganized Church, 2:315; Thompson, Autobiographical Sketch, 2, 4
17. "Recollections of the Prophet Joseph Smith," *Juvenile Instructor*, July 1, 1892, 27:398
18. Thompson, Autobiographical Sketch, 4; "Recollections of the Prophet Joseph Smith," *Juvenile Instructor*, July 1, 1892, 27:398
19. Joseph Smith and Others to Heber C. Kimball and Brigham Young, Jan. 16, 1839, in *JSP*, D6:310–16 テーマ：十二使徒定員会
20. Minute Book 2, Dec. 13, 1838

21. Albert P. Rockwood to "Dear Beloved Father," Jan. 1839, in Jessee and Whittaker, "Albert Perry Rockwood Journal," 34; Joseph Smith and Others to Heber C. Kimball and Brigham Young, Jan. 16, 1839, in *JSP*, D6:310-16
22. Far West Committee, Minutes, Jan. 29 and Feb. 2, 1839; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 881-83
23. Huntington, Diary and Reminiscences, 45; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 884; Hartley, "Saints' Forced Exodus from Missouri," 347-90
24. 1839年3月22日付のアイザック・ガランドへの手紙で、ジョセフ・スミスは「5人の子供たち」について言及している。5番目の子供は、ジョアンナ・カーターであったと思われる。ジョアンナは孤児で、1839年には15歳前後であったと推定される。ファーウェストにおいて、ジョアンナがスミス家とともにいたという証拠は幾つか残っており、クインシーでもエマ・スミスと暮らしていた。ジョセフは1839年4月4日付のエマへの手紙の中で、ジョアンナについて再度触れている。(Joseph Smith to Isaac Galland, Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:382; Joseph Smith to Emma Smith, Apr. 4, 1839, in *JSP*, D6:404; see also *JSP*, D6:382, note 674; 404, note 817)
25. Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 884; Mary Audentia Smith Anderson, "Memoirs of President Joseph Smith," Saints' Herald, Nov. 6, 1934, 1416; Cooper, "Spiritual Reminiscences. — No. 2," 18 テーマ: エマ・ヘイル・スミス
26. Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 885; Mary Audentia Smith Anderson, "Memoirs of President Joseph Smith," Saints' Herald, Nov. 6, 1934, 1416; see also Cooper, "Spiritual Reminiscences. — No. 2," 18
27. Leonard, Nauvoo, 33; Hartley, "Winter Exodus from Missouri," 18; Bennett, "Study of the Mormons in Quincy," 103-18
28. Emma Smith to Joseph Smith, Mar. 7, 1839, in *JSP*, D6:339-40
29. Tullidge, Women of Mormondom, 128-29
30. Collection of Sacred Hymns, 112; see also 「主のみ言葉は」『賛美歌』46番: Amanda Barnes Smith's account in Tullidge's Women of Mormondom has a few wording changes to the hymn text: "That soul who on Jesus hath leaned for repose, I cannot, I will not desert to its foes."
31. Tullidge, Women of Mormondom, 129-30
32. Smith, Notebook, 25; Tullidge, Women of Mormondom, 128, 131-32; "Amanda Smith," Woman's Exponent, May 15, 1881, 9:189; Baugh, "Rare Account of the Haun's Mill Massacre," 168; Baugh, "I'll Never Forsake," 338 テーマ: アマンダ・バーンズ・スミス
33. Hendricks, Reminiscences, 20-22
34. Woodruff, Journal, Mar. 13-16, 1839; see also Woodruff, Journal, Sept. 12 and 25, 1838; Oct. 1, 1838 テーマ: イリノイ州クインシーの定住地
35. Hartley, "Saints' Forced Exodus from Missouri," 347-90; Edward Partridge to Joseph Smith and Others, Mar. 5, 1839, in *JSP*, D6:326-31
36. Edward Partridge to Joseph Smith and Others, Mar. 5, 1839, in *JSP*, D6:329; Woodruff, Journal, Mar. 16, 1839
37. Woodruff, Journal, Mar. 17-18, 1839; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 898-99
38. Woodruff, Journal, Mar. 18, 1839
39. Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 884, 888, 891-92, 894 テーマ: イスラエルの集合

第33章: おお神よ, あなたはどこに

1. See Jessee, "Walls, Grates and Screeking Iron Doors," 26; and Baugh, "Joseph Smith in Northern Missouri," 329
2. Hyrum Smith, Diary, Oct. 29, 1838-Feb. 5, 1839; Report, Saints' Herald, Aug. 2, 1884, 490; "Part 3: 4 November 1838-16 April 1839," in *JSP*, D6:276; Joseph Smith to Isaac Galland, Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:379; Sidney Rigdon, Testimony, July 1, 1843, [22]-[23], Nauvoo, IL, Records, Church History Library

3. Hyrum Smith, Diary, Mar. 18 and 31, 1839; Apr. 3, 1839; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 22, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Joseph Smith to Isaac Galland, Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:380; see also Jessee, "Walls, Grates and Screeking Iron Doors," 28
4. Hyrum Smith to Mary Fielding Smith, Mar. 16, 1839, Mary Fielding Smith Collection, Church History Library; Jessee, "Walls, Grates, and Screeking Iron Doors," 30-31
5. See Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:361-62
6. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:362; 教義と聖約 121:1-2; 詩篇 44:23-24; 77:6-9
7. Woodruff, Journal, Apr. 17, 1839; 教義と聖約 118:5 (Revelation, July 8, 1838-A, at josephsmithpapers.org); Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 21
8. See Historical Introduction to Letter to Heber C. Kimball and Brigham Young, Jan. 16, 1839, in *JSP*, D6:311-12
9. Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 21. The original source is in the past tense: "The Lord God had spoken . . . it was our duty to obey, and leave the event in his hands."
10. Edward Partridge to Joseph Smith and Others, Mar. 5, 1839, in *JSP*, D6:326-31; Don Carlos Smith and William Smith to Joseph Smith, Mar. 6, 1839, in *JSP*, D6:331-34; Emma Smith to Joseph Smith, Mar. 7, 1839, in *JSP*, D6:338-40; Historical Introduction to Letter from Edward Partridge, Mar. 5, 1839, in *JSP*, D6:328
11. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:356-72; Jessee and Welch, "Joseph Smith's Letter from Liberty Jail," 125-45; Bray, "Within the Walls of Liberty Jail," 256-63
12. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:363; 教義と聖約 121:5
13. Joseph Smith and Others to Edward Partridge and the Church, circa Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:393-94; 教義と聖約 121:34-39
14. Joseph Smith and Others to Edward Partridge and the Church, circa Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:394; 教義と聖約 121:41-46
15. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:362; 教義と聖約 121:1-3
16. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:366; 教義と聖約 121:7-8
17. Joseph Smith and Others to Edward Partridge and the Church, circa Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:395; 教義と聖約 122:7-9; アルマ 7:12 テーマ:リバイターの監獄
18. Far West Committee, Minutes, Mar. 17-18, 1839; Kimball, "History," 99; Theodore Turley, Memoranda, circa Feb. 1845, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library
19. Kimball, "History," 99; Theodore Turley, Memoranda, circa Feb. 1845, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library
20. Kimball, "History," 99-100
21. Joseph Smith and Others to the Church and Edward Partridge, Mar. 20, 1839, in *JSP*, D6:371
22. Joseph Smith and Others to Edward Partridge and the Church, circa Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:398; 教義と聖約 123:1-6, 13, 16-17
23. Joseph Smith to Emma Smith, Apr. 4, 1839, in *JSP*, D6:404-5
24. Hyrum Smith, Diary, Apr. 7-8, 1839; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 23-25, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
25. Bill of Damages, June 4, 1839, in *JSP*, D6:504; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 921; Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 25-26, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
26. Hyrum Smith, Diary, Apr. 14, 1839
27. Burnett, Old California Pioneer, 40-41; see also Baugh, "Gallatin Hearing and the Escape of Joseph Smith," 62-63
28. Bushman, Rough Stone Rolling, 382; Leonard, Nauvoo, 38-39

29. Hyrum Smith, Testimony, July 1, 1843, 26, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Hyrum Smith, Diary, Apr. [16], 1839; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 921-22; see also Historical Introduction to Promissory Note to John Brassfield, Apr. 16, 1839, in *JSP*, D6:422-26
30. Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 21-22; Woodruff, Journal, Apr. 18, 1839
31. John Taylor to "Dear Sir," in *LDS Millennium Star*, May 1841, 2:13; Woodruff, Journal, Apr. 26, 1839; Kimball, "History," 102
32. Woodruff, Journal, Apr. 26, 1839; Historian's Office, General Church Minutes, Apr. 26, 1839; Collection of Sacred Hymns, 29-30; see also "Adam-ondi-Ahman," Hymns, no. 49
テーマ：シオン／新エルサレム
33. Woodruff, Journal, Apr. 27, 1839
34. Dimick B. Huntington, Statement, circa 1854-56, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library; Joseph Smith, Journal, Apr. 22-23, 1839, in *JSP*, J1:336
35. Dimick B. Huntington, Statement, circa 1854-56, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library
36. Joseph Smith History, 1838-56, volume A-1, 922
37. Dimick B. Huntington, Statement, circa 1854-56, Joseph Smith History Documents, 1839-60, Church History Library; Joseph Smith, Journal, Apr. 22-23, 1839, in *JSP*, J1:336; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 924

第 34 章：町を築き上げ

1. D6:388. Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 930; *JSP*, J1:336, note 14; Joseph Smith to Isaac Galland, Mar. 22, 1839, in *JSP*, D6:388
2. Far West Committee, Minutes, Feb. 1839; Leonard, Nauvoo, 55
3. David W. Rogers, Statement, Feb. 1, 1839, Church History Library; Joseph Smith, Journal, Apr. 13, 1843, in *JSP*, J2:354; see also Plewe, Mapping Mormonism, 53-54
テーマ：イリノイ州ノーブー（コマース）
4. Woodruff, Journal, May 20, 1839; Woodruff, Leaves from My Journal, 61
5. See Rollins and others, "Transforming Swampland into Nauvoo," 125-57; Flanders, Nauvoo, 38-44, 116
6. Woodruff, Journal, June 27, 1839; Bushman, Rough Stone Rolling, 386-89; Esplin, "Emergence of Brigham Young," 398-402
7. Richards, "Pocket Companion," 17
8. Woodruff, Journal, July 2, 1839
9. Joseph Smith, Journal, June 27, 1839, in *JSP*, J1:343; Woodruff, Journal, June 25-27, 1839
10. Woodruff, Journal, July 12, 1839; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 158-65
11. Woodruff, Journal, July 12 and 19, 1839; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 25; Historian's Office, "History of Brigham Young," 35; Woodruff, Leaves from My Journal, 62
12. Woodruff, Leaves from My Journal, 62-63; Joseph Smith, Journal, July 22-23, 1839, in *JSP*, J1:349; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 25; Woodruff, Journal, July 22, 1839; Pratt, Autobiography, 324
13. Woodruff, Journal, July 22, 1839; Pratt, Autobiography, 324-25
14. Kimball, "History," 110; Woodruff, Leaves from My Journal, 63; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 25-26; Pratt, Autobiography, 325
15. Woodruff, Autobiographical Sketch, 3
テーマ：癒し
16. Tullidge, Women of Mormondom, 213-14
17. Gates, History of the Young Ladies' Mutual Improvement Association, 16; see also 「天の母」福音のテーマ, topics.lds.org
テーマ：天の母
18. Woodruff, Journal, Aug. 8, 1839; see also Woodruff, Journal, May 30, 1840; and Alexander, Heaven and Earth, 85

19. Pratt, Autobiography, 325; George A. Smith to Bathsheba Wilson Bigler, Jan. 14, 1841, George A. Smith, Collection, Church History Library; "History of George Albert Smith," 15, in Historian's Office, Histories of the Twelve, Church History Library; Allen and others, Men with a Mission, 8, 277, 288-89
20. Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 26; "Biography of Mary Ann Angell Young," Juvenile Instructor, Jan. 15, 1891, 26:56-57; Kimball, "History," 111
21. Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 26-27; Historian's Office, "History of Brigham Young," 35; Kimball, "History," 111
22. Brigham Young, in Journal of Discourses, July 17, 1870, 13:211; Kimball, "History," 111
23. Johnson, Mormon Redress Petitions, xix, xxiii-xxv; McBride, "When Joseph Smith Met Martin Van Buren," 150; Joseph Smith, Discourse, Apr. 7, 1840, in *JSP*, D7:258-60 テーマ：アメリカの法的・政治的制度
24. Sidney Rigdon to Martin Van Buren, Nov. 9, 1839; Memorial to the United States Senate and House of Representatives, circa Oct. 30, 1839-Jan. 27, 1840; Joseph Smith, Discourse, Apr. 7, 1840, in *JSP*, D7:57-59, 138-74, 258-60
25. Reynolds, My Own Times, 574-75; Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839, in *JSP*, D7:69; Monkman, White House, 93-94; Seale, President's House, 212-15
26. Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 972; Joseph Smith to Emma Smith, Nov. 9, 1839; Sidney Rigdon to Martin Van Buren, Nov. 9, 1839, in *JSP*, D7:55-59; Reynolds, My Own Times, 575; see also Sidney Rigdon to Joseph Smith and others, Apr. 10, 1839, in *JSP*, D6:408-9; and Bushman, Rough Stone Rolling, 391-93
27. Freidel, Presidents of the United States of America, 22-23; Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839, in *JSP*, D7:69-70; Reynolds, My Own Times, 575
28. Joseph Smith, Discourse, Mar. 1, 1840, in *JSP*, D7:202; compare History of the Church, 4:80
29. McBride, "When Joseph Smith Met Martin Van Buren," 150-58; Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839; Joseph Smith, Discourse, Apr. 7, 1840, in *JSP*, D7:69-70, 260
30. Joseph Smith, Discourse, Apr. 7, 1840, in *JSP*, D7:260; compare History of the Church, 4:80; Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839, in *JSP*, D7:69
31. Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839; Joseph Smith and Elias Higbee to Seymour Brunson and Nauvoo high council, Dec. 7, 1839, in *JSP*, D7:70, 78-81; Journal of the Senate of the United States of America, 138; Bushman, Rough Stone Rolling, 397
32. See Minutes and Discourse, Jan. 13, 1840, in *JSP*, D7:111-15; and Joseph Smith to Robert D. Foster, Dec. 30, 1839, in *JSP*, D7:89-93
33. Woodruff, Journal, Jan. 11-13, 1840; Woodruff, Leaves from My Journal, 75; Bitton, George Q. Cannon, 33-38; John Taylor to Leonora Taylor, Jan. 30, 1840, John Taylor, Collection, Church History Library
34. Woodruff, Journal, Jan. 13-18, 1840
35. Woodruff, Journal, Mar. 2-4, 1840; Woodruff, Leaves from My Journal, 77-78
36. Woodruff, Journal, Mar. 4, 1840; Woodruff, Leaves from My Journal, 78-81
37. Woodruff, Journal, Mar. 5-7, 1840; Woodruff, Leaves from My Journal, 79-81; Allen and others, Men with a Mission, 126
38. Wilford Woodruff to Willard Richards, Mar. 31, 1840, Willard Richards, Journals and Papers, Church History Library; see also Allen and others, Men with a Mission, 126-28 テーマ：イギリス, 初期の宣教師
39. Matthew L. Davis to Mrs. Matthew [Mary] L. Davis, Feb. 6, 1840, Church History Library; Bushman, Rough Stone Rolling, 394-95
40. Joseph Smith to Emma Smith, Jan. 20-25, 1840, in *JSP*, D7:136
41. Joseph Smith to Emma Smith, Oct. 13, 1832, in *JSP*, D2:313
42. Hales, Joseph Smith's Polygamy, 1:201-2
43. Pratt, Autobiography, 329-30; see also Givens and Grow, Parley P. Pratt, 173-74

44. Joseph Smith and Elias Higbee to Hyrum Smith and Nauvoo high council, Dec. 5, 1839, in *JSP*, D7:72
45. John C. Calhoun to Joseph Smith, Dec. 2, 1843, Joseph Smith Collection, Church History Library; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 1016
46. Historian's Office, Joseph Smith History Draft Notes, Mar. 4, 1840; Report of the Senate Committee on the Judiciary, Mar. 4, 1840, in *JSP*, D7:539-43; McBride, "When Joseph Smith Met Martin Van Buren," 154-58; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 396-98
47. Elias Higbee to Joseph Smith, Mar. 24, 1840, in *JSP*, D7:232-34

第 35 章：美しき地

1. "Autobiography of Emily D. P. Young," *Woman's Exponent*, July 15, 1885, 14:26; Lyman, *Journal*, 12; Obituary for Harriet Partridge, *Times and Seasons*, June 1, 1840, 1:128
2. Obituary for Edward Partridge, *Times and Seasons*, June 1, 1840, 1:127-28; Lyman, *Journal*, 12
3. "Autobiography of Emily D. P. Young," *Woman's Exponent*, Aug. 1, 1885, 14:37
4. Obituary for Edward Partridge, *Times and Seasons*, June 1, 1840, 1:127-28 テーマ：教会の定期刊行物
5. "Autobiography of Emily D. P. Young," *Woman's Exponent*, July 15, 1885, 14:26; Lyman, *Journal*, 13
6. "Nauvoo" and "Immigration," *Times and Seasons*, June 1840, 1:122-24; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 1060; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 405; Leonard, *Nauvoo*, 60-61
7. "Proclamation, to the Saints Scattered Abroad," *Times and Seasons*, Jan. 15, 1841, 2:273-74; see also Leonard, *Nauvoo*, 59 テーマ：イリノイ州ノーブー（コマース）
8. See Leonard, *Nauvoo*, 91
9. William W. Phelps to Joseph Smith, June 29, 1840, in *JSP*, D7:303-5
10. Joseph Smith to William W. Phelps, July 22, 1840, in *JSP*, D2:345-48
11. Woodruff, *Journal*, July 28, 1844; see also Joseph Smith to Presendia Huntington Buell, Mar. 15, 1839, in *JSP*, D6:354-56; and Esplin, "Joseph Smith's Mission and Timetable," 280-319
12. テーマ：ピシヨップ
13. John C. Bennett to Joseph Smith, July 25, 1840, in *JSP*, D7:348-50; Bushman, *Rough Stone Rolling*, 411; "Bennett, John Cook," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
14. John C. Bennett to Joseph Smith and Sidney Rigdon, July 27, 1840, in *JSP*, D7:350-53; see also John C. Bennett to Joseph Smith, July 30, 1840, in *JSP*, D7:368-70
15. John C. Bennett to Joseph Smith, July 30, 1840, in *JSP*, D7:370. The earliest copy of this letter has "My anxiety to be with is daily increasing."
16. Joseph Smith to John C. Bennett, Aug. 8, 1840, in *JSP*, D7:370-74
17. Joseph Smith, Discourse, circa July 19, 1840, in *JSP*, D7:340-45 テーマ：イスラエルの集合, シオン/新エルサレム, ノーブー神殿
18. Lucy Mack Smith, *History*, 1844-45, book 17, [7]; book 18, [1]-[10]; Funeral Address, *Times and Seasons*, Sept. 1840, 1:170-73; Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, Sept. 6, 1840, Heber C. Kimball, *Letters*, Church History Library; Obituary for Seymour Brunson, *Times and Seasons*, Sept. 1840, 1:176
19. Jane Neyman, Statement, Nov. 29, 1854, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library; Historical Department, *Journal History of the Church*, Aug. 15, 1840; Brunson, "Short Sketch of Seymour Brunson, Sr.," 3-4; 教義と聖約 137 章 (Visions, Jan. 21, 1836, at josephsmithpapers.org); see also Tobler, "Saviors on Mount Zion," 186, note 12
20. 1 コリント 15:29
21. Simon Baker, "15 Aug. 1840 Minutes of Recollection of Joseph Smith's Sermon," Joseph Smith Collection, Church History Library

22. Jane Neyman, Statement, Nov. 29, 1854, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library テーマ：死者のためのバプテスマ
23. Joseph Smith to John C. Bennett, Aug. 8, 1840, in *JSP*, D7:372-73; "Mormonism — Gen. Bennett, &c.," *Times and Seasons*, Oct. 15, 1842, 3:955; "Bennett, John Cook," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; News Item, *Times and Seasons*, Dec. 1, 1840, 2:234
24. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 17, [7]; book 18, [3]-[4]
25. Lucy Mack Smith, History, 1844-45, book 18, [3]-[9]; Lucy Mack Smith, History, 1845, 296, 301; Smith, Biographical Sketches, 267 テーマ：ジョセフ・スミス・シニア
26. Vilate Kimball to Heber C. Kimball, Oct. 11, 1840, Vilate M. Kimball, Letters, Church History Library
27. Conference Minutes, *Times and Seasons*, Oct. 1840, 1:185-87; Vilate Kimball to Heber C. Kimball, Oct. 11, 1840, Vilate M. Kimball, Letters, Church History Library; Nauvoo Temple, Baptisms for the Dead, book A, 149, microfilm 183,376, U. S. and Canada Record Collection, Family History Library; Black and Black, Annotated Record of Baptisms for the Dead, 6:3361; see also Nauvoo Temple, Baptisms for the Dead, 1840-45, Church History Library
28. Vilate Kimball to Heber C. Kimball, Oct. 11, 1840, Vilate M. Kimball, Letters, Church History Library
29. Isaac Hale, Affidavit, Mar. 20, 1834, in "Mormonism," *Susquehanna Register*, and *Northern Pennsylvanian*, May 1, 1834, [1]
30. Nauvoo Temple, Baptisms for the Dead, book A, 45
31. Act to Incorporate the City of Nauvoo, Dec. 16, 1840, in *JSP*, D7:472-88; Conference Minutes, *Times and Seasons*, Oct. 1840, 1:186
32. News Item, *Times and Seasons*, Jan. 15, 1841, 2:287 テーマ：初期の宣教師
33. "Report from the Presidency," *Times and Seasons*, Oct. 1840, 1:188
34. Act to Incorporate the City of Nauvoo, Dec. 16, 1840, in *JSP*, D7:472-88; Joseph Smith and others, Proclamation, Jan. 15, 1841, in *JSP*, D7:503-4; see also Bushman, *Rough Stone Rolling*, 410-12
35. 教義と聖約 124 : 19, 91 - 96, 127 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org) テーマ：ハイラム・スミス
36. 教義と聖約 124 : 16 - 17 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org)
37. 教義と聖約 124 : 22 - 24, 49 - 54, 60 - 61 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org)
38. 教義と聖約 124 : 40 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org); see also Smith, "Organizing the Church in Nauvoo," 264-71 テーマ：ノーブー神殿
39. 教義と聖約 124 : 29 - 38 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org) テーマ：死者のためのバプテスマ
40. 教義と聖約 124 : 41 - 42 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org); see also Smith, "Organizing the Church in Nauvoo," 264-71
41. 教義と聖約 124 : 55 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org)
42. "Municipal Election," *Times and Seasons*, Feb. 1, 1841, 2:309; "Inaugural Address," *Times and Seasons*, Feb. 15, 1841, 2:316-18; "Trial of Elder Rigdon," *Times and Seasons*, Sept. 15, 1844, 5:655; An Act to Incorporate the City of Nauvoo [Dec. 16, 1840], *Laws of the State of Illinois*, p. 55, section 16; "Bennett, John Cook," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
43. "Memoirs of President Joseph Smith," *Saints' Herald*, Jan. 8, 1935, 49

第 36 章：彼らをこの地に集め

1. Maughan, *Autobiography*, [29]-[34]
2. Maughan, *Autobiography*, [29]-[34]; Allen and others, *Men with a Mission*, 302, note 37; Winters, *Reminiscences*, 10; see also Minutes, Apr. 6, 1841, in *LDS Millennium Star*, Apr. 1841, 1:302

3. Allen and others, *Men with a Mission*, 225–26
4. Allen and Thorp, “Mission of the Twelve to England,” 503, 510–14; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 182–83
5. See, for example, Richard Livesey, *Exposure of Mormonism* (Preston: J. Livesey, 1838); see also “Mission to England,” *LDS Millennium Star*, Apr. 1841, 1:295; Givens and Grow, Parley P. Pratt, 183, 186; and Foster, *Penny Tracts and Polemics*
6. “From England,” *Times and Seasons*, June 1840, 1:119–22 テーマ：教会の定期刊行物
7. Maughan, *Autobiography*, [30]–[31], [35]–[38]; see also “Proclamation to the Saints Scattered Abroad,” *LDS Millennium Star*, Mar. 1841, 1:270–71; and “Epistle of the Twelve,” *LDS Millennium Star*, Apr. 1841, 1:310–11
8. “Celebration of the Anniversary” and “Communication,” *Times and Seasons*, Apr. 15, 1841, 2:375–77, 380–83; Report, *Warsaw Signal*, June 9, 1841, [2]
9. Biographical Review of Hancock County, Illinois, 109; see also Hamilton, “Thomas Sharp’s Turning Point,” 19
10. See Report, *Western World*, Jan. 20, 1841, [2]
11. “Celebration of the Anniversary” and “Communication,” *Times and Seasons*, Apr. 15, 1841, 2:375–77, 380–83; “The Mormons,” *Western World*, Apr. 7, 1841, [3]; Report, *Warsaw Signal*, June 9, 1841, [2]; “Life of Norton Jacob,” 6; see also Leonard, *Nauvoo*, 233–34
12. “Celebration of the Anniversary” and “Communication,” *Times and Seasons*, Apr. 15, 1841, 2:375–77, 380–83 テーマ：ノーブー神殿
13. Report, *Warsaw Signal*, June 9, 1841, [2]; Joseph Smith, *Journal*, Jan. 29, 1843, in *JSP*, J2:253
14. “The Mormons,” *Western World*, Apr. 7, 1841, [3]; Joseph Smith, Letter to the Editors, *Times and Seasons*, May 15, 1841, 2:414
15. See Whitney, *Why We Practice Plural Marriage*, 23–24; Esplin, “Joseph Smith’s Mission and Timetable,” 298–99, 303–4; and 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」, lds.org
16. Pratt, *Autobiography*, 329; 教義と聖約 132:19 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org) テーマ：結び固め
17. モルモン書ヤコブ 2:27, 30
18. 教義と聖約 132:29 – 37, 63 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org); 創世記 16:3 – 12, 17 章 テーマ：ジョセフ・スミスと多妻結婚
19. *Nauvoo City Council Minute Book*, Mar. 1, 1841, 13. この条例において、具体的にはイスラム教徒を「モハメッド教徒」と呼んでいる。これは、19世紀にイスラム教徒を指して一般的に使われていた呼称である
20. See, for example, Charles Lowell Walker, *Diary*, June 17, 1883, at josephsmithpapers.org); and 教義と聖約 134 章 (Declaration on Government and Law, circa Aug. 1835, at josephsmithpapers.org)
21. 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」, lds.org
22. Temple Lot Transcript, part 3, 395, questions 40–41; Joseph Bates Noble, Affidavit, June 6, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:38; Joseph Bates Noble, Affidavit, June 6, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:38; “Plural Marriage,” *Historical Record*, May 1887, 221 “Plural Marriage,” *Historical Record*, May 1887, 221
23. Temple Lot Transcript, part 3, 395, questions 40–41
24. Joseph Bates Noble, Affidavit, June 6, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:38
25. Joseph Bates Noble, Affidavit, June 6, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:38; Temple Lot Transcript, part 3, 395–96, questions 43–49; Franklin D. Richards, *Journal*, Jan. 22, 1869; Charles Lowell Walker, *Diary*, June 17, 1883, in Larson and Larson, *Diary of Charles Lowell Walker*, 2:610; see also Woodruff, *Journal*, Jan. 22, 1869
26. See “The Mormon Plot and League,” *Sangamo Journal*, July 8, 1842, [2]; and “Trouble among Judge Ford’s Constituents,” *Alton Telegraph and Democratic Review*, July 2, 1842, [2]
27. “Appointment,” *Warsaw Signal*, May 19, 1841, [2]
28. “The Mormons,” *Warsaw Signal*, May 19, 1841, [2]
29. “Highly Important,” *Warsaw Signal*, June 2, 1841, [2]; see also “The Warsaw Signal,” *Times and Seasons*, June 1, 1841, 2:431–33

30. "Highly Important," Warsaw Signal, June 2, 1841, [2]; "The Mormons," Warsaw Signal, May 19, 1841, [2]
31. "Read and Ponder," Warsaw Signal, June 9, 1841, [2]
32. "The Warsaw Signal," *Times and Seasons*, June 1, 1841, 2:431-33
33. Britton, Bath and Bristol, 6 テーマ：イギリス, イスラエルの集合
34. Maughan, Autobiography, [38]-[44], [48]-[49]; "Bristol to Quebec, 10 May 1841-12 July 1841," Mormon Migration website, mormonmigration.lib.byu.edu; "Phelps, William Wines," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：オハイオ州カートランド
35. Maughan, Autobiography, [38]-[44], [48]-[49]
36. Tullidge's Histories, volume 2, supplement, 34-35
37. Maughan, Autobiography, [52]-[53]; see also Ward, "John Needham's Nauvoo Letter: 1843," 41; and Pratt, Autobiography, 47
38. Hyde, Voice from Jerusalem, 7, 16; see also Bartlett, Walks about the City and Environs of Jerusalem, 14
39. Hyde, Voice from Jerusalem, 7-19, 27-28
40. Hyde, Voice from Jerusalem, 28-29; see also ジョセフ・スミス——マタイ 1:3, ルカ 19:44, 21:6, マルコ 13:2, マタイ 24:2
41. Hyde, Voice from Jerusalem, 28-32; 3 ニーフアイ 20:29 - 37
42. Hyde, Voice from Jerusalem, 30, 32-33 テーマ：聖地の奉獻

第 37 章：これによって彼らを試し

1. Joseph Smith to Edward Hunter, Jan. 5, 1842, Joseph Smith Collection, Church History Library; Joseph Smith, Journal, Jan. 5, 1842, in *JSP*, J2:21
2. See 教義と聖約 109:69 (Prayer of Dedication, Mar. 27, 1836, at josephsmithpapers.org); and 教義と聖約 124:9 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org)
3. See Woodruff, Journal, Feb. 19, 1842; and "A Translation," *Times and Seasons*, Mar. 1, 1842, 3:704-6 テーマ：アブラハム書の翻訳
4. アブラハム 3:25 - 26; "The Book of Abraham," *Times and Seasons*, Mar. 15, 1842, 3:720
5. Joseph Smith, Journal, Jan. 6, 1842, in *JSP*, J2:26; see also 黙示 5:10, 教義と聖約 124:39 - 41 (Revelation, Jan. 19, 1841, at josephsmithpapers.org); *JSP*, J2:54, note 198; and Bushman, Rough Stone Rolling, 448-49 テーマ：神殿のエンダウメント
6. Heber C. Kimball, Discourse, Sept. 2, 1866, George D. Watt Papers, Church History Library, as transcribed by LaJean Purcell Carruth
7. Brigham Young, in Journal of Discourses, July 14, 1855, 3:266; John Taylor, "Sermon in Honor of the Martyrdom," June 27, 1854, George D. Watt Papers, Church History Library, as transcribed by LaJean Purcell Carruth; "Scenes and Incidents in Nauvoo," Woman's Exponent, Oct. 15, 1881, 10:74; Whitney, Life of Heber C. Kimball, 336
8. See Crocheron, Representative Women of Deseret, 26; 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」,lds.org テーマ：ジョセフ・スミスと多妻結婚
9. ジョセフ・スミスが多妻結婚で子供をもうけた可能性はあるものの、子孫となり得る可能性のある者たちの遺伝子検査において、今までのところそれは否定されている（「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」,lds.org）
10. 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」,lds.org
11. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 3-5, Church History Library; Mary Elizabeth Rollins Lightner, Affidavit, Mar. 23, 1877, Collected Material Concerning Joseph Smith and Plural Marriage, Church History Library; Mary Elizabeth Rollins Lightner to Wilford Woodruff, Salt Lake City, Oct. 7, 1887; "Mary Elizabeth Rollins Lightner," Utah Genealogical and Historical Magazine, July 1926, 26:197, 203
12. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 3-5, Church History Library
13. Mary Elizabeth Rollins Lightner, "Mary Elizabeth Rollins," copy, Susa Young Gates Papers, Utah State Historical Society, Salt Lake City
14. See Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 2, Church History Library

15. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 7, Church History Library
16. Mary Elizabeth Rollins Lightner, "Mary Elizabeth Rollins," copy, Susa Young Gates Papers, Utah State Historical Society, Salt Lake City; Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 4, Church History Library; Mary Elizabeth Rollins Lightner to Emmeline B. Wells, summer 1905, Mary Elizabeth Rollins Lightner, Collection, Church History Library
17. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 4-7, Church History Library
18. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Remarks, Apr. 14, 1905, 4-7, Church History Library; Mary Elizabeth Rollins Lightner, "Mary Elizabeth Rollins," copy, Susa Young Gates Papers, Utah State Historical Society, Salt Lake City
19. Mary Elizabeth Rollins Lightner, Affidavit, Mar. 23, 1877, Church History Library; Mary Elizabeth Rollins Lightner, "Mary Elizabeth Rollins," copy, Susa Young Gates Papers, Utah State Historical Society, Salt Lake City; see also Mary Elizabeth Rollins Lightner to John Henry Smith, Jan. 25, 1892, George A. Smith Family Papers, Marriott Library, University of Utah, Salt Lake City, quoted in Hales, Joseph Smith's Polygamy, 1:436, note 90; and Mary Elizabeth Rollins Lightner, Statement, Feb. 8, 1902, Mary Elizabeth Rollins Lightner, Collection, Church History Library
20. アブラハム 3:1, 23 - 24, 4:1 - 28; see also "A Translation," *Times and Seasons*, Mar. 1, 1842, 3:703-18; and "The Book of Abraham," *Times and Seasons*, Mar. 15, 1842, 3:719-34 テーマ:アブラハム書の翻訳
21. Gregg, History of Hancock County, Illinois, 296-98
22. Leonard, Nauvoo, 249 テーマ:ワードとステーク
23. Clayton, History of the Nauvoo Temple, 3-4, 6, 13-14, 20-21; Sarah M. Kimball, Reminiscence, Mar. 17, 1882, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 495; Joseph Smith History, volume C-1, addenda, 44; Maughan, Autobiography, [54]; see also McGavin, Nauvoo Temple, 50-51 テーマ:ノーブー神殿, 死者のためのバプテスマ
24. Crocheron, Representative Women of Deseret, 26-27
25. Sarah M. Granger Kimball, "Auto-biography," Woman's Exponent, Sept. 1, 1883, 12:51; compare Sarah M. Kimball, Reminiscence, Mar. 17, 1882, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 495; see also 6-7
26. Sarah M. Kimball, Reminiscence, Mar. 17, 1882, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 495
27. Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 17, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 28-30
28. See Derr and others, Women of Covenant, 29-30. For biographical information on these women and other members of the Female Relief Society of Nauvoo, see churchhistorianspress.org
29. Joseph Smith, Journal, Mar. 16, 1842, in *JSP*, J2:45; Woodruff, Journal, Mar. 15, 1843; Nauvoo Masonic Lodge Minutes, Mar. 15-16, 1842
30. Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 17, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 28-31; see also 「神権, 神殿および女性についてのジョセフ・スミスの教え」,lds.org
31. Joseph Smith, Journal, Mar. 17, 1842, in *JSP*, J2:45; Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 17, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 32-34; 教義と聖約 25:3 (Revelation, July 1830-C, at josephsmithpapers.org); 「神権, 神殿および女性についてのジョセフ・スミスの教え」,lds.org
32. Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 17, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 34-36; 「わたしの王国の娘」11 - 14; Derr and others, Women of Covenant, 26-31; see also 1 コリント 13:3 テーマ:ノーブー女性扶助協会, エマ・ハイル・スミス
33. Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 31, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 42. 原本には以下の言葉がある。「ジョセフはこの協会を、パウロの時代のように、エノクの時代の祭司の国にすると語っています。」 テーマ:神殿のエンダウメント
34. Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 31, 1842; Copied Documents, Mar. 31, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 42, 97-99; Joseph Smith, Journal, Mar. 31, 1842, in *JSP*, J2:48

35. Woodruff, Journal, Apr. 10, 1842
36. Nauvoo Relief Society Minute Book, Apr. 28, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 59
37. Lucius N. Scovill, Letter to the Editor, Jan. 2, 1884, *Deseret Evening News*, Feb. 11, 1884, [2]; Launius and McKiernan, Joseph Smith, Jr.'s Red Brick Store, 28; see also McBride, *House for the Most High*, 100, note 10
38. Joseph Smith, Journal, May 4, 1842, in *JSP*, J2:53-54; *Joseph Smith History, 1838-56*, volume C-1, 1328
39. See 創世 3:21, 出エジプト 40:12-13; and Historian's Office, *Joseph Smith History*, draft notes, May 4, 1842 テーマ: 神殿のエンダウメント
40. アブラハム 3-5 章, アブラハム書からの模写 第二の 3
41. See Joseph Smith, Journal, May 1, 1842, in *JSP*, J2:53; Historian's Office, *Joseph Smith History* draft notes, May 4, 1842; *Joseph Smith History, 1838-56*, volume C-1, 1328; see also Brigham Young, in *Journal of Discourses*, Apr. 6, 1853, 2:31
42. Heber C. Kimball to Parley P. Pratt, June 17, 1842, Parley P. Pratt Correspondence, Church History Library; Historian's Office, *Joseph Smith History*, draft notes, May 4, 1842; *Joseph Smith History, 1838-56*, volume C-1, 1328 テーマ: 油注がれた委員会 (「聖なる位」)
43. Nuttall, *Diary*, Feb. 7, 1877
44. Godfrey, "Joseph Smith and the Masons," 83; Harper, "Freemasonry and the Latter-day Saint Temple Endowment Ceremony," 143-57; Joseph Smith, Journal, Mar. 15, 1842, in *JSP*, J2:45; Heber C. Kimball to Parley P. Pratt, June 17, 1842, Parley P. Pratt Correspondence, Church History Library テーマ: フリーメーソン
45. Heber C. Kimball to Parley P. Pratt, June 17, 1842, Parley P. Pratt Correspondence, Church History Library

第 38 章: 裏切り者か味方か

1. Boggs, "Short Biographical Sketch of Lilburn W. Boggs," 107-8; "A Foul Deed," *Daily Missouri Republican*, May 12, 1842, [2]; "Governor Boggs," *Jeffersonian Republican*, May 14, 1842
2. Boggs, "Short Biographical Sketch of Lilburn W. Boggs," 107-8; Joseph Smith, Letter to the Editor, *Quincy Herald*, June 2, 1842, [2]; Launius, "Boggs, Lilburn W.," in Christensen and others, *Dictionary of Missouri Biography*, 92; Hill, "Honey War," 81-88; Gordon, "Public Career of Lilburn W. Boggs," 110-12, 138; Walker, "Lilburn W. Boggs and the Case of Jacksonian Democracy," 81-82; Baugh, "Missouri Governor Lilburn W. Boggs and the Mormons," 116
3. "A Foul Deed," *Daily Missouri Republican*, May 12, 1842; "Governor Boggs," *Jeffersonian Republican*, May 14, 1842, [2]; Boggs, "Short Biographical Sketch of Lilburn W. Boggs," 107-8; see also Thurston, "The Boggs Shooting," 7-11
4. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:870-71; see also *JSP*, J2:xxviii, note 64; and Hales, *Joseph Smith's Polygamy*, 1:560-62
5. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:870-71; Nauvoo Stake High Council Minutes, May 25, 1842; George Miller, "To the Church of Jesus Christ," *Times and Seasons*, July 1, 1842, 3:839-42; Smith, *Saintly Scoundrel*, 78-79
6. George Miller, "To the Church of Jesus Christ," *Times and Seasons*, July 1, 1842, 3:840; "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:870; Smith, *Saintly Scoundrel*, 79-80; see also "Letter from L. D. Wasson," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1842, 3:892
7. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:870, 872; Notice, May 11, 1842, Joseph Smith Collection, Church History Library; "Notice," *Times and Seasons*, June 15, 1842, 3:830; see also *JSP*, J2:55, note 207
8. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:870-71. ハイラム・スミスの記録では、ジョセフ・スミスはジョン・ベネットにさらにこう尋ねたと書かれている。

「わたしはこれまで、姦淫や不貞が正しい、あるいは一夫多妻制やそれに類似した行為が正しいとあなたに教えたことがありましたか。」ベネットはその問いに「そのようなことは一度もありません」と答えている。第40章には、聖徒たちが神に命じられた多妻結婚を、一夫多妻制とは別物として考えていたことが説明されている

9. "New Election of Mayor, and Vice Mayor, of the City of Nauvoo," *Wasp*, May 21, 1842, [3]; *JSP*, J2:58, note 222
10. Joseph Smith, Journal, May 19, 1842, in *JSP*, J2:58–60; "New Election of Mayor, and Vice Mayor, of the City of Nauvoo," *Wasp*, May 21, 1843, [3]; see also "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:872
11. "Assassination of Ex-Governor Boggs of Missouri," *Quincy Whig*, May 21, 1842, [3]; see also "A Foul Deed," *Daily Missouri Republican*, May 12, 1842, [2]; and "Governor Boggs," *Jeffersonian Republican*, May 14, 1842 テーマ: ミズーリ送還の試み
12. Joseph Smith, Letter to the Editor, *Quincy Whig*, June 4, 1842, [2]; see also Joseph Smith, Journal, May 22, 1842, in *JSP*, J2:62; and Joseph Smith, Letter to the Editor, May 22, 1842, *Quincy Herald*, June 2, 1842, [2]
13. Joseph Smith, Journal, May 21, 1842, in *JSP*, J2:62; Nauvoo Stake High Council Minutes, May 20–28, 1842
14. Catherine Warren, Testimony, May 25, 1842, Testimonies in Nauvoo High Council Cases, Church History Library; Nauvoo Stake High Council Minutes, May 20–28, 1842; see also "Chauncy L. Higbee," *Nauvoo Neighbor*, May 29, 1844, [3] テーマ: 教会宗紀
15. Historian's Office, Joseph Smith History, draft notes, May 25, 1842; see also Joseph Smith, Journal, May 26, 1842, in *JSP*, J2:63; and "Affidavit of Wm. Law," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:873
16. Historian's Office, Joseph Smith History, draft notes, May 26, 1842; "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:872; Joseph Smith, Journal, May 11 and 26, 1842, in *JSP*, J2:55, 63; see also 55, note 207
17. Nauvoo Relief Society Minute Book, May 26, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 69–71.
18. See Smith, *Saintly Scoundrel*, 91
19. Nauvoo Relief Society Minute Book, Apr. 28 and May 27, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 52–54, 72–77 テーマ: ノープー女性扶助協会
20. Nauvoo Relief Society Minute Book, May 27, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 75–76; see also 75, note 188
21. Alexander, *Things in Heaven and Earth*, 103–4
22. Woodruff, Journal, May 29, 1842
23. See Nauvoo Relief Society Minute Book, May 19–June 9, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 65–79
24. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:872; "Notice," *Times and Seasons*, June 15, 1842, 3:830; Joseph Smith, Journal, May 26, 1842, in *JSP*, J2:63; see also 63, note 249; and "Affidavit of Wm. Law," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:872–73
25. Discourse, June 18, 1842, as reported by Wilford Woodruff, at josephsmithpapers.org
26. "Affidavit of Hyrum Smith," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1842, 3:872; Nauvoo Relief Society Minute Book, June 23, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 84–85; see also 84, note 206
27. Joseph Smith, Letter to the Church, June 23, 1842, *Times and Seasons*, July 1, 1842, 3:839–42
28. "Astounding Mormon Disclosures! Letter from Gen. Bennett," *Sangamo Journal*, July 8, 1842, [2]; "Further Mormon Developments!! 2d Letter from Gen. Bennett" and "Gen. Bennett's Third Letter," *Sangamo Journal*, July 15, 1842, [2]; "Gen. Bennett's 4th Letter," *Sangamo Journal*, July 22, 1842, [2]; Smith, *Saintly Scoundrel*, 98
29. Lilburn W. Boggs Affidavit, July 20, 1842, in *JSP*, J2:379–80; see also Introduction to Appendix 1, in *JSP*, J2:377
30. Thomas Reynolds, Requisition, July 22, 1842, in *JSP*, J2:380–81
31. Joseph Smith, Journal, May 6, 1842, in *JSP*, J2:54; Nauvoo Female Relief Society, Petition to Thomas Carlin, circa July 22, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief*

- Society, 136-41; Nauvoo City Council Minute Book, July 22, 1842, 95-97; Nauvoo City Council Draft Minutes, July 22, 1842, 36; Joseph Smith History, 1838-56, volume C-1, 1359
32. Eliza R. Snow, Journal, July 29, 1842; Introduction to Nauvoo Female Relief Society, Petition to Thomas Carlin, circa July 22, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 137; Thomas Carlin, Proclamation, Sept. 20, 1842, in *JSP*, J2:381-82
33. Orrin Porter Rockwell, by S. Armstrong, to Joseph Smith, Dec. 1, 1842, Joseph Smith Collection, Church History Library; Writ of Habeas Corpus for Joseph Smith, Aug. 8, 1842, copy, Nauvoo, IL, Records, Church History Library; Joseph Smith, Journal, Aug. 8-10, 1842, in *JSP*, J2:81-83; see also 81, note 319; and "Persecution," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1842, 3:886-89

第39章：苦境は絶えず

1. Joseph Smith, Journal, Aug. 8-11, 1842, in *JSP*, J2:83
2. Joseph Smith, Journal, Aug. 8-11 and 16, 1842, in *JSP*, J2:81-84, 93-94; Orrin Porter Rockwell, by S. Armstrong, to Joseph Smith, Dec. 1, 1842, Joseph Smith Collection, Church History Library
3. Joseph Smith, Journal, Aug. 11, 1842, in *JSP*, J2:83-84; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1364; see also Thomas Carlin, Writ, Aug. 2, 1842, Ex Parte Joseph Smith for Accessory to Boggs Assault, copy, Nauvoo, IL, Records, Church History Library
4. Joseph Smith, Journal, Aug. 11 and 16, 1842, in *JSP*, J2:83-85, 93-95; on the "seventh trouble," see ヨブ5:19 テーマ：エマ・ヘイル・スミス
5. Joseph Smith, Journal, Aug. 13-14 and Sept. 9, 1842, in *JSP*, J2:85-89, 143 テーマ：ミズーリ送還の試み
6. Joseph Smith, Journal, Aug. 15, 1842, in *JSP*, J2:90-92; Rowley, "Mormon Experience in the Wisconsin Pineries," 121
7. Joseph Smith to Emma Smith, Aug. 16, 1842, in *JSP*, J2:107-10; see also Joseph Smith, Journal, Aug. 16, 1842, in *JSP*, J2:93
8. Emma Smith to Joseph Smith, Aug. 16, 1842, in *JSP*, J2:110-11
9. Emma Smith to Joseph Smith, Aug. 16, 1842, in *JSP*, J2:111-14
10. Thomas Carlin to Emma Smith, Aug. 24, 1842, in *JSP*, J2:126-28
11. Emma Smith to Joseph Smith, Aug. 27, 1842, in *JSP*, J2:128-30
12. Joseph Smith, Journal, Aug. 29, 1842, in *JSP*, J2:122; see also Eliza R. Snow, Journal, Aug. 14-Sept. 4, 1842
13. Maughan, Autobiography, [51], [54]
14. See Leonard, Nauvoo, 154-61
15. Maughan, Autobiography, [55]; Joseph Smith, Journal, Jan. 12-16, 1842, in *JSP*, J2:24
16. Maughan, Autobiography, [51], [54]
17. See Givens, In Old Nauvoo, 154-55, 158, 187-88, 221-22 テーマ：初代末日聖徒の日常生活
18. Joseph Smith, Journal, Aug. 23-29, 1842, in *JSP*, J2:119-24
19. Joseph Smith, Journal, Aug. 31, 1842, in *JSP*, J2:124; Nauvoo Relief Society Minute Book, Aug. 31, 1842, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 93
20. Joseph Smith, Journal, Sept. 3, 1842, in *JSP*, J2:124-26
21. Joseph Smith to "all the Saints in Nauvoo," Sept. 1, 1842, in *JSP*, J2:131-33; Doctrine and Covenants 127: "Tidings," *Times and Seasons*, Sept. 15, 1842, 3:919-20 テーマ：死者のためのバプテスマ
22. Joseph Smith to "the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints," Sept. [7], 1842, in *JSP*, J2:149-50; Doctrine and Covenants 128:18-24; "Letter from Joseph Smith," *Times and Seasons*, Oct. 1, 1842, 3:934-36; see also McBride, "Letters on Baptism for the Dead," 272-76; and *JSP*, J2:143, note 491
23. Thomas Carlin to Emma Smith, Sept. 7, 1842, in *JSP*, J2:151-53

24. Bennett, History of the Saints; "On Marriage," *Times and Seasons*, Oct. 1, 1842, 3:939-40; Smith, Sainly Scoundrel, 114-22; see also "The Discussion by General Bennett about Joe Smith and the Mormons," *New York Herald*, Aug. 31, 1842, [2]
25. See Joseph Smith to James Arlington Bennet, Sept. 8, 1842, in *JSP*, J2:137-43; and Joseph Smith, Journal, Oct. 5, 1842, in *JSP*, J2:161
26. Thomas Ford to Joseph Smith, Dec. 17, 1842, in *JSP*, J2:179-81
27. Joseph Smith, Journal, Dec. 26, 1842, in *JSP*, J2:193-94; see also Editorial Note, *JSP*, J2:194
28. "From the Editor," *Alton Telegraph and Democratic Review*, Jan. 7, 1843, [2]; "Important from Illinois — Arrest of Joe Smith," *New York Herald*, Jan. 18, 1843, [2]
29. Arnold, Reminiscences of the Illinois Bar, 3; "Important from Illinois — Arrest of Joe Smith," *New York Herald*, Jan. 18, 1843, [2]; Joseph Smith, Journal, Jan. 4, 1843, in *JSP*, J2:216
30. Arnold, Reminiscences of the Illinois Bar, 3; Joseph Smith, Journal, Jan. 4, 1843, in *JSP*, J2:216-27; Court Ruling, Jan. 5, 1843, in *JSP*, J2:401 テーマ：ミズーリ送還の試み
31. Joseph Smith, Journal, Jan. 4, 1843, in *JSP*, J2:222-24
32. Joseph Smith, Journal, Jan. 5, 1843, in *JSP*, J2:227-34; Court Ruling, Jan. 5, 1843, in *JSP*, J2:391-402 テーマ：アメリカの法的・政治的制度

第 40 章：永遠の聖約にあって一致する

1. Joseph Smith, Journal, Jan. 10 and 18, 1843, in *JSP*, J2:243, 245-46
2. Joseph Smith, Journal, Apr. 16, 1843, in *JSP*, J2:360
3. Woodruff, Journal, Jan. 22, 1843; 教義と聖約 130 : 20 - 21 (Instruction, Apr. 2, 1843, as reported by Willard Richards and William Clayton, at josephsmithpapers.org)
4. See Haven, "A Girl's Letters from Nauvoo," 616-38; and Joseph Smith, Journal, Jan. 11, 1843, in *JSP*, J2:243
5. Woodruff, Journal, Mar. 1, 1843; Nauvoo Relief Society Minute Book, Sept. 28, 1842-June 16, 1843, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 96-100; Emily Dow Partridge Young, "Autobiography," *Woman's Exponent*, Aug. 1, 1885, 14:37-38; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 51; Lyman, Journal, 13; see also Jeffress, "Mapping Historic Nauvoo," 274-75; and Trustees Land Book A, White Purchase, block 146, lot 2
6. "Young, Emily Dow Partridge," Biographical Entry, *First Fifty Years of Relief Society* website, churchhistorianspress.org; Nauvoo Relief Society Minute Book, Apr. 28, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 53; "Huntington, William, Sr.," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; "Married," *Times and Seasons*, Oct. 1840, 1:191; 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」福音のテーマ,lds.org; Temple Lot Transcript, part 3, 373, 385, questions 532-34, 770; "Nauvoo Journals, December 1841-April 1843," in *JSP*, J2:xxix-xxx
7. Young, *Diary and Reminiscences*, 1-2; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54
8. Young, *Diary and Reminiscences*, 1-2; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54
9. Young, *Diary and Reminiscences*, 1-2; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54
10. Lyman, Journal, 13; Eliza Partridge Kimball, Affidavit, July 1, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 2:32 テーマ：結び固め, ジョセフ・スミスと多妻結婚
11. See Brigham Young, Discourse, Oct. 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library
12. Brigham Young, Discourse, Oct. 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library

13. "Biography of Mary Ann Angell Young," *Juvenile Instructor*, Jan. 15, 1891, 26:57-58; Arrington, Brigham Young, 102; Lucy Ann D. Young, Affidavit, July 10, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:48
14. Brigham Young, Discourse, Oct. 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library; see also Richards, Scriptural Items, 1843; and Woodruff, Journal, Jan. 22, 1843
15. Brigham Young, Discourse, Oct. 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library
16. "Clayton, William," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：ワードとステーク
17. Joseph Smith, Journal, Apr. 1, 1843, in *JSP*, J2:321
18. Joseph Smith, Journal, Apr. 1-2, 1843, in *JSP*, J2:321-23
19. Joseph Smith, Journal, Apr. 2, 1843, in *JSP*, J2:323-25; 教義と聖約 130 : 1, 3
20. Joseph Smith, Journal, Apr. 2, 1843, in *JSP*, J2:326; 教義と聖約 130 : 22; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1511. The word "and" was added to the original.
21. Joseph Smith, Journal, Apr. 2, 1843, in *JSP*, J2:325; 教義と聖約 130 : 18 - 19
22. Clayton, Journal, Apr. 2 and May 16, 1843; Instruction, May 16, 1843, as reported by William Clayton, at josephsmithpapers.org; 教義と聖約 131 : 1 - 4; see also McBride, "Our Hearts Rejoiced to Hear Him Speak," 277-80 テーマ：結び固め
23. Maughan, Autobiography, [52]-[54]
24. Joseph Smith, Journal, Apr. 6, 1843; Haven, "A Girl's Letters from Nauvoo," 624
25. See 教義と聖約 76 : 70 - 81 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org); Mace, Autobiography, 120; 黙示 12 : 1 テーマ：ノーブー神殿
26. McBride, House for the Most High, 21-27, 91-95
27. Maughan, Autobiography, [56]
28. "Mary Elizabeth Rollins Lightner," *Utah Genealogical and Historical Magazine*, July 1926, 17:202
29. Mary Audentia Smith Anderson, "The Memoirs of Joseph Smith III," *Saints' Herald*, Feb. 19, 1935, 240; Mar. 17, 1936, 338
30. See Temple Lot Transcript, part 3, 350-52, questions 22-24; see also George A. Smith to Joseph Smith III, Oct. 9, 1869, copy, George A. Smith, Papers, Church History Library; "More Testimony," *Ogden Herald*, May 21, 1886, 1; "Celestial Marriage," *Woman's Exponent*, June 1, 1886, 15:1-2
31. See Eliza R. Snow to Joseph F. Smith, no date, Joseph F. Smith, Papers, Church History Library
32. Amasa Lyman, in *Journal of Discourses*, Apr. 5, 1866, 11:198-208; 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」福音のテーマ, lds.org
33. 「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」福音のテーマ, lds.org テーマ：エマ・ヘイル・スミス, ジョセフ・スミスと多妻結婚
34. Young, *Diary and Reminiscences*, 2
35. Temple Lot Transcript, part 3, 351, questions 31-32; Emily Dow Partridge Young, Statement, Historical Record, May 1887, 240; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 51; Lyman, Journal, 13
36. Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54; Emily Dow Partridge Smith Young, "Testimony That Cannot Be Refuted," *Woman's Exponent*, Apr. 1, 1884, 12:165; Temple Lot Transcript, part 3, 351, 353-62, 371-72, questions 31-32, 47-272, 488-93
37. Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54; Emily Dow Partridge Smith Young, "Testimony That Cannot Be Refuted," *Woman's Exponent*, Apr. 1, 1884, 12:165; Temple Lot Transcript, part 3, 353-62, 371-72, questions 47-272, 488-93 テーマ：ジョセフ・スミスと多妻結婚
38. Hyrum Smith, Discourse, in Levi Richards, Journal, May 14, 1843; モルモン書ヤコブ 2 : 23 - 30
39. Hyrum Smith, Discourse, in Levi Richards, Journal, May 14, 1843; Temple Lot Transcript, part 3, 373, 385, questions 532-34, 770

40. Watson, Brigham Young Addresses, volume 5, Oct. 8, 1866; compare Brigham Young, Discourse, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 8, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library; see also Clayton, Journal, May 26, 1843 テーマ：ハイラム・スミス
41. Joseph Smith, Journal, May 28, 1843, in *JSP*, J3:25; see also Joseph Smith to Emma Smith, Nov. 12, 1838, in *JSP*, D6:290-93; and Emma Smith Blessing, 1844, Church History Library
42. Joseph Smith, Journal, May 29, 1843, in *JSP*, J3:25-26; see also 25, note 89
43. Joseph Smith History, 1838-56, volume E-1, 1987
44. Joseph Smith, Journal, May 29, 1843, in *JSP*, J3:25-26; Historian's Office, Brigham Young History Drafts, 69; "Reminiscence of Mercy Rachel Fielding Thompson," quoted in Madsen, In Their Own Words, 195; see also Woodworth, "Mercy Thompson and the Revelation on Marriage," 281-93
45. Joseph Smith, Journal, May 29, 1843, in *JSP*, J3:25-26; "Reminiscence of Mercy Rachel Fielding Thompson," quoted in Madsen, In Their Own Words, 195; see also Woodworth, "Mercy Thompson and the Revelation on Marriage," 281-93
46. Joseph Smith, Journal, May 29, 1843, in *JSP*, J3:25-26 テーマ：結びぬめ

第 41 章：裁きは神の手に

1. Pratt, Journal and Autobiography, 107-8
2. Cannon, "Tahiti and the Society Island Mission," 334; Pratt, Journal and Autobiography, 107-8
3. Pratt, Journal and Autobiography, 107-8; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1568
4. Quorum of the Twelve Apostles, Minutes, May 23, 1843
5. Joseph Smith, Journal, June 13, 1843, in *JSP*, J3:36; "Missouri vs Joseph Smith," *Times and Seasons*, July 1, 1843, 4:242; Nauvoo Relief Society Minute Book, June 16, 1843, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 100
6. Joseph Smith, Journal, June 11, 1843, in *JSP*, J3:31-35; Woodruff, Journal, June 11, 1843; Nauvoo Relief Society Minute Book, June 16, 1843, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 100
7. Nauvoo Relief Society Minute Book, June 16, 1843, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 100-102. Sister Chase could have been either Phebe Ogden Ross Chase or Tirzah Wells Chase; see biographical entries for both women at churchhistorianspress.org
8. Joseph Smith, Journal, June 16 and 18, 1843, in *JSP*, J3:37, 38; Clayton, Journal, June 18, 1843; Warrant for Joseph Smith, June 17, 1843, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1581
9. "Missouri vs Joseph Smith," Nauvoo Neighbor, July 5, 1843, [2]; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1582 テーマ：ミズーリ送還の試み
10. Clayton, Journal, June 23, 1843; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1583-88; *JSP*, J3:39, note 153; "Missouri vs Joseph Smith," *Times and Seasons*, July 1, 1843, 4:243
11. Burbank, Autobiography, 43-44; Peter Conover, Statement, Sept. 26, 1854, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library; Joseph Smith, Journal, July 1-4, 1843, in *JSP*, J3:48-52; "Missouri vs Joseph Smith," *Times and Seasons*, July 1, 1843, 4:243; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1591
12. Clayton, Journal, June 30, 1843; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1593; Joseph Smith, Journal, June 30, 1843, in *JSP*, J3:42; Peter Conover, Statement, Sept. 26, 1854, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library
13. Joseph Smith, Journal, July 1, 1843, in *JSP*, J3:48; Nauvoo Municipal Court Docket Book, 55-87
14. James, Autobiography, [1]; Wolfinger, Test of Faith, 1-3; Platt, "Early Branches of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints," 41 テーマ：奴隷制度とその廃止

15. James, Autobiography, [1] テーマ: 異言の賜物
16. James, Autobiography, [1]; Nauvoo Stake High Council Minutes, Dec. 9, 1843 テーマ: ジェーン・エリザベス・マニング・ジェームズ
17. Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 54; Lovina Smith Walker, Certificate, June 16, 1869, in Affidavits about Celestial Marriage, 1:30
18. Clayton, Journal, July 12, 1843; William Clayton, Affidavit, Feb. 16, 1874, in Affidavits about Celestial Marriage, Church History Library; "Another Testimony — Statement of William Clayton," Deseret Evening News, May 20, 1886, [2]
19. 教義と聖約 132:7 - 19 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
20. 教義と聖約 132:20 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
21. 教義と聖約 132:1 - 20, 29 - 37 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
22. モルモン書ヤコブ2:27 - 30; see also 教義と聖約 132:63 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
23. 教義と聖約 132:52 - 56 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
24. Clayton, Journal, July 12, 1843; William Clayton, Statement, Feb. 16, 1874, in Affidavits about Celestial Marriage, Church History Library; William Clayton to Madison M. Scott, Nov. 11, 1871, copy, Church History Library
25. William Clayton, Affidavit, Feb. 16, 1874, in Affidavits about Celestial Marriage, Church History Library; "Another Testimony — Statement of William Clayton," Deseret Evening News, May 20, 1886, [2]; Clayton, Journal, July 12, 1843 テーマ: エマ・ヘイル・スミス, ジョセフ・スミスと多妻結婚
26. Joseph Smith, Journal, July 13, 1843, in *JSP*, J3:57-59; Clayton, Journal, July 13, 1843; see also *JSP*, J3:57, note 262
27. Joseph Smith, Journal, July 13, 1843, in *JSP*, J3:57-59; Clayton, Journal, July 12-15, 1843; William Clayton, Affidavit, Feb. 16, 1874, in Affidavits about Celestial Marriage, Church History Library; "Another Testimony — Statement of William Clayton," Deseret Evening News, May 20, 1886, [2]; Trustees Land Book B, White Purchase, 241-44, 246, 249, 251, 259-61, 265; Galland Purchase, 267-71, 273; see also *JSP*, J3:57, note 262
28. See "Nauvoo Journals, May 1843-June 1844," in *JSP*, J3:xix-xx; see also 57-59, notes 259 and 262
29. Joseph Smith, Journal, Aug. 31, Sept. 15, and Oct. 3, 1843, in *JSP*, J3:91, 99, 105; "Nauvoo Mansion," Geographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; Smith, Biographical Sketches, 274; see also *JSP*, J3:91, note 421
30. テーマ: 奴隷制度とその廃止
31. James, Autobiography, [1]-[4]; "Joseph Smith, the Prophet," Young Woman's Journal, Dec. 1905, 551-52 テーマ: ジェーン・エリザベス・マニング・ジェームズ
32. See Clayton, Journal, June 23, 1843; July 12, 1843; Aug. 3, 16, and 23, 1843
33. 教義と聖約 25:13 - 15 (Revelation, July 1830-C, at josephsmithpapers.org)
34. Emily Dow Partridge Smith Young, "Testimony That Cannot Be Refuted," *Woman's Exponent*, Apr. 1, 1884, 12:165
35. Emily Dow Partridge Young, "Autobiography," *Woman's Exponent*, Aug. 1, 1885, 14:38; Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 186; Young, *Diary and Reminiscences*, 2
36. Young, *Diary and Reminiscences*, 2-3; Emily Dow Partridge Young, "Autobiography," *Woman's Exponent*, Aug. 1, 1885, 14:38; see also Lyman, *Journal*, 13
37. Young, *Diary and Reminiscences*, 5
38. Emily Dow Partridge Smith Young, "Testimony That Cannot Be Refuted," *Woman's Exponent*, Apr. 1, 1884, 12:165 テーマ: エマ・ヘイル・スミス
39. Young, "Incidents in the Life of a Mormon Girl," 177; see also Young, *Diary and Reminiscences*, 5

第 42 章：力を合わせて

1. Woodruff, Journal, Nov. 4, 1843; see also Woodruff, Journal, Jan. 16, 17, 18, and 19, 1844
2. Wilford Woodruff to Phebe Carter Woodruff, Oct. 1843, Emma S. Woodruff, Collection, Church History Library; see also Woodruff, Journal, Oct. 8, 1843
3. Woodruff, Journal, Nov. 11, 1843
4. Joseph Smith, Journal, Sept. 28, 1843, in *JSP*, J3:104-5; Clayton, Journal, Oct. 19, 1843; see also "Nauvoo Journals, May 1843-June 1844," in *JSP*, J3:xx-xxi; Nauvoo Relief Society Minute Book, Mar. 30, Apr. 28, and Aug. 31, 1842, in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 43, 59, 94; and 教義と聖約 132:7-20 (Revelation, July 12, 1843, at josephsmithpapers.org)
5. Joseph Smith, Journal, Sept. 28 and Oct. 1, 1843, in *JSP*, J3:104, 105; "Part 1: 1830, 1842-1854," in Derr and others, *First Fifty Years of Relief Society*, 10 テーマ：エマ・ヘイル・スミス
6. Joseph Smith, Journal, Oct. 8 and Nov. 1, 1843, in *JSP*, J3:109, 123; Young, Journal, Nov. 1, 1843, 21; Helen Mar Whitney, "Scenes in Nauvoo," *Woman's Exponent*, July 1, 1883, 12:[18]; Bathsheba W. Smith, Affidavit, Nov. 19, 1903, Church History Library; Whitney, *Plural Marriage*, 14
7. Joseph Smith, Journal, Dec. 2, 1843, in *JSP*, J3:138; Woodruff, Journal, Dec. 2 and 23, 1843
8. "Nauvoo Journals, May 1843-June 1844," in *JSP*, J3:xx-xxi; Joseph Smith, Journal, Sept. 28 1843; Oct. 1, 8, 12, and 29, 1843; Nov. 1, 1843; and Dec. 2, 9, 17, and 23, 1843; in *JSP*, J3:104-5, 108-9, 112, 122, 123, 138, 142-43, 146, 150; Clayton, Journal, Dec. 2, 1843; Ehat, "Joseph Smith's Introduction of Temple Ordinances," 98-100, 102-3; "Quorum, The," Glossary entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：油注がれた定員会 (「聖なる位」)
9. Neibaur, Journal, May 24, 1844; Council of Fifty, "Record," [290], in *JSP*, CFM:192; see also 192, note 596; and Cook, William Law, 25-27, note 84
10. "Dr. Wyl and Dr. Wm. Law," *Salt Lake Daily Tribune*, July 31, 1887, [6]; Neibaur, Journal, May 24, 1844; see also Cook, William Law, 24-25
11. McMurrin, "An Interesting Testimony," 507-9
12. Neibaur, Journal, May 24, 1844; Council of Fifty, "Record," [290], in *JSP*, CFM:192; see also 192, note 596; and Cook, William Law, 25-27, note 84
13. Clayton, Journal, June 12, 1844; see also Cook, William Law, 25
14. Joseph Smith, Journal, Dec. 30, 1843, in *JSP*, J3:154; see also 154, note 692
15. "Dr. Wyl and Dr. Wm. Law," *Salt Lake Daily Tribune*, July 31, 1887, [6]
16. Law, Record of Doings, Jan. 8, 1844, in Cook, William Law, 46-47; Joseph Smith, Journal, Jan. 8, 1844, in *JSP*, J3:159; see also 159, note 707. No manuscript version of Law's "Record of Doings" has been located. For more analysis, see "Essay on Sources," in *JSP*, J3:491-92
17. Woodruff, Journal, Apr. 21, 1844
18. "Great Meeting of Anti Mormons!," *Warsaw Message*, Sept. 13, 1843, [1]-[2]; Joseph Smith History, 1838-56, volume E-1, 1687; Ford, *History of Illinois*, 319 テーマ：アメリカの法的・政治的制度
19. Joseph Smith, Journal, Nov. 4 and Dec. 27, 1843; May 5, 1844, in *JSP*, J3:124, 152, 243; 152, note 683; 166, note 738; 243, note 1102; Henry Clay to Joseph Smith, Nov. 15, 1843; Lewis Cass to Joseph Smith, Dec. 9, 1843; John C. Calhoun to Joseph Smith, Dec. 2, 1843, Joseph Smith Collection, Church History Library
20. Joseph Smith, Journal, Jan. 29, 1844, in *JSP*, J3:169-71; "Who Shall Be Our Next President?," *Times and Seasons*, Feb. 15, 1844, 5:439-41; Robertson, "Campaign and the Kingdom," 164-65 テーマ：1844年—アメリカ合衆国大統領へ向けたジョセフ・スミスの選挙運動
21. Addison Pratt, Journal, Jan. 13, 1844; Ellsworth, *Journals of Addison Pratt*, 114-15 テーマ：祝福師の祝福

22. Addison Pratt, Journal, Oct. 6, 1843; Dec. 3 and 7, 1843; Jan. 12 and 19, 1844; Perrin, "Seasons of Faith," 202-3
23. Addison Pratt, Journal, Jan. 26, 1844
24. Addison Pratt, Journal, Jan. 19, 1844
25. Thompson, Autobiographical Sketch, 7-9; see also 教義と聖約 85:1-43 (Joseph Smith to William W. Phelps, Nov. 27, 1832, at josephsmithpapers.org) 1843年5月、マーシー・フィールディング・トンプソンが、亡くなった夫、ロバートに結び固められた後、ロバートはジョセフ・スミスに示現で現れ、マーシーがハイラムとこの世における結婚をするように依頼した。ジョセフは、ハイラムとマーシーを1843年8月11日に結び固めている (Woodworth, "Mercy Thompson and the Revelation on Plural Marriage," 281-93)
26. "To the Sisters of the Church of Jesus Christ in England," LDS *Millennial Star*, June 1844, 5:15; see also Introduction to Boston Female Penny and Sewing Society, Minutes, Jan. 28, 1845, in Derr and others, *First Fifty Years*, 163
27. Joseph Smith, Journal, Jan. 29, 1844; Feb. 8, 19, and 25, 1844; Mar. 7, 1844, in *JSP*, J3:171, 175, 179, 183, 194
28. Joseph Smith, *General Smith's Views of the Powers and Policy of the Government of the United States* (Nauvoo, IL: John Taylor, 1844); see also *JSP*, J3:168, note 748; 173, note 775 テーマ:1844年—アメリカ合衆国大統領へ向けたジョセフ・スミスの選挙運動
29. Joseph Smith, Journal, Feb. 20, 1844, in *JSP*, J3:180; "The Council of Fifty in Nauvoo, Illinois," in *JSP*, CFM:xxvi-xxxix; "Early Discussions of Relocating," Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org
30. "The Council of Fifty in Nauvoo, Illinois," in *JSP*, CFM:xxiii; Council of Fifty, "Record," Mar. 10-11, 1844, in *JSP*, CFM:17-45 テーマ:五十人評議会
31. Council of Fifty, "Record," Mar. 11, 1844, in *JSP*, CFM:39-45; "The Council of Fifty in Nauvoo, Illinois," in *JSP*, CFM:xxxvii
32. Orson Hyde, Statement about Quorum of the Twelve, circa late March 1845, Brigham Young Office Files, Church History Library; Baugh and Holzapel, "I Roll the Burthen and Responsibility," 15, 18; Brigham Young, Sermon, Oct. 6, 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 6, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library; Parley P. Pratt to the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Jan. 1, 1845, in Prophet, Jan. 4, 1845, 33
33. Orson Hyde, Statement about Quorum of the Twelve, circa late March 1845, Brigham Young Office Files, Church History Library; Baugh and Holzapel, "I Roll the Burthen and Responsibility," 18; Holzapel and Harper, "This Is My Testimony," 112-16 テーマ:教会指導者の職の継承
34. Brigham Young, Sermon, Oct. 6, 1866, George D. Watt, Discourse Shorthand Notes, Oct. 6, 1866, George D. Watt, Papers, as transcribed by LaJean Purcell Carruth, copy at Church History Library; Parley P. Pratt to the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Jan. 1, 1845, in Prophet, Jan. 4, 1845, 33 テーマ:十二使徒定員会
35. Orson Hyde, Statement about Quorum of the Twelve, circa late March 1845, Brigham Young Office Files, Church History Library; Woodruff, Journal, Aug. 25, 1844; Wilford Woodruff, Testimony, Mar. 19, 1897, Church History Library; Historian's Office, General Church Minutes, McEwan copy, Sept. 8, 1844; Clayton copy, Sept. 8, 1844; Nauvoo Stake High Council Minutes, Nov. 30, 1844; "Trial of Elder Rigdon," *Times and Seasons*, Sept. 15, 1844, 5:650-51; Parley P. Pratt, "Proclamation," LDS *Millennial Star*, Mar. 1845, 5:151; Wilford Woodruff, "To the Officers and Members of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in the British Islands," LDS *Millennial Star*, Feb. 1845, 5:136; Council of Fifty, "Record," Mar. 18 and 25, 1845, in *JSP*, CFM:337-38, 379; George A. Smith, Sermon, Dec. 25, 1874, 2-4, Saint George Utah Stake, General Minutes, Church History Library; Johnson, "A Life Review," 96; Benjamin F. Johnson to George F. Gibbs, Apr. -Oct. 1903, 1911, Benjamin Franklin Johnson, Papers, Church History Library; see also Historian's Office, General Church Minutes, Sept. 30, 1855

第 43 章：公的不法妨害

1. Law, Record of Doings, Mar. 29 and Apr. 15, 1844, in Cook, William Law, 47-49
2. Woodruff, Journal, Mar. 24, 1844; Affidavits of A. B. Williams and M. G. Eaton, Nauvoo Neighbor, Apr. 17, 1844, [2]
3. Woodruff, Journal, Mar. 24, 1844
4. Orson Hyde, Statement about Quorum of the Twelve, circa Late Mar. 1845, Brigham Young Office Files, Church History Library; Bushman, Rough Stone Rolling, 532-34
5. Cummings, "Conspiracy of Nauvoo," Contributor, Apr. 1884, 252
6. "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1844, 5:612-13; Historian's Office, General Church Minutes, Clayton copy, Apr. 7, 1844, 11; Bullock copy, Apr. 7, 1844, 14; Joseph Smith, Journal, Apr. 7, 1844, in *JSP*, J3:217
7. "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1844, 5:613-14; Historian's Office, General Church Minutes, Clayton copy, Apr. 7, 1844, [12]-14; Bullock copy, Apr. 7, 1844, 15-17. The original quotation is slightly different, reading "although the earthly tabernacle shall be dissolved, that they shall rise in immortal glory."
8. Historian's Office, General Church Minutes, Bullock copy, Apr. 7, 1844, 17; Woodruff, Journal, Apr. 7, 1844; "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1844, 5:617
9. "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1844, 5:616-17; Historian's Office, General Church Minutes, Bullock copy, Apr. 7, 1844, 19-22; see also Joseph Smith, Journal, May 21 and June 11, 1843, in *JSP*, J3:20, 31; Joseph Smith History, 1838-56, volume D-1, 1556
10. Joseph Smith, Journal, Apr. 7, 1844, in *JSP*, J3:217-22; Historian's Office, General Church Minutes, Bullock copy, Apr. 7, 1844, 22; "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Aug. 15, 1844, 5:617; see also "Accounts of the 'King Follett Sermon,'" Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：キング・フォレット説教
11. Ellen Briggs Douglas to Family Members, Apr. 14, 1844, in Derr and others, First Fifty Years of Relief Society, 157-62; George Douglas and Ellen Briggs Douglas to "Father and Mother," June 2, 1842, Ellen B. Parker, Letters, Church History Library. One line is slightly different in the original source: "fetched me such a present as I never received before from no place in the world テーマ：ノーブー女性扶助協会
12. Cummings, "Conspiracy of Nauvoo," Contributor, Apr. 1884, 252-53
13. "Resolutions," *Nauvoo Expositor*, June 7, 1844, [2] テーマ：教会内での対立
14. "The New Church," Warsaw Signal, May 15, 1844, [2]; Joseph Smith, Journal, Feb. 21, 1843, in *JSP*, J2:271-73; see also 239, note 1074
15. Nauvoo City Council Draft Minutes, June 8, 1844, 13-15; Nauvoo Stake High Council Minutes, May 20 and 24, 1842; *JSP*, J3:245, note 1108; 246, note 1116; see also Joseph Smith History, 1838-56, volume E-1, 1949
16. Cummings, "Conspiracy of Nauvoo," Contributor, Apr. 1884, 253-57
17. Cummings, "Conspiracy of Nauvoo," Contributor, Apr. 1884, 257-59
18. Council of Fifty, "Record," Apr. 11, 1844, in *JSP*, CFM:95-96; see also 黙示 1 : 6
19. Council of Fifty, "Record," Apr. 11, 1844, in *JSP*, CFM:97-101 テーマ：五十人評議会
20. Law, Record of Doings, Apr. 19-22, 1844, in Cook, William Law, 50-52; Joseph Smith, Journal, Apr. 18, 1844, in *JSP*, J3:231-32; see also 232, note 1037
21. Joseph Smith, Journal, Apr. 28, 1844, in *JSP*, J3:238
22. Law, Record of Doings, June 1, 1844, in Cook, William Law, 54; Joseph Smith, Journal, Apr. 28, 1844, in *JSP*, J3:239; see also 239, note 1074; and "The New Church," Warsaw Signal, May 15, 1844, [2]
23. "Why Oppose the Mormons?," Warsaw Signal, Apr. 25, 1844, [2]; see also *JSP*, J3:238, note 1068
24. Prospectus of the *Nauvoo Expositor* [Nauvoo, IL: May 10, 1844], copy at Church History Library
25. Joseph Smith, Journal, May 6, 1844, in *JSP*, J3:245; Subpoena for Wilson and William Law, May 27, 1844, State of Illinois v. Joseph Smith for Adultery [Hancock County Circuit Court 1844], Illinois State Historical Library, Circuit Court Case Files, 1830-

- 1900, microfilm, Church History Library; see also *JSP*, J3:245, note 1108; 261, note 1189
 テーマ：ノーブー・エクスポジター
26. Joseph Smith, Discourse, May 12, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; Joseph Smith, Journal, May 12, 1844, in *JSP*, J3:248-49
 27. Joseph Smith, Journal, May 17, 1844, in *JSP*, J3:253; see also 253, note 1147
 28. Clayton, Journal, May 21, 1844; Joseph Smith, Journal, May 21, 25, and 27, 1844, in *JSP*, J3:256, 260-61, 263
 29. Joseph Smith, Journal, May 27, 1844, in *JSP*, J3:263-65
 30. Thomas Sharp, Editorial, Warsaw Signal, May 29, 1844, [2]
 31. Pratt, Journal and Autobiography, 108-13
 32. "Preamble" and "Resolutions," *Nauvoo Expositor*, June 7, 1844, [1]-[2]
 33. Francis M. Higbee to "Citizens of Hancock County," June 5, 1844, in *Nauvoo Expositor*, June 7, 1844, [3]
 34. Joseph Smith, Journal, June 8, 1844, in *JSP*, J3:274-76; Nauvoo City Council Draft Minutes, June 8, 1844, 18
 35. Nauvoo City Council Draft Minutes, June 8, 1844, 19
 36. Nauvoo City Council Draft Minutes, June 10, 1844, 19-31; Joseph Smith, Journal, June 10, 1844, in *JSP*, J3:276-77
 37. Nauvoo City Council Draft Minutes, June 10, 1844, 27; see also Oaks, "Suppression of the *Nauvoo Expositor*," 862-903; William Blackstone, Commentaries on the Laws of England (New York: W. E. Dean, 1840)
 38. Nauvoo City Council Draft Minutes, June 10, 1844, 30-31; Nauvoo City Council Minute Book, June 10, 1844, 210-11; Joseph Smith, Journal, June 10, 1844, in *JSP*, J3:276. 市議会議員の一人、ベンジャミン・ウォーリントンが決議に反論した。彼は、議会がまず *Expositor*の発行者に罰金を科すべきだと主張した (*JSP*, J3:276-77, note 1258)
 39. Joseph Smith, Journal, June 10, 1844, in *JSP*, J3:276-77; Joseph Smith, Order to Nauvoo City Marshal, June 10, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; "Unparalleled Outrage at Nauvoo," Warsaw Signal, June 12, 1844, [2] テーマ：ノーブー・エクスポジター
 40. "Unparalleled Outrage at Nauvoo," Warsaw Signal, June 12, 1844, [2]

第 44 章：ほふり場に引かれて行く小羊のように

1. "Preamble and Resolutions," Warsaw Signal, Extra, June 14, 1844; Sarah D. Gregg to Thomas Gregg, June 14, 1844, copy, Illinois State Historical Society Papers, Church History Library; James Robbins to Leanna Robbins, June 16, 1844, James Robbins Letters, Church History Library; Joseph Smith, Proclamation to John P. Greene, June 17, 1844; Joseph Smith to Jonathan Dunham, June 17, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library
2. Joseph Smith, Journal, June 13, 1844, in *JSP*, J3:280-81; see also 281, note 1284
3. Maughan, Autobiography, [57]-[58]: "History of Joseph Smith," *LDS Millennium Star*, Nov. 9, 1861, 23:720; see also *JSP*, J3:8, note 14; 16, note 39
4. Maughan, Autobiography, [57]-[58]; Peter Maughan Family History, 17-18
5. Clayton, Journal, June 11, 1844; *JSP*, J3:279, note 1272; see also Joseph Smith, Journal, June 11, 1844, in *JSP*, J3:277-79
6. Joseph Smith, Journal, June 11-12, 1844, in *JSP*, J3:279; Warrant for Joseph Smith and Others, June 11, 1844, State of Illinois v. Joseph Smith and Others for Riot, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library
7. Joseph Smith, Journal, June 12-13, 1844, in *JSP*, J3:279-82; Warrant for Joseph Smith and Others, June 11, 1844, State of Illinois v. Joseph Smith and Others for Riot, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library; Nauvoo Municipal Court Docket Book, 108-12
8. Joseph Smith, Journal, June 14, 1844, in *JSP*, J3:282; Clayton, Daily Account of Joseph Smith's Activities, June 14, 1844, in *JSP*, J3:333-34; Joseph Smith to Thomas Ford,

- June 14, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; Sidney Rigdon to Thomas Ford, June 14, 1844, Sidney Rigdon Collection, Church History Library; see also Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 97-98
9. Joseph Smith, Journal, June 16-18, 1844, in *JSP*, J3:286-92; Joseph Smith, Proclamation, June 17, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; *JSP*, J3:294-95, note 1357; Hyrum Smith and Joseph Smith to Brigham Young, June 17, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library
 10. Joseph Smith, Journal, June 18, 1844, in *JSP*, J3:290-91; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 118-19
 11. Oaks, "Suppression of the *Nauvoo Expositor*," 891-903
 12. Thomas Ford to Joseph Smith, June 22, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library テーマ:アメリカの法的・政治的制度
 13. Joseph Smith to Thomas Ford, June 22, 1844, Joseph Smith Collection, Church History Library; Editorial Note, in *JSP*, J3:301-2
 14. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 147; Richards, Journal, June 23, 1844, in *JSP*, J3:305
 15. Joseph Smith to Emma Smith, June 23, 1844, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library
 16. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 148; Richards, Journal, June 23, 1844, in *JSP*, J3:305
 17. Briggs, "A Visit to Nauvoo in 1856," 453-54; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 148
 18. Briggs, "A Visit to Nauvoo in 1856," 453-54
 19. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 149; "Pleasant Chat," True Latter Day Saints' Herald, Oct. 1, 1868, 105; Christensen, "Edwin Rushton," 3 テーマ:ジョセフとエマ・ヘイル・スミスの家族
 20. Christensen, "Edwin Rushton," 3; John Bernhisel to George A. Smith, Sept. 11, 1854, in Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library; 教義と聖約 135:4 (Account of the Martyrdom, circa July 1844, at josephsmithpapers.org); Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 149-51; Richards, Journal, June 24, 1844, in *JSP*, J3:305; Clayton, Journal, June 24, 1844
 21. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 151; Richards, Journal, June 24, 1844, in *JSP*, J3:305
 22. Richards, Journal, June 24, 1844, in *JSP*, J3:306; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 151-52; see also "Awful Assassination of Joseph and Hyrum Smith," *Times and Seasons*, July 1, 1844, 5:560; "Statement of Facts," *Times and Seasons*, July 1, 1844, 5:563; and *JSP*, J3:306, note 6
 23. Leonora C. Taylor, Statement, circa 1856, Church History Library; Clayton, Journal, June 24, 1844
 24. Emma Smith Blessing, 1844, typescript, Church History Library. エマが書いた元の祝福は消失している。歴史家ジャニータ・ブルックスは1946年ごろ、原文を研究、その手書きをエマの筆跡と比較し、祝福文の写しをジョージ・アルバート・スミスとジョセフ・K・ニコルズに送ったと報告している (See Juanita Brooks to Joseph K. Nicholes, Apr. 29, 1946, Joseph K. Nicholes Collection, Church History Library; Juanita Brooks to George Albert Smith, Apr. 29, 1946, Joseph Fielding Smith, Papers, Church History Library; and Emma Smith to Joseph Heywood, Oct. 18, 1844, Church History Library) テーマ:エマ・ヘイル・スミス
 25. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 154; Richards, Journal, June 24, 1844, in *JSP*, J3:306
 26. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 155-56; Richards, Journal, June 25, 1844, in *JSP*, J3:307-8
 27. Richards, Journal, June 25, 1844, in *JSP*, J3:307, 311-14; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 158-61; "Statement of Facts," *Times and Seasons*, July 1, 1844, 5:561-62; Dan Jones, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum!," in Dennis, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum," 87-88; Joseph Smith to Emma Smith, June 25, 1844, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library

28. Dennis, "Dan Jones, Welshman," 50-52
29. Dan Jones, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum!" ; Dan Jones to Thomas Bullock, Jan. 20, 1855, in Dennis, "Martyrdom of Joseph and Hyrum Smith," 89, 101
30. Dan Jones, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum!" ; Dan Jones to Thomas Bullock, Jan. 20, 1855, in Dennis, "Martyrdom of Joseph and Hyrum Smith," 89, 101 テーマ：ジョセフ・スミスの預言
31. Joseph Smith to Emma Smith, June 27, 1844, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library; Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:323; Dan Jones, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum!," in Dennis, "Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum," 90; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 174-76
32. Clayton, Journal, June 26, 1844; Joseph Smith to Emma Smith, June 27, 1844, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library; Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:323; see also Richards, Journal, June 26, 1844, in *JSP*, J3:314-23
33. Joseph Smith to Emma Smith, June 27, 1844, copy, Joseph Smith Collection, Church History Library
34. Ford, History of Illinois, 346; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 186
35. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 186; Mace, Autobiography, 107; Clayton, Journal, June 27, 1844
36. Clayton, Journal, June 27, 1844; Mace, Autobiography, 107-8; Ford, History of Illinois, 346-47; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 192
37. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:327; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 182; "Statement of Facts," *Times and Seasons*, July 1, 1844, 5:563
38. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:327; John Fullmer to George A. Smith, Nov. 27, 1854; Cyrus Wheelock to George A. Smith, Dec. 29, 1854, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library; *JSP*, J3:327, note 128; "History of Joseph Smith," *LDS Millennial Star*, June 14, 1862, 24:375; Stephen Markham to Wilford Woodruff, June 20, 1856, Historian's Office, Joseph Smith History Documents, Church History Library
39. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:326; Carruth and Staker, "John Taylor's June 27, 1854, Account of the Martyrdom," 59; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 180-81; A Collection of Sacred Hymns [1840], 254-57; see also 「悩める旅人」『賛美歌』15番 テーマ：賛美歌
40. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:326-27; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 181-82
41. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:327; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 182; Ford, History of Illinois, 353
42. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:327; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 182
43. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:327; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 182-83
44. Richards, Journal, June 27, 1844, in *JSP*, J3:329; Willard Richards, "Two Minutes in Jail," Nauvoo Neighbor, July 24, 1844, [3]; John Taylor, "The Martyrdom of Joseph Smith," in Burton, City of the Saints, 537; see also "Two Minutes in Jail," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1844, 5:598-99; and Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 182-83
45. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 183; Willard Richards, "Two Minutes in Jail," Nauvoo Neighbor, July 24, 1844, [3]; see also "Two Minutes in Jail," *Times and Seasons*, Aug. 1, 1844, 5:598-99 テーマ：ジョセフとハイラム・スミスの死

第 45 章：全能の神の土台

1. Mary Audentia Smith Anderson, "The Memoirs of President Joseph Smith," *Saints' Herald*, Jan. 29, 1935, 143
2. Call, Autobiography and Journal, 12

3. Mary Audentia Smith Anderson, "The Memoirs of President Joseph Smith," *Saints' Herald*, Jan. 29, 1835, 143; "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [2]-[3]
4. "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [2]-[3]
5. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 188; "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [3]
6. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 312
7. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 183; Willard Richards, "Two Minutes in Jail," *Nauvoo Neighbor*, July 24, 1844, [3] テーマ：ジョセフ・スミスの預言
8. *Portrait and Biographical Record of Hancock, McDonough and Henderson Counties, Illinois*, 135-36; see also Carruth and Staker, "John Taylor's June 27, 1854, Account of the Martyrdom," 31
9. Willard Richards and John Taylor to Thomas Ford and Others, June 27, 1844, Willard Richards, *Journals and Papers*, Church History Library; *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 185; see also Roberts, *Life of John Taylor*, 144-45
10. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 188; Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, June 30, 1844, Church History Library; "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [3].
11. *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 188; Clayton, *Journal*, June 28, 1844; Zina D. H. Young, *Diary*, June 28, 1844
12. Mace, *Autobiography*, 110; "Who Are the Rebels?," *LDS Millennial Star*, Mar. 20, 1858, 20:179
13. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 312-13; "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [3]; *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 188-89; Mary Audentia Smith Anderson, "The Memoirs of President Joseph Smith," *Saints' Herald*, Jan. 29, 1935, 143
14. Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 312-13
15. "The Prophet's Death!," *Deseret Evening News*, Nov. 27, 1875, [3]; *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 189
16. Phelps, *Funeral Sermon of Joseph and Hyrum Smith*, 1855, Church History Library
17. Mary Ann Angell Young to Brigham Young, June 30, 1844, Brigham Young Office Files, Church History Library; see also Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, June 30, 1844, Church History Library. Original source has "Our dear brother Joseph Smith and Hyrum has fell victims to a ferocious mob."
18. Vilate Murray Kimball to Heber C. Kimball, June 30, 1844, Church History Library.
19. Phebe Carter Woodruff to "Dear Parents," July 30, 1844, Church History Library; see also Mahas, "Remembering the Martyrdom," 299-306
20. Historian's Office, *Brigham Young History Drafts*, 98-100; "History of Brigham Young," *Deseret News*, Mar. 24, 1858, 1; Historian's Office, *Manuscript History of Brigham Young*, book G, 103
21. "History of Brigham Young," *Deseret News*, Mar. 24, 1858, 1; Historian's Office, *Brigham Young History Drafts*, 99; Woodruff, *Journal*, July 18, 1844
22. Woodruff, *Journal*, July 18, 1844
23. Clayton, *Journal*, July 2-4, 7, and 12, 1844; Oaks and Bentley, "Joseph Smith and Legal Process," 735-82; for an example of a deed prepared to separate Joseph's personal property from church property, see Bond from Joseph Smith, Sidney Rigdon, and Hyrum Smith, Jan. 4, 1842, at josephsmithpapers.org テーマ：エマ・ヘイル・スミス
24. Clayton, *Journal*, July 12, 1844; Obituary for Samuel H. Smith, *Times and Seasons*, Aug. 1, 1844, 5:606-7; Lucy Mack Smith, *History*, 1845, 313-14.
25. Clayton, *Journal*, July 4-8, 1844
26. Clayton, *Journal*, July 12, 1844; *JSP*, J3:163, note 726
27. Pratt, *Autobiography*, 371-73; Clayton, *Journal*, July 14, 1844
28. Pratt, *Autobiography*, 372; *Joseph Smith History*, 1838-56, volume F-1, 293; 教義と聖約 100 : 9 (Revelation, Oct. 12, 1833, at josephsmithpapers.org); Council of Fifty, "Record," May 6, 1844, in *JSP*, CFM:157-59
29. "Nauvoo Journals, May 1843-June 1844," in *JSP*, J3:xxiii; *JSP*, J3:79-80, notes 364-66; "Continuation of Elder Rigdon's Trial," *Times and Seasons*, Oct. 1, 1844, 5:660-66;

- Wilford Woodruff to the "Church of Jesus Christ of Latter-day Saints," Oct. 11, 1844, *Times and Seasons*, Nov. 1, 1844, 5:698-700; "Special Meeting," *Times and Seasons*, Sept. 1, 1844, 5:637-38
30. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 293; addenda, 10; Speech of Elder Orson Hyde, 13 テーマ：シドニー・リグドン
31. Willard Richards, Journal, Aug. 4, 1844; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 293
32. Woodruff, Journal, July 24 and Aug. 5-6, 1844
33. Woodruff, Journal, Aug. 7, 1844
34. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 294
35. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 295-96; 教義と聖約 100:9 - 11 (Revelation, Oct. 12, 1833, at josephsmithpapers.org); see also 教義と聖約 76 章 (Vision, Feb. 16, 1832, at josephsmithpapers.org)
36. Woodruff, Journal, Aug. 7, 1844
37. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 296
38. Historian's Office, General Church Minutes, Dec. 5, 1847; see also Walker, "Six Days in August," 181; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 296
39. Sidney Rigdon, Discourse, Aug. 8, 1844, Historian's Office, General Church Minutes, Church History Library; Jensen and Carruth, "Sidney Rigdon's Plea to the Saints," 133-37; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 296. The original has "There is a spirit who shall be greatest in our midst."
40. Brigham Young, Discourse, Aug. 8, 1844, Historian's Office, General Church Minutes, Church History Library; Jensen and Carruth, "Sidney Rigdon's Plea to the Saints," 138-39; Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 297-98; "Special Meeting," *Times and Seasons*, Sept. 1, 1844, 5:637-38; see also Brigham Young, Journal, Aug. 8, 1844
41. Hoyt, Reminiscences and Diary, volume 1, 7, 9-10, 16-17, 19-21; Jorgensen, "Mantle of the Prophet Joseph," 139-42; Whitney, History of Utah, 4:303
42. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 296; "Special Meeting," *Times and Seasons*, Sept. 1, 1844, 5:637; Brigham Young, Journal, Aug. 8, 1844
43. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 298; Woodruff, Journal, Aug. 8, 1844; Afternoon Meeting, Aug. 8, 1844, Historian's Office, General Church Minutes, as transcribed by Sylvia Ghosh, copy at Church History Library
44. Hoyt, Reminiscences and Diary, volume 1, 20-21; see also Jorgensen, "Mantle of the Prophet Joseph," 130, 142
45. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 298-99 テーマ：教会指導者の職の継承
46. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 302; Hoyt, Reminiscences and Diary, volume 1, 20-21; Woodruff, Journal, Aug. 8, 1844; Afternoon Meeting, Aug. 8, 1844, Historian's Office, General Church Minutes, as transcribed by Sylvia Ghosh, copy at Church History Library テーマ：教会員の同意
47. Joseph Smith History, 1838-56, volume F-1, 303
48. Hoyt, Reminiscences and Diary, volume 1, 20-21; see also Jorgensen, "Mantle of the Prophet Joseph," 125-204
49. Hoyt, Reminiscences and Diary, volume 1, 21
50. Woodruff, Journal, Aug. 9, 1844; Brigham Young, Journal, Aug. 9, 1844
51. Woodruff, Journal, Aug. 12, 1844
52. Woodruff, Journal, Aug. 18, 1844; "Letter from Joseph Smith to James J. Strang," Voree Herald, Jan. 18, 1846, [1]; "Strang, James Jesse," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：その他の末日聖徒の動向
53. Woodruff, Journal, Aug. 18, 1844
54. Woodruff, Journal, Aug. 27, 1844
55. Woodruff, Journal, Aug. 28, 1844; see also "Jones, Dan," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org

第 46 章：力を授けられ

1. "An Epistle of the Twelve," *Times and Seasons*, Oct. 1, 1844, 5:668 テーマ：ノーブー神殿
2. Peter Maughan to Willard Richards, Sept. 21, 1844, Willard Richards, Journals and Papers, Church History Library; Maughan, *Autobiography*, [59]–[60]
3. Clayton, Journal, Dec. 7, 1845; Historian's Office, *History of the Church, 1838–circa 1882*, volume 13, Sept. 24 and 29, 1844; Brigham Young, Journal, Aug. 25, 1844; see also Taylor, Journal, Dec. 25, 1844
4. Gregory, "Sidney Rigdon," 51; Brigham Young, Journal, Sept. 8–9, 1844; Orson Hyde to "Dear Brethren," Sept. 12, 1844, Brigham Young Office Files, Church History Library; William Clayton to Wilford Woodruff, Oct. 7, 1844, Wilford Woodruff, Journals and Papers, Church History Library; William Player, Statement, Dec. 12, 1868, Church History Library; Letter to the Editor, *Nauvoo Neighbor*, May 21, 1845, [3]
5. Clayton, Journal, Aug. 15, 1844; Historian's Office, *History of the Church, 1838–circa 1882*, *History of Brigham Young*, volume 13, Aug. 19, 1844; Lucy Meserve Smith, Statement, undated, Church History Library
6. Leonard, *Nauvoo*, 503; "Part 2: February–May 1845," in *JSP*, CFM:209. ジョセフ・スミスがその生涯において結び固められた女性の正確な人数は、その証拠が断片的であるため不明である。慎重に見積もって、30 から 40 人の間だと推測される。「カートランドとノーブーにおける多妻結婚」福音のテーマ、topics.lds.org 参照
7. "The Mormon Troubles" and "The Carthage Assassins," *Nauvoo Neighbor*, June 4, 1845, 1, [2]; Brigham Young to Parley P. Pratt, May 26, 1845, Church History Library; Journal of the Senate . . . of Illinois, Dec. 19, 1844, 80–81; Oaks and Hill, *Carthage Conspiracy*, 79, 184–86; Leonard, *Nauvoo*, 464–74.
8. Young, Journal, Jan. 24, 1845
9. "The Council of Fifty in Nauvoo, Illinois," in *JSP*, CFM:xl–xlxiii; Council of Fifty, "Record," Mar. 1, 1845, in *JSP*, CFM:251–52, 255, 256–57; see also "Dana (Denna)," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org テーマ：アメリカインディアン
10. Council of Fifty, "Record," Mar. 1, 1845, in *JSP*, CFM:257–58
11. Council of Fifty, "Record," Mar. 1, 1845, in *JSP*, CFM:262
12. Council of Fifty, "Record," Mar. 1, 4, 18, and 22, 1845; Apr. 11, 1845, in *JSP*, CFM:257, 273–76, 290–91, 328, 350, 394–96, 399
13. Council of Fifty, "Record," Apr. 22, 1845, in *JSP*, CFM:436; "Tindall, Solomon," Biographical Entry, Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org; *JSP*, CFM:436, note 757
14. Phineas Young, Journal, Apr. 23–May 12, 1845
15. Pratt, Journal, June 1, July 22, and Sept. 5, 1844; Jan. 5, Mar. 23, and Apr. 6, 1845; "Extract of a Letter," *LDS Millennial Star*, Aug. 1, 1845, 6:59; see also Garr, "Latter-day Saints in Tubuai," 4–9
16. Pratt, Journal, Apr. 6, 1845
17. Pratt, Journal, July 1, 1845
18. Pratt, Journal, July 9, 1845; Ellsworth, *Journals of Addison Pratt*, 238–39; "From the Islands of the Sea," *Times and Seasons*, Dec. 15, 1844, 5:739–40
19. Pratt, Journal, July 1, 1845
20. Pratt, Journal, July 9–13, 1845 テーマ：フランス領ポリネシア
21. Pratt, Journal and *Autobiography*, 124; Ellsworth, *History of Louisa Barnes Pratt*, 75; "Mobbing Again in Hancock!," *Nauvoo Neighbor*, Sept. 10, 1845, [2]; see also Historian's Office, *History of the Church, 1838–circa 1882*, *History of Brigham Young*, volume 14, Sept. 16, 1845
22. Pratt, Journal and *Autobiography*, 124; Ellsworth, *History of Louisa Barnes Pratt*, 75–76; "Mobbing Again in Hancock!," *Nauvoo Neighbor*, Sept. 10, 1845, [2]; "Historic Sites and Markers: Morley's Settlement," 153–55
23. Brigham Young, Journal, Sept. 16, 1845; Historian's Office, *History of the Church*, volume 14, Sept. 11, 1845

24. Pratt, Journal and Autobiography, 125; see also Ellsworth, History of Louisa Barnes Pratt, 76
25. Foote, Autobiography and Journal, Oct. 6, 1845; McBride, House for the Most High, 231-33
26. "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Nov. 1, 1845, 6:1008
27. Oaks and Hill, Carthage Conspiracy, 184-86
28. Council of Fifty, "Record," Sept. 9, 1845, in *JSP*, CFM:467-75 テーマ: 五十人評議会
29. "Conference Minutes," *Times and Seasons*, Nov. 1, 1845, 6:1010-11; see also "First Meeting in the Temple," *Times and Seasons*, Nov. 1, 1845, 6:1017 テーマ: ノープーからの退去
30. Tullidge, Women of Mormondom, 321; Norton, Reminiscence and Journal, Nov. 3, 17, and 26, 1845; Kimball, Diary, Nov. 24, 26, and 29, 1845; Leonard, Nauvoo, 252-55; McBride, House for the Most High, 253-61 テーマ: 神殿のエンダウメント
31. テーマ: 死者のためのバプテスマ
32. Brigham Young, "Speech," *Times and Seasons*, July 1, 1845, 6:954-55
33. Kimball, Diary, Nov. 29 and Dec. 9, 1845; Brigham Young, Journal, Dec. 10, 1845; McBride, House for the Most High, 264-65
34. Historian's Office, History of the Church, volume 14, Dec. 27, 1845; Lee, Journal, Dec. 10, 1845; see also McBride, House for the Most High, 286
35. "Pen Sketch of an Illustrious Woman," Woman's Exponent, Oct. 15, 1880, 9:74; Kimball, Diary, Dec. 10 and 20, 1845; Thompson, Autobiographical Sketch, 10 テーマ: 油注がれた定員会 (「聖なる位」)
36. Cowan, Temple Building: Ancient and Modern, 29 テーマ: 結び固め
37. Young, Journal, Jan. 12 and 31, 1846; 教義と聖約 128:18 (Letter to "The Church of Jesus Christ of Latter Day Saints," Sept. 6, 1842, at josephsmithpapers.org)
38. Reports of the U. S. District Attorneys, 1845-50, Report of Suits Pending, Circuit Court of the District of Illinois, Dec. 1845 term, Dec. 17-18, 1845, microfilm, Records of the Solicitor of the Treasury, copy at Church History Library; Brigham Young, in Journal of Discourses, July 23, 1871, 14:218-19; Stout, Reminiscences and Journals, Dec. 23-24, 1845
39. Ford, History of Illinois, 404, 410-13; Historian's Office, History of the Church, volume 15, Jan. 27, 1846
40. Council of Fifty, "Record," Jan. 11, 1846, in *JSP*, CFM:510-21; George A. Smith, in Journal of Discourses, June 20, 1869, 13:85.
41. Council of Fifty, "Record," Jan. 13, 1846, in *JSP*, CFM:521-22; Lee, Journal, Jan. 13, 1846; see also イザヤ 11:12
42. Historian's Office, History of the Church, volume 15, Jan. 31-Feb. 2, 1846
43. Young, Journal, Feb. 3, 1846; Historian's Office, History of the Church, volume 15, Feb. 3-7, 1846
44. Lee, Journal, Feb. 4, 1846; Historian's Office, History of the Church, volume 15, Feb. 8, 1845 テーマ: ノープー神殿, ノープーからの退去
45. See McBride, House for the Most High, 320-22
46. Pratt, Journal and Autobiography, 126
47. Young, Diary and Reminiscences, 3
48. Young, Diary and Reminiscences, 3; "Last Testimony of Sister Emma," Saints' Herald, Oct. 1, 1879, 289-90 テーマ: エマ・ヘイル・スミス
49. Young, Diary and Reminiscences, 3-4; Lyman, Journal, 14
50. Rich, Autobiography and Journal, 72

出典について

本書は、500点以上の歴史資料に基づき、物語風に綴られたノンフィクションです。事実と異なる点がないよう、細心の注意が払われました。初期の末日聖徒たちは、手紙や日記、新聞記事、自伝を多く記しています。そのため、1815年から1846年にかけての教会歴史を裏付ける文書は豊富にあります。しかし、読者は本書で展開される物語が事実と寸分の違いもないと決めてかかるべきではありません。過去の記録がすべてそろっているわけではありませんし、現時点でそれを解釈するわたしたちの能力にも限りがあります。

歴史的資料にはすべて、記録の脱落や曖昧さ、偏見が含まれているものです。筆者の視点を通してのみ、物事を見て、伝えていることが多いのです。そのため、同じ出来事を目の当たりにしていても、その経験や記憶、記録は筆者によって異なり、見方が多岐にわたるゆえに、歴史の解釈が幾通りにもなるのです。歴史家が苦勞するのは、既存の物の見方と歴史の断片を寄せ集めたうえで入念な分析を行い、解釈し、過去の出来事を正確に理解することです。

『聖徒たち』は、末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史にまつわる真実の物語であり、現時点で存在する歴史資料から分かること、理解できることに基づいて書かれています。これが教会の神聖な歴史を語る唯一の記録というわけではありませんが、資料を調べて本書を執筆・編集した研究者たちは、歴史的資料を熟知しており、それらを縦横に使いこなし、使用した資料を章末の注や出典一覧に明記しています。資料の多くはデジタル化されており、章末の注にリンクしているため、それらの資料を自分で読み、検討することを読者の皆様にお勧めします。さらなる資料の発見や、既存の資料に対する新たな解釈により、そのうちに違った意味付けや解釈、新たな見方が生まれることもあるでしょう。

『聖徒たち』の物語は、一次資料と二次資料を活用して作成しています。一次資料は、実際に出来事を目にした人々による証言です。中には、手紙や日記のように、事件が起きたときに書かれたものがあります。このような資料には、そのとき人々が何を考え、感じ、行ったかについて記録されているため、過去をその時点で解釈した表現が成されています。他の一次資料としては、自伝のように、後日書かれたものもあります。このような資料を読むと、過去が時を経て、筆者にとってどのような意味を持つようになったかが分かります。また、過去の出来事の重要性を認識するという点では、当時書かれた資料に比べて優れている場合が多いのです。ところが、記憶に頼って書いているため、後日書かれた資料には正確性に乏しい内容が含まれている可能性があり、筆者による後の解釈や信念の影響を受けている場合もあります。

歴史的二次資料には、出来事を実際に見ていない人々から収集した情報が書かれています。このような資料には、家族の歴史や学術論文があります。本書は、そのような資料によって成り立っています。より広範な背景を知り、解釈を行ううえで役立つ貴重な記録です。

『聖徒たち』の執筆に用いられた資料はすべて、信頼性が評価され、資料と食い違う点がないか、一文ずつ度重なる確認が行われています。会話その他の引用は、歴史資料から直接、一字一句違えずに引用しました。直接引用した場合の綴りおよび大文字、句読点は、分かりやすくするため、断りなく標準的な用法に修正しました。まれな例ではありますが、過去形を現在形に直す、あるいは標準的な文法に修正するといった大きな修正も、引用文の読みやすさを向上させるために行っています。その場合には、変

更点に関する説明を章末の注に付け加えました。どの資料をどのように用いるかは、歴史家と執筆者、編集者によるチームが、歴史的整合性と文学性に基づいて決めました。

例として、ルーシー・マック・スミスの回想録は、本書の最初の数章を書くうえで欠かせない資料です。ルーシーはこれを69歳のときに、1844年から1845年にかけて、マーサ・ジェーン・ノールトン・コーレイとその夫ハワードの助けを受けながら編さんしました。回想録のため、ルーシーが語る話に間違いがないわけではありませんが、概して信頼できると判断されました。本書では、この回想録を慎重に扱っており、ほとんどの場合、ルーシー自身が目撃した出来事を引用しています。この回想録の話について詳しくは、「ルーシー・マック・スミス」(saints.lds.org/jpn)を参照してください。

本書を執筆するに当たって、当教会に反対する立場から書かれた資料を用い、引用もしましたが、そのような資料は主に、教会初期の反対勢力を描写するために使いました。ジョセフ・スミスおよび教会に大々的に敵対する立場から書かれてはいるものの、この種の文書には、ほかにはない詳細な事項が記録されている場合があります。そのような詳細については、ほかの記録によって信ぴょう性が概ね確認された場合にのみ使用しました。教会に反対する立場から書かれた記録から事実を抜き出した場合、敵対的な解釈は採用せずに掲載しました。

一般の読者を対象に書き上げた物語風の歴史書として、本書は教会の基本的な歴史を、理路整然とした読みやすい体裁で提示しています。一般的な物語の技法を用いながらも、歴史資料に記載されている情報を越えたことは書いていません。顔の表情や天候など、細かな事柄まで記述している文があるのは、それが歴史記録に記載されているか、あるいは歴史記録から十分に推測されるからです。

読みやすい語り口にこだわったため、本書では、歴史記録または文そのものに対して問題提起をすることは、まずありません。そのような参考資料に基づく議論は、テーマ別の論文(saints.lds.org/jpn)に委ねています。教会歴史を調べる際には、これらの論文を閲覧することを読者の方々にお勧めします。

出典一覧

この一覧は、『聖徒たち——末日におけるイエス・キリスト教会の物語』第1巻の出典に関する包括的なガイドとなっています。収録された引用元のうち、原稿に付されている日付は、原稿が作成された日付を表しています。原稿に記載されている出来事が起こった日付と必ずしも一致するわけではありません。『The Joseph Smith Papers』（ジョセフ・スミス文書）の巻数は、「JSP」のところに表示されています。資料の多くはデジタル版で提供されており、saints.lds.org/jpnと福音ライブラリーでご覧いただける本書の電子版にリンクが張られています。

この出典一覧で使用されている略記は以下のとおりです。

BYU: L・トム・ベリー特別蔵書, ハロルド・B・リー図書館, ユタ州プロボのブリガム・ヤング大学

CHL: 教会歴史図書館, 末日聖徒イエス・キリスト教会, ソルトレーク・シティー

FHL: 家族歴史図書館, 末日聖徒イエス・キリスト教会, ソルトレーク・シティー

Abbott Family Collection, 1831–2000. CHL.

Adams, Dale W. "Grandison Newell's Obsession." *Journal of Mormon History* 30, no. 1 (2004): 159–88.

Albany Evening Journal. Albany, NY. 1830–63.

Alexander, Thomas G. *Things in Heaven and Earth: The Life and Times of Wilford Woodruff, a Mormon Prophet*. Salt Lake City: Signature Books, 1991.

Allen, James B., Ronald K. Esplin, and David J. Whittaker. *Men with a Mission, 1837–1841: The Quorum of the Twelve Apostles in the British Isles*. Salt Lake City: Deseret Book, 1992.

Allen, James B., and Malcom R. Thorp. "The Mission of the Twelve to England, 1840–41: Mormon Apostles and the Working Class." *BYU Studies* 14, no. 4 (Summer 1975): 499–526.

Allen, Lucy M. Autobiographical Sketch, no date. CHL.

Alton Telegraph and Democratic Review. Alton, IL. 1836–55.

Amboy Journal. Amboy, IL. 1870–1913.

Ames, Ira. Autobiography and Journal, 1858. CHL.

Anderson, Karl Ricks. *Joseph Smith's Kirtland: Eyewitness Accounts*. Salt Lake City: Deseret Book, 1989.

Anderson, Richard Lloyd. "Jackson County in Early Mormon Descriptions." *Missouri Historical Review* 65, no. 3 (Apr. 1971): 270–93.

———. *Joseph Smith's New England Heritage: Influences of Grandfathers Solomon Mack and Asael Smith*. Rev. ed. Salt Lake City: Deseret Book; Provo, UT: Brigham Young University Press, 2003.

Arnold, Isaac N. *Reminiscences of the Illinois Bar Forty Years Ago: Lincoln and Douglas as Orators and Lawyers*. Chicago: Fergus Printing, 1881.

Arrington, Leonard J. "James Gordon Bennett's 1831 Report on 'The Mormons.'" *BYU Studies* 10 (Spring 1970): 353–64.

Ashurst-McGee, Mark. "The Josiah Stowell Jr. –John S. Fullmer Correspondence." *BYU Studies* 38, no. 3 (1999): 108–17.

Backman, Milton V., Jr. *The Heavens Resound: A History of the Latter-day Saints in Ohio, 1830–1838*. Salt Lake City: Deseret Book, 1983.

Baldwin, Nathan Bennett. Account of Zion's Camp, 1882. Typescript. CHL.

Ball, Isaac Birkenhead. "The Prophet's Sister Testifies She Lifted the B. of M. Plates," Aug. 31, 1954. CHL.

Bartlett, W. H. *Walks about the City and Environs of Jerusalem*. London: Hall, Virtue, 1840.

Baugh, Alexander L. *A Call to Arms: The 1838 Mormon Defense of Northern Missouri*. Dissertations in Latter-day Saint History. Provo, UT: Joseph Fielding Smith Institute for Latter-day Saint History; BYU Studies, 2000.

———, ed. *Days Never to Be Forgotten: Oliver Cowdery*. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2009.

- . “I’ll Never Forsake”: Amanda Barnes Smith (1809–1886).” In *Women of Faith in the Latter Days*. Vol. 1, 1775–1820, edited by Richard E. Turley Jr. and Brittany A. Chapman, 450–60. Salt Lake City: Deseret Book, 2011.
- . “Joseph Smith in Northern Missouri.” In *Joseph Smith, the Prophet and Seer*, edited by Richard Neitzel Holzapfel and Kent P. Jackson, 291–346. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University; Salt Lake City: Deseret Book, 2010.
- . “Joseph Smith’s Athletic Nature.” In *Joseph Smith: The Prophet, The Man*, edited by Susan Easton Black and Charles D. Tate Jr., 137–50. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 1993.
- . “Joseph Young’s Affidavit of the Massacre at Haun’s Mill.” *BYU Studies* 38, no. 1 (1999): 188–202.
- . “Kirtland Camp, 1838: Bringing the Poor to Missouri.” *Journal of Book of Mormon Studies* 22, no. 1 (2013): 58–61.
- . “Missouri Governor Lilburn W. Boggs and the Mormons.” *John Whitmer Historical Association Journal* 18 (1998): 111–32.
- . “A Rare Account of the Haun’s Mill Massacre: The Reminiscence of Willard Gilbert Smith.” *Mormon Historical Studies* 8, nos. 1 and 2 (2007): 165–71.
- . “We Took Our Change of Venue to the State of Illinois: The Gallatin Hearing and the Escape of Joseph Smith and the Mormon Prisoners from Missouri, April 1839.” *Mormon Historical Studies* 2, no. 1 (2001): 59–82.
- Baugh, Alexander L., and Richard Neitzel Holzapfel. “‘I Roll the Burthen and Responsibility of Leading This Church off from My Shoulders on to Yours’: The 1844/1845 Declaration of the Quorum of the Twelve regarding Apostolic Succession.” *BYU Studies* 49, no. 3 (2010): 5–19.
- Benjamin Brown Family Collection, 1835–1983. CHL.
- Bennett, Richard E. “‘Quincy — the Home of Our Adoption’: A Study of the Mormons in Quincy, Illinois, 1838–40.” *Mormon Historical Studies* 2, no. 1 (2001): 103–18.
- . “Read This I Pray Thee”: Martin Harris and the Three Wise Men of the East.” *Journal of Mormon History* 36 (Winter 2010): 178–216.
- 聖書 参照
- Biographical Review of Hancock County, Illinois, Containing Biographical and Genealogical Sketches of Many of the Prominent Citizens of To-Day and Also of the Past*. Chicago: Hobart, 1907.
- “Biography of Mary Ann Angell Young.” *Juvenile Instructor* 26, no. 2 (Jan. 15, 1891): 56–58.
- Bitton, Davis. *George Q. Cannon: A Biography*. Salt Lake City: Deseret Book, 1999.
- Black, Susan Easton, and Harvey Bischoff Black. *Annotated Record of Baptisms for the Dead, 1840–1845, Nauvoo, Hancock County, Illinois*. 7 vols. Provo, UT: Center for Family History and Genealogy, Brigham Young University, 2002.
- Blackstone, William. *Commentaries on the Laws of England: In Four Books; with an Analysis of the Work. By Sir William Blackstone, Knt. One of the Justices of the Court of Common Pleas. In Two Volumes, from the Eighteenth London Edition*. . . . 2 vols. New York: W. E. Dean, 1840.
- Boggs, William M. “A Short Biographical Sketch of Lilburn W. Boggs, by His Son.” *Missouri Historical Review* 4, no. 2 (Jan. 1910): 106–10.
- A Book of Commandments, for the Government of the Church of Christ, Organized according to Law, on the 6th of April, 1830*. Zion [Independence], MO: W. W. Phelps, 1833.
- The Book of Mormon: An Account Written by the Hand of Mormon, upon Plates Taken from the Plates of Nephi*. Palmyra, NY: E. B. Grandin, 1830.
- 「モルモン書——イエス・キリストについてのもう一つの証」ソルトレーク・シティー：末日聖徒イエス・キリスト教会, 2013年
- Bowen, Walter D. “The Versatile W. W. Phelps — Mormon Writer, Educator and Pioneer.” Master’s thesis, Brigham Young University, 1958.
- Bradley, Don. “Mormon Polygamy before Nauvoo? The Relationship of Joseph Smith and Fanny Alger.” In *Persistence of Polygamy: Joseph Smith and the Origins of Mormon Polygamy*, edited by Newell G. Bringham and Craig L. Foster, 14–58. Independence, MO: John Whitmer Books, 2010.
- Bradley, James L. *Zion’s Camp 1834: Prelude to the Civil War*. Logan, UT: By the author, 1990.

- Bradshaw, M. Scott. "Joseph Smith's Performance of Marriages in Ohio." *BYU Studies* 39, no. 4 (2000): 23–69.
- Bray, Justin R. "Within the Walls of Liberty Jail: DC 121, 122, 123." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 256–63. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Breen, Patrick H. *The Land Shall Be Deluged in Blood: A New History of the Nat Turner Revolt*. New York: Oxford University Press, 2016.
- Brekus, Catherine A. *Strangers and Pilgrims: Female Preaching in America, 1740–1845*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1998.
- Briggs, Edmund C. "A Visit to Nauvoo in 1856." *Journal of History* 9, no. 4 (Oct. 1916): 446–62. Brigham Young Office Files, 1832–78. CHL.
- Britton, John. *Bath and Bristol, with the Counties of Somerset and Gloucester, Displayed in a Series of Views; including the Modern Improvements, Picturesque Scenery, Antiques, &c.* London: Jones and Company, 1829.
- Britton, Rollin J. *Early Days on Grand River and the Mormon War*. Columbia: State Historical Society of Missouri, 1920.
- Brunson, Lewis. "Short Sketch of Seymour Brunson, Sr." *Nauvoo Journal* 4 (1992): 3–4.
- Burbank, Daniel M. *Autobiography*, 1863. CHL.
- Burgess, James. *Journal*, 1841–48. CHL.
- Burnett, Peter H. *An Old California Pioneer*. Oakland, CA: Biobooks, 1946.
- . *Recollections and Opinions of an Old Pioneer*. New York: D. Appleton, 1880.
- Burton, Richard F. *The City of the Saints, and Across the Rocky Mountains to California*. New York: Harper and Brothers, 1862.
- Bushman, Richard Lyman. "Joseph Smith as Translator." In *Believing History: Latter-day Saint Essays*, edited by Reid L. Neilson and Jed Woodworth, 233–47. New York: Columbia University Press, 2004.
- . *Joseph Smith: Rough Stone Rolling*. With the assistance of Jed Woodworth. New York: Knopf, 2005.
- . "Oliver's Joseph." In *Days Never to Be Forgotten: Oliver Cowdery*, edited by Alexander L. Baugh, 1–13. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2009.
- . *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities*. New York: Knopf, 1992.
- . "The Visionary World of Joseph Smith." *BYU Studies* 37, no. 1 (1997–98): 183–204.
- Butler, John L. "A Short Account of an Affray That Took Place between the Latter Day Saints and a Portion of the People of Davis County Mo," 1859. CHL.
- . "A Short History," *Autobiography*, circa 1859. CHL.
- Cahoon, Reynolds. *Diaries*, 1831–32. CHL.
- Call, Anson. *Autobiography and Journal*, circa 1856–89. CHL.
- Cannon, Brian Q., and BYU Studies Staff. "Priesthood Restoration Documents." *BYU Studies* 35, no. 4 (1995–96): 163–207.
- Cannon, Eugene M. "Tahiti and the Society Island Mission." *Juvenile Instructor* 32, no. 11 (June 1, 1897): 334–36.
- Carruth, LaJean Purcell, and Mark Lyman Staker. "John Taylor's June 27, 1854, Account of the Martyrdom," *BYU Studies* 50, no. 3 (2011): 25–62.
- Chamberlin, Solomon. *Autobiography*, circa 1858. CHL.
- Chardon Spectator and Geauga Gazette*. Chardon, OH. 1833–35.
- Chenango Union*. Norwich, NY. 1847–1975.
- Chicago Tribune*. Chicago. 1847–.
- Christensen, Edith Rushton. "Edwin Rushton: Bridge Builder and Faithful Pioneer." Salt Lake City: N. p., 1941.
- The Church Historian's Press. Church History Department, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. <http://churchhistorianspress.org>.
- Church History Department Pitman Shorthand Transcriptions, 2013–17. CHL.
- Clayton, William. *History of the Nauvoo Temple*, circa 1845. CHL.
- . *Journals*, 1842–45. CHL.

- . Letter to Madison M. Scott, Nov. 11, 1871. Copy. CHL.
Cleveland Daily Gazette. Cleveland. 1836–37.
Cleveland Weekly Gazette. Cleveland. 1837.
 Collected Material concerning Joseph Smith and Plural Marriage, circa 1870–1912. CHL.
 Collection of Manuscripts about Mormons, 1832–1954. Chicago History Museum.
A Collection of Sacred Hymns, for the Church of the Latter Day Saints. Edited by Emma Smith.
 Kirtland, OH: F. G. Williams, 1835.
A Collection of Sacred Hymns, for the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, in Europe.
 Selected by Brigham Young, Parley P. Pratt, and John Taylor. Manchester, England: W. R. Thomas, 1840.
 Coltrin, Zebedee. Diaries and Notebook, 1832–34. CHL.
 Cook, Lyndon W. , ed. *David Whitmer Interviews: A Restoration Witness*. Orem, UT: Grandin Book, 1991.
 ———. “I Have Sinned against Heaven, and Am Unworthy of Your Confidence, but I Cannot Live without a Reconciliation”: Thomas B. Marsh Returns to the Church.” *BYU Studies* 20, no. 4 (Summer 1980): 389–400.
 ———. *William Law: Biographical Essay, Nauvoo Diary, Correspondence, Interview*. Orem, UT: Grandin Book, 1994.
 Cook, Thomas L. *Palmyra and Vicinity*. Palmyra, NY: Palmyra Courier-Journal, 1930.
 Cooper, F. M. “Spiritual Reminiscences. — No. 2.” *Autumn Leaves* 4, no. 1 (Jan. 1891): 17–20.
 Coray, Martha Jane Knowlton. Notebook, circa 1850. CHL.
 Corrill, John. *A Brief History of the Church of Christ of Latter Day Saints, (Commonly Called Mormons;) Including an Account of Their Doctrine and Discipline; with the Reasons of the Author for Leaving the Church*. St. Louis: By the author, 1839.
 Cowan, Richard O. *Temple Building: Ancient and Modern*. Provo, UT: Brigham Young University Press, 1971.
 Cowdery, Oliver. Diary, Jan. –Mar. 1836. CHL. Also available as Leonard J. Arrington, “Oliver Cowdery’s Kirtland, Ohio, ‘Sketch Book,’” *BYU Studies* 12, no. 4 (Summer 1972): 410–26.
 ———. Letterbook, 1833–38. Henry E. Huntington Library, San Marino, CA.
 ———. Letter to Phineas Young, Mar. 23, 1846. CHL.
 Crawley, Peter, and Richard L. Anderson. “The Political and Social Realities of Zion’s Camp.” *BYU Studies* 14 (Summer 1974): 406–20.
 Crocheron, Augusta Joyce. *Representative Women of Deseret, a Book of Biographical Sketches, to Accompany the Picture Bearing the Same Title*. Salt Lake City: J. C. Graham, 1884.
 Crosby, Caroline Barnes. Reminiscences, no date. In Jonathan and Caroline B. Crosby Papers, circa 1871–75. Copy at CHL.
 Crosby, Jonathan. Autobiography, 1850–52. In Jonathan and Caroline B. Crosby Papers, circa 1871–75. Copy at CHL.
 Cummings, Horace. “Conspiracy of Nauvoo.” Contributor, Apr. 1884, 251–60.
Daily Missouri Republican. St. Louis. 1822–1919.
 Daniels, William M. *Correct Account of the Murder of Generals Joseph and Hyrum Smith, at Carthage. On the 27th Day of June, 1844*. Nauvoo, IL: John Taylor, 1845.
 Darowski, Joseph F. “The Journey of the Colesville Branch: DC 26, 51, 54, 56, 59.” In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 40–44. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
 Darowski, Kay. “Joseph Smith’s Support at Home: DC 4, 11, 23.” In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 10–14. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
 『わたしの王国の娘 — 扶助協会の歴史と業』ソルトレーク・シティー：末日聖徒イエス・キリスト教会, 2011年
 Davis, Matthew L. Letter to Mrs. Matthew [Mary] L. Davis, Feb. 6, 1840. CHL.
 ロナルド・D・デニス「ダン・ジョーンズ—母国に福音を伝えたウエルズ人」『リアホナ』1987年12月号, 25–30

- . “The Martyrdom of Joseph Smith and His Brother Hyrum.” *BYU Studies* 24, no. 1 (Winter 1984): 78–109.
- Derr, Jill Mulvay, Janath Russell Cannon, and Maureen Ursebach Beecher. *Women of Covenant: The Story of Relief Society*. Salt Lake City: Deseret Book; Provo, UT: Brigham Young University Press, 1992.
- Derr, Jill Mulvay, Carol Cornwall Madsen, Kate Holbrook, and Matthew J. Grow, eds. *The First Fifty Years of Relief Society: Key Documents in Latter-day Saint Women's History*. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2016.
- Deseret News*. Salt Lake City. 1850–.
- “Diary of Joseph Fielding.” 1963. Typescript. CHL.
- Dibble, Philo. “Philo Dibble's Narrative.” In *Early Scenes in Church History*, Faith-Promoting Series 8, 74–96. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1882.
- . “Recollections of the Prophet Joseph Smith.” *Juvenile Instructor* 27, no. 10 (May 15, 1892): 302–4.
- . Reminiscences, no date. Typescript. CHL.
- Dickinson, Ellen E. *New Light on Mormonism*. New York: Funk and Wagnalls, 1885.
- Dictionary of Missouri Biography*. Edited by Lawrence O. Christensen, William E. Foley, Gary R. Kremer, and Kenneth H. Winn. Columbia: University of Missouri Press, 1999.
- 教義と聖約 (*The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints: Containing Revelations Given to Joseph Smith, the Prophet, with Some Additions by His Successors in the Presidency of the Church*) ソルトレーク・シティー：末日聖徒イエス・キリスト教会, 2013 年
- Document Containing the Correspondence, Orders, &c. , in Relation to the Disturbances with the Mormons; and the Evidence Given before the Hon. Austin A. King, Judge of the Fifth Judicial Circuit of the State of Missouri, at the Court-House in Richmond, in a Criminal Court of Inquiry, Begun November 12, 1838, on the Trial of Joseph Smith, Jr. , and Others, for High Treason and Other Crimes against the State*. Fayette, MO: Boon's Lick Democrat, 1841.
- Dunn, Lura S. , comp. *Amanda's Journal*. Provo, UT: Lura S. Dunn, [1977?].
- Durham, G. Homer, ed. *The Gospel Kingdom: Selections from the Writings and Discourses of John Taylor*. Salt Lake City: Bookcraft, 1943.
- Durham, Reed C. , Jr. “The Election Day Battle at Gallatin.” *BYU Studies* 13, no. 1 (1973): 36–61.
- Ehat, Andrew F. “Joseph Smith's Introduction of Temple Ordinances and the 1833 Mormon Succession Question.” Master's thesis, Brigham Young University, 1981.
- Ellsworth, S. George, ed. *The History of Louisa Barnes Pratt, Being the Autobiography of a Mormon Missionary Widow and Pioneer. . . . Life Writings of Frontier Women* 3. Logan: Utah State University Press, 1998.
- , ed. *The Journals of Addison Pratt, Being a Narrative of Yankee Whaling in the Eighteen Twenties, a Mormon Mission to the Society Islands. . . .* Salt Lake City: University of Utah Press, 1990.
- “Elder John Brush.” *Autumn Leaves* 4, no. 1 (Jan. 1891): 21–24.
- Elders' Journal of the Church of Latter Day Saints*. Kirtland, OH, Oct. –Nov. 1837; Far West, MO, July–Aug. 1838.
- Emma Smith Blessing, 1844. CHL.
- Erie Gazette*. Erie, PA. 1820–59.
- Esplin, Ronald K. “The Emergence of Brigham Young and the Twelve to Mormon Leadership, 1830–1841.” PhD diss. , Brigham Young University, 1981. Also available as *The Emergence of Brigham Young and the Twelve to Mormon Leadership, 1830–1841*, Dissertations in Latter-day Saint History (Provo, UT: Joseph Fielding Smith Institute for Latter-day Saint History; BYU Studies, 2006).
- . “Joseph Smith's Mission and Timetable: ‘God Will Protect Me until My Work Is Done.’” In *The Prophet Joseph: Essays on the Life and Mission of Joseph Smith*, edited by Larry C. Porter and Susan Easton Black, 280–319. Salt Lake City: Deseret Book, 1988.
- Evening and Morning Star*. Edited reprint of *The Evening and the Morning Star*. Kirtland, OH. Jan. 1835–Oct. 1836.
- The Evening and the Morning Star*. Independence, MO, July 1832–July 1833; Kirtland, OH, Dec. 1833–Sept. 1834.

- Far West Committee. Minutes, Jan. –Apr. 1839. CHL.
- Faulring, Scott H. , Kent P. Jackson, and Robert J. Matthews, eds. *Joseph Smith's New Translation of the Bible: Original Manuscripts*. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2004.
- Fielding, Joseph. Journals, 1837–59. CHL.
- Flanders, Robert Bruce. *Nauvoo: Kingdom on the Mississippi*. Urbana: University of Illinois Press, 1956.
- Foote, Warren. Autobiography and Journal, 1837–79. Warren Foote Papers, 1837–1941. CHL.
- Ford, Thomas. *A History of Illinois, from Its Commencement as a State in 1818 to 1847. Containing a Full Account of the Black Hawk War, the Rise, Progress, and Fall of Mormonism, the Alton and Lovejoy Riots, and Other Important and Interesting Events*. Chicago: S. C. Griggs; New York: Ivison and Phinney, 1854.
- Foster, Craig L. *Penny Tracts and Polemics: A Critical Analysis of Anti-Mormon Pamphleteering in Great Britain (1837–1860)*. Salt Lake City: Greg Kofford Books, 2002.
- Freidel, Frank, with Hugh S. Sidney. *The Presidents of the United States of America*. 15th ed. Washington, DC: White House Historical Association, 1999.
- Gates, Susa Young. *History of the Young Ladies' Mutual Improvement Association of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, from November 1869 to June 1910*. Salt Lake City: Deseret News, 1911.
- . [Homespun, pseud.]. *Lydia Knight's History*. Noble Women's Lives Series 1. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1883.
- . Papers, 1852–1932. Utah State Historical Society, Salt Lake City.
- Geauga County Archives and Records Center, Chardon, OH.
- Gentry, Leland Homer, and Todd M. Compton. *Fire and Sword: A History of the Latter-day Saints in Northern Missouri, 1836–39*. Salt Lake City: Greg Kofford Books, 2010.
- Gilbert, John H. Memorandum, Sept. 8, 1892. Photocopy. CHL.
- . Statement, Oct. 23, 1887. CHL.
- Givens, George W. *In Old Nauvoo: Everyday Life in the City of Joseph*. Salt Lake City: Deseret Book, 1990.
- Givens, Terryl L. , and Matthew J. Grow. *Parley P. Pratt: The Apostle Paul of Mormonism*. New York: Oxford University Press, 2011.
- Godfrey, Kenneth W. "Joseph Smith and the Masons." *Journal of the Illinois State Historical Society* 64, no. 1 (Spring 1971): 79–90.
- Godfrey, Matthew C. "Newel K. Whitney and the United Firm: DC 70, 78, 82, 92, 96, 104." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 142–47. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "William McLellin's Five Questions: DC 1, 65, 66, 67, 68, 133." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 137–41. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Gordon, Joseph. "The Public Career of Lilburn W. Boggs." Master's thesis, University of Missouri, 1949.
- 「福音のテーマ」末日聖徒イエス・キリスト教会 (<http://lds.org/topics>)
- Greene, John P. *Facts Relative to the Expulsion of the Mormons or Latter Day Saints, from the State of Missouri, under the "Exterminating Order."* Cincinnati: R. P. Brooks, 1839.
- Gregg, Sarah D. Letter to Thomas Gregg, June 14, 1844. Copy. Illinois State Historical Society Papers, 1840–45. CHL.
- Gregg, Thomas. *History of Hancock County, Illinois, together with an Outline History of the State, and a Digest of State Laws*. Chicago: Charles C. Chapman, 1880.
- Gregory, Thomas J. "Sidney Rigdon: Post Nauvoo." *BYU Studies* 21, no. 1 (Winter 1981): 51–67.
- Grua, David W. "Joseph Smith and the 1834 D. P. Hurlbut Case." *BYU Studies* 44, no. 1 (2005): 33–54.
- . "Waiting for the Word of the Lord: DC 97, 98, 101." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 196–201. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.

- Grow, Matthew J. "Thou Art an Elect Lady": DC 24, 25, 26, 27." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 33–39. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Hales, Brian C. *Joseph Smith's Polygamy*. 3 vols. Salt Lake City: Greg Kofford Books, 2013.
- Hales, Kenneth Glyn, ed. *Windows: A Mormon Family*. Tucson, AZ: Skyline Printing, 1985.
- Hall, Mary A. Newell. *Thomas Newell, Who Settled in Farmington, Conn., A. D. 1632. And His Descendants*. Southington, CT: Cochrane Brothers, 1878.
- Hamilton, C. Mark. *Nineteenth-Century Mormon Architecture and City Planning*. New York: Oxford University Press, 1995.
- Hamilton, Marshall. "Thomas Sharp's Turning Point: Birth of an Anti-Mormon." *Sunstone* 13, no. 5 (Oct. 1989): 16–22.
- Hancock, Levi. Autobiography, circa 1854. CHL.
- Harper, Steven C. "Freemasonry and the Latter-day Saint Temple Endowment Ceremony." In *A Reason for Faith*, edited by Laura Harris Hales, 143–57. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University; Salt Lake City: Deseret Book, 2016.
- . "The Law: DC 42." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 93–98. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "A Pentecost and Endowment Indeed!: Six Eyewitness Accounts of the Kirtland Temple Experience." In *Opening the Heavens: Accounts of Divine Manifestations, 1820–1844*, edited by John W. Welch, 327–71. Salt Lake City: Deseret Book; Provo, UT: Brigham Young University Press, 2005.
- . *Setting the Record Straight: The Word of Wisdom*. Orem, UT: Millennial Press, 2007.
- . "'The Tithing of My People': DC 119, 120." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 250–55. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Hartley, William G. "Almost Too Intolerable a Burthen": The Winter Exodus from Missouri, 1838–39." *Journal of Mormon History* 18, no. 2 (1992): 6–40.
- . *My Best for the Kingdom: History and Autobiography of John Lowe Butler, a Mormon Frontiersman*. Salt Lake City: Aspen Books, 1993.
- . "Newel and Lydia Bailey Knight's Kirtland Love Story and Historic Wedding." *BYU Studies* 39, no. 4 (2000): 7–22.
- . "The Saints' Forced Exodus from Missouri." In *Joseph Smith, the Prophet and Seer*, edited by Richard Neitzel Holzappel and Kent P. Jackson, 347–90. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University; Salt Lake City: Deseret Book, 2010.
- Haven, Charlotte. "A Girl's Letters from Nauvoo." *Overland Monthly* 16, no. 96 (Dec. 1890): 616–38.
- Hayden, Amos Sutton. *Early History of the Disciples in the Western Reserve, Ohio; with Biographical Sketches of the Principal Agents in Their Religious Movement*. Cincinnati: Chase and Hall, 1875.
- Hendricks, Drusilla D. Reminiscences, circa 1877. CHL.
- Hicks, Michael. *Mormonism and Music: A History*. Urbana: University of Illinois Press, 1989.
- Hill, Craig. "The Honey War." *Pioneer America* 14, no. 2 (July 1982): 81–88.
- Hinsdale, B. A. "Life and Character of Symonds Ryder." In Amos S. Hayden, *Early History of the Disciples in the Western Reserve, Ohio; with Biographical Sketches of the Principal Agents in Their Religious Movement*, 245–57. Cincinnati: Chase and Hall, 1875.
- Historian's Office. Brigham Young History Drafts, 1856–58. CHL.
- . General Church Minutes, 1839–77. CHL.
- . Histories of the Twelve, 1856–58, 1861. CHL.
- . "History of Brigham Young." In Manuscript History of Brigham Young, circa 1856–60, vol. 1, 1–104. CHL.
- . History of the Church, 1838–circa 1882. 69 vols. CHL.
- . Joseph Smith History Documents, 1839–60. CHL.
- . Joseph Smith History Draft Notes, circa 1840–80. CHL.
- . Manuscript History of Brigham Young, 1856–62. CHL.

- . Reports of Speeches, 1845–85. CHL.
- Historical Department. Journal History of the Church, 1896–2008. CHL.
- The Historical Record, a Monthly Periodical, Devoted Exclusively to Historical, Biographical, Chronological and Statistical Matters.* Salt Lake City. 1882–90.
- "Historic Sites and Markers: Morley's Settlement." *Nauvoo Journal* 11, no. 1 (Spring 1999): 153–55.
- History of Caldwell and Livingston Counties, Missouri, Written and Compiled from the Most Authentic Official and Private Sources.* . . . St. Louis: National Historical Co., 1886.
- History of Carroll County, Missouri, Carefully Written and Compiled from the Most Authentic Official and Private Sources.* . . . St. Louis: Missouri Historical Company, 1881.
- History of the Church* /Smith, Joseph and others. *History of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints.* Edited by B. H. Roberts. Salt Lake City: Deseret News, 1902–12 (vols. 1–6), 1932 (vol. 7).
- The History of the Reorganized Church of Jesus Christ of Latter Day Saints. 8 vols. Independence, MO: Herald Publishing House, 1896–1976.
- Holbrook, Joseph. "History of Joseph Holbrook." In Joseph Holbrook, Autobiography and Journal, circa 1860–71. Typescript. CHL.
- . Reminiscences, not before 1871. In Joseph Holbrook, Autobiography and Journal, circa 1860–71. Private possession. Copy at CHL.
- The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments Translated Out of the Original Tongues: And with the Former Translations Diligently Compared and Revised, by His Majesty's Special Command. Authorized King James Version with Explanatory Notes and Cross References to the Standard Works of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints.* Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2013.
- Holzappel, Richard Neitzel, and Steven C. Harper. "This Is My Testimony, Spoken by Myself into a Talking Machine": Wilford Woodruff's 1897 Statement in Stereo." *BYU Studies* 45, no. 2 (2006): 112–16.
- Hoyt, Emily S. Reminiscences and Diary, 1851–93. 7 vols. CHL.
- Huntington, Oliver B. Diary and Reminiscences, 1843–1900. Typescript. CHL.
- Hyde, Myrtle Stevens. *Orson Hyde: The Olive Branch of Israel.* Salt Lake City: Agreka Books, 2000.
- Hyde, Orson. *Ein Ruf aus der Wüste, eine Stimme aus dem Schoose der Erde: Kurzer Ueberblick des Ursprungs und der Lehre der Kirche "Jesus Christ of Latter Day Saints" in Amerika, gekannt von Manchen unter der Benennung: "Die Mormonen."* Frankfurt: Im Selbstverlage des Verfassers, 1842. Excerpts also available in German and in English translation on the Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org.
- . *A Voice from Jerusalem, or a Sketch of the Travels and Ministry of Elder Orson Hyde, Missionary of the Church of Jesus Christ of Latter Day Saints, to Germany, Constantinople, and Jerusalem.* . . . Liverpool: P. P. Pratt, 1842.
- Hyrum Smith Family Bible, 1834. In Hyrum Smith, Papers, circa 1832–44. BYU.
- Illinois State Historical Library. Circuit Court Case Files, 1830–1900. Microfilm. CHL.
- An Illustrated Itinerary of the County of Lancaster.* London: How and Parsons, 1842.
- It Becomes Our Duty to Address You on the Subject of Immediately Preparing.* [Kirtland, OH: May 10, 1834]. Copy at CHL.
- Jackman, Levi. "A Short Sketch of the Life of Levi Jackman." Typescript. CHL.
- Jackson, Stephen T. "Chief Anderson and His Legacy." Madison County Historical Society. Accessed Mar. 21, 2018. <http://andersonmchs.com>.
- James, Jane Manning. Autobiography, circa 1902. CHL.
- Jaques, Vienna. Statement, Feb. 22, 1859. CHL.
- Jeffress, Melinda Evans. "Mapping Historic Nauvoo." *BYU Studies* 32, nos. 1 and 2 (1992): 269–75.
- Jennings, Erin B. "Charles Anthon: The Man behind the Letters." *John Whitmer Historical Association Journal* 32, no. 2 (Fall/Winter 2012): 171–87.
- Jennings, Warren A. "Isaac McCoy and the Mormons," *Missouri Historical Review* 61, no. 1 (Oct. 1966): 62–82.

- Jensen, Robin S. , and LaJean P. Carruth. "Sidney Rigdon's Plea to the Saints: Transcription of Thomas Bullock's Shorthand Notes from the August 8, 1844, Morning Meeting." *BYU Studies Quarterly* 53, no. 2 (2014): 121–39.
- Jenson, Andrew. Collection, circa 1841–1942. CHL.
- Jessee, Dean. "Joseph Knight's Recollection of Early Mormon History." *BYU Studies* 17, no. 1 (Autumn 1976): 29–39.
- . "Walls, Grates and Screaking Iron Doors': The Prison Experience of Mormon Leaders in Missouri, 1838–1839." In *New Views of Mormon History: Essays in Honor of Leonard J. Arrington*, edited by Davis Bitton and Maureen Ursenbach Beecher, 19–42. Salt Lake City: University of Utah Press, 1987.
- Jessee, Dean C. and John W. Welch. "Revelations in Context: Joseph Smith's Letter from Liberty Jail, March 20, 1839." *BYU Studies* 39, no. 3 (2000): 125–45.
- Jessee, Dean C. , and David J. Whittaker. "The Last Months of Mormonism in Missouri: The Albert Perry Rockwood Journal." *BYU Studies* 28, no. 1 (1988): 5–41.
- Johnson, Benjamin Franklin. "A Life Review," circa 1885–94, 1923. Benjamin Franklin Johnson, Papers, 1852–1923. CHL.
- . Papers, 1852–1911. CHL.
- Johnson, Clark V. , ed. *Mormon Redress Petitions: Documents of the 1833–1838 Missouri Conflict*. Religious Studies Center Monograph Series 16. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 1992.
- Johnson, Janiece. "'Give Up All and Follow Your Lord': Testimony and Exhortation in Early Mormon Women's Letters, 1831–1839." *BYU Studies* 41, no. 1 (2002): 77–107.
- Johnson, Joel H. Notebook, not before 1879. Joel Hills Johnson, Papers, circa 1877–79. CHL.
- . Reminiscences and Journals, 1835–82. Joel Hills Johnson, Papers, circa 1835–82. CHL.
- Jorgensen, Lynne Watkins. "The Mantle of the Prophet Joseph Passes to Brother Brigham: A Collective Spiritual Witness." *BYU Studies Quarterly* 36, no. 4 (1996): 125–204.
- Joseph Smith Letterbook 2 / Smith, Joseph. "Copies of Letters, &c. &c. ," 1839–43. Joseph Smith Collection. CHL.
- The Joseph Smith Papers. Church History Department, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. <http://josephsmithpapers.org>
- Journal of Discourses*. 26 vols. Liverpool: F. D. Richards, 1855–86.
- Journal of the Senate of the Fourteenth General Assembly of the State of Illinois, at Their Regular Session, Begun and Held at Springfield, December 2, 1844*. Springfield, IL: Walters and Weber, 1844.
- Journal of the Senate of the United States of America, Being the First Session of the Twenty-Sixth Congress, Begun and Held at the City of Washington, December 2, 1839*. Washington, DC: Blair and Rives, 1839.
- JSP, CFM / Grow, Matthew J. , Ronald K. Esplin, Mark Ashurst-McGee, Gerrit J. Dirkmaat, and Jeffrey D. Mahas, eds. *Council of Fifty, Minutes, March 1844–January 1846*. Administrative Records series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin, Matthew J. Grow, and Matthew C. Godfrey. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2016.
- JSP, D1 / MacKay, Michael Hubbard, Gerrit J. Dirkmaat, Grant Underwood, Robert J. Woodford, and William G. Hartley, eds. *Documents, Volume 1: July 1828–June 1831*. Vol. 1 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, Richard Lyman Bushman, and Matthew J. Grow. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2013.
- JSP, D2 / Godfrey, Matthew C. , Mark Ashurst-McGee, Grant Underwood, Robert J. Woodford, and William G. Hartley, eds. *Documents, Volume 2: July 1831–January 1833*. Vol. 2 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, Richard Lyman Bushman, and Matthew J. Grow. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2013.
- JSP, D3 / Dirkmaat, Gerrit J. , Brent M. Rogers, Grant Underwood, Robert J. Woodford, and William G. Hartley, eds. *Documents, Volume 3: February 1833–March 1834*. Vol. 3 of the

- Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin and Matthew J. Grow. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2014.
- JSP, D4 / Godfrey, Matthew C. , Brenden W. Rensink, Alex D. Smith, Max H Parkin, and Alexander L. Baugh, eds. *Documents, Volume 4: April 1834–September 1835*. Vol. 4 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin, Matthew J. Grow, and Matthew C. Godfrey. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2016.
- JSP, D5 / Rogers, Brent M. , Elizabeth A. Kuehn, Christian K. Heimburger, Max H Parkin, Alexander L. Baugh, and Steven C. Harper, eds. *Documents, Volume 5: October 1835–January 1838*. Vol. 5 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin, Matthew J. Grow, and Matthew C. Godfrey. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2017.
- JSP, D6 / Ashurst-McGee, Mark, David W. Grua, Elizabeth A. Kuehn, Brenden W. Rensink, and Alexander L. Baugh, eds. *Documents, Volume 6: February 1838–August 1839*. Vol. 6 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin, Matthew J. Grow, and Matthew C. Godfrey. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2017.
- JSP, D7 / Godfrey, Matthew C. , Spencer W. McBride, Alex D. Smith, and Christopher James Blythe, eds. *Documents, Volume 7: September 1839–January 1841*. Vol. 7 of the Documents series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin, Matthew J. Grow, and Matthew C. Godfrey. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2018.
- JSP, H1 / Davidson, Karen Lynn, David J. Whittaker, Richard L. Jensen, and Mark Ashurst-McGee, eds. *Histories, Volume 1: Joseph Smith Histories, 1832–1844*. Vol. 1 of the Histories series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2012.
- JSP, H2 / Davidson, Karen Lynn, Richard L. Jensen, and David J. Whittaker, eds. *Histories, Volume 2: Assigned Historical Writings, 1831–1847*. Vol. 2 of the Histories series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2012.
- JSP, J1 / Jessee, Dean C. , Mark Ashurst-McGee, and Richard L. Jensen, eds. *Journals, Volume 1: 1832–1839*. Vol. 1 of the Journals series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2008.
- JSP, J2 / Hedges, Andrew H. , Alex D. Smith, and Richard Lloyd Anderson, eds. *Journals, Volume 2: December 1841–April 1843*. Vol. 2 of the Journals series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2011.
- JSP, J3 / Hedges, Andrew H. , Alex D. Smith, and Brent M. Rogers, eds. *Journals, Volume 3: May 1843–June 1844*. Vol. 3 of the Journals series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin and Matthew J. Grow. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2015.
- JSP, MRB / Jensen, Robin Scott, Robert J. Woodford, and Steven C. Harper, eds. *Manuscript Revelation Books*. Facsimile edition. First volume of the Revelations and Translations series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2009.
- JSP, R2 / Jensen, Robin Scott, Richard E. Turley Jr. , and Riley M. Lorimer, eds. *Revelations and Translations, Volume 2: Published Revelations*. Vol. 2 of the Revelations and Translations series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Dean C. Jessee, Ronald K. Esplin, and Richard Lyman Bushman. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2011.
- JSP, R3, Part 1 / Skousen, Royal, and Robin Scott Jensen, eds. *Revelations and Translations, Volume 3, Part 1: Printer's Manuscript of the Book of Mormon, 1 Nephi 1–Alma 35*. Facsimile edition. Part 1 of vol. 3 of the Revelations and Translations series of *The Joseph Smith Papers*, edited by Ronald K. Esplin and Matthew J. Grow. Salt Lake City: Church Historian's Press, 2015.
- Kansas City Daily Journal*. Kansas City, MO. 1878–96.
- Keller, Karl. "I Never Knew a Time When I Did Not Know Joseph Smith': A Son's Record of the Life and Testimony of Sidney Rigdon." *Dialogue: A Journal of Mormon Thought* 1, no. 4 (1966): 15–42.

- Kerber, Linda K. "Abolitionists and Amalgamators: The New York City Race Riots of 1834." *New York History* 48, no. 1 (Jan. 1967): 28–39.
- Kimball, Heber C. Collection, 1837–98. CHL.
- . Diary, 1845. BYU.
- . "History of Heber Chase Kimball by His Own Dictation," circa 1842–56. Heber C. Kimball, Papers, 1837–66. CHL.
- . "The Journal and Record of Heber Chase Kimball an Apostle of Jesus Christ of Latter Day Saints," circa 1842–58. Heber C. Kimball, Papers, 1837–66. CHL.
- Kimball, Stanley B. , ed. *On the Potter's Wheel: The Diaries of Heber C. Kimball*. Salt Lake City: Signature Books, 1987.
- Kimball, Vilate Murray. Letters, 1840. CHL.
- . Letter to Heber C. Kimball, June 30, 1844. CHL.
- Kirtland Camp. Journal, Mar. –Oct. 1838. CHL.
- Kirtland Elders' Certificates / Kirtland Elders Quorum. "Record of Certificates of Membership and Ordinations of the First Members and Elders of the Church of Jesus Christ of Latter Day Saints Dating from March 21st 1836 to June 18th 1838 Kirtland Geauga Co. Ohio," 1836–38. CHL.
- Kirtland Safety Society. Stock Ledger, 1836–37. Collection of Manuscripts about Mormons, 1832–1954. Chicago History Museum.
- Klingaman, William K. , and Nicholas P. Klingaman. *The Year without Summer: 1816 and the Volcano That Darkened the World and Changed History*. New York: St. Martin's Griffin, 2014.
- Knight, Joseph, Sr. Reminiscences, no date. CHL.
- Knight, Newel. Autobiography, circa 1871. CHL.
- . Autobiography and Journal, circa 1846. CHL.
- Knutson, Phyllis. "Sheffield Daniels and Abigail Warren." FamilySearch. Compiled by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Accessed Mar. 21, 2018. <https://familysearch.org>.
- Kowallis, Bart J. "In the Thirty and Fourth Year: A Geologist's View of the Great Destruction in 3 Nephi." *BYU Studies* 37, no. 3 (1997–98): 136–90.
- Kuehn, Elizabeth. "More Treasures Than One: DC 111." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 229–34. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Larson, A. Karl, and Katharine Miles Larson, eds. *Diary of Charles Lowell Walker*. 2 vols. Logan: Utah State University Press, 1980.
- Latter Day Saints' Messenger and Advocate*. Kirtland, OH. 1834–37.
- Latter-day Saints' Millennial Star*. Liverpool. 1840–1970.
- Launius, Roger D. , and F. Mark McKiernan. *Joseph Smith, Jr.'s Red Brick Store*. Macomb: Western Illinois University, 1985.
- Laws of the State of Illinois, Passed by the Eleventh General Assembly, at Their Special Session, Began and Held at Springfield, on the Ninth of December, One Thousand Eight Hundred and Thirty-Nine*. Springfield, IL: William Walters, 1840.
- Laws of the State of New-York, Revised and Passed at the Thirty-Sixth Session of the Legislature, with Marginal Notes and References. . . . 2 vols. Albany, NY: H. C. Southwick, 1813.
- Lee, John D. Journal, Feb. –Aug. 1846. John D. Lee, Journals, 1844–53. CHL.
- Leonard, Glen M. *Nauvoo: A Place of Peace, a People of Promise*. Salt Lake City: Deseret Book; Provo, UT: Brigham Young University Press, 2002.
- LeSueur, Stephen C. "High Treason and Murder": The Examination of Mormon Prisoners at Richmond, Missouri, in November 1838." *BYU Studies* 26, no. 2 (1986): 3–30.
- . "Missouri's Failed Compromise: The Creation of Caldwell County for the Mormons." *Journal of Mormon History* 31, no. 3 (Fall 2005): 113–44.
- Levi Richards Family Correspondence, 1827–48. CHL.
- Lewis, David. Autobiography, 1854. CHL.
- "Liberty Jail." Historic Sites, Church History Department, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Accessed Mar. 21, 2018. <http://history.lds.org>.
- "The Life of Norton Jacob." No date. Typescript. CHL.

- Lightner, Mary Elizabeth Rollins. Collection, 1865–1914. BYU.
- . Remarks, Apr. 14, 1905. Typescript. CHL.
- Littlefield, Lyman Omer. *Reminiscences of Latter-day Saints. Giving an Account of Much Individual Suffering Endured for Religious Conscience*. Logan, UT: Utah Journal, 1888.
- Livesey, Richard. *An Exposure of Mormonism, Being a Statement of Facts Relating to the Self-Styled "Latter Day Saints," and the Origin of the Book of Mormon*. Preston, England: J. Livesey, 1838.
- Lyman, Edward Leo, Susan Ward Payne, and S. George Ellsworth, eds. *No Place to Call Home: The 1807–1857 Life Writings of Caroline Barnes Crosby, Chronicler of Outlying Mormon Communities*. Life Writings of Frontier Women, edited by Maureen Ursenbach Beecher. Logan: Utah State University Press, 2005.
- Lyman, Eliza Partridge. Journal, 1846–85, 1927. CHL.
- Mace, Wandle. Autobiography, circa 1890. CHL.
- MacKay, Michael Hubbard. "‘Git Them Translated’: Translating the Characters on the Gold Plates." In *Approaching Antiquity: Joseph Smith and the Ancient World*, edited by Lincoln H. Blumell, Matthew J. Grey, and Andrew H. Hedges, 83–116. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2015.
- Madsen, Carol Cornwall. *In Their Own Words: Women and the Story of Nauvoo*. Salt Lake City: Deseret Book, 1994.
- Madsen, Gordon A. "Joseph Smith and the Missouri Court of Inquiry: Austin A. King’s Quest for Hostages." *BYU Studies* 43, no. 4 (2004): 92–136.
- Mahas, Jeffrey. "Remembering the Martyrdom: DC 135." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 299–306. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Maki, Elizabeth. "‘Go to the Ohio’: DC 35, 36, 37, 38." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 70–73. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "Joseph Smith’s Bible Translation: DC 45, 76, 77, 86, 91." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 99–103. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- "Mary Elizabeth Rollins Lightner." *Utah Genealogical and Historical Magazine* 17 (1926): 193–205, 250–60.
- Mary Elizabeth Rollins Lightner Family Collection. 1833–1973. CHL.
- Mather, Frederic G. "The Early Days of Mormonism." *Lippincott’s Magazine of Popular Literature and Science* 26 (Aug. 1880): 198–211.
- Maughan, Mary Ann Weston. Autobiography. Vol. 1, 1894. CHL.
- McBride, Matthew. "Contributions of Martin Harris: DC 3, 5, 10, 17, 19." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 1–9. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "Ezra Booth and Isaac Morley: DC 57, 58, 60, 61, 62, 63, 64, 71, 73." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 130–36. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . *A House for the Most High: The Story of the Original Nauvoo Temple*. Salt Lake City: Greg Kofford Books, 2007.
- . "Letters on Baptism for the Dead: DC 127, 128." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 272–76. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "‘Our Hearts Rejoiced to Hear Him Speak’: DC 129, 130, 131." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 277–80. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "Religious Enthusiasm among Early Ohio Converts: DC 46, 50." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew

- McBride and James Goldberg, 105–11. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . “The Vision”: DC 76.” In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 148–54. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- McBride, Reuben, Sr. *Reminiscences*, no date. CHL.
- McBride, Spencer W. “When Joseph Smith Met Martin Van Buren: Mormonism and the Politics of Religious Liberty in Nineteenth-Century America.” *Church History: Studies in Christianity and Culture* 85, no. 1 (Mar. 2016): 150–58.
- McGavin, Elmer C. *The Nauvoo Temple*. Salt Lake City: Deseret Book, 1962.
- McLellin, William E. Journal, Nov. 16, 1831–Feb. 25, 1832. William E. McLellin, Papers, 1831–36, 1877–78. CHL. Also available in Jan Shipps and John W. Welch, eds., *The Journals of William E. McLellin, 1831–1836* (Provo, UT: BYU Studies; Urbana: University of Illinois Press, 1994).
- . Letter, Independence, MO, to “Beloved Relatives,” Carthage, TN, Aug. 4, 1832. Photocopy. CHL.
- McMurrin, Joseph W. “An Interesting Testimony.” *Improvement Era* 6, no. 7 (May 1903): 507–10.
- Millennial Harbinger*. Bethany, VA. 1830–70.
- Millet, Joseph. “J. Millet on Cape Breton Island,” 1927. CHL.
- . Record Book, circa 1850–1947. CHL.
- Minute Book 1 / “Conference A,” 1832–37. CHL.
- Minute Book 2 / “The Conference Minutes and Record Book of Christ’s Church of Latter Day Saints,” 1838, 1842, 1844. CHL.
- Missouri, State of. “Evidence.” Hearing Record, Richmond, MO, Nov. 12–29, 1838, State of Missouri v. Joseph Smith et al. for Treason and Other Crimes. Eugene Morrow Violette Collection, 1806–1921, Western Historical Manuscript Collection. University of Missouri and State Historical Society of Missouri, Ellis Library, University of Missouri, Columbia.
- Missouri Argus*. St. Louis. 1835–41.
- Missouri Intelligencer and Boon’s Lick Advertiser*. Franklin, MO, 1819–27; Fayette, MO, 1827–30; Columbia, MO, 1830–35.
- Missouri Republican*. St. Louis. 1822–1919.
- Monkman, Susan C. *The White House: Its Historic Furnishings and First Families*. 2nd ed. Washington, DC: White House Historical Association, 2014.
- Mormon Migration. Brigham Young University. Accessed Mar. 21, 2018. <https://mormonmigration.lib.byu.edu>.
- Mormon Redress Petitions, 1839–45. CHL.
- Mormon War Papers, 1838–41. Missouri State Archives, Jefferson City.
- Morning Courier and New-York Enquirer*. New York City. 1829–61.
- Morris, Larry E. “The Conversion of Oliver Cowdery.” *Journal of Book of Mormon Studies* 16, no. 1 (2007): 4–17.
- . “Oliver Cowdery’s Vermont Years and the Origins of Mormonism.” *BYU Studies* 39, no. 1 (2000): 106–29.
- Murdock, John. Autobiography, circa 1859–67. CHL.
- . Journal, circa 1830–59. CHL.
- Nauvoo, IL. Records, 1841–45. CHL.
- Nauvoo City Council Draft Minutes, 1841–44. Nauvoo, IL, Records, 1841–45. CHL.
- Nauvoo City Council Minute Book / Nauvoo City Council. “A Record of the Proceedings of the City Council of the City of Nauvoo Hancock County, State of Illinois, Commencing A. D. 1841,” circa 1841–45. CHL.
- Nauvoo Expositor*. Nauvoo, IL. 1844.
- Nauvoo Masonic Lodge Minute Book / “Record of Na[u]voo Lodge under Dispensation,” 1842–46. CHL.
- Nauvoo Municipal Court Docket Book / Nauvoo, IL, Municipal Court. “Docket of the Municipal Court of the City of Nauvoo,” circa 1843–45. In Historian’s Office, Historical Record Book, 1843–74, 51–150 and 1–19 (second numbering). CHL.

- Nauvoo Neighbor*. Nauvoo, IL. 1843–45.
- Nauvoo Stake High Council Minutes, 1839–45. CHL.
- Nauvoo Temple. Baptisms for the Dead, 1840–45. CHL.
- Neibaur, Alexander. Journal, 1841–62. CHL.
- Newell, Linda King, and Valeen Tippetts Avery. *Mormon Enigma: Emma Hale Smith*. 2nd ed. Urbana: University of Illinois Press, 1994.
- New York Herald*. New York City. 1835–1924.
- Nicholes, Joseph K. Collection, circa 1930–50. CHL.
- Niles' National Register. Washington, DC. 1837–49.
- Norton, Jacob. Reminiscence and Journal, 1844–52. CHL.
- Nuttall, L. John. Diary, 1876–84. Typescript. In L. John Nuttall, Papers, 1854–1903. CHL.
- Oaks, Dallin H. "The Suppression of the *Nauvoo Expositor*." *Utah Law Review* 9 (Winter 1965): 862–903.
- Oaks, Dallin H. , and Joseph I. Bentley. "Joseph Smith and Legal Process: In the Wake of the Steamboat *Nauvoo*." *Brigham Young University Law Review*, no. 3 (1976): 735–82.
- Oaks, Dallin H. , and Marvin S. Hill. *Carthage Conspiracy: The Trial of the Accused Assassins of Joseph Smith*. Urbana: University of Illinois Press, 1975.
- Oates, Stephen B. *The Fires of Jubilee: Nat Turner's Fierce Rebellion*. New York: Harper and Row, 1975.
- Ogden Herald*. Ogden, UT. 1881–87.
- Ohio Star. Ravenna, OH. 1830–54.
- Olmstead, Jacob W. "Far West and Adam-ondi-Ahman: DC 115, 116, 117." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 235–41. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Ontario Phoenix*. Canandaigua, NY. 1828–32.
- Oration Delivered by Mr. S. Rigdon, on the 4th of July, 1838*. Far West, MO: Journal Office, 1838. Also available in Peter Crawley, "Two Rare Missouri Documents," *BYU Studies* 14 (Summer 1974): 502–27.
- "The Original Prophet. By a Visitor to Salt Lake City." *Fraser's Magazine* 7, no. 28 (Feb. 1873): 225–35.
- Ostler, Craig James. "Photo Essay of Church History Sites in Liverpool and the Ribble Valley." In *Regional Studies in Latter-day Saint Church History: The British Isles*, edited by Cynthia Doxey, Robert C. Freeman, Richard Neitzel Holzapfel, and Dennis A. Wright, 61–78. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2007.
- Packer, Cameron J. "A Study of the Hill Cumorah: A Significant Latter-day Saint Landmark in Western New York." Master's thesis, Brigham Young University, 2002.
- Painesville Republican*. Painesville, OH. 1836–41.
- Painesville Telegraph*. Painesville, OH. 1831–38.
- Palmyra Freeman*. Palmyra, NY. 1828–29.
- Parker, Ellen B. Letters, 1842–51. In Martha G. Boyle, Family Papers, 1842–1972. CHL.
- Partridge, Edward. History, Manuscript, circa 1839. CHL.
- . Journal, Jan. 1835–July 1836. CHL.
- . Letters, 1831–35. CHL.
- . Miscellaneous Papers, circa 1839–May 1840. CHL.
- . Papers, 1818–39. CHL.
- Partridge, Edward, Jr. Genealogical Record, 1878. CHL.
- Pasko, W. W. *Old New York: A Journal Relating to the History and Antiquities of New York City*. New York: By the author, Feb. 1890.
- Patten, David Wyman. Journal, 1832–34. CHL.
- Paul, Hiland, and Robert Parks. History of Wells, Vermont, for *This First Century after Its Settlement*. Rutland, VT: Tuttle, 1869.
- 高価な真珠 (A Selection from the Revelations, Translations, and Narrations of Joseph Smith, First Prophet, Seer, and Revelator to The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints) ソルトレーク・シティー：末日聖徒イエス・キリスト教会, 2013 年
- Peck, Phebe Crosby. Letter to Anna Jones Pratt, Aug. 10, 1832. CHL.

- Peck, Reed. Letter, Quincy, IL, to "Dear Friends," Sept. 18, 1839. Henry E. Huntington Library, San Marino, CA.
- Perrin, Kathleen C. "Seasons of Faith: An Overview of the History of the Church in French Polynesia." In *Pioneers in the Pacific*, edited by Grant Underwood, 201–18. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2005.
- Peter Maughan Family History*. Logan, UT: Peter Maughan Family Organization, 1971.
- Peterson, H. Donl. *The Story of the Book of Abraham: Mummies, Manuscripts, and Mormonism*. Springville, UT: Cedar Fort International, 2008.
- Phelps, William W. Collection of Missouri Documents, 1833–37. CHL.
- . Funeral Sermon of Joseph and Hyrum Smith, 1855. CHL.
- . Letter to Sally Waterman Phelps, May 26, 1835. William W. Phelps, Papers, 1835–65. BYU.
- . Letter to Sally Waterman Phelps. In Historian's Office, Journal History of the Church, July 20, 1835. CHL.
- . Letter to Sally Waterman Phelps, Sept. 16, 1835. CHL.
- . Letter to Sally Waterman Phelps, Apr. 1836. William W. Phelps, Papers, 1835–65. BYU.
- . "A Short History of W. W. Phelps' Stay in Missouri," 1864. CHL.
- Pickup, David M. W. *The Pick and Flower of England: The Illustrated Story of the Mormons in Victorian England*. Lancashire, England: Living Legend, 2001.
- Pillkington, William. Autobiography and Statements, 1934–39. CHL.
- Pitman Shorthand Transcriptions, 1998–2013. CHL.
- Pittsburgh Weekly Gazette*. Pittsburgh. 1841–59.
- Platt, Lyman D. "Early Branches of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 1830–1850." *Nauvoo Journal* 3 (1991): 3–50.
- Player, William. Statement, Dec. 12, 1868. CHL.
- Plewe, Brandon S. , ed. *Mapping Mormonism: An Atlas of Latter-day Saint History*. Provo, UT: Brigham Young University Press, 2012.
- Porter, Larry C. "The Book of Mormon: Historical Setting for Its Translation and Publication." In *Joseph Smith: The Prophet, the Man*, edited by Susan Easton Black and Charles D. Tate Jr. , 49–64. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 1993.
- Portrait and Biographical Record of Hancock, McDonough and Henderson Counties, Illinois: Containing Biographical Sketches of Prominent and Representative Citizens of the County; together with Biographies and Portraits of All the Presidents of the United States*. Chicago: Lake City, 1894.
- Post, Stephen. Journal, 1835–39. Stephen Post, Papers, 1835–1921. CHL.
- Pratt, Addison. Journal, Sept. 1843–Oct. 1844. Addison Pratt, Autobiography and Journals, 1843–52. CHL.
- Pratt, Louisa Barnes. Journal and Autobiography, 1850–80. CHL.
- Pratt, Orson. *A[n] Interesting Account of Several Remarkable Visions, and of the Late Discovery of Ancient American Records*. Edinburgh: Ballantyne and Hughes, 1840.
- Pratt, Parley P. *The Autobiography of Parley Parker Pratt, One of the Twelve Apostles of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Embracing His Life, Ministry and Travels, with Extracts, in Prose and Verse, from His Miscellaneous Writings*. Edited by Parley P. Pratt Jr. New York: Russell Brothers, 1874.
- . Correspondence, 1842–55. CHL.
- . *History of the Late Persecution Inflicted by the State of Missouri upon the Mormons, in Which Ten Thousand American Citizens Were Robbed, Plundered, and Driven from the State, and Many Others Imprisoned, Martyred, &c. for Their Religion, and All This by Military Force, by Order of the Executive*. By P. P. Pratt, Minister of the Gospel. Written during Eight Months Imprisonment in That State. Detroit: Dawson and Bates, 1839.
- Probert, Josh E. , and Craig K. Manscill. "Artemus Millet: Builder of the Kingdom," *Mormon Historical Studies* 5, no. 1 (Spring 2004): 53–86.
- The Prophet*. New York City, NY. May 1844–Dec. 1845.
- Prospectus of the Nauvoo Expositor*. Nauvoo, IL. 10 May 1844. Copy at CHL.
- Quincy Herald*. Quincy, IL. 1841–before 1851.
- Quincy Whig*. Quincy, IL. 1838–57.

- Quinn, D. Michael, ed. "The First Months of Mormonism: A Contemporary View by Rev. Diedrich Willers." *New York History* 54 (July 1973): 317–33.
- Quorum of the Twelve Apostles. Minutes, 1840–44. CHL.
- Radke, Andrea G. "We Also Marched: The Women and Children of Zion's Camp, 1834." *BYU Studies* 39, no. 1 (2000): 147–65.
- Raffles, Thomas Stamford. "Narrative of the Effects of the Eruption from the Tomboro Mountain in the Island of Sumbawa on the 11th and 12th of April 1815, — Communicated by the President." In A. H. Hubbard, *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap, der Kunsten en Wetenschappen*, 1–25 (eleventh numbering). Batavia, Dutch East Indies: By the author, 1816.
- Recollections of the Pioneers of Lee County. Dixon, IL: Inez A. Kennedy, 1893.
- "Recollections of the Prophet Joseph Smith." *Juvenile Instructor* 27, no. 13 (July 1, 1892): 398–400.
- "Records of the Session of the Presbyterian Church in Palmyra," 1828–48. Microfilm 900, no. 59. BYU.
- Records of the Solicitor of the Treasury / National Archives Reference Service Report, Sept. 23, 1964. "Record Group 206, Records of the Solicitor of the Treasury, and Record Group 46, Records of the United States Senate: Records relating to the Mormons in Illinois, 1839–1848 (Records Dated 1840–1852), including Memorials of Mormons to Congress, 1840–1844, Some of Which Relate to Outrages Committed against the Mormons in Missouri, 1831–1839." Microfilm. Washington, DC: National Archives and Records Service, General Services Administration, 1964. Copy at CHL.
- Reeve, W. Paul. *Religion of a Different Color: Race and the Mormon Struggle for Whiteness*. New York: Oxford University Press, 2015.
- Reflector*. Palmyra, NY. 1829–31.
- Reorganized Church of Jesus Christ of Latter Day Saints v. Church of Christ of Independence, Missouri, et al. (Circuit Court of the Western District of Missouri 1894). Testimonies and Depositions, 1892. Typescript. CHL.
- Return*. Davis City, IA, 1889–91; Richmond, MO, 1892–93; Davis City, 1895–96; Denver, 1898; Independence, MO, 1899–1900.
- Reynolds, John. *My Own Times: Embracing Also, the History of My Life*. N. p. , 1855.
- Rich, Charles Coulson. Diary, May–July 1834. Typescript. CHL. Original in Western Americana Collection, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University, New Haven, CT.
- Rich, Sarah P. Autobiography and Journal, 1885–90. CHL.
- Richards, Franklin D. Journals, 1844–99. Vol. 16, Jan. 1, 1868–Jan. 29, 1869. Richards Family Collection, 1837–1961. CHL.
- . Scriptural Items, circa 1841–44. CHL.
- Richards, Levi. Journals, 1840–53. Levi Richards, Papers, 1837–67. CHL.
- Richards, Willard. Journals and Papers, 1821–54. CHL.
- . "Willard Richards Pocket Companion Written in England," circa 1838. Willard Richards, Papers, 1821–54. CHL.
- Rigdon, John Wickliff. "Lecture on the Early History of the Mormon Church," 1906. CHL.
- . "Life Story of Sidney Rigdon," no date. CHL.
- [Rigdon, Sidney]. *An Appeal to the American People: Being an Account of the Persecutions of the Church of Latter Day Saints; and of the Barbarities Inflicted on Them by the Inhabitants of the State of Missouri*. Cincinnati: Glezen and Shepard, 1840.
- Robbins, James. Letters, 1836 and 1844. CHL.
- Roberts, B. H. *The Life of John Taylor, Third President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*. Salt Lake City: George Q. Cannon and Sons, 1892.
- Robertson, Margaret C. "The Campaign and the Kingdom: The Activities of the Electioneers in Joseph Smith's Presidential Campaign." *BYU Studies* 39, no. 3 (2000): 147–80.
- Robison, Elwin C. *The First Mormon Temple: Design, Construction, and Historic Context of the Kirtland Temple*. Provo, UT: Brigham Young University Press, 1997.
- Rockwood, Albert Perry. Journal Entries, Oct. 1838–Jan. 1839. Photocopy. CHL.
- Rogers, David W. Statement, Feb. 1, 1839. CHL.
- Rollins, Kyle M. , Richard D. Smith, M. Brett Borup, and E. James Nelson. "Transforming Swampland into Nauvoo, the City Beautiful." *BYU Studies* 45, no. 3 (2006): 125–57.

- Romig, Ronald E. *Eighth Witness: The Biography of John Whitmer*. Independence, MO: John Whitmer Books, 2014.
- Rowley, Dennis. "The Mormon Experience in the Wisconsin Pineries, 1841–1845." *BYU Studies* 32, nos. 1 and 2 (1992): 119–48.
- Rupp, Israel Daniel, ed. *He Pasa Ekklesia* [The whole church]. *An Original History of the Religious Denominations at Present Existing in the United States, Containing Authentic Accounts of Their Rise, Progress, Statistics and Doctrines. Written Expressly for the Work by Eminent Theological Professors, Ministers, and Lay-Members, of the Respective Denominations*. Philadelphia: James Y. Humphreys; Harrisburg, PA: Clyde and Williams, 1844.
- Rust, Richard Dilworth. "A Mission to the Lamanites: DC 28, 30, 32." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 45–49. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Ryder, Hartwell. "A Short History of the Foundation of the Mormon Church." 1902. Typescript. Hiram College Collection, 1909–73. CHL.
- Saint George Utah Stake. General Minutes, 1864–1977. CHL.
- Saints' Herald*. Independence, MO. 1860–.
- Salisbury, Herbert Spencer. "Things the Prophet's Sister Told Me," 1945. CHL.
- Salt Lake Daily Tribune*. Salt Lake City. 1871–.
- Sangamo Journal*. Springfield, IL. 1831–47.
- Schaefer, Mitchell K. , ed. *William E. McLellin's Lost Manuscript*. Salt Lake City: Eborn Books, 2012.
- School of the Prophets Salt Lake City Minutes, Apr. –Dec. 1883. CHL.
- Seale, William. *The President's House: A History*. Vol. 1. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008.
- Senate Document 189. Testimony Given before the Judge of the Fifth Judicial Circuit of the State of Missouri, on the Trial of Joseph Smith, Jr. , and Others, for High Treason, and Other Crimes against That State*. Photomechanical reprint. Salt Lake City: Modern Microfilm, 1965. Copy at CHL.
- Seventies Quorum Records, 1844–1975. CHL.
- Shipp, Jan, and John W. Welch, eds. *The Journals of William E. McLellin, 1831–1836*. Provo, UT: BYU Studies; Urbana: University of Illinois Press, 1994.
- Skousen, Royal. "Another Account of Mary Whitmer's Viewing of the Golden Plates." *Interpreter: A Journal of Mormon Scripture* 10 (2014): 35–44.
- Smith, Alex D. "Organizing the Church in Nauvoo: DC 124, 125." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 264–71. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Smith, Amanda Barnes. Notebook, 1854–66. CHL.
- Smith, Andrew F. *The Saintly Scoundrel: The Life and Times of Dr. John Cook Bennett*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1997.
- Smith, Asael. Letter and Genealogy Record, 1799, circa 1817–46. CHL.
- Smith, Emma. Letter to Joseph Heywood. Oct. 18, 1844. CHL.
- Smith, George Albert. Autobiography, circa 1860–82. In George Albert Smith, Papers, 1834–82. CHL.
- . "My Journal." *Instructor*, May 1946, 212–18.
- . Papers, 1834–82. CHL.
- Smith, Hyrum. Diary, Mar. –Apr. 1839, Oct. 1840. CHL.
- . Papers, 1834–43. CHL.
- Smith, Joseph. Collection, 1827–46. CHL.
- . *General Smith's Views of the Powers and Policy of the Government of the United States*. Nauvoo, IL: John Taylor, 1844.
- . History, circa Summer 1832 / Smith, Joseph. "A History of the Life of Joseph Smith^J," circa Summer 1832. In Joseph Smith, "Letterbook A," 1832–35, 1–[6] (earliest numbering). Joseph Smith Collection. CHL.
- . History, [circa June–Oct. 1839]. Draft. CHL.

- . History, circa 1841. Draft. CHL.
- Smith, Joseph, and others. History, 1834–36. In Joseph Smith and others, History, 1838–56, vol. A-1, back of book (earliest numbering), 9–20, 46–187. CHL.
- Smith, Joseph, and others. History, 1838–56. Vols. A-1–F-1 (original), A-2–E-2 (fair copy). In Historian's Office, History of the Church, 1839–circa 1882. CHL. The history for the period after August 5, 1838, was composed after the death of Joseph Smith. Also available on the Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org.
- Smith, Joseph F. Papers, 1854–1918. CHL.
- Smith, Joseph Fielding, comp. Life of Joseph F. Smith, *Sixth President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*. Salt Lake City: Deseret News, 1938.
- . Papers, 1893–1973. CHL.
- Smith, Leslie, and B. Larry Allen. "Family History of Lucy Diantha (Morley) Allen." FamilySearch. Compiled by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Accessed Mar. 21, 2018. <https://familysearch.org>.
- Smith, Lucy Mack. *Biographical Sketches of Joseph Smith the Prophet, and His Progenitors for Many Generations*. Liverpool: S. W. Richards, 1853.
- . "Copy of an Old Note Book." Typescript, 1945. BYU.
- . History, 1844–45. 18 books. CHL. Also available on the Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org.
- . History, 1845. CHL. Also available on the Joseph Smith Papers website, josephsmithpapers.org.
- . Letter to Solomon Mack, Jan. 6, 1831. CHL.
- Smith, Lucy Meserve. Statement, undated. CHL.
- Smith, Mary Fielding. Collection, circa 1832–48. CHL.
- Smith, William. *William Smith on Mormonism*. . . . Lamoni, IA: Herald Steam Book and Job Office, 1883.
- Snow, Eliza R. Biography and Family Record of Lorenzo Snow, *One of the Twelve Apostles of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*. Salt Lake City: Deseret News, 1884.
- . Journal, 1842–44. CHL.
- . Letter to Isaac Streater, Feb. 22, 1839. Photocopy. CHL.
- Speech of Elder Orson Hyde, Delivered before the High Priests' Quorum, in Nauvoo, April 27th 1845, upon the Course and Conduct of Sidney Rigdon, and upon the Merits of His Claims to the Presidency of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*. Liverpool: James and Woodburn, 1845.
- Staker, Mark Lyman. *Hearken, O Ye People: The Historical Setting of Joseph Smith's Ohio Revelations*. Salt Lake City: Greg Kofford Books, 2009.
- . "Isaac and Elizabeth Hale in Their Endless Mountain Home." *Mormon Historical Studies* 15, no. 2 (Fall 2014): 1–105.
- . "Raising Money in Righteousness: Oliver Cowdery as Banker." In *Days Never to Be Forgotten: Oliver Cowdery*, edited by Alexander L. Baugh, 143–253. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2009.
- . "Where Was the Aaronic Priesthood Restored?: Identifying the Location of John the Baptist's Appearance, May 15, 1829." *Mormon Historical Studies* 12, no. 2 (Fall 2011): 142–59.
- Staker, Mark Lyman, and Curtis Ashton. "Emma's Susquehanna: Growing Up in the Isaac and Elizabeth Hale Home." Priesthood Restoration Site, Church History Department, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Published Aug. 25, 2015. <http://history.lds.org>.
- Statham, J. *Indian Recollections*. London: Samuel Bagster, 1832.
- State of Missouri. See Missouri, State of.
- Statutes of the State of Ohio, of a General Nature, in Force, December 7, 1840; Also, the Statutes of a General Nature, Passed by the General Assembly at Their Thirty-Ninth Session, Commencing December 7, 1840*. Columbus, OH: Samuel Medary, 1841.
- Stevenson, Edward. Collection, 1849–1922. CHL.
- . Journal, 1852–92. CHL.
- Stilwell, Lewis D. *Migration from Vermont*. Montpelier: Vermont Historical Society, 1948.
- Stout, Hosea. Reminiscences and Journals, 1845–69. CHL.
- Susquehanna Register, and Northern Pennsylvanian*. Montrose, PA. 1831–36.

- Switzler, William F. *Switzler's Illustrated History of Missouri, from 1541 to 1877*. St. Louis: C. R. Barns, 1879.
- Taylor, John. Collection, 1829–94. CHL.
- . Journal, Dec. 1844–Sept. 1845. CHL.
- Taylor, Leonora Cannon. Statement, circa 1856. CHL.
- Temple Lot Transcript / United States Circuit Court (8th Circuit). Reorganized Church of Jesus Christ of Latter Day Saints v. Church of Christ of Independence, Missouri, et al. , Testimonies and Depositions, 1892. Typescript. CHL.
- Thompson, Mercy Rachel Fielding. Autobiographical Sketch, 1880. CHL.
- Thompson, Robert B. *Journal of Heber C. Kimball, an Elder of the Church of Jesus Christ of Latter Day Saints. Giving an Account of His Mission to Great Britain. . . .* Nauvoo, IL: Robinson and Smith, 1840.
- Thorp, Joseph. *Early Days in the West, Along the Missouri One Hundred Years Ago*. Liberty, MO: Irving Gilmer, 1924.
- Thurston, Morris A. "The Boggs Shooting and Failed Extradition: Joseph Smith's Most Famous Case." *BYU Studies Quarterly* 48, no. 1 (2009): 4–56.
- Tiffany's Monthly*. New York City. 1856–59.
- Times and Seasons*. Commerce/Nauvoo, IL. Nov. 1839–Feb. 1846.
- Tippets, John H. Autobiography, circa 1882. CHL.
- Tobler, Ryan G. "'Saviors on Mount Zion': Mormon Sacramentalism, Mortality, and the Baptism for the Dead." *Journal of Mormon History* 39, no. 4 (2013): 182–238.
- Towle, Nancy. *Vicissitudes Illustrated, in the Experience of Nancy Towle, in Europe and America*. Charleston, SC: James L. Burgess, 1832.
- True Latter Day Saints' Herald*. See *Saints' Herald*.
- Trustees Land Books / Trustee-in-Trust, Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Land Books, 1839–45. 2 vols. CHL.
- Tucker, Pomeroy. *Origin, Rise, and Progress of Mormonism: Biography of Its Founders and History of Its Church*. New York: D. Appleton, 1867.
- Tullidge, Edward W. "History of Provo City." *Tullidge's Quarterly Magazine* 3, no. 3 (July 1884): 233–85.
- . *Tullidge's Histories*. Vol. 2. *Containing the History of all the Northern, Eastern and Western Counties of Utah; also the Counties of Southern Idaho*. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1889.
- . *The Women of Mormondom*. New York: Tullidge and Crandall, 1877.
- ターリー, リチャード・E・ジュニア, ロビン・S・ジェンセンならびにマーク・アシャーストーマギー 「聖見者ジョセフ」『リアホナ』2015年10月号, 10 - 17
- Tyler, Daniel. "Incidents of Experience." In *Scraps of Biography*, Faith-Promoting Series 10, 20–46. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1883.
- . "Recollections of the Prophet Joseph Smith." *Juvenile Instructor* 27, no. 4 (Feb. 15, 1892): 127–28.
- Ulrich, Laurel Thatcher. *A House Full of Females: Plural Marriage and Women's Rights in Early Mormonism, 1835–1870*. New York: Knopf, 2017.
- . "Leaving Home": Phebe Whittemore Carter Woodruff (1807–1885)." In *Women of Faith in the Latter Days*. Vol. 1, 1775–1820, ed. Richard E. Turley Jr. and Brittany A. Chapman, 450–60. Salt Lake City: Deseret Book, 2011.
- United States' Telegraph*. Washington, DC. 1826–37.
- U. S. and Canada Record Collection. FHL.
- U. S. Bureau of the Census. Population Schedules. Microfilm. FHL.
- U. S. Congress. Material Relating to Mormon Expulsion from Missouri, 1839–43. CHL.
- U. S. Office of Indian Affairs, Central Superintendency. Records, 1807–55. Kansas State Historical Society, Topeka. Also available at kansasmemory.org.
- Utah Genealogical and Historical Magazine*. Salt Lake City. 1910–40.
- Voree Herald*. Voree, Wisconsin Territory. Jan. –Oct. 1846.
- Waite, Nathan. "A School and an Endowment: DC 88, 90, 95, 109, 110." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 174–82. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.

- Walker, Jeffrey N. "Mormon Land Rights in Caldwell and Daviess Counties and the Mormon Conflict of 1838: New Findings and New Understandings." *BYU Studies* 47, no. 1 (2008): 4–55.
- Walker, Robert John. "Lilburn W. Boggs and the Case for Jacksonian Democracy." Master's thesis, Brigham Young University, 2011.
- Walker, Ronald W. "Six Days in August: Brigham Young and the Succession Crisis of 1844." In *A Firm Foundation: Church Organization and Administration*, edited by David J. Whittaker and Arnold K. Garr, 161–96. Provo, UT: Religious Studies Center, Brigham Young University, 2011.
- Ward, Maurine Carr. "John Needham's Nauvoo Letter: 1843." *Nauvoo Journal* 8, no. 1 (Spring 1996): 38–42.
- Warsaw Message*. Warsaw, IL. 1843–44.
- Warsaw Signal*. Warsaw, IL. 1841–43.
- The Wasp*. Nauvoo, IL. Apr. 1842–Apr. 1843.
- Watson, Eldon J. *Brigham Young Addresses*. 6 vols. N. p. , 1979–84.
- Watson, Wingfield. Correspondence, 1891, 1908. CHL.
- Watt, George D. Papers, circa 1846–65. CHL. Transcriptions by LaJean Purcell Carruth found in Church History Department Pitman Shorthand Transcriptions, 2013–17. CHL.
- Watt, Ronald G. *The Mormon Passage of George D. Watt: First British Convert, Scribe for Zion*. Logan: Utah State University Press, 2009.
- Wayne Sentinel*. Palmyra, NY. 1823–52, 1860–61.
- Webb, Eliza Churchill. Letter to Mary Bond, May 4, 1876. Biographical Folder Collection (labeled Myron H. Bond). Community of Christ Library-Archives, Independence, MO.
- . Letter to Myron H. Bond, Apr. 24, 1876. Biographical Folder Collection (labeled Myron H. Bond). Community of Christ Library-Archives, Independence, MO.
- West, William S. *A Few Interesting Facts, Respecting the Rise Progress and Pretensions of the Mormons*. N. p. , 1837.
- Western World*. Warsaw, IL. 1840–41.
- Whitmer, David. *An Address to All Believers in Christ*. Richmond, MO: By the author, 1887.
- Whitmer, History / Whitmer, John. "The Book of John Whitmer Kept by Commandment," circa 1835–46. Community of Christ Library-Archives, Independence, MO.
- Whitney, Helen Mar. *Plural Marriage, as Taught by the Prophet Joseph. A Reply to Joseph Smith, Editor of the Lamoni (Iowa) "Herald"*. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1882.
- . *Why We Practice Plural Marriage*. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1884.
- Whitney, Horace G. "Nauvoo Brass Band." Contributor, Mar. 1880, 134.
- Whitney, Orson F. *History of Utah*. 4 vols. Salt Lake City: George Q. Cannon and Sons, 1904.
- . *Life of Heber C. Kimball, an Apostle; the Father and Founder of the British Mission*. Salt Lake City: Kimball Family, 1888.
- . "Newel K. Whitney." Contributor, Jan. 1885, 123–32.
- Wight, Orange L. Reminiscences, 1903. CHL.
- Williams, Frederick G. "Frederick Granger Williams of the First Presidency of the Church." *BYU Studies* 12, no. 3 (Spring 1972): 243–61.
- Winters, Mary Ann Stearns. Reminiscences, no date. Typescript. Church History Library.
- Wolfinger, Henry J. *A Test of Faith: Jane Elizabeth James and the Origins of the Utah Black Community*. Washington, DC: National Archives and Records Service, 1975. Copy at CHL.
- Woman's Exponent*. Salt Lake City. 1872–1914.
- Wood, Gillen D'Arcy. *Tambora: The Eruption That Changed the World*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2014.
- Woodruff, Emma S. Collection, 1832–1919. CHL.
- Woodruff, Phebe Carter. Autobiographical Sketch, 1880. In University of California (Berkeley) Bancroft Library and Hubert H. Bancroft, Utah and the Mormons Collection, before 1889. Microfilm. CHL.
- . Autograph Book, 1838–44, 1899. CHL.
- . Letter to "Dear Parents," July 30, 1844. CHL.
- Woodruff, Wilford. Collection, 1831–1905. CHL.
- . "The History and Travels of Zion's Camp, Led by the Prophet Joseph Smith from Kirtland Ohio to Clay County Missouri in the Spring of 1838," 1882. CHL.

- . Journals, 1833–98, in Wilford Woodruff, Journals and Papers, 1828–98. CHL.
- . Journals and Papers, 1828–98. CHL.
- . *Leaves from My Journal*. Faith-Promoting Series 3. Salt Lake City: Juvenile Instructor Office, 1881.
- . Testimony, Mar. 19, 1897. CHL.
- Woodworth, Jed. "The Center Place: DC 52, 57, 58." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 122–29. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "Mercy Thompson and the Revelation on Marriage: DC 132." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 281–93. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "Peace and War: DC 87." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 158–64. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- . "The Word of Wisdom: DC 89." In *Revelations in Context: The Stories behind the Sections of the Doctrine and Covenants*, edited by Matthew McBride and James Goldberg, 183–91. Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 2016.
- Young, Brigham. Account Book, 1836–46. CHL.
- . Journals, 1832–77. Brigham Young Office Files, 1832–78. CHL.
- . Letter to Parley P. Pratt, May 26, 1845. CHL.
- Young, Emily Dow Partridge. Diary and Reminiscences, Feb. 1874–Nov. 1883. CHL.
- . "Incidents in the Life of a Mormon Girl," circa 1884. CHL.
- . "What I Remember," 1884. Typescript. CHL.
- Young, Joseph, Sr. *History of the Organization of the Seventies. Names of the First and Second Quorums. Items in Relation to the First Presidency of the Seventies. Also, a Brief Glance at Enoch and His City. Embellished with a Likeness of Joseph Smith, the Prophet, and a View of the Kirtland Temple*. Salt Lake City: Deseret News, 1878.
- . Letter to Lewis Harvey, Nov. 16, 1880. CHL.
- Young, Phineas H. Journal, Apr.–May 1845. CHL.
- Young, Zina Diantha Huntington. Diaries, 1844–45, 1886, 1889. CHL.
- Youngreen, Buddy. *Reflections of Emma: Joseph Smith's Wife*. Orem, UT: Grandin Book, 1982.
- Young Woman's Journal*. Salt Lake City. 1889–1929.
- Zion's Ensign*. Independence, MO, 1891–97.
- Zion's Reveille*. Voree, Wisconsin Territory. 1846–47.

謝 辞

この新たな教会歴史書は、何百人もの人々の貢献により編さんされました。一人一人に感謝の意を表します。わたしたちは、この本の基となる記録を集め、細心の注意を払って保存してきた代々の教会歴史家たちにより多大な恩恵を受けています。また教会歴史部の全職員、宣教師、ボランティアの方々が多様な形で力となってくれました。とりわけ、オンラインの補足資料作成に携わった、ジェームズ・ゴールドバーク、デビッド・ゴールドディング、エリザベス・モット、ジェニファー・リーダー、ライアン・ソルツギバーに、また教会歴史カタログの資料のデジタル化を取りまとめてくれたオードリー・スペインハワー・ダンシーおよびジェイ・バートンに感謝の意を表します。

本書の歴史的分析の根拠は、*The Joseph Smith Papers* (「ジョセフ・スミス文書」)によるところが大きいと言えます。このプロジェクトに携わった歴史家、マシュー・ゴッドフリー、マーク・アシャースト・マギー、エリザベス・キューン、デビッド・グルーア、スペンサー・マクブライド、アレックス・スミスに、謝意を表します。詳細にわたる見直しと訂正を担当した、史跡部のジュニー・ランド、マーク・ステーカーにも、感謝をお伝えします。出版部のアリソン・パーマー、ステファニー・ステイード、また編集マネージャーのR・エリック・スミスによる多大な貢献がありました。教会歴史家の出版編集部の方々からも支援をいただいています。

本書の文体を整えるに当たって、アーデイス・パーシャル、クリス・クローウ、アンジェラ・ホールストロム、今は亡きジョナサン・ラングフォードとエリック・C・オルソン、ブランドン・サンダーソン、ローレル・バーロー、キャスリーン・ヒューズ、ディーン・ヒューズ、H・B・ムーア、キンバリー・ヒューストン・ソレンソン、ゲール・シアーズにご協力いただきました。歴史家であるフランク・ロラップ、アレックス・パウ、メリッサ・ウエイツィング・井上には多大なご支援をいただきました。挿絵や地図の作成を手がけたのはグレッグ・ニューボールドです。

ジョン・ヒース、デブラ・アバクロンビー、ミリエル・レセクには、アウトリーチ活動の面で支援をいただきました。また管理面では、キアステン・オルソン、ジョーリン・カーティス、アンドレア・マックスフィールド、デビ・ロビンズに協力していただきました。プロジェクト管理を担当したのはリジー・ソルツマンです。

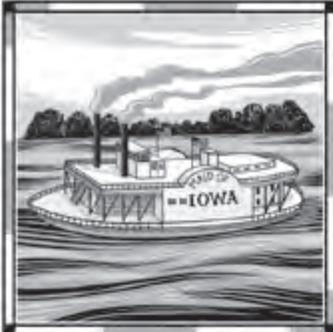
教会の他部署の会員にもご協力いただきました。部署の枠を超えたチームで働いてくれたのは、イリーナ・ダニエルソン、アラン・ポールセン、カーリー・ガイモン、ロバート・ユウワー、ジェン・ワード、ドリユー・コンラッド、デビッド・ディクソン、ポール・マーフィーです。そのほかの協力者は次の方々です。エライザ・ネビン、パトリック・ガーバー、ニック・オルベラ、ポール・バンデアアホーベン、ランダル・ピクストン、ブルック・ブランドセン、デビッド・マン、アラン・ブレイク、ジェフ・ハッチングス、ゲーリー・ウォルトン、マット・エバンズ、スコット・ウェルティ、ジェフ・ハッチ。多くの時間を費やして原稿の査読に携わったのは、ケリー・ホーズ、マーク・イーストモンド、ケーシー・オルソン、トム・バレッタです。13の言語では、翻訳者らによって本書全体の入念な翻訳が成され、他の数十の言語においても最初の8章が訳されています。

最後に、世界中に住む何百人ものボランティア読者が物語を読み、改善に向けたフィードバックを提供し、あらゆる地に住む聖徒の思いと心に語りかけるような書物となるよう協力してくれたことをお伝えします。

索引

注：検索可能な索引が, saints.lds.org/jpn で利用できます。

-



スペリオール湖

ウィスコンシン準州

ミシシッピ川

アイオワ準州

ミシガン湖

ミシガン州

ヒューロン湖



● ファーウェスト
インディペンデンス

ミズーリ川

ミズーリ州

イリノイ州

● ノーブー



● セントルイス



オハイオ州



インディアナ州

ケンタッキー州

アーカンソー州

ミシシッピ川

テネシー州

アメリカ合衆国

ミシシッピ州

アラバマ州

ジョージ

カナダ



メイン州

バーモント州
・シャロン

ニューハンプシャー州

マサチューセッツ州

コネチカット州
ロードアイランド州

トロント・オンタリオ湖

・パルマイラ
・マンチェスター
ニューヨーク州

ハーモニー

ペンシルベニア州

・ニューヨーク市

エリー湖
・カートランド

ワシントン D.C.・

ニュージャージー州

メリーランド州

バージニア州

ノースカロライナ州

- 1816年 スミス家がニューヨークへ移住
- 1820年 ジョセフ・スミスの最初の示現、マンチェスター
- 1830年 教会の設立、フェイエット
- 1831年 オハイオ州とミズーリ州への集合の開始
- 1838年 ミズーリからの追放
- 1846年 ノープーからの退去

サウスカロライナ州



州

1820年、真理を探し求めていた一人の農家の少年が、父なる神とイエス・キリストにまみえました。その3年後、一人の天使が現れ、少年は近くの丘に埋められた古代の記録へと導かれます。神の助けによりその記録を翻訳した彼は、末日に救い主の教会を設立しました。程なくして、人々はイエス・キリストの贖罪を通して聖徒になるという招きを受け入れ、教会に加わります。

しかし、古い伝統に逆らい回復された真理を信奉しようとする人々に、反対と暴力の嵐が吹き荒れました。教会に改宗した男女は、聖約を忠実に守り、シオンを築き、悩める世に向けて福音を宣言するか否か、選択しなければなりませんでした。

「真理の旗」は、末日聖徒イエス・キリスト教会の4巻にわたる新たな歴史物語『聖徒たち』の第1巻です。大管長会の指示の下に、細心の注意を払いながらも速やかに研究が行われ、書き上げられた『聖徒たち』は、「教会のため、……後の世代のためになる」(教義と聖約 69:8) 歴史を書くようにという主の召しにこたえて作られた、世界中の末日聖徒の実話を集めた書物です。

末日聖徒
イエス・キリスト
教会

JAPANESE



ISBN 9781629724997

